悪魔の絵本６　恋人【逆】（カーネフェル編?）

有月　仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔の絵本６　恋人【逆】（カーネフェル編？）

【Ｎコード】
Ｎ６６９７Ｓ

【作者名】
有月　仮字

【あらすじ】
神の審判により始まった悪魔のゲームに巻き込まれ、玉座と引き替えにすべての家族失った少年王アルドール。初陣であるタロックとの戦争は背水の陣。負け戦に現れる聖十字の少女。女王のカードを持つジャンヌの活躍によりタロック軍をカーネフェルから追い出すことに成功するカーネフェル。引き起こされる世界を巻き込む大戦の開始を意味した。タロック攻略の要所、セネトレアを落とすべく進軍するカーネフェルにセネトレア女王と道化師の悪意が待ち受ける！

主人公の政略結婚で味方連中も不穏な感じでなんだかドロドロ。ヒロインの死亡率が半端ない！愛憎ごった煮どうせバッドエンドなダークファンタジー！悪魔の絵本カーネフェル編第二弾。

0：Latet anguis in herba.

道化師は夜の声を聞く。なぜなら自身も葬られた存在だから。
少なくともあの王にとって、イグニスと言えばあの少女のことだ。そしてギメルと言えば、本当に眠っているのだと未だに信じている。それら全ては限りなく真実であり真っ赤な嘘だ。信じる人間ほど馬鹿を見る。それがこの世の摂理というもの。

「だから君は愚かなんだよ、アルドール」

去りゆく馬車を見送りながら、崩れ落ちた廃墟を照らす月と一緒に嘲笑う。
一番厄介な女王カードをこんなに早く葬ることが出来るとは、正直思っていなかった。それも此方の痛手はほとんど無い。恋に溺れた娘と、恋から逃げた男を使っての仲違い。
クラブのジャックには疑念を植え付けたし、ハートのジャックの代償は残り少ない。クラブのシンクも間もなく不運に見舞われる。

「まぁ、僕のお手並み拝見ってところか。ギメルはどう動くかな」

このままではカーネフェルは潰える。この現状、誰の目から見ても戦争に勝つのはタロックだ。そうさせないために、彼女が今まで以上に動くしかなくなった。それはつまり、アルドールの傍からギメルが消えるということ。それは道化師にとっても好都合。
神子の次の手のおおよその見当は付く。失ったクィーンと離れる自分の代わりに新たな駒を調達してくるはずだ。あの神子にとっての最優先はアルドール。教会もシャトランジアもおそらくどうでもいい。それは手段であって目的ではない。

「……それにしても、君は一体どうしてしまったんだい？」

少なくとも1年半前の彼女なら、こんな風にはならなかった。あんな馬鹿な男のために自身を犠牲にするなんて。

彼女が彼に寄せる好意に、昔感じた心苦しさ、その怒りと憎しみとは意味が異なる。今あるものは驚愕だ。まるで悪夢だ。そんなことはあり得ない。あり得ないものを見せられている。それに自分は唯々驚かされている。

死者は決して人の力で蘇らない。それがこの世界の根本にある絶対のルール。それを破ることが出来るのが神の審判、悪魔のゲーム。それならば彼女の正体も、自ずと限られては来る。

だからこそこんなにも驚かされている。彼女を殺すことに僅かの躊躇いを覚えるくらいに。

これが現実なら、真実なら……願いなど必要ない。唯彼女に駆け寄り抱き締める。

けれどこの世を統べる神に人の求める慈悲など無い。だから奴らはまさしく悪魔。人にとってはそれ以外の何者でもない。

だからこそ彼女は彼女であるはずがないのだ。これは現実、それでも悪夢。この手で誰よりも愛しい人を、殺めろと悪魔は言う。そのためのカードなのだからと。

「……ギメル」

愛しい人の名前を呟いて、道化師は悲しげに小さく微笑んだ。

眠りに就いた人が、再び動き物語る。それを何時までもすぐ傍で眺めていたいとは思う。それでも願いに至るため、それは越えなければならない苦難。抱き締めるのではなく首を絞めろと神は言う。語り合うのではなく殺し合えと悪魔が言う。

「本当に神様って奴は無粋だね。人間って言うのは貴方達とは違

って、そう簡単に全てを白と黒で考えられるわけじゃない。確かに彼女は彼女じゃないけれど、彼は彼女であることは本当なんだ。だから僕はそれを知っていても全ての迷いを断ち切るまでちょっとは時間が要るんだよ」

それを愚かと語る神と、興味深いと眺める神と。その狭間で道化師が笑う。

「ねぇ零の神。貴方は僕の心を愚かと言うけれど、僕はそこまで僕が愚かではないと思うよ。僕から言わせて貰えば、かつて貴方が伴侶に抱いた感情の方が愚かだね」

だからこそ2人の神は、出会い別れ未だに争っている。人の目に映れない悲しい者へとなり果てて尚。そんな不幸をまき散らす愚かな戦い。始まりはその愚かな感情こそがその全て。

「僕はそれを知っている。愛は無償で高貴なものだ。だけど恋は低俗で欲深く、残忍だ。この世で最も愚かな人の心を知っているかい零の神？いや貴方が一番それを理解しているんだろうね」

何も見えない苦痛の生で、一度だけ見えた光。その愛のために死んだ者のために、その愛のために生きる。他には何も要らない。理不尽な世界と神に奪われたものを取り戻す。

愛するに値しない世界で唯一、愛しいと思うことが出来た彼女のために生きること。それが間違っているなど誰にも言わせない。それを口にし責めることが出来るのは、世界に唯1人、眠りについた彼女だけ。

彼女に責め詰られるのなら、それはそれで構わない。そうすることがされることが出来るのは、紛れもなく自身の幸福。

小さな不平を言い合って腹を立てたり、そして再び笑い合う。そ

んな些細なことがどんなに幸せだったことか。それ以上の幸せなんて望んだりはしなかった。あの日のまま、いつも2人で小さな幸せの中に浸っていられれば、それだけで良かった。

「ああ、下らない。実に下らないよ。馬鹿げている。この世で最も愚かな感情、それは恋だよ零の神」

僕はね彼女を世界の誰より愛しているけれど、別に彼女に恋している訳じゃないんだよ。崩れ落ちたその教会で、道化師は笑う。砕かれた偶像をせせら笑いながら。

廃墟と化した悲しい領地。無能な王は相も変わらず盲目を生き、真実を半分も知らずにここを去った。隻眼の騎士も何処まで見えていたのやら。彼らの愚かさを語るのも全てはその心。

何にせよ人は愚かだ。道化師はそう思う。とりわけ恋する人は何より愚かだ。

人が賢く生きる道。それは恋を知らずに生きることだろう。

「まぁつまり……人に道を誤らせるにはそのスパイスを添えてやればいいとも言うね。人を内から綻ばせることなんて、とても容易いことなんだから」

次の悪巧みを思い付き微笑む彼に、誰の目にも映れない者達は誰の耳にも聞こえない、不協和音の音色を発した。道化師は不協和音に薄く笑み、領主の屋敷だった建物からおびただしい数の墓の前へと飛び降りる。

作られたばかりの墓標。真新しい土の下で眠るのは、とうに骨になっていた少女。

「眠っていたところ叩き起こしてしまってごめんね。ゆっくりお休みお嬢さん」

彼女は過去の思い出のオルゴール。死者は未来を見据えない。数式で知り奏でることが出来るのは、過去に残された想いだけ。逃げ続けた彼からの慕情が彼女に伝わらないよう、道化師の謝罪の言葉もまた、届かないとは知っている。それでも手を合わせる。それがどんなに無意味でも、道化師もまた人間だった。時に無意味なことをする。

「まぁ、悲しむこともないよ。彼はいつかまた貴女に会いに来る。どっちの意味かは返答しかねるけれど」

恋は愚かで愛は偉大だ。恋から愛へ至れない思いのどんなに多いこと。

だから恋になる前に封じられた思いは未知数だ。あの騎士がどう転ぶか、それは先を見通す目を持つ道化師にも解らない。けれどそれを不安に思う心は道化師にはない。

完璧な計算はない、操るのが人である以上。それでも計算に僅かの狂いを交えること。それは時に楽しい。ゲームは結果が全てではない。過程を最大限に楽しみつつ勝つことが、ゲームのおもしろさと言うものだ。何が起こっても対処できる力が自分にはある。

それでも彼らの方はそういうわけではない。計算で動いている彼女のために狂いを与える。

それが巻き起こす騒動は未来を濁らせるだろう。石はもう、投げ込んだ。後は波紋の広がりを暫し楽しむことにしよう。

道化師は、月下に笑う。ほくそ笑む。

＊

「馬鹿だなぁ……人間って」

木の幹に背を預けながら、エルスはそう思う。思いながら薄汚い人間達を眺めていた。眼下には戦火から逃げ出す人々の群れ。その中で生まれた出会い、ささやかな幸せを見つけた者もいるのだろう。寄り添い会う男と女。硬く手を握り合って。

そんなものを見せられてしまうと、穏やかな微笑を浮かべるその顔を、絶望で彩らせてやりたいと思うのだ。彼らもきっとその方が嬉しい。だってこのまま平凡な幸せが続いたら、彼らは互いに必ず不満を持ち始める。粗探しを始める。そして傷付け合うのだ。そしてその時一番苦しむのは彼らではない。生まれ出る悩みとは、生まれなければ生まれない。

だから恋は恋の内に粉々に崩れ去るのが一番。それが世界平和というものだ。

あの恋人達。一体何が楽しくて生きているんだろう。同じ事の繰り返し。馬鹿みたいだ。それがさも当たり前かのように語り、教え、それを引き継がせていく。巡らせていく。それが当たり前だと言うように。その当たり前。それをその輪から少し離れて眺めるだけで、とても馬鹿馬鹿しい物事のようにエルスには見える。

男と女。他にすることなんか無いって言わんばかりに、一時の気の迷いで恋をし面倒事を抱え込む。或いは恋さえせずに彼らは寄り添う。それが唯々、唯々薄気味悪くて気持ちが悪くて堪らない。

その当たり前に組み込むこと。それが共同体という組織。それは時に国であったり村であったり、なんという不自由。そんな風に考える自分を、自由気ままな風のようだと言った人間がいた。そんなことを思い出す。

そうだ。僕は風。自由で気まぐれ。緩く冷たくそして残忍。

僕はそれでいいと、あの日僕はそう告げられたのだ。罪から逃げ、裁かれない人間は、いつか必ず罰を求めるようになる。あの男は僕を罰まで育て上げようとしていたのだ。そしてあの男はそこに救いを見出した。

本来ならあの男が僕をこんな危険の真っ直中に送り込むことはな

い。猫可愛がりで城に残したがるに決まっている。つまり僕がこんな戦争の真っ直中にいるということが、十分おかしなことなのだ。それに気付かないあの堅物同僚は本当に馬鹿。カーネフェルの連中だって結局何も見えてはいない。

「さて、あの幸せそうな2人を祝福してあげようかな」

幸せを幸せに留めさせてあげるお手伝い。人は愚かだから幸せを幸せと感じられる期間がある。幸せはいつまでも幸せではない。そう思えない、だから、そんな風にならないように、ちゃんと今の内に教えてあげるのが幸せな2人に贈る一番の親切というもの。別にお礼も謝礼も要らない。僕が欲しいものはそんなものではない。2人の歩む道が、一時の暇つぶし、憂さ晴らしの物語になるならそれでいい。

簡単な数式を描けば、エルスの美しい黒髪はカーネフェルの金髪へと変わる。勿論薄紅の瞳も青へと偽った。後はその人間達を先回り、行き倒れを演じるだけでいい。

「君、大丈夫かい？」

間もなく声が掛かって、その一向に抱き起こされた。心配そうに此方を覗き込む人々のその顔に吹き出しそうになるのを堪えるのが大変だったが、そんなミスは犯さない。

「……」

何かを訴えようと口を開く。カーネフェル語を話せないわけではないけれど、こっちの方が味がある。戦の恐怖で声も出ないと言わんばかりに脅えてみせた。

「可哀想に。よっぽど辛い目に遭ったんだね。でも大丈夫、もう大丈夫だよ」
「ゆっくりでいいのよ。何があったのか、話して？」

幸せな人間は頭の方まで幸せだ。自分が幸せだから周りの人間がみんな不幸に見えるのだ。そして幸せな自分が、その可哀想な人間に手を差し伸べたくなる、それが人間。

「……ボクの、街が……」

この先は危険だと、そこも戦火に包まれた。それを伝えれば、ざわめく人の声。

「そうだったのか。……それじゃあこのまま先に進むのは止めた方がいいか」
「そうね、長へ掛け合って来るわ。別のルートでの避難を考えましょう」

男女が群れの頭の元へ向かった隙に姿をくらます。どうせ他の者達は取り乱していて此方を見ていない。その隙にエルスは、近場に構えている破落戸達の所に顔を出す。数術を使えばほんの瞬き一瞬。
山岳に拵えられた小さな砦。ここは通称サーカス小屋（ツィルクスツェルト）。そういう名前の山賊の居城。情報収集のためにたまに足を運んでいる情報源の一つ。数術だけでは取りこぼしてしまう情報というものはやはりある。また敵の敵は味方とも言う。カーネフェルへの敵対勢力との仲を深めておくことには意味がある。
あの堅物は使わないような手ではあるけれど、綺麗事で戦に勝てるなら世の中もっとシンプルだ。そうじゃないから面倒臭い。使える手ならどんな手でも使うのが、戦という舞台での礼儀というもの。

「やぁ、みんな、最近の調子はどう？」

砦に足を運べば、柄の悪そうな男達が両手を広げて出迎えてくれる。

「ややっ！これはこれはエルス様！いやぁ、ぼちぼちって感じですよ」

「そうそう！エルスちゃんが遊びに来てくれるようになってから、ほんと稼ぎが増えてなぁ！」

「そっか。それは良かった。ボクも君たちの力になれて嬉しいよ」

にこやかに微笑むエルスに、男達は下卑た笑いをもって応える。より面白いことになるなら、どんな相手とだって手を組むのがエルスのモットー。あの少年王の最期を、存分に惨めに飾り付けるためならばどんな人間とだって手を組む。それにエルスは、こういう薄汚さのある人間の方が好きだった。先程の男女のような偽善者面の頭が幸せな奴よりも、常に悪巧みをしているような信用できない人間の方がずっと好感を持てる。人間嫌いの自分としては珍しいことだとは思う。それでも俗に言う下衆な人間はそこまで嫌いではないのだ。

そう。だから彼らも不思議な気分なのだろう。破落戸である自分たちの所に、幼い成りの大国の将が親しげに遊びに来る。その度に美味しい獲物を引き連れて。

「まぁ、もしカーネフェルをタロックが支配して商売あがったりになったら何時でもタロックにでもおいでよ。ボクのところで迎えてあげるから」

「へへっ、いやぁありがてぇ」

男達はまた妙な鈍りのタロック語でケタケタ笑う。上品ぶったお

貴族様とは違い、その鈍りが懐かしくさえ思うのは、きっとここの空気のせいだ。エルスは海より山の方が好きだった。山に囲まれて育ったせいもあるのだろうか。

「あ、そうそう。あの平野にまた馬鹿な奴らが逃げてきたよ。襲って下さいって言わんばかりにあんな目立つところで足を止めてる。期待には応えてあげないとね？」

この間はセネトレアから来た商人とその手下達を使ったが、カーネフェルには他にも多く使える駒がある。略奪者は何度も往復する手間を考え、カーネフェルのあちらこちらに拠点を築いている。ここに残ってコンスタントに略奪を行い、その戦利品を船へと乗せる。今日ではそういうシステムが出来上がっている。その者達は山賊として城を構え、今では往復組との仲も悪化し独立勢力と化している。海からの略奪者と山からの略奪者。元は同じものでありながら、獲物を奪い合っている。だから獲物の情報を流してやれば、彼らはすぐに此方に尻尾を振るようになる。

「野郎共！すぐに仕度だ！！」
「エルス様！いや、毎度すまねぇです」
「エルスちゃんー！帰ったらお酌してくんな！行って来るぜー！！」

手を振りながら居城を出て行く山賊達。そして思いだしたかのように踵を返し、ごろんと横になっているその人物を揺すり出す。

「ほら、お頭！お頭ー！仕事ですぜレーヴェのお頭ぁっ！！」
「ん……」

寝返りを打ちながら、起こそうとした部下を思いきり殴り飛ばす

その頭。見れば見るほど興味深い。その黒髪はありふれた色。それでもその身体に刻まれた数値はいささか風変わり。
エルスがここに通い詰めている理由のもう一つがこの人間。これを味方に引き込めば、後々全てが楽になる。

「……駄目だこりゃ」
「ああ、レーヴェはボクが見ておこうか？」
「それは有り難いんだけども、お頭がいねぇと俺らの戦力半減ってもんだ」

ぐぅぐぅといびきをかいているそのお頭に、頭を抱える山賊達。1人は未だに壁にめり込んでいる。

「まぁ今回は連れて行かない方が暴れられて良いと思うよ。戦えそうな奴は殆どいないし、若い娘が一杯いたよ。お頭の前では好き勝手暴れられないだろ？」

ブロンド美女が大股開けて君たちをお待ちかねだよとエルスがほくそ笑めば、山賊達はすぐさま外へと賭けだした。

「いや、流石エルスちゃん！男心をよくわかってらっしゃるぜ！」
「出発だっ！行くぜ野郎共ぉおおおおおおおおおおおおお！！」

ひらひらと手を振って山賊達を見送れば、物凄いスピードで馬を操り駆けていく。その姿に人間は、とりわけ男は本当に馬鹿だなぁとそう思う。こういう馬鹿はそう嫌いではないけれど。
まもなく遠くの方で悲鳴が上がった。ああ、きっと面白いことになる。見に行ってみようか。ちょっとそう思った。けれど止めておいた。人づてに聞く物語というのもそう悪くはないものだ。それに今はここの留守番を任されている。この人材を釣り上げるためにや

るべき事はまだあった。

「さてと……」

出かけていった男達も帰ってきたら宴会だろう。準備くらいはしておかなければ。

人間を釣り上げるのに必要なものは快楽だ。そしてそれは食というものでもある。食を極めれば人を操ることなど容易い。それを作ることが出来るのがその者しかいないのなら、誰もその者に牙を向けなくなるからだ。

そしてそのそれが美味ならば、それだけで相手は好意的に解釈をするようになる。これだけ美味い物を作る者が、此方に敵意を持っているはずもないと。

「いい匂い……」

「ああレーヴェ、起きたんだ」

言うなれば単純馬鹿。そしてここのお頭もそういう部類の人間だった。

料理を作り始めた途端、むくりと起き出し背中にへばりついてくる者がいる。寄り掛かるよう持たれてくるその重みはじぶんのそれより随分重い。うっとりとした灰色の瞳が見つめる先は火にたかれた鍋の中。

「エルスー……やっぱお前って良い奴だな、俺のために飯作りに来てくれるなんて！！」

餌付けは効いてきたらしい。山賊達のお頭は、頭の横で結われた髪を犬の尻尾のように振り回す。見た感じ大型犬のような印象だ。獅子を名乗っている癖に、戦っていない時はどうも犬っぽい。まぁ、

百獣の王ということで頭には相応しい名だとは思う。他の山賊達も大体はサーカスにいそうな動物の名前を名乗っている。

「はいはい、もうちょっと待ってね。今出汁取ってるから」

図体ばかり大きいが、灰の瞳はなんとも綺麗な色をしている。こんな破落戸の長には似つかわしくないような気もするが、それにはそれなりのわけがある。

まず第一にレーヴェはタロック人。性質として割と義を重んじる。この面倒くさがりの性格でもそれは同じだ。そしてもう一つが……

「っていうか、お前らなんか大変なんだろ？俺カーネフェル語わかんねぇしよくわかんねーけどみんな大騒ぎしてっし」

そう、これだ。レーヴェはタロック語しか話せない。そんなレーヴェがカーネフェルで生きて行くにはタロック語の通じる相手のところにふらふらと歩み寄るしかなかった。そしてこの純真無垢だ。適当に言われたことをそのまま信じるようなところがある。それで腕の方は立つのだから山賊達もそりゃあ歓迎するだろう。

「まぁ、大々的に戦争も始まることになったから。ボクも大忙しってところだよ」

「にしても……エルスのタロック語懐かしい。ここの奴ら妙な鈍りで俺までおかしくなっちまいそうで笑える」

普通の返答にも猛者の長は顔を綻ばせて擦り寄ってくる。余程故郷が恋しいのだろう。タロックへ戻る方法を教えてやれば、おそらく完全に堕ちるとエルスは踏んでいる。唯、手下全員と一緒でなければそれには従わないだろう。彼ら全員を迎え入れるためには、はやりカーネフェルを落とす必要がある。まだもうしばらくの段取り

が必要だ。

「そういや腕の方はもういいのか？」

「まぁ、一応は」

「ほんと許せねぇ！人の腕切るなんざ、世の中には酷ぇ奴もいたもんだ！カーネフェルの金髪族の奴ら鬼だぜ！悪魔だぜ！俺が見つけたら三倍返しでそいつらの両腕もぐかへし折ってやるからな！」

レーヴェは拳を握って顔も見えない相手への怒りを口にするが、それはとても山賊のお頭の口から出るような言葉ではない。しかしこのお頭は、山賊がヒーローみたいなものだと思っているのだ。仕方がない。

「あ、ありがとう。でも腕は三本ないから二本でいいよ」

「エルスは優しいな」

「まぁね。それでレーヴェ、このあたりを通過したっていう話は？」

ザビル大河の北に位置する以上、橋の壊れた今誰でもすぐに来られる場所ではないが、この山岳地帯は都ローザクアと要塞カルディア間を見るには監視には絶好のポイントだ。エルスが時折ここを訪れるのはその情報収集も兼ねてのことだった。

新たなカーネフェル王。彼の消息は未だ不明。数術で探ってもいるが、傍にいる数術使いが厄介だ。シャトランジアの神子……彼が何を考えているのかよくわからないが、出し惜しみの回りくどい術を使う。故にまだまだ数術の才は未知数。油断は出来ない。

「んー……エルスに言われてから一応監視してみたんだけど、今んところカルディアから都に向かった奴らがいるって話は聞いてねぇなー。ああ、唯……」

「唯？」
「何つったっけ？あの今は使われてねぇってところの領地」
「シャラット領？」
「あ、それそれ。そっからローザクアに向かう馬車を見かけたぜ」
「それ、何時？」
「んー…と、五日前の夕暮れだったぜ」
「そうか。ありがとう」

すぐさまエルスはシャラット領とローザクア。そこに向けて情報数式を練る。

（……なるほど、だからあんなことを）

情報は見つかった。情報隠蔽も満足に行えないほど、あの数術使いは消耗していたのか。如何に才能があっても代償がなければ数術は意味がない。その点、代償が自分ではないエルスの数術は使い勝手の良いものだ。
長期戦、望むところだ。長引けば長引くほどカーネフェルの勝機は弱まる。それが今、結論づけられた。

「エルス、やっぱまだ腕痛いのか？」
「そんなことはないけど……どうして？」

考え込んでいたエルスのことを心配そうに見つめるレーヴェ。何故そんな風に思うのか、聞き返してみると指さされたその腕には……確かにまだ包帯が巻かれていた。
怪我は治った。数術で簡単に治すことが出来た。それでも何故かこれを解くことが出来ずにいる。何をやっているんだろう。そう思う。思うのにどうしてか、そうすることが出来ないのだ。
これを解こうとする度に、あの馬鹿な同僚の顔を思い出す。それ

が嫌でなるべく見ないようにしていたのだ。そうすると、必然的にそれは腕から離れない。

（人間なんかに……あんな人間なんかに）

哀れまれた。屈辱だ。そう思う。あのカーネフェルの少年王……アルドールに哀れまれたときは本当に怒りで体中の血液が沸騰するかと思った。よりにもよってお前が僕を哀れむのかとそう怒り狂った。

哀れまれるのは嫌いだ。別に僕は可哀想じゃない。僕は十分楽しい。毎日楽しんで愉しんで生きている。自分の価値観で僕を哀れみ可哀想がる奴が僕は大嫌い。そう言う奴は自分が優越感に浸りたいだけだ。本当に可哀想だなんて微塵にも思っていない。人を哀れむ自分が好きなだけなのだ。そんなエゴの餌になどなりたくはない。今この腕に巻かれているものだって、そのエゴの産物。そうだ。そのはずなのに……どうして僕はこれを解くことが出来ないでいるのだろう。

（双陸……）

あんな男大嫌い。価値観が違う。馬が合わない。あんな堅物僕は大嫌い。僕はもっと不真面目で自堕落で愚かな奴が好きなんだ。あいつだって僕みたいな主への忠誠心の欠片もないような奴大嫌いだろう。僕らは今まで何年もそうやって生きてきた。同じ城で同じ人に仕えているのに、全く別の世界を生きていた。あの城よりずっと広い見知らぬ土地にやって来て、それで初めて前より近くに感じるなんて本当に気持ちの悪い話だ。あいつだって人間だ。僕の大嫌いなタイプの人間だ。

「エルス……？」

レーヴェに何て言えばいいんだろう。レーヴェは単純だが馬鹿ではない。嘘を吐くにはちゃんと上手く吐いてやらなければ駄目なんだ。今の僕はちゃんと上手く喋ることが出来るだろうか？

「只今エルスちゃーん！！」
「あ、お頭ぁっ！！起きてたんすか！？」
「おお！飯だぜ！！本当エルス様々だな！！」
「いやほんと、エルスは良い嫁になるぜ」
「こらお前ら！勝手に俺の飯を食うな！！お頭の俺より先に食おうなんて百万年はぇえぞ！！」

助け船と言わんばかりに帰ってきた山賊達。戦利品を抱えて居城の一室へと雪崩れ込む。早速料理に手を掛けようとした男を見つけ、レーヴェがその皿を奪いに走り去る。食べ物の怨みは恐ろしい。空中コンボを食らって天井にその男がめり込んでいる。

運び込まれた戦利品は金品に食料に、それから数人の人間。
カーネフェル人の中で売り飛ばす金になりそうなのは、僅かな若い男だけだ。多すぎる女は奴隷としての商品価値は殆ど無いし、年老いた老人達もそれに等しい。
見回せば山賊達には返り血が付着しているし、それなりに大暴れをしたのだろう。男達は純粋なお頭に気を使ってカーネフェル語で土産話を始めてくれる。ちなみにそのお頭は天井に張り付いている部下に文句を言いながらもりもりと食事を始めているため此方の会話には気付いてもいないようだった。

「いやぁ、今回も傑作だったな」
「そうそう。この男本当馬鹿でよ、見物だったぜエルスちゃん」
「へぇ、そうだったんだ」

「なんでもよぉ、恋人の女を後生大事にしてたってんでな、まだ一回もやってなかったらしいんだわ。それを目の前で、だもんなぁ！もう止めてくれ止めてくれって泣き叫ぶのが縛られてるだけっつう男の方だってんだから腹痛くなるほど笑っちまってこっちまで泣きそうなっちまった！」

「にしてもよぉ、金髪族の野郎は軟弱男しかいねぇんだな！もう俺ら爆笑して手元が狂いそうでやばかったって話」

「あははっ！それはほんと面白い！ボクも付いていけば良かったかな」

また一つ不幸な恋人達の別れ話。女の方は目を離した隙に舌を噛んで死んだらしい。タロックでは女は月でも、カーネフェルでは女は星の数。使い捨ての消耗品の命を哀れむ者はいない。今日この場で彼女を哀れむのはその片割れである青年１人。

「そ、その声……まさか」

エルスの笑い声に、目を見開くその青眼。それがあの少年王と一瞬重なって、僅かな高揚感に満たされる。

「やぁ、さっきぶりだねお兄さん？ご機嫌如何？ボクは最っ高！」

「な、何で……っ！こんな酷いことをっ！！」

「あのねお兄さん、人間は二つの自由を与えられた生き物なんだよ。一つは疑うこと、もう一つは信じること。そのどちらを選ぶもその人の勝手で自由」

泣き叫ぶ男ににこりとエルスは微笑んだ。

金髪青眼の男は嫌いだ。あいつを思い出す。だからこの男が苛ついたのだ。見たかったのだ。この男が泣き叫び、絶望の底に沈む様

を。

「その自由には責任というものがついて回るんだ。その選択の先での不幸を人のせいにするのはとても愚かなことだよ。自分の考え無しと能無しをひけらかしたいのなら話は別だけど？」

この僕を可哀想だと哀れんだ自分自身を呪うがいいさと教えてやれば、男は今度は可哀想な自分自身のために泣く。本当にカーネフェルの男はどいつもこいつも心が弱い奴らばかり。

「いやぁ、相変わらずエルスちゃんはいい鬼畜っぷりだねぇ！」

「んだんだ！酒が進むってもんだ！」

下品な笑い声で溢れかえった砦の中、酒が回ってくる頃には戦利品達の涙も涸れ果てる。安堵しているのだろう。少なくとも可愛い我が身は殺されることはないのだとは知って。

ああ、やはりこんなものか。嗚呼くだらない。愛なんて恋なんて、所詮その程度のものなんだ。思い出として美化された彼女は何時まで生きられるだろうか？この男はどうせまた他の女を愛するような薄情者なんだろう。生きていても死んでいてもそう長くは生きられなかったのだろう。こんな男に惚れるなんて、哀れむべきは彼女に死なれた彼ではなく、彼女の見る目のなさだったのかもしれない。

「あ、そうだレーヴェ」

そろそろ出かけなければ。そう思いながら、先程仕入れた情報の一つを伝えることを思い出す。

「ん？なんだエルス」

「もうしばらくしたらさ、カーネフェルの奴らがこっちに北上し

てくるかもしれない。都が落ちるのはもう時間の問題だ」
「おお！都落ちんの！？やったじゃんエルス！」
「うん。そうだから、君たちの稼ぎ時が来る。その時に、ボクの腕を切った奴も来るかもしれない」
「よっしゃ！わかった！エルスの仇取ってやる！そんかわり仇取ったらお前あれだからな！毎日俺の所に味噌汁作りに来いよ！」

何故かキラキラした瞳のレーヴェに両手を握られる。どうやら餌付けしすぎたらしい。どうも求婚されているような雰囲気だ。どこまでこの相手が理解しているかは怪しい。

「何か逆じゃないかな」
「美味い飯作れるのが最高の嫁の条件だって俺の村じゃ常識だったぜ」
「ああ、そう。タロックも広いからなぁ、ボクが知らない常識もあるのかもね」

苦笑しながら答えれば、山賊の頭は両手を空へと突き上げる。

「野郎共！毎日エルスの手料理食いたいかぁあああああああああああああ！！」
「うぉおおお

黒髪に薄紅の瞳の赤子が二人生まれたよ。二人は女と男、姉と弟。二人は重さも背丈も不気味なほど瓜二つの姿。それだけで十分人を恐れさせるもの。

おまけにゃその姉弟は妖を見、話すことが出来る不思議な目を持っとって……そりゃあ二人が鬼だからなんじゃと村の衆は囁き合ったんだと。

貧しい村は食うにも困る次第であってね……口減らしにって弟の方、ぽいっと山へと捨てられたんだと。その頃にゃ、悪いお殿様が悪い命令敷きまして。二番目からの男はね、みんな殺すか捨てられるかってな話。その家にはもう一人先の兄がおったから、何から何まで同じなのに……捨てられるのは男の子。

それでもその子は自分が悪いんだと知っていたもんで、せめて姉さにゃ苦しい思いをさせたくはないと思ったんだと。それでひもじいっても家さは帰らず山ん中さいたんだと。

そんな子鬼を助けたのは、山に暮らす物の怪達。毎日村のあちこちから盗みを働きどんちゃん騒ぎ。子鬼も物の怪達との暮らしが楽しくて堪んねってさ。

んだどもある時子鬼も里心が付いて、おっかさんが恋しくなったんだと。

村さ現れた子鬼の姿に村の衆は大騒ぎ。そりゃもう死んだはずの人間が、帰ってきたらそりゃ怖ぇ怖ぇってな。最近悪さしてるって物の怪もその子鬼なんだって話になって、今度こそちゃんと息の根止めねとな……っつぅ話さなって、子鬼は最後に姉とおっかさんに会いてぇって泣くもんだから、んならそんくらいって村の衆も聞いてやったんだったな。

おっかさんもおとっちゃんも兄ちゃんもみんなどうして帰ってきたんだと、子鬼を責めて詰って罵って、子鬼さ水をぶっかけた。それを止めたのは、子鬼が自分の見窄らしい格好が惨めになるくらい綺麗に着飾った姉だったんだと。顔も背丈も相変わらず同じなんだ

けども、子鬼ゃそりゃあ悲しくなったんだと。

「あのな、おら長の息子のとこさお嫁さ行くんだ。したら食うに困らんて、あんたも戻ってこられっべ。おらもみんなと村長さ謝っからな」

姉は優しく話しかけてくれっけど、子鬼にゃそれは裏切られたっつって怒ったんだ。

姉も子鬼と同じ、鬼なんだ。同じ物見えっし、同じ色の目なんだわ。だども山さ連れてかれたのも、石投げられんのも、これから殺されんのも子鬼の方だけなんだと。

おまけに姉は、嘘を言ってんだって子鬼はわかってんだ。手が震えてたんだ。子鬼が怖くて堪んねぇからって、どうせ助けられもしねぇのに、優しいこと言ったんだと。自分だけは呪わねぇでくんねってな。そういう薄汚ぇ……人間らしい心になっちまったんだと。石を投げられる子鬼の方が、村の誰よりも綺麗な心を持ってたんだな。

だから、子鬼は人一倍傷ついたんた。子鬼は悔しくてのぅ、悲しくてのぅ……村を呪った。綺麗な色の大きな宝石みてぇな目ん玉に、いっぱい涙を浮かべてな。泣きながら、家族も村も呪ったんだと。

村の衆は子鬼のその言葉が恐ろしいってんで、さっさと子鬼を殺そうとした。その時山から一斉に物の怪が村へと降りてきて、子鬼を助けに来たんだと。

んだども、物の怪達ゃそんなに強い妖怪じゃなかったんでな、物の怪見えない人間に、悪さは出来なかったんだ。見てないところで盗んだり、脅かしたり、そんくらいしかできねぇ弱い妖怪だったんだな。

だから人前さ出て、子鬼を助けるってのはどんなに大仕事か。物の怪達はそん時に、子鬼の縄を解くのが精一杯。後は人さ心も体も踏んつけられて、次々消えてしまったんだと。

子鬼はなぁ、そん時なってやっとわかったんだ。人間がどんなに汚ぇ心を持っとって、妖怪がどんなに優しい心を持ってたか。
そんなら自分も鬼でいい。妖怪でいい。子鬼は本当に大切な家族を無くしたと気付いてわんわん泣いた。仲間を殺した人間が憎くて憎くて仕方ねぇって、子鬼は怒り狂って本物の鬼になった。村を焼いて人を焼いて、地獄絵図を作り上げたんだと。

悪いお殿様はそんな鬼を討伐に来たんだけどな、その鬼があんまりに可愛らしいもんだから、召し抱えて城さ連れ帰ったんだと。残虐なその鬼は、悪いお殿様とは大層馬が合って、二人して悪さをして人と村を沢山焼くようなったんだ。
空の向こうに煙が見えっべ？ありゃ鬼がまた悪さしてんだな。
鬼はな、人間が大嫌いでな。妖怪を殺す人間と幸せそうな人間が大嫌いなんだ。鬼には夢があってな、世の中から人間を消して、妖怪だけの世の中にするんだって言ってんだ。
また昔みてぇに、妖怪だけでどんちゃん騒ぎ。毎日たらふく飲んで食って歌って踊って……そんな昔を取り戻したくてな、今日もああやって、鬼は村を焼いて回るんだと。
だども鬼を哀れんでいけねぞ。鬼はそうされるのが一番嫌いなんだと。鬼は誇りを持って鬼をやってんだ。薄汚ね人間なんかに哀れまれるのが気に障るんだな。
だから鬼さ出会った時は、恐れてやんのが一番だ。そうやって鬼恐れる心がな、妖怪生むんだと。だからああやって、鬼は人を怖がらせてんだ。

＊

鬼が出たぞと人が言う。振り向けば誰もいない。
ああそうか、指を指されているのは僕なんだ。
鬼は何処にいるの？鬼はここにいるよ。

石が狙うのは誰かじゃなくて僕なんだ。

何もかもが嫌になった。燃えていく赤は綺麗な色。たぶん何もかもを終わらせてくれる色。焼いて焼いて燃やして消して、全てを零へと帰してくれる。

嗚呼、綺麗だな。このまま全部壊してくれないか。僕の怒りも悲しみも全部赤く塗り潰して。どうしてこんなに悲しいのか。どうしてこんなに苦しいのか。その全てを忘れさせてくれる。きっと全てを清めてくれる。

パチパチと燃え上がる家屋の鳴る音は、まるで喝采の拍手だね。ここは何かの舞台だろうか？そうか誰かが見ているんだ。僕という奴の生き様を。人生をまるで脚本のように眺めて物語り嘲笑う。だけどもうそれもお終い。僕も燃えて無くなるんだろう。

今にも崩れ落ちそうな屋根の上に腰掛けて、もうどうでもいいやと目を閉じて、最後の拍手の時を待つ。

崩れ落ちたその直後に聞こえたのは別の音。

燃え上がるのは家屋じゃない。もっと近くから聞こえる。崩れ落ちたのは屋根じゃない。僕の身体だ。その激痛に目を見開いた。目に映るのは赤じゃない。一面の青。僕の腕を焼いているのはその色。ぞっとするような青ざめるその痛み。手から腕から広がっていく。早くこれを切り落とさなければ炎は痛みは拡大していく。

逡巡後、僕は決断。僕は僕の腕を切り落とさせた。その痛みに僕は目覚める。

「はぁっ……、はぁ……」

夢か。また嫌な夢を見た。

恐る恐る視線を向けた先、ちゃんと僕の腕はある。

「カーネフェル王……、アルドール……っ」

僕に屈辱を植え付けたあの男。人間の癖に鬼の僕を傷付けるなんて。そんなのおかしい。間違っている。人を狩るのが鬼。鬼は人を凌駕する。

僕がおまえに狩られるんじゃない。僕がおまえを刈り取ってやる！……そう心に誓ってエルスは気を静めた。

「……」

深く息を吸ってもう一度、腕を見れば巻かれた包帯が目に入る。鬼であるエルスが人間に手当をされたのは、あれが初めてのことだった。それをこの上ない屈辱だと思う以外の思いが胸の内にあるようで、それが酷く落ち着かない。それがよりにもよってあの堅物の双陸だとは。

「……あいつ、何があったんだ？」

少し前までのあの男なら、こんなことはしなかった。王に命令されたなら手当くらいはするかもしれない。それでも自分の意思でわざわざ此方に歩み寄るようなことなんかなかったはずだ。彼のこちらを見る目は、異形を見るそんなものだった。それが何故今更柔らかくなったのか。

「……まさか」

時期を考えれば、思い当たる節は一つだけ。それはエルスがちょうど片腕を失った頃。あんな大怪我、大失態。それをあの男に知られてしまった。それが全ての原因だ。

（あいつ……、僕を哀れんでいるのか！？）

僕を恐れの対象ではなく、無力な子供だと認識したのだ。それは鬼であるエルスには耐え難い苦痛だった。鬼は強くいなければいけない。弱さを見せることで恐れを失い人になる。殺す側ではなく、殺される側に戻ってしまう。

僕は弱くなんかない。見せつけてやらなければ。僕は人間の子供とは違う。僕は鬼だ。そう化け物だ。

弱みは見せられない。あいつだって人間だ。人間は必ず裏切る。信じる価値なんかない。こんなの唯の気まぐれだ。或いは偽善だ。そしてエゴだ。別にこれは僕のために施された優しさではない。

「こんな物っ……」

さっさと剥がして捨ててしまおう。そうして腕に巻かれたそれへと手を伸ばす。簡単な動作なのに、それがとても難しく思える。そうしてその繰り返し。

「あいつ……昔は全然こんなのじゃなかったのに。どうしたんだよ……突然」

だからこっちも調子が狂う。悪いはあの男だ。僕は何も悪くない。昔だ。もう何年も昔だ。僕はもっと背が低くて、あいつも今よりは仏頂面ではなかったし、まだ子供と呼べる年頃だった。

「こんな所で何をしている！危ない、逃げるぞ！」

気がつけば一人の少年に僕は抱えられていた。助け出されたのだと知っても、有り難いとは思えずに、余計なことをしてくれたものだとさえ僕は思った。

「……何って」

馬鹿だろうかこの男は。

「そんなの見てわからない？村を焼いてるんだよ」

僕の言葉で彼は自分が助けたのが人ではなく、鬼だったのだと気付いたのだろう。抱える手が強張った。そして僕も知る。ああ、これもやっぱり唯の人間だ。だから急いでそこから飛び降りた。人間なんかに助けられたくなんか無い。僕は誇り高い妖怪なんだ。馴れ合うもんか。

「何の権利があってそんなことを……」

「そんなの殺したいからに決まってるよ」

「民はお前の物ではない。王の物だ。だから勝手に殺していいものではない。そんなこともわからないのか？」

「それじゃああんたはどうして生きているの？」

変なことを言い出したその人間に、僕はそう切り返す。

「何の権利があってあんたは生きているの？生きているんだから何かを殺して食らって生きているんだろ？ボクは鬼だから人を食らって生きている。それにいちいち許可を取らないといけないわけ？あんたは息をする度に誰かに許可を貰っているの？」

これはそれと同じ事。僕は生き続ける以上、人を怨まずにはいられない。だから殺す唯それだけさ。息をするのと同じように、それが僕にとっての自然だった。

同じ場所にいられない。人が嫌いな虫を叩きつぶすのと同じだ。

唯目障り立ってだけで。いや違うか。確かに奴らは害がある。悪質な蚊だ蜂だ。最悪僕を殺す虫だから、僕は僕の安全のために殺しているんだ。

僕がそう責めれば彼は苦しげな顔になった。何か気に障ることを僕が口にしたのだろう。

「ねぇ、綺麗な黒のお兄さん。綺麗な着物のお兄さん。あんたは人間に石を投げられたことがある？食うに困って生死の境を彷徨ったことは？あんたら凡人の目には見えない者達の、悲しみを聞いたことはある？何？一つもないの？その癖そんなに多くを知ったような顔をしているの？本当人間って盲目で傲慢な生き物なんだね」

目に映る景色のその全てが憎らしくて堪らない。嗚呼、世界の何もかもが呪わしい。全て音を立てて崩れて壊れてしまえばいい。

その日彼は、僕の言葉に何も返せなかった。そのまま答えられずにただそこで僕を見つめていた。

そこから八年位同じ城に仕えていたけれど、彼と顔を合わせることはあっても向き合うことは一度もなかった。彼はよく外へ仕事に出ていたし、僕はいつも城にいた。数術に疎いタロックは僕の力を重宝した。基本的に僕に出来ないことは何もない。あるとすれば数術で不可能と言われている死者の蘇生くらいなものだ。それ以外は代償さえあれば叶えられることばかり。

まぁそれでも須臾王は、僕の力自体にはそこまで興味がなかったのかも知れない。あったのは周りの奴らだけ。王は僕がお気に入りだった。得に王は僕の目がお気に入りだった。紫は薄めれば桜色に見えるからだって。どんな我が儘を言っても王は僕がお気に入り。人間って本当に馬鹿。くだらない感傷に捕らわれて踏み外す。

真面目に誠心誠意忠誠を誓うあいつより、適当で不遜で無礼な僕が可愛がられる。それをきっとあいつは気に入らないと思っていただろうし、僕もそう思われている自覚はあった。何しろあいつの僕

を見る目は本当に冷たい。化け物を見るような目で僕を見ていた。それは昔は純粋な恐れでも、年を重ねる度にそれは唯の嫌悪と薄気味悪さの不快感へと変化した。そういう目を向けられるのは。

それがどうして今更になって。僕を哀れんでいるのか？それとも馬鹿にしている？鬼なんかじゃない。唯の非力な子供なんだって見下している？

それでも丁寧に施された、それでいてぎこちない不器用な結びの包帯。そこにどういう意味が込められているのかわからない。やらなければやられる、それなら僕はやる。そんな風に生きてきたからやらないのにやられてしまった時にどうしていいのかわからない。

「……借りは返してやらないと。そうだ、どんなことでも同じ事だ」

恨みでも、感謝でも。それが人の世の理だ。郷に入っては郷に従え。鬼だって時々は空気を読もうと思ってみたりするものだ。勿論唯の気まぐれか、利害の一致それだけだけど。

＊

要塞カルディアでのタロックとカーネフェルとの交戦が始まって一週間。その決着はカーネフェル側の撤退という結果に終わる。

カーネフェルを指揮するアロンダイト卿。昨日までは好戦的に捨て身の覚悟と気迫を感じさせるまでの圧倒的強さで砦を守った。

指揮官が最前線に出るというその無謀。それを舐めて掛かった兵はことごとく切り捨てられた。それに身構えた兵士さえ、切り捨てられた。並の者では相手にならない。

国と主へのその忠義に敬意を表し、三日目から双陸がアロンダイト卿の相手を務めた。剣は幼少から嗜んでいた。勝てるとは言い切れないが、負けるとも言わない。剣だけなら渡り合える。気持ちが

勝れば討ち取ることも叶う。相手が唯の剣士なら。しかし相手は唯の剣士ではなかった。アロンダイト卿は剣士にして数術使い。剣を交えている際に発動される数術。それを避けるので精一杯。そしてそれを避けても今度は襲い来る剣戟。どうしても此方が防戦一方になってしまう。彼と互角の勝負をするためには正々堂々では無理だ。兵士達も彼の数術を恐れて動けない。

正直なところ、此方も数術使いがいなければ話にならない。

エルス＝ザイン……あの同僚である混血の子供が傍にいてくれたなら、そう思いもしたがこればかりは仕方がない。同僚とは言え同じ目的のために動いているかも怪しい相手だ。

それにあんな子供が傍にいては気が散ってもっとまともに戦えなくなる。あれが唯の子供ではないとは知ってはいても、あんな姿だ。大怪我をさせたなら、此方の気も乱れてしまう。

しかしこれ以上、アロンダイト卿一人に手こずるわけにはいかない。そして今朝……七日目から方針を変えた。自分が彼を抑えている間に彼ではなく他の者を狙えと。

如何に数術使いとは言え、多くの仲間全てを守るのは難しい。そんなことしようものなら集中が乱れ、術か剣技に乱れが生じる。

そして今日、彼が下した決断は……撤退。最後の最後で王の命令ではなく部下の命を取ったのだ。

それは自分には決して選べない選択。それでも彼の選択を責めるつもりはない。むしろその慈愛には好感すら持てる。しかしこれは遊びではない、戦争だ。相手の弱みには付け込まなければならない。

「カルディアは完全に我らがタロックの手に落ちた！残すは都！ローザクアのみっ！！敵は体勢を崩した！このまま都まで進軍するっ！」

湧き起こる歓声の中、進軍の準備を整えるよう兵士達に声を掛け、砦より物資の補給を行った。一通り命令を下して周れば、もう辺り

は薄暗い。まもなく夜が訪れる。
地の利は向こうにある。夜の間は進軍は出来ないだろう。そうなれば今日は砦で一夜を明かすことになる。
これまで強行軍で無理をさせた兵士達。南の砦だけでは部屋が足りなかった。一夜だけとはいえゆっくり休ませてやれるのは有り難い。敵将のようにはなれず。王の命より彼らを選んでやれない自分の不甲斐なさに自責の念を覚えるも、それも仕方のないことだと首を振る。
守られていた砦の門番も兵士ももういない。住民達も逃げ出したり、降伏したり。夕暮れの風に吹かれることで、堅牢な砦の最後に僅かな物悲しさを感じる。命令遂行のための一コマを進めたのだという喜びよりも虚しさの方が勝っている。それでも命令から逃れられない我が身もまた悲しいものだ。
双陸に命じられたのは都を落とすこと。そしてそれを阻む者と戦うこと。カルディアという最後の砦は通過点に過ぎない。元より無力な住民達に刃を向けることは極力控えるように兵には命じている。だから交戦中も逃げ遅れた住民達は屋内退避でやり過ごさせた。
別に人殺しをしに来たわけではないのだ。

「なかなか見事なものだね」
「エル……呪術師殿か」

久々に姿を見せた同僚は夕暮れの風と共に、いつものようどこからともなく現れた。いつものこの子供なら、甘いとかなんだの口にしそうではあったが、今回は珍しく此方のやり方を褒めている。それが少しばかり意外だった。それに驚き、何かを企んでいるのだろうかと、僅かにそう感じてしまう自分を恥じる。振り返れば少年は笑ってはいたが、今日は此方を嗤ってなどはいなかったのだ。

「で、このまま追うんだって？」

「無論、ここまで来た以上……前進するしかあるまい。速やかに終わらせる方が、両国にとって被害は最小限で済む」
「そう。それじゃあ丁度だね」
「丁度だと？」

この子供は妙なことを言う。くすくすと小気味よく笑いながら混血の子供は見えないことを語り出す。

「ボクの計算では明日の昼頃。こっちがローザクアに着く頃に、奴らは即位式を行うよ。新たな王の誕生で、どん底まで落ちた士気を盛り上げようってことらしいね」
「……なるほど、そのためか」

極力戦力を減らさぬように、相手方の将は後退した。今にして思えば、それは退避のための時間稼ぎと言えなくもない。指揮すべき将が前線に出てきたことにも頷ける。それを双陸は捨て身の覚悟と受け取り応戦したが、そういうことではなかったようだ。

「まだ諦めてくれてはいないということか……窮鼠猫を噛むともいうからな。より一層気を引き締めてかからねばなるまい」
「まぁ、そうだけど本当に次で最後だ。その最後の芽を摘み取ったなら、カーネフェルはもうお終い。士気が上がることはない。カーネフェル王の初陣を大失敗にさせてやれるかどうか。それは貴方の采配に掛かってるんだよ双陸」

遠回しに頑張れと言われたような気分。本当に妙だ。この子供は何かおかしな物でも食べたのだろうか？

「即位式も王が居なければ出来やしない。南の砦を張っていても全然来ないと思ったら、あいつらもう都入りしてたんだよ」

「その言い方だともっと早くに気がついていたようだな」
「そりゃそうだよ。ボクの腕の怨み、たっぷり返してやらなきゃ」

やはり妙だ。いつものエルスなら、そんなことは言わないしまずやらない。場所を知ったならすぐさま乗り込み殺しに行っていてもおかしくない。それをわざわざ今日まで待って、自分の所までそれを教えに来るなんてとてもおかしなやり方だ。その彼らしくない行動に、一抹の不安を覚える。

「王になる前に叩きつぶしても唯の一般人。希望の芽を潰すには、それを灯した後に吹き消した方が効果的だしね」

その物言いは確かに彼らしいが、不安はやはり拭えない。

「あ、そうそう。南の砦にボクが借りてた兵、貴方に返すよ。都攻めには一人でも多い方が良いでしょ？僕は一人の方が身動き取りやすいしね。都落としは貴方がやってよ。僕は内部から崩して隙を作る。大暴れだねぇ……楽しみ楽しみ！」

「しかし……それでは流石に危険ではないか？相手は……」
「貴方なんかに心配される義理はありません！ボクは誰の命令も聞かないよ！須臾がそれでいいって言ってくれてるんだから」

彼のみを案じた途端、突然突き放すような敬語。これまで嫌味としてしか活用されてこなかったそれが、今だけ聳え立つ壁のよう。礼儀の欠片もなかった口調の方が、身近に感じられていたというのも変な話だ。

「カーネフェル王……ボクに二度も屈辱を味会わせたあの男……！絶対に許さないっ！！」

ああ、そうか。ようやく悟る。
彼は今俺が哀れんだのだと思ったのだ。俺の言葉が彼にカーネフェル王へと向ける怒りを思い出させてしまったのだ。
そうじゃない。そうじゃないのだと、何と言えば伝わるのだろう。こういう時、言葉を上手く作れない自分に呆れてしまう。
別にお前の力を侮っているわけではない。弱いと思っているわけでもない。それでも心配なのだ。強さは認める。知っている。そうだ。出会った頃からお前は強い。村一つ、今よりもっと小柄な身体で焼き払ったお前だろう。その気になれば俺の磨いた剣技すらお前は凌駕するだろう。そういう理不尽な強さを持っているのが数術使いという生き物。
それでもお前は心にムラがある。やはりまだ子供なのだ。だからいつでも強いわけではない。その隙を突かれれば、またこの間のように大怪我を負う。
数術でそれは無かったことに出来るのかもしれないが、その傷を負うとき……痛くないわけではないのだろう。だからこそ、彼はこんなにもカーネフェル王を憎んでいるのだ。

「……これを持っていけ」
「何これ……」
「数術使いの弱点は接近戦だったな。俺の脇差しだがないよりはマシだろう。万が一のために持っていけ」
「へぇ……やっぱりボクの力を貴方は信用してないんだ。いや、わかるよ。……いいえ、わかりますよ、ボクは人間じゃないから」
子供扱いなんてされたくない。いつも鬼として人に恐れられていたい。それでも力だけ、強さだけは信用して欲しい。そんな我が儘な言葉、子供以外の何だというのか。子供が傷つくところをあまり見たくはない。こんな戦場に似つかわしくないのだ、この子供は。

第一これはあの方のお気に入りだ。命令は絶対だが、主の望みを察し叶えるのも自分の役目。俺はこの子供を死なせてはならない。そのために王は俺とこれを同じ場所に送られたのだ。

「お前が鬼でも人でも些細なことだ。あの方にとってお前が必要なのは確かだ。万が一でもお前に何かあっては困る」

「双陸……」

「それは俺の大事なものだからな。返しに来てもらわなければ俺も困る」

そう恩義せがまし言い方をすれば、エルスが小さく微笑んだ。

「貴方はつまらない人間だね。……そしてこの上ない馬鹿だ」

いつもの人を小馬鹿にしたようなそれとは少し纏う空気が異なっているのが印象に残るような笑みだった。

「返しに来た時得物が足りなくて死んでたとかなって、その時ボクに恨み言とか言われても聞いてあげないからね」

しかし生意気な口の利き方は相変わらずと言うべきか。子供だというのにまったくこれは素直ではない。子供らしい可愛らしさがまるで皆無だ。こんな弟がいたなら今頃きっと手を焼いていただろう。俺の弟はこんな奴じゃなかったから、妹がいたらこんな風になっていたのかも知れない。タロックの女は大抵性悪だ。甘やかされて我が儘で、自分勝手で傲慢で。

「そこまで言うんなら持っていってあげるよ。……同僚のよしみでね」

そう言って笑うエルスは、何だろう。とても人間らしい笑顔を浮かべている。出会った頃のこの子供は、こんな風には笑わなかった。漠然とそれを思い出し、それがとても遠くそして妙に懐かしく感じられた。

0：Latet anguis in herba.（後書き）

いきなり道化師、それからタロックサイド。６章ヒロインジャンヌのジの字も出てこない。あらすじ詐欺とか言われたらどうしよう。０章ゲー制作時のイベントを０章に付け加えるか６章に盛り込むかで悩みましたが心機一転と言うことで此方に。
何はともあれ６章はむやみやたらに恋ですね。タイトルが以上避けられれん……

ところで彼方此方であらぬ方向に矢印出てるせいで、ノリで三角関係タグを入れてしまいましたが誰と誰と誰を指しているのやら。なんかもうみんな何だかんだでいろんな線出てやがりますね…人間関係カオス鍋。そうだね、愛憎だね。

0，1：Respice，adspice，prospice．（前書き）

0，が付いてる内はまだ0章軸。フローリプが死んでからが6章軸。
まだプロローグみたいなものです。

0，1：Respice，adspice，prospice．

「アルドール様……」

一週間ぶりの主を目に、まずランスの口から零れたのはそんな言葉。扉の先の風景に、あらゆる言葉が霧散して、そう絞り出すのが精一杯だったのだ。

久々の王都。馬を奔らせ都へ急ぎ、城へと向かい、あの方が居ると聞いたその一室に駆け込んだ俺を迎えたのは二人の人間。あの方の傍には1人の少女が居た。

その人は俺が初めて見る人だ。彼女よりは短い金色の髪。伏せられた瞳の色はうかがい知れない。まだ小さな女の子だ。おそらく彼の言う、“妹”君なのだろう。

無事に道化師の魔の手から、彼女を救い出すことが出来たのだ。しかしそれにしては彼の表情がおかしい。目的を達成したにしてはそれはあまりに暗すぎる。

（そう言えば……ユーカーの奴も何か様子がおかしかった）

＊

俺がいない間、王の護衛を頼んでいた俺の従弟。嫌々と言った口ぶりで護衛に付いたにもかかわらず、律儀にもここ数日寝ずの番でもしてくれていたのだろう。再会した従弟は少し窶れた様子で左目の下には隈が見える。隠されている右目もおそらく同様に。

「……んじゃ、後はお前の番だ。子守りなんて柄にもねぇ仕事させられたんだ。戦まで俺は昼寝でもしてくるぜ」

軽く欠伸をしながら、背を預ける壁から身を離す。そして背を向けそそくさと消えていこうとする彼に、俺は違和感を覚える。

「ユーカー……何があった」

「見りゃ解る。嫌でもな」

場合によっちゃ俺はまたお前に殴られるかもしれねぇと、彼は小さくそうぼやく。

些細なことで喧嘩を繰り返していた昔は兎も角、近年では俺がこいつに手を挙げるのはそうそうない。その時点で俺は気付いた。誰かが死んだのだ。

俺にとっての最悪は、主を失うこと。ユーカーの語る言葉がアルドール様の死ならば確かに俺はこいつを殴らずには居られない。そして何故だと問い詰める。そしてそうしてしまった自分とまた何も出来なかった自分を深く悔いることになる。

早く扉を開けてあの方の安否を確認したい。それでも何かが妙だ。何かあったというのは誰かではなく、目の前のこの男自身のことのように感じられるのは何故なのか。

（違う。アルドール様じゃない）

その様子からそれを察する。けれどあの人に連なる物事……それ以外でこいつをここまで変貌させる何かがあっただろうか？

1人だけいた。しかし彼女はもういない。

（これではまるで……）

この様子は見覚えがある。彼女の死を知った時のそれによく似ている。此方が言葉を掛けることを躊躇ってしまうような静かな気迫。怒っているのか沈んでいるのか何とも言えない危うい均衡。迂闊に

触れれば何が彼の地雷になるのかわからない。彼とはそれなりに長い付き合いだ。粗方互いを理解している。そう、そのつもりだ。それでもこういう時、それは誤りなのではないかと思わせられる。それは唯の自惚れで、本当の理解には程遠い。

「それじゃあ……お前には何があったんだ？」

「お前には関係ねぇことだ」

言いたくないと彼はそう吐き捨てる。ばっさりとそう切り捨てて関わることを許さない。

彼には元々排他的なところはある。それでもそれが自分に向くことは本当に稀だ。だからこそ彼にそう言わしめる程の事態が引き起こされたのだとは知る。

「いや、悪い。言い過ぎた」

そう言ってユーカーは目を逸らす。小さく息を吐いて呟く言葉は自暴自棄のそれとは違う。暗い中にありながら、明確な線、一本の芯を感じられる。何かの決意を感じさせるような言葉。

「……お前が死ぬまでは、俺がお前を守ってやるよ。仕方ねぇから、あいつのお守りもしばらく付き合う。ついでだけどな」

本来その言葉には安堵すべきだ。少なくともあの少年の無事は確定された。自分もアルドールも弱いカードだ。道化師などと対峙したなら間違いなく敗北するだろう。Ａであるアルドールはジョーカーを殺せる唯一のカードではある。それでもそれには条件があるのだと神子は言う。

コートカードであるユーカーがアルドールの護衛を継続してくれるというのなら、それは助かる。その時が来るまでの時間を稼ぐま

でに彼が必要な人材だということは誰もが理解している。しかしやはり疑問を感じる。しかし繰り返される問いかけに、彼は答える気がまるでない。

「……俺は下から三番目のコートカード様だからな。いねぇよりはいくらかマシだろ」

それは自嘲だろうか。彼が笑った。

「お前が必要としているのはカードとしての俺の力だろう？それとお前に劣る剣技くらいだろう？劣るとはいえあいつの護衛としてないよりマシだから」……彼の言葉にはそんな響きがあった。

（違う、俺は……）

そんなことを言わせたいのではない。それでも彼はもう決めている。此方の言葉など介さない程頑なに。

アルドールを守るのはアルドールのためじゃない。お前がそういう俺を望むからだ。お前があいつを守れと言うならそうしてやるよと言う言葉。

騎士として主に仕えるのは当然のことだ。それでもユーカーはアルドール様に仕えてはいない。彼を主君とは認めていない。それでも護衛をしてくれるのは、偏に俺の言葉があってこそ。それは俺を死なせないため。だからこいつはここにいる。

それでも俺の頼み事は、違う。騎士としては当然のこと。それでも、それはこいつにとっては当然ではなかったんだ。今までは同じ人に仕えていた。だから俺たちにとってそれは当然だった。それでも今、それはもう当然ではない。無くなってしまった。

俺はアルドール様のために自身の犠牲を肯定するが、ユーカーはそうじゃない。こいつもカード。カードとして他を殺めて生き残る道を選ぶのか、それとも自らの犠牲を肯定して願いを託すのか。こ

いつは自分の命の使い道をとうとう決めたのだ。
こいつは今、お前のために死んでやる。そう言った。自身の願いを諦めるに値するのはこの俺だけだと言っている。その言葉の重さと、認識の違いに俺は言葉を失った。

こいつに騎士であることを求める俺は、「仕えたくもない子供のためにお前は死ね」と言っているようなものなのだ。こいつは俺に生きろと言ってくれているのに。言葉の違いに、俺は俺が本当に薄情な人間なのだと思い知らされる。俺の言葉は消極的に、間接的にこいつの死を望んでいるようなものだった。
こいつはそれを嫌がった。それが嫌だったんだ。どうしてそれに気付いてやれなかったのか。今のこいつはもうそれを受け入れている。「そのために俺が死んでもどうでもいいんだろ。俺はそうじゃなくてもお前はそうなんだよな。別にそれでもいいけどよ」……そんな虚ろを抱え込んでしまっている。
俺がこいつを本当に何とも思っていなくて、大事な家族の命さえ使い捨てるような男だと認めた上で、こいつはそれでもいいと言ってくれている。死んでやるよと口にする。そこまで追い詰めてしまった自分に反吐が出る。
そうじゃないんだと思っても、伝えられる言葉が俺にはない。何とも思っていないはずがない。それなのに俺はいつもこいつを犠牲にしてしまう。忠義に私情を挟めるはずもない。俺は人である前に騎士だ。王のため、即ちそれは国のため。そこにたった1人だ。どんなに近しい親しい身内でも、俺はその命を肯定できない。

「ユーカー……本当に、何があったんだ？……それは俺に言えないことか？」

それでも諦めきれず、聞いてみる。しかし答えは変わらない。

「……言いたくねぇことだ」
「そうか……」

そう言われてしまえばもう何も言えない。俺は今拒絶されている。当然だ。こいつはいつも俺を案じてくれている。そのため感情的なこいつは騎士としても将としても失格だ。それでも人間としては俺より遙かに優れている。俺は騎士として将としては優れていても、人間としては失格だった。俺は世界で一番嫌悪する男と同じ例えを背負ってしまっているのに気付き、胸の中に苦いものが込み上げる。

「……さっさとあいつの所行ってやれよ。お前の主なんだろ。俺は昼寝でもしてくるわ。ここんとこあんま寝てねぇんだ」
「……ああ、俺の主を守ってくれて……ありがとう」

今度こそ背を向けて歩き出した従弟が、ピタと足を止める。だが振り返らない。

「……まさか礼を言われるなんて思わなかった。殴られんの覚悟してたんだけどな」
「……あの方は無事なんだろ？それなら十分礼を言うには値する」
「お前って意外と淡泊だよな。……誰にでも優しいけど、実際はどうでもいい奴らも多い。お前は本当部下体質だな。主さえいりゃそれでいいんだろ」

そう語る彼は今、どんな顔をしているのだろう。子供の頃からの付き合いの俺でもそれを察することは出来なかった。
俺に対してこんな風に棘のある言葉を吐く従弟は珍しい。見下している訳じゃない。それでも僅かに軽蔑している？いや違う。それは先程の笑み、自嘲に似ている。これはいつも強がっている彼の、捻くれた弱音なのだろうか。

「ユーカー……？どうしたんだ、本当に……」

どうにもこうにも彼らしくない。戸惑いを覚える俺に、彼は苛立ったように舌打ちをする。

命捧げてもいいってくらい大好きな王様が待ってるんだ。そこらのゴミと大差ない俺のことなんか構ってる暇あったらさっさと会いに行ってやれ。そう背中を蹴られたようだ。

「……眠くて苛ついてるだけだって。いいからさっさと行けよ」

「あ、ああ……」

部屋の扉に手を掛ければ、俺の頭が切り換えられる。仕事に私情は挟んではならない。俺の最優先事項はアルドール様なのだ。僅かに後ろ髪を引かれる様な気持ちも頭の中から振り払う。

部屋の中には長い金髪を結った少年と、寝台に横たわったままの少女。ここに来るまで出会わなかった人間はいるか？ユーカーのあの様子。誰かが死んだのはまず間違いない。

（イグニス様は教会にいるとの話だったが……）

彼らの中から失われたのは何なのか。皆が一様に虚ろを宿した表情。そうだ彼らからは明るさというものが消えている。

（そう言えば……ルクリースさんを見ていない）

そこでランスは答えに気付く。そうだ、影のようにこの少年の傍にいつもべったりしていた……彼の姉がどこにもいない。

（まさか……彼女が）

アルドールを見送る時、その傍には1人の女性が居た。長い流れるような金髪に、海色の青い瞳の少女。夏のような人だなと思った。その瞳は涼しげな色なのに、笑顔はどこまでも温かく、その目は炎のように燃える強固な意志を持っている。

カーネフェルは男が少ない。このご時世だ。この国における女性は必ずしも守られる存在というわけではない。彼女もそうだった。俺よりも多くの幸運に守られた最強の一角、コートカード。あの方を守るカードとして、俺たちの中で最も適任だったと言える。

彼女は笑っていた。最後まで笑っていた。此方に不安を感じさせることもないような、軽く明るい笑みで何時までも。

ユーカーのあの沈みよう。幾らかは彼女が関係しているのだろう。ユーカーは本当に嫌いな相手には口さえ聞かない。彼と毒舌合戦が出来ると言うことは、多少は心が開かれている証拠だ。

（ユーカー……）

アスタロットのことがあってから女性から距離を置いていた従弟だが、彼女とはなかなか気が合いそうに俺には見えた。……あれはこの少年だけの力ではない。あいつが昔をほんの少し取り戻したのは……その何割かは、あの女性の力もあったのだ。

彼女は俺たちの知る女性とはかけ離れたような性格をしていたけれど……それでも人を惹き付ける何かが彼女には確かにあった。それが彼女の、王の血だ。

（殴れるわけ、ないじゃないか……）

彼はまた、目の前で王の血縁（カーネフェリア）を失ったんだ。俺はまた大事な時に何も出来ず、王の傍にいられなかった。

「アルドール様……申し訳ありません。俺は……貴方を守れなかった」
「……何言ってるんだよ。ランスはちゃんと役目を果たしてきてくれたんだろ？……お帰り。良くやってくれた。感謝してる」
此方を見向きもせずに主が喋る。その姿の何と痛々しいことか。
傍らの少女しか目に入らないと言うように、その寝顔を見守る姿は1人の兄だ。王などではない、唯の弱い脆い傷つきやすい少年だ。俺が今ここにいることはおそらく邪魔でしかない。2人の時間を妨げるだけの存在。その先続く沈黙に耐えきれず、俺は一言を残して部屋を後にする。
「いいえ、俺は守れなかった」
それに対する答えはなかった。それは彼もその通りだと思ってくれていたからなのか。事実としておれは彼の心を守れなかった。だからこんなに彼は傷ついている。
人間失格だって？何を言っていたんだろう俺は。人間どころか……使命も果たせない。俺は騎士さえ失格だ。傷ついた主の支えにすらなれない。こんな俺に意味はあるのか？
無い。あるはずがない。
＊
「アロンダイト卿！わざわざ此方まで来て頂いてすみません」
「イグニス様……」
約束通り出向いた第二聖教会。俺を迎える神子の顔もまた明るいとは言い難いそれだった。
一週間。たかが。それっぽっちの時間で希望は容易く絶望へと姿

を変える。

「いいえ、確かに最善ではありませんが最悪ではありません。よく時間を稼いでくださいました」

王に代わってお礼を言わせてくださいと幼い神子が言う。その言葉は確かに勿体ないが、ランスにとってそれは喜びではない。何よりその言葉を与えて欲しかった人はもういない。その代わりの人も、今は深く沈んでいる。

「しかし流石ですね。よく一週間も時間を稼いでくれました。お陰でタロックの奴らに立派な式を見せつけてやれそうです」

「策が見破られぬように、籠城の構えを見せ、私も何度か討ち死にを思わせる無謀な行動を取りました所詮は烏合の衆。そう思わせ瓦解したと認識させる風にバラバラに逃がしましたが先程全ての部隊が都入りを果たしました。タロック軍はカルディアを陥落した勢いでこのまま都までやって来ます。おそらく明日には此方に辿り着くでしょう」

「そうですか。……それでは気を引き締めてもう一戦に挑みましょう」

一度そこで会話が途切れた。決戦前夜だというのに不安は尽きない。そればかりが雪のように降り積もる。真夏の暑さでさえそれを解かしてはくれない。

「……アルドールには、会われましたか？」

「はい……」

「……ルクリースさんのことは残念です。……彼女は、僕とアルドールを守ったせいで……」

いえ、物は考えようですねと彼は首を振る。

「相手は道化師でした。彼女一枚で切り抜けられたことの方が奇跡ですね。痛手には違いありませんが」
「……俺で、あの方をお守りすることが出来るんでしょうか」
「……僕よりはあなた方の方が適任ですよ。……僕が行くと彼は空元気を振る舞おうとして余計に痛々しいことになりますから」
「イグニス様……俺は俺が情けないです」

沈んだ顔。表情一つ変えずに瞬きも忘れたように眠っている少女を見つめていた主の姿。その背中に幾ら言葉を投げかけても虚しさは拭えなかった。

「こんな時にあの人を……俺は支えることすらままならない！」

聖堂に響く自分の言葉に、情けなさばかりが募る。自分の無力を実感する。どうしていつも自分はこうなのだろう。大切なときに大事な人の傍に居ることが出来ない。そうしてその身と心を守ることも叶わない。下された命令を幾ら果たしたところで、主を守れないのなら、騎士たる我が身に一体なんの意味があろうか。

「……アロンダイト卿、貴方は多くの時間を作ってくれました。まだ今日の夜には時間があります」

俯いて頭を抱えるランスにイグニスは歩み寄る。その向かいに腰掛けて、両目を閉じて淡々と言葉を紡ぐ。ひっそりと囁くようなその声の中に何故だろう、憐れみか慈しみのような得体の知れない温かみを感じる。

「僕も神も貴方を救いはしませんが、貴方が貴方を救うための手伝いくらいなら喜んでさせていただきますよ」

懺悔をしろ。悔い改めろ。自身を救う、そのために。聖堂を流れる夜の空気がそう、語りかけてくるようだった。

（後悔か……）

そんなもの、ある。幾らでも。

幾ら周りに持て囃されても自分も1人の人間だ。不可能事は幾らだってあるだろう。

力が足りないとは思わない。それを感じるのならそれを補う努力をすればいい。だから非力を嘆くことはない。

それでも無力を感じることはある。今更どうにもならないことを悔いる気持ちは尽きない。

被害は最小限に。民と兵を逃がすための時間稼ぎ。指揮官が前線に出るなんて無謀、それを犯した。捨て身の攻撃だとタロック側は受け取った。それに応じる潔さをもって彼方の将が前に出た。もうカーネフェルは虫の息。カルディアの砦もランスが散れば陥落。逆を言うならその騎士1人いるだけで、何時までもこの砦は屈さない。最後の1人になるまで戦い続けるだろう。

だからこそその指揮官が前に出ることは意味がある。大きな餌だ。それさえ撃てばいよいよ王手。弓兵達の攻撃も、精霊に愛された数術使いを前には意味を成さない。数術使いの弱点は接近戦。ランスを落とすには接近戦を挑む必要がある。それを向こうの指揮官が悟るまでに一日。その力量を見極めるためにまた一日。翌日、三日目から将同士の一騎打ちへと持ち込んだ。それが無駄な犠牲を減らす術だと両者が認め合うことで。

しかしランスは唯の数術使いではない。あくまでランスは騎士。数術の才のある騎士。数術使いの欠点である接近戦を克服どころか、むしろ其方が本分だ。そこから三日間はランスの優勢。武人として

の礼儀を持ってそれに応えていた双陸も、相手が窮鼠ではないことをいよいよ悟り、これ以上の時間を割けないことを知る。武人の礼儀も誇りもタロック王の命令には及ばないのだろう、方針を変えそれまで待機させていた弓兵が狙うのはランスではなく他の兵士。その全てを援護しながらの一騎打ちとなれば、数術の分も詰められる。剣技だけなら力は拮抗。こうなれば、ランスももう命令を下さなければならなくなった。

王都ローザクアへの撤退。それは要塞カルディアの陥落を意味した。

なじみ深い場所を敵に明け渡すのは非常に苦い思い。それでも俺にとって王の命令は絶対だ。あの優しい少年は、王でありながら民や兵の命を尊ぶ。その優しさは先王と通じるところが感じられ、今度こそ守らなければと思わせられた。

「償いのつもりだったんです」

長い沈黙の後ポツリとランスの口から漏れた言葉。それにイグニスが問いかける。

「償い……ですか？」

「ええ……俺が俺を保つためには、俺には王が必要だった」

理由が欲しかった。あの人を死なせてしまった俺がやるべきことは何か。冷静な判断能力を失っていた。だから感情に振り回されて言わなくても良いことを口にしてしまいユーカーを傷付けた。あいつは俺の身を案じていてくれたのに。

……そんな俺たちを仲裁してくれたのもアルドール様だ。今は回数も減ったが、昔はそれなりにあいつとは仲違いをしていた。子供だった。お互いに。その度に間に入ってくれたのはあの人だ。そんなところまでアルドール様はあの人によく似ている。だからこそユ

ーカーも文句は言いながらも彼を放っておけないのだろう。あいつと俺はよく似ている。あいつも求める物があるのだろう。償いか、死に場所か。それを思う気持ちはあいつにもきっとある。

「アルドール様は、俺の希望です。死に急いでいた俺にあの方は生きろとお命じになった……そんなあの方に、俺はあの人を重ね見ていたんです」

そんな命令をされたのは、彼で二人目。込み上げる懐かしさと慕わしさ。それが俺に忠誠を誓わせた。口先だけのそれじゃない。あの時、俺の心が彼へと跪くのを感じた。

あの人を死なせてしまった俺なんかに彼は生きろと言う。それは許しだ。同時に命令だ。俺を許した言葉が俺に忠誠を誓わせる。生きろと命じる言葉は、俺に俺の死への決意をより強固にさせる。

「俺はアルドール様のためなら、この命を使っても構わない。そう思いました」

「アロンダイト卿、貴方は本当に立派な騎士ですね」

決意の言葉に、神子は含みをもたらす言葉。

「だからこそ僕は貴方を疑問に思います」

見開かれた琥珀色。その双眸は月明かりのような冷たい光を映し出す。その全てを包むような、それで居て突き放すような冷たい瞳に彼の言葉もよく似ている。魔に魅入られたようにランスはその言葉に耳を傾けるしかなくなった。

「アロンダイト卿。僕は神子です。人を救うべき立場の人間です。それでも僕は多くの犠牲を肯定しなければならない立場の人間でも

あります。僕に求められているのは犠牲を上回る救済。最小限の犠牲で最大多数の幸福を実現させるのが僕の役目です」

博愛を義務づけられた役職に据えられた子供。それでも彼はまだ幼い。そんな子供に背負わせるにはあまりに重すぎる荷物。そんな重荷を抱えながらも彼はまっすぐ顔を上げ、しっかりとした口調でそれを言い切る。

「仮に僕の中に深い葛藤があったとしても、僕は見捨てなければなりません。ルクリースさんも、フローリプさんも……救える力があっても僕は彼女たちを救えません。僕は彼女たちを諦めた。フローリプさんも、もう長くはありません。どうにかする方法を知ってはいても、僕は僕の役目と考えのためにこの件に関してどうすることも出来ません。それでも勿論後悔はします。悔いてもいます。それでも僕は割り切っている。犠牲を肯定する以上、僕には前を、上を向いていなければならない義務がある」

「……ここの戦いが終われば、大きな戦が始まります」

未来を見据える瞳は、それは避けられないことだと此方に訴えかけてくる。タロックをカーネフェルから追い出すだけでは神の審判は終わらない。カードというものがある以上、何度でも侵略者は現れる。今回の戦は殺すか殺されるかの泥沼だ。国の上層部にカードが生じてしまう以上、この戦争は世界を巻き込む。

「それまでにアルドールには持ち直して貰わないと……国も民もついてこない」

親しい者が死んだくらいで毎回毎回あんな風になっていてはいけない。ずっとあんな情けないままで居られたら困るのだと神子は言

う。そう語る彼の顔は僅かに困惑しているようだった。

「イグニス様……」

「正直な話……僕もあんな彼を見たのは初めてで。なんて言葉を掛ければいいのかわからないんです」

彼を奮い立たせるために、わざと傷付けるようなことを口にした。それは彼のためだ。それでもそれが彼にはちゃんと伝わらない。それがもどかしいと神子は溜息。

「言葉って難しいですよね。傷付けるのは簡単なのに、どうすれば救うことが出来るのか……」

「……それならアルドール様の傍にいてあげてください。今はきっと……それが一番心強いと思います」

ルクリースのように、いつも彼の傍にはイグニスがいた。アルドールが誰より深く信頼し、心を預けている相手。それはこの神子以外にはいない。たぶんそれだけで彼は今より救われるのではないか？それが自分には無理でも、この神子ならば……

「……彼は貴方に傍にいて欲しいはずです」

「……また、その言葉を聞くとは思いませんでした」

驚いたようなイグニスの目。

「え……？」

「……いえ、何でもありませんよ。そうだアロンダイト卿。同じ言葉を貴方にお返ししますよ」

聞き返すも、柔らかい笑みに流される。

「……セレスタイン卿、いろいろありましたから、凹んでるんじゃないかと思いますよ」
「あいつが……？」

その言い方ならば彼は何があったのか知っている。それでもそれを簡単には話してくれないだろう。神子とあいつは険悪でも、そこには漠然としたルールがある。口ではどんなに言い争っても、相手を行動で貶めることはしない。二人ともプライド高い性格だ。ある意味で互いを尊重しているとは言えるのか。言うなれば、忌み嫌いあってはいるが似通っている箇所があり、深く理解し合っているとも言えるのだろう。

もしかしたら俺よりも、あいつの本質をイグニス様は見抜いているのかも知れない。

これ以上彼の話題に貴重な時間を割くのも億劫、そんな風に頭振り神子は話の流れを引き戻す。

「……でも、貴方の言葉は有り難いですがそれは出来ません。暫く道化師は僕を狙ってくる。僕が彼の傍にいれば、彼まで余計な危険に遭わせてしまう」

話の本筋はあくまでカーネフェル王アルドール。それ以外は些細なことだと彼は言う。彼を失うことはカーネフェルにとってもシャトランジアにとっても痛手だと。そのための策を講じなければと神子は顔を上げた。

「……明日の即位式を最後に、僕は彼から距離を置きます。勿論彼への支援は続けますし必要ならば僕の部下も送ります」
「……それでは、イグニス様は」
「彼も、いつまでも僕だけじゃ駄目なんです。彼は王になるんだ

から」

彼を強く想っていることは此方まで届くのに、敢えて突き放すようなその言葉に戦慄を覚える。これがたかだか１４、５の子供の言葉か？

「アロンダイト卿……僕が道化師を倒すまで……彼をよろしくお願いします」

カードの強弱。前提条件としてまずそれはあり得ない。イグニスはコートカードとはいえそれはＪ。道化師との間にはＱとＫを挟んでいる。幸福値の差は歴然。強弱で言うなら圧倒的に不利。ルールとしてはまず勝てない相手。いくら彼が優れた数術使いなのだと言っても、その言葉を信じることは出来なかった。

いくら才があっても運に見放されれば勝てる勝負も勝てなくなる。世界は非情。どんな努力も才能も、時に全てが無意味に変わる。

「お言葉ですが、コートカードと言えど相手が道化師では……」

「大丈夫ですよ策はあります。それに僕もいつまでも彼だけではいけません。僕には頼り甲斐のある部下が大勢いますから」

にこりと満面の笑みを浮かべるのは此方を安心させるためではない。これ以上文句を言わせないという脅迫だ。

「……削れるところまで、削ってみます。僕では無理でも、アルドールがあいつを殺せるくらいの所まで幸福値を削ります」

ルール上殺すことは出来なくとも、勝敗を分けるのは幸福値。道化師の幸福値をアルドールの所まで削ることが出来たなら、Ａはそれを討つことが不可能ではなくなる。理論上はそうだ。それでも

最低幸福値を与えられたAの領域まで最高幸福保持者である道化師を落とすのは並大抵なことではないはず。

「……イグニス様、何故貴方はそんなにも……」

わからなかった。どうしてそこまで彼のために尽くすのか。この少年の寿命はそう長くはない。自身もそれを覚悟している。その上で躊躇いもなくこんな子供がその犠牲を受け入れている。

神子は騎士とは違う。騎士になったのは自分の意思だ。家が少なからず関係しているとはいえ別の生き方もあった。逃げる方法はあった。それでも神子は違う。誰でもなれるものでなければ逃げる方法もない。選ばれたら最後。生き方から全ての自由を奪われる。強要された生き方が求められる役職だ。

自らの犠牲を前提に、イグニスは話をしている。騎士でもない。主などいない。言うなればそれは世界だ。そんなわけのわからないもののためにどうしてそこまで尽くせるのだろう？自分は一つの国で精一杯だというのに。

「……アロンダイト卿。貴方がアルドールを王と呼ぶのと同じですよ。これが僕の償いなんです」

その言葉にはっとする。此方を見つめる神子の目は、癒えること無い悲しみを抱いている。その目をランスはよく知っていた。

「……昔、僕には大切な人がいた。僕はその人を守ることが出来なかった。僕が死なせたと言っても過言ではないくらい……」

償いという言葉がすんなりと溶け込んでくる。その亡くした誰かのために、彼は生きているのだろう。

「これはその償いなんです。僕は僕よりアルドールが大切です。国のこともありますが、彼を死なせたくないのは確かです」

神子としてだけではない。人間として彼を死なせたくないのだと彼は言う。神子としての役目と彼の友人としての思いが同じ方向を向いているからこそ出来ること。だからこそより強く彼はいられるのだ。立ち止まらないし迷わない。これが逆方向ならば人は迷い身動き一つ取れなくなる。

「……貴方は、少しだけ僕に似ている。昔の僕に」

イグニスが目を伏せ笑う。

「貴方は世界がたった一人だけのものだと思っていませんか？」

彼は問いかけてくる。騎士としてではなく、人としてのお前の心は何処にあるのだと。

「昔の僕はその外側がどうでもよくてそれを省みることもありませんでした。貴方が僕と違うところは、その外側を何の見返りも無しに本当に大切にし守ろうと思えること」

自分は違う。その外側を愛することなど出来なかった。常に憎悪していた。外は敵だとそう頑なに心を閉ざしていた。だからそうならずに居られることに感嘆さえ覚えると神子は言う。

「でもそれはたった一人のため。その人が大事にしていて、守ろうとしていたものだから。その遺志を継ごうとしている。その一人を失った後も……貴方は幻影を見ている。……昔の僕もそうでした」

貴方はアルドールを見ては居ませんね。静かな口調で諭すよう、そう告げられている。
神子と自分の違い。彼を支えられない原因はそこにあるのだと教えられているようだった。

「すぐにではなくてもいいんです。いつかアルドールをアルドールとして……見てやってくれませんか？」

頼み事というよりは、願い事を言うような……悲しい響きがそこにはあった。それだけそれが難しいことだと理解した上で、神子はそう頼み込んできている。
自分は彼の傍には居られない。自分の代わりに彼を理解して支えてくれる人間が必要なのだとそう言うように。

「彼は先王に似ているところも、似ていないところもある。一人の人間です。貴方がそんな風に変われたなら、きっと彼の支えになれるはずです。そしてそれは、貴方にとっても支えに変わることかと思います」
「……変われるでしょうか、俺は」

先読みの神子は是とも非とも答えない。代わりに別の言葉を口にする。

「昔の僕は何時までも幻影を追い求め……取り返しのつかない罪を犯した。僕はまだその後始末に追われている」

貴方にはそんな過ちは犯さないで欲しいと訴えられる。そのためにもと神子は言う。
お前が生きているのは過去ではなく今なのだと彼は俺にそう告げている。

「自分の心を貴方はもっと大切にしてあげるべきだと思います。心に名付ける正しい名前を知らないと……人は道を誤ってしまうことがある。貴方は貴方をよく知らずに生きている。それは貴方の周りを、貴方の大切な人々を苦しめていることに気付きませんか？」

それが貴方の罪ですよと、俺は今イグニス様に糾弾されている。自分がどうでもいい。そういう姿勢は、そんな自分を思ってくれる人々を傷付けること。

そう言われて思い出すのはユーカーのこと。死に急ぐこんな自分のことを案じてくれる俺の従弟。考え方や生き方を改めようとは思わない。俺は騎士である以上、そういう風にしか生きられない人間だ。イグニス様もそれは解っている。だからこそ、人としての俺をこうして尋ねに来ている。

立場や役職はまず頭の中から捨て去れ。人として何を思う？大切な者は？出来る範囲で良い。自分の心を理解し、時にそれを省みてやれ。おそらく彼はそう言いたいのだ。

「……貴方が昔の僕と違うのは、世界の外側に自分を置いてしまっているところもですね。貴方は人としての欲がない。自らの幸福を願う心が、その欲が……貴方の中には欠けている」

「幸福……ですか」

「聖教会の教えに背くようですが、僕は人に原罪なんてないと思うんです」

神子は神子でありながら、自分としての考えを持っている。熱心な信者の耳に入れば問題になりそうな発言もこうして平気に口にする。彼は子供らしくはないが、人間らしくないわけではない。理由もない博愛も無償の愛もあり得ないとその顔には書いている。先程イグニスは自分とランスの類似点を挙げてみた。それは1人のため

に多くを守るということだ。
　それはそもそもの神子としては失格なのかも知れない。神子に求められるものは打算的ではなく平等に祈りを捧げる精神だ。それは自国やカーネフェルだけでなくタロックやセネトレアにも向けられるべき慈しみ。戦争に荷担するということは、それを拒むということだ。聖教会が掲げるは平等、平和それから正義。多くの神子は自国の平和を重んじるばかり正義が疎かになっていた。この神子は自国の平和、その均衡を崩してでも行動へ打って出た。そのためには犠牲は少なからず生じるだろう。しかし救われる命もまた少なくはない。
　自国の利益だけを求めるような人間だったなら信用は出来なかった。如何にシャトランジアがカーネフェルと協力関係にあるとはいえ、彼がシャトランジアの神子とはいえ、その役職だけでは味方だと受け入れることは出来なかっただろう。自分が彼を協力者として認めたのは、彼のその人間臭さだったのかもしれない。
　混血という彼の外見は、神懸かり的な美しさがある。しかしその中身は自分たちと変わらない人間なのだと思わせる彼の自我。そこから生じる言葉は人の胸を打つ。彼が唯綺麗事を吐くだけの機械ならば、誰もそれには従わないだろう。けれど彼は違う。時に平気で企み、人を陥れる策を練る。常時はその可愛らしい外見にそぐわない毒舌を吐いたりもする。かと思えば、友人との関係に思い悩む節を見せたりもする。

（アルドール様がイグニス様を気に入っているのはそういうところなのかもしれない）

　もっとも普通の人間からは程遠い立場にありながら、素の彼は何処までも人間くさい。彼の名前の前には役職の名が霞んで消えてしまいそうだ。
　人前では立派に神子を演じるこの少年も、一目のない今では掲げ

られた偶像に忌々しげな視線を送るほどだ。その内舌打ち所か俺が居なければ唾くらい吐きかけそうな気迫があった。その瞳からは、神への信仰心も畏怖もまるで感じられない。世界で最もそれに近しい立場でありながら、神も教会も道具程度にしか捉えていないようでさえある。確か以前に「神なんかクソ食らえ」とか言っていたような気もする。そんな真っ向から神を否定するこの神子が、説く教えは神への反逆。罪の意識からの救済だ。

生まれることは悪ではない。そこに罪などあるはずがない。その言葉は俺に僅かの光を与えるようだった。

「人は確かに罪深く愚かで救いようのない者です。それでも生まれることは罪深いことでない。生きていくことが罪深い。人は生きる最中に罪を犯してしまうもの。貴方の父が、貴方の母が誰であれ……貴方は貴方ではないですかランス様？」

先読みと名高い神子は、過去まで見通す力があるのか？何処まで知られているのだろう。胸の内を見透かされているようで、少し気後れしてしまう。

しかし先程まで人間臭さを醸し出していたこの神子は、真面目な顔つきになっていて……そうしているとその辺りの精霊以上に神々しく見える。ここまで神の使いを名乗るに相応しい人間はいないのではないかと思うような風体だ。

「先王も、セレスタイン卿も……そして他の多くの人々も。彼らが貴方を慕うのは貴方の血ではない。貴方が貴方だからなんですよ。貴方が人形みたいな顔をしていて喜ぶ人間は誰もいません。悲しむだけです。貴方の気付かない人としての一面。その素顔に彼らは惹かれているんです。だから貴方はそれを殺さないであげてください」

本当に勿体ない言葉だ。カードとして死ぬべきこの身にさえ、幸

福の在処を探せと彼は言う。生の長さに幸福は比例しない。いつか自分が策のために平和のために死ねと言うかも知れない。それを理解した上で、神子は言う。お前にも幸福になる権利はあるのだと。

「……イグニス様のお話は、俺にはどうも難しいです」

しかしこれまで剣として生きてきた自分がいきなり人としてどうのこうのと言われても、あまりにそれが漠然とし過ぎていて理解しがたいものがある。

「ええ。ですからそちらもすぐにではなくて構いませんよ。唯、貴方に聞いて欲しかっただけです。これは僕の自己満足ですよ」

世の中にはどうしようもないことも、やはりあるものですからと神子は小さく笑った。

言わなければ後から自分が後悔しそうだから、その自己満足のために言ったまでだと彼は言う。

「でも、本当に些細なことだと思いますよ。遅かれ早かれ人は誰でも死にますから」

だからこそ、後悔ないよう今を大切にして欲しいとも思うんですよと神子は最後にそう言った。

＊

「俺の……今、か」

教会からの帰り道、神子に言われた言葉が何度も思い起こされる。自分にとっての今とは何だろう。これまでは敬愛する王という道

しるべがあった。アルドールという少年はまだ王としては未熟も未熟だ。それを支えていかなければとは思う。けれど今の彼は道しるべには成り得ない。となれば全体の指揮を執るのは自分かイグニスかということになる。

これまでは従ってくればそれで良かった。けれど今はそれでは駄目だ。何時終わるとも知れない戦争。明日から始まるのは背水の陣。どんな小さなことが綻びになるかわからない。プレッシャーはある。しかしもうどうしようもないのではないかという思いもある。ここから巻き返すことなど本当に可能なのだろうか？自分は何処まで何時までこの国を見つめることが出来るのか。あの人が望んだような国が出来上がっていく所をこの眼に焼き付けることは叶うのか？わからない。そんなに簡単に国が世界が変わるとは思えない。

（だとしたら俺にとっての今は、そんな理想論ではないわけだ）

有事があれば戦って。それがなければ剣技を磨いて。そうして都貴族に顎で使われて。本当に何のために頑張っているのか解らなくなりながら、囲いが増えて頻繁には会えなくなったあの人に仕事の報告をして。あの人の話を聞いて、それでまた俺が笑わせられる。本当にほっとする。あの人は。あの人は俺を憎んでも良いはずなのに、本当に俺を我が子のように可愛がってくれる優しい人だ。それが俺の今だった。無論今はもうない。

あの人が俺の日常から欠けるなら、残されるのは砦での生活だけだろう。部下の教育が主で剣の扱い方を教えたり、時折戻ってくる従弟を窘めたりだ。

ユーカーは常時砦にいるというわけではない。むやみやたらに危険な任務ばかりに飛びついて、やれ海賊討伐。やれ山賊討伐。生温い仕事は好まない質で、すれ違うことも多かった。

アルドール様との出会いで、あの人の生存の可能性は潰えた。しかし彼が取り戻してくれたのは、ユーカーとの繋がりだ。

あいつの文句聞き流し、あいつをからかって遊んでみたり。文句を言われながらも無理矢理料理を食べさせてみたり。何処かですれ違っても仏頂面で適当な答えしか返してくれなくなっていたあいつが、感情を表に出すように戻ったのもあの方のお陰だ。それはまるで昔に戻ったような錯覚だ。つまりは全てに絡んでくるのはアルドール様。アルドール様が何時も通りになってくれたなら、ユーカーもまたすぐに元通りになるだろう。

逆を言えば、ユーカーが感情的な姿を取り戻せば、それに釣られてあの方も感化されて元通りになるかもしれない。というか、俺とあいつはその恩返しのためにもアルドール様を今救い支えるべき役回りであるはずだ。

「……俺は本当に、最低だ」

あいつのためという考えから始まったことが、頭の何処かで置き換えられる。結局は仕事のことで頭がいっぱいになってしまう。何処までもあいつを利用することしか考えられない。

（俺は何時からこんな風になってしまったんだろう？）

王への忠誠が強まれば強まるほど、俺はあいつを蔑ろにするようになってしまっていた。俺はあいつに騎士を押しつけて、あいつ自身を殺してきたのだ。それはあいつの兄として、最低な行いなんだろう。やはり俺は人間としても最低だ。

昔はもっとちゃんとあいつを思いやれていたはずだったのに。今では「俺のために働け、そして死ね」とか「死ぬまで扱き使ってやる」とか言外に言っているようなものだ。だからこそあいつはあんなに追い詰められている。

自分としての自分と騎士としての自分。そんなもの両立できるはずがない。だから一方を殺して捨てるしかない。俺は今まであいつ

という犠牲を肯定してきた。あいつはいろんな大切なものを混在させてそれでも自分を守っていたのに。

王もアスタロットももう死んでしまった。となればあいつが守ろうとする者は俺しか居なくなる。その思いを利用しようと、きっと俺は考えていた。どう利用すればそれをより良く最大限利用することが出来るかと。騎士としての俺はそこで心が痛まない。それで傷つくのは人としての俺の心だ。……話せるはずがない。こんな俺には。

俺とあいつは別の人間だ。それを俺はちゃんと認識できていたのか？心の何処かで頭の何処かで、自分の一部だとか片腕とかそんなものだと思ってはいなかったか？

同じように生きるのが当たり前。同じように死ぬのも当たり前。俺は一度だってちゃんとあいつの話を聞こうとしたことがあったのか？俺は押しつけすぎてはいなかったか？

それであいつが傀儡になったのを見て、それに不満を覚えるなんてあまりに理不尽ではないか？

俺はあいつを心配する顔で、何とも思っていないんだ。騎士としての俺を優先させると言うことは、俺が感じたあいつへの心配も全て切り捨てると言うことなのだから。

自分の心と見つめ合えと言う言葉はなかなか重い。考えたこともない。気付こうともしなかった、自分の醜い部分を突きつけられる。

イグニス様は俺が多くを守ろうとしていると言ったが、そうではなかった。一番身近な人間を守れていなかった。人を傷付けることに慣れた俺だ。そんな俺がアルドール様を誰かを支えることなど出来るはずもない。

（思い出せ。……思い出すんだ）

唯何となくの腐れ縁。そんな風に馴れ合って、気まぐれで弄ぶだ

け。それで入れ込むだけ入れ込ませた後、道具としての利用価値で物事を図るなんて関係、何かがおかしい。
昔はそんな無意識下の打算もなく、ちゃんと接していられたはずだ。
それをちゃんと思い出せたなら、俺は正すことが出来る。もっとちゃんと上手くやれる。不用意に傷付けたりしない。悲しませたりしない。大切だったのは嘘じゃない。本当だったはずなんだから。

＊

フローリプの部屋の前。ランスの姿はない。代わりに何人かの兵士が居たが、お疲れと片手を挙げれば下がっていった。ランスも忙しい奴だから、或いはあんなあいつを見てられなかったのか、ここに留まりはしなかったのだろう。襲撃は開戦まではあり得ない。神子のお墨付きだ。それでも俺がここに居たのは俺の自己満足ってだけ。今こうしているのもそれと同じだ。

「よう、ボケ王。起きてっか？」
「寝てます」

ノックのそこそこに扉に手を掛けるが施錠済み。ユーカーは軽く舌打ちしながらそれを者ともせずに片手で解錠。
室内の少年王はやはりまだ起きていた。満足に寝ていないのはこいつも同じだ。生憎俺はこういう時に自分だけぐーすか眠ってられるほど単純な神経と精神を持ち合わせてはいない。片手に乗せていた盆を机へ降ろし親指でそれを指さした。

「アルドール、少しは食え」
「今はそんな気になれない」

食材に謝れと殴り飛ばしたいところだが、このガキは暴力に従うような奴じゃない。言葉で言いくるめなければ駄目なタイプだと、ここ暫くの付き合いでユーカーも学んでいた。

「今日という今日こそ食え！この俺が作ってやったんだから何が何でも食え。食わなきゃ殺す」

「う、うわぁい……いただきます」

要は押しだ。こいつはへたれだ。基本的に押しに弱い。それでも頑固なところがあるから譲らないところは絶対に譲らない。それでもそこに触れなければある程度動かすことは難しくはない。

明日は即位式だというのに倒れられては困るのだ。希望の火が灯る前に皆のやる気が消し飛んじまう。

「げ」

黙々と食を進めていたアルドールが、突然何やら嫌そうな声を発する。何か好き嫌いでもあったのだろうか？これだからガキは面倒臭いと視線を向ければ、複雑そうな表情だ。

「げってなんだよ失礼な」

睨み付ければ渋々と、アルドールが理由を零す。

「ユーカーの料理の癖に普通に美味くてなんか腹立つなぁ」

「お前は俺を一体何だと思ってやがんだ！！」

釈然としないと言わんばかりのその物言いに此方が釈然とするわけねぇだろうが。怒鳴ってやりたいがここは病人もいる。出来るだけ控えめに怒鳴ってやった。

しかしこのガキ全然こっち見ていねぇ！！眠りこけてる妹を見ている。かと思いきやぱぁと明るい表情になり此方を振り返る。

「あ、フローリプが心なしか口元が笑った！もう一回頼む！お前が大笑いさせてくれればフローリプが起きるかも！」

「本当にお前は俺を何だと思ってんだ馬鹿っ！俺は道化じゃねぇっ！やってられるか！」

「王な俺にここまで言うんだ。もう今日から爵位剥奪して宮廷道化にでもジョブチェンジしてみるとか？」

「誰がやるかっ！！」

こちとら地方出身とはいえ地方貴族だ。辺境伯の跡取りだ。それを今日からお前道化なとか言われて誰が喜ぶか。俺にもプライドというものくらいはある。余裕である。

「でも意外だな。ユーカーって意外と何でも出来るんだ？料理なんてランスの担当だと思ってた」

「まぁ、俺は凄ぇから当然だ。もっともやりたくねぇことは死んでもやらねぇけどな」

「うん、ありがとう」

「は？」

「何て言うか、ありがとう」

「意味わかんねぇんだけど」

わからないなら別にいいよと奴はくすくす笑い出す。馬鹿っぽい面してる割りには何だかんだで育ちいいよな。笑い方一つ取ってもそうだ。ここで大口開けてげたげたとかがははははとか笑い出してたら一発殴っていたかもしれない。

こいつが笑うことで、少しは場も明るくなったような気がする。これじゃほんとに俺が道化の役回りみたいでなんだかなぁとは思っ

た。

「ユーカー相手だと、何か吹っ切れるというかなんていうか。楽に話せるんだよなぁ。意外と癒し系だったんだな」

「俺の癒し力を舐めるなよ。この俺に癒せねぇ者なんてあのクソ神子と狂王くらいなもんだ」

「あ、イグニスは無理なんだ」

「ああ。まず俺に癒す気がない」

「ああ、そういう意味。あれでもイグニスも女の子なんだし少しは優しくしようよ」

「女だからってだけで誰彼構わず優しくされると思うなよ。俺は基本的に誰にでも厳しく行く派だから」

「そんなんだからモテないんだよユーカーは。ランス見習えよ」

「阿呆か。俺がモテねぇのは実家から勘当されてんのと目の色が原因に決まってんだろ」

「あ、そう逃げるんだ」

「てかおまえ馬鹿か？今のは違うだろ。今のは調子に乗るなとか比率真逆だろとか突っ込む所だろ？この俺が敢えてボケに回ってやったってのに気の利かねぇ奴だなおい」

「自虐ネタですか」

「ちっとはレベルが上がったな。やれば出来るじゃねぇか」

軽く背中を叩いてやれば、大げさに痛がりやがる。その反応に俺も思い出す。こいつは背中をフローリプに刺されたんだ。一応神子が回復したとはいえまだ違和感は残っているのだろう。そのくらい深い傷を負ったんだ。

「そういやお前もまだ病み上がりだろ？いい加減寝ろ」

「でも」

「……俺は数字は見えねぇが、耳は割と良い方だ。数値の変化が

あったなら、気付いてやれる」
「え？」
「何かあったらすぐにわかる。その時はすぐに叩き起こしてやる。だから寝ろ。もう面倒臭いからお前もここで眠ちまえとっとと。これ以上うだうだ言うなら昏倒させてやろうか一発殴って」
「お、お休みなさい」

脅してやれば、アルドールも寝台へと潜り込む。妹とはいえ元は他人だ。同衾に抵抗があったのか。馬鹿かこいつは。こんな状況でやましい気持ちになんかなれるような度胸お前にあるわけねぇだろうが。お前基本へたれだろ。
やっぱり疲れていたんだろう。すぐにあいつも眠ったようだ。部屋の戸締まりの確認をし施錠し外へ出た。

「ったく手間かけさせやがって」

これで明日は少しはまともな顔になるだろう。こんな面倒な役回り、どうして俺が引き受けなければならなかったのか。一言で言うなら義理だ義理。

「俺が過労死して死んだらお前のせいだからなランス」

その時は墓の前で手合わせるぐらいはしろよと独りごちてみたが、少し虚しい。

「ありがとう……か」

アルドールのその言葉に、数時間前のやり取りを思いだしてしまった。

ランスの馬鹿は俺と話しているときに、誰がいないかくらい気付いていたはずだ。それなのに平然と、あんな顔で礼を言う。どうかしてるよ、あいつ。

ルクリースとかいうあの女。ちょっとはお前に気があったんじゃないのか？そこそこ気が合ってる風に俺には見えた。綺麗な青目同士、お似合いだってな。

少しは驚くなり悲しむなりしてやれよ。そういうのは俺がするよりお前の方がきっとあの女は喜ぶだろう？

（その程度なのか？）

騎士の鏡とか呼ばれる男が。そこまでお前は欠けているのか？指針があればそれでいいのか？主が王がいれば……それでいいのか？本当に……

ランス、あいつは欠けている。傍で見てきた俺がそれは一番理解している。あいつは立派だから、立派すぎて人間らしさに欠けている。それはあいつが天然だからとかそういう問題ではなく、あいつは自分をそういう風にしようと頑張っていた。自分を律して頑張ってきた結果だ。それは俺には真似出来ねぇ生き方だ。だから素直に尊敬している。凄いと思う。それでも時々、本当にそれで良いのかと思うときがある。

基本あいつは良い奴だ。欠点を探すことの方が難しい。その位良い奴だ。悪いところって言ったら料理がグロいところとなんだかんだで俺の扱いが酷い所くらいなものだろう。

そうだ、あいつは酷い。基本俺がどうでも良い。俺は人間箸置きだろ。あれば使うが別になくても困らない。その程度さ。

（もし俺があいつ守って死んだとしても……お前はきっと俺の墓の前で礼なんか言うんだろうな）

そうだ。その程度だ。俺なんか。

（その程度でも……俺は）

俺はもう駄目だ。多分駄目だ。新しく何かを大切に思うことなんか出来ない。だけどお前は違うだろう。お前はそんな生き方に縛られる必要はないんだ。

そんなに何かに追われるように過去に縛られて。どうしてお前は生き急ぐ。お前は俺とは違うじゃないか。お前は何も悪くない。勝手に罪を被ったような面をして、自分犠牲にして楽しいか？そんなことをするくらいなら、あることないこと全部俺に押しつけてしまえばいいんだ。八つ当たりでも何でも大いに結構。それでお前が今より楽になれるなら別にそれでいい。

アスタロットの声を聞いてから……俺は前ほど焦燥感が無い。絶対に生き残ってやるだとか。そういう気持ちが薄れて宙ぶらりんの気持ちが浮いているだけ。唯漠然と……どうしていいのかわからない。

彼女は俺に自由に生きろと言ったけれど。俺はそれがよくわからないままなのだ。俺は今も囚われている。そしてそれを望んでいるんだ。失われたからってはいそれじゃあ次の女って切り替えられるほど俺は人間出来てねぇし人間止められねぇ。

アスタロット。俺が最後に望むのは……やっぱり彼女だ。だけどそれはランスが死んでからの話。俺じゃお前を殺せないよ。カードとしては殺せるのだとしても。

（この手でお前を殺したら。お前も俺の過去に変えてしまったら……）

最後の最後で俺は彼女を選べなくなってしまう。抱え込んではい

けない。これ以上何かを背負ったら俺は身動きが取れなくなる。こんなこと、今まで無かったのに。死なんか何処にでもありふれている。それをいちいち悲しむなんて馬鹿げてる。そうじゃ、なかったのか？

あんなちょっと数日話した程度の女の死を、未だ振り払えない俺がいる。たった数日だ。赤の他人だ。その数日の付き合いで、こうなっているんだ。それがお前なら俺はもう立ち上がることも出来ないくらい沈んでしまう。

いや、違うのかもしれない。俺はあの女の死が悲しいんじゃない。俺は驚いているのだ。そして感銘を受けている。

ルクリース。どうしてあんなことが出来る？たかが姉弟。それもアルドールは自分のことを覚えていない。そんな相手に……命を賭けてあいつは守りきったのだ。

（俺には、同じ事が……出来るのか？）

俺はランスのために。俺の兄のために俺はあんな風に命を投げ出せるのか？俺はそこまであいつを大切に思えるのか？思えているのか？

口だけじゃ駄目だ。俺はちゃんと行動しなければならない。彼奴を死なせたくないなら、俺は本気であいつを守らなきゃいけない。

（くそっ……道化師の野郎）

植え込まれた疑いの種。それはまだ胸の奥に息づいている。それを取り去りたくて心臓を抉り出してしまいたいくらい。

なぁ、ランス……いっそ、お前が殺してくれないか。

そうすりゃもう何も考えないで済む。彼女にもまた会える。それで終わりだ。もう何も思い残すことはない。　だけど俺はＪであいつは？。カードがそれを許さないなら……やっぱり俺は戦うしかな

いのだろう。
お前が俺より先に死んだなら、俺は俺の願いのために殺して生きる。もし最後の二枚が俺とお前なら、俺はお前と戦うだろうか？そんな日、来るわけがない。いや、来ないで欲しい。だからお前と戦う日が来る前に、お前のために死ねればいいな。俺がその程度だって、その方がずっと……たぶんそれは、その方が幸せなことなんだと思う。
だって俺はあいつを殺してまでアスタロットに会いたくない。あいつを殺した俺はもう、俺ではなくなってしまうような気がする。それなら俺は生きて死ぬ。いつか人間なんかみんな死ぬ。だから死にたくないとはもう言わない。死ねば俺は今度こそアスタロットに会えるんだ。だからむしろ死にたい。でも死に急ぎはしない。彼女に話す土産話は多いに越したことはない。それも彼女の願いだ。
そうなった時、新しく何かを大切に思えない俺は、必然的にあいつのサポートのために人生命を費やすことになる。
その間にせめてあいつの死にたがりだけは直してやりたい。そういう悪いものは全部俺に押しつけてくれて良い。死ぬのは俺で、生きるのがお前。それでいいじゃねぇか。
俺はお前に夢見ている。希望を見ている。俺には見られないものをお前なら見てくれる。俺は限られた中を生きているが、お前はそうじゃない。俺が守りたいのはお前のそんな可能性だ。俺は託している。俺にはもうどうしようもないことを。
本当に昔から一緒だったから、近すぎて境界が見えなくなっている部分がある。あいつを見ていると、もう一人の自分を見ているような気持ちになるんだ。もし何かを間違えたなら俺たちは逆の場所を生きていたかもしれない。例えば兄弟である俺の親父とあいつの親父が逆だったなら。その時俺はあいつとして生きていてあいつは俺として生きていたんだろう。
俺は俺にない物を持っているあいつに憧れている。あの青過ぎる程青い目がその象徴だ。目の色一つそれだけで、俺の人生はここま

で変わった。今更どうにもならない。それは仕方のないことだし、俺は俺を否定はしない。だからあいつを妬んだりはしない。
だから俺があいつを見る目は何というか、なんだろうな。そうだ、憧憬か。あいつが何もかも上手く行って幸せに生きて暮らしていけるんなら、俺はそれでいい。
俺の幸せが必ずしもあいつのそれには結びつきはしないが、俺は履き違えている。でもそれでいいんだ。少なくとも俺にとってあいつの幸せが俺の幸せだ。

＊

「ユーカー……？」

部屋の扉を叩く。返事はない。扉を開ければ鍵も掛かっていない。不用心というか何というか。しかし部屋の何処にもあいつの姿はない。

「もう遅い時間だって言うのに……」

全く何処に遊びに行ったのか。一瞬でもそう思った自分を心から恥じる。
アルドール様の居る部屋へ足を向ければ、その部屋の前にユーカーが居た。壁に背を預けて目を閉じている。
疲れて眠ってしまったのだろうか。それでも気を張り巡らせている。ここで殺気の一つでも発してやればすぐさま飛び起き斬りかかってくるはず。
イグニスへ様の報告の折、護衛は他の兵士達に頼んでいた。主の側を離れるのは不安だったが、眠っているあいつを叩き起こすことは出来なかった。
それが何だ。言ってもいない。命令なんかしていない。別に俺は

こいつの主じゃない。あくまで同僚だ。

「……お前は、本当に……何処まで馬鹿なんだ？」

馬鹿は俺だ。こいつにこうさせてしまっているのは俺なんだ。この気位の高い気難しい男がなんだこれは。何処の忠犬だという話じゃないか。

俺は差ほどお前を理解していないのに、こいつと来たら頼みもしない仕事を引き受ける。そこに見返りなんてない。あるとするなら、それが俺にとっての何かに繋がるかどうか。こいつは俺の幸福を願っていてくれている。カードの願える願いは一つだけだからこそ、その他の願いはこうして行動しなければ叶えられない。こいつが願ったのは俺ではないのだろう。それでも俺を見捨てず切り捨てず、こうして支えようとする。

こいつは何時もそうだ。やる気がないだけで、俺には出来ないことを平然とやってのける。その癖いつも俺を立て、だらだらと適当に時間を送り、負けた気になっている。

そんな従弟の姿にふざけるなと殴りかかりたい気持ちと、もういいんだと優しく告げてその髪を滅茶苦茶になるまで撫で回してやりたいという気持ち。

（……そういう、ことだったのか）

俺の中にも確かに俺が居る。騎士として以外の俺が居る。騎士の俺はこいつを心底嫌っているのだ。こいつは俺より優れている。全てにおいて才能がある。それは王からの信頼を根刮ぎ奪いかねないという恐れ。それでいてわざと才能を枯らし俺に負けを演じるこいつにプライドを踏みにじられたような思い。その俺はこいつが何処かで死んでくれないかとさえ思っているのだ。

けれどこいつの従兄としての俺は違う。俺を家族として慕ってく

れるこいつの好意は素直にありがたいと思うし、こいつが本当に俺を大切に思ってくれていることには涙さえ出る。
一緒にいれば楽しいし、からかうのも面白い。俺が何をやっても見放さず、逐一ボケを拾って小マメにツッコミを入れてくれる付き合いの良さも好きだ。何もかも適当なこいつの世話を焼くのが好きだ。才能を認めている振りをして、それでも基本駄目な弟分を、やれやれとか言いながらのが構うのが好きだったのかも知れない。
でもそれは基本的に俺がこいつを見下さなければ出来ない芸当だ。俺は確実にこいつを格下だと見ていたのだ。そうすることで俺は、こいつと良好な関係でいられる。
しかし……だ。悔しいが、こいつは天性の才を持っている。俺より後に剣を覚えた癖に、あっという間に俺を追い越し飛び越えた。幼い頃に打ち負かされた屈辱は、今だって忘れられない。だからこいつにだけは負けたくないという気持ちは何時でも持っていた。でもそれは誰だって同じはず。負け続ける人間の気持ちを想像するだけでも耐え難い。そんな相手を再び打ち負かしたときの爽快感と言ったらなかった。
だからどうしてお前はそんなに適当なんだと言いながら、心の何処かでは安堵していた。それでも物足りなさを感じる俺は本当に自分勝手だ。負けたくはない。それでも常にギリギリの瀬戸際の勝負が出来る場所にはいて欲しい。それでずっと俺に負け続けて欲しい。
自分が負けず嫌いだとは知っていた。それでも今の今まで自分がここまでプライドの高い人間だとは思わなかった。ここまで薄汚い心を持っていたとは知りたくなかった。

「お前はどうして……」

どうしてこんなろくでもない俺を守ろうだなんて、命を預けてやるだなんて平然と口に出来るんだ？俺なんかの幸せを願ったところで、お前は何も得られやしないのに。どうしてこんな俺なんかをま

だ慕ってくれるんだ？お前を全く省みないこんな俺をどうして？

殴れもしない。撫でられもしない。抱き締めたりも出来ない。その腕を首をへし折ってしまうかもしれないから。

それでも涙は溢れる。俺は後悔している。今までの俺と今の俺に。

変われるだろうか俺は。

償いに生きることで、更に償うべき相手を作ってしまった。それでもその相手はそもそも俺に償いを求めない。恨み言さえ口にしない。だから今まで気付けなかった。こいつは最初から俺を許してくれていた。怨みなんて概念俺との間にはあり得ないと言わんばかりに。

「ごめん……ユーカー」

劣等感なんてどうして抱いてしまっていたのか。それは何時から？お前の方があの人に愛され可愛がられていたように感じていたからなのか。

最初はこんなものではなかった。唯、……唯楽しいだけだった。そのはずなのに。

0，1：Respice，adspice，prospice．（後書き）

ヒロインまだー？野郎共の友情から始まるなんて聞いてねぇぞと言う方すみません。しかし友情からさくっと一目惚れのヒロインに流れる薄情者の男を描くためには最初に友情書かないけないわけなので。

６章でいう恋愛三角関係はアルドール＆ジャンヌ＆ランスがメイン。裏恋愛三角だとアルドールとイグニス（もしくはギメル）とジャンヌか。春の愛憎祭り（パン祭りみたいに言うな）万歳。舞台は今のところ８月っていう夏だがな。

0，2：Fiat eu stita et piriat mundus.

暗い表情で闇に消えゆくように歩き出した騎士。その背中を見送るイグニスに、闇より声が投げられる。

「良かったんすか？」

振り向けば闇から輪郭を徐々に表す少女が1人。彼女は部下の中でもそれなりに腕の立つ数術使いの1人。風にそよぐのは、春を思わせるような薄桃色の髪。それは彼女が純血ではないことの証明そのもの。

「？はカーネフェルには……アルドールには必要なカードだよ。そのためにも彼が唯の駒では困るんだ」

「マリアージュ、君はクラブの本質を知っているかい？」

「何すか？ハートなら知ってますけど」

あんなの農民か男の象徴物じゃないんですかと見下すように少女は嘲笑う。それを窘めるようにイグニスは答えを告げる。

「情熱さ」

「情熱っすか」

さしたる興味も無さそうに、彼女は言葉を鸚鵡返しに繰り返す。

「そんなもの何の意味が？私にゃ、よくわからないっすよ」

「そう言うだろうと思って君をここに派遣したんだ。しばらく僕の代わりに彼らのサポートは君に任せる。セネトレア慣れしてる君

ならカーネフェル程度の揉め事なら何とでもなるだろう？」
「そりゃそうっすけど、この国ほんと何もなくてつまらないったらありませんって」
「そう言うだろうと思ってそんな君にぴったりの任務を用意させて貰ったんだ」
「なんすか、これ？」
「最近死んだばかりの少女の情報。これを使って君は裏方からサポートをしてもらう」
「お言葉ですけど、めんどくさいっす神子様」
「間違いなく泥沼になるね。君の好きな揉め事が起こる」
「マジすか神子様！それってあれってあれすか！？三角関係？！痴情の縺れ！？痴話喧嘩でドッロドロの昼ドラっすか！？やべぇマジやべぇ！！」
「君の働き次第に因るけどね」
「はーい！頑張ります！これでもかってくらいにやりますんで！」

僕の６番目の部下、マリアージュ。彼女は恋愛事に目がない。司りながら意味しない。矛盾した存在だ。外見は僕とそんなに変わらない年のに、中身は完全にあれだ。耳年増を通り越してもう何処かの家政婦的なポジションじゃないか？まぁそれも仕方ない。混血は基本的に外見と年齢が一致しないものだから。女性の年をひけらかす趣味はないけれど、少なくとも彼女が僕より年上だということだけは事実。実年齢より遙かに幼い混血の方が、有する力は大きいものだ。それだけの闇を抱えていると言うことなのだから。

「でもでもでもっす、ねぇ神子様。あんまり引っ掻き回したら、それはそれでこの国やばいんじゃ？」
「マリアージュ、種を植えるだけで花が咲くとは思う？」
「意味不的な」
「ああ、そうだよ。それだけじゃ駄目だ。綺麗な花を咲かせるた

めにはまずは豊かな土壌が必要だ。そのためには耕すことが必要だし、肥料も必要。水もあげないといけないね。まぁ、つまりはそう言うことなんだ」

一粒の種を落としたところで死んだら死んでお終いさ。死んでも実など結ばない。だからこそ、収穫のためにはやらなければならないことが幾らでもある。

「未来の修正っていうのはそう簡単な仕事じゃない。予言から世界を変えるためにはある程度の狂気も必要なんだ。今という概念を破壊するためにも」

「マジたりぃっす」

口ではそう言いながら、彼女もようやくやる気を出してくれたよう。情報を取り入れて、その姿を変えていく。彼女の数術は他のメンバーではちょっと真似できない。同じように見せることは多くの者に出来るのだとしても。情報との同化も進み、彼女はなるほどと小さく呟く。

「っにしても神子様マジ半端ねぇつかマジパねぇ。あの兄ちゃんこんな顔してたんすけど！イケメンが台無し的な！無駄イケメン的な」

「唯の飼い殺しの忠犬じゃ意味がない。歪みを生むのは人の狂気さ。未来を変えるためにもこれは必要なことだ」

あの騎士が、アルドールの命令を聞くだけの道具ならカーネフェルはお終いだ。だってアルドールは基本人に命令なんか出来ない。絶対に正しい命令なんか出来ない。王としての器はお世辞にもない。絶望的なまでにない。それは僕が保証する。

それでもアルドールは人を集める才がある。それを磨き上げ、掌

握することこそが彼に求められていることで、僕が裏から支えていくべきことでもある。
別に全ての国民から好かれろなんて言わない。彼には無理だ。それも僕が保証する。なら周りの使える人間だけでも好かれろ、人として。そして人として意見を気持ちをぶつけ合えるような関係まで構築できれば……それがより良い道へと繋がる。そうなったなら……変えられるはずだ、何もかも。

「……っていうかマリアージュ、その口癖まだ直らないの？違和感しかないんだけど」
「お、おほほほほ！嫌ですわ、ごめんなさい神子様。いやぁ、前の潜入先で演ってた人間がこういうキャラでこういう口調情報だったのでなかなかつい癖に」

ここしばらくセネトレアに派遣していたのがいけなかったのか。やはりあの国一回滅ぼすべきだな、うん。マリアージュは工作員としてはメンバー中1，2を争う力量だ。足での情報収集能力は彼女の右に出る者はいない。同じことを僕に出来ないわけではないけれど、支払う代償の重さを考えれば僕向きの技ではないことは確か。数術は出来る出来ない、それを越えた先に向き不向きという問題が横たわる。

「まもなくユリスディカもこの国に来る。最近加わったエフェトスはともかくとして君でも彼女のことは……君たちは知らないよね？」
「？１１？ええ。私は見たことありませんわ」
「？１１は？２に次いで特殊な役職だからね。本人も自分が運命の輪に組み込まれているとは知らないだろうよ」
「それはまた、おかしな話ですわね」
「ああ。代々そう言うものなんだ？１１は。彼女は常に正義で在

らなればならない。それを揺るぎなきものにするためには」

１１番目の切り札は、少々特殊な環境にいる。彼女が僕の部下であることは変わりないけれど、他のメンバーも彼女自身も互いに互いをまず知らない。

そんな二人が同じ場所での任務に就くというのは滅多にない状況だ。カードの表と裏が向かい合うようなもの。つまりはあり得ない。

そんなことが起きると言うことは、それだけ今が危うい状況なのだと言うこと。それは彼女も理解しているようで、マリアージュがごくりと息を呑む。

「それでも敢えて組み込むというのは？」

「指標さ、正義の」

「指標、ですか？」

「ああ。君たちに僕は残酷な命令を告げることがある。時に君の中の正義が揺らぐこともあるだろう。世界を憎み人を呪うこともあるだろう。それでも尚信じるに足るもの。それを示すのが彼女の役割」

「……神子様がそこまで言うだなんて、どんな子かちょっと気になって来ました」

任務が楽しみな理由がもう一つ増えたと彼女は言って笑う。しかしそれは今の外見にはそぐわない、もっと大人びた笑みだった。

「マリアージュ、今度の役は貴族令嬢なんだ。そこを忘れずにね」

「ふ、ふん！わかったわよ！」

どうやら情報の方もインストールが完了したようだ。彼女の髪の色は混血のそれからカーネフェル人の金髪へと変貌している。別にこれは視覚数術などではない。これが彼女の数術だ。

彼女は凄い。彼女の役作りは完璧だ。情報さえ与えれば外見人格、記憶さえも完全に模倣できる。上司への敬意も失われるほどに、今彼女は別の少女を演じている。
そしてもしものためにもう一つの台本を渡している。彼女をカーネフェルに置くのは、万が一のそのためでもあった。

「マリアージュ、……」
「レディの名前を間違えるなんて、失礼な男性がいたものね！私はエレイン！覚えておきなさい！」

長い巻き毛をリボンで括った、幼い姿の少女が吠える。
そう言ったきり背を向けて走り出す少女の姿に、イグニスも言葉を引っ込める。

「……本当に、ノリが良いね君は」

代わりに出てきたのはそんな言葉。大事な部下を死地へと送り出す上司に、こんな言葉しか言わせない。それが、彼女の優しさだったのだろうか。それに触れて、遅い溜息が口から漏れた。それに気付いて自嘲する。よくもまぁ、感傷になど浸れたものだ。
他の誰にその権利があっても世界にたった1人、イグニスという人間にだけはそれは許されないことだ。それは重々承知している。
入ってくる情報はどれもろくでもないものばかり。前回の審判とは大分状況が変わってしまった。先読みの神子とは名ばかり、全てを見通すことなどもう出来ない。ある程度の予測を立てのは計算だ。
如何に他人を犠牲にしながら王を生き残らせるか。簡単な話、神の審判というのはチェスのゲームそのものだ。そのゲームのおかしなところは元々手持ちの駒がないことくらい。だから駒を拾って育て、駒を配置しゲームに応じなければならない。その一つ一つが本当に生きている人間という駒だと思ってはいけない。それを哀れむ

のは僕の役目ではない。

「裏切って良い。裏切って良い。だから、どうか……裏切らないで」

願いではない。これは願いではない。唯の祈りだ。

心のままに生きてぶつかる分には構わない。それは大いに結構だ。問題はそうじゃない。心を押さえつけて、とんでもない後悔をしてしまうこと。そこから膨れあがる歪みは、とてもじゃないが正せない。なら初めからそうならないようにし向けるのが僕の仕事だろう。

セレスタイン卿は油断ならない爆弾であり地雷だ。とてもイレギュラーな存在だ。時と場合によっては、最悪の敵がもう一人増えてしまうことになる。それでも上手く飼い慣らすことが出来たなら、あれほどアルドールにとって心強い味方もいない。

そしてその鍵こそが、アロンダイト卿であり……11（ユリスデ）枚目の僕の切（イカ）り札。

この問題をどう片付けるか。それが次の難関へと向かう問題だ。あの山さえ越えられたなら、今度こそ変えられる、変えてやる。

（僕は間違えない、僕は間違えない）

幸福を願う権利があるのは生きている人間だけだ。最後の最後で慈悲を生み出すことが出来るのも彼らだけだ。

僕は無慈悲だ。僕は多くを見捨てる者だ。だからこそ僕は幸せを願う権利もない。鼓動の音は偽りだ。それを僕は知っている。僕は、……知っている。

＊

部下から届けられた情報。ユリスディカと密かに名付けられた少女は海上にいた。そこの配置したのはイグニス自身。彼女がユリスディカに足るかどうかを見極めるために、或いは１１枚目の切り札としての彼女を完全なものにするため。

カーネフェルの領海。それを守護する任に就かせた聖十字の兵士達。聖十字の船も武器も現代最強。それは間違いない。だからこそそれには多くの制約が掛かっている。僕は彼女に問いかけている。正義とは何なのかと。

「あの船……セネトレアの奴らだわ！」

兵士の１人が敵船を見つけた。その声に全ての兵士が身構える。

「セネトレアですって！？」

カーネフェルと戦っているのはセネトレアではない。タロックだ。それなのに何故セネトレアが来るのか。それは誰もが知っている。奴らは飢えたハイエナだ。金の臭いを嗅ぎ付けて、世界中の何処にでも現れる金の亡者だ。

「くそっ……、厄介な」

奴らを止めるためには、これから彼らが奪ってくるだろうその総額よりも多くの金を差し出す他にない。しかしこれは氷山の一角。その金に更なる亡者が引き寄せられる。そんな風に平和を金で買うことは出来ない。そんなことを続ければ聖教会はおろかシャトランジアという国が財政破綻してしまう。唯でさえ移民と亡命者の受け入れで馬鹿みたいに金がかかるのに。

また、そんな無茶を愚行を犯したとして、それで奴らが引き下がる道理はない。金は受け取り、更なる宝島へと船を進めるだろう。

そんな無駄金誰が使ってやるものか。

今代のユリスディカは年若い少女だ。彼女はカーネフェル人。長く綺麗な金色の髪に、空海の浅瀬と水面に映る草木を混ぜ合わせたような調和の碧色の瞳。

騒ぎ出す同僚達の中、彼女は思い悩んでいるのか無言を貫く。その顔にはもう答えが決まっているようにも見えた。

「《これより先は、カーネフェルの領海だ！止まりなさい！！》」

許可無く他国の領海を侵すことは許されない。正義と平和を守る聖十字は国際警察のようなもの。けれど万能ではない。タロック王が民を虐げているのだとしても、聖十字がタロックに乗り込むことが出来ないように、聖十字は多くの法に縛られている。正義のために作った法が自分たちの足枷になるというのはなんとも歯痒い。

しかしカーネフェルとシャトランジアは切っても切れない関係にある。そして戦争が再び起こってしまった以上、シャトランジアは十字法という観点から正義を行うことが許される。議会とシャトランジア王がそれを許さなくとも、神子である僕とそしてカーネフェルがそれを許している。問題は、正義の在り方だ。

「総員、衝撃に備えろ！」

金の亡者には聖十字の声など届かない。ならば他の方法を取るしかない。

船の指揮官達は、合図を送り予め指示されていたように船の配置を換える。相手は唯の船。それでも此方には教会兵器が搭載されている。速度なら負けない。敵船の進行方向に先回りし、それを迎え撃つ形へ持ち込んだ。

壁のように立ちふさがるシャトランジアの船。それに気付いた金

の亡者達が騒ぎ出す。恐れ戦き、ではない。金の臭いを察して、だ。

「おい、見たか！？」

「凄ぇ早さだ！あの船、唯の船じゃねぇ！！教会兵器ってのをわんさか積んでやがるに違いねぇ！」

「おお！そいつを奪って売り捌けばいい金になるっ！これは幸先いいな！」

「聖十字なんて言っても、相手は女ばかりの兵隊だ。負ける気がしねぇぜ」

「カーネフェリーの女は金にならないからな、奪うもんだけ奪ったら魚の餌にでもしてしまえ！船に積める宝の量は限られてるからな」

下卑た笑い声は次第に近づいてくる。それどころか速度を上げている。教会兵器が使えないことを見抜いてだ。

此方が動けるとしたらそれは正当防衛。教会は打たれたら反対の頬を差し出せということになっているが、聖十字はそうじゃない。打たれてからが戦争だ。右の頬を打たれたら、相手の左の頬を骨ごと粉砕し黙らせる。しかしそれはシャトランジアが攻められた場合の話。残念ながらここはカーネフェル。

その場合はどうなるのか、上に聞かなければ解らない。指揮官もどうしていいのかわからない。一発食らうまで待っていたら船が沈められてしまうかも知れない。今すぐ発射許可が欲しい。それでも焦って言葉が出ない。通信が途切れる。声も出なくなる。

しかしここで動かなければ自分たちの身も危ない。十分正当防衛と言い張れる。そのことに兵士達が気付くのはあまりに遅すぎた。法に縛られた場所で育てられた、法を守らせるための存在。それはどうやって範を示す？それは自らが頑なに法を守ることによって。

不遇に涙し悪を憎み正義を重んじればこそ、命令違反を恐れるようになる。だから誰も動けない。

その時だった。一艘の船が動き出す。
上がる轟音。大砲が向かい来る船へと伸びる。
セネトレアの船は油断していた。法の番犬達は吠えるしか能がないと侮っていた。その油断が後悔に変わった時、船はもう傾いていた。

「アーク三等星！貴様という奴は、なんてことをっ！部下のお前がこんなことをしでかしてっ……私は減俸か！？それとも降格か！？左遷か！？」
「お言葉ですが、隊長。貴方は何を言っているんですか？貴方の言う正義とは何ですか？私は貴方にそれを問いたい」

船を動かしたのはユリスディカ。砲門の傍に彼女は佇む。轟音で我に返った指揮官が駆けつけ怒鳴るが、彼女は毅然とした態度のまま彼を睨んだ。

「給料が減らされるのがそんなに怖いですか？今の地位を失うのが怖いですか？法を犯すことが恐ろしいですか？それは命よりも重いものだと思うのですか！？」

動けずにいた多くの船員達も彼女の言葉に心を動かせられる。彼女の行動はカーネフェルだけではない。この船の、そして他の船の船員達の命をも救う行動だったと気付いたのだ。

「私は知っている。もっと怖いことを、恐ろしいことを！！だからこそ、私は教えたくないんです！私が知ってる怖いこと！それからカーネフェルの人達を守りたい！！あの船を見逃せば、カーネフェルは蹂躙される。多くの人の平和が壊されます。人としての尊厳も、命も失うかもしれない。それを知って見過ごせるんですか貴方はっ！」

「そんなこと私には関係ないっ！俺は仕事だから、この任務が高給だって聞いたから名乗り出たんだ！カーネフェル！？あんなでかいだけの遅れた国どうなったって構うもんか！！」

よし、あの男は左遷させて減俸の上降格させよう。窮地になると人間本質が出てくるものだ。そしてそれを見せつけるには打って付けの場面。上官が屑であれば屑で在るほど、ユリスディカは光り輝く。彼女の正義が魅了する。

「貴方はそうでも私はそうは思えない。自然が豊かなことが悪いことだとは思わない。技術だけが全てだとは思わない。あそこには人が住んでいる。暮らしている。優しい人、厳しい人、でも……とても温かい人達。それは誰も替わることが出来ない、唯一で尊いもの。お金なんか！位なんかで購うことが出来ないものです！！」

少女の目にはうっすらと涙さえ浮かんでいた。奥歯を噛み締めるように息を吸い、ユリスディカは天へと吠える。

「十字法第一条“汝、殺すことなかれ”！十字法第二条“正義を行うべし、たとえ天が崩壊するとも”！十字法第三条“正義を行うべし、例え世界が滅ぶとも”！」

十字法の掲げる正義でもっとも重い罪は殺人。だから正義は二の次、そう解釈する輩が現れる。しかしそうではないのだ。殺さない、許すことが信じることが正義なら、誰もが改心することが出来るなら、それは理想としての正義の在り方。けれど、そうじゃない。殺されるまで罪を犯し続ける人間はいる。十字法が問いているのは法を犯すな、ではない。どこまで正義を示せるか。それを問いかけているのだ。

教会には死刑がない。だから殺しても殺されないという不平等の

法ではない。その解釈は間違っている。
例えるならこんな話か。
その男を見逃せば、男は１００人殺すだろう。その男を見逃せば、男は自分の命は助けてくれるという。それでもその男は殺す。間違いなく１００の命を殺めるだろう。男はどんな言葉にも従わない。提案をする権利は男にのみ存在する。
男を止める方法は１つだけ。問答無用でそれを殺める。たった１を殺めるだけで確実に１００は救われる。賭けるべきは自分の命。たかが１。それでもされど１。
見逃せば男は１００を殺めるだろう。それを殺めることをしくじったとしても男が殺める人間が１０１に変わるだけ。たかが１。たった１だ。
今の罪を恐れて未来の罪を見過ごすか。未来の犠牲を憂いて今動くか。

殺人が最も重い罪だと知りながら、それでも正義のために罪を背負う覚悟があるのか。それを十字法は問いかけている。ユリスディカは年若いながら、その解へと至ったその場の中で唯一の存在だ。
彼女の発した言葉に上官はまだ理解できていない。今の言葉は彼女の覚悟だ。正義のためならどんな罪でも背負おうと天へと告げたのだ。
それをこの無能な男は、懺悔の言葉だと決めつけにたりと笑う。決して許してなるものかとその目は笑っていた。

「今すぐ船を戻せ！ここは危険だ！早く退避させろ！こうなったのは全てお前の責任だ！上には俺が伝えておいてやる！全てはお前の所為なんだ！！」
「……」
敗北宣言を口にした。そう思い込んでいた相手がまだ燃えるよう

な意思を宿した目で睨む。それに男は震え上がった。その羞恥が怒りとして膨れ上がっていく。

「何だその目は！上官へのその生意気な態度に十字法に背く行為！お前達、こいつを捕らえろ！！」

指揮官を見る兵士たちの蔑むような冷たい目。それに彼は追い詰められていく。

「何故だ！上官命令だぞ！？今すぐ従えっ！」

ついに銃へと手を伸ばした男。彼はもう善悪の区別も付けられない。何より教会が禁じることを今正に犯そうとしている。

突きつけられた銃口にも、ユリスディカは怯まない。彼女は信じている。そしてその信頼が、彼女に応えた。

一斉に取り囲まれた指揮官。彼が兵士達から銃を突きつけられる番だった。

仲間割れをしている暇はない。敵船の混乱もそろそろ静まる。他の船が逃げ帰るか向かってくるかわからないが、正義のためには逃がすわけにはいかない。それは確かだ。

馬鹿な男以外、誰もが解っている。けれどユリスディカという人質が居る。その凶器に恐れて誰も動かない。それを恐れてだ。しかし1人の兵士が縄を持って上官へと跪く。

でかしたと言わんばかりに、男が笑ったその刹那。甲板に転がったのは男の方だった。

「な、何ぃっ！？」

「馬鹿ねぇ、この子が1人ならどうやって船を動かしたと思ってんだか」

「し、しまったっ！！」

芋虫のように転がる男をくすくすと兵士が笑う。本当に馬鹿な男だ。船を動かした協力者が居ると何故見抜けなかったのか。

「命令違反が怖いんなら、この芋虫連れてボートで他の船へ逃げなさい！」

女の声に、全ての兵士が首を振る。

「私も行きます！連れて行ってください！」

「あんたらばっかにいい格好はさせないわよ！」

「カーネフェルは、私達が守るんだ！」

ここに配置した兵士はカーネフェルからの移民、亡命者ばかり。祖国の危機を間近で見せられて、黙ってなど居られない。そんな女傑ばかりの船だ。

この船の騒動が伝わり、あちこちの船で兵士達の歓声。指揮官にもまともな正義を持っている人間や、ユリスディカに魅せられた者がいたのか、反乱はこの一艘に留まった。

「だってよ、ジャンヌ？」

「……皆さん……ありがとう」

「あら、そんな号令じゃ駄目よ。余所の船どころかうちの船でも見張り辺りの子には全然聞こえないわよ」

「しょうがないから今回はあんたに花を持たせてやるわ」

銃を突きつけられても泣かなかった少女が感激のあまり、口ごもる。それに兵士達は優しく微笑み、彼女の背を叩く。

「“正義を行うべし！”」

「「「「「“たとえ天が崩壊するともっっ！！”」」」」」」

高らかに告げる少女の声に、兵士達が正義を唱える。

勢いづく聖十字に、金の亡者達が顔色を変える。この船は何かが違う。今までの腰抜け腑抜け去勢軍じゃない。

「おいふざけるな！こんな時に風まで！？」

「マジかよ！？退路がっ……」

吹くのは追い風。逃げられないそれをものともせずに聖十字の船は来る。あの船達は別の風に操られているように、すいすいと大海原を向かってくる。

略奪者達も、船の速さでは敵わないのはもう知っている。勝機があるとすれば白兵戦。しかしそれは相手も承知。だからこそ、来るのは銃なんて小さな鉛玉ではない。大砲の照準が次々に合わせられていく。

「“正義を行うべし！”」

「「「「「“たとえ世界が滅ぶともっ！！”」」」」」

0，2：Fiat eu stita et piriat mundus.

ようやく6章ヒロインの登場。何か気付いた人……あくまでフィクションです。不審船っていうと密漁とかそんなノリでイメージしてたのに、0章ゲー完成間際にあんな事件が起こるから……もう苛立ちのあまりゲームのエピローグに急遽ぶっ込んだイベント。それを小説用に書き直しました。それまでいつも何気なく何とも思ってなかったけど、何だかんだでこの国が好きなんだなと思いました。好きだからこそ不満を感じてもっとより良くなって欲しいと思うんだろうな。上の人とかはあまり好きではなくとも国の文化とか風土とか自然とか、そういうのは好き。そういう宝が侵略されて破壊されるんだとしたら、やっぱり許せないことだ。

0，3：Quia natura mutari non potest id

最初はこんなじゃなかったはずだ。もっと普通に。もっと簡単に。唯、楽しくて……唯好きで。ずっとそんな風に馬鹿をやっていられるんだと思っていた。

だけどお前は俺とは違う。お前には俺がわからない。お前にだって言えないことがある。俺が何で、俺が誰か。打ち明けることも出来なかった。

最初に距離を作ったのは俺。俺がああだったから、お前は俺にも何も言わなくなった。

当然だ。自分のことは話さないのに、お前には話せだなんて、不公平にも程がある。

それなら。その最初以前は……どうだった？そうだ。存在くらいは知っていた。父に兄が居る以上、その兄に子供がいるんなら、自分には従兄弟と呼ばれる相手がいることくらい。

それでも互いの領地はあまりに遠いから、会ったことなんてなかった。名前だってよく覚えていなかった。興味もなかった。

あの頃の俺にとってのユーカーなんて、その程度のものだった。

＊

それはある日突然。母さんが居なくなった。

母さんは沈んでいったのだと、使用人達はそう言った。湖の中に沈んでいったと。俺は待ち続けた。母さんが浮かんでくるのを待ち続けた。

毎日家を抜け出して、朝も昼も夜も……母さんを待っていた。父さんは気にもしなかった。だって家にいなかった。騒ぐのも迎えに来るのも使用人の仕事だ。

そんな風に湖に通い詰めてどれくらい経っただろう？ある日、俺

は新しい母さんと出会った。湖を覗き込む俺を、湖の中から見つめ返してきていたのが新しい母さん。飛び込もうとした俺を止めるように飛び上がってきた彼女は、俺に理由を尋ねた。何時まで待っても母さんが浮かんでこないから、俺が潜って探しに行こうとした。

あの頃の俺は死の概念を正しく理解していなかった。もしくは受け入れられなかった。沈んだイコール死んだと結びつけたくなかった。そこに気付いた彼女は俺に、「ただいま、心配かけてごめんね」と微笑んだ。

だから俺は母さんが帰ってきたのだということにして新しい母さんを受け入れた。新しい母さんは小さな身体をしていた。水のような透き通る青色の瞳と不思議な羽を持っていた。だけど何より不思議なのは、新しい母さんはみんなには見えていないと言うことだ。彼女が母さんじゃないことはすぐにわかった。それでも優しい嘘を吐いてくれた彼女を俺は大好きになった。だから俺は彼女を母さんと呼ぶようになった。何時しか心から。

だけど母の死を悲しんでいたと思ったら、ある日を境にへらへらと笑い出して独り言が増えた俺を見た人達はとうとう俺の気が触れたのだと思い込んだ。しかも何やら母さん母さん言っている。確かに端から見れば当時の俺は怪しかったかもしれない。薄気味悪かったかもしれない。恥や外聞を気にするのは何も従弟の家に限ったことでもなかった。滅多に帰ってこないこんな辺境領の主さえ、それは変わらなかった。そしてそういう事を口にしないのもあの男のやり口だ。確か久々に帰ってきたあの男はこんなことを言っていた。

「そうだランス、ちょっと父さんと一緒に旅行に行かないか？いい気分転換になるぞ」

そう言って父は無理矢理俺を馬車に乗せて船に乗って南部に下り、父の兄というセレスタイン卿の領地まで連れ去った。俺をそこに預けたかと思うと父は数日後にはもう姿を消していた。慣れない土地

に1人送り込まれた俺は、肩身の狭い思いをしていた。どうしていきなりこんな遠い場所に置き去りにされたのか解らなかった。
周りはそれを養生だと言っていた。俺が疲れているのだと言っていた。正確には憑かれていたのだが、当時の俺がわかるはずもない。母の死でショックを受けた俺が有りもしない幻覚を見ているのだと、父も医者も言っていた。みんながみんな母さんを否定する。

《仕方ないわよランス。みんながみんな精霊を見ることが出来るわけじゃないもの》

これぱっかりは才能ね。そう言って母さんは笑った。

「才能？」

《そうよ！ランスは凄いのよ！》

みんなは俺をおかしいと言うが、母さんはそういうみんなが可哀想なのだと嘲笑っていた。
そんな風に独り言を繰り返す俺を、屋敷の人々も気味悪がっていたのだろう。この家にも子供がいると聞いたけれど出会わなかった。いや、女の子が何人かはいた。俺が顔を合わせたのは従姉妹の三人女姉妹。
彼女たちは最初こそ俺と遊んでくれたが、みんな母さんが見えないらしく、母さんがふて腐れるので俺は彼女たちと遊ばなくなった。独り言を繰り返す俺を危ないと思ったのか彼女たちも近づかなくなった。別に寂しくはなかった。俺には母さんが居た。
セレスタイン伯父さんの領地は結構な自然があった。それでも南部は北部より大分暑い。母さんは日陰と水を常にご所望だった。母さんは湖の精だから水辺を好む。馬車旅の際は干涸らびそうになっていた。帰りはずっと船が良いと恨めしそうに言っていた。

《ランス！こっちから水の気配がするわ！》
「待ってよ母さん！」
《はぁ、良い香りぃ～これはきっと小川ね……南部の水もなかなか味があって良いわね。無理してでも一生一度は旅をしてみるものなのかもしれないわ》
「待ってってば母さん！僕は飛べないんだよ」

すいすいと草木をかいくぐっていく母さんと俺は違う。裏庭はろくに手入れがされていないのか、それともこういうスタイルなのか、子供の足では歩き辛い道だった。そんな裏庭を一歩一歩懸命に歩く俺の耳に、聞こえてきた声があった。

「とうとう幻聴まで聞こえてきたか……」

幻聴？むしろその声こそ幻聴ではないのかと自問自答。辺りを見回すが誰もいない。それでも溜息まで聞こえてくる。顔を上げれば二階の窓が開いている。そこから風に揺れる金色の髪が見える。二階には上るなと言われていたから知らなかった。それでもそこに誰か居るのは解った。その人が今の言葉を言ったのだろうか。

《幻聴ですって！？失礼なっ！》
「う、なんかさっきよりそばで聞こえる」
「……母さんの声を、聞ける人がいるなんて」

母さんは二階の窓まで飛び上がりその声の主に文句を言っている。俺はそれを呆然と眺めるだけ。

「って何か痛ぇっ！冷てぇっ！」

母さんが実力行使に出たのを察し、俺も何とかしなければと近く

の木を伝い二階の屋根へ。
見れば母さんがその子の頬を思いきり抓っている。
精霊を認識できない人間は、精霊に触れることも出来ない。抓ることが出来ると言うことは彼は母さんを認識していると言うことだ。

「君も、精霊が見えるんだ！？」

そんな相手に出会ったのは初めてで、凄く嬉しかったのを覚えている。寝台に腰掛けていた彼の両手を掴んで真っ正面から向き合ってそこでやっと俺は気付いた。過ちに。
彼の両目は塞がれていた。グルグル巻きの包帯で光も通さないように隙間無く。

「精霊？何だそりゃ」
《この子、見えない分聞く方に特化してるんだわ。勘が良いっていうか何て言うか……あ！避けるなんて見えない癖に生意気よ！！って放しなさいっ！》

勘が良い。それは本当に。見えないすばしっこい母さんを手づかみで捕らえるなんて並大抵の力量ではない。

「でかい蠅がいたもんだな。最近の数値異常は怖ぇな。言葉まで喋るのか……」
《誰が蠅よ！私は精霊だって言ってんでしょ！早く放しなさいよ！人間臭くなったらどうしてくれんのよ！》
「お前の飼い主は人間じゃねぇのかよ」
《私は基本的にガキには興味ないのよ！早くその手を放しなさい！童貞臭さが移るっ！！》
「む、むしろ褒め言葉じゃねぇか！清らかって意味で。っていうか十にも満たないガキになんつーことを言うんだよ変態っ！！つう

か仮にお前が精霊なんちゃらならむしろそういうの好きそうじゃねぇか。やっぱお前蠅だろ蠅。正体表しやがったな！」

《精霊的にも価値がある童貞のとそうじゃない無いのがあるのよ！ちなみにストライクから外れた奴はみんな価値無しだからっ！ていうか十にも満たないガキの癖に変な知識だけ何であるのよ気持ち悪いっ！子供の癖に純真さも無邪気さもないのね！本当っ！可愛くないわ！うちの子とは大違いっ！》

「俺が暇だっつったら嫌がらせのように爺やが発禁上等の官能小説とか変態小説ばっか音読しくさるんだよ！！わかんない単語あったら手上げて発言しろっていう徹底鬼畜英才教育だこんちくしょう！！何がプリーズアフタミーだってんだ！何で隠語ばっかり書き方練習させられるんだよ！！俺だって俺だって……別にんなもん聞きたくねぇやいっ！！見えないなりに俺も苦労してるんだよ！！」

《い、嫌だわ何よその言葉責めっ……今度ちょっと呼びなさいよ。面白そうだから見学したいわ》

「絶対呼ばねぇっ！！ていうか出て行け！俺の昼寝の邪魔すんな！！」

「ねえ母さん、そのどなんとかって何？」

《ら、ランスには関係ないのよ？１０年後くらいにあんたがいい男になった頃に母さんが手取り足取り教えてあげるから》

「来てくれ爺やっ！俺の部屋に変質者が現れたんだ。聖十字に通報……」

《まぁ！可愛くないガキっ！精霊を通報しようだなんてっ！！》

「あ、つぅかあいつも変態だっ！どうしよう……やっぱ来んな！！」

涎を垂らして笑い出した母さん相手にベッド横の隣室の壁を叩きまくっていた少年は、一瞬何やら思い出したのか思い直してそれを止める。しかし、止めた途端勢いよく隣の部屋から駆けてくる初老の男。助けの声には応えず来るなと言われた途端駆けつけるとは確

かになかなか変わっている。男は室内を見回すが、やはり母さんは見えていないのか俺で視線を止めて少しだけ驚いたような顔になる。

「坊ちゃま、その子は変質者ではなく、ランス様ですよ」

「まぁそうだよな。変質者は爺やの方だもんな。んでランス？誰だそりゃ」

「坊ちゃまの従兄様ですよ」

「なんでその俺の従兄様々が俺の部屋の窓から現れるんだよ」

「遊びにいらしてたんですよ」

「聞いてないんだけど」

「聞かれませんでしたしね」

「何で言わないんだよ」

「どうせ言っても坊ちゃまとは会いませんでしょうし、必要ないと旦那様が」

「あっそ」

ふて腐れたように少年はベッドに潜り込む。そして気を悪くした八つ当たりなのか俺と母さんに向かって手を払う。

「早く出てけよ」

《まぁ！礼儀のない奴だわ！》

でもなんとなく、窓から入ってきて突然頬を抓り出す母さんの方が酷いような気もした。そんな気がしたからなのか、俺は彼に謝った。

「ごめん、勝手に入ってきて……」

いや違う。口実が欲しかったんだ。もう少し話したかった。母さんを認識できる相手と、共通の話がしたかったんだと思う。

「……また、遊びに来ても良い？」
「別にどうでもいいけど、たぶんお前は二度と来ないぜ」
「え、何で？」
「そういうもんだからさ」

最後に彼は少し笑った。扉を閉め、外へと促す老人に連れられて廊下を歩く内、その理由が明かされた。

「ユーカー様は病を患っておいでなのです」
「病気？外に出られないなら僕が遊びに行くのは……」
「それも駄目です。坊ちゃまの目を見ましたか？」
「目の病気なんですか？包帯してましたけど……」
「ええ。あれは空気感染の眼病でしてな。私のような老い先短い老人なら兎も角、ランス様のようなお若い方が感染して失明なさっては大変ですからな」

老人の話を聞き流しながらこっそりと母さんに尋ねると、母さんは羽をパタパタさせながら首を捻った。

「ねぇ母さん……そんな病気ってあるの？」
《さぁ。感染はともかく……そんなにすぐ失明する？それも空気感染？あいつ目で呼吸でもしてるの？目息でも吐くの？目からくしゃみを飛ばすの？聞いたこと無いわ》

その時は、物知りな母さんでも知らないことがあるんだなとぼんやりと考えた。そしてあれは食事が終わった後だったか。俺は伯父さんに呼び出された。そこで彼は唐突にこう切り出した。

「ランス君、君はあれに会ったそうだな」

「ご、ごめんなさい」

伯父さんは表情が硬く目つきも鋭くいつもむすっとしていて怖いというのが第一印象。だから怒られるのかと思った。あれほど2階には上がるなと言われていたのに。それを責められるのかと思った。しかしそうではなかったようで彼は薄く微笑んでさえ居る。

「いや、構わない。本来ならすぐに失明していたもおかしくないところだったが、何ともないところを見ると君には抗体でもあるのかもしれない。あんな境遇だ。あれも暇しているのだかな、いつも暇だと文句を言っている。君さえ良ければあれと遊んでやってはくれないか？」

おとがめ無しの上、その言葉はとても嬉しい。それでもやはり疑問は残る。

（ねぇ母さん……そんな病気あるの？）

《さぁ、聞いたこと無いわ》

小声で尋ねるとやっぱり母さんは首を振る。

「ランス君？」

「え、はい！喜んで！」

ただし絶対にあれを連れてあの部屋から外に出ては行けないと約束させられた。他の人間は抗体がないから大変なことになるということだった。何とも嘘くさい説明だ。こっちを子供だと思って馬鹿にしている感が漂っている。何処まで本当かわからないから俺の中に不満が残った。

それでも許可が出たのは嬉しい。俺は早速彼の部屋へと駆けてい

く。それは本当に彼にとっては予想外だったのか、彼は大口を開けて驚いた。

「マジでまた来たのかよ。お前失明希望者？」

「僕には抗体があるから大丈夫なんだって」

「ないないない。んなもんねぇから帰れ。俺は今絶賛だらけ昼寝中で忙しいんだ」

「限りなく暇そうな用事だね」

「お前馬鹿にするなよ。この明るさの中昼寝をするのって意外と根気と根性要るんだからな」

「そこまでして昼寝したいんだ？」

「だって他にやることねぇだろ。外には出れねぇ。本も読めねぇ。爺やの勉強という名のセクハラ祭りにはうんざりだ。こんな目で何しろってんだ」

「じゃあ聞かせてよ」

「は？」

「君の話。僕は君のことよく知らないし」

「無論断る、やなこった。大体他人に自分を語れるほどの密度が俺のこの生活に在ると思うか？」

従弟は口が回る。ああ言えばこう言う。此方の言葉をことごとく拒絶されていく。それでも此方が何かを言えば必ず言葉を返してくれる。本当の意味では拒絶されてはいないのだろうか。

「……母さん」

《本当にもう、うちの子は本当に優しいんだから》

「うぉっ！冷たっ！！な、何だよ放せっ！」

母さんへ視線を向ければ、俺の意図することを理解しすぐさまユーカーの動きを封じる。空気中から水を取り出しそれを瞬く間に氷

に変え、彼の両手を拘束したのだ。

「おい、ちょっと待て。なんだよこれは」

「目が良くなれば一緒に遊んでくれるんだよね？」

「言ってない！もうお前帰れよ」

《ランスの数術は本当なかなか筋がいいのよ？回復数術をマスターしたなら、こんな片田舎の民間療法なんかよりずっと良い治療が出来るに決まってるわ》

「違っ……ええと、そうじゃなくて！止めろって！つかなんだその不確定要素満載の発言はっ！」

《何よ文句ある？まだマスターしてないってだけのことよ》

「最悪じゃねぇかっ！なんかやばいことなったらどうするんだよっ！？」

《どうもしないわよ》

「最っっっっ

手を見れば、包帯は俺の手に握られていた。そのまま彼が落下したんだから、解けてしまったのも無理はない。
目が合うということは此方だけではなく相手も俺を認識視覚しているということになる。
俺がそれが彼だと認識するまで数秒かかったように、彼もしばらくの時を要した。それぐらい意外だったんだ。俺にとっては。
彼の目は俺のそれとは違っていた。父の目と伯父の目は同じような青だったのに。
遺伝とかそう言うものをあの頃はまだ知らなくて、それでもカーネフェルの人間はみんな青い眼をしていると思っていた。いや、でも個人差というのもあるんだろう。それくらいは解る。だって俺の目の色は父のそれよりもいくらか濃い色をしていたから。
それでも彼の目はあまりに薄い。それを青と呼んでもいいものだろうか？左目は辛うじて青。それでも俺のそれより遙かに明るい。そしてその右目は、青と言うよりももっと薄く明るい空色だ。この目の色素の異常こそ、彼の眼病なのだろうか。そう思った俺は彼の方へと片手を近づけ、数式を紡ぐ。
式の記述は上手くいってる。そこまでは行く。唯展開が上手くいかない。だから望む答えを導き出せず、数字は奇跡を起こさず霧散する。だからまた失敗だとはわかった。それでも一応聞くだけ聞いてみる。少しは何かがあったのかもと期待して。

「……一応、かけてみたけど何か変わったこととか、ある？」
「全然変わんねぇ」
「ごめん……まだちゃんと使えないから」
「お前馬鹿か？」

俺の心配に、彼は盛大に溜息を吐く。心底呆れられているようだ。

「え？」
「あんなの嘘に決まってんだろうが。俺の目を他の奴らに見せないためだっての」
「どうして？」
「俺はこの家の恥なんだよ。Ｓｗｅｅｐ ｔｈｅ ｔｒｏｕｂｌｅ ｕｎｄｅｒ ｔｈｅ ｃａｒｐｅｔってことだ。……にしても“母さん”か……」
「あ、うん。こっちにいるのがヴィヴィアン母さん。職業は精霊で普段は湖の精をやってるけど今は僕の養母さんなんだ。僕の数術の先生だったりもするよ」
《別によろしくする気はないけど、ランスがどうしてもっていうから挨拶してやるわ。感謝するのね》
「精霊に、数術ねぇ……どっちも才能云々って話だろ？話くらいは聞いたことあっけど、俺の親戚にその使い手がいたとはなぁ」
俺が母さんが何か言う度に彼は呆れていくようだ。雲の上の話でも聞いているような顔をしている。
「……信じられない？」
「信じられねぇっつぅより何つーか、驚いたってか。俺には一生関係ない世界の話だと思ってた」
《こらっ！聞こえてるのに私を無視するなっ！！》
従弟は左右を見回すが、やがて小さく首を振る。それが俺の期待を裏切ることだと彼は察していたんだろう。
「悪い。聞こえるけど、見えはしないな」
「そっか……」
《えぇ？聞こえるのに見えないの？どういう神経してるの？才能微妙過ぎるわよ？やっぱり神は二物も三物も与えるって言うのかし

らぁ？可哀想ねぇないないで才能一つもないなんて》

「母さんちょっと、黙ってて」

《ひ、酷いわランス！うん解った！》

「聞くのかよっ！？文脈なんか矛盾祭りじゃねぇか！」

《嫌ねぇ、この天然なのに鬼畜入ってるところがいいんじゃない。でもまだまだね。頑張って私好みの男に育てなきゃ》

「随分と低俗な精霊がいたもんだな」

「ユーカー、今は母さんのことなんかどうでもいいよ」

《きゃぁっ、ナチュラルに素敵に鬼畜だわっ！！いいっ！！いいのよランス！母さんそういうプレイも嫌いじゃないから！》

話を脱線させる母さんを適度に放置しながら、俺はユーカーに数術についての話を行う。

「へぇ。それじゃあ数術ってのが使えれば、いろんな事が出来んのか」

「うん。理論上は何でも出来るって話だよ。人間の限界っていうものがあるから出来ないことも多いってだけで」

「それじゃあその限界的にお前は回復術は出来ないっていうわけか？」

「限界って言うか……どうなんだろ母さん？」

《大丈夫よランス！筋は良いわ！式も丁寧で可憐で荘厳で本当に綺麗よ！純血でその若さでここまでやれるのは十分凄いと思うわよ。唯……うん、展開ねぇ……こればっかりは練習ね。ランスは唯練習不足なんだわ》

「練習かぁ……」

《ちょっとあんた！もっかい落としてあげるから今度はちゃんと怪我しなさいよ。それでうちの子の練習相手になりなさい！って無視するんじゃないわよ！！》

「……お前はいいな。あんな喧しいのでも、お前には母さんが居るんだろ」

彼にとっては酷いことを言っていた母さん。それでも俺への愛情がそこから感じられたのか、彼は今回ばかりは母さんに言い返さなかった。

それどころか彼は母さんを否定せず、俺を否定せず、俺を羨むようなことを口にする。それはとても嬉しいことだった。そんな風に言ってくれた人は今まで誰もいなかった。聞こえない振り見えない振り、ここにいる俺の言葉さえ父の領地では黙殺されてきた。

だから本当に嬉しかった。多少失望したとはいえ、喜びはそれに勝るものだった。

だから考える余裕が出来た。彼の言葉により俺の中に新たな疑問が生じたのはそのせいだ。

「母さん？ユーカーにだっているだろ？」

この屋敷ではユーカーの姉に当たる少女達が居た。そしてその母親という女性もいた。なら彼女は彼の母でもあるはずだ。

「いるけどいねぇんだよ」

「何それ」

「何だろうな」

曖昧に濁す笑みで彼は笑う。

「つかそんなことはどうでもいいから、それさっさと返してくんね？早く戻さないと俺が親父に殺される」

「あの伯父さんがそんなことする？ちょっと怖い感じはしたけど、

俺の勘違いだったみたいで結構優しかったよ？」
「あいつが？……いや、お前にそう見えるんならそうかもな」
「そうだよ。ユーカーと遊んで良いって言ってくれたのも伯父さんなんだし」
「はぁ……あいつが、ねぇ」

信じられないという風に、彼は何やら思い悩む。けれどそんなことはどうでも良かった。俺は彼の悩みより、俺の都合を優先していた。だから現状への不満が更に膨らんだ。

「……じゃあ、それ病気じゃないんだ」
「色素異常が病気だって言うんなら俺も混血もみんな病気ってことになるけどな」
「それじゃあ何も悪くないのにどうして隠すの？」

俺は普通に彼と一緒に外で遊びたかったのだ。見知らぬ土地に遊びに来たのに、屋敷に籠もりきりというのは彼じゃないけどつまらない。それなのに彼は、俺の言葉に予め用意されていた解答を繰り返し唱えるだけ。そんなものは理由にならない。そんなもので俺は引き下がったりしないのだ。

「だから恥だからって言っただろ」
「そうかな……俺は好きだよ」

俺がそう笑いかければ、彼は口をぽかんと開けて目を見開いていた。
空の青は水とは違う。沈めて殺す青じゃない。吸い込まれそうな明るい空の色。それは見る者の悲しみも吸い上げて忘れさせてくれるような温かさ。その青にしっかりと俺が映されている。認識されると言うことはとても嬉しいことだから、俺はそんな風に驚いてい

るそいつの青がとても好きだった。だからだ。また驚かせたくなったのは。

「せっかくそんな空みたいで綺麗な色なのに、隠すなんて勿体ないよ」

＊

すべては偶然だ。偶然彼と出会って、偶然話し相手を任されて、偶然知った彼の目の色。

海の浅瀬のような左目とそれより明るい空色の右目。それは真純血として本来あり得ないほど薄い色。唯の純血だってここまで明るい色を現すことは難しい。

世間知らずの俺がそれを知ったのは、彼にそれを教えられてから。だから愚かな俺は、その色を綺麗だねと口にした。その時彼は俺の青を、どんな思いで見ていたのか。俺はとても残酷なことを口にしてしまっていた。

それはとても懐かしく、遠い日の思い出。それが今も色褪せることがないのは……俺にとって大切な記憶だから。それをとても懐かしく思うのは、俺が悔やんでいるからだろう。

悔やんでも悔やみ足りない。いつも俺の言葉は至らない。だから不用意に傷付けてしまう。その解決策にと俺は会話自体を減らし、そして悔やむことも忘れてしまったのだ。優先順位が一位でないのなら、いくらだって傷付けても良いと俺は開き直ったのだ。

だけどあの人が死んでしまって、その亡霊を俺は求めているけれど……願いを使ってまであの人を蘇そうとは思えない。それは俺にも殺したくない相手がいるからなんだとそう思う。暫定的にはこいつが今のところ最も大切なんだろう。それはわかる。それは知っている。それなのに俺はまだこいつを傷付けている。

お前はアルドール様に仕えているわけじゃない。それでもこうし

て命令もないのに守っている。イグニス様は言った。俺が王への償いのためだけに生きていること、それは周りを傷つけると。そのもっとも顕著な例がこの従弟。俺の勝手に振り回されて、俺の八つ当たりをぶちまけられる。俺はほとんど顧みないのに、文句を言いながらそれでも俺の目的には従う。俺が頼みもしないことを、こうして勝手にしてしまう。

「ユーカー！」

「うぁっ……って、ら……ランスいきなり何しやがるんだお前」

すぐ傍で怒鳴ればすぐに目を覚ます。背後が壁だったのが幸運か。あの時のように窓から転げ落ちるようなことはなかった。

起こしたのは自分の足で部屋に戻って貰うためだ。本当は部屋に運んでやれれば良かったんだけれど、こいつももう子供というわけでもない。引き摺るにしろ担ぐにしろ手間が掛かる。

それならせめてお疲れとかありがとうとか言えればよかった。でもそれは出来ない。そんな言葉でこいつは言い負かせない。負けて良い時ならそう言っても良いが、今はそうじゃないのだ。

「見張りなら俺がする。眠いなら戻れ」

厳しい口調でそう言うも、こいつはやはりその場から動こうとはしなかった。あくまで見張りは自分がやるという顔だ。

「そういうお前も眠そうな顔してるぜ」

「どうしてそう思う？」

「お前が機嫌悪そうな顔してやがる時は大抵お前は寝不足だろ。余裕がないって顔に書いてる」

俺以上に俺を理解しているような口ぶりだ。それは事実なのかも

知れない。それでも、それなら解っているはずだ。そんな言葉で俺が引き下がる男ではないことも。それなのにどうして解らない振りをするのか。

「変な時間に寝るもんじゃねぇな。目が冴えて暇で暇で仕方ねぇ。俺の夜目は馬鹿になんねぇし、まぁこいつに何かあっても目覚めが悪いしな」

だからここにいる、そんだけだとユーカーはそっぽ向く。小さな欠伸は寝起きの所為だと言わんばかりの表情で。

それにランスは言われて気付く。コンプレックスの象徴であるその目を隠すことなく、彼の両目が開いている。それが意味するのは、今の彼が本気だということ。本気で王を守りに来ている。気を張り巡らせている。敵の気配を察すれば、瞬時に抜刀し斬りかかる。向けられる殺気は自分へのものではないとわかるが、その気迫に息を飲む。潜在能力の高さは知っていた。それでもこんな目を見ると、彼がどこまで嘘を吐いているのかわからなくなる。

「ありがとう、でもお前も疲れただろう？次は俺が代わるよ」

……だから俺も嘘を吐く。あちがとうだなんて少しも思っていないのに。優しくもないのに優しい振りをする。そういう甘い言葉をかければ、こいつが引き下がる奴だと知っているから。最初は本心からそうしていたはずなのに、いつの間にかこいつを知る内に、打算的な物になってしまった。こんな物もはや優しさなんて呼べもしない。

それでもこいつは優しいから。騙されてくれるんだ。俺がそうやって微笑めば、こいつも軽く笑って……それは、いつもと違う笑い方。

「だが断る。暇で暇で死にそうだって言っただろ？」

おかしい。どういうことだ？いつもなら、ここで引き下がる。こいつはそういう奴なのに。何かが違う。これまでと。

（本当に……どうしたんだ、ユーカー？）

よく知った人物なのに、見知らぬ人間を見ているよう。何を考えているのかわからない。いや表面上はわかる。唯、もっと奥。心の奥底で何を考えているのかが今は見えない。見えないというのは違うかも知れない。これまでこいつにはそういう物が何もなかった。空っぽだった。漠然としていた。

騎士なのに何を守りたいのかとか誰のために戦っているのかとかそういう意志が欠けていた。理由もなく、唯何かから逃げるように剣を振るっていただけだ。その先には多分何もない。何も見えないままそういやってこいつは生きていた。見ていて危なっかしい。それでも迂闊に触れられない刺々しさ。

だけど今は、何かじっと遠くの方を見据えている。以前よりは印象が僅かに和らいだ？でも以前に増して沈んでいる。以前のこいつは沈没船を渡り歩いて息を繋いでいるような眼をしていた。それが今はもう、冷たい海の底。呼吸をすることも諦めてしまったような諦観がそこにはある。それでもその眼は水上の光を見つめている。希望を信じなくとも、希望に焦がれ見つめているのだ。

その苦しみの理由を知りたいと願っても、それが呼吸もままならないこいつから酸素を奪ってしまうような気がして気が引ける。だけどこのまま見つめていてもこいつが酸欠で死ぬのは目に見えている。この手で殺すか見殺しにするか。それが俺の手に託されているのでは？そんな予感が胸を過ぎった。

「多忙な人間はさっさと休め。大体お前は明日からだって忙しい

人間なんだ。休める時に休んどけ」
「それは大丈夫だ。俺もちゃんと明日からお前を馬車馬のように扱き使うからお前もスケジュールはびっしりだ。というわけで休むのはお前ということになる」
「残念だがそれは飲めねぇ話だな。俺はこの糞暇な時には働くが、周りが働くときは何が何でもふけるさぼる逃げる隠れる！ろくな給料も出ねぇのにやってられっか」

蟻の巣だって、蜂の巣だって怠ける奴は必ず現れる。そして人間社会で言うそれがこの俺様だと従弟は無意味にふんぞり返る。それが本心からの言葉ではなく、自分を引き下がらせるためのものだとは解る。けれどそれを指摘したところで彼が認めるはずがない。そういう奴なんだ昔から。

「どこまでお前は天の邪鬼なんだ……」
「馬鹿かお前？素直な俺とか想像してみろよ。全面的に全体的に総合的に気持ち悪いだろうが」

相手を言い負かすためなら自虐ネタも厭わない。どこまでこいつは捨て身なんだ。
普段貴族がどうとかプライドがなんだとか喚いている癖に、こんなにあっさりどうでもいいと言わんばかりにそれさえ投げ捨てる。こいつのこういうところがわからない。というかこいつのこんな姿を俺は知らない。
こいつが自分を自ら貶める事なんて……久しくなかった。その目の色を相手に忘れさせるほど、高圧的でいつも自信に満ちあふれていて、貴族らしい誇り高さと横暴さを身につけていた。そのこいつが、こんなことを口にするなんて世も末だ。何か変な物でも食べたのだろうか？
しまった、間が空きすぎた。そのせいでこいつがそれを肯定の限

りなく悪い意味の方だと受け取り始めている。別にそんなつもりじゃなかった俺は慌てて否定する。

「……むしろそういう方が助かるんだが？」

「あ、悪い。気持ち悪いのはお前の発言の方だったな。夏だってのに鳥肌立った。っつかマジ空気読めよ。今のは同意してそこで俺がツッコミ入れるところだろうが」

肯定をご所望だとは、これまた意味がわからない。それにしても何なんだ？

俺の行動を読み取ってそれを手伝うようなことをしたかと思えば、こうやって平気で俺を貶める言葉を作る。それなのにどうして、こんなところにいるのか。重んじているようにしているものが、実は心底どうでもいい。その癖普段馬鹿にしたり口汚く罵ったり軽んじているものが、本当は何より大切。自ら進んでその上辺に騙させて人の誤解を招いて、それで何が満足なのか。解る奴だけに解って貰えればいい？そんな風なこいつを見るのは初めてじゃない。妙な既視感。こんなこと以前にも思ったような気がするのは何故か。

（ああ、そうか）

そんなに似てはいないのに、どうしようもなく駄目なところばかりが二人揃って似通っている。俺もこいつもとても狭く息苦しい場所に生きているのだ。見ている場所は違くとも。

俺にとっての王は同時に存在成し得ない。だけどこいつの王は一人じゃない。それでも王のためにしか生きられないところは同じ。

こいつが彼女を失って、あの人も失って、……それでも死に急がないのはまだこいつの王がいたからだ。俺の王はあの人で、今はアルドール様だけど……こいつにとってそれはたぶん、俺なんだろう。あの人に仕えたときのように文句を減らず口を言いながら、それで

もこうして支えてくれる。

（そういうことだったんだ……）

今更になり、王がこいつを信頼したのがわかる。機械でも人形でもない。生きた人間として心を捧げて仕えてくれる。罪悪感とか金のためとかそんな気持ちで仕えているわけじゃなくて、純粋に慕って力になりたいと思ってくれている。こんな最低な俺を唯好きでいてくれるんだ。

不信に囚われそうになる敵ばかりのこの都で、王が笑っていられたのは、俺を許す余裕を持てたのは、こいつがそこにいたからなんだ。

命令に従わない騎士と、命令に従う騎士。

命令通り命令だけ守って王を守れない俺と命令を破って好き勝手するイレギュラー。いざという時、頼りになるのはきっと俺じゃない。だからあの人もこいつを側に置いたんだ。あいつの動きは敵も味方も予測不可能。あいつは賽子。良くも悪くもなる賽の目。

王はその勝負に出て、勝負に負けたのだ。王はこいつの6を信じた。6が出なければ勝てなかった。俺ではきっとどう足掻いても5しか出せない。だから1から6までの可能性。それに王は賭けて負けた。

それでも王はこいつを呪ったりはしないだろう。王はこいつに癒されていたんだ。王を恐れず、王を敬わず、それでも王を愛し慕っていたのはこいつだけ。

こいつは本当に真っ直ぐに人に心を捧げる。俺がどんなに酷い人間でも、俺を嫌わず、俺を憎まず、まだ俺なんかを支えている。俺がこいつに何をしてやったというのだろう？何もしていない。傷付けてばかり。それなのに何故？

アルドール様に仕えろと俺は言った。カードに仕えろと。それはつまり……俺は今日までお前に死ねと、それが騎士の在り方だと言

っていた。その程度だ。出会って間もない他人のために、家族のように大切だったお前に死ねと俺は言ったのだ。それが当然なのだと決めつけて。

自分の言葉の残酷さを、今更のように思い知る。それなのに、それに背いて……それでも俺に背かないこいつ。その青を見ている内に、初めて俺の中に迷いが生まれる。

（そうか……こいつが、死ぬ……。死ぬ……のか）

何がお前を殺したくないだって？自分の手を汚したくないだけじゃないか。。

それはそう遠くない未来。こいつが死ぬ。俺のせいで。俺がこいつを殺すんだ。その命を使い捨てる。すり減らす。何も感じず犠牲に用いる。

イグニス様は道化師とやりあったと言っていた。俺たちの中で最も強いカードだったルクリースさんはもういない。イグニス様もしばらく此方と距離を置くと言っている。

となれば使えるカードはユーカーだけ。どんな策を取るにしろ、こいつの力が必要だ。

アルドール様、ひいてはカーネフェルという国のために死ねと俺は言った。それをこいつは拒んだ。それなのにこいつは俺を支える。死んでやるのは国のためじゃないとその目が言っている。

俺が助けてくれと、お前の力を貸してくれと言ったなら、こいつは言ってくれるだろう。その命をくれるだろう。

それでも俺はそれを言わない。回りくどく国のためだなんて、そこに私欲が微塵もないと言わんばかりにお綺麗な言葉でもって。俺は言わなかった。それでもこいつはそれを見越している。だから言わない。認めはしない。それでもここにこいつがいるのは誰のため？それにも気付けないというなら俺は本当に最低だ。

「お、おい……」

そしてこいつは黙り込んだ俺を見て、言い過ぎたのかと焦り出す。情けなくも狼狽えている。その青。久しく見ていなかった空色の……

その姿に思い出す。そうだこいつは、こういう奴だった。本当は誰より気が弱くて優しくて臆病で。いつも人の目に脅えていた。だから平気で嘘を吐く。大げさに大きな事を言って見せたり、まったく逆のことを口にしたり。

（思い出した……）

どうして忘れてしまったのか。こいつの嘘に慣れる内、知ったつもりで再び騙されていったのか？俺は絶対にそれを忘れてはならなかったのに。

こいつは弱い。とてつもなく弱い。剣とかそういう次元ではなく、それは精神的なもの。こいつは弱い。それは確かだ。俺はこいつのそういう弱さが好きだったんだ。

償いを知る前は、もっと普通にそう思えていた。俺が騎士に憧れたのは、強くなりたかったからだ。誰かを守る喜びに、希望と意味を見い出したから。

それが始まりだったのに、いつの間にか立場が逆になっていた。彼の願いを叶えたいと思っていたはずなのに、今は彼が俺の願いを叶えるためにこうして支えてくれている。

俺が気に入らなかったのは彼が強くなることだったんだ。もう必要ないと言われるのが怖かった。だからずっと駄目でいて欲しかった。それはこいつが駄目だからではなく、そんなこいつを俺が望んでいたからなんだ。俺はそれが嘘なんだって気付きもせず、その優しさに甘えていた。それでいて同僚として情けないと罵ったりなんかして。こいつの身動きを取れなくしていたのは俺の方だった。

「ユーカー……」
「何だよ」
「一本勝負で良い。付き合ってくれないか？先にお前が一本取ったら俺は大人しくここを引き下がる」
得物を手に取ってそう提案すれば、数秒後に彼も応じる。言葉よりこれだ。結局は。
「…本気なんだな？」
「無意味な嘘を吐く趣味はない」
話が早いし、力で負けたなら文句も言えない。王の守りはより強い者が担うべきだ。
正直なところ、俺が勝てる保証はない。三本勝負なら、二本取れる自信はある。十本勝負なら七本は行ける。それでも一本と言われたら、俺はこいつに負けるかもしれない。両目のこいつとやり合ったことは確か一度もなかったはずだ。
「俺が勝ったら四の五の言わずに部屋戻れよ」
「ああ。その代わり俺が勝ったら、戻るのはお前の方だ」
互いに得物を天井へと投げる。思い切りぶつけると落下速度も上がりキャッチも難しくなる。しかし軽すぎてもいけない。それでもこんな時間に騒げない。思い切りに欠ける投げに、交わる視線で共に笑った。落ちてくる得物、それを掴んで鞘を抜く。それは僅かに彼の方が早かった。これは得物の重さの差。先手必勝、速攻勝負と早速取りに来る攻撃を払い落とす。その衝撃に腕が震える。
「……っ、やるじゃないか！お前らしくもない良い太刀筋だ！迷いが抜けたな！」

「はっ、何様のつもりだよ！？」

再び攻勢に転じられる前に、得物の軽さを活かして今度は此方が突きを繰り出して行く。いきなり狙いには行かない。体勢を崩すための連続攻撃。それを彼も防ぎはするが、次第に隙が見えてくる。数度の突きとその反応から、故障の部位を見つけ出す。

「……っ！」

「軸足を庇っているようだが？」

余計な情報をくれてやるわけにもいかないと、或いは喋る余裕も無くしたか。さっきまで立派なくらい張りぼての冷徹を装っていた癖に、ほらもうボロが出てきた。精神の乱れは剣にも現れる。そういった意味でなら、分は俺にある。気持ちにムラのあるユーカーはどんなに才能があっても本当に強くはなれない。俺がいつもある程度以上に剣を振るえるのは、感情をその分そぎ落としている結果とも言える。剣を極めることは、おそらくそう言うこと。

先程までの悩みもどこかへ消え去って、唯この一瞬。刹那だけがそこにある。

「ああ、悪い……言い間違えた、利き足だっ！」

傷めているその足を狙って鞘を振り下ろす。それを庇うのには間に合わない。そう踏んだのか、その壊れた足を振り上げる。

それはユーカーの咄嗟の判断だ。その中にも俺はこいつの成長を見る。今のこいつは逃げなかった。無謀にも勝負に打って出た。犠牲を厭わないその賭けは、その勇気を讃えるがごとく幸運は彼に微笑んだ。

「そこまでやるか……てめぇ」

「嫌だな、言わない方が悪いんだ。痛いなら痛いって言ってくれないとハンデのしようがないだろう？」

鞘を蹴飛ばしたユーカーは足の痛みに顔を僅かにしかめていた。もっとも、それは痛みのせいだけでもないのかも。今の攻防の勝者は彼だが、勝負の勝者は俺だった。足の痛みで跪いた、彼に向かって俺は剣を突きつける。……勝負あった。

「まったくお前は無茶ばかりして。診せてみろ、今治してやるから」

「そうやって決めつけるの止めろよ。別に俺は足なんか痛くねぇし」

「へぇ、そうなのか」

足を変な方向へ軽くひねってやればすぐ傍で悲鳴が上がる。

「痛ぇっ！殺す気か馬鹿っ！！」

「黙れ馬鹿。アルドール様がお休みになっていらっしゃるんだぞ」

軽く叱ってやれば、気に入らないとそっぽ向く。ふて腐れた顔なんかは本当昔から全然変わっていない。

「大体そんなコンディションで見張りなんて無茶だろう？俺が気付いたから良かったものの、もしここに刺客でも来ていたらお前だって……」

「俺はコートカードだ。お前みたいな弱っちぃ数札と一緒にすんな。そのくらい幾らでも覆してやる」

たった今その格下のカード相手に負けたことを彼はもう記憶から抹消してしまったのだろうか？

「……俺がいつそんなことを口にした？」
「ランス……？」
「勝手に俺の言葉を決めないでもらいたいものだな」

此方が強い口調になれば、言い返せないのはもはや条件反射なのだろう。一見逆に思われがちだが結局我が儘を押し通すのは、最終的には俺の方。それを多少は悪いと思うから、小さな事やどうでもいいことは俺が折れる。唯それだけ。

「確かにカーネフェルには強いカードが必要だ」

それは認めるし、否定は出来ない。

「それでも、お前がカードじゃなかったとしても俺はお前の力を望んだだろう」

むしろそうだったらどんなに良かったか。俺が願いを諦めたがお前は何故だと思っている？新しいカーネフェル王を殺せないから？それだけだと思っているのか？

「お前は数術が使えないから知らないだろうが、俺が回復数式を作る時……何を思うかお前に解るか？」
「んなの解るわけねぇだろ。お前の言葉、そっくりそのままお返しするぜ」

言われないのに解るはずがないと開き直って対話を拒否する従弟に俺は幼い頃を思い出す。

「……あの日のことだ。お前のその目を治したときの事を思い出

す。この数式を紡ぐ度にな」

＊

俺は馬鹿だ。本当に馬鹿だ。だから彼のことを知りたがった。俺は初めて得た、人間としての理解者の登場を喜び有頂天になっていた。だからもっと多くを理解したいしてもらいたい。多くを共有したくなった。どうして見えるのに見えない振りを演じているのか。眼病なんて失明なんてしてもいないのに両目を隠して隔離されているのは何故か。

見えない振りをする彼との遊びはせいぜい会話だけ。それも充分楽しいけれど、もっといろいろなことをしたかった。海と緑に恵まれた美しいその領地。母さんと二人で遊ぶのも楽しいけれど、三人ならもっと楽しいはず。幼い俺は、唯彼と一緒に遊びたかった。自分の暮らす領地なのに、その景色も彼は知らない。森の緑、水のせせらぎ、俺と母さんが見つけた風景を彼にも見せてやりたかった。

彼の青はとても綺麗なんだから、こんな部屋の中では勿体ない。彼の青は空の下で一番映えると思った。彼は誇るべきだ。そして羨まれるべきだ。そのすばらしい澄んだ色を。心の憂いさえ吹き飛ばしてくれるような快晴。それを宿している瞳は、とても温かな色。それなのに、領地の人間達さえ、彼を知らないなんてあんまりだ。

俺は心底彼を気に入っていたんだろう。だから見せびらかしてやりたかった。知らしめてやりたかったのだ。ユーカーは母さんとは違う。誰の目にでも映る。それなのにいないもののように扱われるのが不愉快だったんだ。

だから伯父からきつく止められていたにも関わらず、彼を外へと連れ出した。伯父は何故か俺には甘いから、バレたところで許されるだろう。そんな強かな計算をして。

俺の何時間にも及ぶ説得の末、彼は渋々了承をした。人目に付かない場所ならついて行ってやってもいいと。

みんなに見せることが出来ないのは残念だったけれど、大好きな友人と一緒に遊べるのは素直に嬉しい。使用人とは違う。仕方なくとか仕事だからそうしてくれてるわけじゃない。それがとても嬉しかった。

「おいランス、なんだこれ。水の中になんかいるぞ？」
「それは魚って言って……」
「ああ、たまに晩飯に置かれるあれか」
「うん、それ」
「で、こいつら何でこんなところにいるんだ？」
「え？……ええと、魚だからじゃないかな。魚が陸を歩いてたり空を飛んでたら魚って言わないだろうし」
「その理屈だとそこ飛び込めばお前も今日からめでたく魚類と言うことか。そうかそうか」
「そうだね。ていっ」
「突き落とそうとすんな馬鹿っ！全身びしょ濡れになってみろ！どう言い訳すればいいんだよ！？」
「ああ、ごめん。よくわからないしユーカーが溺れている間に母さんにどうしてなのか聞いてみようかと思って時間稼ぎに」
「そんな理由で！？溺れること前提！？」
「それにユーカーの方が俺を突き落とそうと考えてたじゃない」
「何故バレた？」
「そりゃあバレるよ」

悪意のない悪意の押収。誰かと馬鹿をやるのがこんなに楽しいなんて思わなかった。母さんは俺には優しいけど、こんな会話は成り立たない。だから新鮮だった。何が何だかよくわからなくて。
俺たち自身何がツボに入ったのかよくわからないのだから、それを端から見ている母さんはもっとわけがわからなかったのだろう。

《私あんたら何が楽しいのか全然わかんないわー……って何でそこで二人で吹き出すの！？これだから人間って嫌いなのよ！あ、勿論ランスは別よ？ってなわけでユーカー！あんただけは許さないわ！ヴィヴィアン様の怒りの一撃を食らいなさい！》

「水は止めろって言っただろ！？」

《ひひひひひ！いい気味よ！寝汗か涎とか世界地図とかでも言い訳するがいいわ！》

「くっ……この技だけは使いたくなかったが、秘技！ランスガード」

《くっ！うちの子を盾にするなんてっ！卑怯者っ！》

「黙れ、勝負の世界に卑怯もクソもねぇんだよ！」

「あ、母さんが回り込んだ。今はあっちだよユーカー」

「あ、じゃねぇよ！ちゃんと庇えよ馬鹿！抜け出したのバレたら俺本当やばいことになるんだからな！」

《ランスの馬鹿ぁっ！何でそいつに教えちゃうの！？でも愛してるっ！！……ってランス？聞いてる？聞いてないのね？……うん、そうだよね。うん、あのね母さん別にスルーされるの嫌いじゃないわ。全然嫌いじゃないんだからね！！するならもっと！徹底的に無視しなさいよっ！！ちらちらこっち見ないでよ！！またバレちゃうじゃない！！》

「母さん五月蠅いよ」

《ごめんなさい》

「でもさユーカー、それは絶対そんなことないよ。伯父さん親切だし優しいじゃないか。うちの父さんの方がもっと最悪だよ」

「あいつは外面だけは良いんだ！」

「へぇ、ユーカーとは反対だね」

「……貶してんの？褒めてんの？」

《それは勿論貶してるのよ！》

「現れたな馬鹿めっ！秘奥義ランスバリアーっ！」

話の話から外れたのを良いことに、羽も使わずひたひたと無音のままにじり寄ってくる母さん。そんな母さんの犯した痛恨のミスにユーカーはすぐさま反応。俺を掴んで前に構える。そして自分は陰に隠れる。

「うわ、冷たっ」

《きゃあああああ！ごめん！ごめんねランス！！今焚き火とか竈辺りの火の精霊探してきて乾かしてあげるからっ！あ、……でも水もしたたるいい男、じゅるり》

「へ、変態だ！変態がいるぞ！！つか精霊ってもっと綺麗な心根なんじゃねぇのかよ！？あれ絶対湖の精じゃねぇよ、湖に浮かぶ水垢とか赤潮とかゴミとかヘドロの精だろ。もしくは湖の性犯罪者を略して湖の性的な」

「ユーカー、それって偏見って言うんだよ」

「な、なんか違ぇと思う」

「それはそうとそれでそれはこういう綴りなんだって」

「へぇ……手に文字書かれるのと目で見るのって結構違うな」

飛び去った母さんを見送りながら、俺が木の枝でガリガリと土の上に文字を記す。すると、彼はそれをまねるように、自分の手のひらの上で文字をなぞる。

彼との会話は、母さんのそれとも違う。母さんからは俺が教えられる側。だけど今度は俺が教える側だ。俺以上に何も知らない従弟に、母さんから教えられたことを教えるのは、なんだか不思議な気持ちだった。俺の言葉に、感心したような声が上がると凄く嬉しい。素直じゃないこの友人が、俺を認めてくれているような気がして。

思えば誰かに認められること。それが俺の、そして従弟の……共通の願いだったのかもしれない。否定され続けて来たから、誰かに認められ受け入れられること。それに歓喜し胸が震える。だから、大切だったんだ。

「あの魚はね焼いて食べると美味しいんだよ、それに塩をかけるともっと美味しくて、こっちのはお刺身にして……」
「おい、これなんだ？」
「ああ、その花はね……よくお墓に供えられるものだよ。確か花言葉が……」
「へぇ……聞いたことはあっけど、こういうものだったんだな。イメージと全然違う」
「どう違う？」
「もっとおどろおどろしい系の奴かと思った。墓場ってイメージの？思ってたより全然綺麗で驚いた」
「持って帰る？」
「……ああ。ちょっと頼んでもいいか？」

彼に頼まれるままに、俺はその花を手に取った。先に部屋に彼を戻した後、頼まれた場所を探して、領地外れの墓地へと向かう。そして、教えられた名前の刻まれた墓の前にそれを供えた。それは女性の名前だった。名字は彼と同じだったから、彼には死んだ姉さんか妹でもいたのかと悲しい気持ちになった。

《ねぇランス、あのユーカーって糞ガキは確かあんたより少し年下よね？》
「うん、確か1歳だか2歳だか……」

けれど母さんが首を傾げる。言われて俺も気づいたけれど、墓に刻まれた時を示す数字は少しおかしい。少なくともその人はユーカーの妹ではない。おそらく姉でもないだろう。それなら彼女は誰なんだろう？
食事の席の後だった。ユーカーの部屋に向かおうとした俺を、伯父は呼び止めた。もしかして連れ出したことが知られてしまった？

だけど息を飲む俺に、伯父は礼を言う。バレたのは墓参りの方だけだった。

「君を見かけた領民が君のことを感心していたが、私もそう思う。本当にランス君には感心する。よくもまぁあの愚弟からこんなに出来た子が生まれたものだ」

「いえ、そんなことは……」

「うちの馬鹿息子にも見習わせたいものだまったく。いっそ君が私の息子なら良かった」

「伯父さん……」

家を空けてばかりで死んだ母さんと俺を悲しませた俺の父が最低なのは全面的に同意するが、ユーカーを否定されるのは彼の父親でも許せなかった。

そもそもそれは俺の手柄じゃない。彼がそういしたいと言ったから、それを頼まれたからそうしただけ。でもそれを告げることは出来なくて、褒められたのに悔しさだけが残された。

俺にとって彼はとても大切な友人。誰にも見えない母さんの声を彼は聞く。彼は俺を馬鹿にはしない、俺と母さんの否定もしない。お前は疲れて居るんだとか、気が触れているんだなんて、彼は一度も言わなかった。だからこそ、俺は彼を否定したくないし、否定されれば自分のことのように悔しくて、悲しくなる。

扉の向こう、聞こえていたのだろうか。自らを縛めたその両目で、覆われて見えない窓の外を眺める彼。その横顔はとても悲しげだった。

「……あれ、誰のお墓だったの？」

「母さん、か……」

「え？」

「人間じゃなくても、血が繋がってなくてもお前には母さんがい

ていいよな」
「ユーカー？」
「悪い、何言ってんだろうな俺」

ユーカーは俺の母さんを否定しない。それどころか羨ましいとさえ言った。それを口にしたのは二度目。
不思議だった。ここには普通に彼の母親が住んで暮らしているはずなのに。それを尋ねれば、彼は笑っていた。それは以前のような曖昧な笑みではない。だから彼は今回こそ誤魔化さずに教えてくれた。とびっきりの笑いが浮かべられた口元が自虐の笑みなのだと知ったのは、その内容を知ってから。

「あれは俺のお袋じゃなくて、姉貴達の母親なんだ」

俺の屋敷には死んだ母さんしか居なかった。だからとても驚いた。領主が複数人の女を娶っているなんて、俺の常識では考えられないことだったのだ。

「それじゃあ本当の母さんは？」

興味本位で話をするべきじゃない。彼は笑いながら死んじまったと口にする。

「死んだよ。お袋は親父に殺された」
「……」

どうしてとは聞けなかった。それでも俺の顔にはその言葉が記してあったのだろう。彼は笑いながらそれを告げる。

「こんな色だろ？認められるはずねぇんだ。俺の父親が自分なん

だって」
「ユーカー……」
「いや、俺がもっとちゃんとした色だったって……怪しいもんだけどな」

その色は突然変異などではない。色素異常をもたらしたのは、そこに明確な罪があるからだと彼は暗に告げている。それでもその理由を彼は語ろうとはしなかった。

「それでも生まれた男は俺だけだ。他の女が見栄えのいい跡継ぎを産むまでは生かしておいてやろうって温情さ」

そんなことを父親に言われたなら、俺は立ち直れない。それでも彼は何も気にしていないような顔で笑い出す。

「そしたらさ、遺伝情報調べさせたらマジでてめぇの子だったって話で、ざまぁねぇぜクソ親父」

それにより処刑から逃れることが出来た彼。伯父はそれ以降他の妻との間にも子宝に恵まれず、こんな色でも希少なカーネフェル人の男児だからと、外から隔離し“大切”にされている。

「考えようによっちゃ俺ほど幸せな奴もいねぇしな。一日中だらけてていいし面倒くさい仕事なんか回されることねぇし？それでいて立派な家で美味い飯食えるんだ。まぁ、見させてはもらえねぇけどな」

へらへらと笑う言葉は、心底自分は幸せだと言わんばかり。それがあまりに上手すぎて、こちらまで騙されそうになる。……というより俺は騙された。彼を尊敬したものだ。そんな境遇でも不貞不貞

しく強く生きる彼が凄いと思った。同じようにはなれなくても、少しはそんな風に強い心が手に入ればいいのにと俺は思った。
俺は馬鹿だ。彼が捻くれて素直ではないことくらい知っていたのに。俺の前でも精一杯強がって見せていた。それこそが拒絶なんだって気付きもせずに憧れた。
彼と自分は全く似ていない。だからこそだ。俺は彼を羨んだ。
彼の周りの環境は、決して羨むべきものではない。それでも俺は羨んだ。俺が羨んだのは彼自身。俺よりも年下なのに彼はとても強い人間で、弱音を吐いたりしなかった。泣いたところなんか見たこともない。それは彼が強いからに他ならず、弱音を吐いてばかりの俺はそういうところに惹かれていたんだ。彼のそういうところは俺を変え、俺の日常さえも変えていく。
でもそうじゃない、そうじゃなかった。彼はとても弱い人間で、臆病な人間。自分の弱さをひけらかすことを何より恐れ、強がって生きている。自分にも他人にも嘘をついて生きている。それは人生における最大の逃避。彼自身誰より彼を否定している。嘘の彼を崇めると言うことは、最大級の侮辱で、彼の否定で彼の拒絶だ。彼を知ったつもりで俺は何もわかっていなかった。

それはあまりに唐突に。何もない日に起きた事件。その日の俺たちは……いつものように二人で窓から外へ抜け出して、いつもと変わらず馬鹿をやって遊んでいた。
だけど彼は、そのいつも通りを続けられないほど心をすり減らしていた。それに俺は気付けなかった。唯、俺を見るその目がとても悲しそうだったのには気付いた。俺は馬鹿だ。見えない振り気付かない振りが出来ない程子供だった。年下の従弟に出来ていることなのに、俺には出来なかったのだ。だから聞いてしまった。

「どうしたの？」
「どうもしねぇよ」

「嘘だ、絶対何かあったって顔してる！」

俺が問いただすと、彼は小さく呟いた。

「……俺は、お前が羨ましい」

俺が心から羨んだ人間が、お前が羨ましいと口にした。彼は俺の青を羨んだ。その色こそが彼に望まれていたもの。彼は言ったよ、いっそこんな目なかったならと。薄すぎる青の瞳が、すべての災いを招いたんだと。

「俺はこんな貴族らしくもねぇ目！そこらの領民だって俺よりマシな色をしてるんだ！！」

遊びに行く最中に、通りすがって身を潜めた。そして木陰から覗いた先……領地で暮らす人々、その姿に彼は絶望したのだ。

「あいつだって！真純血でもねぇような奴らより、俺は……劣った目をしてるっ！！」

「そんなことない！お前の目は綺麗な色だよ！！それだけで十分価値はあるっ！！」

「んなもんねぇよっ！！こんな出来損ないっ！！こんな目っ……人前に出せるわけがねぇんだ！！みんな俺を馬鹿にするに決まってるっ！！」

「そんなことになっても俺は絶対馬鹿にしない！！」

「お前なんかに褒められても全然嬉しくねぇんだよっ！！」

好かれて嫌だとは思わない。それでも自分の嫌いなものを褒められて嬉しいはずがない。ましてや自分に欠けている物を持っている人間にコンプレックスを褒められても、その好意を真っ直ぐの意味

で受け取れるわけがない。彼は俺にそう告げた。

「何でお前なんかが俺なんかと一緒にいてくれるんだ！？嫌味かよ、哀れんでるつもりなのかよ！？お前みたいな綺麗で深い色の青……そんな目でそんなこと言われても、俺は嫌な気分になるだけだっ！！」

理由がない。自信がない。そんな人間に好意を与えたところで、信じられない。唯、それを拒絶できる力が無かった。唯それだけ。それだけで彼は俺と遊んでくれていた。

俺はそれさえ気付かずに、日々彼を無神経にも傷付けていた。見たくないものばかりをその目に刻ませることを強いて。

俺は馬鹿だ。でもそれ以上に、彼は本当に馬鹿だ。

そんなことをしたところで何も変わらない。余計悲しくなるだけだ。そんなもので人の心は得られない。見放されていくだけだ。でもあの日のそれだけ追い詰められていたんだろう。そこまで俺は追い詰めてしまっていた。

本当にこの目が何も映さなかったなら……こんな目なくなってしまえば。そうなったならきっと、親父は俺を見てくれる。認めてくれる、胸を張ってお前は俺の息子だと。そんな風に言ってもらえる夢を見ていたんだろう。願いを祈りを抱いていたんだろう。俺なんか生まれてこなければ良かった。俺なんか死んじまえばいい。俺なんか……俺なんかと繰り返す彼。その右目に祈りを捧げるように握りしめた、刃を掲げてうっすら微笑んだ。

俺の青が俺の存在が、彼にとってコンプレックス。比較され見下されて、傷ついてすり減って。それでも彼は俺を憎まず、自分自身を呪った。無神経で最低な俺のことを呪わずに。

心配されたかったんだな。家族からの関心なんて、他人からどう見られるかなんて全く興味がないような、そんな素振りをしているのに……狂おしいまで求めていたんだろう。与えられる心を。それ

が痛みや傷で購えるなら喜んで彼は支払う。迷い無く振り下ろされた彼の右目を抉るナイフ。彼はこんな時まで笑っていた。それでも流れる赤色に、泣いているように俺には見えたんだ。
羨んできた彼を、俺は初めて哀れんだ。弱々しいその姿に、俺は打ちのめされていた。格下だと見下したわけじゃない。彼が弱いのなら、自分が強くなりたい。今まで支えられてきた分、それ以上に彼を支えて守りたい。虚勢の強さでも、彼が今まで与えてくれたものには本当に感謝しているから。
彼の幸せ。それを願って、俺は数式を完成させた。これまで成功したことのない、回復のための数術を。

＊

「つまるところ、ここ最近俺がお前を全く顧みることが出来なかったのはお前の所為だということだな」
「責任転嫁もいいところだぜ」

ランスの発言に、従弟は何でそうなるんだと苦い表情だ。

「お前は弱いカードなんだ。振り分けられてる幸福値だってものっそ低い。俺なんかのために使っていい数はひとつもないはずだ」
「その、俺なんかって言うの禁止だから。今後一回言う毎にお前に新規のトラウマを一個ずつ植え付けようと思うから」
「その言い方だと今までのも全故意的なものだったのか？あぁ！？」
「そんなわけないだろ。お前が俺にトラウマ製造器とか不本意な称号を贈るから言ってみただけだ」
無論言われたからには頑張るけどと付け足せば、頑張らないでと従弟が左右に首を振る。

「俺は嬉しかったんだよ」

償いの忙しさがそれを忘れさせてはいたけれど。

「あのさユーカー、俺は別に嫌々お前の怪我を治してるわけじゃない。それは解るな？」

「……わかんね」

「なら解れ」

「んな無茶な……」

「お前なら出来るよ何だって。俺の自慢の従弟なんだから」

「その修飾は最終的にお前にかかるんだろどうせ。素晴らしいランス様のおまけ的なあれ」

「俺はいつから自己愛者になったんだ？」

「胸にて当てて考えろ。ヒントは三択、三十年前、百年前、五百年前」

「そうだなユーカー……とりあえず生まれてねぇよと俺は突っ込むべきなのか？」

下らない馬鹿げた言葉の押収。それにどちらともなく吹き出した。それが少し、懐かしい。昔の俺はこの空気のこの感じが、とても好きだったな。いや今だって、十分好きだとは思える。

「実は先程イグニス様にな……俺らしさというものをもっと大事にしろと咎められてな」

「お前らしさ？んなもんあれだろ。要モザイクグロ料理を爽やかな笑顔で量産したり、間の抜けた天然発言したりとかナチュラルに鬼畜外道になるとかか？」

「お前は俺をそんな風に見ているのか？」

「それ以外に何があるよ？それともあれですか？高名な騎士様は

美辞麗句の方がお好みですかって俺にんな薄ら寒い台詞言わせる気か？」
「お前が嫌なら、言ってくれて良いな。言いたいなら言わないでくれ」
「そんなに俺の嫌がる顔が見てぇのかお前はっ！！」
「ああ」
「爽やかに言うなボケっ！！」
「……まぁそれはさておき、俺らしさというものを俺はお前に預けてしまっていた気がしてな。端的に言うと、返してくれ」
「もらってもいねぇもん返せるか馬鹿っ！！端的に理不尽過ぎるぞお前はっ！！」
「仕方ない。それなら別件で手を打とう。それじゃあキリキリ歩いてもらおうか？」
「……え？お前も帰んの？」

背を押して歩みを進ませる俺を、従弟が焦ったように振り返る。俺が見張りを代わるものだと思っていただけに、俺まで帰ろうとしているのが理解できないようで彼は混乱していた。

「今は誰かあそこにいねぇと……」
「アルドール様が心配か？」
「……あいつがどうとかそういう次元の話じゃねぇだろ。単に目覚めが悪いっただけだ……何かあったら」

こいつが人に関わらないのは、こいつが弱くて優しいから。
一度関われば、もうこうして気にして見捨てられない。だからずるずると守る相手が増えて、身動きが取れなくなる。それを自分で理解しているから、こいつは人に関わらない。
本当なら俺はここで、計算通りとでも笑えばいいのか。アルドール様を押しつけて、見捨てられない程度に状を植え付ける。そうす

ることでカーネフェルはコートカードの一枚を保有することが叶う。
頭では解っている。それでも……扉の中の人間が心配だと視線を送る彼に、少し苛立つ。そんな自分に救いようがないなと思った。
ユーカーは何だかんだ言いながら、関わった人間をそう簡単に見捨てられない。俺より余程広い場所をこいつは生きているのかもしれない。俺の苛立ち……それはその領域を羨むと言うより、もっと別のもの。
その認識は俺が最低だという証明だ。こいつをちゃんと一人の人間として見てやれていないのだ。だからいつも振り回していた。俺がアルドール様に仕えるのなら、こいつだって当然仕えるべきだと頭ごなしに信じていた。そうなるものだと決めつけていた。
俺はこいつを自分の分身か何かだと……もっと酷い言い方をするなら付属品か所有物かとでも思っていたのだ。だから俺の言葉に従わないこいつに苛立ちを覚える自分がいる。それに気付いて自分を深く、嫌悪する。
それは否定よりもずっと酷い。存在を無視しているようなもの。母さんを否定され続けて俺は悲しい思いをした癖に、自分がそれをしてしまっている。目に見えている相手のことを。
それでもそんな俺を未だに大切だと言ってくれる、見放さないでいてくれるこいつには、胸の奥を締め付けられるような悔恨を覚える。

「良いんだ」
「は？」
「彼はまだ即位もしていない。カーネフェル王じゃない。唯の少年だよ。ちょっと目の色が深い青ってだけの」
「何言ってんだお前……？」

お前がそんなことを言うなんてと、空色の瞳を彼は見開く。信じられないようにその目は俺を見ている。それも仕方ないだろう。今

の言葉は、王よりも今はお前の方が大切だ。そう言っているような問題発言。お前の信じる馬鹿真面目の忠義の騎士はそんなことを口にするものか。要は俺がそんな人間ではなかった、それだけのこと。

アルドール様は大切だけれど、実際どうでもいいという気持ちも大きい。俺に必要なのは俺の主であるカーネフェル王。あの人の代用品。それは別にあの少年でなくとも構わない。イグニス様が言うように、俺はまだあの人をあの人として見ていない。

「お前の言うこともっともさ。ああそうだな、まだ彼に仕える必要なんか無い。こんなところで死ぬようじゃ、仕える意味もない。その程度の希望だ」

一晩目を離したくらいで、そんなにすぐ簡単に死んでしまうような王なら要らない。どんなに犠牲を捧げて守ってもすぐに死んでしまうだろう。そこに守る価値はない。そんな価値ない王のために、それを失って俺が後悔したりするのは嫌だ。それでまたこいつを責めるようなこともう嫌だ。

俺は何もこいつに与えられていない。唯搾取するだけ。俺の償いのためにその命まで利用しようと俺はしていた。俺のために死ねと言う癖に、お前のために死んでやるとは絶対に思えない。嘘でだって口にすることが出来ない。その違いが気持ちの差だろう。俺は思われている以上に、こいつを大切には思っていない。

それでも俺だって大切なのは、嘘じゃない。どうでもいいとは思えない。手の掛かる俺の弟。何でも出来るのに何もしない、何でも出来るのに何も叶わない、何をやっても報われない……可哀想な子。いろいろ思うところはあるし、一言では言い表せない。それでもこのままこいつの命を使い捨ててしまったら、俺は後悔するような気がする。

戦いが始まるその前に、俺は俺と折り合いを付けなければならない。これから迷うことがあってはならない。そのためにも俺は俺が

何を思い生きているのか。それを見極める必要がある。
思えばここ数年、ゆっくりと話す暇もなかった。過程が抜けていて始まりと今だけがそこにある。その両端にいる俺がまるで違うことを考えていて、見つめる俺の心を惑わす。俺はその両方を見据えて、自分というものを探らなければならないのだ。
でなければいつまでも俺はここに立ち止まったまま。何も変わらず、何も解らず、それっぽいことを口にしてそれらしくなんとなく生きる。本当にやりたかったこと、本当の自分の気持ちも見失ったまま。
王はいない。あの人はもういない。そして今、俺は何を思う？俺の償いは、一人だけに向けられるものだったのか？違う。それは違う。

（その目……）

薄すぎる青。その空の瞳が、もう雨に泣かないように。祈ったよ。祈っているよ。祈りだけはまだ俺の中に谺している。
お前が幸せでいられればいいのに。そう祈っていたはずだったのに、その俺がお前を一番手酷く扱っている。お前の不幸の大半は俺が原因なんじゃないのか？お前が呪ったその目さえ、俺の責任と言われてしまえば否定は出来ない。お前は責めない。だから謝らない。肝心なことは何も俺は……
いっそ詰ってくれたなら、今何かが変わっていただろうか？

（馬鹿だな本当に……）

俺なんか優しくする必要はない。別に俺はお前に優しくしていないんだから。そう見えているのなら、お前の目は昔よりも何も見えていないことになる。でも違うか。お前は違うな。お前は見えない振りがとても得意だった。聞こえない振りは出来ない癖に。

それでしっかり傷つくくらいなら、ちゃんと声に出して言葉を作ればいいのに。お前はいつも最後の最後まで何も言えない奴だった。それで痛い目を見るのが自分だって痛いほどわかっているはずなのに、まだお前は懲りないのか？

そんな馬鹿を本当に救いようがないと嗤う気持ちと、そんな馬鹿がどうしようもなく愛しくてその髪を思い切り撫で回したくなる衝動。そう、俺は好きなんだ。家族としては弟としては本当に可愛くて可愛くて仕方がない。ずっと唯の弟だって思わせてくれるなら何も困らない。だけど、こいつは俺の同僚で立場も身分もあるから……私情で全てを測れない。だから割り切れないものがでてくる。割り切れない思いは、酒で流してしまおうか。現実逃避もたまにはいいか。

「死ぬほど暇なんだろ？奇遇なことに俺も死ぬほど暇なんだ。それなら暇人同士一杯やろう？食料庫にいい酒が隠れていたのを見つけたし」

「お前警備さぼって何やってんだよ……」

呆れたような言葉を発し、ずるずると荷物のように彼は引き摺られていく。抵抗する気力も失せたらしい。

「失礼だな。見つけたのは前に城に来た時だよ。都貴族に嫌味を言われたのが腹立たしかったんで、噂されていた秘蔵の一本とやらを隠させてもらっただけで」

「お前って変なところでアクティブだよな」

0，4：Multi famam， conscientiam paucis

俺のそれも誇れるものではないけれど、彼の生い立ちはとても羨めるものじゃない。

彼の目の青。その色素異常は彼の血が濃すぎる故だ。それは両親が共に代々真純血の家系だからとか、そんな単純な理由でもない。

それは十数年前のことだった。すべては一人の女性を巡って引き起こされたこと。彼女の周りには三人の男がいた。一人は彼女の夫、今は亡き俺の主、先代カーネフェル王。そして彼に仕える兄弟、二人の騎士。その一人は俺の父親、もう一人が彼の父親。

王は二人の騎士を本当に信頼してくれていて、都貴族に持ち上げられた親族との覇権争い……それが王妃が巻き込まれぬよう俺の父親にその守護を任せた。アロンダイトの領地は北部にある。ザビル大河を超えてまで王妃に危害を加えることはないと踏んでのことだった。

もう一人の騎士は王の傍で戦いを続けた。彼はとても奮闘し、とうとう反逆者を討ち取った。そこで王から停戦が宣言された。まだまだ討つべき者はいくらでもいたが、そうせざるを得なかった。戦いは内乱が長引いたことで、タロックの侵略の機会を与えてしまった。今は唯でさえ少ない兵力を失わせることが出来なかったのだ。

王の言葉に都貴族達もしぶしぶ従って、カーネフェルはタロックの侵略への抵抗を開始した。王は信頼できる部下に辺境領の守護を任じ、彼らの活躍もありなんとか侵略を阻止出来た。

しかしこんな時でも悪巧みを忘れないのが悪人の性だ。忠臣達が都に戻るその前に、都貴族達は議会を開き、王の忠臣達の地位と権力……それを底辺まで貶めた。王一人ではその決定を覆すことも叶わない。

これでも最悪だというのに、俺の父親はもっと最悪だった。事もあろうに、守護を任された王妃と互いを想い合うようになる。それ

が俺の母さんをどんなに悲しませたことだろう。
王妃の心変わりにより、王はとても辛い思いをしただろうに、それで俺の父親を責めることはなかった。
その件でも一人の騎士は俺の父親と不仲になった。敬愛する王への背徳行為が許せなかっただけではない。血を重んじる貴族間の結婚など、そこに自由はない。忠義の騎士である彼が王を裏切ることはなかったが、彼もまた王妃を慕っていたのだ。それでも忠義の前にその思いを殺していた。それを自分の血を分けた弟が、とんでもない裏切りを働いた。それは絶対に許されないことだと憎みながら、行き場のない羨みが浮かんだのだろう。そしてその羨望は怒りに変わる。怒りのままに荒れ始めたその騎士は罪を犯した。
その報いがどうして彼の方へ向かったのか。嗚呼、神子様に言われるまでもない、神なんてクソ食らえだ。何度だって言ってやる。お望みならば本人の前で最高の笑顔で言ってやる。

＊

「……愚かところはあの女譲りか」

俺が運んだ彼を見て、まるで一つの取り柄もない。そう言い捨てるような伯父の言葉。そんな言葉を言った後に、彼は俺に笑いかける。そのとても優しい笑顔に俺は戦慄を覚えた。

「手間をかけさせてすまなかったな、ランス君。どうせこれが駄々を捏ねて無理を言って外へと連れて行かせたのだろう？」
「え、……？」

その言葉に硬直した俺の背中から、ひょいと彼を伯父は奪う。そのまま部屋に運ぶのかと思ったら、階段を上らず下り始める。彼の部屋はそこじゃない。彼のいる階ともう一つ。地下が立ち入り禁止

とされていた。その地下へ彼は下っている。何のために？わからない。

「私の監視不足だ。もう二度とこんなことはないように監視体制を改めよう。この馬鹿にもわかるように躾を施す。君にはもう迷惑をかけないから安心して欲しい」

「何、言ってるんですか？」

彼があんな怪我を負ったのは。この男に愛して欲しいからじゃないか。我が子として認めて欲しいからじゃないか。

想像できない。眼球に刃物を突き刺す痛みなんて。同じことが自分に出来るとは思えないししたくもない。その痛みでショック死を引き起こさない彼の精神力。それは願いを信じていたからだ。希望を夢を見ていたからだ。それを超えればすべてが手に入るのだと。

犠牲を捧げても願いが届かないのなら、彼は今まで何のために生きていたのだろう？見える目を見えないと言い、病もないのに人を遠ざけ、寂しいと口にすることも出来ない。それでもまだ生け贄は足りないと、痛みまで捧げたのに……何一つ彼の願いは叶わないと言うのだろうか？

（そんなのあんまりだ！）

俺はもう泣いていた。そのまま見送ることなど出来ず、揺らぐ視界の中彼を追いかけるけれど、辿り着くのは施錠を施された部屋の前。扉はもう閉められていた。

「お前はどこまで俺に恥をかかせれば気が済むっ！？俺の名誉をっ！俺を辱めて愉しいかっ！？何だその目は、それが親を見る目か！？糞生意気なガキめっ！！」

聞こえるのは、打ち据える鞭の音。音と怒鳴り散らされるその大声。悲鳴は上がらない。上げる気力が無いのか、それとも彼が耐えているのか。

「泣いて許しを乞えば許されるとでも！？そういう甘い考えがあの女にそっくりだ！！不貞不貞しいお前のことだ！どうせ反省などしていない！自分は悪くないと思っているのだろう！？顔に書いてあるわっ！」

それは後者だったのだろう。奮われる暴力の音が増した。それでも声は聞こえない。唯言葉から、彼が泣いている。それだけは理解した。

彼は弱いけど、強いからそんなつもりでは泣きはしない。それを父親である男は正しく理解もしていない。数週間に満たない付き合いの俺だって、それくらいはわかるのに。

彼は今悔しいんだ。悲しいんだ。どれだけ願ってもどうにもならないことを痛感している。醜くも浅ましくも、嘘をついて自分を誤魔化して幸せだよと口にした、その仮面が剥がれ落ちているのだ。どんな犠牲を払っても欲しいものは手に入らない。例え命を投げ出したって、この男は顧みない。愛してなどくれないのだ。諦めず縋ってきた希望を断ち切られた。諦めてしまった。だから、彼は涙している。それが手に取るようにわかるから、俺も扉の前で泣いていた。

お前の何もかも。すべてが気に入らないのだと、男は罵る。打ちのめす。心も体も虐げる。

数術で治したとはいえ応急処置だ。今は安静にしておかなければいけないのに。涙は傷に染みるだろうか。それは痛くはないのだろうか。

いや、痛くないはずがない。それなのに彼はまだ何も言わない。言葉の力なんか信じていないから。何も変わらないのだとそれも諦

めて。
彼の世界は残酷でとても無慈悲なもの。だから見ていられない。俺は耳を塞いで蹲る。まだ強がっているんだ。何も受け入れられなくて。拒絶されることがわかっているから、その前に拒絶する。それが自己防衛。これ以上傷つかないように幸せに生きるために。彼はああなってしまったんだ。助けてなんて言えない。苦しい痛いなんて言えない。誰にも何も話せない。
それでも彼はもう耐えられなかったのだろう。遅すぎる反抗。父親へと牙を剥く。

「……っ、笑わせんなよ糞親父っ！“　　”の変態野郎っ！！腐れ“　　”！てめぇでてめぇの“　　”に手ぇ出しといて！？やることやって傷つけて！？それで全部俺の所為かよ！？俺がこんな目になったのは、母さんの所為じゃない！全部てめぇの所為だろうが！！」

すべては目の色の所為。自分の目の所為。そう逃げ続けた彼が向き合っている。自分は何も悪くない。悪いのは目の前の男の方だ。隔離されていたのも、見えない生活を続けたのも、外にさえ出かけられないのもすべてこの男が犯した罪。その罰を何故本人ではなく、自分が払わなければならないのか。それはあまりに理不尽だ。その理不尽を受け入れてきた彼が今、声を上げて反抗に出た。
彼は俺じゃない。その痛みは彼のもので俺のものじゃない。それなのにそれが自分のことのように痛くて堪らない。彼が他人とは思えない。なにもかもが違うのに、どこか通じている。その所為だ。彼の幸せを願って止まない。
仮に彼一人の支払う代償で足りないなら、俺も犠牲を捧げれば、願いは届くのだろうか？
痛いのは嫌だ。苦しいのは嫌だ。でも、彼をあんな自虐の嘲り笑いなどじゃない……本当の笑顔で笑わせてあげたい。どんな願いで

も叶えてやりたい。

「もう、止めてくださいっ！」

手に携えるのは彼がその目に突き刺したナイフ。拾っていたのだ。なんとなくそのままに出来ずに持ち帰った。

「これ以上ユーカーを傷つけるなら……俺も俺に同じことをします」

伯父は俺には甘い。何故かはまだ知らなかった。それでも俺は俺が人質に出来ると悟ったのだ。そしてそれは効果的だった。俺の言葉に扉の向こうがしんと静まるのがわかる。

「片目じゃ足りませんか？両目に突き刺して、抉って抉って抉って！そうすれば止めてくれますか？」

高すぎてこちらからは覗けない格子越しに伯父が俺を見る。ナイフを構えた俺を見て、その顔色が瞬時に青ざめた。

そして願いは叶った。俺の願いは。こんな簡単なことで。実際俺はナイフを振り下ろしてもいないのに。それはあまりに不公平で、俺は釈然としないものを抱えていた。だけどそのむしゃくしゃも、彼が目を開けた喜びの前には霞んでしまう。

「ユーカーっ！！良かった！！」

喜びのあまり抱きついたせいだ。ぼんやりとした口調で痛ぇと抗議されてしまう。ごめんと謝り離れれば、寝台の上半ば焦点の定まらない空色の瞳が俺を見る。

「何で……あんなこと、したんだ？」
「今度はさ、ユーカーが俺のところの領地においでよ。伯父さんから許可は貰ったから」
「……何でそうなるんだよ」
「俺がそうしたいから」
「わけがわかんねぇ」
「ユーカーと一緒にいると楽しいし」
「あっそ、悪趣味だな」
「そんなことないよ！」
「どうだかな」

相変わらず素直じゃない。どこまで自分に自信がないのだろう。
それでもこの面倒くさい性格も、回りくどい会話も楽しんでいる自分が居る。こんな風に俺を話をちゃんと聞いて言葉を返してくれる人間がいるということが、どんなに幸せなことか。俺の周りは一方的な人間ばかり。自分のことばかり考えている。そんな人々はそれを俺に押しつけてくる。だけどユーカーはそうじゃない。

「俺のところって本当つまらないんだ。使用人は俺の相手なんかしたくないって顔だし父さんはいっつも都に出張だし、母さんはそれが苦で身投げしちゃったし。今の母さんは湖の精で母さんが入水したその湖で出会ったんだよ」
「お前なぁ……さらっとそういうこと言うなよ」
「俺は好きだよ、お前の青。空みたいに綺麗で」
「話題飛びすぎ。あと俺が連続で同じ返答するような語彙のない奴に思われそうな発言は控えてくれねぇ？不名誉だ」

そう言って彼はそっぽ向く。

「目……治っちまったんだな」

《ちょっと！うちのランスの頑張りを何そんな嫌そうに言うわけ？！》
「余計なことしてごめん。あと母さんはちょっと黙ってて」
《え！？うぅっ……ユーカーの馬鹿っ！人間の癖に生意気よ！あの時私が助けてやったのも知らないでっ！》

俺の言葉でユーカーに、八つ当たりのような言葉を残し窓の外へと飛び去る母さん。でも母さんが火の元素を減らしてくれていたのは本当だ。本当は母さんも嬉しかったんだろう。見えもしないのに自分を認めてくれる人間の存在が。

「だけど、俺はお前の青はお前だけが持ってるお前らしさなんだと思うんだ。だから俺はお前の青が凄く好きだし、俺の他にもそう思う人が居る。人間ってそういうものだよ。みんな違うから、みんな違うものが好きなんだ。人が百人いたとして、誰もが好きな色なんてあるわけないだろ？」

そんな色はあり得ない。皆が違う色が好きで違う色を嫌い。その統一化を図ろうというのは横暴で傲慢だ。好きなのは悪い事じゃない。嫌うことも悪い事じゃない。唯それを他の人まで押しつけるのが悪いこと。それは許されないことだ。だから俺はそれを許さない。

こいつが嫌いな人間がいるならそれは仕方ない。気が合わない人間はどこにでもいるものだから。それでもそれを他の人まで広げるのは酷いことだ。伯父さんのしていることは、たぶんそういうこと。身分のある人がそんなことをすれば、下は従わざるを得ない。だから偉い人は、そういうことをしてはいけないんだ。何かの可能性を潰すことがあってはならないのだから。そしてそれは彼にも言えること。

「それなのにさ、そんな綺麗な目を隠すなんて勿体ない」

その目を潰そうだなんて。抉ろうだなんて、もっともっと勿体ない。何も持たない人間を誰が好きになってくれるだろう？引き出しが空っぽ。引き出しの取っ手すらない。それじゃあその人がどんな人なのかさえわからない。

「仮にお前が悪趣味なんだとしてもそれはお前くらいだ。他にそんな変人いるもんか」

「いなかったら何だよ？」

俺一人じゃ不服かと問いかければ彼は返答に困ったのか視線をまたそらす。

当然不服だろうさ。俺は父親代わりにも母親代わりにもなれない。精々やれるとしても兄代わり兼友人だ。別にユーカーはそんなものが欲しかったわけじゃないんだ。それでももらえるものはもらっておくべきだと俺は笑う。

「俺はお前の目が好きだ。自分で歩けるお前と外を歩くのも楽しい。だからそうしていて欲しいっていうのは俺の我が儘かもしれない。だけど我が儘で何か悪い？人間ってみんなそういうものだろ？みんな我が儘。自分の勝手で自分の都合で生きてる。なのにどうして俺やお前が我が儘言っちゃいけないんだ？」

開き直るような言葉を口にすることが出来るのは、彼と出会って感化された所為。引いて駄目なら押してみろ。願いがあるのなら、手段は選ばない。我慢したって耐えたって何も願いは叶わない。それなら我が儘に貪欲に欲しがって手を伸ばすべきだろう。彼にそれが出来ないのなら、彼の分まで俺が手を伸ばす。

「俺だけじゃ不服だって言うんならもっとユーカーも我が儘にな

ればいいんだ。もっといろんなものを欲しがっていい！そのためにも自分は大事にしてあげないと」

俺が開き直ることで、簡単に願いが叶うのなら。ずっと傍にいて、どうしようもなく報われない彼の代わりに叶えてやりたい。

外はもっと広いんだ。領地の外にやって来て、俺は初めてそれを学んだ。別れを惜しんでいつまでも過去に囚われる。それじゃ駄目だ。だから外へと連れ出してやりたい。今までの悲しみも些細なことだと思えるくらい、もっと広い場所へと。

俺は感謝している。母さんの死で沈んでいた俺を、周りに見えない母さんと俺を否定され続けた俺を、笑わせてくれたのは彼なのだ。だから俺は彼を否定しない。いつも味方でいてあげたい。

「まぁ、でもとりあえず今日のところは俺で手を打っておいてよ」

「なんかもう……お前の言ってることわけわかんな過ぎて笑える。何なんだこの状況は。何なんだこのわけのわからなさは」

何がツボに入ったのかわからないけれど、彼はしばらく咳き込む程に笑い出す。笑いすぎて彼は泣いていた。そこまで喜んで貰えると、こちらとしても気分は晴れやか。自然と口元が笑みの形へ変わっていき、俺も一緒に大笑い。何が面白いのかよくわからない。それでもとてつもなく愉快な気分だったのだ。

「お前、本当に変な奴だな」

ひとしきり笑い合った後、彼がそう言った。

「それが俺の個性なら有り難く受け取らせて貰うよ」

そうあることで、彼に気に入ってもらえたならこんなに嬉しいこ

とはない。
その時は確かに、そう思った。

＊

酒を呷っても忘れられないことはある。それでも半ば夢見心地。少しは口も軽くなるだろうか？ランスは一人考え込む。
別に彼を哀れんでだとか、そんなことで優しくしているわけじゃない。実際あまり優しくできていないとかそういうことは置いておくとして。
借り部屋に戻って二人でちびちびと酒を飲み始めたが、こいつはあまり強くはなかったと思う……殊酒に関しては顕著に俺より弱い。だからこその酒だ。寝付きの悪い彼を、少しはゆっくり眠らせてやりたい。

「なぁ、ユーカー……」
「何だよ」
「逃げても良いんだぞ？」

どこにとか誰がとか。ツッコミどころはあっただろう。それでも彼は何も言わずに怪訝そうに俺を見る。

「……お前が逃げたいなら、逃げても良いんだ。お前の王はもういない。これまで俺の我が儘にお前を付き合わせてしまっていた。お前には、アルドール様に仕えなければならない理由も義理もない」
そう、振り回していただけだ。お前の命の使い道も、俺の手の中にあると決めつけていた。そんなはず、なかったのに。
「お前が逃げねぇのに俺が逃げられるかよ」

「そうじゃない。そうじゃないだろう？お前はそれでいいのか？」
「っていうかコートカードの俺がここ離れたら、たぶんこの国終わりだぜ？」

イグニス様はタイムリミットが迫っている。そうなればコートカードはユーカーだけ。そうなれば負担が増すのはユーカーだ。

「ああ、そうだな。だから俺が道化師ならお前からまず狙うな」
「……そうだな」

何か心当たりでもあるのか、彼の顔に翳りが浮かぶ。既に危険な目に遭っていたのか。

「俺さ……あいつに会った。アスタロットに」
「……え」
「気をつけろよお前も……道化師の奴には。あいつ、死霊使いみたいな技使いやがる」

告げられた名は彼の婚約者だった少女の名前。少女との面識はランスにも何度かはある。彼女を失ってからのユーカーの様子から、婚約を蹴ったものの……大切な人だったということを理解した。あの頃のユーカーは本当に酷かった。
失った人にもう一度会えるという奇跡。道化師の見せる夢。そこから抜け出して来た彼は、現実に何を求めるのだろう。悪夢は此方の方だろうに。

（まったく……俺なんかって言いたいのは余程俺の方だというのに）

嗚呼、俺なんか。お前が悪夢に戻ってきたのは、そこに残る俺を憂いてのことだろう。考えればすぐわかる。そこまでの価値が俺に

あるとは、俺としてはどうも思えないのだけれど。それだけのことをこいつにしてやれたようにも思えない。
気分的には飼い慣らした犬に、ブーメランを放り投げているような感覚。取って来ーいとか言いながら面倒な仕事を任せられ、それを成し遂げたとしてもよしよしと頭を撫でられる程度の報酬。こいつの言うこともそんなに間違っていないのが何とも言えない気分だ。確かに俺は外道で鬼畜だ。

「アスタロットは俺に自由に生きろってさ。だから俺はここにいる。土産話が後悔ばかりってのは嫌だしあいつにも愛想尽かされる」

人間ブーメラン犬改め俺の従弟は首輪で鎖に繋がれたまま、自由なんぞを語り始める。ちなみに説得力は皆無に等しい。
俺がそんなことを考えているとも知らず、綺麗な空の瞳は目覚めたことを後悔していないと言わんばかりに小さく笑う。彼はこれまでのような生ではなく、生き方に執着を始めたのだ。
何で生まれたとか、何のために生きているのかとか、そんな悩みを打ち棄てて。唯自分はどうしたいのか、それをたぐり寄せる。

「俺はあいつにもう一回会いたかった。だからカードになった。……だけど俺は死んでも願いが叶うんだ。だからお前を殺すような馬鹿やろうなんて思えない」

彼は笑う、夜に似合わない明るい空色で。その目の中に雲一つ無い。迷いの色などあり得ない。
ある種の諦めの境地？それは死を見据える瞳だ。だけどそれは自暴自棄だった俺やお前のそれとも違う。人の限界、終わりを認め諦めている。永遠なんてあり得ない。それを知っている瞳だ。
その諦めを知り抗わない潔さ。その中に宿る生の色の何と美しいことか。

（……ユーカー、お前……）

自分の心その方向。何を思い悩み考えるのか。それを正しく理解して、歩く道をもうお前は見つけたのか。やっぱり俺はお前が羨ましい。俺は道こそ見出したとて、理由が未だに彷徨っている。心の在処も行方不明。なんとくなく生きているのは俺の方。

「いいかランス、俺がここにいてやるのはアルドールの阿呆のためでもあのクソ神子のためでもねぇ。俺のためだ」

そして、そう言い張る。そう言い切る。それでお前は良いのか？

「俺のためじゃなく？」

「自意識過剰じゃね？これだからイケメンはナルシーで困るってのはアルドールの妹の口癖らしいぜ？」

そうやって鼻で笑う。お前なんかどうでも良いと言ってのける、晴れ晴れと。

「お前を見てれば誰でもそう思いそうなものだが」

「見んな馬鹿。観察すんな呆け。俺は夏休みの朝顔とかになったつもりはねぇぞ？」

「そうだな。お前の髪は向日葵っぽいな」

「論点そこじゃねぇよ、向日葵に謝れ」

「お前じゃなくて？」

「ボケてやったんだよ。最近お前のツッコミの切れ味が下がってるからな。てめぇは基本ボケとツッコミの両刀だろうが。何俺はボケ専門ですって顔してんだよ。腹立つ」

「なかなかそれっぽい言い訳だけど、今の絶対素で間違えてたよ

なお前は」
「何でそう思うんだよ」
「1、俺がそれを期待している。2、俺はドジっ子属性に弱い。3、その方が面白いから」
「4、俺をからかって遊んでいるに来月の給料半分」
「流石だな。何故わかった？」
「わかって堪るかっ！ていうか何で当たってるんだよ！？そうだったら嫌だなってのを敢えて言ってみたのに！！ってお前もう何だよこの空気っ！俺せっかく真面目な話してたのにっ！！なんでそうやっていつもいつもいつもいつもこういう変な感じにするんだよ天然馬鹿っ！天然笑い探求馬鹿っ！」
「ああ、別に深い意味はない。唯の八つ当たりだから」
「八つ当たりかよ！？てか意味ねぇのかよ！？ならやるなっ！！」
「些細なことだ。気にしないでくれ」
「気にするわ阿呆っ！！」

再会して違和感を感じたのは、たぶんこいつ自信の変化。
押しつけない。恩を売らない。自分がやりたくてやっているだけ。そのことでお前がどう思おうがどうでもいい。
迷惑だって気にしない。文句を言われても止めない。嫌がらせのように押し売りのごとくお前を支え助けて守る。だから感謝だって受け入れない。そんな言葉は言わせない。
墓の前でだって泣かせて堪るか。これはそういう勝負なんだと彼は言っているようだ。命が燃え尽きる刹那まで、仕える人に馬鹿な奴だと最後の最期まで笑わせるのが道化の仕事。こいつは騎士だけど騎士じゃない。主を恐れず敬わず……時に主さえ馬鹿にする、道化のような不思議な騎士。
でも俺もひねくれ者だから、そんな風にされたらその勝負、負けられない。俺は負けず嫌いだから、何が何でも泣いてやるさ。お前に笑わせられたりしない。ちゃんと悲しむ。悲しみたい。お前のこ

とでそう在るのが今の俺らしさの一つ。一つに過ぎなくても欠けてはならない大切な欠片の一つ。お前のことで悲しめなくなったならそれはもはやたぶん俺ではない。

（お前が逃げてくれないなら、俺は見ている）

お前という人間がカードとして道具として使われて……目の前で傷付いて使い古されて殺される姿なんか見たくない。だから遠い何処かで死んで欲しいだなんて、これも俺の我が儘。お前はそう言っているんだ。

目をそらしたりはしない。最期までお前を見ている。先に倒れるのがどちらかはわからないけど。

それが礼儀だ。それが俺にしてやれる唯一のこと。お前にありがとうなんて届かないだろう？受け取って貰えないんだろう？悲しんでも聞いてはくれないんだろう？それなら俺はずっと見ている。

それでも最後に、俺はもう一度聞いてみる。この疑り深い性格には、ほとほと呆れてしまう。

「でも本当にいいのか？」

「何が？」

「俺はまだまだ未熟で至らない人間だ。それは俺の仕える人も俺以上にそんな感じだ。それはお前を困らせて、傷付けて、嫌な思いをさせることにもなる。お前は別にそんな思いになる必要はないんだから……」

「お前はともかく……アルドールか。そうだな、考えとく。それでも俺は借りは返すぜ。じゃないと俺の気が治まらねぇ」

「あの女には借りがあるんだよ。それ返すまで面倒見てやるさ」

「ルクリースさんに、お前が？」

「出会い頭に跳び蹴りくらって、その後脳天延髄蹴り食らって吊

されたし、俺はあのクソ女に代わってアルドールの阿呆を二回もを助けてやったし、それで足捻ったし……恨みはまだまだ尽きないぜ。この恩を全部アルドールの馬鹿にきっちり三倍返しで払って貰うまで仕方ねぇからなぁ、あいつの傍にいてやんよ」

恩返しをしろと言いつつ、それは守ってやると言っている風にしか聞こえない。それはそうとして、俺はこの従弟を弄るネタを一つ見つけた。こいつを弄ぶことはもはや俺の趣味というかライフワークというかそんな領域に来ている。どうしてそんなことになったのかは俺にも良くわからない。

「なるほど。そういう趣味だったのか」

「……？趣味ってなんだよ？」

「出会い頭にそんなことをされたルクリースさん相手に仄かに未練を持ったり、手酷い扱いしかしてこなかった俺なんかになんで懐いてくれるのかと思ったが……そうかそういうことだったのか」

「おいこら待て。なんか変な勘違い妄想してねぇか？」

「思えばお前には昔から自虐やら自傷やらの癖があったな」

「失礼だな！！俺の何処がMだ！ええぇ！？どっからどう見ても俺はSだろ！お前は人間磁石でSNだけどな！！」

「えー……？」

「その不服そうな声はなんだよ？」

「やっぱり俺の身内贔屓目無しに見てもお前は絶対Mだと思う」

「つぅか自分のよりそっちが不満なのかよっ！！」

別に本気で言っているわけではないが、言っている内にそんな気もしてきた。あ、何だ。俺悪くなかったんだ。そう思わせる酒の力はやはり凄い。

こいつは怒り上戸と泣き上戸が混ざっているのか、「俺はMじゃねぇし」と半泣きで啜り泣いて拗ねていた。その内うとうとし出し

たようなので、俺はユーカーの部屋を退散することにした。
気分はそんなに悪くない。適量の酒を飲むに留めた。それでも足下はおぼつかない。それはきっと、酒だけの所為ではなく……あいつの言うよう俺にも疲れが貯まっているのだろう。

「たまには忠告にも、耳を傾けてみるか」

神子に言われたように、従弟に言われたように。自分に充てられた部屋まで辿り着けば、とてつもない睡魔が襲ってくる。それに抗っても明日きちんと働けるのか解らない。
いつものように、一介の騎士として、最低の部屋を用意されているのではない。今回は、新たな王の使い。用意された客室は上等で、部屋に飾られた花の香りは素晴らしいし、寝具の清潔な匂いと寝台の柔らかさと言ったらもう……それに抗うなんて馬鹿らしくて、馬鹿らしくて……それ以外の感想を抱けないままに、泥のように眠りに就いた。

＊

願い事が叶うのなら。カードとしての運命を受け入れるなら、チャンスが与えられるという。禍々しいような輝きの恐るべき星の降り注ぐ夜、俺は夢に魘された。
あの頃は噂に惑わされながら、北に北に馬を奔らせていた。
北部出身の俺が南部に。南部出身のユーカーが北部に。故郷と別の場所に向かわせられたのは指揮の関係上という事だったが、家との確執を知る王が、それを気にせず力を奮えるようにと考えてのことだったのかもしれない。久々に会った伯父さんは、以前より年老いていたが……俺には相変わらず甘かった。兵達の連携も悪くはなかった。だから南端から攻めてきたタロック軍を追い払うことに成功もした。

それでも胸騒ぎは止まらない。北へ戻れば戻るほど、悪い噂が聞こえてくる。

俺が願ったのは“カーネフェル王の無事”。そうだ、その願いは叶えられた。でも、そのカーネフェル王はあの人じゃない。俺はあの人が死んだなんて信じられなかった。だから、あの人を蘇らせるなんて事……願いたくもなかったんだ。認めたくない一身で、俺は都を目指していた。

ユーカーとの再会は、絶望と希望。

カーネフェルはまだ終わらない。あの人の願いを俺は守れるチャンスを与えられた。それは紛れもなく希望。それでも俺はまだ償いから逃げることは出来ないのだ。まだ死んで楽になんてさせてもらえない。この命の最後まで磨り潰されるまで、最後の血の一滴まで償いのために生きろと言われるが如き絶望。

それは仕方ない。そうも思った。

俺がそれを知ったのは、王に仕えるようになってしばらく。それまで俺は何も知らずに脳天気に罪深く年月を貪っていた。

城に出入りするようになって、時折聞こえてくる噂話。都貴族達のひそひそ声。それは俺や俺の従弟を貶めるための根も葉もない噂なのだと思っていた。

だけどある時、それが本当だったのだと俺は知った。目の前が真っ暗になり、上手く息も出来なくなる。がくがくと身体が震えた。苦しくて堪らない。

だけど従弟は強かった。いつも平然と毅然として。何を言われてもその三倍は言い返し、相手を打ち負かしていた。

でも俺はそんな風にはなれなくて、言い返せずに口ごもった。だってそれが本当なんだって俺はもう知ってしまった。彼だって俺の方は唯の噂なのだと思っている。自分が傍にいる所為で嘲笑の的に加えられて風評被害に合っているだけなのだと信じ、俺のこともよく庇ってくれた。

庇われれば庇われるほど、俺にはそんな価値がないと思ってしまう。同じ志で王に仕えられるはずもない。彼の父親も確かに最低だけど、王に対する忠誠心は本物だ。だけど俺の方はそうじゃない。どんな顔をしてこれからあの人に仕えればいいのだろう？と、うつむいてばかりになった。そんな俺を心配してくれる、従弟にも何も話せない。

彼のそれも誇れるものではないけれど、俺の生い立ちはもっと羨めるものじゃない。

俺の目の青。その色の深さは俺の血が許されないことだから。昔の俺は俺のことを何も知らずに生きていて、だから平然とあんなことを口に出来たんだ。あいつのことを本当の弟みたいに思っていた。面倒くさがりで手のかかるところまで目に入れても痛くなかったくらい。出来るのにしない。手を煩わせるその行為は家族からも放置されていた俺のことを、確かに必要してくれていた。そう言われているようで嬉しかったんだ。

でも俺は知ってしまった。俺はお前とは違う。どんな顔をして領地に戻ればいいのか。どんなつもりでこの名を名乗ればいいのか。胸を張って家名を掲げることが出来ない。俺なんかがどうしてお前の兄貴面をしていられるのだろう。

お前はその目のために自分を追い詰めたけれど、もっと本質的な過ちは俺の方だ。俺は本来あってはならない。そもそも俺がいなければ、お前がそんな風に生まれることはなかったかもしれない。それくらい、俺の罪は重い。

ここでこうして何食わぬ顔で生きて息をしていることの罪深さ。それをどう打ち明ければいいのか。お前にだって話せない。

このままじゃ俺も母さんみたいになってしまう。湖が俺を呼んでいる。でも、その前に言わなければならないことがあった。父が王に謝らないというのなら、俺が謝る。父が償わないというのなら俺が償う。

生まれてきてごめんなさい。泣きながらそう告げた俺をあの人は、お前のせいじゃないと小さく笑った。俺は信じられなかった。俺なんかを許すその人の……広すぎる心に胸を打たれた。

彼女の心変わりを招いたのは自分が至らず不甲斐ないから。それは彼も彼女も悪くない。ましてやお前が悪いはずもない。悪いのは全部私だよ……王は少し寂しそうにそうつぶやいた。

俺はそんな、あの人の懐のでかさに惹かれたんだ。これが王の器かと、彼を見上げて呆気に取られた。そして俺は騎士として生きることを決めたんだ。騎士の家の子だから騎士になるんじゃない。この人に仕えたいから騎士になる。俺はそんな器を持たない。俺では王にはなれないから。だから俺は騎士になってこの人を支えたいと思ったのだ。

そんな大きすぎる人を失うことは、世界が逆さまになるような衝撃。地が落ちる。空へと落ちる。俺ももう立ってはいられない。もうお終いだ。終末だ。もう笑うしかないと、狂い出しそうな俺を、つなぎ止める者がまだった。それが希望と絶望、そしてその運び手。

そんないかれた世界にもまだ、変わらない者がある。前進している。成長している。それでも本質はなんら変わらない。そんな彼の変わらなさは、ある種の永遠だ。天地が何度入れ替わっても彼はそのままなんだろう。それは指標だ。俺の心の。北を南を東を西を、俺に教えてくれる光。その温かさを慈しむ気持ちを思い出させてくれたのは、希望と絶望という名の王だ。その凱旋の名はまだ未定。彼が潜る凱旋の門が天か地獄かはわからない。このままついて行っていいのかという不安もある。それでも俺はあの少年に、かの人の面影を見た。許し慈しむ、あの人の優しさを信じたい。その強さが変えられるものがきっとあるのだと信じている。あの優しい人ならば、一枚を除いて全てが死に絶えるまで続くという悪魔のゲーム、神の審判。それを覆してくれるのではないか？

あの人はユーカーをあんな目に変えたんだ。俺では片目を外させるのが精一杯だったのに。それはなんだか悔しいけれど、凄いなと

も思う。感嘆もする。
あの人は、俺も変えてくれるのだろうか？迷わずに生きられるよう、そんな揺るぎなきものを……心に宿せるようにと。
でもあの人はまだまだ成長過程。しっかり支えて守ってやらなければ。彼は与えられる者にはならない。彼が立派な王になれるかは、彼自身だけではなく周りの人間達にも関わってくることなのだから。
夜が明けたら、眠りが覚めたら、気を引き締めていかなければ。そう眠りの淵で言い聞かせる自分の脳裏に蘇るのは、自分のそれによく似た声。

（俺が、道化師なら。俺が狙うなら……まずはお前から）

そう言ったのは確か自分だ。

「……っ！！」

暗い室内。飛び起きる。カーテンを開ければ、もうすぐ明け方といった時間帯。
何時間かは眠っていた。それでもあの言葉が蘇る。足は勝手に扉の外へ。足音を忍ばせる余裕もなく、向かう先は飲み明かした人の部屋。
鍵は掛かっている。あの寝ぼけた従弟が自分でかけたのだろうか？かけろとは言ったが聞こえていたのか？それとも誰かが入って締めた？

（くそっ……）

どうして俺はちゃんと施錠の音を聞かなかった？こいつは最初に狙われる。道化師にも目を付けられているという話だった。一人にしてはいけなかったのに！

それでも冷静な部分の頭は、もし唯寝ているだけだったらどうするんだと騒ぎ出す。せっかく熟睡しているところを邪魔したら最悪だよと。しかしそんな声は聞こえない。もしそうだったら俺も安心できる！それでいいじゃないか。ここで確かめないで引き下がるよりは余程良い。

俺と出会う前の従弟は、もう少しばかり聞き分けがなかったようで、大人しく病人なんか演じる子ではなかったそうだ。その時に身につけたという特技。使う機会なんかあるものかと聞き流したが、一応記憶の端には留めていた鍵開け術。それを従弟よりは時間を掛けて、それでも出来うる限り素早くこなし、扉を開く。

床にもテーブルにもいない。ベッドにもいない。ソファーにもいない。

焦って混乱しそうになるが、クローゼット、机の下……ベッドの下一つ一つしっかり確認。血なまぐさい臭いはしない。ここで事件は起きていない。そう自分に言い聞かせた。

「……あれ？」

やがて気付く違和感。ベッドにはいない。そう思ったがいた。夏だというのにしっかり頭から布団を被って丸まっているらしき膨らみ。

南部の下の方育ちの彼には、南部最北端の夜は夏といえども寒いのかも知れない。北部のアロンダイト領に来たときは、よく夏でも長袖だったのを思い出す。

それを恐る恐る捲れば、彼の何と馬鹿そうな顔。どんな夢を見ているのか。へらへらと笑っている。馬鹿みたい“に”可愛くはないが、馬鹿みたい“で”可愛いが、馬鹿“だからこそ”可愛いが、それが少しばかり憎らしくて、その頬でも抓ってやろうかと思う。こっちの気も知らないで。酔っていて判断能力の鈍った自分のことは

棚に置いておく辺り、酷い発言なのは自覚している。それでもどうせ聞こえていないんだし別にいいんじゃないか？

「まったく……人に心配ばかりかけるなよ」

そう呟いて、ああそうか。俺は心配していたのかと遅れて知った。いやでもそれは普通だ。普通に心配くらいするだろう。だってこいつは俺の大事な弟みたいなもので、同僚でそれで友人だ。その心配をしない方が非常識だ。俺はこれまでその非常識に傾いてしまっていた。

だからそんな普通のことが当たり前のように感じられる。今に少しだけ感謝を覚えたが、その感謝の相手が神などではないことだけは確かだった。

世話を焼くのは割りと好きだ。分かり易く、力になれている気がするし、とても感単に必要とされているような錯覚に陥る。それが迷惑なんだって言われたなら、何も出来ないししないだろう。それでも本当に嫌ならこいつは年甲斐もなく本当にマジ泣きするか、或いはぶん殴ってでも止めさせる。もしくは全速力で逃げるかだ。

前にとあることを頼んだら、本当に泣かれて困った。その翌年は流石に殴られた。その次の年から逃げられた。

それはそれとして、面倒臭がりのこいつは誰かが世話をしてやらなきゃいけないし、こいつはこいつで構われるのが好きみたいだし、世の中バランスってものはそれなりに取れているのかとも思う。むしろ構われたいがためにこいつは何もしないんじゃないかと時々疑うほどだ。

それでも心配はする側より、される側の方が幸せだという。そんなものが幸福の定義なら、俺たちも少しは報われているのかもしれない。父や母が心配なんかしてくれなくても。もう出来なくても。それでも、まだ……心配出来る、心配してくれる相手はいる。

「イグニス様はそう言いたかったのかな……」

自分を心配してくれる人がいることは、十分幸せなこと。幸せとはそんな、本当につまらない……些細でどうでもいいような、そんな小さな事なんだって。

0，4：Multi famam， conscientiam pauci

そろそろ0章軸の話終わりにしたい。でも0，なんとかとかやっちゃったからこれ9までやらなきゃならんのか？馬鹿ですねこの人……。いきなり次から1とか振っちゃ駄目ですかね……駄目ですね。

0，5：Fortuna caeca est.

はじめまして。彼はそう言って、私に手を差し伸べた。
けれど幼い私はその手を振り払い、彼に冷たい言葉を浴びせた。

「あんたなんか、私のお兄ちゃんじゃない」

＊

（暖かい……）

それは私の見ている夢だろうか。フローリプは今目にしているものが信じられない。
すぐ傍にアルドールが居る。一緒に旅をしたけれど、こんなに側に寄ったのは数える程しかなかった。彼を私が殺そうとした時に一度抱き締めただけ。そうあの時だけ、私が愛しい人に近づけたのは。
でもその人は本当に脳天気な顔で寝ているから、そんなことなかったんじゃないかとさえ思う。辺りを見回すと、部屋はまだ薄暗い。私は見知らぬ場所にいる。ここは何処だろう。トリオンフィの屋敷だろうか。それでも違う。私の部屋はこんなのではない。でもそうならば、どんなに良いか。全部嘘。そう全部嘘。
この部屋を抜ければ父様母様姉様が居る。私の隣で爆睡しているアルドールを見て、あのメイド女が大騒ぎをする。姉様も少し機嫌を悪くする。それでもこれは私の特権。妹の特権だ。女として見られていないからこそ、こうやって誰よりも近くにいられる、守って貰える。そう、傍にはいられないけど。
今見つめ返せば、何処か虚しい。私は何がしたかったのか。私が欲しかったのは、何だったんだろうか。アルドールは私に付きっきりで看病してくれたのだろう。それは私の望んだ気持ちではないか

も知れないが、私が大切に思われていることには変わりない。

「ルクリース……」

あんな女。最初は大嫌いだった。気に入らないところばかり、それなのに……それなのに。私は彼女を死なせた時、とても大きな後悔を知る。もう帰らないのだと知れば、途端に慕わしさが募る。その思いは恋のように突然燃え上がったりはしない。それでも一瞬で冷めて消えることもない炎。じりじりと私の身を内から焦がしていく。私は彼女に恋こそはしないが、私は彼女を愛している。だからこんなに後悔をしている。もしこの場で首を吊れば、腸を引き摺りだしたなら。それで奇跡が起こるのなら、彼女生き返るのならば、私はその苦痛を受け入れる。でもそんなことはあり得ないと定められている。

「……なぁ、アルドール」

小さな震える声を、絞り出して縋ってみるけれど……泥のように眠る兄には、何も聞こえてはいないようだ。或いは彼にもわからないのか。だから何も言わないのか？

「償う相手を失った、私は誰に……何をどう償えばいいのだろう？」

償いとは本来、傷付けた相手に行うもの。復讐とは本来、傷付けられた相手が行うもの。

だけど私が傷付けた人は、私を許して死んだ。その復讐を望んでも、彼女が私を殺す日は来ない。もう終わってしまったことだ。

それと同様。私の償いは、宙に浮いている。何も出来ないままに、唯罪だけが残されるのだ。

夜風に誘われるよう、見知らぬ部屋の窓を見る。星々が散りばめらた空に、船で見た景色を思い出す。私は半ば上の空で、彼女の話を聞いていた。アルドールのことばかり私は考えていたから。もう彼女は私に何も教えてはくれないのだ。

「私は馬鹿だ……私は馬鹿だ」

今ならまだ間に合う。今なら、まだ。

これで終わりにしよう。彼の中では始まりもしていない思いでも。私の一方的な思いでも。

アルドールは優しいから。私を好きになんかなれなくても、なるための努力はしてくれるだろう。

それがどんな意味の好きだとしても、失えば辛いのだ。その好きが大きくなれば、なるほど……なくした時に辛くなる。

（それなら……）

私に出来ること。最後に出来ること。それは……それは……、これ以上彼に近づかずこれ以上親しくなる前に、私が消えることなんだ。それがアルドールにしてあげられる唯一のこと。この優しいお兄ちゃんが、これ以上傷つかないように……早急に、迅速に私を失わせてあげること。

私の幸福値はもう尽きかけて。常に誰かが傍にいてくれなければ、ならない。それは彼にとってとても負担だし、ずっと続けられることではない。

でも幸福値は減り続ける。生きていること、それは幸運。呼吸をするように幸せは減っていく。だからまもなく私は不幸に見舞われ死んでしまう。この手を放したなら何分後？何時間？それでも私はこの手をもう放すべきなのだ。これは私の物じゃない。この国の物なのだ。

「アルドールは私の、お兄ちゃん……なんかじゃない」

そんな枠に留まっていてはいけないと世界が言う。私のお兄ちゃんは王様になる人だから、みんなのもので私のものじゃない。そんな風には生きられない。欲しがってはいけなかったのだ。

だから手を放そうとする。だけどしっかりと握られていて、力では敵わない。私はその手から抜け出せない。

そんなことを続ける内に、また急速な眠気と目眩。

今私が目覚めたのは、脳への負担を一時的にアルドールが治してくれたのだろうか。でもアルドールは零の数術使い。それをなかったことには出来ない。

チャンスがあるとするなら……この手が離れたその瞬間。私は瀕死の身体に鞭打ってでも、そこで自力で目覚めなければならない。残り僅かなの力と幸せを、振り絞って……意識が途絶える直前に、私は私の脳を癒す。

＊

「アルドール、フローリプさんが心配？」

視線が俯きがちになった俺に、イグニスが声を掛けてくる。

「え……？」

「僕の部下に見張りを任せておいたから大丈夫だよ。すぐに何かが起こったりはしない」

今は即位式に集中しろと、叱られている。久々にイグニスに会えたのに、心配なんかさせられない。俺はいつも通りを装って、笑顔を作って笑う。

「そうだよな、ありがとう」
「……」
そんな俺の虚勢を見透かすような冷たい目で、イグニスが俺を見る。
「これから、忙しくなるんだ。感傷に囚われるなとは言わないけど、君は王なんだ。それを……それだけは心に留めておいて欲しい」
「ああ、わかってる」
俺が深く頷くと、イグニスはそこで話を終わらせる。
「それじゃあ行こうかアルドール？群衆と歴史が君を待っているよ」
バルコニーから見える景色には、沢山の人、人、人。王を待ち望む人の声。それに自分は応えられるのだろうか。
途端に生じる不安に、アルドールの足は竦んだ。
「痛っ！」
「アルドールの癖に何一丁前に緊張してるの？何様？」
それを見かねたらしいイグニスに、足を思いきり踏んづけられた。
「この僕に恥かかせたら承知しないから」
「よ、余計緊張するんだけど！？」
「いいかいアルドール？ここの誰も別に君には期待してない。期待してるのは王に対してだよ。だけど僕は君に期待してる。僕だけが君を期待している。そんな僕の期待を裏切ったら絶交物だからね」

真正面から顔を覗き込まれる。よく見ると睫が長い。本当に綺麗な目だ。作り物みたいに彼は……彼女は綺麗だ。
あれから何も聞けていない。イグニスは何者なんだろう？昔から彼は彼女だったのか？それとも……彼は彼女のなのか？

（いや……イグニスは、イグニスだ）

今まで俺が友達付き合いしてきたのはこの目の前のイグニスだ。喧嘩をして仲直りして……そうやって俺を支えてきてくれたのはイグニスだ。それは彼が彼女であっても揺るがない。揺るがせてはならないものだ。
本当に大切な友達だ。彼が彼女だったと認識しただけで、いきなりそれが崩れてしまう程度の友情だったのか？
ギメルにそっくりの顔で覗き込まれて、心臓の高鳴りが緊張以外の意味を孕む。だけど、それはあってはならない。これは緊張なんだと言い聞かせる。それでも少しだけさっきより、緊張は和らいでいる。当たり前だ。その質が別物にすり替えられたのだから。

「ああ、頑張る。俺はイグニスを裏切りたくはないから」
「よし、言ったね。それじゃあ精々頑張って。その頑張りってものがどの程度か見せてもらおうじゃないか」

すぐ傍で見ていてあげると言われて、安心する心がある。何があってもきっと大丈夫だと思える。イグニスが傍にいてくれたら、きっとなんとかなる。俺は、それだけで大丈夫。
イグニスは間違わない。彼女の言うとおり、そのままの道を進めば……きっと俺は何も間違わない。これ以上……もう何も。

0，6：Fortuna amicos parat，inopia amicos

カーテンの隙間から、差し込む朝日に無理矢理眠りの底から意識が浮上させられる。

眩しいのはあまり好きじゃない。普段隠してる分、特に右目は光に弱い。しかし光以上に不快なのはズキズキと痛む頭痛だ。

「頭痛ぇ……」

ユーカーは、小さく呻く。やっぱり酒は苦手だ。何で酒なんか飲んだんだっけ？この怠さは間違いなく酒だ。しかし寝起きの頭ではまだはっきりと思い出せない。

それでも身支度を調えなければ。そうすりゃ嫌でも気が引き締まる。眠気も少しはマシになるだろう。

「……って俺の眼帯がねぇっ！！」

やべぇ。何処かに落としてきたのか？あれがないと、あれがないと、この部屋からも出られやしねぇのに。っていうかもう何が何なんだか。何もかもが面倒臭い。怠い眠い二度寝してぇ。そもそも何で気ぃ引き締めねぇといけねぇんだっけ？その理由も分からなくなる。眠い。眠い。唯眠い。

再び寝台に倒れ込んだ俺の耳に、届くのは誰かの声。聞き慣れた男の声。

「お早うユーカー！」

朝っぱらから聞きたくない奴の声だ。そりゃ爽やかオーラ纏ったお前なら朝日とかの下にも絵になるだろうさ。しかしこれから二度

寝を仕様としている俺の前にそんな爽やか物質が現れてももはや公害だ。せっかく怠惰に傾いたこの部屋の空気が汚染される。

「ぐっないぼんぬいぼぉなのって。つうわけで俺は寝るから」

もぞもぞと毛布にくるまれば天国だ。この至福の一時を邪魔する奴は相手が誰であっても許さない。そう、この日の出と共に床に就く気分は最高だ。これから愚民共がせかせかと働き出すというのを見下ろして、俺は颯爽と昼寝に勤しむわけだ。堪んねぇ。

「こら、今日が何の日か忘れたのか？」

くるまってる布団ごと、床に引き摺り下ろされた。強かに腰と頭を殴打した。頭痛はよりいっそう痛みを増した。

「なにしやがんだよぉ……らんすのばかやろうが」

「ほら、水持ってきたから飲め。少しはすっきりするだろう？」

手渡された容器の水はよく冷えていた。確かに次第に頭もはっきりしてきたようにも思える。

「つか何でお前がここにいるんだ？」

確かこいつには別の部屋が割り当てられていたはずだ。それ以前に俺は鍵を掛けて寝たはずだ。しかしこの男は、にこりと人の良い笑顔で笑い、それに似合わぬ言葉を紡ぐ。

「ああ、気にするな。唯の不法侵入だよ」

「ああ、なんだ。……ってさらっと何言ってやがるんだ！！」

俺が遅れて突っ込めば、ランスが真面目な顔になる。何だって言うんだ。

「どうにもお前が気になって眠れなかったんだ」

「は……？」

その一言に様々な推測が頭の中を駆けめぐる。意味が分からないなりに、脳内検索で弾かれたのは、昨日こいつと話したことだ。

（もしかしてこいつ……道化師に狙われるのが俺だと思って心配してくれたのか？）

そんな風に誰かに心配されること何て、久しくというか殆ど無かったことだから……嬉しいようなこそばゆいような、そんな気持ちが浮かんでくる。この時の動揺のおかげで、眠気など何処かへ飛んでしまった。

お礼を言うべきだろうか？いや、こいつなんかにそんなこと言うなんて俺のプライドが許さねぇ。大体俺の方が強いカードなんだ。それなのに心配だなんて俺を馬鹿にする行為じゃないか。

だから不満は覚える。それでもこいつが俺にアクションを返してくれることなど滅多にない。それは純粋に嬉しいのだ。なんたって俺はこいつの墓に手を合わせる図を想像できず、俺の墓にそうされることしか思い描けない。その時にこいつは泣きもしないとそう簡単にイメージできる。こいつはそれくらい俺なんか、基本的にどうでも良い人間だ。そうなんじゃないかと、思っていた。

（……でも）

段々と思い出す。酒を飲みながら交わした会話。あいつは、逃げても良いと口にしていた。俺に意見を押しつけずに、何かを迫るこ

ともしない。そんなあいつを見るのは初めてだった。俺の意思をあいつから、聞いてくれたのは気に掛けてくれたのは……本当に滅多にないこと。でもあれは夢じゃなかったのか。それともこれも夢なのだろうか。だって今もこいつは俺の身を案じてくれている。何て言い返せばいいのかわからずに視線を上げれば、心配していると言うより、少し怒っているというか呆れているか、従兄はそんな顔になっていた。

「お前のことだ。やはりと思って来てみれば、この一週間で洗濯物を貯め込んで！クローゼットの中のシャツも上着も皺だらけだし我慢ならないというわけで、クローゼットの中身は洗濯に出させて貰った」

「……はぁ！？」

俺のモノローグを返せ。ちょっと感動とか感謝してた俺の純真さに謝れ。

ユーカーがクローゼットへと走ると、そこは蛻の殻。このままなら人1人くらい隠れられそうな十分すぎるスペース。昨日掛けておいたはずの着替えがそこにはない。

「お前は、何てことをっ！！俺に何着ろってんだ馬鹿！！今着てる服しかねぇじゃねぇか！！」

「今日は天気も良いしな。その内乾くだろう」

「そういう問題じゃねぇよ！もうすぐ敵攻めて来るんだぜ！？洗濯物なんか暢気に取り込んでる暇あるかっ！！」

「問題ない。大体あれは冬服じゃないか。久々に城に着たら、夏服が支給されていたぞ？はい、これお前の分」

「くそっ……八月に入ってからって軽く嫌がらせじゃねぇ？衣替えって六月とかだろ。もっと早くに寄越せよって話」

「まぁ、俺達はその頃から遠征に行っていたわけだから仕方ない

だろ」
「そりゃそうだけどよ。つうか俺暑いのとか嫌いなんだよ」
南部出身とはいえ、元々幼少時代は引き籠もり生活していたわけだ。長時間の日光には慣れない。たぶんこの夏の炎天下の中荒野越え有りの南部遠征に行ったら俺は倒れていただろう。溜息を吐けば相方が、椅子の上に着替えを降ろした。
「それなら夏服に文句はないだろ？」
「ある。日焼けする。それから擦り傷切り傷増える。つか夏服って癖に全然涼しげな色じゃねぇのがもうほんと嫌がらせだよな」
しぶしぶ着替えを手にとって、俺はあることを思い出す。
「そういや俺の眼帯とリボンまで持って行ったのもお前か？」
「ああ。あれはすぐに乾いたぞ？アイロンも掛けておいたから」
「お前、ほんと何処のおかんだよ。お前もう騎士止めて家政夫でもやれば？」
手渡されたそれをセットするため鏡の前に移動する俺の、背後とそれから鏡の中でランスが不満そうな顔を浮かべた。
「頭の結び目曲がってるぞ、直してやるからちょっとそっち向いて」
「曲がってるのがいいんだよ」
「またそう言って上手く結べないのを棚に上げてわけのわからない言い訳を……」
「ていうか曲がってるのが好きなんだよ俺は。好きって言うかもはや愛してる」
「はいはい、わかったから貸してみろ」

そのお節介焼きの行動に半ば呆れて俺は半眼になる。俺の頭の後ろで陽気な鼻歌が聞こえて来る。こいつはやっぱり矛盾している。基本どうでも良い癖に、暇さえあればこうして構いたがる。こいつは俺をペットか何かと勘違いしてる節がある。基本的には優しいが、人権はあんまりない。

（あー、でも……そんなもんかもな）

言い得て妙だ。死ねばそれなりには悲しいけど、すぐに代わりは見つかる。こいつがあんなに慕ったカーネフェル王でさえ、今は代わりがいる。それならそれには及ばない俺なんかもっとどうでもいいし、いくらでも代わりは見つかるだろう。友情とか、そういうものでも好きになった方が負けなんだろう。俺は何一つだってこいつに勝てるものはない。

（逃げても、いい……か）

それもそういうことだ。

俺はお前を見捨てられないから、ここから逃げられない。だけどお前はそうじゃない。だからそんなことが言えるんだ。俺の意思を尊重とか、そう思ったのは勘違いだった。

別にお前じゃなくても使える駒はいる。サボリ癖のある俺よりももっと剣が強い奴はいる。俺が必要とされているのは、俺がジャックでコートカードだからに過ぎない。

アスタロットはこんな俺を笑うだろうか？愚かだと。こんな愚かな俺まで彼女は許してくれるだろうか？

自由に生きてと言われた俺が、この様だ。自由に生きているはずなのに、俺は今もとても不自由だ。こいつを見捨てられれば、きっともっと自由になれるんだろう。しがらみも過去も捨てられる。願

いも叶えられる。

（……だけど）

長く一緒にいすぎたんだ。だからしがらみと切り捨てることが出来ない。そう簡単に見捨てられるような相手ではない。

俺じゃ王になれない。守られはせず、使い捨てられる。俺はそういうカード。

下位カードは国にとっては必要ない人間だ。現にそうだ。ルクリースが死んでもこの国は、この世界は変わらずそこにある。

だけど上位カードはそうじゃない。死ぬべき人間じゃない。アルドールの阿呆はどうだか知らないが少なくともランスはカーネフェルになくてはならない。下位カードの幸運と命を犠牲に捧げてでも、守らなければならないカード。

こいつは自分自身の命をどれだけ軽く見ているかは知らないが、エースカードのアルドールのためなら他のカードの犠牲を受け入れるだろう。俺がここから逃げない限り、こいつはその中に俺を組み込む。そうせざるを得ない。その時こいつは俺を助けてはくれないのだ。それまで俺が何度こいつを助けたとしても、こいつは俺を助けない。見返りなど無い。思いを捧げても、報われるとは限らないのがこの世界の在り方だ。心は目には見えない。だから金ほど分かり易く、何も表せはしない。

こいつが俺をその内、見捨てるんだとは知っていても……それでも見捨てられないのが、俺の抱える弱さなのだろう。

椅子に座らされながら鏡中を見上げると、きっちりと整えられたリボンを見て満足そうに笑う従兄がいて……その姿に馬鹿みてぇと俺も笑うしかなかった。

＊

「あいつがへまやんねぇように、ちょっと渇でも入れてくるか」
着替えを終えた頃ようやく目も冷めたのか、何だかんだで面倒見の良い従弟はそんな事を言い出した。別にそれを断る理由もなかったため、ランスもそれに同意する。
昨日は俺も疲れていたのだろう。だからあの方を心配するこいつが気に入らなかった。でも落ち着いてみれば、浮かんでくるのは別の心だ。

「……？何笑ってんだよ」
「いや、何でもない」
「あっそ」
「……くっ……」
「何笑い堪えてんだよてめぇ！明らかに今目ぇ逸らしたろ！何かやましいことでもあるんだな！！」
「いや、親切なユーカーなんて面白い物を見たら流石に俺の笑いのツボが……くくく」
「お前って時々っていうかいつも俺に対してほんと失礼だよな」

不機嫌そうに先を急ぐユーカーに、やってしまったなとランスは思う。
唯単に微笑ましいと思っただけなのだが、そう告げて馬鹿にしてるのだと勘違いされても困る。それを誤魔化してみたが、結局怒らせてしまった。

「ユーカー、……」

彼の後を追い、フォローでもしよう。そう思ったが、追いつけばユーカーは何者かといがみ合っている。

「は？何言ってんだてめぇら」
「だから申し上げたとおりだ」

アルドール様の部屋に続く、その階段の前には数人の兵が居る。それはユーカーを通さないように道をふさいでいた。

「これは一体？」
「ああ、アロンダイト卿。丁度いいところに」

兵の1人が一礼した後、ユーカーを一瞥する。

「セレスタイン卿に言って聞かせてくださいませんか？どうぞここはお引き取り下さいと」
「何で俺が雑兵風情の言うこと聞かなきゃならねぇんだよ」
「……ユーカー」

視線で、堪えろと訴える。それに彼は不服そうな顔になり、それでも言葉を呑み込んだ。言いたいことは解る。それでもここは都だ。ここでは俺たち地方出身の騎士の身分は限りなく低い。中には一般兵以下に数えている輩もいるだろう。

「それで彼は引き下がらせるとして、私も通行不可と言うことですか？」
「はい。誰も通すなとのご命令で」
「っざけんな！誰の命令だって！？どうせあいつの命令なんかじゃんねぇんだろ？」

吠える従弟の肩を押さえて落ち着けと告げるが、気持ちは俺も同じだった。

（……厄介な）

新しいカーネフェル王をここまで守り連れてきたのはユーカーだ。昨日までこいつが見張りをしていたのは、アルドール様が心配だったから……それだけではなかったのだ。

こいつは都で頼れる相手がまずいない。それは俺も似たようなものだが、ユーカーほどではない。あの人に目を掛けて貰っていた分、やっかみを買うのは仕方ないとして、こんな緊急事態までそれを続ける者がいるとは呆れてしまう。イグニス様の言うとおり、一度都を明け渡す荒療治も必要なのかもしれない。

あいつは他の奴に見張りを頼んでも、おそらく誰も引き受けない。そういう風に言われている。それでアルドール様に何かあれば、全てはユーカーの責任となる。

だというのに即位となれば、こうして邪魔をする。昨日までは唯の少年である彼も、即位する今日からカーネフェル王。先代に引き続き、今代の王にも俺たちが親密になるのが気にくわないと考えている奴が居るのだ。

「何の騒ぎですか？」

「イグニス様」

涼やかな声に振り返れば、幼い混血の神子が居る。彼は俺たちと同じく王に会うためにここにやって来たのだろう。式典でカーネフェル王を即位させるのは彼の仕事だ。王とは事前に話すことが幾らもあるだろう。

イグニス様は微笑んでいる。でも目が笑っていない。この状況が何を意味するのかを察して、苛立っているようにも見える。

「そこの方々、邪魔です。消えていただけませんか？」

「み、神子様！？失礼いたしました！！」

シャトランジアの権力者である彼には一介の兵は逆らえない。カーネフェルがどうなるかは、この神子の匙加減に掛かっている。彼が支援を打ち切れば、この国が終わってしまうという危機感は、流石にこの兵達も持ってはいるようだった。

波を裂くように、さっさと彼は階段を上る。そして再び戻ろうとした人波相手を一睨み。

「僕は人払いをお願いしたはずですが？」

有無を言わせぬその迫力に、兵達は逃げ帰るよう走り去る。命令をもらった相手の元へ帰るのだろう、不測の事態の対処に困り。

「まったく……この状況に及んでまだ派閥争いとは救えませんね」

「返す言葉もありません」

「今騒ぎを起こしてまた厄介事が増えるのは面倒ですから、今日のところは僕に任せてください」

派閥なんてまもなく何もかも壊して差し上げますよと神子はにこりと笑う。

その笑顔に何やら思うことでもあったのか、ユーカーはそのままイグニス様と会談に背を向ける。

「……んじゃ、任せたぜ」

「ユーカー？」

会っていかないのかと問いかければ、いいんだと彼は言う。

「今はあの神子があいつにとって何よりだろ」

その言葉に、俺は納得をする。

（……そうだ）

今行って何が出来る？何が言える？あんな状態のあの方に。多分何を言っても届かない。今あの方が、傍にいて欲しいのは俺じゃない。そしてそれはユーカーでもないのだ。

傷ついたアルドール様を、誰よりも深く理解しているのも、それを今一番支えることが出来るのも、それはイグニス様だけだ。

水を差す趣味はねぇよと引き下がるユーカーの言葉に、俺も頷き頭を下げてイグニス様を見送った。

やがて即位式が始まって、それを限りなく遠くから俺たちは見せられていた。王ではなく会場の警備なんかを王宮騎士にさせるのだから、侮辱も良いところだ。だからユーカーの言うこともっともだ。それは俺の心の代弁でもある。

「ったく……つまんねぇ仕事させやがって」

「ユーカー」

それでもそれを窘めなければならないのが悲しい俺の性だろう。

「大体見たかよ？あの都貴族共。あいつを利用してやろうって顔してやがったぜ……？」

その言葉から感じる静かな怒り。彼も怒っているのだ。守れなかった自分たちと、王を生け贄に捧げたこの都の人間達を。権力を奪われた哀れな王の末路を、一番傍で見て見届けたのはユーカーだ。その言葉からはもう二度と、同じことは繰り返させない……そんな強い決意が漂う。

（もしかしたら……）

こいつは俺なんかいなくても、アルドール様に仕えてくれたのかもしれない。むしろ俺がそのための弊害になっている。その可能性に気がついた。

（……それでも、俺は）

イグニス様は俺に欲がないと言ったがそれは誤り。欲ならある。王に信頼されたい。でも長らく所有してきたこいつが王に奪われるのは気に入らない。そしてこいつが俺より王に信頼されるのは嫌だ。騎士としての俺と、俺としての俺の対立。

こいつに立派になって貰いたいと成長を見守る心と、必要とされたいからずっと駄目なままでいて欲しい。だから甘やかして騎士としても駄目にしてやろうという邪な心がある。

「ランス？やっぱお前疲れてるのか？」

黙り込んだ俺に向かって、ユーカーが問いかける。その青は俺を心配そうに見つめている。それなのに俺は何と言うことを考えていたのだろう。今の自分を悔い改める。

「え、……ええと」

俺はすぐに答えを返せず、その場で二人足が止まった。街は騒がしいが城の中はそうでもなく、遠くの喧噪を聞きながら俺たちは少し黙り込んだ。

するとそれを見計らったよう、現れた人間が居る。通路の向こう側から、聞こえてくる足音の正体。それは人間。金色の髪に青い瞳のカーネフェル人。このご時世に珍しい、まだ年若いカーネフェル

人の男だ。年は俺たちとそう変わらない。

「あ！」

久々に会う同僚との再会に、俺は気持ちが明るくなったが、従弟は対照的に途端に嫌そうな顔になる。

「……げっ」

そしてユーカーのその嫌そうな顔を見て、満足そうに青年は笑った。

＊

ぶっちゃけるなら俺は、そいつがあんまり好きじゃない。派閥だなんだって言う前に、馬が合わないそれに尽きる。

「お久しぶりですねセレスタイン卿？それにしても相変わらず不貞不貞しい顔をしていらっしゃる」

即位式が終わり、城の中にも緊張が宿る。

タロック軍はもう都の前まで来ているし、アルドールの空元気は遠目に見ても痛々しい。一見人らは何もわかっちゃいねぇようだったが。

まぁ、兎に角だ。そんな危機感を誰もが持っているはずのこの状況で、それを微塵に感じさせないその声に俺が苛立つのはごく自然の感情。そういうことになる。よくよく考えなくとも、第一声がこんな奴を好くような阿呆はまずいない。いたら余程の変態だ。少なくとも俺はそうじゃない。

ユーカーはそれを聞こえない振りで、さっさとその男の横を通り過ぎる。後ろから何やら声が聞こえたが、俺は何も聞こえなかった。しかし執念深い男だ。わざわざ嫌いな相手に近寄って嫌味を言いに来るとは本当に都の人間はろくでもねぇ。つかつかという足音が背中から迫ってくる。俺はそれに競歩になりながら颯爽と距離を離す。すると男は全力疾走。そこまでして嫌味を言いたいかこの糞野郎。そこでお優しいこの俺様もそろそろ我慢の限界だった。仕方ないから足を止めてやれば男は嬉々として俺に嫌味の言葉を向ける。

「へぇ、帰って来てたんですね。噂には聞いていましたが、どの面下げて城までやって来られたのだか」

しかしその程度にへこたれるユーカー様じゃねぇ。

「どちら様？」

俺は本気でお前誰？そういう顔で奴を見てやる。男は小綺麗な顔の、その口元と眉をひくひくさせながら、わなわなと両肩を振るわせていた。

「悪い、俺基本的にモブキャラの顔は覚えらんねぇんだわ。なんかさーもう少し特徴っつーか？キャラ立てしてから来てくんね？サラ然りそこらの髭のおっさんの方がまだ存在感あるわ」

唯イケメンってだけでキャラが立つと思うなよ。俺に覚えて貰ってるとかそういう前提がまずおかしいよな。そう言ってやればそいつは怒り狂った。悲しみを映したような美しい青い瞳だとかなんとかで、女兵士やら街娘達はもう一つ渾名をつけていたが、これのどこが悲しみの君だってんだ。今日から怒りの君とかに改名しちまえ糞野郎。

「この私を忘れたと！？」
「ひょろモヤシ系吟遊詩人はさっさと消えろよ。ここ戦争始めんだけど？」
「音楽を理解できないとは、これだから地方貴族は野蛮で困りますね」
「てめぇの竪琴の弦全部ピアノ線に変えてやろうかぁ！？あぁ！？ピアノ線舐めんなよ！！」
「お前達、同僚同士少しは仲良くできないのか？」

睨み合う俺とその男を、仲裁するように近づいてくるランス。俺たちの騒動を目にして、それでも廊下は走らない。それがランスという人間だ。先代カーネフェル王が廊下は知るなと言った命令を未だに守っている阿呆だ。

「出来るかボケ！糞ランス！！このリストラ野郎のせいで俺がどんな目に遭ったと思ってやがる」

忘れたとは言わせねぇ。こいつはその軟派な趣味が効を成し、都貴族に気に入られていた王宮騎士の1人。だからこそ、常時城に住まうことが許されてる。こいつは俺たちにの同僚にして敵だ。

「リストラされたのは彼ではなく、お前の方だからその名称は些かおかしいかもしれないが、まぁ少し落ち着け」

そのはずなのに、こともあろうに……何故かランスとこいつは仲が良い。

（ランスの阿呆っ！！）

俺じゃなくてこんなチャラ男の肩を持つのかよ。

「まったく、少しはアロンダイト卿を見習ったら如何です？貴方方はとても従兄弟とは見えませんよ」

爪の垢を煎じて飲ませてもらえとしたり顔のその男。その澄ました面に右ストレートでも叩き込みたい。しかしそんなことしようものなら、俺がランスから腕ひしぎ十字固めくらいは食らいかねない。おまけに「すぐに暴力で解決しようとするのはお前の良くない癖だ」とか言われながら矛盾した笑顔でやられかねん。あの野郎は本当外面は良いが身内に容赦ないから。

（っとなれば……）

陰で殴ったりしたら普通にランスの耳に入りそうで殴れないのは悔しいが、俺も舌先三寸。この口で招いた窮地をことごとく脱して来た男。そしてよく任務をサボっていた男。どうでもいい街の噂話と無駄話の情報量で、俺に勝る騎士はまずいない。

「黙れうっせー！トリシュたん！！」

ブランシュ卿トリシュ。俺から言わせれば唯のいけ好かない変態だが、城下においてこの優男は宮廷騎士の中でもランスに次ぐ勢いの人気騎士様だ。もっとも宮中だけならランスをも凌ぐ。そのイケメン野郎が俺の発した単語ひとつで、顔は青ざめ足はふらふらし出す。

「ぼ……僕をその低俗な名で呼ぶなっ！！」

「低俗も何もてめぇのファンの女共が影でこそこそ付けてた渾名だぜ？へぇ、流石モテ男は違ぇ。女のあしらい方も最低だな」

「僕はそんなセンスのないネーミングの女は嫌いだ！付き合う女性の理想が高くて何が悪い！唯条件は性格と顔と身分とそれに名前が加わっただけじゃないか！それなのにどうして僕のイズーは何故現れない！？」

このイケメン騎士様は、女の理想が糞高ぇ。やれ髪は輝かんばかりの金でやれ賢くやれ性格は良くてやれ顔はとびきり美しくやれそんな燃えるような恋がしたいなどクッソふざけた妄言を宣っているような御仁だ。起きてても目が覚めないならいっぺん死んでしまえばいいと割と本気で俺は思う。

（んな女いるか阿呆……）

時代が時代ならカーネフェルのお姫様になっていたかもしれないあのメイド女。　ルクリースだってあんな野蛮なんだ。アスタロットは性格はこの時代のカーネフェリー女にしては珍しいほどお淑やかだが、この男からすれば外見がアウト、チェンジとか言いかねない。もし言われたら今度こそぶん殴る。鳩尾狙いで。

「そうやって現実と非現実の区別も付かねぇからしまいにゃ、得物にも馬にも女の名前なんて女々しいもん付けてんだろうが！最近聞いた噂じゃ竪琴の名前までイゾルなんちゃら、なんちゃらゾルデって話聞いたが正気かよ！？」

「う、五月蠅い！運命の人に出会えない欲求不満くらいあっても仕方ないだろう！？」

「何年前に出版された本を語ってんだ阿呆っ！名前にも流行くれぇあんだろが！このご時世にんな名前の女がいるもんか！本の中のお姫様に一目惚れとは高名な騎士様の考えることはわっかんねぇぜ。つかあんなヒロインヒロインしてる女が現代にいると思うなよ！！現実見ろよ糞野郎！」

何を隠そう、この男が惚れたのは本の中のお姫様だ。そのヒロインと名前まで同じ女をリアル世界に探しに行くという愚行を青春と履き違えている十代後半。どうかしてるぜ。

「本には媚薬飲ませらんねぇしなー、可哀想な野郎だぜ。特に頭が」

「な、何だと！！そんなのわからないじゃないか！！本の挿絵に浸せば、そこから私のイズーが飛び出してきて私の胸に飛び込んできてくれるかもしれないじゃないか！！」

「来ねぇよ馬鹿っ！！」

「……っ、そこまで言うのなら私にも考えがあります」

言葉で負けたのがそんなに悔しかったのか、イケメン騎士は俺に向かって指を突きつけ指図するようなポーズをする。

「セレスタイン卿ユーカー！王には私から進言し、貴方には危険な外回りの任務を命じさせましょう！」

口で負けるなら、権力で物を見せてくれる。その言い草がまた勘に障る。だから俺は試合を投げる。

「けっ、やってられっか。誰があんなガキに仕えっかよ」

「こら、ユーカー」

ランスに叱られるが、別に俺は悪くない。そっぽ向けば、自分の勝ちを誇るように騎士が去っていく。本当に何しに来たんだあの野郎。このクソ忙しい時に。

「確かに都貴族に懐かれてはいるが、トリシュは今まで都を守っ

て居てくれたんだ。あの方への忠誠は本物だ。そこまで噛み付くことはないだろう？」

それはそうだが、気に入らない。ランスは知らないだろうが、俺たちが都に着いた頃……まだこの都は貴族共が宴会やらダンスパーティやらやって遊んでいたんだぞ？こいつも守りどころか、度々奏者として呼ばれていたとかそんな話も良く聞いた。褒めるより然るべき点の方が余程多い。

「だから礼を言えってか？んな義理ねぇよ。大体お前の言うあの方ってのは、アルドールじゃねぇだろ？あいつだってこれからどう動くかわかったもんじゃねぇ」

「……そうだな。何だかんだトリシュも人が良いからな。都貴族に踊らされているところがないとも言えない」

「何でそんなにあいつばっか庇うんだよ」

やたらあの騎士ばかり持ち上げる相方に、不満を漏らせば、意地の悪い笑みが俺を見ている。いや、笑顔だけなら爽やかなんだけど。なんか気に入らないから爽やかに分類してやりたくない。別に劣等感とかそういうあれじゃねぇんだけどっこは意地悪い系に分類しといてやろう。うん。

「お前も庇って欲しかったのか？」

「んなわけあるか！！鳥肌立つわっ！！」

ここまで来ると俺をからかうためだけに、敢えてあいつを持ち上げていたようにさえ思えてくる。俺の被害妄想なんだろうか？でもランスが性悪なのは事実だ。以上。

「さて、イグニス様の言葉だと……隙を作れとのことだったな」

「んだな。どうするんだ？」
「よし、俺はケーキでも作るか」
「はぁ！？」
「即位はめでたいことだしな。ユーカーお前はお茶でも淹れてくれ」
「隙ってそっちの隙かよ！？」

敵陣に隙を作れそう解釈していた俺と違い、ランスはこのカーネフェル側に隙を作れと解釈していた。

「何だ？あっちというとライクの方か？」
「その好きでもねぇよ！！」
「なるほど魚か」
「それは鱚だろ」
「以前の話は覚えているか？」
「……っ、いきなり真顔に戻りやがって」

ランスが言っているのは、カルディアで神子イグニスが口にした策。俺たちは敢えてこの都で敗れる。それを知っているのは限られた人間だけだ。

「……話したのか？」
「いや？まさか」

それとこれとは話が別だと、ランスが小さく笑った。トリシュと仲が良い癖に、仕事に私情は挟まない。立派と言えば立派だが、何だかんだでやっぱりランスは薄情な人間だ。俺が微妙な目で見ているのに気付いたのか、奴はいつも通り笑って見せる。そう言う顔は優しげだ、嫌味なくらいに。

「実はさっきな、お前達が全力疾走バトルをしている時に、兵士の女の子から季節の果物を貰ってな」
「なんでそうなるんだよ」
「いや、食料調達係だったみたいなんだけど、美味しそうだねって言ったら分けてくれた」
「なるほど、お前が時々何処からともなく食材を入手してると思ったらそんな経路があったとは。税金はこうして無駄に横流しで消費されていくのか。通りでこの国傾くわけだ。この傾国のクソイケメンが」
「そう言うな。俺の作る物は大抵お前の腹に入るじゃないか。それだと税金の隠し金庫はお前と言うことになるぞ？それに今の季節柄、フルーツケーキも悪くないかと」
「俺はアップルパイが良い。それがねぇならミートパイ」
「今何月だと思ってるんだ？まだ八月だぞ？」
「んじゃ洋梨のタルト」
「そうだな、それじゃあ間を取って白身魚のパイ包みでどうだ？」
「てめぇの言う間の次元がわかんねぇよ！！ていうか紅茶と一緒に食いたくねぇ！！大体果物何処に使うって！？」
「大根下ろしの用量で使おうかと。林檎はないけどすり下ろし林檎とかそういうニュアンス」
「お願いだから止めてくれ。ベリー系が血みどろ加工に見えてグロくなること請け合いだから」

都まで届けてやったのが誰かってのも忘れたような、薄情な城の人間達。新たな王の傍に仕えることも許されていない俺達は、戦争が始まるまで暇を与えられている。始まればすぐに前線で死に物狂いで戦わせられることになるのは目に見えていた。勿論今回の策があれな以上、そんなことをしてやる義理は俺たちにはない。その時が来るまで王には神子がついている。いくら彼女が性悪だからって、合図くらいは出してくれるだろう。

がらんとした談話室で茶を淹れている俺の背中に届くのは、皿を運んできたランスの声。

「俺は、ちょっと彼が羨ましいと思うんだよ」

「……ブランシュが？」

「ああ、それでちょっと面白いんだ」

「あの野郎が？」

「彼は俺の知らない世界を生きている。俺の知らないものを知っている。それが興味深いっていうのかな」

違うからこそ話していて面白いのだと奴は言う。

「お前が知らないこと……？音楽か？」

絵面的にはこの男にも十分似合いそうではある。しかしそうじゃないよと奴は首を振る。

「絵に描いた餅とはいえ、それを追い求める姿にはある種の情熱を感じるよ」

「その例えなんか違う。水に映った肉じゃねぇ？橋の上から犬がそれ覗いてる図」

互いになんとも色気のない例えだ。それでも言いたいことは解った。

「馬っ鹿みてぇ。何寝言言ってんだ？お前みたいな男なら、その気になれば1人でも2人でも100でも200でも女囲えるんじゃねぇの？」

「馬鹿言え。俺は騎士だぞ？剣の道に生き、剣の道に死ぬ。それが騎士としての在り方だ」

「その話だと、あの野郎は邪道に外道にも程があるんだがな。お前みたいなご立派な騎士様が、あんな脳内彼女といちゃついてる可哀想なチャラ男を羨む理由がわからねぇ」
「……そうだな」

その言葉に、ああと思った。確かにこの男は縁遠い。精霊に育てられたからなのか、俺が過保護過ぎたのか。本人が天然だからなのか。本人が剣と忠誠に情熱燃やし過ぎてストイックすぎたのか。そういう浮ついた話が聞こえない。
砦やら街やらを歩けば解るが、女共にモテてはいるのだ。これでもかってくらいには。それをこの女殺しの阿呆はボケ殺しでそれをひょいひょいかわしていく。人の好意はドッジボールの球じゃねぇんだよとツッコミ入れてやりたい。
恋なんか俺にとっては箸置きさ。あってもなくても困らない。ていうかむしろ置き場所に困る。むしろ邪魔。だからこそ理解も出来ない。だから、興味深いんだよと……こいつの言葉はそんな風に俺に聞こえた。

「なるほど、お前の精神もようやく思春期ってとこか」
「馬鹿にしているのか？」
「いやお前も人の心が解るような年になったと思うとな。感慨深いぜ」
「俺の方がお前より年上なんだが」
「それで？カードになって自分の死期を突きつけられてるような気持ちで、種の保存本能でも芽生えたのか？」
「いや、別に」

ランスは首を振る。皿は並んだがまだケーキは焼けないらしく空。せっかくの茶が冷えるのも嫌で、俺はティーカップを手に取った。

「唯、そうだな。俺は死ぬだろ？」
「……そりゃ人間だし、いつかは死ぬだろうな」
俺が曖昧に肯定してやれば、ランスも茶を啜り始めた。そして一口含んで……また再び口を開く。
「俺は俺の生き方を迷ったり後悔はしないが、それでも……一度も誰も思わずに生きて死ぬというのは、人としてどうなのだろうなと思っただけだ」
「何でいきなりそんなこと……」
「お前の世界は、俺のそれより広いだろう？それが少しだけ、羨ましく思えたんだ」
「は？」
何故そこで話題が自分に飛ぶのか解らず、口から変な声が出る。
「あの頃の俺はさ、少しだけ……寂しい思いをしたものだよ。お前が別の生き物になったようで、置いて行かれるようだった」
そこまで言われ、ユーカーはようやく理解する。この従兄はアスタロットの事を言っているのだ。彼女に恋した自分が、彼の言葉も聞かなくなる。彼女を失ってから、自堕落に陥った俺を彼はそんな風に見ていたのか。
「馬っ鹿じゃねぇの。そんなの別腹だろ。ジャンルが違ぇよ」
友情と愛情を同じ天秤にはかけられない。どちらだって大切だ。その意味は異なるけれど。……唯どちらも忠誠の前には廃れるものではあるのかもしれない。

「お前は立派な騎士だから、私情を挟まねぇで判断できる。だからわざわざ剣を鈍らせるようなことしてこなかったってだけだろ」

そうだ。俺は忠誠を一番に選べなかった騎士失格の騎士。俺は駄目な騎士だから、剣にサビを作ったってだけだ。だけど切れなくなったその剣を俺は別に疎ましくは思わない。

「お前はわざわざ敵に付け込まれるような弱さを作らなかったんだ。それがお前の強さだし誇って良い事だと思うぜ」

強くて立派な理想の騎士。奴を見れば誰もが憧れる。俺が同じようになれるとは思えないが、こいつが俺の誇りなのは間違いない。

「わざわざ弱くなる必要はない……か。確かに、それはそうだ」

「だろ？ほんと大変だったんだからな。あの道化師の野郎に一杯食わされて。俺なんか時間数術とか何とかって奴で退行させられて弱体化するわ背が縮むわで」

「そうか、やはり俺も付いていけば良かったな。それは一見の価値があった」

「ねぇよ！！」

しまった。墓穴を掘った。この自虐ネタが出る癖を改めなければ俺に幸せな明日はない。ずっとこいつとかにからかわれるのがオチだ。嫌だそんな人生っ！

しかし心の中でどんなに後悔してももう遅い。従兄はしっかり俺をからかうモードに入っている。

「いや、昔のお前は結構可愛かったじゃないか」

「そういう言い方止めろ！！」

「ああ、ごめん。今もそれなりに可愛いよ」

「そういう催促でもねぇよ！！ったく……せっかくの茶が冷えちまった」
「でも夏だし冷えた方が美味しいな」
「そんな風に褒められても嬉しくねぇし」

からかいすぎたと反省したのか、フォローに入ってくるランス。それでも俺だってそこまで単純ではない。結構繊細なんだからな俺は。褒められたくらいで機嫌を直してやるものか。第一それ俺の功績じゃないし。

「……でもお前に女ねぇ。タイプくらいは決まってるのか？」
「さぁ、どうなんだろうな」
「エレインとはどうなんだよ」
「流石に俺は、あんなに年の離れた年下相手にそんな感情は持てそうにないよ。そういう才能が俺には皆無みたいだ。……父さんなら兎も角」
「……ランス」

余計なことを言ってしまった。俺はまた墓穴を掘った。ランスがそういうことを避けているのは、未だ根強く残る父親との禍根のよるものだ。

「……あの人の見境のなさは本当に酷いからな」
「まぁな。お前の所の親父さんも俺の親父とは別ベクトルで最低だよな」
「まだ生きていたか？」

俺が北部に行っていたときに、援助してくれたのはランスの父親であるアロンダイト卿だ。女たらしで有名なお人だが、何処か憎めないのはこいつに顔がよく似ているからか。その明るい人柄なのか。

俺のことも歓迎してくれるし、叔父としてはいい人だ。人柄はいい人なんだけど、でも女から見ればやっぱ最低だと思う。

「ん、まぁ元気そうだったよ。まだまだ現役って感じで」

「そうか……」

「え、えっとな！何処で変な噂聞きつけたんだか知らねぇんだけどよ、あの人例の祭りのこと聞きつけて……俺の着替えとか支援物資にとんでもねぇもの送り込んでなんか来たからやっぱ俺も苦手だな、うん！！」

「……あの男、とうとうそこまでストライクゾーンを広げたのか」

「いや……まぁ、うん。俺もう時間数術かかりたくねぇよ。今だから冗談で済んでるけどな……」

「そう言えば今年はどうなるんだろうなあの祭り……時期的に毎年そろそろだったが」

言われてみれば確かにそうだ。毎年夏にやって来る恐怖と狂気の祭典。そして俺のトラウマの宝庫の一つ。

「いや流石に、今年は無しだろ。もう敵が目と鼻の先まで来てるって言うのに……ここでまだあんなことさせるっていうなら完全に都貴族はいかれてやがるぜ」

「それもそうだな」

「って何でちょっと残念そうなんだよお前は。そんなに俺の嫌がる顔を見たいのか。悪趣味にも程があるぜ」

「いや、お前は基本的に嫌そうな顔をしている時が一番輝くし可愛いじゃないか」

「本当にお前最低だなっ！！」

俺をからかうのが本当に、この男は好きなんだな。現に俺が心底嫌そうな顔をしているのを見て爆笑している。それでも顔の美形度

が揺るがないのがこれまた嫌味だ。いや、それを嫌味と感じさせないのが逆に嫌味だ。

「いや、あれは年に何度あるかないかの俺とお前の大勝負じゃないか」

「まぁ、俺も死ぬ気で逃げてるからな。ここのところ俺の連勝だったな」

「ああ、だから今年こそはお前を無理矢理参加させようともう城から街からお前の行きそうな場所の至る所に罠まで仕掛けていたのに」

「……お前、天然だからって公害やって済まされると思うなよ？どっかのガキが引っかかってたら通報もんだぞ？」

「まぁ、いいじゃないか。あんな所に仕掛けた罠に掛かるのはお前かタロック軍くらいかだろうから」

普通の人間が行かなそうな場所に仕掛けましたと、澄ました顔で相方は言う。

「それに付近の精霊に頼んでおいたから、もし一般人がかかったら助けてくれる手筈だよ」

「なんか俺の中で忠誠がゲシュタルト崩壊してるんだけど」

最高の騎士と謳われた男が、何をやっているんだか。

0，7：Bis vincit, qui se vincit in vic

それはあまりに唐突な終わりだった。

窓の外を呆然と眺めながら、ランスは考える。それまでなんとなく、曖昧に捉えていたカードの終わり。それが今突きつけられている。

幸福値がなくなれば、人はカードは死んでしまう。それは今まで自分が考えてきた死とは違うタイプの終わり方。

戦って死ぬんじゃない。戦いを越えた先……それでもこうして、カードは死ぬのだ。幸福値が無くなれば、不運に襲われ事故として死ぬ。それは本人がいくら強くてもどうしようもない、逃れようがない終わり。

＊

「今、何か聞こえなかったか？」

久々にこいつとくだらないやり取りをしていると、昔を少し思い出す。懐かしさからか、妙な慕わしさが胸を刺す。俺は知っていた。こいつが逃げてくれないのなら、こいつと俺の別れは最悪なものとなる。俺はこいつの命を食い潰す。消費する。カードとして利用する。それでもここにいてやると言ってくれるその優しさに、罪悪感を覚え始めていた。

その時俺は何かを聞いた。とても小さな音だ。だけど言い方が悪かったのだろう。従弟は少し脅えて、そしてそれを隠す虚勢でもって俺とその何かに噛み付いた。

「お前はすぐそうやって」

俺をからかって楽しいかと睨み付けてくるユーカー。

「……ん？でもほんとに何か聞こえて来んな。上からか？何やってるんだあいつら」

しかしそんなユーカーの耳にも何かが聞こえたようだ。いや、俺にも聞こえる。今度の音は大きかった。ここの部屋の階の上にはアルドール様の妹……フローリプさんがいる。道化師との戦いにより、数術の使いすぎで脳を酷使、結果昏睡状態に陥ったという話だった。ルクリースさんを失っただけでなく、フローリプさんもそんな様子だ。道化師に攫われていた彼女を無事に助け出したとは、言えない代償をアルドール様達は支払っていた。

「……フローリプさんが目覚めたのか？」

それなら多少騒ぎたくなる気持ちも解る。俺がそれを示唆すると、それでも素直じゃない俺の従弟は窓に向かって歩き出し、言い放つ。

「おい！うっせーぞお前ら……」

しかしその言葉は、途中で止まった。彼は窓の外に何を見たのだろう。俺が見たのは、破損した外壁の一部。それからバルコニーの装飾の金属。先程の音はこれが原因だったのだろうと、そんなことを思った。とりあえず次に思ったのは、城の老朽化の懸念。暇を見つけて改築工事を提言してみよう。そこで一旦俺は窓から視線を外した。念のためフローリプさんを他の部屋に移すべきだと思った。だからそれをアルドール様に伝えに行くつもりで部屋の外へ向かおうとした……その時だ。俺はまた、音を聞いた。

それはユーカーが黙り込んでから、ほんの数秒……時間にして2，

3秒の出来事だったと思う。俺の頭は回転してはいたが、その方向性と目の付け所はあまりに遠かった。
今度の音は先程までのものとは違う。金属や石材が石畳にぶつかる音ではない。それより軽く、それより鈍く。脆い何かが叩き付けられぐちゃと潰れる音。へしゃげる音。それなあまりに簡単に、何かが折れて壊れた音だ。ここまで来て俺は、それがただ事ではないと思い至った。普段はあれだけ騒がしいのに……窓枠に縫いつけられたように、手を掛けてそのまま微動だにしない従弟の姿が今起きたことの異常性を醸し出している。

「ユーカー……？」
「……お前は上に行け。早くっ！！」

振り返らずに彼はそう言う。それはまるで、俺に窓の外を見せたくないと言っているようで。だからこそ俺は窓へと向かう。

「……っ！？」

それを見た俺は従弟を押しのけ窓から飛び出す。咄嗟に回復数術を展開しかけ……それが無意味だと知る。辛うじて息はある。それでも……これはもう助からない。言うなればそうするだけ俺の数術代償が無駄になる。それを見越した上で、従弟は上へ行けと言ったのだ。

「……お前っ、まさか！」

振り向けば、遅れて外へと出てくるユーカー。

「お前は？、こいつは？。ルールがいまいちわかんねぇ内は、どうしようもねぇだろ」

ユーカーはJ。コートカード。ルール上、数札を殺すことが出来るし殺して良いと明言されているカード。俺はフローリプさんより上位カード。こんな弱っている彼女さえ、安らかに眠らせてやれない可能性がある。唯悪戯に痛みばかりを押しつける。それならいっそ……彼はそう考えた。

「汚れ役は、俺の仕事だ」

少女はもう助からない。何人もの死を見てきた自分たちだからこそ解る。少女の顔は青白く……その肌に張り付いた赤い色はこのまま放置していても彼女を死は襲い来る。

あちこち骨も折れている。手や足が、本来曲がらない方を向いている。息をする度、身体に突き刺さった骨が痛いのだと涙に濡れる瞳が訴える。

「……悪いな」

「……」

ユーカーが剣を構える。それに少女は目を伏せる。悟っているのだ。もうどうしようもないことを。最期の時に、少女は唇だけで小さく笑う。ありがとうと言っているように、俺には見えた。

聞き慣れた肉を裂く音。命の糸を断ち切る鋏。後は音の止まった時計が一つその場所に転がるだけ。もう戻らない魂を嘆くように赤い涙を流しながら。

「ユーカー……」

「完全には直さなくて良い。だけどあいつが見られる程度には整えてやってくれねぇか？こいつだって……アルドールにこんな姿は見られたくねぇだろうからさ」

影を映した青の瞳で、従弟が辛そうに一言、絞り出した。それに、ああと頷きかけて……俺は俺が彼女よりも弱いカードであることを思い出していた。数術代償、そして幸福値。それを使い果たせば……俺もいずれ。

「ランス……？」

動きを止めた俺を不審がる従弟。そんな俺をみて、ユーカーは言おうとして……それを制止するような、掻き消すような爆音が響く。それは近くと遠くで。遠くの方からは歓声のようなものまで聞こえる。

「……！？な、何だよ今度は！？」

「…っ！来たんだ、きっと！！」

「ああっ、くそっ！！早すぎだろうが！！」

舌打ちするや否や、ユーカーは近くの木に登りそこから一気に上の階まで飛び移る。

「お前はそいつをなんとかしてやれ！状況が状況じゃ葬儀上げてやる時間もねぇっ！！ついでに暇があったら外の情報探って来てくれ！こっちは俺と神子でなんとかする！」

ユーカーは上方からそんな言葉を降らせて、問題の場所まで走っていく。

何を勝手なことを。そう叫びたくなったが、従弟の言うことはもっともだ。万が一、この少女の亡骸が敵に手にでも渡れば、あの人はまた辛い思いをするだろう。今の内に葬ってやることで、あの人の心が軽くなるなら、俺はそうしなければならない。何をするにも情報は勿論要るが、彼女を何とかするまでは……敵に見つかっては

いけない。しかし事切れたばかりのそ体を運ぶのはなかなか難しい作業だ。身体の中身の一部なんて飛び出して飛び散っているものだってある。

「くそっ……」

今上で何が起きているのか心配だ。早く王の元へ駆けつけたい。それでも、このまま彼女を放置するのは……王の願いに背くこと。それを理解している。だから俺はまた、目先の仕事に縛られる。

舌打ちしたいのは俺の方だ。とりあえず拾えるものだけを拾って、彼女を抱きかかえれば、服に張り付く赤が肌に嫌な生ぬるさを伝える。

そのまま走れば、街はちょっとした混乱に陥る。街を混乱させるわけにもいかず、彼女を隠すにしても、街を突っ切ることは難しい。第一城壁の外にはタロックの軍勢がある。都の外に運べれば、それが一番安全なのだとは思うが俺は神子様のような空間転移など使えない。

（それならせめて……水の元素が必要だ）

城の傍には小さな森がある。そこには一つ、小さな沼があったはず。あそこなら何とかなるかもしれない。

「母さんっ！助けてくれっ！」

水辺に着くなり俺は母を呼ぶ。ここに母は棲んではいないが、これだけの淡水と水の元素があれば召喚出来る。

俺の声に呼応するよう、水面は震え……底からごぽごぽと泡を作る。そして泡と共に光る数字の群れが浮かび上がって、水面から浮かび上がる小さな青い髪。透き通るような水で出来た羽を背に、精

霊は現れる。

《……ランス！もうっ！只今が遅いわよ！！都に帰って来てたならちゃんと母さんに会いに来ないと駄目じゃない！》

俺が都の傍に住処を移してからは、母さんもカルディア近くの湖に落ち着いた。母さんは湖の精だから、基本的に一定量の真水のある場所になら移動することが出来る。今はその応用で呼び出させて貰った。久々の再会に、母さんはいきなり俺を叱り付ける。それでも……

「ごめん母さん、それどころじゃないんです」

この一言に尽きた。

《……ってあんた血生臭いわね。どうしたのそれ》

母さんは鼻をつまみながら、嫌そうな顔になる。精霊は基本的に汚れや血生臭いことを嫌う者が多い。水の精霊は特にそういうところが顕著だ。割と精霊としては変わり者に入るとはいえ、母さんもその例外ではない。それでもだ。他に頼れる相手もいなかった。

「彼女は新しいカーネフェル王の妹君です。今は城が奇襲を受けていて、落ち着いて眠らせてもやれそうにない。だから母さん、しばらくこの子を預かってくれませんか？」

《別に良いけど、そのままじゃちょっとねぇ。私も私の家に水死体浮かべたくはないし、魚の餌にしたところで、そんな魚をあんたに送ったら、あんただって嫌でしょう？》

「……ええ、まぁ」

俺は兎も角ユーカーとアルドール様が泣きそうだ。

《まぁ、そういうのが得意な知り合いの家にしばらく預かって貰うけど、落ち着いたらちゃんと引き取りに来なさいよ》

それでも俺が困った顔をしていると、母さんは渋々引き受けてくれた。しかし小さな身体の母さんにこの頼み事は、いささか大きい。

《でもそのままじゃ運べないし、何とかして貰えない？》

「……そうですね」

俺は彼女だったものを大地に降ろし、横たえる。それから俺が展開したのは、回復数術でも視覚数術でもない。それは発火数術。

カーネフェルは炎の元素の多い土地。だからよく燃える。そして城の石材は、火を閉じこめる。ここで大きな炎を上げても、城は無事のはずだ。

俺が上位カードになった所為なのか、以前より炎の威力が増している。それに土地の力も加わって、炎はあっという間に少女の身体を包み、嫌な匂いを立ち籠めて……彼女を骨へと変えていく。時間にして一時間。とても長く感じられた。

それでも時間は来るもので、俺は骨になった彼女を小さな箱に閉じ籠めてそれを母さんへと託す。それに母さんは、任されたわと小さく溜息を吐く。

《そう言えばあんた、砦の戦いで……大分無茶したって聞いたわよ。あんたまだ……》

「母さん、俺は別に死ぬ戦いはしていません。……これは守るための戦いです」

どうしてそんな言い方をしてしまったのか。俺は初めてカードの

死を目の当たりにして……自分が関わっていること、その事の重大さをようやく理解し始めているのか。
（そうだな……たぶん、そうだ）

俺は今まであんな死に方、想像したことがなかった。

「母さん……」
《何、そんな顔して……》

憂い顔も様になってるわと満更でも無さそうな笑みを湛えている母さんは、相談相手としてちょっと心配だ。それでも俺のことでここまで親身になってくれる相手は他にそうそういない。

「努力しても、どうにもならないことって……母さんはどう思いますか？」
《何よ突然……》
「俺はそういうのが嫌だなって思うんです」

どうにもならないこと。どうしようもないこと。それをそうだと認めるのは辛いこと。だけど諦めなくても認めなくても、そういうものは絶対にこの世の中には存在するのだ。

「昔の俺は……あいつに負けて、凄く悔しかった」

あいつは何も知らなかった。当たり前だ。あんな部屋に閉じこめられていたんだ。
俺が何か教えると、物知りだなってあいつが褒めるから。ついつい俺も良い気分になって、いろいろ教えてやった。剣だって歳者は俺が教えてあげたのに。元々は俺の方が先に学んでいたのに。あっという間に追い越されて、初めて勝ったと喜ぶあいつのその成長を

喜んでやれる余裕もなくて……どんな顔をすればいいのかわからなかった。唯負けることはとても悔しいことなんだって、それを思い知らされた。

「だから必死に剣の腕を磨いて、……あいつにまた勝てるようになった時は本当に嬉しかった。だけど……母さんも覚えていますよね？」

《そうね……ユーカーの馬鹿は、笑っていたわね》

俺はあいつに負けて、影で泣く程悔しかった。だけどあいつは俺に勝った時と同じ笑顔で「参った」と笑っていた。俺はそんなあいつに、また負けたような気がした。それはとても理不尽な思いだった。いろいろあってあいつが更に怠け癖を出すようになり、そこから俺が負けることは殆どなくなった。だから俺はいつまでも負けた気持ちを引き摺りたくなくて、努力に勝るものはないと強く信じるようになった。少なくとも、騎士としては俺の方があの人に信頼はされていた。だから無駄な努力なんてきっと何処にもない。やがてそれが確信に代わり始めた頃にまたこれだ。再びどうしようもないことが、俺の前に現れている。

「別に俺はあいつが嫌いなわけでもないし、嫌いになりたいわけでもないんです」

それは昨日のことで確信した。別にそういうわけではないのだと。唯昔みたいに、唯一緒に連んでいて、それで満足出来なくなってしまっただけで。あいつはそれでいいみたいなのに、俺は違う。俺だけ変わってしまったのだ。あいつは何も悪くない。悪いのは俺の方だ。だから優しくしたいとは思う。大事なのは本当だから。それでもまた違いを知る。カードという数が俺とあいつを引き離す。互いに劣等感を植え付ける。

「それでも俺は……あいつに負けるのが悔しい。俺が勝っているはずなのに、いつも勝っている気がしない」

最初にあいつを守ったのは俺の方だから。それが俺にとって当たり前になっていた。だけどあいつはそれを理解した上で、俺の力になりたいと言う。自分より弱い相手に守ってやると言われる理不尽、歯がゆさ。今だってきっと、危険から遠ざけるために、敢えて俺にこの仕事を託した。

それを俺が飲んだのは、あの人の思いを汲んでだけではないのだ。目の前でお前は役立たずと言われるのが怖かった。アルドール様が今一番、必要としているのはイグニス様だ。そしてその次に頼りにされているのはユーカーだ。剣技があいつより強くても、指揮があいつより得意でも、それだけでは足りないのだ。俺が倒せるカードは限られているから。

お前のために死んでやると口にする彼を止めるには、俺はどうすれば良いのだろうか？同じ事は言ってやれない。そして死なせないとも言ってやれない。俺ではもうあいつを守れないのだと、決められている。

今さっき……フローリプさんの時のように、敵だけでなく味方まで殺させる、後味の悪い仕事をあいつに押しつけることだって……もう二度と無いとは言い切れない。身震いした。戦慄を知った。あいつは俺のためなら、たぶん何でもやってのける。際限なく与えられた、所有権に俺は今……戸惑っている。彼はカードとしては心強い。でも何かが違うんじゃないか。そうも思うのだ。

フローリプさんの最期を見て、俺が恐れたのは……不運に襲われれば、それまでの過程など全てなかったことになって……今まで頑張ったことだって、全て無意味に変えられてしまうということ。その絶望の中息を引き取るという想像が生み出す震え。それから……彼女よりも弱い、幸福値の少ない俺やアルドール様を守るあいつは

……その幸運を犠牲にしてで俺を守ってくれるだろう。俺はそれがありがたく、そして腹立たしいのだ。

「母さんは下らないって笑うかもしれません。でも俺は生きたいとか死にたくないとか、そうじゃない。負けたくないんです。俺はあいつの兄代わりで！あいつを守って助けるのが俺だったのに……こんな悔しいことがありますか！？」

《ランス……》

「俺だってあいつを……死なせたいわけじゃ、ないんだ」

俺は人としても騎士としても、あいつに負けたくない。だけどカードは俺の全てを無駄だと嘲笑っているようで……

《……無駄な事なんてないと思うわ》

カードのことも審判のことも知らないはずの母さんが、力強くそう言い切った。慰めだろうか。顔を上げれば、彼女は俺を労る様子など微塵も感じさせない笑みを浮かべる。どちらかというと、胸を張って満足気なご様子で。

《あんたがそうね、無駄を嫌って怠けてばかりの男だったら、あの馬鹿はここまであんたに懐かなかったはずよ》

人を手懐ける魅力と人望、そして手駒の優劣も強さと才能の内だと母さんはほくそ笑む。

《あんたが一見無駄だと思えるようなことも誠実にこなす男だから、あいつはあんたに懐いたの。あのじゃじゃ馬を乗りこなすんだからあんたはやっぱり凄いわ、私の自慢の息子だわ》

負けたくないというこんな俺でも、そのまますべてを慕ってくれる。こんなどうしようもない俺で良いと、彼は言ってくれているのだと……母さんはそう言っている。そしてそれは自分も同じだと母さんは俺に微笑んだ。

「母さん……」

《何？》

お礼を言おうとした。だけど駄目だった。今そんな事を口にしたなら、とても情けない顔になってしまいそうだから。代わりに俺の口から出たのは……やはりというか薄情な言葉だった。

「そろそろ城のみんなが心配なので帰ります、では」

《ちょ、ちょっとぉ！！何で変なところでクールなのよあんたは！！そういう照れ隠しってどうなの！？私は全然好きだけどっ！！》

しかし心配なのも事実だ。そこまで嘘というわけでもない。もう一時間以上も経っている。

カードとしては一番心強いユーカーとイグニス様が付いている。それでも時間が長引き距離が離れるほど、強迫観念に襲われる。早く戻らなくては。感謝もそこそこに、俺の心は城へと向かい出す。

《……仕方ないわね》

あんたは口で言って解る子じゃなかったわねと母さんが溜息を吐く。素直に見えて誰より頑固なのだと彼女は思いだしたという口ぶりだ。

《これ、持って行きなさい》

彼女は自分が首からさげていた、首飾りを俺へと投げる。日の光に透かしてみると、それが水入り水晶なのだと解る。

「母さん、これは？」

《お守りよ。肌身離さず持ってなさいよ。じゃないと母さん泣いちゃうんだから！》

「よくわからないけどわかりました」

《よろしい。それじゃ、あんまり無茶しないでって言っても無意味だろうから無茶は程ほどにしなさいよー！あんたももう十代後半なんだから、いつまでも自分が若いと思ってたら失敗するわよー！怪我してからじゃ遅いんだから！》

自分で自分の回復をするなんて、自給自足にも程がある。それなら最初から怪我などするな。怪我するような危険と愚行は犯すな。そういう話ですと母さんが俺を戒める。

《……ってちょっと待ちなさい！》

「まだ何かあるんですか？」

《違くて！何か聞こえるわ！》

「え……？」

母さんに言われて、俺も耳を澄ます。すると確かに何かが聞こえる。森の向こう……街の方から。

聞こえてくるのは些か愉快なパレードの行進曲。

《そう言えば今日即位式だったんですって？それで街はお祭り気分なのかしら？》

「そんな馬鹿な……いくら浮ついた都の人々も、そこまで楽天的なはずがありません。もうタロック軍は目と鼻の先まで来ているんですよ？」

《……ねぇ、ランス。あんたの新しい王様って何て名前だっけ？》
「アルドール様です」
《あのね……これが私の空耳ならいいんだけどね？》
母さんはそう前置きをして、言い辛そうに言葉を紡ぐ。
《向こうから“アルドール饅頭”やら“アルドールサワー”やら“アルドール焼き”やらっていう意味深な単語と値段が聞こえてくるわ……》
「とりあえずこれが平常時なら、畏れ多くも王の名を許可無く商標利用してるということで城へ連行していましたね……」
相方は俺を散々ボケだと言うけれど、俺はそこまでボケではないと思う。あいつほどツッコミのキレはないかもしれないが、敢えて言わせて貰うなら……
「三つ目は、一体何を焼いてるんでしょうね……」

0，8：Omnes aequo animo parent ubi dig

エルス君がなんか後半エロス君になってる注意報。カーネフェルの夏の暑さは異常。暑いから変なテンションなんです、きっと。

0，8：Omnes aequo animo parent ubi dig

ユーカーが飛び上がった先、そこから煙が上がって見えた。もう少し上の階だ。ランスへ彼女のことを頼んだのは、その新しい厄介事に彼を近づけたくないからだった。

この耳鳴りの感じを、俺は知っている。ユーカーは確信を持って、室内を潜り抜け階段を飛び上がる。

そして爆発音のあった部屋に向かえばそこは、落ちてきた少女が居た部屋だ。

「イグニスっ！アルドールっ！！」

扉を蹴り開ければ、そこには二人の他に……少女と見紛う様な面持ちの少年が一人。艶やかな黒髪はタロック人のそれ。しかしその薄すぎる赤。紅水晶の瞳は彼が混血と呼ばれる生き物であることを示す。

「……やぁ、セレスタイン卿ユーカー。久しぶりだね」

「エルス＝ザインか……とうとう来やがったな」

少年の周りはゆらゆらと揺れる小さな炎が浮かんでいる。先程の爆音はこれの仕業だろう。カーネフェルの石材は炎を囲い込む。城の中で燃やしたら……それは外には広がらない。しかし城の中はとんでもないことになる。それをなんとかするために神子は今数式を描いている最中のようだった。アルドールはその時間稼ぎをしようと思ったらしいのだが、完全に劣勢だ。精神状態の所為もあるとは思うが、相変わらず情けない。一度エルス＝ザインに勝ったとか聞いたが、おそらくまぐれだろう。

「いい加減そろそろここらで決着付けようぜ」

俺は得物の混血剣セレスタイトを抜刀。俺に居合いなんて概念はねぇ。これで戦闘態勢ってもんだ。しかしよく辺りを見渡せば、何人かの兵士が倒れている。数術発動までの時間稼ぎに使われたのか。しかし、エルス＝ザインも数術使い。数式が完成する前なら、普通の兵士でもなんとかなる可能性は高い。エルス本人は唯の非力な子供のはず。

（それとも何か、隠し持ってやがんのか？）

迂闊に距離を詰められない。詰めようにも倒れた兵士達が邪魔だ。まだ息はあるようだし踏みつけるわけにもいかないだろう。それが止めになったらちょっと俺のトラウマになる。

流石はカーネフェル。ヘタレ兵士達は王を見捨ててどこかに隠れている。僅かに勇敢さを持ち合わせた男達もこの様だ。都の連中は都の自宅警備もとい王宮警備に忙しく、実戦経験が怪しい奴ばかりだったのだろう。王の前で恰好付けて出世狙ったか、何処かの貴族に頼まれて、そのコネ作りの手伝いのために送り込まれた奴らなのか。まぁ、下心があっても逃げなかっただけ立派だ。これでエルスの一人や二人、倒してくれたなら俺だって勝手に出世してくれて構わないとは思うのだが。生憎あいつはカード。これで一般人はカードの相手にもならないことがよく分かった。それを証明してくれただけでも、十分感謝してやる。

「遅いですよセレスタイン卿」

俺の戸惑いまで……相変わらず全部お見通しを言わんばかり。クソむかつくが色だけは綺麗な琥珀色の目で神子は俺を睨み付ける。文句ならトリシュ辺りに言えよクソ。俺はこの階段上るのだって、

緊急事態まで駄目だったんだ。

「おいクソ神子。お前は本当に俺を馬車馬か何かと勘違いしてねぇか？」

「失敬ですね。そんな風に思われていたなんて。僕は唯貴方のことを……アルドールの奴隷だと思っているだけです！」

「余計悪いわっ！！俺にだって基本的人権の一つや二つあるんだからな！」

「ふっ……貴方にしては面白い冗談ですね。最大多数の幸福の前に貴方一人位の人権なんて僕の権力で幾らでも握りつぶせますよ」

仮にも聖職者がこういうこと言っちゃいけないと思う。しかしまぁ……短い間とはいえ、この神子……イグニスという少女の性格を俺も多少なりとは理解した。別に相手が女だって解ったから多少加減してやってるとかそういうわけではない。こいつが何考えてるのか何て未だによくわからないが、その苦しげな表情から数術を酷使させてはいけないのは見て取れる。

「……ったく。仕方ねぇ」

俺は兵士達を踏まないように飛び越え、二人の前に立つ。それに意外そうな声を出したのはアルドールもとい新カーネフェル王。

「ユーカー……」

「にしてもお前は本当になぁ。またそうやって情けねぇ面してやがる」

なんでこんな情けない子供が、カーネフェル王なんかになってしまったんだか。従兄への義理とはいえ、こんな子供を守る俺の立場にもなってみて欲しい。いや、ほんと。ろくな仕事じゃねぇよ。

「仮にもカーネフェル王ならもうちょい踏ん反り返ってろ！無意味にな！てめぇは守られる価値があるって周りの馬鹿に思い込ませたもん勝ちだ！」

「そうか。でも大変じゃない？荷物背負って戦うのってさ」

黙りこくったアルドールの代わりに、エルス＝ザインが俺を嘲笑う。そんな奴を、俺も余裕の笑みで嘲笑ってやる。

「なぁ、自称道化師さんよ。お前は他のジョーカーを知ってるか？」

「何？心理攻撃ってわけ？」

「俺は会ったぜジョーカーに。完全に遊ばれてた。見えない俺でも理解した。幸福値が桁違いだってのに。……俺はあいつに敵わねぇ。対峙してると何時心臓握りつぶされるかって気持ちになったもんだ」

そうそれは事実。あの得体の知れない影と対峙したときのような恐怖がこの少年相手には微塵にないのだ。十分油断ならない相手なのは解っている。それでも……ここに絶望はない。

「だけどな、てめぇにはそれがねぇ。あん時は空気の飲まれたようなもんだが、なんとかなりそうな気がするんだよ」

「言ってくれるじゃないか」

エルス＝ザインが真顔に戻る。怒りのボルテージが大分上がって来たようだ。よし、良い感じだ。別に俺たちはここでこいつを倒す必要はない。目的は余所にある。エルス＝ザインがそれを知る由は勿論ないが。

「お飾り王！本の虫！説明してやれ！タイトル『トランプとタロットの違い』」

かけ声としては妙な言葉だ。俺はそれを唱えて走り出す。

「え？」

「言ってやれ！アルドール！」

俺の付けてやった愛称では自分が解らないとは、何とも個性と自己分析の足りない男だ。

エルスの周りを浮遊することを止め防御に回った炎を切り裂きながら、俺はそんなことを考える。しかしどういう絡繰りか。切れば切るほど炎の数が増えていく。これは本体を仕留めるまで終わらないっていうことか。

「ええと……トランプと小アルカナは似てるけど、まずスートが違って……それからコートカードの枚数に決定的な違いがある」

妹からの受け売りだろう。先程のことを思い出すのは俺もこいつらも辛いが、そうも言っていられない。荒療治だが、教えて貰ったことを有効活用させてやれ。それで感謝でもしてやれ。それが今お前に出来ることだアルドール。

「なるほど、そこに気付きましたか」

神子は初めて俺を少し褒めるような口ぶり。知ってたならもっと早くに言えと怒鳴ってやりたいが後からにしよう。俺はそこまで空気の読めない男じゃないからな。

この場で空気の読めない奴は、部外者である一人に絞られる。鎖国された国にいたんだ。外に来てまだ間もない。此方の文化など余

り知らないことだろう。博打にトランプは使われるが、タロットのそれも小アルカナなんて持っている奴はセネトレアの船には一人もいなかったことだろう。だから、やはり解らない。

「……何勝手に内輪ネタ走ってるの？」

術者の戸惑いに、炎も揺れ動く。これは良い傾向だ。俺は押しを強める。

「そうか。わかんねぇなら更に教えてやろう。俺の知るジョーカーは、空白のカードなんかじゃなかった」

「え！？」

これにはアルドールも驚いている。それが如何にもそれっぽい。こういう馬鹿には最初から教えるよりも、教えずにいて天然サクラとして用いるのが有効活用。こいつが驚けば、エルスもこいつが演技で上手に嘘を吐けるような人間じゃないのは知っているからなのか、それを信じて疑わない。神子だけが、僕は何でもお見通しですみたいな不敵な笑みを湛える。それが受け取りようによっては俺の肯定にも見える。勿論俺は道化師の掌も手の甲も見てなんかいないわけだが、不審と自信喪失を植え付けるには持ってこい。

道化師からやられた分、他の奴の精神いたぶってストレス解消でもしなきゃ俺もやってられん。そのため話術があいつに似てしまっているかも知れない。

「タロック生まれのお前にゃわかんねぇだろうがな、小アルカナにはナイトクィーンキングの他に、もう一枚コートカードがあるんだよ。そいつはペイジ。言うなれば小姓、見習い騎士ってところだ。そしてトランプのジャックはまぁ召使いやら騎士やらいろいろ言われているんだが……もしこの審判が、トランプじゃなかったらお前

は一体誰なんだろうな？エルス＝ザイン？」

もしもジャックがナイトなら、ペイジはナイトに敵わない。つまりこいつは俺や神子が倒せるカードだと言うこと。勿論確証はない。唯の俺の勘だが、神子が何も言わない辺り、少し信憑性を増している。俺の間違いがあれば、あの神子が正さないわけがない。あいつは常に俺の粗探しをしているような奴なのだから。

無意味に自信たっぷりに言ってやれば、その空気に飲まれるのは今度は奴だ。俺の言葉に、これまでの絶対の自信を失うエルス。集中力を奪えば、数術使いなんて恐れるに足りない。数式を完成させられない子供は俺の敵じゃない。

（馬鹿だぜ本当に）

敵の言葉に耳を傾けること自体が間違いなのだ。俺は道化師と対峙して、それを痛烈に学んだ。何も聞かずに敵は叩き斬れ。理由も言い訳も後から考える。

これで終わりだ。迷い泣く、振り下ろす一閃。それは手応えと呼ぶには、些か硬いもの。

「……っ！」

俺の殺気に我に返って、あいつは咄嗟に飛び退いたのだろう。それでも俺の得物のリーチから完全に逃れることは出来なかった。肩から胸にかけて、白いあいつの着物に一線の赤い色が滲む。しかし致命傷には至らない。隠し持っていたらしい小太刀が床へと落ちる。その鞘に急所を守られたのだ。

斬られた衝撃でふらついて床に、座り込むエルス。小太刀を拾い上げて、負けじとそれを構えてみせる。まだやる気らしい。

それどころか、その口元には再び笑みが浮かんでいる。怒りの余

り狂ったのか？いや違う、逆に冷静になっているようだ。

「……そうだな、ここは一つ礼を言っておこうか？」

「おいおい、どんな変態だよお前は」

とりあえずツッコミはしたが、空気が飲まれていく。空気から伝わる殺気に肌が震える。あ、死ぬなこれ。とは思わないが、少々やばいなとは思う。

「契約数術って、君たちは知っているかい？まぁ、代償を支払うことで、大きな数術を使えるようになる特殊数式のことだね。そしてこれは本来の数術とその代償とは独立した契約だ。それは契約相手によって代償が異なる」

専門用語を連発して、疎い者を迫力で飲ませる。理解出来ない気持ちが生む軽い混乱に乗じて、こいつはやる気だ。

「さぁ、おいで……代償は支払った」

「下がりなさい！ユーカーっ！！」

名字で呼ぶのも時間が惜しいと、神子が大声で怒鳴る。それは今から起こることを知っているかのようだ。っていうか何時も思うんだが、解るなら教えろよ。勿体ぶらずに。

「いいよねぇ、カーネフェルって。この国の夏ってこんなに暑いんだ。タロックとは大違い」

笑うエルス＝ザインの足下から生じる耳鳴り、不協和音。何か、来る。とんでもないものが。

「くそっ……」

ランスの手前、恰好つけただけに俺は逃げ帰れない。まだその時じゃないんだとしても、こいつはここで暫く動けない程度には痛めつけておいてやりたい。

「てめーらから逃げろっ！」

「この頼りないアルドールを僕だけで無事に逃がせると思うんですか！？」

なんとも回りくどい“助けて”があったものだ。

俺が何かを言い返そうと思ったときだ。耳障りな雑音が不意に聞こえてくる。それは何処から？すぐ近く。エルスの足下だ。それは視覚的にもノイズ。目の前が黒くて小さい何かで所々遮られている。

「夏の悪魔力の一端。その恐ろしさ。とくと見せてあげるよ」

「お、おい！何だあれ！！俺にも見えるぞ！？」

「そりゃそうですよ！あれは、空間転移の数術です！唯対象の情報量が少ないからあれだけのことを引き起こしているだけで！！」

「少ないってあれがか！？」

耳障りなそのノイズは羽音だと俺は気付いた。唯その数が尋常じゃない。部屋中黒い点だらけ。それは群れを成しながら俺たちへと襲い来る。その数、ざっと……

「数えられるかあんなのっ！！」

「そうですね。１０万匹くらいいるんじゃないですか？」

足が遅い神子を面倒臭いが抱えて走ってやると礼も言わずに後ろを振り返り、襲い来る漆黒の数を数える。そんな場合か。

「てめーももたもたすんな！走れ！！」
「あ、う……うん」
何ちょっとその役目は自分がやりたかったみたいな顔してんだ馬鹿ドール。鍛えてもいない元引き籠もりのお前が、神子抱えて走れるわけねぇだろうが。そう言うのは一丁前になってから言えってんだ。
「運が良かったねセレスタイン卿ユーカー？君がボクに致命傷でも負わせていたら、こんなものでは済まなかったよ？」
アルドールをすぐに殺すつもりがないのか、エルス＝ザインは追ってこない。追ってくるのは黒い風。いや、風なんてものじゃない。これは害虫の凱旋だ。

＊

「……騒ぎを起こすとは聞いてはいたが」
城の方は混乱の渦に包まれている。次々と城から逃げ出してくる人間達。それを追うのは黒い風だ。双陸（シュアンルー）はその光景に言葉を無くす。
唯何となく、夏の暑さを思いだしていた。そうだな。夏だな。だからか。夏の風物詩だな。十分恐ろしい策だが、あの数術使い殿にしては可愛らしい悪戯だ。そう思うのは自分が慣れてしまったからなのだろうか？
やがてその風は散り散りとなり、街の中へと溶け込んでいく。そうして街のあちこちから上がる、悲鳴……悲鳴。
「やぁ、双陸」

やがて背後から聞こえてくる声。振り向けば只今と言わんばかりの満面の笑みを湛えたエルス。

「何をした？」

「別に。唯ね、沢山人質を取っただけだよ」

少年はくすくす笑う。

「後はもう少しすれば、カーネフェル王の方から首を差し出しにやってくるよ。もしそこで彼が逃げたなら、国民は彼を見捨てる。タロックへの服従の方がマシだと考えるかもしれないね」

そう言いながらエルスが合図を送れば、関所の門は開く。具合の悪そうな兵士達が、助けを求めるように頭を垂れる。それは全員金色の髪を持つ、女ばかりだ。

「本当にカーネフェルには女しかいないのだな」

子供ほどではないが、女人を切るのも些か抵抗がある。無血開城がなるならそれに越したことはなかった。

「それにしてもエルス……お前は一体何をしたんだ？」

「カーネフェルの人口の大半は女だ。それはカーネフェル軍も同じ事。ボクはその全員を人質にしたんだ」

事も無げに彼は言う。彼の先導に続いて、双陸率いるタロック軍も都に入場。即位式のその日にこんな事になるなどと、彼らも思わなかっただろう。出来ることなら即位の前に終わらせられれば良かったのだが、もはや過ぎた話だ。

辿り着いた城は蛻の殻……とまではいかないが、殆どの男兵士は逃げていた。残っているのはやはり怠そうな女兵士やら、倒れ込んでいる女兵士やら。

「……ここが都か」

「これはまた……色っぽい歓迎だな」

「おい、あっちの姉ちゃん見てみろよ！すげぇポーズで倒れてやがる」

「そうか、据え膳とはこういう時のためにある言葉だったのか」

それを見て目の色を変えた兵士もいたが、双陸は一睨みしてそれを黙らせる。タロックには女が少ない。女を手にすることが出来るのは上流階級の者ばかりで、多少飢えている輩がいることは否めないが、自分に任された者達のなかから、そんな不届き者は出したくなかった。そんなことを許しても、どうせろくな事にはならない。

「今度そこらの女に色目使った奴、ボクが直々に去勢してあげるから並んでね？ちゃんとチェックしていてあげるよ。ボクってさぁ結構地獄耳だし？」

何が気にくわなかったのかわからないが、エルスの微笑みに不届き者が震え上がる。この少年の恐怖もこういう時は役に立つのだなと少し感心した。

「しかし何が気に入らなかったのだ？」

むしろこの少年なら煽り立てそうなものだが。唯の気まぐれだろうか？

「ボクみたいな可愛い子がいるのに、女だからって理由だけで他

の奴がちやほやされてるのって苛っとするんだよね。」

そういう問題でもないとは思うがプライドの高いこの少年のことだ、そう言う問題だったのかもしれない。

「まぁ、それでもねぇ。うん、気持ちはよく分かるよ。もう我慢できないって奴がいたら後でボクの部屋においでよ。ボクがすっごいことしてあげるから」

「俺の部下に変な色目を使わないでくれ」

「五月蠅いなぁ。別にいいじゃないか。減るものでもないし」

「そう言う問題でもないだろう。お前がそういう怪しげな言動をしているから、何かタロック軍への語弊が広まったんじゃないのか？」

自分たちがここまで進軍するまでに結構酷いことを言われてきたのだ。何処の誰が広めたのかわからないが、タロックはこの偏った人口減少、少子化の所為で男ばかりが生まれる。そのため嫁を手に入れられない男が多いとか、そのため衆道に走る輩がわんさかいるだとか。根も葉もない噂なのだがそれがカーネフェルでは偏見として根付いてしまっているようで、兵士でもない一般人が、人を悪魔みたいに罵って唾を吐きかけてくるわ石を投げてくるわ。正直温厚な方な自分も少しばかり……泣きたくなった。ここまでよく我慢したと思う。後でこっそり泣いても良いと思う。

とか思っているのにこの少年と来たら……

「実はボクの性別気になってる人いるでしょー？二人っきりでならあんなところもこんなところもじっくり見せてあーげるー」

お前は男だろうと、言い返したくなったが何やら疲れてきたので止めた。多分口調から少年だろうとは思っていたが、華奢な外見は

少女のようだし確信はなかった。最終的に知ったのは双陸もつい先日。手当をした時だ。だかそれとこれとは今は関係ない。俺の頭も支離滅裂だ。

「だから、いい加減にしてくれ。お前達もそこで生唾を呑み込むのは止めるんだ」

おかしい。ここまで進軍を続けてきて疲れているのか皆は。最初はエルスを胡散臭いだとか混血は信用できないとか薄気味悪いとか言っていた兵士まで、何やら息が荒くはないか？カーネフェルの夏は確かに物凄く暑い。タロックの夏とは比べものにならない。その長い距離を超えてきたのだ。多少おかしくなってしまっても仕方がないのだろうか？しかしそこで拍車を掛けるような言動は慎んで貰いたい、切に。

「金髪巨乳の美女が良いって？このマザコンがっ！そんなに乳が好きなら酪農でも始めたら？毎日絞り放題じゃないか！っていうか時代は黒髪ロリに決まってるよ。組み敷いたときの犯罪臭と背徳感と征服欲が堪らないだろう？今同意した奴、後でボクの所に来るように。頭と頭の文字が付く別のものをなでなでしてあげる」

「正気に戻ってくれ呪術師殿っ！！お前もこの暑さに参って居るんだろう実はっ！！そこの店主！氷菓子を一つ頼む！！」

「へい、まいどありー！アルドールフラッペ一つお買い上げですね」

「ああ、幾らだ？……アルドール？」

それが新たなカーネフェル王の名前か。しみじみとその名前を半数。

「いや、あの憎きカーネフェル王も、かき氷になると少し可愛く

思えるよ。うん美味しい」

さくさくと氷菓子をぱく付くエルス。彼は暑さで頭の螺子が何本かやられてしまっているようだ。まだ何時も通りには程遠い。兵士達に一口ずつ配り歩いている。何あの優しさ。いつものエルスならそんなことしないのに。なんだこれ。何なんだこれ。俺は悪夢でも見ているのか？いや、いつものエルスの方が悪夢的存在だとは思うが、それがないとないで何か腑に落ちないものを感じるのは何故なのだろう。

しかし何ともカーネフェルの人間は暢気なのだろう。何事もなかったかのようにまだ商売を続けている。一応俺たちは敵国の人間で、もう攻めて都まで攻め落としたというのに。平和呆けというのだろうか。違うと思うが、何にせよこの国は危機感が足りていない。敵ながら、心配になった。もう終わる国のことではあるが。

＊

「それで人質とはどういうことなんだ？」

カーネフェルの王宮にタロックの旗を掲げて、完全に攻め落としたことを知らしめたはいいが、この都の人間の何割がその意味を理解しているだろう。まだ街の中では、アルドールクッキーやらアルドール饅頭やらアルドール煎餅やらが売り出されている。俺たちタロック軍が攻めてくるのを知っていて、敢えてアルドール煎餅や饅頭まで販売したのかと思うと感慨深いものがある。そこまでして売りたいか。何故その前に逃げないのだ。意味が分からない。

とりあえず城の物を物色して、久々にまともな食事にありつけ、兵士達は少し落ち着きを取り戻した。しかし今度は戦が終わった興奮から、また妙な熱狂に包まれる。

倒れた女性達は、第一聖教会に運ばせて、其方で面倒を見て貰う

ことになった。しかし原因は不明だという。それもそのはずだ。それはエルスが引き起こした数術による呪いなのだから。

「まぁ、唯滅茶苦茶にして良いなら別にボクもさ、兵士の兄さんやらおっちゃん達が張っちゃけてくれてそれで良いと思うんだけど。今回はそうじゃないんだ。慣れないことはするものじゃないね。ちょっと疲れたよボクも」

あのおかしなテンションは彼が何時も通りを封じたがための空回りであり反動だったらしい。

「希望として祭り上げられた王様を、惨めな人間だってここの人間達に思い知らせてあげなくちゃいけない。もう夢も希望も見ないように、現実ってものを教えてあげるんだ。そのためには僕らが悪役になっちゃいけない。僕らはあくまで紳士的に物事を攻略しなくちゃいけない」

まぁ、後は双陸に任せれば自然と上手く行くと思うけどと、嫌味か褒め言葉かよくわからない言い方で彼は俺を持ち上げた。そうして今回のネタを明かし始める。

「タロックは毒の王国と呼ばれるだけあって、いろんな毒を持った虫がいるよね。その中には特徴的な蚊も居てね……君も聞いたことくらいはあるんじゃない？」

「……ああ、女だけを刺す蚊が居たな。確かに。しかし、あれはそんなに寿命の長いものではないだろう？」

男は刺されない。だからタロック軍に問題は生じない。戦力低下が著しく現れるのは女兵士の多いカーネフェル軍だけ。そんな便利な物があるならもっと早く使ってくれればいいものを。そうは思っ

たが、別にカーネフェルの民を根絶やしにしろという命令が下っているわけではない。侵略は侵略をして終わりではない。支配した後の事を考える計画性も大事。だからそう考えるなら、使い所は今しかない。

「だからこその温暖なカーネフェル様々だよ。ここは冬なんてないような土地だよ？そしてボクはちょっとした伝手でその蚊の全ての確立を引き上げた。まぁ、病気の質を高めたってことだね。この意味がわかる？刺されれば女は必ず発病する。そういう仕掛けを仕込んだ」

簡単に言ってくれるが、さらっと凄いことを言ってはいないか？そんなことはあり得るのだろうか？万物が数字であり、その数を操る数術使いにはそういうことも可能なのか。なるほど、にわかには信じられないが呪いとは恐ろしい物だ。しかし毒と薬は使いよう。

「詰みということか？」

「あははっ！正解！王手だよ」

エルスは腹を抱えて笑い出す。少しいつもの彼らしくなってきた。

「そうだね、潜伏期間に個人差はあるけれど即日から一週間くらいで発病。そこから一月以内に必ず死亡する。治療が遅れれば、脳や身体に後遺症が残ることもある」

「つまり……一週間以内に王が降伏しないなら」

「カーネフェルの人々はばったばった死ぬことになる。そしてその病気の治療はボクにしかできない。ここからは噂祭りだよ、双陸！ボク、そういうの大好き」

今まで言いがかりを付けられた分、沢山復讐出来るよとエルスは

くるくる回って喜びの舞を披露する。そしてにやりと悪い笑みを浮かべる顔が一番、彼らしいなとなんとなく思った。

「聞いた話だと、あの少年王はシャトランジアから渡ってきた。そしてこの病が広まったのは彼が都に来た後だ。後は解るね？」

「……我が軍の数術使い殿はなんとも恐ろしい事を言う」

「自分で病気を運んできて、それで逃げ隠れ。民を見捨てて逃亡するような王なら、民の方から願い下げ。無実の罪であろうとも、彼はもう有罪なんだよ。民のために首を差し出して当然。犯人は、彼なんだから」

味方が敵に、敵を味方にしてくれようと呪術師は言う。それはまるで奇術。魔法だ。恐るべき、言葉の魔術だ。

民のためにと無実の罪を被っても、民はカーネフェル王を崇めない。それが当然の務めだと言う。無実を主張して逃げれば、民が敵になる。逃げ出すことは許されない。王とは国と共にあり、共に生き共に死ぬべき定め。その役目を放棄することは、王の資格を失うこと。

「ま、逃げるならそれでもいいよ。唯、民は彼を見捨てるだろう。そしてタロックに靡く」

机に方杖を付くエルスは、上機嫌。椅子の下で両足プラプラさせている。

「タロックは毒の研究が進んでいる。だから自然と医学の方も発達している。だから偶然ボクらはその治療法を知っていた。王が彼らを見捨てるなら、可哀想だからって救いの手を差し伸べてあげるわけ。そうすればたちまち僕らはカーネフェルを救った英雄さ。これで人心までの侵略完了。ここで完全に王手ってわけ」

なんともまぁ、呆気ない終わりだ。長らく続いた戦争の終止符がこんなあっさりしたものだとは誰が思っただろう。誰も思わない。だからこそ、城の外広がる異国の景色は……今もまだ暢気に騒がしい。侵略が終わった実感がまだないのだ。だから彼らもまだ負けた気がしていない。しかしそれもあと一週間だとエルスは笑う。

「ここまで来れば後はカーネフェルの民が王を虱潰しで探して吊し上げてくれる。君はまぁこの都を支配してくれているだけでいい」

「これで、めでたしめでたしだよ」

0，8：Omnes aequo animo parent ubi dig

相変わらず正々堂々戦わない奴ら。こんな侵略って……侵略って……

0，9：Quis custodiet ipsos custodes？（前

女装とか注意回。

0，9：Quis custodiet ipsos custodes？

俺はあいつの押しに弱い。それでもそれじゃあ駄目だと言うことをあいつと過ごした年月の内に学んだ。だからこそ、いつしかノーと言えるカーネフェル人になっていた。っていうか俺が基本否定姿勢になったの8割方こいつの所為だ。

「セレス！ここは一発今年もやろうよ！」
「だが断るっっっっっ！！」
「というわけだ。頼むよユーカー」
「嫌だ。どういうわけだ。あとセレス言うな」

ほら、また来た。基本相手にした時点でこいつのペースになる。しかし無視をしても勝手に了承に解釈されるから困る。
相手にしないように茶を片手に逃げ場確保のため歩いていけば、道の譲り合いで通せんぼ状態の均衡。ちょっと違うのは譲り合いのためそうなっているのではなく通せんぼの方が主旨として機能していると言うことだろうか。

「お前しか頼りに出来ないんだ」
「そんなこと言われても嫌なものは嫌だ」

どうして俺が待っているようなことは頼まない癖に、こういう小さなどうでもいいような事ばかり俺に押しつけようとするんだ。
このままじゃ茶が危ない。ティーカップを机へと避難。その隙に肩を掴まれる！やられた！しかしそのままやられっぱなしじゃ居られない。押し返すため奴の肩を押し返し距離を取る。

「俺とお前の仲じゃないか。今ならそこで買ってきたアルドール

飴も付けてやる。お前好きだろ林檎飴」
「唯の身内だろ。そんなんで丸め込もうったってそうはいかないからな。っていうか明らかに着色料使ってるような真っ青に染めやがって！林檎と言えば赤だろうが！なんで無理矢理アルドールなんかにあやかって青にしやがったんだよ！明らかに毒入りっぽいじゃねぇか！むがっ……」
「よし。食ったな。返品不可だから。いや代金は要らないから気にしないでくれ。というわけで後はよろしく」

なんという外道。林檎飴を取り出す、一瞬の隙を与える振りをして拘束が緩んだことで逃げ出すチャンスを見つけた俺の、その口に思いきり林檎飴を叩き込む。そのまま壁際まで有無を言わさず押しつける。顎が外れるかと思った。口から林檎が抜けない。俺が藻掻いている内に、話を完結させやがった。だが、そうは問屋が卸さねぇ。

俺は得物を仕方ないから口の中にぶっ込んだ。下手すりゃ口の中が真っ赤な洪水だ。しかしそうも言っていられねぇ。愛剣で林檎丸ごと一個を切り分けて何とかティーカップへと吐き出した。レモンティーがアップルティーになっちまった。しかも何か着色料で青い。何これ。泣きたい。

「だれがよろしくされるもんか！っていうか窒息させる気か！こんなでかい林檎飴丸ごと咽に突っ込みやがって！」
「生憎それはノークレームノーリターン商品なんだ。悪いな」

爽やかに手を振るな。これから準備をしてくると言わんばかりの良い笑顔。この時ばかりは軽く殺意を覚えた。

「殺されかけたのにクレームなし強要か！？悪いのはお前の性格だよな」

「それからお前の往生際の悪さとか？いい加減観念してくれ。俺の願いなら何でも叶えてくれるって言ったじゃないか」
「この卑怯者！つか俺にだって出来ることと出来ないことがあるんだよ！」
「大丈夫、お前はやれば出来る子だよ。唯やらないだけで」
「やりたくねぇもんはやりたくねぇんだよ！」

この時俺はもう情けないけど半泣きみたいな顔になっていたと思う。もう嫌だこいつ。なんでカーネフェル人なのにカーネフェル語通じないんだよ。
そんな口の中も気持ちもブルーな俺の傍らで、何やらきゃっきゃきゃっきゃ騒いでいる奴らが居る。一応言っておくが別に猿ではない。比べること自体猿に対して失礼だ。

「嫌だ。このアルドールかき氷微妙にいける。これアルドールの癖に美味しい。レモンとブルーハワイがハーフになってて一つで二味楽しめる。なかなかいいねこれ」
「ていうかイグニス、ハワイって何処？っていうか何味？」
「さぁ？そんな細かいこと気にしてたら君将来禿げるよ？でもこれ溶けるとシロップ混ざって変な感じになるね」
「お前らも止めろぉおおおおおお！っていうか現実逃避してやがんなアルドールの阿呆っ！！何陰でいちゃついてやがんだこのバカップル！！」

その人間猿擬きはアルドールと神子だ。城からの逃亡の際に露天で菓子買う余裕があるんだから本当何なんだこいつら。大物なのか馬鹿なのか。
何はともあれ俺が林檎飴殺人未遂事件の被害に遭ってる最中に、こいつらはかき氷つついていちゃついていたかと思うとやっぱり軽く殺意が沸く。こいつら俺の知ってる親友と違う。俺は親友のはず

の男にリアルタイムで殺されかかってたんだぞ？

「心外ですね。僕とアルドールはそんなんじゃありませんよ」

やれやれと溜息を吐く神子。舌が不健康に青い。ブルーなんちゃらアルドールの所為だ。

「そうだそうだ俺とイグニスは唯ちょっとかなりとてつもなく仲の良い親ゆ…」

「そうですよ僕とアルドールは唯のご主人様と犬ですよ（勿論僕が前者）」

「何か嫌な副声音聞こえたぞ、おい」

この神子の照れ隠しは、割と鬼畜だ。こんな照れ隠しは嫌だ。しかし俺の相方と比べてどちらがマシかと言われたら、1分以内には答えられない自信がある。俺って対人運悪いのか。っていうか俺がましな運ってあるのか？何もない気がしてきた。

しかし馬鹿にされたら三倍返し。聖職者としてそれってどうよな神子様は、俺に言葉の刃を投げつける。

「大体此方からすればあなた方の方が余程いちゃついているように聞こえましたが？故アスタロット嬢に男はノーカン浮気おkとでも言われたんですか？」

「いちゃついてねぇっ！！耳腐ってんじゃねぇの！？」

この脳味噌お花畑が。殺人未遂見ておきながらあれがいちゃついていただと？お前の言う世界が俺には全く理解できない。

「そうですよイグニス様。あれは俺がこいつをからかっていただけです」

「からかってたのかよ！やっぱお前最低だな！」

俺の相方の照れ隠しも割と酷い。俺を下げることで基本的に世界の均衡を保とうとする。俺は存在謙譲語人間か。

「大丈夫だ、９割は本気だったよ」

「何爽やかに言ってくれたところでお前は１０割最低だけどな」

第一、その本気の内容自体が俺をからかい舐めているようにしか思えないのだ。

「いいか。よく考えてみろ。俺は今何歳だ？」

「１７だな。おめでとう」

「ありがとう。で、俺は１７の野郎だ。それはちゃんと理解しているな？」

「ああ。勿論。でもお前は背が低いから十分まだまだこなせるさ」

「こなしたかねぇんだよ！！第一せっかくあのふざけた祭りが中止になったっていうのに何であんなことしなきゃならねぇんだよ！……そりゃあ城に忍び込んでエルスの野郎捕まえるには必要かもしれねぇけど俺より適任いるだろ」

「え？中止？」

「になったんだろ？」

「え？」

「え？」

「なってないって」

「は？」

「うん、だから“女装男装フェスティバル”は今年も例年通り実施するって」

「馬鹿だ！馬鹿の巣窟だこの国っ！いっぺん滅びろっ！！」

「現にもう一回乗っ取られてますけどね」

＊

「……っとまぁそう言うことなんですよ」

「クソ神子、煎餅食いながら喋んな」

ユーカーは呆れていた。何とも緊張感に欠ける絵面である。美少年改め美少女神子がぼりぼりと異国の菓子を貪りながらやる気無さそうにそう言ったため流石の俺もスルーは出来なかった。

ここは第一聖教会の一室。運び込まれてくる患者達の治療で修道士と聖十字兵達は忙しい。階下の大騒ぎを聞きながら、俺たちは今後のことを話し合っている最中だった。そんな時に神子はこの様だ。

「五月蠅いですね……何か怠いんですよ」

神子的にはかき氷の方がヒットしていたらしい。食べ慣れない煎餅は薄味で特徴に欠ける。しかしその歯ごたえと特徴的な音がツボに入ったらしく無意味に音を立てて囓っている。ストレスのために飼い鳥が止まり木を囓っているそれとよく似ている。

「逃げる分には良いんですが、逃げたら逃げたで問題が起きてしまう。流石に彼方も簡単には騙されてくれませんね」

「それであの虫の治療ってお前でも無理なのか？」

「タロックとの外交は限られていますからね。本当に山奥の方の風土病なんて持ってこられたらどうしようもありませんよ。回復数術にしてもそうです。仕組みを理解していなければどうしようもない」

お手上げですと神子は言う。

「まぁ、もっとも虫による感染病だというなら虫が移動する前に

この街ごと焼き払うのが一番じゃないですか？タロック軍も言うこと聞かない都貴族も全滅させられますし」

「そんな策があって堪るか！適当なこと言うなよな！」

本当に疲れているのか、神子は頭の螺子がぶっ飛んでいる。

「って怠いって……まさかお前刺されたのか？」

俺がそれを尋ねればやっと気付いたのかこの阿呆共がと言わんばかりの目で見下された。やっぱりこいつは可愛くない。可愛いのは顔だけだ。人間は顔じゃない。顔が良ければ性格も良いなんてことは絶対にあり得ない。顔が良くて性格が悪いか、顔が悪くて性格が悪いかだ。それ以外の人間に出会えたら、それは多分奇跡か、自分自身が奇跡的に愚かで馬鹿であるかのどちらかだ。

「どういう条件でどういう症状なのかを知るにはサンプルが要りますからね。一匹捕まえて僕に刺させました。お陰で大分解りました。ああクソ怠い」

「い、イグニス……大丈夫？」

おろおろと声を掛けてくる親友アルドールを相手に、神子は忌々しいと言わんばかりに舌打ちをした。俺は親友という意味を一度辞書で引いてみたくなった。たぶん俺の知らない意味が書いてあるに違いない。

「被害者の統計データから見て、専らこの蚊は女性だけを狙います。そして怠さに吐き気、高熱、頭痛などの症状を引き起こします」

淡々と神子は言う。そして彼女はこんな言葉で締めくくった。

「そして……死に至らしめます」

これには室内の人間すべてが絶句した。

「これは由々しき自体です。カーネフェルの温暖な環境にこんな害虫あんなに持ち込まれたら最悪……カーネフェル人は絶滅しますよ」

「イグニス様……何とかする方法はないのでしょうか？」

神子の言葉に言葉を返すことが出来たのはランスだけ。それに神子は、しばらく考え込んで小さく息を吐く。まぁなんとかなりますよと。

「……事態の収束はまもなく始まるでしょう。彼らの目的はあくまでカーネフェル侵略であり、カーネフェル人根絶ではないのですから」

「んじゃ放置で問題ねぇって？」

「はい。ただしこのままではアルドールの名は出ても逃げても地に落ちます。まぁその辺はおいおい何とかしましょう。情報工作は教会や僕の部下に頑張らせていますし、其方でなんとか凌いで貰うしか無いでしょうね。とりあえず都の外にあの虫が拡散しないよう、結界数式は張りました。最悪都から人々を避難させれば問題ありません」

解決策はある。しかし、その妨げがあるのが問題なのだと神子は表情、言葉を渋らせる。

「本当はそこに冷却数式を流して全滅させるのが一番なんですが、都の関所をがっちりとタロックにガードされているのが痛いんです」

「俺らが前線送りになる前だったしな……関所の奴らなんであっ

さり通してやったんだか」
「それは勿論都貴族の派閥争いですよ」
「……はぁ？」

ユーカーの呟きに、イグニスはそんな答えをもたらした。

「今日、アルドールに近寄ってきた貴族達が居たでしょう？そこに入れなかった人間達……つまりは先王の時代から派閥争いに負けてきた都貴族達ですよ。彼らは革命を求めている」
「か、革命……？」
「自分たちに権力が回ってくるならば、国を明け渡しても構わない。王が別の人種になっても別に良いという人達ですよ。おそらくあのふざけた祭りを開催に押し切ったのは彼らでしょう。普通ならそんなことやれっこありません。開門に関わったのも正直彼らが怪しいと僕は睨んでいます」

タロック軍よりある意味厄介ですよと神子は大きく嘆息をする。

「つまり今僕らに必要なのは、カーネフェルの味方です。ついてきてくれる民が居なければ王も国も話になりません」
「そうはいうけどよ、都は捨てるんだろ？」
「ここの性根の腐った人々は手に負えませんよ。双陸殿とやらのお手並み拝見させていただきましょう。そこで良い感じに人格者に矯正してもらったところで奪い返します」
「それじゃあイグニス……俺たちこれから、どうすれば？」

神子からの外道発言を貰ったところで、アルドールが不安そうに指示を仰いだ。それに対して神子は胸を張って答える。しかしあまり胸はない。視覚数術で誤魔化しているのだから当然か。

「そこでです。北部へ行きましょう」
「はぁ！？」

素っ頓狂な声を出したのは俺。目を瞬いているのがアルドール。絶句し石化したのがランスだ。そうだよな。こいつにとって、北部は地雷だ。

「都を落としたことで、まぁ北部攻めの軍勢も都に向かうか、国へ帰るか。各地の守りは手薄になります」

神子は卓上の地図を指さす。

「僕らはそれを迅速に各個撃破。タロックの魔の手から北部の人々を救い出し、支援者を増やしていきます。そうですね、新たに北部に都を設けるのも良いでしょう。そして南部に宣戦布告するのです」

言葉で言うのは簡単だ。しかし宣戦布告なんて言われても……そういう気持ちは拭えない。どうにもならないのではないか。それは俺もあいつも、アルドールもきっと抱えている不安だ。しかし神子は、ここで切り札を表に出した。

「そしてそこで僕はシャトランジアを介入させます。聖十字の介入はそれだけで意味を持ちます。ここまで長らく中立をしてきた我々がカーネフェルの味方になる、それはすなわちタロックが悪だとシャトランジアが認識したということ」

奴はさらっと言ってのけたが、奴が黙ると場はしんと静まりかえる。誰かが息を呑む音。それは俺だったのか別の誰かだったのか。それもわからないほど、俺は興奮していた。腹の底から湧き上がる

のは早すぎる歓喜。こいつはなんとかなる。なるんじゃないか？そう思わせる才には……確かにこの神子は長けている。煽動者としての資格は十二分だ。アルドールなんか見開いた目からボロボロと涙を流して泣いている。鼻を啜りながら神子の名前ばかりを繰り返しながら。

「おい、そいつはまさか……」

「イグニス様……」

「それまでの、悪評すべてが無かったことになります。アルドールへの悪い噂、その全てがタロックの情報操作！人々を騙していたとそうなるわけです。下手に人格者であればあるほど、疑われた時は胡散臭いものですよ。そうやって今まで我々を騙していたのか……なんてね」

神子の自信たっぷりの言葉に、北部に行きたくないはずのランスもそれを忘れたように微笑んでいて、自然と俺の表情も軟らかくなる。それを見計らったかのように、神子は満面の笑みになる。

「だからそのためにも都からどう逃げ出すか。話はそこに戻ります。勿論僕の空間転移という手もありますが、それはエルス＝ザインに気付かれてしまう可能性が非常に高い。そしてアルドールの空間転移は不安定。前回のは唯のまぐれみたいなものですし、話になりません」

泣き笑いをしていたアルドールが、また泣きに戻りそうになっている。怠いのは解るが少しはセーブしてやれ。こいつも病み上がりなんだから。つい数時間前に妹亡くしたばかりなんだぞ。

「そのためには都貴族に親しい人間をたらし込む必要があるわけです。そうしてまんまと外へと逃げ出すためにも……あの祭りを利

用しない手はありません」

無理矢理話を冒頭へと戻す神子。いちゃついてた癖にしっかり俺たちの会話をキャッチしていたらしい。侮れないガキだ本当に。

「んじゃ神子お前頑張れ。いけるいける。お前混血だし美形だろ頑張れ。そのままでも十分女装みたいなものだろ」

「生憎今日の即位式で僕とアルドールの顔は多くの人に知れ渡ってしまいました。視覚数術はモブに溶け込む作戦で僕らはやり過ごします。となると消去法であなた方に頑張ってもらうしかないんですよセレスタイン卿？」

「ならランス！お前やれ！お前の方女顔だろ！お前美形だし！」

「そうしたい所なんだが、そろそろ俺は背が問題かなと」

「いけるいける！長身の美女って設定でいいじゃねぇか！」

「まぁ、それはそれで良いんだが、俺はあの人の顔を立てるためにも毎年参加していたわけだろ？お前が逃げてたから。別に責めてるわけじゃないんだが、二年交替で出ようって譲歩してもお前は逃げたよな？だから俺は毎年出てて？女装のレパートリーももう粗方尽きてきたんだ。わかるよな？俺の女装姿は割と晒し者にされてたから？俺が化けたら簡単に気付かれてしまうと思うんだよ」

責めてる。絶対責めてる。目が笑ってない。

「でも、嫌だっ！！」

この年で女装だなんて、屈辱以外の何物でもない。俺のプライドにヒビが入る。

俺は部屋から飛び出して、逃げる、逃げるっ！追ってくる足音がする。本気のあいつなら最悪屋内でも馬呼びだして追いかけて来る。何か背後で長ったらしい愛馬名を叫んでいるあいつの声がする。遠

くからパッパカパッパカ何かが駆けて来る音がする。そして窓硝子を突き破って何かが飛び込んでくる音。来た！完全に最強装備で来やがった！とんでもねぇなあの騎士は！常識とモラルはどうした！目的のためにも手段は選んでくれ。

（くそっ！このままじゃ時間の問題だ）

俺は息を忍ばせ、教会の一室へと逃げ込んだ。地獄に仏だ。衣装部屋をここで引き出した俺は幸運だ。流石は俺様コートカード。いや、こんなことで幸運消費したんだったら泣きたい。いや、そんなはずないよなきっと。だってこの部屋……

「女物の服しかねぇ……」

俺は何処までも割と、不運だった。

＊

所用のためにのために第一聖教会を歩いていたトリシュは、知人の顔を見つけて声を掛けてみた。あの小五月蠅い相方とは、今は一緒にいないらしい。なんとなく珍しいと思ったが、よくよく考えてみればここ数年はそんなものだったかもしれないとも思う。むしろ今朝が珍しい部類に入ったのだ。

「おや、ランス。奇遇ですね」

「ああ、トリシュ！ユーカーを見なかったか？」

「いえ、見ていませんが」

仮に見ていても眼中から無意識の内に削除していたのかも知れない。そんな風にトリシュは思う。あの男は好きじゃない。いつも喧

嘩腰で、貴族らしさが欠片もない。同じ地方貴族なのに、この従兄の青年と比べてどうしてあそこまで品性がないのか。本当に血縁なのか疑ってしまいそうになる。
王からも信頼されていたこの立派な騎士が、どうしてあんな小物のことを構いたがるのかわからない。ここ数年は、昔ほどべたべたしなかったとはいえ、何かにつけて彼のことを考えているのはすぐ解った。この騎士が一目置くくらいだ。何かあるのかと思ったこともかつてはあったが、僕の思い過ごしだった。それでもランスが彼を構うのは、彼が身内だからに他ならない。この騎士は親馬鹿ならぬ従弟馬鹿なのだきっと。

「何かあったんですか……」

と聞きかけて、風のように走り行く友人に手を振る暇もない。あの邂逅は一瞬。残されたのは馬の嘶き、蹄が床を蹴る音。

「……セレスタイン卿ユーカー。恐ろしい男だ」

あのアロンダイト卿ランスをここまで狂わせるとは。冷静沈着で真面目で規則と命令を忠実に守るあの男が、静寂を重んじる教会内を愛馬で駆けさせられる男は、恐らく世に彼一人だけだろう。何があったらあんな風になるのかわからない。養子に性格、家柄才能、欠点が一つもないはずの友人が唯一持つ欠点は、彼絡みの問題だけだろう。しかしあの人を舐めた性格の男のどこにそんな力があるのか僕には全く理解できない。あんあ身内が居ても僕は可愛いとは思わないだろうと断言できる。というかまず縁を切るね。
誰に言うとも無しに、僕は頷く。頷いていた。言うなれば前方不注意。だから此方に駆けてくる少女の姿に気がつかなかった。それに気付いたのは後ろばかりを注意していたらしいその少女とぶつかった時。その衝撃に傾ぐ彼女の身体を支えた時だ。

「ああ、すみませんお嬢さん」

思わず彼女の手を掴んだが、彼女は僕を見上げるなり手を振り払い少し青ざめた顔で僕を見る。見れば彼女の姿は修道女のそれ。男慣れしていなくて、男性恐怖症の気でもあるのだろうか？

「え、ええと……お嬢さん？あの、怖がらせてしまったのでしたらすみません」

一応相手は女性だ頭を下げ、軽く会釈するが……彼女の僕を見る目は決して好意的な物でない。初めて会うはずの相手に、ここまで拒絶されるなんて……こんなの初めてだ。何故だろう妙な気持ちが胸に湧き起こる。

美形と謳われる僕を相手に、頬を赤らめず狼狽えもせずここまで冷たい絶対零度の視線を向ける女性なんてあり得ない。女性として何か欠陥品なのではないだろうか。

（ああ、そうか……彼女はよく見えていないのか）

彼女はあの憎き男のように……いや違う。あいつは右目だ。彼女は左目を隠している。眼病でも患っているのだろうか。その右目はスカイブルーよりもうすい水色。氷のような微笑みを湛える彼女によく似合っていた。その目は外の光を眩しげに見つめていたから、やはり目があまりよくないのだろう。

「お怪我はありませんか？」

ぶつかった時の彼女を案じるように、彼女の目を覗き込む。この至近距離なら……少しは違う色をその目に映してくれるだろう。そ

う思ったぼくを襲ったのは、予想だにしない痛みだった。彼女に頬を打たれたのだと気がついた。いい加減離せという意味だったのか。言われてみれば確かに僕は彼女の片手を掴んだままだった。
怒り気味の彼女の表情は、何故だろう。初めて会う気がしなかった。理不尽な痛みに呆然としている僕を残し、彼女は僕から離れる。

「……」

そして彼女は最後まで無言のままで僕の横をすり抜け走た。ベールから覗く金髪がとても綺麗だった。

「ま、待ってくれ！君っ！君の名前は……」

振り向いて、走り去る彼女の背中に追いすがるよう叫んだが、彼女は何も答えてくれない。唯、足のスピードを更に早めただけだった。

「……う、嘘だ」

僕は歓喜に震えていた。間違いない。彼女は僕のイズーだ。この妙な既視感は、僕と彼女が以前出会っているからだ。そうだ。あの男は本の夢物語だと馬鹿にしたが、そうじゃない！そうじゃない！あれは本当にあったことだったんだ。言うなれば前世の記憶という奴だ。今度こそ僕と彼女が幸せに寄り添うことが叶うようにと、そのために語り継がれた物語なんだ。そうだ。あれが出版されたのは数十年前だけど。それは元々あの作者のオリジナルではなく伝承にあった物語だ。あれは僕に前世の記憶を呼び起こさせるための鍵だったのだ。
彼女はそれを知らないから、あんな風に僕を拒絶したんだ。可哀想に。今頃自分でも気付けない無意識の海その深き海溝、彼女は自

分を責めている。嗚呼、そんな必要はないのに。僕はそんなことで君を嫌ったりはしない。何もかもを許せるんだ私のイズー！！
そう、多くは望まない。唯この腕の中に君を抱き締めさせて欲しいと思う。そう願うのはいけないことかい？私のイゾルデ！！

＊

「何かすげー寒気したわ。あの馬鹿完全に目が逝っちまってた」
「それは大変でしたねセレスさん」

俺が身震いしながら先の出来事を語れば、騎士見習いの少年はくすくすと笑みを溢した。プラチナブロンドの金髪は光のように柔らかで、美しい色をしている。その対比と言わんばかりに深い青色はサファイアを溶かして固めたような深みがあった。まぁ、絵に描いたような美少年。将来はランス並にモテる男になるんだろうさ。別に羨ましいとは思わんが。

「お前までセレス言うなパー坊」
「パー坊言うの止めてくれたら僕も止めてあげます」
「なら諦めるか」
「そこで諦めないで下さいよぉ……」
「ならシヴァルで」
「縛らないでください」

泣きそうな顔をされたので流石にこれ以上は苛められない。悪い悪いとユーカーが笑ってやれば、少年も笑みを溢す。ここまでがいつものやりとり。悪びれなく呼ばれる分には嫌味だとは思えない。そもそもそれが何故侮蔑か、この少年は知らないのだから。
最近人間関係に悩まされてたから大分癒される。年下ってこういう物だよな本当は。やれ某神子、やれ某カーネフェル王。あいつら

がおかしかったんだ。

「ま、お前も無事で良かったよパルシヴァル。しかし久しぶりだな。俺ここ一週間くらい城にいたんだが、全然会わなかったな」

「はい、僕は僕の任務に行っていました」

「そうか。お使いか」

「お使いって言わないでください」

「で？今度は何を任されたんだ？」

「はい！今度のお祭りのために皆さんお洋服を仕立ててらっしゃるみたいで、リボンやレース、フリルといった素材が不足しているって言うので」

「街から貴族街まで届けさせられていたのか」

「はい！」

阿呆かと怒鳴りたくなったが、この少年に怒鳴っても仕方がない。こいつはこいつでそれが仕事だと信じているし、外の状況も知らなかった。与えられた任務を疑うことなく純粋にこなせるその子供らしさがある意味羨ましい。

教会を無事逃げ出して街をぶらついていた時だ。この騎士見習いに声を掛けられた。他に行く充てもなかった。だから暫く身を潜めるためにこいつの部屋を借りたのだ。勿論あんな事があった後だ。城には帰れない。タロックにもう乗っ取られている。

ついでに言うなら王宮騎士ですら砦に住まいを移されるご時世。城勤めの騎士見習いですら、街に家を借りさせられている。だからこいつの家はまだ無事だったのだ。

砦住まいで遠出の任務ばかりの俺とこいつはその合間、城で時々顔を合わせる程度だが、その度にパタパタと駆けてくる何だかんだで可愛い奴だ。弟が出来たみたいで結構構っていた気もする。

「にしてもパー坊、よく俺だってわかったな」

「はい！僕はいっつもセレスさんを見てますから」
「はぁ？」
「僕はセレスさんみたいな騎士様になるんですよ」
「いや、あのな。俺よりランスの馬鹿とかトリシュの阿呆あたりのが妥当だと思うぞ？一般論的なあれでは」
「そんなことないです！セレスさんは凄いです！普段はだらだらしててもやる時はびしっとやってくれるセレスさんは恰好良いです！」

純粋な目でキラキラとそう褒められるのはこそばゆい。流石の俺も少しは照れる。

「それにセレスさんみたいに女の人寄せ付けない気迫みたいなのが凄いです！」
「ああ……そう」
「俺は女なんか興味ないぜみたいな斜めに構えてるところが格好いいです！剣一筋ってところがクールです！」

でもこんなに純粋な子供に、お前童貞だろたぶん一生と褒められた時ってどうすればいいんだろう。ちょっと泣きたい。俺だって婚約者が死んでなければその内卒業してたかもしれないんだよ。もういいよ。お前がそこまで言うんなら、もう俺一生清らかさんでいいや。どうせそんなに余生長くないし。フラグ立ってる女もいねぇし。

「それに僕、セレスさんのその目好きです。格好いいです！」
「ああ、眼帯な。結構便利だぜ？暇なときに片目ずつ向こうの山の木の葉の数数えて鍛えて視力アップとか……あ、やべ。そういやお前これ黙ってろよ？男と男の約束だからな。一応これ見えないって事で通してんだから」
「見えないんですか？」

「まぁ、昼間はあんまり見えないな。今はちょっとチカチカして辛いぜ」
「ああ、それでだったんですね？」
パルシヴァルが両手を打ってにこりと笑った。
「さっきから後ろにいるランスさんに気付かないなんておかしいなって思いました」
しかしその笑みが見ている俺の背後が恐ろしい。振り向けずにいる俺の肩にぽんと手が置かれる。置かれた瞬間、びくっと身体が震えた。手は張り付いたように離してくれない。
「お前がここまでやるとは思わなかったよ、なぁセレス？」
「……」
「その目は今となっては俺とお前だけの秘密みたいなものだから？まさかねぇ？何があってもお前が右目を晒すことだけはないと思っていたんだよ俺は」
「……」
「勿論俺とお前の仲だろう？両目を出していてくれたなら俺だってすぐに解ったと思うんだ。だけど右目だけだろう？それじゃあ俺もすぐには気付かないよ。おまけにそんなに髪までまっすぐ整えて？結構伸びたんだな似合っているよ」
「……」
「そうそう、お前がなかなか見つからないからお前と仲の良いこの子の家を訪ねてみたんだったかな。お前はあんまり人付き合いが多いタイプじゃないからね。これで万が一トリシュの所にでも逃げ込まれていたらと思うと見過ごしてしまっていたかもしれない」
「……」
「いや、でも俺より付き合いの浅いこの子がお前に気付いたというのに俺が見過ごしたと思うと俺は俺が自分で情けなくてね。まだ

まだお前を見足りないと言うことなんだろうな」

変なところで負けず嫌い発動しないでくれ。そう叫びたいが、声も出ない。首が石になってしまったように動けない。っていうか身体全体が。蛇に睨まれた蛙の気持ちってこんなだったんだな。落ち着け落ち着け。深呼吸深呼吸。よし、咽に張り付いていた何かは取れたような気がする。

「ところでセレス、俺に何か言うことはなかったか？」

「いい加減放せよ。セクハラで訴えんぞ」

もうこの空気に耐えきれず、いっそ殺せと振り返る。そうして睨み付ければ……あいつが軽く目を見開いている。

「……失礼、これは訴えられても仕方ないかもしれないな」

「は……！？」

「お前、気合いは要り過ぎだよ！一人でそんなメイクまでして、そこまでして逃げたかったのか？そんなに嫌だった？」

「い、嫌に決まってんだろ馬鹿！！」

「あはははははは！嫌なのに、そんなに気合い入れて女装してたんだ……っはははははは！！」

本末転倒だとランスが笑う。

「え、マジ……そんな笑うほど俺おかしなメイクしてたか？」

「いいや、これじゃ解るはずがないってことだよ」

お前の本気の女装を甘く見ていたと、相方が忍び笑いをもう忍べていない。似合ってるよと整えた髪を撫でられるがそんなに嬉しくはない。やっぱり馬鹿にされている感の方が強い。

「でも僕わかりましたよ！」

ランスに撫でられている俺を見て、自分もされたくなったのか褒めて褒めてと寄ってくるパー坊。とりあえずよしよしと頭を撫でてやると満足げ。ほんとこいつは可愛いな。どこぞの神子とは大違いだ。見てて癒される。やっぱ年下はこうじゃねぇと。年上連中に囲まれてきたし、こういうのは新鮮だな。

俺が癒されていると、耳に何か聞こえた。それは本当にすぐ隣から。

「何やってんだお前」

何故か相方が舌打ちしていた。相方が俺の変装を気付けなかったように……俺も時々相方がよくわからない時がある。唯何となく割と大人げない男だなぁと思った。

0，9：Quis custodiet ipsos custodes？（後

ジャンヌがなかなか出てこないので。６章前半ヒロインはセレスちゃんでいいや。

1：Parva scintilla saepe magnam flamma

“ねぇ、お兄ちゃん”

“何？ギメル？”

“私、アルドール大好き！”

勿論お兄ちゃんも大好きだよと彼女は言ってくれたけど、僕は世界が揺らぐのを感じていた。嗚呼、地が落ちる。天が降ってくる。僕が空へと堕ちていく。

“僕とあいつ、どっちが好き！？”

僕はそう食い下がった。好きにもいろんな好きがある。幼いながらにそれは理解していたみたいな妹は……

“どっちも！”

と笑った。好きの意味が違う。それでも同じくらい大切だよと言ってくれた。だけどあの日の僕は恐怖した。

だってこんなに恐ろしいことがある？生まれたときから一緒の、生まれる前から一緒の僕。その僕と同じところまで、出会って間もない彼がやって来たなんて認めたくない。本当ならあり得ないことだよ。彼は一瞬で、僕の大切な宝物を奪っていった。世界の誰より妹が可愛かった僕は、それはとてもショックを受けた。

その反動から、僕が彼を憎むようになったのは極々自然な流れだろう。最愛の妹を憎むなんて発想僕にはなかったからね。

そういうわけでねアルドール。僕は君が嫌いだよ。大嫌いさ。少なくともあの日まで僕は君を世界の誰より怨んでいたよ。

“大好き、お兄ちゃん”

彼女の言葉だ。別れの言葉だ。それが今も耳から離れない。それは多分僕だけじゃない。だからこそ……一度だけ、チャンスは僕の手にはある。

＊

憂鬱な昼下がりの白昼夢。頭痛を感じるのは、何も熱の所為だけじゃない。

イグニスは頭を抱えていた。

うとうとしていた頭に届いた、部下からの情報は、酷使している脳を更に痛める問題だ。

騎士二人が消えたことで、静けさを取り戻した教会の一室。その溜息だけが響いて空気の中へ。そんなことを何度か繰り返した頃だろうか？即位したばかりの、そしてその日の内に玉座を失った少年王。彼はうとうとしていた僕の隣で本を読んでいる。いつの間にか肩を貸してくれていたらしい。軟弱者だと思っていたけど、やはりと言うべきか。時間の止まった僕よりずっと、しっかりした肩だ。だけどその双肩に一国は重すぎる。だからこそ僕が支えているのに、こうして僕を支えようとする。憂いるべきは国の未来だろうに、自信の不幸だろうに、悲しみからまた目を逸らしている？

（いや違う）

乗り越えたわけでもない。唯、考えないようにしている。大丈夫だと思い込んでいる。僕が傍にいれば、それを乗り越えられると信じてくれている。その上での余裕。余裕なんかあるはずないのに、あると思い込んでいる馬鹿な男だ。そんな虚勢の余裕で僕を哀れむ。

労る優しさに、僕は頭痛が悪化するのを知る。

「イグニス、大丈夫？」

僕の目覚めに気付いて、心配そうに僕を見つめるアルドール。そういう視線を送られる度に、僕がどんな思いに苛まされるか君は何も知らない。それが君の所為だとは言わないけれど、言いたくなる葛藤くらいは気付いて欲しい。ああ、気味は何も悪くない。悪いのは僕だよ。それでもねアルドール、僕だって苛立つことはあるんだよ。例えば思い通りにならない不測の事態とか……

「……君の悪運には本当参ったよ」

「え？」

ここで君を突き放すのは簡単だ。だけど、物事にはタイミングがある。迂闊なことは出来ない。だけど君がそうやって僕にだけ依存するような人間じゃ駄目なんだ。

後は部下に任せて僕はシャトランジアに帰ろうと思っていたのに。このタイミングでフローリプさんが死んでしまった。ここで僕がアルドールの元を離れるのはまずい。精神的にかなり来ている。僕の代わりの人間を見つけるまでは、僕はここにいなければ。

僕の策としては、あの状態のフローリプさんを連れては逃げられない。だからそこで投降。アルドールの処刑の際に彼女を送り込む。そこで一気に命の恩人として彼女と上手いことくっつける。僕の代わりに彼を支えて貰う。これで良かったはずなのに。

それでもフローリプさんが死んだ以上、その場での投降はあり得ない。あまつさえあのエルス＝ザインが面倒なことをしでかしてくれた。人質の桁が違う。

（おまけにユリスディカと来たら……僕の見込み以上の、善人過ぎ

る）

都まで着くのが僕の計算より遅い。何処で道草食っているのかは大体解る。

彼女なくして策はならない。ある意味では良かった。彼女まで病に倒れられては困る。そうだ。そう考えるなら彼女の行動は最善。僕らは北部まで逃げればそれでいい。そこからまた立て直す。唯、僕のお守りが長引いただけ。アルドールを北部まで、或いはまたこの都を攻め込むまで支えなければならないのは正直痛手だ。タロックと道化師の問題を同じ場所に集めるのは。出来ることなら道化師の問題は僕が遠くで片付けたかった。そうすればアルドール達は戦争だけに集中できる。だけど今はそうもいっていられない。ユリスディカが間に合わなかった以上、僕はされない。コートカードがセレスタイン卿一枚だけでは心許ない。万が一彼までこんな序盤で消費されたら、アルドールの手札が足りなくなる。これ以上の無駄遣いは出来ない。彼には何が何でも、覚醒して貰わなければ。……この勝負僕の負けだ。

「……だけど参ったな」

「イグニス？」

「あの二人だよ。アロンダイト卿とセレスタイン卿はなんとも面倒臭い間柄だなと思って」

あの騎士二人はなんとも扱いづらい駒だ。性格、思考に難がありフラフラフラフラって、まっすぐ歩けないのかな本当に。チェスの駒じゃないんだからさ。そんなところまでナイトナイトしないで欲しいものだよ。僕が溜息を吐けば、彼と来たらきょとんと目を瞬かせている。

「え？そうか？……普通に仲良くないか？そりゃあ時々喧嘩くら

いはするだろうけど、それは互いが大事すぎるからの軋轢であって」
「そう思うんなら君の目は節穴なんだね」
僕の言葉にアルドールが驚いたような顔になる。
「あのねぇアルドール。世の中には打算無しの綺麗な感情だけの繋がりなんてあり得ないんだよ。幾らあの二人が仲良く見えても腹の底ではお互い思っていることはあるだろうさ」
「でも俺は別にイグニスのこと騙そうだとか利用しようだとか全然思わないけど」
「それは君が馬鹿だからだよ。彼らは君ほど愚かではないって事だね」
君がそうであることは僕も疑わない。君はそう言う人間だからね。知っているよ、痛いほど。君がそう言う奴だっていうことは僕は何度も見せられてきたんだから。
でも自分がそうだから他人もそうだとは思うな。自分の物差しで他人を測るな。これまで何度か言ってあげたのに、まだ理解してくれていないようで全く残念だ。後何度言えば理解してくれるんだろうね君は。少なくとも僕は君を利用しているよ。君のためにと言えば聞こえは良いけどね。
「いいかいアルドール？好意のみで表される好意は好意と呼ばない。好意というものは何らかの負の感情を引き連れて現れる。想うことは憎むことだよアルドール」
僕だって君を憎んでいる。目で語っておいてあげた。わざわざ言葉にするほど僕は残酷じゃない。そこまで優しくもないよ。君の理解力なら気付けるはずだと見込んであげたんだ。
だというのに君と来たら、どうしてそこで笑うのかな。

「……そうなんだ」

僕は別に君が好きだよなんて言ってあげていないんだけど。忠告の言葉にまるで告白でもされたような反応されたらどうすれば良いんだよ僕は。

そりゃあ裏返すなら、憎む心があるなら確かにそこに愛はある。それは確かだ。だけどどうしてそう都合の良いところだけ取り出して喜ぶことが出来るのかな君は。どこまでお気楽な脳味噌なんだ。

僅かに照れくさそうな彼の様子に、僕はひょっとしてと思う。確かにあれから弁解はしていないから要らぬ勘違いをされていそうではある。制約に触れずに何処まで説明できるかは怪しいけれど、このままっていうのも気分が悪い。精神が犯されているみたいだよ。

「……もしかして君ってさ、僕がギメルか何かだとか勘違いしてない？」

「そ、そんなことない！イグニスは……イグニスだよ」

横目で睨めば、彼は大げさにぶんぶんと両手と首を振る。

「男だとか女だとかそんなの関係ない。イグニスが、俺の親友なんだ！」

そりゃあ初恋の人が男だったならちょっとショックだけどと彼は笑う。混血の双子は男女の双子と決まっている。僕とギメルの二人とも女ということはあり得ない。僕が女なら消去法でギメルが男だと、そういう発想に落ち着いたというわけか。

「今更それで何が変わるわけでもないだろ？イグニスはイグニスだ。イグニスが自分を偽ってるのは何か理由があるんだろうし、俺

はイグニスの秘密を全力で守……」
「調子に乗るな」
女は神子にはなれない。僕が女と知られれば、僕はシャトランジアでの地位を失脚する。その懸念は彼にもあったのか。だけどアルドールの癖に一丁前にいっぱしの男ぶりやがったのが気に入らず、僕は友人の頬を思いきり抓ってやった。あはは、変な顔。
「痛っ」
「君、何様のつもり？王様？笑わせないで欲しいね。さっそく城も玉座も奪われたって言うのに」
「そ、それはイグニスの策の一環だろ？」
「ほんと馬鹿だね君。この僕を守るだって？馬鹿言わないでよ。僕は強いし凄いんだ。君なんかお呼びじゃないよ。君だってセレスタイン卿だって不慮の事故がなければ気付かなかったんだ」
視覚数術に今度は触覚数術までやっている。数術の消費を防ぐためだ。部下に数式を護符化させて持っているから問題ない。これで常時発動。僕はどこからどう見ても立派な男だ。
「っていうかそんな変な顔して僕のこと笑わせないでよね。そんなんで機嫌直してあげないし」
「それはイグニスの所為だろ、痛てて。ていうか美形混血のイグニスからすればどんな顔しててもお俺なんか基本変顔みたいなものだろデフォルトでも」
なんか室内が変な空気になった。何これ、何だこれ。いや別に普通のことだよ。アルドールがこうやって僕を褒めるのはいつものことだし。別に当然のことだし。そうだよ僕ハイスペックだし。混血ってだけで問答無用で美形設定付いてるんだから。

だから何当たり前のこと言ってるのって言い返せば良かったんだ。だけど……

「……」

「……」

言い返すタイミングを逃した。だからなんか妙な間が生まれている。何か気まずい。アルドールの馬鹿なんか相手に僕は何気まずさなんか感じて居るんだろう。大体アルドールもアルドールだよ。フローリプさんがあんなことになったっていうのに……まだぐすぐす泣いてるなら可愛げってものがあるのに。っていうか君のデフォルトってそっちだったのに。何勝手に急に凛々しくなってるわけ？やばい、まずい、どうしようこれ。これ吊り橋効果とかなってないよね？なんか補正で僕への好感度既にマックスが限界突破してそうで怖い。なんかもうお前さえいればどうでもいいやっていう悟りの境地入ったりしてないよね？止めてよ本当そういう薄ら寒く暑苦しい真似は。とか思ったら、何か近い。やけに近い。覗き込まれてる。顔を。真正面からじっと、彼の青が僕を見ている。

「イグニス？」

「な、何！？」

ただそれだけなのに、何だか落ち着かない。目を逸らしたい。だけどそうしたら負けのような気がして僕は彼を睨んだ。残り僅かの僕の鼓動が、大きく響く。消える前の蝋燭みたいだ。炎が燃え上がるみたいに、強く痛く胸を打つ。

（何だよ……これ）

そりゃあ好きだよ。そう言う意味じゃないけど。だけど、これじ

ゃあまるで違う好きみたいだ。僕は……浸食されているのか？

（違う、僕は違う）

僕が好きなのは、友人としてのアルドールだ。これは僕の気持ちじゃない。引き摺られているのか？僕はギメルに。

おかしいよ。彼は僕が何であっても変わらずに僕を親友と呼んでくれるのに。僕もそれに応えたいのに。なのにどうして？僕はそんなに弱くない。引き摺られて堪るか。

（僕は僕、ギメルはギメルだ）

そう思う。そう思うのに、彼女の悲しみが喜びが……僕の胸へと流れ込む。何故だろう、唯目の前に彼が居るだけなのに泣き出してしまいそうになる。もう二度と、会えないと思っていたんだ。君がここにいる。それだけで……僕は泣いてしまいたい。

そんな僕の様子を見て、彼は目の色を変える。また僕を気遣う瞳に戻る。

「やっぱり熱出てきたんじゃないか？顔真っ赤だ」

「ああ、そうだね！！怒ったせいかな！？」

「もう少し休んだ方が良いよ」

「……そうも言っていられないんでね」

僕もあの蚊に刺された。エルス＝ザインとは顔を合わせてしまった。ここで僕が刺されたことが知られては困る。僕が女と知られれば、神子の座を他の者に奪われかねない。そうなってしまえばカーネフェルへの支援も難しくなり、カーネフェルもシャトランジアも滅んでしまうことになる。

とりあえずは冷却数術で体温を下げているから死ぬことはない。

期限が来ても。だけどそれは自分の身体だから出来ることだ。他人のデリケートな身体を弄るのは難しい。病人全員を僕ら教会で面倒は見られない。見たとしても解決にはならない。延命措置しかできない。

「……とりあえず何とか隙を作らないと」

エルス＝ザインがあんな手を使ってきたのは始めてだ。彼はもっと手っ取り早い方法を好む。そして無意味に残酷だ。それが影を潜めているのは……おそらくアルドールのことを理解されすぎたことが原因だろう。そう攻めた方がアルドールが苦しむと理解して。

全く残念だよ。彼はタロック軍にとけ込めていない存在だ、適度の飴と鞭で手懐け使い捨ての手駒化でもしてくれようと思っていたのだけど、残念ながら世の中上手くは行かないようだ。

「イグニス、北に行くのって本当に必要なのか？今ここでもう一度タロックを追い返す事って……」

僕の体調を慮ってのことだろうか。だけど王にそんな考えは不要。僕がどうとかじゃなくて、国として王としてどう動くか。僕が求める答えはそれだ。僕が傷ついたって、仮に死んだって、君は王として最善の行動をすべきなんだ。玉座を奪われたとはいえ君はもう即位した。僕がさせた。王なんだ。その自覚を持ってくれ。

「無理だよ。僕はこんな状況だ。まともに戦えるのはあの二人の騎士くらい。双陸とランス様、エルスとセレスタイン卿ユーカー、それぞれ相打ちに持ち込むことくらいなら出来るかも知れないけど、彼らまで失ったらアルドール、君は完全に裸の王様だ」

セレスタイン卿ならエルス＝ザインには勝てる。唯そのためには

大分幸福値を削らなければならない。それはあまりに勿体ない。エルス＝ザインが厄介なのは知っているが、早めに摘むには痛手の多いカード。しばらく放置して向こうの幸福値が減ってから刈り取るのが上策。刈り取るなら双陸の方が先だ。彼が下位カードであることはまずあり得ない。上位カードなら僕とセレスタイン卿が居れば絶対討てる。

（そのためにもまずは二人を引き離したい。都を取ったことでタロックの軍勢は減る。今がチャンスなのはまず間違いない）

タロックにエルス＝ザイン以外に優秀な数術使いはいない。一度彼がタロックへ帰還したなら、向こうに情報を届けられる人間がいない。エルス＝ザインが再びカーネフェルに戻る前に僕らは体制を立て直し、双陸を討たなければならない。

「タロックを追い払うだけじゃ戦いは終わらない。そのためには戦力、カードの補充が必要。このカーネフェルの地にはまだまだ他のカードの気配がするよ。それをタロックに奪われる前に回収したい。そのためにも戦力強化、北へ遷都は必要なんだよ」

「でも……」

「君だって見ただろ？腐りきった欲集りの都貴族達が君に群がるのを」

だけど都の腐った奴らを正すには、双陸の支配も必要だ。この都の人間達にはお灸を据えてやった後に上手いこと飼い慣らしてやる手筈。

「それに北部には心強い味方もいるよ」

「味方？」

「ランス様の……正確にはその父親のアロンダイト卿。彼の領地

は北部にあるんだ。北部では結構力のある人でね、彼の所にでもご厄介になろう。ここらで彼らの親子喧嘩も終止符討たせて貰うためにも」

「え？ランスって実家と上手く行ってないのか？」

「だからこそセレスタイン卿を猫可愛がりしてるんだって。彼が家族代わりだから」

「なるほど……」

「せっかく生きてる親子なんだ。生きている内に仲直りくらいさせてやりたいだろ？何が起こるか解らないこのご時世なんだ」

「イグニス……」

そこまで言えばこのお人好しは乗り気になった。でもそこでイグニスっぱり優しいんだなみたいな勘違いは程ほどにして置いて欲しい。別に優しさから提案してるわけじゃないんだよ？完全に君を丸め込むための計算だって言うのにこの馬鹿は。

「そうだよな」

まだ引き摺っている部分はあるのだろう。トリオンフィ家との確執。そして今の言葉は、今朝のフローリプさんのこと思い出させる大きな引き金。彼の瞳が揺れる涙の水によって。

それでも彼は笑顔を浮かべるから、見ない振りをしてあげた。

「ランスには、そういう思いさせたくないよな」

「うん、そうだね」

「ユーカーとも、早く仲直りしてくれればいいな」

そうだ。それでいい。君は君の優しさを僕以外にも向けるべきだ。そうやって彼らにも心を開いてうち解けていってくれれば……たぶん悪いことにはならないよ。

そうやって少しずつ関心が余所へ移っていけばいい。君は大丈夫。その内僕なんか居なくても、ちゃんと歩けるようになる。逆を言えば僕が傍にいる限り君はずっと駄目なままだから、出来るだけ早い内に……

＊

「……あれ」

なんか増えてる。アルドールが最初に思ったのはそんなこと。そしてその次に浮かんできた言葉は……

「ど、どちら様？」

ランスが連れてきたのは二人の人間。一人は少女、一人は少年。いつも爽やかな微笑みを湛えているランスらしかぬ、ちょっとやさぐれたような表情。それにイグニスだけが納得している。

「ああ、なるほど」
（どういうこと？）

小声でイグニスに聞いてみれば彼女も小声で、「？、キャラが被ってる。？、何だかんだで独占欲。？、なんか釈然としない」……と答えてくれたが主語が抜けていたので俺のよくわからない状態継続。

「あぁ？見せもんじゃねぇぞ？」

可憐な少女と思わせて、そこからヤクザキックを決めてくるなんて誰が予想しただろう。

「も、もしかしてユーカー！？」
「声以前にまず見て気付け」
「気付かないだろそれ普通っ！」

そんなことを言われても。服装は女物。ユーカーはそこまで身長があるわけでもないから、まだ十分自然に変装出来ている。髪を下ろした上にいつも刎ねっぱなしの髪を手入れしてストレートにしてあって、それがいつもより長めだからあれっと思う。眼帯の位置を入れ替えているから目の色から受ける印象も違う。目の色素がより薄いからだろうか。少し儚げに思ってしまったのが間違い。油断するとヤクザ蹴りが飛んでくる。

「セレスさん、今年は優勝ですね！」
「俺は参加しねぇからな」

そんな偽装少女の横でにこにことはしゃいでいる少年は、イグニスよりも幼く見える。フローリプと同年代くらいだろう。ユーカーのぶっきらぼうな物言いは相変わらずだが、相手が子供だからだろうか。少し優しい感じもする。え、何か狡い。俺なんか初対面の時結構酷い扱い受けてなかった？

っていうかそれを言えばイグニスや俺だって年下なんだけど、子供としてカウントされていないんだろうか？まぁ、イグニスはしっかりしているし仕方ないか。

それはさておきランスはと言えば、そんな二人のやり取りに無言で怖い。笑顔を浮かべてはいるのだけれど、それがちょっと怖い。イグニスの言っていた意味はよくわからないが、この二人のやり取りを快く思っていないようなのは俺でも解る。

「ら、ランス……？」

何かあったのと声を掛けてみれば、彼は俺に気付いたようで何時も通りの顔になる。

「何を隠そう、王宮騎士団秘密兵器にして幻の切り札女装騎士セレスです」

「俺としては永遠に隠して置いて欲しかった黒歴史なんだがな」

ランスの発言が何故か自慢げに聞こえたのが不思議だったが、その横で相方のユーカーが心底嫌そうな顔をしていたので、ああと思った。この人は本当、ユーカーからかうの好きなんだな。基本優しい人なのに、どうして彼だけこんなにからかうんだろうな彼は。それが親しみってことなんだろうか？それなら俺とランスの関係は、まだまだ他人行儀ということらしい。

「ええ、そうですね。有名ですよ。ランス様のように騎士としての働きに関してセレスタイン卿の名前は殆ど伝わってませんが、かつてカルディアの女装コンで初出場初優勝を遂げたにも関わらず、そこから二度と出場しなかったという幻のセレス嬢の噂はシャトランジアの一部の人間達の間では生きる伝説とまで……」

「要らん情報他国に漏らしたの何処の何奴だ！！」

まぁ、当然こうなるか。イグニスは例え怠くてもユーカーをいびる隙を見つけたらそれを徹底的に叩く子だ。なんかもう、一回りしてお前ら仲良いよね。イグニスの親友としてはちょっといやかなり複雑な気持ちだ。イグニスは勿論大好きだし、ユーカーのことだって嫌いじゃないんだけどね。

（あ、そっか）

俺は理解する。ランスもそういう気持ちなんだろう。自分の友達が（俺も人のことは言えないけれど、決して友達が多いとは言えそうにない二人が）仲良くしてるのは微笑ましいとも思うけど、ちょっと内心微妙な感じになるものだ。

そう思うと、当たり前のことなんだけどランスも人間なんだなぁとしみじみ思う。何でもそつなくこなす立派な騎士様って印象の所為で、神格化とまでは行かないけれど凄いって言うイメージ、先入観を持ちすぎていた。その辺改めないとな。俺は立派な王にならなければいけないんだから、俺に仕えてくれる彼のことを誤解したままではいたくない。そんな俺はきっと、イグニスの望むような王ではないはずだ。

もっと頑張らないと。そう自分に言い聞かせている間も、イグニスとユーカーの口論改めじゃれあいは続いている。

「いえ、先代様がよく話のネタに出してまして。うちの国の上層部の人間なら、一度は耳にしたことがあるとかないとか。僕はそれを人伝に聞きましたね」

「あのおっさんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんだ、大体、あれは当時の俺が最盛期だったからってだけだろ。今はもう無理！女装なんて歳じゃねぇ！全然似合ってねぇし！」

「嫌ですね。好き好んで女装するような奴にやらせてもつまらないじゃないですか。貴方のようなプライドの塊である貴族を無理矢理嫌々させるのが楽しいんですよ！ぶっちゃけ貴方の女装に興味はありません。似合ってようとなかろうと、僕はその過程の方を楽しむ派です」

「お前っ、本当っ！最低っ！！それでも神子か！クソ野郎っ！！」

「そしてついでに言うなら、今どんな気分ですかセレスタイン卿？そんな恥ずかしい恰好を僕に見られている気分の方は？」

「……くそっ！」

常時男装女に言われたくねぇ！彼はたぶんそう言おうとしたのだ。だけど彼は呑み込んだ。
それは一応最高機密。口外して良い物でもない。それが例え親しい間柄の人間でも。その咄嗟の判断と気遣いに気付いたのか、イグニスもそれ以上は言わなかった。だからユーカーが口で負かされたような形になった。何だかんだ言いながら、実は良い奴なんだなぁとはシャラット領でのいろんなことで教えられた。

「何にやにやしてんだよ？えぇ？」

だけど短気だ。俺が感心してたのを、今の姿を馬鹿にして居るんだと思い込んでの言いがかり。被害妄想の気があるのは、彼がいろんなトラウマとコンプレックスを抱えている所為だろう。とりあえず彼にはいろいろ借りがある。どうせ本気で殴ったりしてこないし適当にしばかれておこう。

「……何はともあれ、ご苦労様でしたランス様。それとセレスタイン卿」
「お前ランスは名前なのに俺は意地でも苗字呼び？」
「呼ばれたいんですか？」
「べーつーに。どうでもいいけどよ。んで？俺が礼を言われる理由がわからねぇな」
「だってその子、カードですよ」
「え？」

室内でキョロキョロと辺りを見回さなかったのはイグニスと、もう一人だけ。必然的にその子が今の言葉が指す相手となる。

「え？」

その子は沢山の視線を一度に向けられて、恥ずかしそうな表情で、遅れて辺りを見回した。

「嘘だろ？パー坊の奴がカードだって？んな馬鹿な。ちょっとお前手ぇ見せてみ？ほら見ろ両手とも何もねぇ」

少年の両手にの無事を確かめて、ユーカー（女装）はほっと安堵の息を吐く。それでもイグニスは軽く首を振る。

「セレスタイン卿。小アルカナには何枚、ペイジがありますか？」

「は、そんなの剣に金貨に聖杯に棍棒……って……おい」

「そういうことです」

イグニスは小さく笑う。エルス＝ザインの手にも、何もなかっただろうとその笑みは暗に告げている。

「先程の貴方の推理は正解ですよ。エルス＝ザインはペイジです。スートはわかりませんけどね」

「そ、それじゃあ……」

イグニスの言葉に、俺も息を呑む。こんな小さな子供がまたカード？

（フローリプ……）

思い起こされる彼女との思い出、記憶。今は哀愁に囚われている場合ではないのは解っている。それでも彼女と年の近いこの子まで、巻き込んでしまうのは心苦しい。そりゃ誰が死んだって悲しい事には変わりないけれど、自分より年下が自分より早く死ぬというのは

とても堪える。本来の寿命なら、俺より長生きするような相手を、俺のためにその命を使い古すというのは……

俺の躊躇い。それに気付かないふりでイグニスは言う。王ならばその位受け入れろと俺へと示すため。

（イグニス……）

どんな悲しいことがあったって、傍に彼女が居てくれるなら。俺は何度でも立ち上がれる。彼女の言葉があるのなら。俺は確かにイグニスがいればそれでいいけど、十分救われている、支えられているけれど……本当に、それで良いのだろうか？

俺はイグニスに訴える。答えを求める視線を送る。それでも彼女が俺にくれるのは、先程の質問の答えだけ。

「そうだね。普通の人が見たくらいじゃ一般人と区別は付かない。僕だって目の前に現れるまではペイジの存在には気付けない。そういう特殊カードなんだ」

「パー坊っ！お前なんか夢見なかったか！？変な夢っ！」

「え？夢ですか……？いつですか？僕、あんまりよく覚えてないんですよ。毎日疲れちゃってぐっすりで」

イグニスの解説に慌てふためくユーカーが、少年の両肩を揺する。危機感を全く感じていないのか、少年は始終笑顔だ。肩を揺すられているのだって遊んで貰ってるような感覚らしい。ある意味大物だ。

「イグニス様、ペイジとは？」

あの場にいなかったランスの問いかけに、イグニスはカードと審判についてをもう一度語る。

「これは模様はトランプですが、カードとしてはタロットカードの小アルカナに近いものなんです」
「だからそう言うことは早く言えっ！」
「余計な混乱を避けるためにも情報開示には時期というものがあるんですよ」

食ってかかるユーカーをさらっとかわすイグニス。

「つまり、カードはスート毎に十四枚。全てで五十六枚、そこに道化師が加わり五十七枚というわけですか？」
「さしあたってはそうです」
「また妙な言い方しやがって……」
「基本、ペイジのカードは発現が遅いのと十五才以下の低年齢者に現れるのが特徴です。本人の願いがはっきりしていない場合や、心に背く願いを語ったりするひねくれ者である場合。彼らはペイジになる。カードとしての強弱はＪと同程度かそれ以下です」
「同程度……？」

俺の疑問にイグニスは頷いた。恐れるには足らない。唯味方となるならそこそこ心強いと彼女は言う。

「うん。現状では？より強くてＪより弱い。１０，５みたいなものだと思ってくれて良い。だけど幸運値はＪと同じだから序盤でエルス＝ザインをどうにかしようっていうのは今となっては難しい」

Ｑであるルクリースを失ったのは痛かった。そう責められているわけではないけれど、胸が僅かに痛んだ。これ以上俺の傷口を掘り返さないようにと、イグニスは今の話を先に進めることにしたようだ。

「唯、模様が現れてからが怖い」
「こ、怖いだって？」

目の前の少年か、それかエルス＝ザインを思いだしてか。ちょっと少年から距離を置くユーカー。それに気付かず離された分以上に近づく少年。懐いてるんだなあの子ユーカーに。

「ええ。ペイジのカードは願いと感情のシンクロが最高値になった時だけ模様が現れます。この時一時的にですが１０，５から１１，５くらいになります。つまりセレスタイン卿じゃエルス＝ザインを倒せる可能性と倒される可能性を持っているということですね。ですからあそこで逃げたのは正解です」
「うげっ……１１，５だって！？」

そんなの倒せるカードは、キングとクィーン、それにジョーカーしかいない。そしてそんなカード、今のカーネフェルにはあり得ない。

「つまり、パルシヴァルの存在は今の我々にとって大きなものであると言うことですね」
「そうなります」

ペイジに対抗できる可能性があるのはペイジだけ。ジャックのユーカー一人じゃ危ない場合、彼の手助けがあった方が心強いのは確かだ。

（だけど……）

相手はまだ子供だ。渋る俺にその子は、初めてユーカーから離れ、とてとてと近づいてくる。

「な、何？」
「お兄さん、もしかして王様ですか？」

キラキラと青い眼を輝かせている少年の笑顔が眩しい。記念に握手してくださいとか言われ、動揺しつつそれに応えると、また嬉しそうに笑って去っていく。

「セレスさんセレスさん！王様と握手しちゃいました！」
「あっそ。俺の手で上書き保存してやろうか？」
「や、止めて下さいよ！」

さっそくユーカーの所に誇らしげに報告に行く少年。少年を迎えながら、意地の悪い笑みを浮かべるユーカー。珍しくからかう側の相手がいるからか、生き生きしている。

「何！この俺様の手を握れないとでも？俺が憧れとか言ってたのはどの口だ！？えぇ？そうやって簡単にアルドールの阿呆なんかに乗り換えるとはお前は……」
「セレスさんのはこっちです」

からかっているつもりだったユーカー。それでも少年は一枚上手。俺と握手した方ではない、もう片方の手で片手を握られて、完全に不意を突かれたらしい。微妙な悪人笑みのままユーカーは固まっている。少年の満面の笑みにやられてしまったらしい。まぁ、あんな純真な子が相手じゃ悪態も吐けなくなるよな。

「僕この手宝物にします！洗いません」
「お、大げさだな」
「全くこれだからガキは」

はしゃぐ少年に俺とユーカーが苦笑する。その無邪気さに部屋の空気が一瞬和らいだ……と思ったその刹那、何かどす黒い気配と寒気を感じた。

「ら、ランス？」

その寒気の方にはランスの姿。彼はくすくすと笑っているというか嗤っている。目が嗤っていないのが怖い。

「パルシヴァルは無邪気だね。でも現実問題それはちょっと難しいと思うな。いいかい？手というのは雑菌だらけでね、その汚さと言ったら黒い悪魔と謳われる某昆虫と同じくらいの汚さだって言われているんだ。それを一生保ったとしたなら君の手はとんでもないことに」

「お、大人気ねぇぞランス！てめぇ！パルシヴァルが涙目なってんじゃねぇか！」

言っていることは正論っぽいが、どうにもいつものランスらしくない。

（なぁイグニス、さっきからランスちょっとおかしくないか？）

（まぁ、夏だからね）

そう言う問題だろうか？でもイグニスがそう言うならそうなのかもしれない。

「ほら泣くなって。俺もあの馬鹿も握手くらい何時でもしてやっから。手なんか勝手に洗えばいいだろ」

「うう〝っ……セレスさん〝……ほん〝どう〝でずが？」

「あーまじまじ。本当ほんと。アルドールの奴なら俺が脅せば大体のことすっから」
「しかしその際二人の手から君は雑菌を譲渡されるということで、万が一二人の手に何らかの病原菌があったとしよう。しかし今は緊急事態。水源の確保も出来ぬまま食事、そこでナイフやフォークを使える状況下になく手づかみと言うことも十分起こり得る。その先君は……」
「またお前は！そんなにこいつ苛めんなって！！っていうかお前どさくさに俺まで貶めんな！俺はちゃんと手とか洗う派だからな！人の名誉を失墜させる発言は止めろ！そんなに言うなら手袋投げんぞ箱毎束でっ！」

「そこの君、怖いお兄さん達はまぁ放って置いてこっちでお菓子でも食べよう？」
「そうそう。あの二人はほっとけばその内また関係自然修復してるから大丈夫大丈夫」

少年を挟んでの口論が、いつの間にかスライドし少年無しの口論に発展。目をぱちくりさせている少年が可哀想だってので俺とイグニスは顔を見合わせ手招きした。

「へぇ、君パルシヴァル君って言うんだ」
「は、はい！」
「何歳？」
「１２です！」
「そっかー、若いね」
「アルドール、君なんか変な質問してない？っていうか僕らと２，３才しか変わらないでしょ？」
「仕方ないだろ、俺はついこの間まで引き籠もりみたいなもんで家族とも上手く行ってなくてコミュ障みたいなものでろくな友達作

りもしたことがないんだよ！」
「ああ、それで僕のこと大好きなんだ。奇跡だね。良かったね。僕と友達になれて」
「ああ、もう本当っ！ありがとうっ」
「だからあんな変な質問してたんだ。君、身の丈に合わないことはしない方が良いよ。無様だからさ」
「ああ、よろしく！俺駄目だ。年下の子なんてどんな話したらいいのか全然わからないよ。今若い子達の間で何が流行ってるのかもわからないし」

片手を上げるイグニスに、心からのありがとうを籠めてバトンタッチ。後は任せた。

「ああ、ごめんね。こっちのは基本ツッコミ担当なんだけど、本人も所々ボケてるからさ。どっちもいけるんじゃないかって勘違いも甚だしいのにね。調子乗ってあの様なんだ」
「そうなんですか」

イグニス、冷たい。だけどそれでこそイグニスだ。むしろそんなところも大好きだ。でもパルシヴァル君だっけ？君、そこは同意してくれなくて良いんだよ？

「なるほどね。君は騎士見習いだったんだ」
「はい！」

何この就職試験とか面接みたいな空気は。でも下手にツッコミ入れてまた滑ったら困るし黙っておこう。

「でも何で騎士なんてなりたいの？あの二人見れば解ると思うけど、給料分割に合わない仕事だし、名誉職みたいなものだったのに

最近それも地に落ちてるし、犬死に万歳とか三唱させられそうな職になりつつあるよ？」

「あの、あのですね！僕は……騎士様に憧れて……」

「憧れねぇ。いるんだよね、そういう子って。結構多いんだけど、それだけじゃこの業界なかなかやっていけないよ？」

あれ？イグニスさん、さっきまで優しくお菓子を勧めてたのに何それなんですかそれ。いきなり鬼面接官化してませんか？若い子いびりですか？自分より若い子出てきたのが気に入らないんですか！？そんなことしなくても俺はイグニス大好きだから！ダントツで一番だから！

あとそのスルメとさきイカ何処から出したんだ？それ絶対紅茶のお菓子には合わないと思う。もしかしてツッコミ待ち？でも違かったら怒られそう。黙っていよう。

「ってイグニス、言い過ぎだろ？もう、この子涙目じゃないか！」

と思ったけど流石に無理だった。だってなんか小型犬みたいな可愛さで両目に涙を一杯溜めてぷるぷるしてる。これは流石に庇いたくなる。

「若いっていいよねぇ。泣けばなんでも許されると思ってるのがまた……」

「あ、あのさ！憧れってどんなのだったのかな？詳しい切っ掛けとか教えて貰えると俺も嬉しいな」

イグニスの発言を遮って、少年の目の高さに顔を合わせて俺は笑いかけてみた。少しは落ち着いてくれたのか、ごしごしと袖で両目を拭いながら、少年は何度も頷く。

「騎士様は、馬に乗ってて剣を持ってて……優しくて強くて、格好良くて……」
「そっか。確かになぁ。俺も昔本を読んで憧れたりしたよ。いいよな騎士って格好良くて」
たどたどしい言葉だ。それでも俺が頷く内に、少年は息を整えていく。
「僕、前にセレスさんに助けられたことがあるんです」
「ユーカーに？」
「はい！凄く、凄く格好良かったんです！」
「へぇ、聞きたい聞きたい」
「僕が昔森で遊んでいる時に、迷子になって……躓いて転んで、その拍子に木にぶつかって蜂の巣を落としてその蜂蜜の匂いに熊がやって来て」
流石はコートカード。地味に不運属性が入っている。
「もう駄目だって思った時に、セレスさんが助けてくれたんです」
「ああ、そりゃあ惚れるよな」
両目を輝かせて思い出話を語る少年に、俺も思い出したことがある。視線をイグニスへと向けると、何か用と彼女は睨むけど。
「イグニスだって昔、狼に襲われた俺とギメル助けてくれたことあったじゃないか。懐かしいなぁ、本当あの時は格好良かったよ」
「あれはたまたま……ギメルを助けようとしたらおまけで君まで助けてしまっただけだよ」
「おまけでも何でも俺は感謝してるよ。ありがとう」

昔話にイグニスの空気が若干和らいだ。だから少年もそこに割り込むことが出来た。そんな彼が言うには……

「違いますよ。セレスさんは熊を倒してないです」

「え？」

今の話の流れ的にはそうなるんじゃないの？

「セレスさんは僕を馬に乗せてくれて、そのまま大急ぎで逃げ出したんです」

少年は胸を張ってそう言うが、俺とイグニスは白けた気持ちで今なお口論を続ける騎士を見やる。

「ユーカー……」

「今の話の何処に憧れる要素があるのか不明だね」

「僕はセレスさんの、そういう優しいところが大好きです」

「あ、そ……そうなんだ」

殺さないために逃げるという。その行動に胸を打たれたのだと少年は言うが、それは普通の人が考える理想の騎士像からはかけ離れてはいないだろうか？

（いや、でもさイグニス。ユーカーも一応戦争経験者なわけだからそれなりには殺してるよな？）

（だろうね。まぁ、子供の目の前で血生臭いことはやらないっていうのは評価できるかもしれないけどさ。或いは唯のへたれか）

（或いは唯面倒臭かっただけかもしれないなー……ユーカーのことだし）

「僕はそれまでお城には、一人……強いけど乱暴で素行も態度も悪くてとても騎士らしくない騎士様がいるって聞いていました」

あ、それユーカーだ。たぶんきっと絶対。

「だけど僕が会ったその人は、とても優しい人だったんです」

そう言って少年が笑う。人の噂より、目で見たものの中から真実を見つけたと。

「そ、それだけじゃないですよ？門限を破ったって母様に怒られそうになった僕を、セレスさんが助けてくれました。自分が道案内にって連れ回したって。母様に箒と塩で追い払われて二度と来るなって言われながら帰って行くセレスさんはとっても格好良かったです！」

「セレスさんは帰り道、ずっと王様の話をしてくれました。セレスさんがそんなに大好きな人ならきっと凄い王様なんだろうなって思ってました！お会いできて光栄です！」

「あ、あのさそれは俺じゃなくて、俺の前の王様なんだよ」

「え？でもセレスさんの王様なんですよね？」

「あ痛っ！」

笑顔のイグニスに、机の下で足を踏まれた。その笑顔はお前は余計なことを言うなと物語る。そしてがしっと少年の両手を掴み、憂いの微笑を送るイグニス。本当役者だ。イグニスは。

「そっか。そういうことだったんだね。さっきはごめんね……君の覚悟を試していたんだ」

「そ、そうだったんですか？」
「でも君の覚悟はどうやら本物だったらしい。王様はね、今は一人でも信頼できる相手が欲しいんだ。パルシヴァル君、君は騎士だ。君のそのまっすぐな心はどんな騎士より騎士らしい」

褒め殺しに入ったイグニス。飴と鞭が効いている。最初に冷たくした分だけ、優しい言葉は大きく響いて聞こえるものだ。

「君は十分憧れた。そろそろ夢を叶える時期だと僕は思うよ。もう憧れるだけじゃない。同じ場所に立って、今度は君がセレスタイン卿を助けてあげる番だよ」
「僕が……セレスさんを？」
「ああ、そうさ。彼は見ての通り素直じゃないから敵も多い。誤解もされやすい。そんな時に君の助けがあれば、彼はどれ程心強く感じることだろう？あと同僚になればランス様もあそこまで君にずけずけ物を言えなくなるよ」
「そ、そうなんですか？」
「ああ、勿論！君さえ良ければ今日から君も騎士にならないかい？いいよねアルドール？」

いいよねの言葉と同時に有無を言わさぬ勢いで、もう一度足を踏まれた。口答えすんじゃねぇぞの意っぽい。

「え、……あ、イグニスが良いんなら別に良いけど」

そうなった以上俺はこう言うしかない。カードの子を野放しにしておくより傍に置いて置いた方がまだ守る術はあるだろう。カードは基本推理小説とかと同じだ。固まっていればその分幸福値があり安全。単独行動が危険で狙われるというのは道化師との一件で証明済みだ。

「よし。それじゃあ君にも剣と鎧と馬をあげよう。今は状況が状況だから教会の中の物になっちゃうけど、落ち着いたら改めてアルドールから贈らせてもらうから。それじゃあ行こうか？」
「は、はい！」

そう言ってイグニスはパルシヴァル君を連れて部屋から出て行った。去り際のイグニスの横顔は、してやったりと言うような人の悪い類の笑みを浮かべていた。
扉の閉まる音で、我に返ったらしいユーカーが……
「ん？そういやあいつらどうした？」
と聞いてくるので。今あったことを教えると……
「てめぇっ！何で止めなかった！！」
理不尽にも一発殴られた。結構痛い。本気で殴られたようだ。
「ユーカー、アルドール様に手を挙げるなど、無礼だろう？すみませんでしたアルドール様」
さして申し訳なくも無さそうに、ランスが頭を下げる。そりゃあランスが俺を殴ったわけでもないからそうだよね。
「第一その場にいて止められなかった俺たちにも責任はある」
「お前、図ったな！？俺の意識を完全にこっちに集中させるために俺のことあそこまで苛立たせたんだろ！？くそっ！あの神子と共謀してやがったのか！？」
「ユーカー！」

「ふざけんな！お前がそこまで最低だとは思わなかった！あんなガキまで巻き込むってのか！？俺はそんなの認めねぇぞ！」
「……お前は昨日の今日で、自分の言葉を違えるんだな？それなら俺もお前を見損なったよ」
「ちょっと、二人とも落ち着いて！！……って何かこれと似たパターンがどこかで……」
「もうお前なんか知らねぇ！勝手にしやがれ！！もう何処で野垂れ死んだって助けてやらねぇから！」
「そうだな。俺も勝手にする」

どうしてみんなこんなに怒りっぽいんだ？別に俺たちは蚊に刺された訳じゃないのに。

「あ！！そ、そうだ！！これは嗅覚数術の時のと同じだ！」

一週間前だ。シャロット領で使われた数術。あの数式は数術使いではなく、道具……匂いを媒体とした物により引き起こされると言う話だった。

（何か居るのか？この部屋に……）

俺は室内を見舞わす。何もない。もう一度。今度はじっくりと……あれ？
「あ！」

天上に張り付いているものがある。あれは虫だ。蝶か蛾か。見たことのない種類だ。その羽からパタパタと鱗粉をまき散らしている。

（もしかして、あれが……？）

じっと見る。睨み付ける……すると微かにその鱗粉から数字の群れが見える。もっと目を凝らせ。集中して。
辛うじて俺にも見える。それが何を意味しているかは解らない。それでもそれは数式だ。

「……ごめんっ！」

俺は手近な花瓶を投げつけて、虫を潰す。虫が死んだことで、数式が解除されていく。

「やった……」

これで二人も落ち着いてくれたことだろう。そう思って振り返る。しかし、一人足りない。

「ランス！ユーカーは！？」
「……お、俺は一体何を。何故あんな事を……」
「いや、それはいいから！仕方ないから！で、まさか出て行ったの！？」

正気に返ったランスに詰め寄れば、彼は蒼白。動揺している。俺が目を離している間に余程酷い言葉を口にしてしまったようで、それに怒った彼が部屋を飛び出したらしい。言われてみれば部屋のドアは乱暴に開け放たれたまま。

「大変です！神子様！教会にタロック軍の者が……」

室内に駆け込んでくる、聖職者と聖十字兵。しかしイグニスはいない。俺は咄嗟に判断を下せない。
コートカードが側から離れただけで、この不運。図ったかのよう

にやって来た。

（ど、どうすれば……）

2：Amantium irae, amoris integratio

「くそっ……ランスの野郎」

ユーカーはここにはいない従兄への悪態を吐く。その言葉が自分の耳に虚しく届き、何も言えなくなった。思わず外へと飛び出してしまったが、外の空気を吸うにつれ、頭が冷静さを取り戻す。そうなれば自己嫌悪が生まれる。

「はぁ……」

売り言葉に買い言葉。そうだったならどんなに良いか。例えあれが嘘でも本当でもやはり堪える。それが本心なのだと思ってしまう。分かり易い様でいて、元々何を考えているかわからないところがある男だ。長年一緒の自分にも、近くに居すぎた自分だからこそ見えていないものがある。

（しかし何だってんだ……）

神子が言うには、エルス＝ザインが呼びだした虫により、女達は病に伏せっているという。そのわりに、街を歩く華やかな女が何人も。どちらかというと男を見かけない。ユーカーが不審に思っていると、その答えは目ではなく耳へと届く。耳障りなその声。無理矢理出している甲高い声。出せずに開き直って低音の声。時折間違う言葉遣い。

（こ、こいつら全員男か！？）

自分も人のことを言えないが、それはこの際棚に上げておこう。

例年通り開催されてしまったらしい魔の宴。この時期になると生死を賭けた鬼ごっこを相方と繰り返していたような気がする。逃げと隠れに関しては俺の方が上。毎年上手いこと撒いてやっていた。でもそれだってどうだったんだろう。

あいつが折れてくれていただけなのかも知れない。そりゃああいつの立場もわかる。嫌なものは嫌だけど。だからチャンスはくれてやっていたんだ。見つけたら仕方ないから出てやるって妥協を。それを放棄したのはあいつだ。それなら俺は悪くない。うん、そうだ。

でも今年は……

（見つかっちまったんだっけ……）

「……」

謝りに行ってまた拒絶されたら立ち直れない。でもよくよく考えてみれば、あの場にアルドールとランスだけを残してきてしまった。二人は数札。それも？と？。かなりの上位カードだ。神子とアルドールが一緒の時にですらエルス＝ザインは現れた。神子の幸福値は既にペイジ以下。アルドールの阿呆と足してもペイジ以下。コートカードが一緒でも危ない。俺が離れたことであの二人は危ない状況に陥っているかも知れない。

（……でも）

棘が抜けないんだ。突き刺さっている、言葉の剣。

“俺より弱いお前が俺を守るだって！？俺はお前なんか必要ない”

部屋を飛び出す前に、あいつにそう言われた。重荷だったんだろう、俺の言葉も行動も。もううんざりしているんだろう。そりゃそうだ。俺はカードだから必要なだけで、俺自身はあいつのために何の力にもなれない。あいつ一人で何でも出来る。

「……」

戻らなければ後悔する。それは解ってる。でも教会へと戻る足は、近づけば近づくほど歩幅は狭まり遅くなる。それでもじりじりとその場所は近づく。

（ん……？）

教会の前は騒がしい。物陰から様子を見れば、黒髪の男達の姿が見える。タロック軍が教会まで手を伸ばしたのか？

教会は基本的に治外法権エリア。カーネフェルにありながらシャトランジア、そして十字法の支配下だ。タロックだって好き勝手に悪さは出来ない。……はずなのだが、相手はタロックだ。過去に一度シャトランジアに仕掛けてきたこともある上、友好のため嫁いだ姫をとその子供を処刑するような国だ。何とも言えない。最悪アルドールがここにいることがバレたなら、強行突破もあり得ない話ではない。

今の俺の恰好がシスターなのは好都合と言えば好都合。しかしこの騒ぎの中正面突破は難しい。

（どうしたもんかな……）

「イズーっ！！」

不意に抱き付かれて、身体が強張る。この寒気を感じさせる声。間違いない。

（と、トリシュの野郎……！）

さっき教会で会ったのだ。まだ教会にいてもおかしくはない。し

かし何故？こいつが教会にいた理由が分からない。街でようやくまともな男に会ったと思ったが、残念ながらこの男は中身がまともではなかった。

「会いたかったよイズーぅううううう！！」

ちげーよとツッコミ入れたい。でも喋れない。裏声なんかで誤魔化すわけにもいかないだろう。不審がられても困る。バレても困る。一生こいつに馬鹿にされる。そんなのは嫌だ。

「何処へ行っていたんだい！？教会中を探し回っても見つからないし、君のことを知っている人も殆どいないし！それでも諦めきれなくて引き続き教会警備に回して貰ったんだよ」

しかしこのままでもまずい。言い返せないのを良いことに、こいつの脳内妄想をそのままぶつけられてしまうことにもなりかねない。そういうのも絶対に嫌だ。何を血迷ったのかこの男は、俺の変装を理想の空想上の女と重ねたらしい。どんな目してやがるんだ。二次元を三次元に持ってくるなってんだ。

（って教会警備？）

どうしてこいつが？っていうかよくよく見れば黒髪連中以外に金髪兵士が教会の前に何人か配置されている。しかし戦う様子はない。

（……まさか都貴族の奴ら）

王が教会にいる可能性。それを指摘しこいつらを使って探しに来させた？それでタロックの奴らも教会に何かあると嗅ぎ付けたのか？

「本当はさる高貴な方を探す任務だったんだけど、どうしても君のことを忘れられなかったんだ」

こいつは馬鹿だろうか。馬鹿かも知れない。っていうか馬鹿だ。絶対そうだ。これは十中八九あいつのことだ。カーネフェル王アルドール。あのガキのことだ。

「そんな目で僕を見ないでくれ！確かに仕事を真面目にしなかった僕は駄目な男かもしれない。それでも僕をそんな駄目な男にしたのはイズー！君の所為なんだ！」

責任転嫁にも程がある。それはお前の自己責任だ。あきれて溜息を吐けば、こいつはまた勝手な解釈を始めたようだ。

「……？」

その解釈の結果俺は何故かこのクソ野郎に抱きかかえられている。クソ野郎は颯爽と教会警備を投げ出して、愛馬の鞍に跨った。ええとこれ、どういう状況？

「預言書によれば……」

そう言って男が胸元から取り出したのは一冊の本。別段珍しくもない。嘘だか本当だかわからない伝説やら伝承の類をまとめた本だ。こいつの中ではこれが預言書と言うことになっているらしい。

「このまま君を教会に帰すわけには行かない。教会には王がいるという話もある。王と君を引き合わせれば、また前世の時のように君は王と愛のない結婚をすることになってしまう！そんなのは君も嫌だろうイズー！！」

そりゃあ嫌だ。だってあいつ男だし。っていうか俺も男だし。だからってアルドールとトリシュなんて二択真っ平ごめんだ。どっちも野郎じゃねぇか！俺にはアスタロットっていう歴とした婚約者がだな……いるっていうかいたっていうか。

「僕が思うに君は彼の元へ送られて来た遠縁か何処かの姫君なんだろう。それで今はシスターに扮して逃げてきた所だったんだろう？可哀想に、好きでもない男に嫁がせられるなんてあんまりだ！それでも君は優しいから。そんな男でも見捨てられずに戻ってきた。いや、違う。そうか！君は僕に会いに来てくれたのか！気付けなくてすまなかった。やはり君も僕を愛してしまっていたんだねイズー！！」

っていうか何でそうなるんだ。俺が言い返せないのを良いことに話を勝手に進めるな！

「幸い私はまだ新しい王には仕えていない。つまり彼を守る義理はない。イズー……今の僕はこれからの僕は君のためだけに生きると今ここに誓おう！」

何て反吐の出る言葉。しかしそこには妙な錯覚。何処かで聞いたことがあるような。

（そうだ、これは……これは、俺の言葉だ！）

俺はアルドールには仕えていない。守る義理はない。俺がここにいるのは、ランス、てめぇを守るためだ。

それは昨晩自分が口にした言葉。思い返して吐き気を催す程。端から聞くと自分の言葉がここまで酷いものだとは。心のままに口に

しているはずなのに、エゴにしか聞こえない。
それじゃ、あいつも迷惑だって思うよな。
（あいつはあの人の影を追ってるだけなんだ）
守っても虚しいだけ。あいつは死を見据えている。生きるためには戦わない。生かすために戦う奴だ。俺があいつを守るのは犬死にだ。守っても、あいつは……生きちゃくれねぇんだ。
（……でも、だからって！）
こいつが俺の話を聞かないように、俺だってあいつの話を聞かない。何言われたって構わない。俺が守るって決めたんだ。あいつの方が俺より強かろうが、そんなのお構いなしだ。
それならこんな所で時間潰してるわけにはいかない。暴れて無理矢理、飛び降り……ようとしたのだが。
「っ！？」
いつの間にか手足が縛られている。縄を持ち歩くに留まらず、こんなに素早く縛るとは。しかも乗馬しながらってどんなスキルだ。っていうかなんて危ない奴なんだ。もう嫌だこの同僚。
「いや、逃げたくなる気持ちも解る。僕も怖いくらいだよイズー。ああ。夢みたいだ。幸せすぎて僕も怖いよ」
俺が怖いのはお前の思考回路のぶっ飛び具合だ。
「大丈夫さイズー！二人の愛の逃避行の邪魔は誰にもさせないよ！君の生きたい場所まで一緒に逃げよう！」

俺、コートカードなのになんでこんなについてないんだろう。
何かもう何もかも嫌になって来た。そんなやるせなさで涙腺が緩んだが、この阿呆はそれをうれし泣きとかと勘違いするから質が悪い。
しかしこのまま運ばれていったらどうなるんだ俺。数術なんか使えないし流石に縄抜けしようにも変装中で道具がねぇ。胴体縛られているならまだ関節とか外すって方法あるけど、手首と足首を思いきり縛られてちゃどうしろっていうんだ。無理だろこれ。
ランスの阿呆。そんなに俺に助けられるのが嫌ならしばらく自重してやる。だから……むしろ助けてくれ！

「おい！そこのお前！ここは今通行禁止……」
「と、止まる気ねぇのかあいつ！？」

タロック兵が慌てふためく。

「黙って通すなら良し。しかし私とイズーの邪魔をすると言うのなら……」

トリシュは鞍から腰を上げ、得物の長剣を手に取った。そりゃこいつも一応騎士だ。騎馬戦は得意だろうが、相手の数がまず違う。それに今は文字通り俺という荷物もある。

「ば、馬鹿！無茶だ！！」

その無謀な行動に、俺は思わず声を出してしまった。それにこの男は、驚いたと言うよりも嬉しそうに笑って見せる。恋は盲目とか言うには言うが、声で男だって気付くだろう普通。どこまで盲目ってんだこいつ。

「覚えておいてくれ私のイズー！僕は君のためならどんなことでも成し遂げる！見ていてくれ！」

とりあえず一人称統一しろよと思ったが、突っ込んでる暇は無かった。馬ががくと揺れ、スピードを上げたのだ。喋ったら舌を噛んでた。

危ないと抗議すら出来ず、抱きかかえられたまま、間近でこの騎士の戦いっぷりを見せつけられた。駿馬で駆け抜ける一瞬、すれ違う兵士達を薙ぎ払う風。それは自然の風ではない。こいつの剣が撫でた合図だ。駆け抜けた後方から遅れて悲鳴。

（は……速ぇ）

楽器が似合いそうな綺麗なその指に握られれば、剣さえ歌うように見える。でも正確には違う。歌うのは、敵対者だ。

余計な動作は一切無い。殺すための剣。一瞬の隙を突いて急所を襲う一撃。無駄な力は要らない。流れるような優雅な仕草。剣がまるで指揮棒だ。

（ま、……マジかよこいつ）

良く見れば、こいつの得物はレイピア。噂だと、それに掲げられた名前はイゾルデ。こいつの憧れの本の中のお姫様だ。それはどうでもいいとして、レイピアだって？あり得ねぇ！

俺の剣であるセレスタイトは混血剣と呼ばれる片手半剣。扱いづらいが攻撃力は最高だ。切れるし刺せるし、両手でも片手でも使えて便利。戦法を幾らでも考えられる俺の相棒だ。あと普通の剣よりリーチも長いのも特徴。

しかしレイピアは、貫くことに特化している剣だ。下手な使い方

をすれば、ばっきり行く。過去に何度か曲げたり折ったりした記憶があるから俺との相性は悪い。つまりそんな剣で、刀身に負担を掛けずに、これだけの人間を斬るっていうのは褒めたくないが普通に凄い。刺し殺すんじゃなく、こいつは撫で殺している。

「イズー……凄い心臓の音だね。さては僕に惚れ直したね？」

（違ぇえええええええええええええええええええええええええええ！誰がてめぇなんぞにんなことするかぁあああああああああああああああああああああああああああああ！！！）

いや、全然違うから。殺されるかも知れないって恐怖で心臓があれなだけだから。お前に関しては絶対に吊り橋効果とかストックホルム症候群とかねぇからな。俺だってお前にはいろいろ怨みが……。っていうか惚れ直すも何も惚れてねぇよ。などと言いたいことは沢山あったがツッコミを躊躇わせるほど、こいつの腕は確かだ。

唯、速いだけじゃない。こいつの剣には迷いがない。よくもまぁ迷わずこんな奇行をやってのけられたものだといっそ感心する。

（……やべぇ）

何とかして逃げ出さないと。正体バレたら殺されるのは俺の方だ。身動き取れる時ならいざ知らず、得物もない。身動きも取れない。こんな状態じゃまともにこいつの相手なんか出来やしない。

（ランスでも神子でもいいから何とかしてくれ！俺最近働いてただろ！？アルドールには貸しあるだろ？俺はコードカードだぞ？まさか見殺しになんかしないだろうな……）

そう思って二人の顔を思い出し……

「……」

見殺しにされそうにしか思えなくて、ちょっと涙腺が潤んだ。神子は俺の不幸万歳だし、ランスは俺邪魔だって言ってたし。

（……終わったな）

これ、完全に見捨てられたわ。

＊

「……しかし、カーネフェルとは妙な国だな」

双陸は思い悩んでいた。支配したは良いが、カーネフェル王はまだ投降してこない。街の現状を知らないわけではなかろうに。そして大勢の人間が伏している。自分たちがやったこととはいえこうして教会に運び込む程度の手伝いはさせて貰っている。

しかしカーネフェルの男達と言えば、奇妙な祭りに忙しい。目の前で婦女が伏せっているというのに、馬鹿騒ぎをするとは不謹慎な輩が居た者だ。その祭りに参加しているのは貴族の連中ばかりだとは言うが……

「双陸？浮かない顔だね」

ボクのやり方が気に入らなかったとエルスが聞いてくる。しかし、そうではない。そうではなのだと首を振る。

「そういうわけではない。唯……」

「唯？」

「この都は我が国よりもある意味狂ってはいないだろうか？」

「まぁ、国が違えば勝手も違うって言うけどさ。確かにいかれてるね」

彼は俺の言葉を全面的に認めてくれる。

「まぁ、半分はボクの仕業ですけど」

そう言って彼は指先に蝶を止まらせ遊ぶ。

「それは一体？」

「この子ですか？この子はさっきのあれと同じでボクの契約している夏の悪魔の使役しているものですよ」

「すまん、意味が分からん」

「まぁ要するに、ボクと取引している神様が居て、その取引の恩恵として簡単に借りることができるものってところかな」

「御利益のようなものか」

「まぁ、そんなところです」

エルスが妥協したよう苦笑い。それでも俺は数術使いなどではないからよくわからない。

「双陸、数術っていうのは世界の現象、事象を故意的に起こすための計算式なんだ。だから自然現象にも生物の生命活動にもある種の式は働いている。それは故意的なものではないけど、式はあるんですよ」

「なるほど」

「だからこの子は数式展開装置なんかじゃなくて、唯生きてるだけです。唯、生きてるだけで害になる生き物なんですよボクと同じで」

エルスは自分は鬼だと、出会った頃に口にした。そして先日もそんなことを言っていた。

「そんな言い方は……」

「貴方にボクの何が解るんですか？」

「……そうだな」

そうだな、わからない。でもわからないと言えば……

（何故こいつは俺にそのような事を言うのだろう？）

解らないなら触れるな。踏み込むな。そう口にしながら、少しずつヒントのように自分のことを俺に話し出す。それは何を意味しているのか。自分は鬼だと言いながら、人である俺に言葉を打ち明けるのは何故？それではまるで、わかって欲しいようではないか。

（こいつは……子供だ）

ああそうだ。きっと寂しいのだろう。誰にも理解されず、忌み嫌われるだけの生は。鬼でも人でも、それは寂しく辛いことだ。きっと俺の似た匂いを嗅ぎ取って、同族だと思っているのかも知れない。

（俺も、鬼か……）

そうだな。そうかもしれない。

「俺はお前のことはわからない。だが、自分のことは多少は知っている」

ゆっくりとそう言えば、僅かに彼の興味を惹いたよう。何を言い

出したのかと驚いたような顔でエルスが俺を見る。思えば俺は自分のことを何一つ、こいつに教えていないような気がした。確かにそれは不公平かもしれない。

「お前が人が何を持ってして、鬼を語るのかはわからんが……少なくとも俺は人とは思っていない」

「……え？」

「肉親殺しがまだ人を名乗っているのは些かおかしな話だからな。俺もそれなりには外道だ」

「……なんで、殺したの？」

「王の命令には逆らえん。あの人の言葉は絶対だ」

後悔はしていない。命令を果たせたことは俺の誇りだ。それでも……悲しくないわけではない。だからだ。だから、抵抗はある。こんな風に話をしてしまうの、きっとその反動だ。

「……そっか。鬼……か。双陸も……」

エルスが笑う。少し寂しそうに、それでも嬉しそうに。その何とも言えない笑みの後……会話が途切れて困った俺は先の話を思い出してみた。

「ああ、この子の話だったっけ。そうですね、この子は人の感情を引き出す鱗粉を出す。その鱗粉に触れたり吸い込んだりすると、感情のたがが外れやすくなって沸点低くなったり、涙もろくなったり、やりたいことを優先するようになる」

「それは何の役に立つんだ？」

「これでカーネフェル人同士が街で騒動起これば、それを鎮めた分だけタロックの株が上がるってこと。この子達は明るい色に集まる習性があるから金髪を見つければ付いていくよ」

エルスが窓を開ければ、蝶がパタパタと飛んでいく。
「なるほど。先程部下達の様子がおかしかったのは」
「まだ城の付近を飛んでたのが結構いたんだろうね。でも大分散らばったと思う」
「だといいのだが」

あれが部下達の本心だと思うと少し情けなくなった。まぁ人間ってそういうものだよと頷くエルスが妙に大人びて見えた。
「でも、その抑制が外れた結果何をしたかって言うのが……まさかお祭りだとは思わなかったよ」

それは確かに。窓の外からは陽気な音楽が聞こえる。露天の店もまだいくらも出ている。それどころか増えたようにすら思う。

「うわー！あれなんか酷いなぁ！カーネフェルの貴族の家には鏡っていうものがないのかな」
「確かに好き好んで見たいものではないが、お前に人のことが言えるのか？」
「ちょっと、これボクの趣味だと思ってるわけ？」
「違うのか？」
「これは貴方の大好きな須臾王がさせてるんだよ。似合ってるからって」
「わ、我が君が……？」
「華が欲しいんだってさ。周りに堅物の野郎ばっかりじゃ飽きるって」
「あ、飽き……」
「お姫様もセネトレアに行っちゃったしね。城のむさ苦しさと言

ったら無いよ。あ、だからって思い詰めて双陸まで女装とか止めてよね。似合わないし」
「……そうか」
「なんでちょっと残念そうなの？」
「我が君の力になれず無念……」
「どっちかって言うと貴方の脳味噌が無念だよね」
「……そうか」

俺の言葉に、エルスが少し狼狽える。まさか俺が落ち込んだとでも思ったのか？限りなく正解に近いが、この少年が俺を気遣うなんて珍しいこともあるものだ。

「いや、ボクが思うに女装が許されるのは１０代までだよ。似合うなら２０代も良し。３０代は余程の才能が必要だよね。４，５がなくて６０越えたらもはや変装しなくてもどっちか解らない人居るしねぇ」
「……？何が言いたい？」
「見てよ、ほら。また増えた」

窓の外、城下を指さし手招くエルス。まるで愚者の行進だと彼は笑っている。

「要するに公害成分が多いって言ってるんだよ。仮装行列みたいで面白いけどさ！服装とか装飾品は立派なのに中身が酷いからもう笑えて笑えて。貴族のおっさんたちってナル入ってるから自分が世界一美しいとでも思い違いしてるんだよ。それで美しい自分なら女の服も着こなせるとか勘違いしてて笑える」

そして、本当人間って馬鹿だなぁと彼は小さく呟いた。
双陸も確かに窓の外の風景には絶句したが、タロックでも処刑を

逃れるために少年達が変装するのは日常茶飯事。それでもいい年をした大人があんな恰好はまずしない。そんな日常はちょっと嫌だ。しかし自分がおかしいと言いたかったのは其方ではない。咳払いをし話の流れを引き戻す。

「都貴族と言う者達は、余興に忙しく国の存亡になど興味がないようだ。即位したばかりとはいえ王への忠義も愛国心もない。他国とはいえ見ていて悲しいものだ」

目的もなく街を練り歩く仮装行列。国の終わりの狂気とも呼びがたい代物。国のことなどどうでもいいと言わんばかりの人間達は、国の支配者、名前が変わる程度……どうでも良いと考えるのか。金のある人間は他の国へも逃げられる。だからどうでも良いのだ。そう思うのかも知れない。今を生き、過去を生きない。刹那の享楽を至上のものとする。今日が刹那、明日も刹那。人生とはその積み重ね。何とも、愚かなことだ。哀れなことだ。そんな風にしか生きられないとは。

（まるで、亡者の群れだ……）

生きている？生きているのに彼らは生きてはいない。自ら生きることを放棄しているような、生きた屍。何の目的もない生。それでも生にしがみつく。寄生する。そして……こうして国一つを傾ける。この国を攻め落とすことが出来たのは、敵の中に味方が居たからだ。

彼らは味方になろうとして味方になったわけではない。私欲に走った結果、自然とそうなったのだ。

そこにいるだけで害を与える。それが鬼だとエルスは言ったが、そんなエルスが可愛く思える程に彼らは醜悪だ。鬼などよりも恐ろしい。その寄生虫たちは、息を吸うように国を蔑ろにし、腐らせる。可哀想なカーネフェル。民に見捨てられた国。

「そういう奴はもう前線に出て死んでるんじゃない？世の中悪役と良くない奴ばかりが生き延びるものだよ双陸」

少年はけらけら笑う。その理屈だとボクは最後まで生き残ると言わんばかりに。

「貴方も適度に悪い人にならないとね、あっさり死んじゃうかもよ？不慮の事故とかで」

「……呪術師殿には言われたくはない」

少年の嫌味に、そう答えてやれば……彼は不機嫌な顔になる。そうしていると、本当に子供だ。

「な、なんだよ！そうやってまたすぐボクを馬鹿に……」

溜息を一つ吐いて、彼の腹部に目をやった。元々血の気が多く返り血の多いこいつの白い着物は所々が赤に染まっている。それでもまだ色が新しい模様がある。それは返り血とは違う。よく見れば内側から滲む赤。

此方の視線に気付いたのか、エルスが押し黙る。逃げられるその前に、此方から踏み込んだ。そういう事、構われることに慣れていないのだ。だから、彼は上手く言い返せなくなる。常に自分が人の優位に立っていなければならない、そういう態度をしてきた奴だ。

「血の匂いがする。また怪我でもしたんだろう？手当がまだなら暫く休め。お前は今日存分に働いてくれた」

「……」

「薬はあるか？」

聞けば首を振る。手当をしないのではなく、呪いで治す余裕がなかったのか。或いは別の理由かわからない。それでも大人しく、彼は怪我を見せてくれた。急に借りてきた猫のように大人しい態度には少々驚いた。

「出血のわりに傷は浅いな。これならしばらくすれば治るだろう。一応薬を渡しておくから痛みがあった際に使うと良い」

「……」

大人しいというか、手当の際ずっと無言だ。その表情は明るいとは言えそうにない。

「どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないよ！これ、すっごく染みるんですけど？嫌がらせ？」

「意外と物を知らないのだな。薬は多少染みて痛い方が効くと言うだろう？」

「言わない！絶対言わない！ボクはそんなの聞いたことありません！」

「それだけ騒げれば十分だ。直に良くなる」

ふて腐れた少年の頭を叩けば、そっぽ向かれた。どうやらまた機嫌を損ねてしまったようだ。やはり俺は子供の扱いというのが下手だ。そんなことを思っていると、貸した小太刀を返される。

「……そうだこれ」

「少しは役に立ったか？」

「ぜ、全然？や、役立たずも良いところでした」

確かに使われた様な跡はない。唯鞘に僅かに傷が一本入っていた

だけ。
なるほど、だからあんな妙な怪我をしていたのか。双陸は傷の途中で刃の切り口が止まっていたのを思い出す。
「そうか。それなら役だって貰うまでは預けておこう。そいつも何の働きも無しには俺に会わせる顔がないだろう」
十分役立ってくれている。なら無理に返して貰う必要もない。あの人にはエルスが必要なのだから。もし万が一こいつに何かがあっては困る。
「タロックにはいつ戻るんだ？」
「……そんなに早く追い出したい？」
「そうじゃない。しかしお前はあの方への報告があるだろう？それにあの方はきっと心配して……」
「双陸はそう思うんだ」
「？どういうことだ？」
「そのまんまの意味だけど？」
エルスは、何か妙な口ぶりだ。そこには含みを感じる。
「勿論報告はしに戻りますけど、別に須臾王はそこまでボクのこと好きじゃないよ」
「……何？」
「少なくとも今の王は、昔の王とは違う。それは貴方だって解ってるんじゃないですか？」
「王は王だ。須臾王様がどんなに変わられても俺の主があの方であることには違いない」
「……」
「エルス？」

「貴方って……凄い、馬鹿ですね」

感心しますを肩をすくめられた。しかし他人に呆れられるほど、主馬鹿と呼ばれるのはむしろ……

「俺にとっては褒め言葉だが？」

「言うと思った」

＊

「……アルドール様、ここは私が」

「ら、……ランス？」

「この部屋はイグニス様の数術が効いていますし、ここにならイグニス様は戻って来られるはずです」

「でも！」

「良いですか？何があっても貴方はここから出ないでください。イグニス様が戻られるまで」

そう言って、ランスが部屋を飛び出そうとした時だった。俺の言葉じゃ止められない。どうすればいいんだ？と俺が狼狽えていた。その時に声は現れた。

「待ってくださいランス様！」

「イグニス様？」

室内に飛び込んできたのはイグニス。その顔は悪巧みが成功したような、嬉しそうな微笑みだ。

「イグニス！？」

「セレスタイン卿がやってくれました。餌が見事に食い付いてく

れましたよ！門が壊滅状態です。今すぐ追えば僕らも抜けられます！」
「し……しかし、下にはタロック軍が来ているとのことでしたが」
「あれは病人の看護を頼みに来ただけみたいですよ。まだアルドールがここにいることをタロックには気付かれていません。都貴族の手の者には気付かれていましたが、それも彼が追い払ってくれました」
「あいつが……そうですか。後でちゃんと褒めてやらなければ」
「それは結構ですが、唯……早めに追わないと厄介な問題になりかねないのでさっさと行きましょう！こっちに抜け道を用意してあります」

室内に設けられた抜け道から外へと脱出。その先には三頭の馬と着替えたパルシヴァル君がいる。さっき貰ったばかりの馬と、もう仲良くなっている。

「イグニス、俺は？」
「君無理でしょ？ランス様の馬にでも乗せて貰ってよ。体重重いっていうなら数術でちょっと一時的に軽くして馬への負担減らしてあげる」
「そ、そりゃあ俺はイグニスよりは重いかもしれないけどさ……」

そんな言い方あんまりだ。

「大丈夫ですよアルドール様。俺の一ｂｌａｎｌｕｍｉ？ｒｅａｒｃｅｎｃｉｅｌｐｒｉｎｔｅｍｐｓａｒｉｓｔｏｃｒａｔｅ（ブランリュミエールアルカンシエルプランタンアリストクラット）号は人二人乗せたくらいでへばるような子ではありません。なぁ？そうだろう？」

ランスが愛馬を撫でてやればそれを肯定するよう白馬は嘶く。っていうか何て言った？長くてわからなかったんですがその名前。

「あれ？イグニスそっち乗るの？」

パルシヴァル君にあげたはずの馬にイグニスが跨っているのを疑問に思って聞いてみると、彼が乗っているのはユーカーの馬らしい。

「久しぶりだね、元気にしてた？リンガーレット？」

顔見知りらしい一人と一匹は何やら会話をしている。

「飼い主に似て気性の荒い馬みたいでさ、運んであげたいんだけど僕を乗せたがらないから顔見知りの彼に頼んだんだよ。ちなみに白からここに移すまでに僕の部下が何人か回復数術師の元に送られることになったよ」

気品あり優雅で落ち着いているランスの何とか号と違って、ユーカーの愛馬はかなりの暴れ馬らしい。

「それじゃ、行こうか。大きな数術を使ったらエルス＝ザインに気付かれるからね。都をで得るまでは素早くかつ慎重に！」

「しかしイグニス様、それでは目立ちすぎませんか？」

「とりあえず視覚数術で全員女装させておきますので、街を通っても問題はありません。今は祭りの最中ですし。馬に乗っていても仮装行列の一環だと思ってくれますよ」

＊

「やっと二人きりになれたね、イズー……」

「……」

向けられた爽やかな笑みに、俺の表情は引きつり、凍り付く。

（つか、タロックの連中もう少し頑張れよ）

ユーカーは都の門一つを壊滅、突破したトリシュに連れられ都の外へ来ていた。追跡者を恐れてか、奴は近くの森に身を潜めた。いや、そんな理由ならむしろいい！大歓迎だと言ってもいい！っていうかそうであってくれ。唯単に勢い余って、もうアウトドアな感じのあれでもいいかなとか思ったとかそんなことないよな。こいつも仮に騎士様だ。そこまで節操無しではないと信じたい。っていうか信じさせてくれ。

「本当は喋れるんだろう？また君の素敵な声を僕に聞かせてくれ、イズー」

「……」

「……拗ねているのかい？そうか、確かにいきなり縛ったりして悪かったと思うよ」

なら解け。無言で睨み付けると、奴は足の方の縄を切ってくれた。

「手の方も解いて欲しい？」

当たり前だろと睨み付けるが、こいつは急に行動を惜しみ始めた。心底うざい。

「それじゃあ僕を好きって言ってくれたら解くよ」

思わず、はぁ？とか言いそうになった。そうなるほど……何とい

うか頭が痛い。こいつは何を言っているんだろう。カーネフェルがクソ大変なときに何を脳味噌いかれたことを言っているのか。

「さぁ！いっそ一思いに！なんなら愛してるでも可！」

くそ、なんて地獄だ。いつもの癖でツッコミを入れたくなって来た。だけどここで何か言ったら俺の負けだ。策としてもそんな事を言うのは俺のプライドが許さない。アストロットに顔向けできない。

「イズー、そんなに恥ずかしがることないじゃないか。いや恥じらう君も確かに可憐で美しい」

（違ぇえええええええええええええええええええええ！！）

事もあろうにこの男、屈辱に耐え忍んで怒りを抑え込んでいる俺の表情を、照れているなどと勘違いしたようだ。どれ程腐った目をしているんだろう。

（……ん？ちょっと待てよ？）

縛られているのは手首だ。よって指自体は動く。

「な、なんだいイズー？」

「……」

この勘違い男の手を取って、そこに指で文字を書いてやる。

互いに手袋越しだから、解り難いものはあっただろうが、こいつ曰く愛の力だ。一字一句違わず読み取ってくれた。凄いな、吐き気がするよ。

「ｃ、ｌｏ…ｓｅ……　ｙ…ｏｕ、…ｒｅ、ｙ…ｅｓか。なるほど目を閉じれば良いんだね。イズーは本当に照れ屋だな」

（かかったな間抜け男！）

へらへらと笑いながら従う男に俺は内心ガッツポーズ。それもそのはず。この阿呆は俺の足は解放しているのだ。目瞑って聞いてない振りしたらこいつご所望の言葉を言ってやると見せかけて……当然そんなの誰が言うか。すきはすきでも隙ありだ馬鹿が！

（はばぐっらい！永久にさらばだクソ野郎！）

俺は阿呆一人残して全力疾走すれば良い。逃げ足の早さで俺に敵うと思うなよ。このまま逃げて変装解けばこっちのもんだ。あとは撒くなりなんなり出来る。何処かで着替えだけ調達できればいいんだが。一番手っ取り早いのは、こいつの身包みでも剥ぐことなんだろうが、両手縛られた状態で脱がせるってまず無理だろ。ってことでここは逃げるが勝ちだ。

俺の足音に気付いたのか、背後で何か聞こえたが……そんなの無視だ。断然無視だ。

それでも慣れない恰好で走るのはかなり疲れる。適当に距離を取ったら、後は身を潜めるのが一番だ。俺はそう考えて、隠れられそうな場所がないかと辺りを見回す。

その際、道の向こうから走ってくる白い何かが見える。耳を澄ませれば、それは聞き慣れた蹄の音だ。そしてその音が大きくなるにつれ、見えてくる姿も次第にはっきりしてくる。

「ランス！」

「良かった。無事だったか？」

見捨てられたと、見放されたと思っていただけに、これは不意打

ちだ。

「酷ぇ目に遭ったぜ。もっと早く来いよな馬鹿」

「そうか、元気そうで何より」

相方は苦笑して、愛馬から飛び降りる。

大してして心配して無さそうに見えるのは、こいつなりの信頼なのか、それとも本当に実は俺のことがどうでも良かったのか。ぜ、前者だと思いたい。

「ユーカー、はい」

遅れて馬から下りるアルドール。あ、お前も居たのか。アルドールから手渡されたのは俺の得物。置き忘れていたそれを持ってきてくれたらしい。反射的に礼を言いそうになったが、次に現れた奴の声にそれを止めた。

「まぁ、今回ばかりはお礼を言ってあげますよ。貴方のお陰で、無事にローザクアを脱出できました」

遅れて現れたのは神子。その言葉から俺はこの神子に踊らされていたことを知る。

「てめぇ、俺を嵌めやがったな？」

「さぁ、何のことでしょうか」

すっとぼけてやがるが、おそらくここまで奴の計算の内。俺が女装を嫌がって逃げ出してその裏をかいて女装するのも、そこで外に飛び出すのも……更にはトリシュに門の警備を破らせるのも。未来が見えなくなったとか言っていた割りには、こういう嫌味なことに関しては、十分見えているような気がする。

「僕は唯、教会警備に来たあの方に、貴方の名前を尋ねられたんですが、僕としたことが貴方にあまりにも興味がなさ過ぎて、ついついうっかり名前を忘れてしまいまして。適当な女性名を教えて差し上げたまでですよ。イゾル……なんでしたっけ？」

「８割方てめぇの所為じゃねぇかっ！！あいつ俺のこと変な設定付けて完全に例の空想彼女と勘違いしてやがるんだが！？っていうか普通に声で気付くだろあいつ！お前視覚数術とか聴覚数術とか俺に使ってないだろうな！？」

「そんな数術の無駄遣いはしませんよ。僕は今省エネ期間中なんです。だからこそ貴方に感謝していると言ってあげてるんですよ」

「何でいっつも上から目線なんだよてめぇは！俺は年上だぞ！？」

「生憎僕は年上だからって理由で踏ん反り返るような輩を崇める趣味はないんですよ。身分的には一介の騎士と一国の権力者である神子の僕とどっちが上か貴方の乏しい脳味噌でもそれくらいは理解出来るのではないですか？」

「セレスさぁあああああん！！」

「うぐっ」

神子と口論していた俺に向かってくる声。割り込むようにそいつは現れる。　腹部に思いっきりタックル食らった。鳩尾に頭突き食らった。急に飛び出してきたりするなと怒ろうとしたが……

「セレスさんのリンガーレット連れてきました！」

「あー、偉い偉い！あんがとな！だけどもうちょい登場の仕方ってものを考えろ」

パルシヴァルは眼をキラキラさせて、褒めて褒めての表情だ。まだ腹は痛いが怒る気力も消えてしまい、語尾に行くほど力がなくなる。

「……ん？ところで俺の馬は何処に置いたんだ？」
「セレスさんの後ろですよ？」
言われてみれば背後から何かの鼻息と、咀嚼する音が……
振り向こうとするが頭が引っ張られているように動かない。ぎぎぎと無理矢理首を曲げ、横目で見てみれば……俺の馬が俺の髪をもしゃもしゃと貪っている。
「だぁあああああ！この馬鹿馬！俺の髪はそんなにオレンジじゃねぇだろ！ニンジンじゃねぇから！食うな！！こら！止めろ！！お前飼い主に向かって何んてことを！髪が馬くせぇ！」
「涎塗れですね」
それに気付いた途端、パルシヴァルが俺から離れる。ちゃっかり安全圏に退避しやがった。言いようのない怒りに打ち震える俺。寄越された助け船は、確かに俺を解放してくれたが……
「ガレット、その辺にしておこう？ほら、ニンジンならこっちのあげるから」
「何で飼い主の俺じゃなくてランスの言うこと聞くんだよてめぇ……」
「よしよし、そんな不味いもの食べてはいけないよ」
「何で俺の髪が不味いって決めつけてんだよてめぇ！なんかむかつく！食べたこともねぇ癖に！」
よくわからないことで俺が腹を立てれば、ランスは苦笑して俺の髪に触れる。
「ああ、悪い。そういうつもりじゃないんだ。ところでそういう

お前はあるのか？」
「いや、ねぇけど」
「イズぅうううううううううううううううううう！」
「げほっ！」
今度は背後から何者かにっていうか確実にあいつだあいつ。あいつに抱き付かれる。そいつは震える手を俺の髪へと伸ばし、わなわなと肩を震わせる。
「そこの駄馬！私のイズーの麗しき金髪を毟るとはっ！！馬刺しにしてくれようか！」
トリシュが得物を抜き払う。それに俺の愛馬は鼻で笑って迎え撃つような表情。
「トリシュ、それは流石に大人げないんじゃないか？」
「ランスは黙っていてくれたまえ！これは僕とイズーの問題だ！ってえええええええええええええええええええええええ！！！」
「何か？」
俺とランスを見て、トリシュは絶叫。そして手袋を思いきりランスへと投げつける。どうやらランスが俺の頭を触っていたのが気に入らなかったらしい。
「例え我が友アロンダイト卿とあろうとも、私のイズーに触れるなど、断じて許せん！」
「別にお前のでもねぇもがっ……」
「イズーさんは黙っていてください」

もう我慢できなくなってツッコミに走ったが、途中で神子の手に口を押さえられ遮られてしまう。俺よりずっと背が低い癖にどうやってと思ったが、この神子、アルドールを踏み台にしていやがった。ここまで軽んじられる王というのはカーネフェルにも未だかつていないだろう。アルドールも少しは王の威厳を持てよ馬鹿。踏み台でも親友の役に立てて嬉しいみたいな顔するな馬鹿。お前も男なら神子のスカート覗くくらいはしろよ。

「ブランシュ卿、確かに前世で貴方と彼女は恋人だったかもしれませんが、今は違います。そう、何を隠そう僕もさっき知ったのですが彼女はアロンダイト卿の恋人なのだそうです」

「何っ！？私を裏切ったのか！？アロンダイト卿っ！！」

（違ぇえええええええええええええええええええええええ！！）

迫真の表情で余計なことを言い出した神子。そんな大嘘言って何の得になるのか。暴れてなんとか拘束を外れるが、俺の口にはガムテープ。何か数術でも使ってやがるのか引っ張っても何しても剥がれない。

その傍らで、いつの間にかアルドールは踏み台から肩車（下）に進化している。神子はランスとトリシュを見下しながら、偉そうに言葉を紡ぐ。

「アロンダイト卿。こうなった以上貴方も退けません。彼と戦い、彼女を取り戻すのです！！」

何だこの展開。何これ。っていうかガムテープはがれねぇ。

（ランス！てめぇも何とか言えよ！）

と縋る思いで視線を従兄に向ければ……大丈夫俺は解っているよと奴は俺を安心させるように微笑んだ。

「わかりました。他ならぬ、彼女のためです」

（そうじゃねぇえええええええええええええええええ！！！）

「なら勝った方が彼女を得、それから一つ何でも命令が出来るというのは如何でしょう？僕はシャトランジアの神子として中立に公平にあなた方の勝負の審判を行います」

「……わかりました。私が勝ったなら、アロンダイト卿！貴方は今後一切彼女に関わらないと約束してください！」

「……わかった」

（受けんな馬鹿ぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！）

確かに正体も守って欲しいがもっと別のもんを守って欲しいわ。何そんな危険なことに俺を巻き込むんだよ！受けるなよそんな勝負！！

もう何もかもが嫌過ぎて、俺は涙目になってきた。目敏くもそれに気付いたトリシュは、基本視線を俺でロックオンしていたとしか思えない。

「大丈夫だからねイズー！すぐにこの男のことはすぐに僕が忘れさせてあげるよ。君も本当は嫌だったんだろう？昨日まではどうだか知らないが、私と出会ったその瞬間から君の心はもう彼ではなく私の物になってしまったんだから！」

違ぇよ阿呆。何でそうなる。後一人称統一しやがれ。公私混同甚

だしいわ。俺がトリシュに内心毒づいていると、ランスが顔を上げ勝利時の願いを口にする。

「……それじゃあ、トリシュもし俺が勝ったら」

「……彼女に近づくなと？」

「いや、別に彼女に近づくのは構わない」

構わねぇのかよ。たぶん俺と同じ事をアルドールとトリシュ辺りは思っている。神子だけは、いつものように全てお見通しといった表情。そりゃそうだよな。これお前の悪巧みだもんな。

「トリシュ、お前もアルドール様に忠誠を誓ってもらおうか？」

「構いませんが……ますます貴方に負ける気がしませんね」

アルドールとランスを一瞥し、トリシュが二人を鼻で笑う。

「私はイズーに仕事と私どっちが大事なのと聞かれたら彼女だと即答できる！彼女より仕事を取るようなそんな男に、僕らの愛は壊せない！！」

愛も何も俺はお前のこと何とも思ってないからな。むしろ嫌ってるからな。その辺いい加減気付け。

もう疲れてきて、その場に座り込む俺。近寄ってくるパルシヴァルは俺のガムテープを興味深そうに見つめている。さっきまで静かだったのは俺の背後に隠れていたからしい。それもそうか。もう少し早くトリシュが現れていたなら、手袋を投げられたのはこいつだったかもしれないのだ。

大人げないあの野郎が、こんなガキを脅えさせるとはとんでもねぇ話だ。まぁ、ランスに任せとけ。あいつが負けるなんてことはないだろう。自分にそう言い聞かせながら、パルシヴァルの頭を叩い

た。それでこの少年も、少し肩の力が抜けたようだ。

「大丈夫ですか？」

「んんんーんんぁうん、んーんん（大丈夫なわけねぇだろ）」

首を振れば、考え込んだ少年が、それを引きはがそうとしてくれる。しかし痛いだけで剥がれない。あの神子本当に何してくれたんだ。都脱出のみならず、味方増やしたいからって俺を人身御供にするなんてこいつは鬼か、悪魔か。横目で神子を睨み付ければ、俺の無様な姿に神子はとっても良い笑顔。清々しいまでにこいつは、鬼畜な外道だった。さっさと聖職者辞任すればいいのに。

割と本気でユーカーはそう思った。

2：Amantium irae, amoris integratio est

６章ヒロインなかなか出てきませんね。彼女が出るまで、ユーカーが女装ヒロインやらなきゃならんとか可哀想すぎる。イグニスが腹黒いですね。どんな窮地でも嫌がらせは忘れない。そんな味方キャラを味方と呼んでいいのだろうか？

3：Cras amet qui nunquam amavit； Qui

もはや恒例の問題回。これでやっと女装騎士による前半ヒロイン降板か。長かったね。何？ＢＬだって？本編に至ってはギャグですよ。

3：Cras amet qui nunquam amavit; Quis

薄暗い森の中央、拓けた場所があった。ある程度の広さはある決闘には丁度いい場所だ。王都からもそれなりに離れてはいる。追っ手がやってくることもないだろう。

そこまで来ると、ようやく俺は肩車係から解放された。お役目放免ということらしい。さっさと俺の肩から降りたイグニスは二人の騎士の間に立って、決闘のルールなどの説明を始めた。

それにしてもイグニスは、一体何を考えているのだろう。アルドールは考える。

（ブランシュ卿って言ったっけ？）

城で何度か顔を合わせたことはある。一言で言うなら、ランスとはまた違うベクトルの美青年だ。

少し影を感じさせるような、深い青色の瞳は悲しみを湛えたような色。流れるような金髪はしなやかに美しい。物腰は穏やかで優しい微笑を浮かべる人だから、泰一印象はてっきり優しい人なんだと思っていた。それがどうしたことだろう。ユーカーなんかを相手に、穏やかのおの字もない。

「んんんぬ？」

まじまじとユーカーの方を見ていたら、“なんだよ？”と睨み返された。

腕の縄は先程解かれたから、余計なことを言ったら殴りかかってこられるかも知れない。

余計なことは言わないでおこう。

それにしても変装一つでここまで……一人の男を狂わせるとは恐

ろしい。その原因が彼の内にあるのだろうかと見てみたがよくは解らない。
上手く変装しているからか、普段とのギャップがありすぎる所為なのか、確かに外見は女の子に見えなくもない。
しかしその決定的なものとしては、感じる雰囲気の違いだ。何か違和感がある。それはそうだ。相手は男。唯女装しているだけだ。それが妙に似合ってしまっているだけで。それでも相手は男。だからこそ妙な違和感がある。
カーネフェルの女の子達は、何というかみんな逞しい。簡単に言うと男勝りで、多くの男が憧れるようなお淑やかさとか女の子らしさなんてものは皆無だ。おまけに彼には、都で見た貴族達みたいに女装を楽しむような才能もない。だからこそカーネフェリーの女の子や女装祭りの貴族達ともまた違った雰囲気がある。
女装への抵抗、恥じらいそういったものが全面に滲んでいる。それがブランシュ卿の理想の女の子とやらのイメージとばっちり符合してしまったのだろうか？
確かに、この偏った少子化でカーネフェリーの男は少ない。案外カーネフェリーの女の子より箱入りで大人しくお淑やかなものなのかもしれない。少なくともカーネフェル男は基本的にへたれで消極的ではあるとは言われている。それが妙な女装の化学反応でも引き起こして、上手い具合彼に惚れられてしまったのだろうか？
例えば物言えぬ彼は、喋れないからこその魅力がある。それは此方が勝手に妄想を押しつけても言い返せないと言うことで、彼を否定しない。だから理想通りそれが膨れあがりあっという間に理想の彼女のできあがり。それでこんなことになってしまった様にも思う。
イグニスがユーカーの口を封じた以上、その点は絶対絡んでいる。
（でも何で……？）

確かに味方は多いに越したことはないけれど、カードでもない人間を引き入れる意味はあるのだろうか？イグニスのすることなんだから無意味なんてことは勿論ないとは思う。
だけど答えが見つからない俺は、今度は視線を騎士の方へと向けてみる。すると彼が抱えるそれが目に入った。それは戦うには少々過ぎた荷物だ。

「ブランシュ卿、それは大切なものなんですよね。俺が預かっておきましょうか？」
「これはアルドール様、申し訳ありません」

小脇に抱えられた本。それをブランシュ卿から預かった。なかなか味のあるカードカバーの本だ。

（随分読み込まれているな、本当に宝物なんだ）

でも傷んではいない。大事にされているのが解る。そこに気付いて本の虫である俺は、この騎士に少し好感を抱いた。ユーカーは面倒くさがりだし、ランスは多忙で暇があれば料理に時間を費やすような人間だから、読書を布教できるような相手でもない。騎士は戦う人間だから、そういう机の前でじっと座っているのが苦手なタイプの人間なのかも。ルクリースは１８禁とかのエロ本やら官能小説にしか興味がありませんと言っていたし、フローリプは黒魔術みたいな呪いの本とか拷問とか凌辱とかのドＳ小説ばかりが好きだった。俺はもっと普通の本を語り合える相手が居ない者かと思っていた。イグニスは歴史書とか数術関係、宗教関係の学問書とかそういうのにしか興味がないというか仕事で文献読まされてるのに趣味でまでそんなことはしたくないという様子。俺は読書というこの一点において親友にすら見放されている。
そんな中にこの、ブランシュ卿。一筋の光明に見えた。本好きに

悪い人間はいないとまでは言いきれないが、本を読むような心のゆとりがある人なんだなと思うと、好感くらい覚えもするよ。
タイトルくらいは聞いたことがある。一度くらいなら俺も目にしたことがあったかも。

（……へぇ、悲恋の話って感じだな）

パラパラと本を少し捲ってみた。決闘の行く末を見守りつつ、少しパラ読みしてみようか。そう思っていると隣でユーカーが呻いている。

「んーっ！んーっ！んんんんっ！」
「え？何？ふざけんなだって？」

手招きされ従えば、そのまま本をユーカーにひったくられる。座り込んだ彼はおもむろに本を閉じ膝の上。そして両手を離せば……本は、ある頁を開く。読み込まれている頁なのだろうか？

「え、何々？ここ見ろだって？」

頬に額に冷や汗が浮かぶ。読書仲間が見つかったというさっきまで興奮が、さっと冷めていくのを感じた。

「え、ええと……」

言うなればそれは、密会というか所謂濡れ場。
勿論そんなに嫌らしい露骨な文章などではない。しかし人の想像力は恐ろしい。この頁から彼が何を受け取ったのかは俺などでは到底理解も及ばない奥深さ。あとあんまり触れたくない。

「んー……」

次にユーカーが見せてきたのは何故か付箋の挟まれた頁だ。その頁は赤ペンでびっしり線が引いてある。そんな参考書でもないんだからとツッコミを入れたくなった。

「ええと……これは間違って媚薬を飲んでしまうシーンだなってび、媚薬ぅううう！？」

それは、物語の三角関係の始まりとなる事件。そこが予習済みってどういうことなの？思わず俺まで釣られて身震いをした。何か寒気が身体を襲ったのだ。ユーカーを見ればうっすら涙目。わけのわからないままイグニスの策に使われて、怖かったんだろうなぁと今更ながらに感謝と共に同情した。せめてもの償いに今度彼に何かあったら、進んで力になってあげよう。

「びやくって何ですか？」

「ええと、君はまだ知らなくて良い言葉だと思う」

「んー」

横から興味深そうに本を覗き込んできた少年、パルシヴァル君。俺が言葉を濁すと、彼は不思議そうに首を傾げるが、ユーカーも頷くのでわかりましたと頷いてくれた。助かった。

しかし彼はフローリプと同い年とは思えない。俺の妹が大人びていたのか、斜めに構えていすぎたのか。彼は本当に子供らしい無邪気さを持っている。

ユーカーの回りをうろちょろしているのは兄弟みたいで微笑ましくはあるけれど必要以上に近づくと、向こうの怖いお兄さん二人から大人げない視線が飛んできそうだ。片や妄想騎士、片や従弟コン騎士。どちらを敵に回しても厄介そうなのに二人一度に敵に回すな

んてそんな恐ろしい話、俺だってお断りしたい。だって二人は本物の騎士だろう？まず間違いなく負ける。今日即席で騎士になったばかりのパルシヴァル君だって似たような者だ。
彼もそれを理解しているのか、本当は膝にでも座って本を読ませて貰いたいところを我慢して、隣にちょこんと腰を下ろすに止める。

「それではそういうルールで構いませんか？」
「異論はありません。望むところです」
「イグニス様がそうおっしゃるのであれば、精一杯やらせていただきます」

向こうの方も話がまとまったようだ。ルール確認も終わり、これから決闘が始まる。
証人役のイグニスが二人の決闘を取り仕切る。

「制限時間無し、禁じ手無しの問答無用真剣勝負。それでは相手を参ったと、降伏させた方が勝ちと言うことで」
「イグニス、そのルールだと……」

俺は驚く。イグニスの口から発せられた言葉は、俺が予想だにしないもの。そんな俺の驚愕さえ見越したように、イグニスは平然と言葉を返す。

「そうだね。最悪死人が出るよ。両者負けを認めない場合は、相手を殺した方が勝ち」
「だ、駄目だよそんなの！危ないじゃないか！」
「馬鹿だねアルドール。中途半端な決闘じゃ勝っても負けても納得いかない。何度も同じ事を繰り返されるのは面倒だろ？後腐れ無く行こうよってことで彼らは同意したんだ」
「な、なんでそうなるんだよ！？」

「文字通り、真剣勝負さ。二人とも腕は確かだ。そんな二人がまともにやり合って、唯で済むと思うの？」

念には念を入れたルールだとイグニスは言う。それでも、それじゃあみすみす目の前で人が見殺しにするようなものじゃないか。

「馬鹿のアルドールにはわからなくとも、そちらのお嬢さんなら解るんじゃないですか？貴族に騎士にとって誇りは何より大切なもの。汚されてはならないものです」

「誇り……」

俺にもっとも欠けているもの。それをいろいろな人から俺は責められたことがある。誇りは戦う理由。信念であり生きる意味。俺がまだ見いだせていないもの。あやふやで不確かなもの。それでも彼らはもう既にそれをしっかり掴み取っているのだと、イグニスがそれを指摘する。

「アロンダイト卿はアルドールへの忠誠から、ブランシュ卿は愛しの姫君への愛のため。それは彼らにとって紛れもなく命を賭けるに値する誇りなんだ」

「お、俺のため……？」

ランスがあの場に立っているのが、自分のためだとは思わなかった。てっきり俺はユーカーのためか、イグニスのためかと思っていた。

「ランス……」

じっと彼を見つめれば、彼は優しく笑み返す。貴方のためにも負けませんと言ってくれているようで少し気恥ずかしいが、とても嬉

しい。
彼の信頼が嬉しくて、感動している俺の横から頭突きを噛ましてくる乱暴な少女（偽）が一人。言うまでもなくユーカー改めセレスちゃん改めイズーさん。

「痛っ……！何するんだよ」

かなり痛かったので、彼の方も多分痛かったんじゃないかと思う。だからだろうか。余計怒ったような顔で彼はそっぽ向いていた。

「イズーぅううう！そこで僕の活躍を見ていてくれ！君に無様な所は見せないと約束するよ！」

もう一人の騎士は、ユーカーに向かって手を振っている。ユーカーが本当にイズーさんなら応援してあげても良いのだけれど、別人だしそもそもユーカー女の子じゃないし。もう亡くなったとはいえ婚約者のアスタロットさんもいるし。第一ユーカーが心底嫌がっているから、あまり応援は出来ない。ブランシュ卿がそこまで悪い人には思えないからちょっと可哀想だとは思うけど、このまま放置していたらユーカーがもっと可哀想なので、ランスには頑張って欲しいなと思う。
だけど殺すなとか言って、余計な気を使わせてランスが殺されてしまっても困る。だから俺は……「頑張れ」と言うことしか出来なかった。

「それでは構え」

緊迫して来る空気。湧き上がる緊張感の中、俺は心臓がばくばく言っていった。狼狽えている。だけどどうすればいい？どうすることも出来ない。今は見守るしかない。いざとなったら数術を使って

でも何とかしよう。っていうかイグニスが貴重なカードであるランスを死なせようとするはずがない。それなら勝算があるのか？

（あ、そっか！）

カードはカードにしか殺せない。確かそう、聞いた。ブランシュ卿がカードではないのなら、ランスが彼に殺されることはあり得ない。ああ、何だ。そういうことだったのか。

俺はほっと息を吐く。

「準備は良いですか？」

「はい」

「ええ」

しかし二人の騎士の同意の言葉に、再び心臓が騒ぎ出す。

「……始めっ！」

イグニスの凛とした声が辺りに響いた。と思った瞬間だ。もうブランシュ卿の姿はない。構えの体勢から一気に距離を詰めた。しかしランスは動かない。それを迎え撃つ気なのだ。

ブランシュ卿の得物はレイピア。対するランスの剣アロンダイト装飾の美しさこそそれに似ても、分類するならブロードソード。重さはそう変わらずとも、長さではレイピアに分がある。ブロードソードは切る剣だが、レイピアは突く剣だ。リーチの差を埋めるにはランス自身が彼より素早く動かなくてはならない。それでも冷静さを失わない所作で、ランスは一撃目を受け流す。しかしそれでは終わらない。再び突き出される付き。それに今度は間に合うのか。

「防戦で私に勝てるとでも！？」

「何でもありの勝負だったな」

それでもランスの笑みは消えない。今度の微笑みは、少し意地悪そうな笑みだが、それも嫌味なくしっかり決まっている。本当何やってても絵になる人だな。恐るべし美青年。隣からユーカーが文句を言っているのが聞こえて来るようだ。「嫌味じゃないのが嫌味」とか「欠点がないのが欠点」だとか。

しかし何故ランスは笑ったのだろう？俺が不思議に思った時、俺の上を影が通過した。上を見ればもういない。視線を下ろせば、ランスの元に馳せ参じたなんとかなんちゃら号という名の彼の白馬。

「要するに機動力を上げれば良いんだろう？」

ランスは颯爽と愛馬に跨り、次なる攻撃をかわす。これにはブランシュ卿も苦笑い。

「なるほど、考えましたね」

そこで彼も続くのか。そう思ったが彼はそうしない。騎士は馬を得てこそ本領発揮。しかしハンデと言わんばかりに、彼は一人で立ち向かう。その姿は確かに格好いいかもしれない。彼を嫌っているらしいユーカーですらハラハラしたような表情になっている。

「愛しのイズー。君は……貴女は覚えていないかもしれない。しかしこんなことは昔もありました」

「……あったの？」

視線をユーカーに向けると、彼はぶんぶんと首を振る。否定の意だ。先程までの心配そうな顔ももはやあきれ顔に変わっている。

そんな俺たちに彼はおもむろにページ数を口にする。それにユー

カーが俺から本を奪って、一度本を閉じ……ゆっくり自然に開く本から二番目に読み込まれたページを見つける。それこそそのシーン。ここも赤ペンで予習済みだったようで、俺は思った。もうあの人この本一冊丸暗記してそうだな、後書きまで。

「覚えていないのも無理はない。あれは私と貴女の前世のことです。私は貴女を得るために竜を討ちましたが、卑小な騎士に貴女を奪われてしまった！これはその再来なのです！！嗚呼！歴史は何度私と貴女を引き離すのでしょうか！！」

ここまで痛いことを言い出す人だとは思わなかった。それでもやっぱり彼も美形だから妙な台詞でも様になってしまうのがとても理不尽だと思う。でも俺がそう思うのは俺の心が汚れていてもはや純真とは呼べないのだからなのだろう。

「か、可哀想ですトリシュさん……。イズーさん！もう結婚しちゃいましょうよ！可哀想です！！」

「ん〝んんぅうううう！！」

涙と鼻水を垂らした、少年に泣きつかれても、これだけは退けないと頑として嫌だと叫ぶユーカー。

すっかりこの男の妄言を信じてしまった、純粋少年パルシヴァル君は、もらい泣き状態で二人を哀れんでいる。ギャラリーから埋めるとは、ブランシュ卿はなかなかの策士だ。……偶然かも知れないけど。

「……卑小、ですか」

ランスはランスで何かが逆鱗に触れたようで、邪悪なドラゴンも顔負けな毒々しいオーラのようなものを出している。でもやっぱり

笑顔だけは爽やかで、その温度差に急激な寒気を感じた。
そしてそれは正解だった。ランスの怒りに呼応するように……辺りの空気が冷えていく。それは彼の剣にまとわりついてその姿を変えていく。
水のヴェールの包まれた剣はゆらゆらと長さを変える。

「それじゃあ俺も本気で行かせてもらいます」

すれ違い様振り下ろされた剣。それをブランシュ卿はかわしたが、彼の攻撃はまだ終わらない。始まったばかりだ。
振り下ろされる瞬間剣を離れて噴射された水は、それ自体が恐るべき刃に変わって彼をめがけて飛んでいく。
その存在に気付くまでのタイムラグ。それがあれば避けるまでは行かなかっただろう。現にブランシュ卿は動けなかった。つまり、ランスはわざと外して見せたのだ。背後の木が切り倒されたことを、音で彼は遅れて知った。これは牽制だ。ここで降伏しなければ次は当てると言う脅し。迎え撃とうにもあんなもの当てられたならレイピアは折れてしまう。とてもじゃないが、耐えきれない。
ならば避けるか？しかし人と馬。機動力の差は歴然だ。

「……流石はアロンダイト卿」

友人だからこそ、本気での殺し合いなどしたことがなかったのだろう。ブランシュ卿は自分の失策を知る。相手が馬で来るのならプライドや見栄など捨ててでも自分もそうするべきだったのだ。ランス相手に一つでも後れを取るのは無謀過ぎた。

「しかし、私は貴方の知らないことを知っている」
「ああ、そうだな」

ブランシュ卿が笑えば、ランスも小さく微笑した。殺し合いの最中にも通じるものがあったのだろう。

「私は知っている。貴方は彼女を愛していない。貴方の目は真実の愛を知らない人の目だ！」

「……好きか嫌いかで言うならかなり好きだとは思うんだけどな」

好きの意味が違うから仕方ないと言えば仕方ないのかとランスが苦笑。

そんな中途半端な好意の者に負けるわけにはいかないと、青い瞳を燃え上がらせるブランシュ卿。ここまで来るとユーカーも若干申し訳なさそうな感じになっている。なんか俺、お前のイズーじゃなくて悪いとかユーカーの顔に書いてあった。

「友人のよしみで一つ教えて差し上げます。最後に勝つのは正義でも悪でもなく、愛と呼ばれるものであると」

「そうか。それじゃあその忠告、ありがたく受け取っておくよ」

ブランシュ卿は構える。あくまで迎え撃つ気だ。

それを誇りと受け取ってランスもまた構える。このままぶつかればブランシュ卿が死んでしまう。それはイグニスの算段とは違うはず。助けを求めるようにイグニスに駆け寄るが、彼はじっと二人の行く末を見つめる瞳だった。

（だけど……こんなのって）

もう見ていられない。俺は駆けだした。その俺の横を通り過ぎるもっと足の速い少女の影。

二人の激突の間に割り込むように、ユーカーは走った。そして愛

馬で駆けるランスの前に立ち塞がる。
愛が最後に勝つというのは、ここで負けて例え死んだとしても……彼女の心に残るだろう。忘れなられない者になるだろう。だから、最後に勝つのは愛だ。ブランシュ卿はそう言ったつもりだったはずだ。だから彼は彼女の助力を期待して言ったのではない。それでもユーカーは動いた。それは何故だったのだろう。

「い、イズー！！危ないっ！」

背に庇われたブランシュ卿が取り乱すが、ユーカーはたじろかない。イグニスに何かやられてまだ喋れないその身体で、ランスに制止を訴える。

「退け！ユーカーっ！！」

ランスの叫び声に、どうやっても剥がれなかった口の封印が剥がれ落ちる。

「やってみやがれ！お前の忠誠！どれだけのもんか見せて貰おうじゃねぇか！友人、同僚、それから俺も殺すくらいの覚悟はあるんだろうな！？」

響き渡るユーカーの声。それにランスが顔をしかめた。そして一陣の風は、二人を飛び越えていく。
ランスは馬から下りてはぁと重い息を吐き、小さくそれでもはっきりと降参の言葉を口に出す。

「……参った」
「え……？」

あんな無謀なことをしておいて、こうなるとは思っていなかったのか。彼らは最後の最後で信じられていないのだ、互いに。ユーカーは自分が死ぬものだと思っていた。ランスが忠誠を証明するのだと信じていた。

でもそれは自分たちの繋がり全てを否定する。積み上げてきたもの全てを否定する行為。過去の全てに意味がないと思われているのは心外だとランスは悲しそうに苦笑。

「……なるほど、確かに愛は偉大だな。俺にお前は斬れないよ」

「へ、変な言い方するな！」

お前には敵わないと褒められたユーカーは、褒められ慣れていないのだろう、照れたように視線を逸らす。

その視線の先で彼は、地に伏せているブランシュ卿を見つけたようだ。がっくりと肩を落としたその様子を見かねてか、ユーカーは彼の傍に歩み寄る。

「イズーが……私のイズーが……セレスタイン卿だったなんて」

「あ、……えっと、何か悪いな。でも元はと言えばお前の勘違いが悪いんであって俺はそこまで悪くない……っていうか庇ってやったんだからこれでチャラってことで。あと俺が女装してたとか言いふらすなよ。その時はもう一回ランスにお前襲わせるからな」

「……解りました」

「あ、そっか？意外とお前物わかり良い奴だったんだな」

「つまり、私のイズーはランスの恋人ではないわけですね！？」

「あって堪るかボケっ！！ってお前まだ何か勘違いして……」

「いいえ、ちゃんとわかっています」

「本当か？嘘臭ぇな」

「そうですね。恋に障害は付きものです。よもや今生はこんな悲

劇が待ち受けていようとは思いませんでした。通りでなかなかイズーに出会えないはずです」

話の流れが妙な方向に来ていると、ユーカーが視線を彷徨わせる。その視線が俺の方に来た。でも俺もどうすればいいのかわからず、その視線をイグニスへとパス。

俺とユーカーの視線を受けた、イグニスは満面の笑み。それを訳すなら……してやったりと言う笑みだ。

「ご苦労様でしたランス様。これで一件落着です」

「勝てずに申し訳ありません」

「いいえ、あれが正解ですよ」

「イグニス、何であんなことを？」

ランスに労いの言葉を贈るイグニス。そんな彼女に俺は質問。俺にはさっぱり解らないことだらけだ。

「なんとなくそうじゃないかとは思っていたんだけど、彼さっき手袋投げたでしょ？見えたんだよね、カード」

決闘の申し込み。確かにあの時彼は手袋を外した。しかし俺たちはそこに気がつかなかった。

「ええ！？だ、だから！？」

「ぶっちゃけセレスタイン卿が止めなければランス様の方が危なかったよ。あそこからどんでん返しは幾らでもあり得たからね」

あのまま続ければ負けたのはランスの方だとは、どうも思えない。しかし結果としてはランスは負けている。ユーカーの妨害は、彼自身の心によって引き起こされた行動。しかしそれが勝敗を分けた。カードの幸運の差を見せつけたと言っても良いのかもしれない。だ

ってイグニスはランスよりブランシュ卿の方が強いカードだと言っているみたいだから。

（それって……）

何か、怖い。恐ろしい。心のままに動くことさえ、幸運不運に組み込まれている。幸福値と言うもの。それがとても恐ろしく思えた。俺は一番幸福値の少ないカード。俺は何処まで……やっていけるのだろう？幸運じゃ誰にも勝てない。みんなが俺の所まで幸運を磨り減らしてきてくれるのを蟻地獄の中で待っているような俺だ。道化師を倒すというのは、つまりそういうこと。姉さんのように、ルクリースのように、フローリプのように。みんなの命と幸せを糧にして俺は生き延びていく。

今だって上手く転ばなければ誰かが死んでいたかもしれない。そしてそれは俺には止められない。庇ったとしても俺では死んでいたかもしれない。ランスが止まろうとしてくれても、事故で俺は死んだかもしれない。不運とはそういうものだ。

恐れ戦いた、俺の気を紛らわすように、イグニスは大げさに溜息を吐き肩をすくめる。それは素直にありがたかった。

「いや、でもイケメン補正って怖いね。みんな彼の顔ばっかり注目してて手の方誰も気付かないんだから」

そんな馬鹿なことがあるか？と思ったが……確かに言われてみれば結構みんな遠くに居たし、状況が状況だからそんなところまで見ていなかった。手の甲は袖で隠れるし、掌は剣を握れば見えなくなる。後は素早い動作の所為で残像が生じ、手なんかブレブレ。模様なんて視覚出来る動体視力が誰にある？

「よ、要するに？」

「手持ちのカードの幸福値を極力使わずに、なんとかブランシュ卿を絡め取れないかなぁって思ったんだけど、まったく良い仕事してくれたよランス様もセレスタイン卿も」

イグニスはくすくすと悪戯っぽく笑いながら三人の騎士を眺めている。その笑顔は天使だが、言っていることは悪魔というか大魔王レベルだ。でも俺はそんなイグニスが大好きです。

「イズー！私を守ってくれた貴方に僕は心を奪われました！」

「ち、違う！俺は唯あいつに友人殺しなんかさせたくなかっただけでお前を守ったわけじゃない！あといい加減一人称と二人称統一しろ！気になるんだよ！！」

「気になると……？やはり貴方も私のことを！！」

喋れば喋るほど追い詰められていくユーカー。これ以上拒んだら、その内ブランシュ卿予習済みの媚薬が持ち出される可能性すらほんのりと漂い始める。

「意味が違ぇえええええええええええ！助けてくれランスっ！！」

「いや、お前とトリシュが仲良くなるだなんてなんだか感慨深くてな。いつも喧嘩ばかりしていたお前達が……」

「感動っぽいことしてないで助けてくれ！俺はこいつとなんか仲良くなんざなりたくねぇえええええ！！」

ランスを盾にぐるぐると逃げ回るユーカー。しかし盾は働く気が無さそうだ。そんな茶番にイグニスは痺れを切らしたのか、やれやれと肩をすくめる。

「まったく心の狭い男ですね。アスタロットさんも男はノーカウ

ントだとか言ってるかもしれませんよ」
「言うわけねぇだろうが！お前がアスタロットの何を知ってるって言うんだよ！！」

アスタロット。その名はユーカーの許嫁だった少女の名だ。彼と彼女は家の揉め事に巻き込まれ、両思いなのに双片思いで死に別れてしまったんだった。彼女への思いがあるから、ユーカーは基本恋愛事には無関心。なのに今は何故か同僚男に迫られているという謎。彼は本当に不運なんだなぁ。コートカードなのにカバーできない不運が結構多い様な気がする。

「でもまぁ、確かユーカーが誰を好きでもアスタロットさんはユーカーが好きですって言ってくれてたし、別に止められてはいなかったような」
「馬鹿かお前！そこまで言ってくれた女に対し心変わりなんて失礼だと思わないのか！？っていうはそういう所にお前記憶力使うな馬鹿！忘れろ阿呆っ！」

ついアスタロットさん絡みで思いだしたことを口にしたら、ユーカーに叩かれた。

「ところでイズー、そんなに怒鳴っては咽を痛めてしまいますよ。丁度冷たいお茶を用意していたのでどうぞこちらへ」
「ぜ、絶対飲まねぇからな！！」
「何をそんな不審そうな目で私を見るんです？まさかこの私が！この茶の中にムラムラと燃え上がる情愛の媚薬を仕込んでいるとも思っているのですか！？私がそんな事をするはずがありません！この私が信用出来ないのですかイズー！！」
「出来ねぇ！！今までの何処に信頼出来る要素があったんだ！」
「私は今まで必死に耐えたんですよ！？森で貴女に目を閉じてと

言われた時はてっきり口付けでもされるのかと思って貴女の可愛さ勢い余っていっそのことあの場で押し倒してしまおうかと思ったくらいだったんですが！？そうしなかった私をむしろ褒めていただきたい！」

「そこまで考えてたのかよ！きめぇよっ！！もう嫌だ……お前もう都に帰れよ」

「それは無理ですね。愛しのイズー、貴方が私の愛を受け入れてくれるまで私は貴方の傍を離れません」

ブランシュ卿の暴走気味の発言に、イグニスだけがほくそ笑む。

「っとまぁこんな感じでブランシュ卿ゲットってことだね」

しかしユーカーはもう半分死人のような顔色だ。

「こいつがいるんなら俺は逃げるぞ。地の果てまでだって」

「なるほど。他の四人が邪魔だと？」

「お前だけが邪魔だって言ったんだよ俺は」

「そんなに照れなくてもいいでしょう？私と貴方の仲ではありませんか」

「犬猿の仲っていう奴か？」

「そうですね、別に二人で愛の逃避行に行きたいっていうなら僕も止めませんが、その時はいろんな所にこればらまこうと思うんですけどいいですよね？」

威嚇するユーカーに躙り寄るブランシュ卿。そこに追い打ちを掛けるイグニス。イグニスの手に握られていたのは一枚の写真だ。それは女装ユーカーとブランシュ卿の2ショット。

「イグニス、カメラなんて持ってた？」

「僕の部下はとても有能なんだよ」

俺の素朴な疑問にイグニスがにやりと笑う。

「み、神子……？て、てめぇえええっ！！追跡してやがったのか！？」

そんなことをする暇あったら助けろよと、ユーカーは怒り狂っている。

「これに私達結婚しましたとか書いてセレスタイン卿のご実家になど領地になど配り歩いて来させましょうか？貴方のお父様はどんな顔をすることでしょうね？」

「野郎っ……」

「いえ、僕も無理強いなんてしたくありませんし？そうですね。北部の落ち着けるところまで付いてきてくださったならネガをお渡ししますよ」

「お、俺はそんな脅迫には屈さねぇぞ！勝手にしろ！」

「はい。そう言われるだろうと思いましたので、北部のアロンダイト領には既に配送済みです。僕らがランス様の領地まで行く頃には、貴方の叔父様にはばっちり貴方の恥ずかしい姿が今年の暑中見舞いとして届くわけですね」

「尚更北部行きたくねぇえええええええええええええええ！！！」

何処かへ逃げだそうと走り出したユーカー。その襟首を掴んで、ランスが小さく彼を呼ぶ。

「ユーカー……」

「な、なんだよランス？」

「一人であいつに会いたくないんだ。一緒に来てくれないか？」

相方に頼られたのが嬉しかったのか、みるみるユーカーの顔が明るくなる。それでもはっと思いだしたようにそっぽ向く。先程の仕打ちのことを思いだしたのだろう。

「……トリシュの野郎なんとかしてくれたら考えても良いぜ」

切実な悩みでもある。自分の言葉は届かなくとも、友人であるランスの説得には応じるかも知れない。っていうか脅してでも止めさせろという懇願。

余程一人で実家に戻るのは嫌なのか、ランスはブランシュ卿に向き直る。

「トリシュ、こいつは俺の可愛い従弟だ。だからあまりこいつの嫌がることはいくらお前でも見過ごせないことはある。第一結婚もせずに関係を結ぼうなどとは、ふしだらだ。そんなことでは聖なるコウノトリも困るだろう？」

「お前……何言ってるの？」

途中までは頷き、照れながら。それでも話を聞いていたユーカーも、途中で話がおかしくなっていることに気付いて、見過ごせずにツッコミ。

「いや夫婦間の営みは、子宝のコウノトリを呼び出す神聖な召喚の儀式なんだろう？この間会ったときにもう一回聞いたら母さんがそう言っていた」

「前より悪化してんじゃねぇかお前！お前の中の保健体育はどうなってやがんだよ！！っていうかそこまで解ってるならもうコウノトリとかキャベツ畑とか要らないよな普通っ！」

「なるほど、つまり結婚さえすれば何をしても良いんですね？」
「トリシュ！！なんでてめぇはやること前提なんだよ！！大人しそうな顔してどんだけ肉食なんだ！」

目的と手段が入れ替わってしまっているブランシュ卿の発言に、ユーカーはもううんざりした表情。

「セレスさん、よく分からないですが元気出してください」
「パー坊、俺なんかもう疲れた」

パルシヴァル君に泣きつくユーカー。また一つ彼の悩みの種が増えてしまったようなのは俺も少し心苦しい。言えた義理ではないけれど、言ったら怒られそうだけど、元気出せよくらいは言いたくなった。が、言えなかった。それはくるりと顔の向きを変えて此方を振り返るブランシュ卿があったからだ。

「アルドール様！いいえ我が君！忠誠誓いますので、イズーと私の結婚をお許し下さい！法律的な意味で！」
「え……え？えええ！？ど、どうなのイグニス！？」

ユーカーの合意じゃなくて、まずは法律から責めてきたブランシュ卿。当面の問題は法律であり、本人の意思をそこに入れていないのが恐ろしい。そっちは何とかなるとでも思っているのだろうか？今の拒絶反応を見ながらよくそこまで自信を持てるものだなと感心した。

「そうして差し上げたいのは山々なんですが、生憎国がこんな状態ではどうにもなりません。そうですね。カーネフェルを平和にするまでそれはちょっと難しいのでは？」
「アルドール様！北へ参りましょう！すぐに参りましょう！そこ

で味方を得るのでしたか？それでさっさと南を攻め滅ぼしましょう！こんな事もあろうかと、船を用意しておりました！！」

何という変わり身の早さ。荷物を整えテキパキと旅支度を始めるブランシュ卿。

「ねぇ……もしかしてイグニス」

「そうだね、逃避行ってくらいだから船の手配くらいはしてあるとは思ったよ」

でも何より恐ろしいのは、もう未来とか見えないよとか言いつつここまで人を踊らせる、俺の親友の先読みだった。

3：Cras amet qui nunquam amavit； Qui

本編の薔薇は基本ギャグ。裏本編はガチ。本編は魅了邪眼使いとかいないしね。仕方ないね。
と言うわけでようやく次回からカーネフェル北部編。敵やら味方やらまた増えたり減ったりです。

4：Duo cum faciunt idem, non est idem

「さぁ、イズー！この辺りは木の根が多いですから足下に気をつけて」
「だからその呼び方止めろって言ってんだろ」
「なんなら私が抱きかかえて」
「話し聞けよおい」

「……つかもう俺この恰好止めていいだろ？こいつ丸め込んだんだし神子、お前の企みも終いだろ？」
「いいえ駄目です」
「ふざけんんな！」
「嗚呼、流石は神子様！なんと慈悲深い！！」
「俺にとっちゃ悪魔の化身だ！」

「ランスさん、僕の頭グリグリするの止めて下さいー！」
「あ、いや……ごめん」

何だろうこのカオス。アルドールはそんなことばかりを考えていた。
トリシュを味方に引き入れて、北へ渡る船を入手。今はその船のある場所へと向かっている途中。
もう意味を成さないはずの女装を無理矢理続けさせられているユーカーと、そんな彼に心酔してしまったトリシュの暴走。ユーカーの嫌そうな顔を見て満足そうなイグニス。
相方が自分以外の人間にからかわれて弄られてるのに複雑な心境っぽいランス。その精神安定のためかストレスからか丁度手を置くのに丁度いい高さらしいパルシヴァルの頭を怖い笑顔で撫でている。

「何だよその目は」
微妙な俺の視線に気付いたのか、八つ当たりしてくる大人げないユーカー。
「ユーカー、なんか人気だな」
「嬉しくねぇし！野郎しかいねぇえええええ！！」
「流石コートカードは格が違いますね、不運の」
唯一の紅一点からしてこれだ。イグニスはけたけたと人の悪い笑みを浮かべている。
「女運が無く男運しかないというのは十分不運かと」
「てめぇもパー坊も一応コートカードだったよなぁ？」
「不運を不幸と感じる貴方の心の貧しさという生まれ持った才能が不運なんですよ」
「カード云々関係ねぇじゃねぇか」
「ユーカー、イグニスの思うつぼだよそれ」
「馬鹿！アルドール余計なこと言わないでよ」
イグニスはユーカーをからかうのが好きみたいだ。俺と出会った頃のイグニスばりに彼限定で貴族いびりに全力投入。
「……なんかイグニス生き生きしてるよな。怠さの方は大丈夫？」
「まだ十分怠いよ。だからストレス解消くらいしないとこっちもやってられないっていうか」
「八つ当たりかよ！俺もう止めるからなこんなの！」
「駄目ですよ。カーネフェリーの若い男は少ないというのに、こんなに連れだって歩いていたら目立ちます。視覚数術で誤魔化さなければ女装要員足りないくらいなんですから」

「それなら俺も視覚数術でいいだろ普通に」
「嫌です。僕は今、数術代償の省エネ中なんです」

そこでユーカーが折れてあげる必要は無いとも思うんだけども、そこで折れてくれる辺り、なんだかんだでお人好しだ。これ以上ごねてもイグニスが要望を受け入れてくれるはずがないと解っているのかもしれない。最終的にこうなるなら、それならいっそのこと最初から文句言わずに従ってくれれば楽なのに。そうは行かないのが真純血貴族のプライドって奴なんだろうな。

「そんならランスでもトリシュでも良いから服脱げ！俺の変わりに女装しろ！」
「セレスさん、僕で良ければ代わりますよ？」
「気持ちは嬉しいが、お前の服じゃサイズ合わねぇんだよ」

ユーカーにがっくり肩を落とされて、困った顔のパルシヴァル。かと思いきや、苦悩の表情のトリシュが踊り出る。

「私とイズーが衣服の好感着用。それはつまり先程まで彼女が羽織っていた、彼女の白魚のような肌を包んでいた服を私が纏い、私の服を彼女が！サイズが合わず着せられている感のある私の服を彼女が！嗚呼……そしてこの一体感！まるで疑似せ…（以下自主規制）！！」

彼女じゃねぇよと多分、全員が心の中でツッコミ入れたと思う。ユーカーもドン引きの様子で、ランスの方へと逃げていく。

「やっぱこいつきもいから無しだわ。ランス、てめぇの上着貸せ。なんなら下も貸せ」
「お前はどこの追いはぎなんだ？」

過酷な要求を突きつけられても苦笑で流す、そういう顔は何時も通りの格好いいランスに見える。でも今となってはどっちが素か端から見ている俺には、よくわからない。
無茶な言葉でも、久々に相方に構って貰えて嬉しそうでもある。そういう解釈をすると、彼も意外と子供っぽいというか可愛らしいところがあるんだなぁとしみじみ思う。

「大丈夫大丈夫。ほらお前は自他共に認める美形だろ。美形は何してても美形だから半裸でも全裸でもなんら問題ないだろ。どうせあのクソ神子が視覚数術かけてくれるんだし。っていうか夏場で暑いだろ？これはお前のためを思ってのことなんだってことでさっさと脱げ。そして服寄越せ」
「その理屈だとお前も問題ない。もっと自分に自信を持て。あと暑いだろ？」

鸚鵡返しの恐ろしさ。言いくるめようとした言葉全てが自分の方へと返される。相手を言いくるめるための言葉だ、反論されるなんて思わない。故にそれを言われたときの返答に困る。それでもそこですかさず言い返せるユーカーは口が達者だ。

「馬鹿かお前？俺が半裸だの全裸になってみろ。問題しかねぇだろうが。トリシュの馬鹿がどう出るかもわかんねぇし大体……」

どうせ男しかいないのだし問題はそんなにないんじゃないかと言うランスに、ユーカーが押し黙る。神子は女だろうがと言いかけて、それを咄嗟に飲み込んだのだ。
ああ、そうだった。ランスはイグニスが女の子だっての知らなかったんだった。

「んなこと出来るか。俺は騎士だぞ貴族だぞ？そんな屈辱に耐えられるか」
「それなら俺も騎士だし貴族なんだが」
（これは並行線だな……）
何気にどっちも石頭なんだなこの二人。流石は親戚。流石は従兄弟。似てないようで似たもの同士だ。
「解った。それじゃあ俺が代わるよ。俺とユーカーならそんなに背丈も変わらないし服のサイズも何とかなるだろ」
「ったく、最初からそう言えよな」
「ってユーカー、何で俺が怒られてるの？」
「気の利かないお前が悪い」
「あーはいはいそうですねー。ってなわけで視覚数術の対象者切り換えよろしくイグニス」
「別に良いけど……君って本当プライドないね」
南部から都までの旅で、もう女装に慣れたと言うのだろうか。最初の頃みたいな抵抗も薄れた。でもあの頃はフローリプが、ルクリースがいて。俺の髪を弄って遊んでいたなと思い出すと……涙腺が緩んでくる。嗚呼、馬鹿だな俺。こんなこと思い出すなら安請け合いしなきゃ良かった。
「……はぁ」
そんな俺の目に気付いたのか、ユーカーは「やっぱいい」と俺から離れる。
「え？」

「もういいっつってんだよ。もう着いたみてぇだし着替えてる暇もねぇ」

丁度その時、光が見えた。森を抜けたのだ。そこには小さな、それでも立派な屋敷がある。

景観は素晴らしい。屋敷は高台にあり、その下には大河が見える。

「……ここは？」

俺の疑問を受けて、ユーカーが意見する。

「都貴族の別荘か？」

「ええ。時折晩餐会などに呼ばれていまして。その際にいざというときの脱出用の船が用意されていることを知りまして」

トリシュは頷いて、ささと俺たちを誘った。なるほど、確かに屋敷の裏の岸辺には一艘の船が用意されている。

「そんなことよりだ。橋は俺が落としてきたし、船があるって言ってもザビル河の激流をどう突っ切るかって話だぜ」

「セレスタイン卿にしては建設的なことを言いますね」

「神子様、如何に神子様と言えど私のイズーを貶める発言、軽んじる発言は慎んでいただきたい」

「今朝までお前も似たようなキャラしてたけどな」

ユーカーのツッコミを全力でスルーするトリシュ。

「そうですね。船はなかなか丈夫ですし突っ切るって事も出来るとは思いますが……ランス様？」

「はい？」

「ランス様は確か水の精霊によく懐かれる方でしたよね」

イグニスは水の精霊の力を借りて、海路を切り開いて欲しいとランスに頼む。ランスは火のクラブのカードだが、何かと水と縁がある。彼の養母が湖の精霊だということが関係しているのかも知れない。

もっとも本当なら水属性のハートカードのイグニスの方が合っているような気もする。でもコートカードは元素の加護が薄いと言うし、適役とは言えないのかも。

「しかしイグニス様。俺は淡水精霊は呼び出せますが、海水精霊とはあまり」

どうにもランスらしくない返答。てっきり快諾が返って来るとばかり思っていた俺は驚いた。

「え？でも前にランスの養母さんと海の精霊は知り合いだって言ってなかった？」

「……精霊同士は仲が良いですよ。でも俺は人間ですから、俺を拾ったことに関しては余所の精霊との折り合いも悪いんです」

カルディアに届いた魚介類の山。あれは海からの贈り物であったはずだ。しかしこの間の贈り物は、ランスの母さん宛に送られてきたものの横流しであって、ランス本人に送られてきたものではないと言う。

「水の精霊にもいろいろあるんだな……」

「まぁ……水の精霊は、同族にはべったべたに甘い分、他族にには風当たり冷たいっていうかそういうところはあるよ。特に僕らの殆どは天敵の火の人間だし」

「あ、そっか。俺もランスもユーカーも火だったよな」
イグニスの解説に俺は納得。数術マスターの神子が言うからには説得力がある。それに水の人間であるイグニスもそう言うところあるから凄く合点がいった。
「……あれ？でもイグニスは水だろ？あとパルシヴァル君とトリシュさんは？」
「パルシヴァル君はペイジだからね。発現するまでは何とも言えないけど……お二人の出身地は何処でしたか？」
「こいつはカーネフェルだと思うぜ。だよなパー坊？」
「はい！」
「それなら恐らく彼もクラブでしょうね」
「ほんと、カード偏ってるなぁ……」
パーティの殆どが火属性ってどうなんだ？弱点突かれた場合コートカード以外は危ない気がする。
不安げな俺の隣で、イグニスはトリシュに同じ質問を投げかけていた。
「それでブランシュ卿は？」
「私は……シャトランジアですが」
「ああ、なるほど。だから紋章がハートだったんですね。これで合点が行きました」
そう言えばまだトリシュのカードを俺は見ていなかった。
「なんか今更だけど、これからよろしく。トリシュ」
俺は手袋を外して、カードの裏表を彼へと見せる。

まさか王が一番弱いカードだとは思っていなかったのだろう。トリシュは青い眼を見開いている。

「アルドール様はAなんですか」

「俺以外の王もそうだよ。Aだからっていう理由で、俺はイグニスから王に推薦されたんだ」

王が最も弱い。それは革命……下克上、反乱混乱を招く要因。そんなものを部下になる者に見せるなんてと思うかもしれない。だけど、だからこそ俺は見せたい。

「俺は王としてもカードとしても頼りない人間だけど、それでも……俺を王と呼んでくれますか？」

仕える気がなくなったというのならそれはそれでも仕方ないことだと思う。

……暫くの無言。その後彼が跪く。

「ご謙遜を」

トリシュは笑っていた。

「貴方が価値なき人ならば、我が友が貴方に仕えることはなかったでしょう」

ランスが俺を認めたなら、それだけで俺が賢君に足ると彼は言う。

「それから私のイズーを従えるほどのお人です。そんなことが出来たのは先王様と我が友くらい。そしてそのどちらも素晴らしい人だと私は考えます」

だからあの一筋縄では行かない彼を上手いこと従えている（ように見えるらしい）俺を王と扇ぐことに疑問はない。彼はそう言ってくれた。

「別に俺はアルドールに仕えてねぇけどな」

ユーカーがふて腐れているが、トリシュはくすくす笑っている。

「失礼。彼の我が儘を受け流すアルドール様に器の大きさを見ました」

「俺は我が儘じゃねぇ！！」

ユーカーは大層ご立腹だが、庇われたことで心底胸を射抜かれたのか、そんな表情も堪らないとトリシュはご満悦の表情だ。

「此方こそよろしくお願いします、アルドール様」

手袋の下、彼も見せてくれる。手の甲のハートの紋章に、？の文字が刻まれた掌。１スートがペイジを入れて１４枚　なら丁度中間のカードだ。可でもなく不可でもなく。元素の加護と幸福値、そのバランスに優れていると言えるかもしれない。彼自身の騎士としての強さも期待できるから、心強いとも思う。

イグニスがあんな無茶（主にユーカー的な意味で）をさせてまで味方に引き入れようとしたのだから、やはりなにか意味があるのだろう。

ユーカーは嫌そうだが、都を追い出されて心細い身の上。味方になってくれる人がいるというのは本当にありがたいことだ。

「ああ、よろしく」

俺は彼と固い握手を交わして……彼を立ち上がらせる。何時まで
も跪かれているというのも気が落ち着かないし照れる。
「ただし我が君。万が一この予言書のように私のイズーを娶った
りなんかなさいませんように。その際は誓いを破棄し貴方の首を取
りに行きます」
「ああ、それなら大丈夫。末永く仲良くやっていけるよ」
例の恋物語の本を片手に脅迫してくる新しい騎士。面白い人だな
と思うが、自分がその妙な三角関係に組み込まれては堪らない。ユ
ーカーは嫌いじゃないし人としては好きだけど、それはトリシュの
ようなあれではないし、ごめん被りたい。
「王様ー！僕も僕も！」
トリシュの真似をして膝をついて手を伸ばしてくるパルシヴァル
君。うん、この子癒される。片手で握手をしながら俺までしゃがみ
込み彼の頭を撫でたくなった。
「痛っ……ってこのパターンはイグニスだな」
頬を抓られる痛みに横目を向ければ、そっぽ向いたイグニスの手
が見える。
「君ってさ、そういう無邪気系の子に弱いよね。ギメルとかギメ
ルとかギメルとか」
「そんな俺をどこぞの馬の骨を見るような目で見なくても」
流石はシスコン……あれ、イグニスが女の子ならブラコンになる

のか？っていうか結局ギメルって何者？イグニスが女ならギメルが男？…でもそういう言い方をしたらイグニスは怒っていたし。それならギメルも女の子？でも混血は必ず男女の双子で生まれるんだろ？姉妹だったら……それじゃあ二人は純血？駄目だ。頭が痛い。

（……でも、今のなんでイグニス怒ったんだ？）

ギメルというものがありながら、余所見をするなってことなんだろうか？

イグニスは本当に妹（もしくは弟）想いだな。

「何にやにやしてるの？気持ち悪いよ君」

「いや、やっぱりイグニスは優しいなって」

いや今の話の流れからどうしてそうなるんだよっていう、呆れてもう声も出ない様子のユーカーの冷めた視線のツッコミが見えたが俺は気にしない。

イグニスは俺の言葉に咳払い一つ。聞かなかった振りで話題を元の方向へと戻す。

「……まぁランス様の精霊加護が使えない以上仕方ありませんね。突っ切るしかありません。この船壊す覚悟で帰りは余所で船を手に入れるしかありません」

名も知らぬ都貴族の人ごめん。でもユーカーとかランスの話を聞く限り、都貴族の人ってあんまり良いイメージないし、この一週間でその認識も強まった。あんまり心は痛まない。

「緊急事態ですし」

「お前王様だろ？しゃんとしてろ」

ランスもユーカーも何だか良い笑顔。ユーカーは屋敷から着替えをかっぱらおうとさえしていたが、悪趣味すぎてろくな服がないと愚痴をこぼしていた。

「まぁ、徴収ってことでいいよね。どうせこれ国庫からくすねた金で豪遊してたんだろうし」

イグニスもいい気味だと笑っていた。小一時間かけ、運べる程度の必要最低限の物資を積み込んで、ようやく俺たちは船を出す。

激流の中スピード何とか舵を取るのはイグニスの計算だ。波の動きを読み取って自動運転をさせている。それもいろいろ消費する数術なんじゃないかって心配すれば、「契約だから大丈夫」と言っていた。

イグニスは神子を継いだ時、先代とか先々代とかその前からとかの神子を祝福していた精霊の加護を得たとか何とか。

「まぁ、僕の精霊はいろいろ触媒に関して五月蠅いから使い勝手悪いから、出来ればランス様みたいな精霊に好かれてる人の方が効率よく使役できるんだよ。あれは純粋に好意だから触媒とか代償払う必要ないし」

「おまけに僕水属性でしょ？水属性って火の次に風の精霊と相性良くないんだよ」

風の精霊を使役するのには神経を使うとイグニスは溜息を吐く。

「風の精霊と一番相性いいのは火の人間だから、君らの誰か気に入ってくれたら僕も楽なんだけど」

「え？風の精霊は風属性の人間と一番相性良いんじゃないの？」

「見た感じエルス＝ザインはたぶんタロック出身だろうし風のスペードのペイジだとは思うよ。彼もそれなりに風の精霊使いこなしてたし」

でも一番の相性ではないとイグニスは言う。

「風と一番相性良いのは火。つまりクラブの君たちだ。前に言わなかったっけ？」

「いや、聞いたかも知れないけどあの時は……火と水が相性最悪って聞いたので頭がいっぱいなったというか」

しかし聞けば聞くほど、妙な話だ。イグニスが言うには、風は火、火は風、水は土、土は水と最も相性が良いのだと。

「納得いかないって顔だね」

「そりゃあ。だってその話だと水の中に住んでいる魚より、水に好かれてる生き物が居るみたいな話だろ？」

「動物で考えるから駄目なんだよ。自然現象で考えるのがベターだよこの場合」

豊かな土壌を作るのは水。火を熾すのも消すのも空気、つまりは風。水を塞き止めるのは岩、つまりは土。空気を燃やすのは炎。まぁそんな感じで相互作用で世界を構成している。だから相性が良いと考えられているらしい。

「精霊っていうのは数術学では元素の塊が集まりすぎて意思を形成した形状のことを表す。つまり心があるってことだね」

「心か……」

「うん。精霊はある程度は自分大好きだけど、そこまでナルシストってわけでもない。だから自分と違うところがある者を好むんだ」

「なるほど、面白いな」
「ランス様の凄いところは天敵と言っても良い水の精霊に懐かれているってところだね。まぁ、正し淡水に限るって条件が付くらしいけど」

「まぁ彼は例外中の例外。基本的には君たち火の人間は風の精霊に懐かれやすい。その逆で火の精霊は風の人間と相性良かったりするんだよね。だから風のカードの多いタロックがカーネフェルに踏み込むと、それだけであっちが有利になったりってあるんだよ。精霊に懐かれたりなんかする前に、片を付けたいところだね」
「あ、だからか。エルスが最初にあの村を焼いていたのって、もしかして……」
「生け贄でも捧げて、でっかい火の精霊呼び寄せて契約でもする気だったのかもね。生憎その前に君があの村の炎を従えたからそうはならなかったけど」

「それはそうとイグニス……」
「何？」

イグニスが得意げに知識をひけらかすのを見ているのは好きだ。だって楽しそうに彼は、無知な俺に教えてくれるから。君は馬鹿だなぁとか言いながら、意外と律儀に丁寧に教えてくれるイグニスの笑う顔。それを見ているのは楽しかった。昔からそうだ。屋敷にいた頃だって、俺が家庭教師の先生に教えて貰って解らなかったことを、窓の外から聞いていたイグニスが俺を馬鹿にしながら教えてくれたことがあった。あの頃に帰ったような気持ちになれるのが好きで、だからもう少し聞いていたいと俺は……ちょっと無理をした。

「調子に乗って話してたら……何だか気持ち悪くなってきた」
「君、馬鹿？」

最初こそ船には慣れたと思い上がっていた。しかし酷い揺れだ。船酔い地獄。
俺に至っては乗船五分程度で……立っていることもままならなくなった。それはユーカー、パルシヴァルも同じだ。ランスが少しだけマシというか、一度の嘔吐もなく美形イメージを保持している。別次元としては水属性のイグニスとトリシュだけが、平然としている。狡い、羨ましい。

「嗚呼、大丈夫かい私のイズー！今水を持ってくるからね！」
「てめぇ……妙な薬持ってきたら海の藻屑にしてやっからな」
「はいイズー。水だよ」
「あからさまにっ！毒々しい色合いじゃねぇか！！こんなショッキングピンクな水があって堪るか！どこの汚染水だ！？全世界の水に謝れ！」

激怒のユーカーがコップごと床に叩き割る。介抱する振りして媚薬を飲ませようとは、油断のならない騎士が世の中にはいたものだ。

「何を言うんだイズー！船内は私と君のフラグスポットじゃないか！この本にもそう書いてある。君はここで誤って飲むべきなんだよこの媚薬を！」
「だから俺をお前の脳内彼女に具現化するなって言ってんだろ！」
「げ……元気ですね、セレスさん……トリシュさん……」

具合が悪いにも関わらず、青い顔でトリシュとやり合うユーカー。その言い争いが頭に響くのか、辛そうなパルシヴァル。
死屍累々とした船内。ユーカーも無茶してる。俺だったら無理。あんなに騒いだらまたリバースしそう。見ているだけでも吐き気が移る。

「まったく情けない男だね君は」

イグニスはそう言いながらも、背中をさすってくれる。そうしてくれるイグニスの手は冷たい。俺のために冷却数術でも使っていてくれるのだろうか。

「イグニス……俺はもう大丈夫だから、パルシヴァルとかの方……頼む」

俺だって船酔いで辛いんだ。俺より幼いあの子はもっと辛いだろう。そう訴えれば、イグニスは小さく笑う。優しい笑みだ。その目は俺を馬鹿と言っていたが、それでも……優しい笑みだった。

「解った」

彼女はそう言って笑うから、それを見た俺は何だか安心して……急に眠くなってしまって。流れるよう、流されるよう……睡魔に身を預けた。

＊

気持ち悪い。頭痛い。吐き気がする。だけど眠れない。眠ったらお終いだ。最悪人生の終わりだ。

ユーカーは二つの理由で魘されていた。船酔いを免れたトリシュの相手をしていた所為で船酔いが悪化し、もう起き上がるのも億劫で。

かといって油断している内に得体の知れない液体なんか飲ませられたら堪らない。この世の中に人の心まで操るような惚れ薬なんてもの存在するとは思えないから、この怠さに加えて発熱という症状

を招き悪化させるような代物だろうあれは恐らく。そうじゃなかったとしてもあんなもん毒物と紙一重だ。そんな表に出回らないやばそうな薬飲ませられて堪るか。

（こんなことになるんなら庇わなきゃ良かった……）

どうしてこうなったんだしかし。俺は唯、ランスに友人殺しをさせたくなかっただけだ。俺ほどじゃないにしろ、あいつだってそこまで友人の多い奴じゃない。俺はトリシュなんか嫌いだが、あいつは認めるところもある友人だと言っていた。

（いや……でも、まだマシか？）

あの決闘の際にチラ読みしたあいつの本曰く、あいつの前世の恋人もとい空想脳内彼女は金髪で、回復魔法の使い手だった。俺はそんなもん使えないから、もし女装してたのがランスか神子だったらと思うとそれはそれで問題だったと思う。

あの神子は自分とそれからランスに火の粉が降りかからないように、俺を人身御供に差し出したわけだ。

そりゃあ俺だって、自慢の従兄が揉め事に巻き込まれるよりは俺が身代わりになった方がマシだとは思う。あいつの経歴にヒビが入ることがあってはならない。そのための俺なんだから。

「お前が黙っている時は、大抵ろくなことを考えていないときだな」

「……ランス」

いつの間にか従兄が、俺の隣に腰を下ろしていた。蹲っていたからか、寝台にはスペースもある。その手には盆があり、その中にはコップがある。

まさかこいつ友情のためにとうとう身内の俺まで売り飛ばす気か？トリシュの言いなりになって何食わぬ顔で妙な物飲ませに来たんじゃ……恐る恐るそれを覗き込む。しかしそんなに変な色はしていない。覚えのある果物の香りだ。

「神子様が言うには、船酔いには林檎がいいそうだ」

「へぇ……」

自分だって体調悪い癖に、わざわざ摺り下ろしてきてくれたのか。どっかの馬鹿とは大違いだ。一瞬でも変なことを考えた自分が恥ずかしい。

「もしかしたら俺がお前達ほど酔わなかったのはお前のおかげかもしれないな」

「は？」

「作ったケーキ、結局食べる暇なかっただろ？」

言われてみれば、俺はこいつに何かリクエストしてたよな。アップルパイかミートパイとかって……

「お前は味見したって事か」

狡いと睨み付ければ、食意地張りすぎだと笑われた。

「そりゃするよ。失敗なんかしたら人に食わせられないだろ」

「お前の料理は味は美味いぜ。時々っていうかいつもっていうか8割方、見てくれの方が発禁レベルだけど」

「だって、それは勿体ないじゃないか。味が問題ないなら別に捨てることはないだろう？」

「お前の価値観が俺は時々わかんねぇや」

俺も小さく吹き出した。笑うと少しだけ気分的にも楽になる。あと林檎美味ぇ。

「そういやあいつらはどうした？」

「アルドール様は寝込まれて、イグニス様はパルシヴァルの看病をして下さっている」

「……あ、そ」

「トリシュは」

「別に聞いてねぇ！」

「そうか？ちなみにあいつは甲板で竪琴を弾いている」

「殴って来ても良いか？」

俺が肩を振るわせると、ランスが笑う。

「そう言わないでやってくれ。あいつなりに心配してるんだよ。お前やアルドール様のために何かできないか考えた結果の行動で」

「音楽で船酔い治るんなら俺だって考えてやるよ」

確かに耳を澄ませばポロンポロンと聞こえてくる旋律がある。あいつ何処から楽器なんか持ち出したんだ。馬に乗っていた時はそんなの持って無さそうだったのに。あの屋敷でよく演奏させられていたみたいだし、常備していた楽器でもあったのだろうか？

「……まぁ、曲はいいけどよ。あの歌詞なんとかなんねぇのか？」

さっきからイズーマイラブとかって聞こえてくる歌詞が腹立たしいし、一回聞くと耳から離れず寝苦しい。

「ああ、俺も歌うならせめてお前の本名にしてくれと抗議はした

んだが」
「抗議のポイントが違ぇよ」
「だが、代名詞的な意味合いか大きく聞き入れて貰えなかった」
「お前も俺の話聞いてくれねぇよな結構」
「ああ見えてもトリシュは照れ屋で、お前を名前で呼べないらしい」
「何処の世界の照れ屋が寝込み襲って媚薬飲ませようとするんだかな。小一時間あいつに問い正してぇところだ」
「そうか」
「何笑ってんだよ？」
「いや……俺を止めてくれてありがとう。お前が居てくれて助かった」
「……おう」

突然礼を言われるなんて思わなかった。だから変な答え方しか出来なかった。しかし考えてみれば礼を言われるなんて妙だ。

「どうかしたか？」
「……むしろ俺はお前に嫌な思いさせたんじゃねぇかって思ってた」
「どうしてそう思ったんだ？」
「カードだよ。お前の方が優勢だった。誰の目から見ても明らかだ。だけどトリシュの方が下位カード。幸福値でお前はあいつに負けている」

そう、俺の行動は……こいつにとって嫌味に映っても良いはずだ。礼を言われるようなものじゃない。

「俺があいつを庇ったのは……お前にカードの幸福値の差を見せつけたってことだろ？俺は俺がコートカードだから何とでもなると

思ってあそこに踏み込んだんだ」
「違うな。お前は、例え上位カードでも同じことをしただろうさ」
妙な確信めいた言葉遣いで奴が言う。俺を買い被りすぎだと笑っても、その目は引き下がらない。本気の目だ。
「俺は本当に何というか……先日イグニス様にも叱られたんだが」
「神子に？」
「お前は自分という物がなさ過ぎる、だったか」
ランスが何を言いたいのか。よく分からないが、それは本人も解っていなさそうだ。だからこんな言い方しかこいつは出来ないんだろうな。
「つい仕事とか命令をされてしまうと、俺は余計自分が見えなくなる」
「お前は真面目だからな」
別に悪い所じゃないんじゃないか？不真面目より余程いいだろと言ってやるがあいつは首を振る。
「俺も片目を隠せば何か見えてくる物があったりしないだろうか」
「は？」
「お前は俺より見ないようにしているのに、俺より多くを見ているような気がしてならない」
「ランス……？」
突然何を言い出すんだろうこいつは。時々突拍子のないことを言う奴だとは知っていたが。

「お前がああしてくれなければ……俺はトリシュを殺していた」
私情ならそんなことはしない。止まったはずだそのまえに。それでもそれが仕事なら。立ち止まれない。立ち止まれなかった。そこから私情に戻させたのはお前の力だとランスは言う。
「俺は本当に馬鹿な奴だよ。お前がいてくれなければ、俺は俺がなんなのか、俺の心さえわからなくなる」
その言葉だけで救われた気分になった。例えそれが嘘だって、俺は救われたことだろう。少しでもこいつの支えになれたなら俺も本望だ。他に何も望まない。
俺の笑みに気付いたランスは、俺が何故笑っているのか解らないと俺を見る。俺は別にランスを笑っているわけではない。こいつもそれは解っている。だから、解らないと俺を見る。
その視線に答えたのは、気分が大分良くなったから。言っても良いような気がした。
「……昔、お前が言っただろ」
「え……？何を？」
「要らない物は全部捨てて、時間全てを剣に捧げて……立派な騎士になろうって」
それは確か、忘れもしない。俺がアスタロットを失ってしばらく。惚けていた。何も手につかず、いつもぼーっと時を無駄に送った。空虚だった。毎日が。
そんな日にこいつは、俺に目標をくれた。俺が怠けている内にこいつはどんどん強くなった。その背中が遠かった。憧れになった。いつか追いつきたいと思った。

「だけど俺はお前ほど何にも出来ないから……やっぱ無理だったんだわ。捨てきれない物も、嫌なことも多くて、ずるずる引き摺って……結局立ち止まっちまった」

頑張ろうと誓ったはずだ。だけど寄越されたのは下らない任務。最初は耐えた。だけど、俺は短気だった。お前ほど我慢強くない。そして……怒りに負けてしまった。

「俺はずっとお前みたいになりたかったんだ。だけどあんなつまらない任務……お前と同じことをしていてお前に追いつけるとは思えなかった」

そう思うとまた虚ろ。日々が意味を無くしていく。お前に殴られ喧嘩して、距離が溝が広がった。お前はつまらない任務をこなし、着実に信頼を勝ち取った。都貴族がお前を貶めようとしても、都の民がお前を守った。お前が彼らをいつも守ってきたからだ。

だけど俺は都を空けていつも何処かを渡り歩いていた。民の目に着かない場所で、破落戸達を始末する。任務をこなす度に、敵ばかりが増えていく。それは敵だけでなく味方内からも。

自分たちはぬくぬくと簡単な仕事しかしない癖に、嫌味だけは一人前だ。命懸けの任務をこなすのは、てっとり早く王の力になり、信頼を勝ち取り出世するためだとか、そんな馬鹿みたいな理由で僻まれた。別に俺はそんなの望んじゃいなかったから、素行を悪くして騎士らしくなさを求めた。粗野な言葉遣い、何も恐れぬ不遜な態度。王の傍に置くには相応しくない男になった。

だけどそうなったらそうなったで、嫌味を言う奴は後を絶たない。こんなもんが騎士かと思うと馬鹿らしくて、何もかもが嫌になった。

「結局、別のことをしたってお前にはなれないんだよな。俺は俺だから。お前の青を羨んでも、俺は俺以外にはなれないんだ」

「ユーカー……」
「けどな、そう思った瞬間から……腹括ったんだ、俺」
お前みたいになれないなら、俺は俺のやり方で王を守る。お前になれないなら、お前に出来ないことをしよう。俺が騎士で居続けたのは王とランスのためだった。二人の力になるための汚れ役なら幾らでも、喜んで引き受けてやる。自分が惨めになればなるほど、俺の理想は輝き出す。それはそれで、俺にとって……幸せなことだったんだ。
「俺は俺が認められるより、お前が人に認められる方が嬉しい。お前が褒められるのが嬉しい。お前が民に慕われるのが誇らしい。俺の自慢の従兄が立派な騎士でいてくれるのが……」
踏み台になってでも、こいつが高く飛べるなら俺は笑って見送れる。憧れとか理想とか、そういう奴を少しでも支えられたなら……それって凄く幸せなことだろ。
「俺は自分が同じところで同じ扱い受けたって、そういうの想像出来ねぇんだよ。だから全然嬉しくもねぇ」
俺は自分を立派な騎士だと思えないし、それは一生かけたとしてもそう思える日は来ない。
「俺は俺の青を未だに誇れない」
こんな薄すぎる青。素行や言葉遣い直したところで、真面目に働いたところで……認めらはしないんだ。分かり切ったことなんだ。
「だから俺は全員に認められたいとは思わねぇし、認められても

嬉しくねぇ。俺は俺が認めた奴に、認められたらそれでいい」
「……お前、本当にそれでいいのか？」
そう聞いてくるランスに向かって俺は笑えていただろうか？よくわからない。この部屋には鏡がないから。たぶん、あいつにしかわからない。
「お前に救われてたんだ。こんな目をお前は……褒めてくれただろ」
綺麗な空だって。そう言ってくれたのはランスとアスタロットだけ。俺はそれだけで良かった。他に何も要らない。他の奴が俺の青を罵ったと見下したとしても、俺は胸を張って俺の誇りを纏っていられる。
「……ああ。綺麗な色だと思う。俺はお前の青が好きだよ」
「そんな酔狂、世界に何人いるんだろうな」
あいつは綺麗な青で微笑を浮かべる。惨めな俺は溜息と共に自嘲の笑み。
「……俺はそんな酔狂な奴が気に入った。だから、そんな馬鹿のために俺は騎士でいるんだ」
何もお前を守ると言ったのは、お前が血縁だから身内だから、そんな理由からじゃない。
気に入ったから、救われたから。だから救う者でありたいと思っただけなんだ。
「俺は俺の理想のお前が、道を踏み外すところを見たくなかった

だけだ。俺の知っているお前は友人殺しなんてしないから」

それが王の命令なら兎も角、あれは神子の命令だった。いつものお前なら、あそこでアルドールに指示を仰いでいたはずだ。そうしなかったのが、おかしかったんだ。何かが、変だったんだ。

「って何長々と語ってんだろな俺は。悪い、忘れてくれ」

話したいことを出し切ってしまうと、急に恥ずかしさが浮かんでくる。俺はランスに背中を向けて、壁の方に寝返りを打つ。

「……俺は」

そんな俺の背中に奴が言葉を溢していく。

「俺はずっとお前になりたかったし、お前に憧れていたよ」

「……は？」

幻聴だろうか？思わず首を向ければ、あいつは少し悲しそうに笑う。

「お前は不思議と人の心まで入っていける奴だ。何にも捕らわれず自由気ままに、動けるお前が羨ましい」

「それは単に俺が……命令違反ばっかりするってだけだろ？」

「お前は騎士としては確かに未熟だ。だけど、お前は騎士の中にお前自身を持っている」

自分との対比をするような、ランスのその言葉。

「……違うな。俺は騎士になりすぎて俺を見失ってしまったが、

お前は騎士になっても騎士になれずお前のまま騎士でいるんだ」

どっちが良いことで悪いことかは解らない。しかしこいつは見失ったその自分というものを探しているようだった。

俺からすれば、騎士というか今のこいつが既にこいつのような気がするのだけれど……言われてみれば昔と何か違っているような気もする。心の中にぽっかりと空いた穴が垣間見えた。

こいつは鎧を纏った騎士。だけど鎧の中に誰もいない。理想の騎士という言葉が鎧の中に響くだけ。さながら偶像崇拝だ。こいつは何処にもいない。それが悲しいのだと空っぽの鎧が泣いている。血と肉と、骨は何処に？鎧が泣いている。

「アルドール様がお前を信頼しているのだって、トリシュがお前に惚れたのだって、お前がそういう奴だからだ」

「なんか後半の方は聞かなかったことにしてぇ個人的に」

茶化してみたが、こいつは笑わない。笑えないのだ、そんな言葉ではこいつを救えない。

こいつを救うのは多分言葉じゃなくて、行動なんだろうなと、ぼんやりと考えた。

「……そんなら、傍にいてやる。お前が嫌がってもいてやる」

「……」

「俺の知っているお前と違うお前が現れたら、お前が何か間違えそうになったらぶん殴ってでも止めてやる」

「……俺が、ちゃんと立ち止まれなくてもか？」

「その時はその時だ。もっと修行しとくんだったぜって笑って死んでやる」

「どうしてそんなことが言えるんだお前は！何があってもそんな風で居られる保証なんか……！！」

「だってお前はお前だろ。何かあっても、変わっても所詮お前はお前だろ。それとも何だ？凄ぇ騎士様はお前以外の何かにでもなれるって言うのか？そりゃ凄ぇ！」

そう言って嘲笑ってやれば、ランスは言葉を無くす。言い返せるわけがないだろう。この俺がここまで言ってやっているんだから。

「いいか、俺はお前が気に入ったんだ。お前がお前である以上、この俺が気に入ってやった奴はお前以外には成り得ないんだ」

「……でも」

「俺は一回気に入った奴を、見限るなんて阿呆なことはしねぇ。そんなことをするくらいなら、最初から気に入らねぇ！こっちはそのくらい覚悟して、てめぇを気に入ってやってんだ！だから自信持て！誇れ！お前は凄ぇ奴なんだ！」

「……ありがとう」

そう呟いたあいつの両目が光っていた。船が揺れた瞬間、その輝きが涙に変わり落ちていった。

こいつが泣く所なんて何年ぶりに見ただろうか。本人も恥ずかしいのか苦笑して視線を逸らした。

「馬っ鹿じゃねぇの。お前はそういう理想像というか固定概念がまず駄目だ。男だろうが立派な騎士だろうが辛い時とかは余裕で泣くもんだぜ。そういうのの我慢のし過ぎで、お前は自分見失ってんだろ馬鹿が。こういうのはオンとオフの使い分けってのが大事なんだよ。お前は常時オン過ぎるから疲かれるんだよ」

「常時オフのお前が言うと説得力があるな」

「馬鹿！！そういう言い方すんなよな」

「それじゃあお前はスイッチだったんだな」

「は？」

「騎士の俺をオフにしてくれるスイッチってことだ」

今度は子供みたいな笑顔で笑い出すランス。そうだ昔はこうやってころころ表情の変わる忙しい奴だった。それが何だ今は。クールぶりやがって。いつも爽やかな微笑を浮かべてるなんてこいつらしくもなかったんじゃねぇか。

「そうか。言われてみれば、ここ数年お前と距離が空いてからいろいろよく分からなくなったんだ。なるほど、つまりこれはユーカーの所為ということだな」

「どうしてそうなるんだよ」

「責任取って、俺が戻ってこられなくなったらきっちりスイッチ切り換えに来てくれよ」

「どうやって切り換えるんだよ、殴ればいいのか？殴られればいいのか？」

「時と場合に依るな」

「めんどくせぇメカ騎士様だな……ったく」

仕方ねぇ。仕方ねぇから、傍にいてやるか。

5：Stultum est timere quod vitare non

アルドールから少年騎士の看病を任されて、それも一段落着いた頃。僕の所に現れた奴が居た。

「おい、神子」

振り返るイグニスに、仏頂面のユーカーは黙り込む。

用があって来たならさっさと喋ればいいのに何とも面倒臭い人だ。どうしてこう、カーネフェル男はどいつもこいつも精神的にへたれなんだろう。船に乗っている自分以外の人間の顔を思い出せば自然と口から溜息も零れる。たぶん彼らの中で一番マシな精神を持っているのはここで寝ている少年だ。幼いが故、痛みに愚鈍。それはある意味、屈強な精神とも言える。まぁ、それでもだ。

「少しはマシな顔色になりましたねセレスタイン卿」

人を支える余裕があるだけ、今の彼はかなりマシな部類に入る。アルドールが僕の次に今のメンバーで心を許しているのは彼だろう。更には他の騎士二人も彼への依存が酷い。一人は元々。一人は僕の策により。もう一人は依存というどろどろした物はないが懐いているのは確か。

セレスタイン卿自身もへたれではあるが、虚勢だけは立派な物だしそれに騙されるへたれ阿呆もいる以上、馬鹿には出来ない。空元気でも彼の強がりは今のアルドール達にとって必要な物なのだ。

だから僕も一応は、感謝めいたものを感じてはいる。だから僕にしては友好的な言葉が口を吐いて出たのだろう。

「ところで僕に何か？」

「そいつの調子はどうだ？」
「貴方よりは随分と良いはずだと思いますよ」
「そうか」

そこで会話が途切れる。この騎士は他人に感心を持たない風を装いながら、なんだかんだで抱え込んでしまうタイプだから、まぁ利用し易いよね。だから途中までは上手く行く確信が僕にはある。最大の山場はあそこをどう越えるか。このまま進んだとしても、ぽっと出のアルドールが彼の依存面でアロンダイト卿を上回るのはたぶん無理だ。
彼は実に四分の一の確立で頼り甲斐のあるカード。だからこそ、敵に回った時が恐ろしい。
厳密に言うと僕は間に合わないだろうから確立は三分の一まで落ちる。

「それで用事はそれだけですか？」

どうしたものかと考えながら、僕が尋ねれば……それだけではなかったのだろう彼がぼそと呟いた。

「……今ここにあいつが出るっつう話はないのか？」

あいつ。それだけですぐに分かった。それは道化師のことだ。

「どうしてそう思うんですか？」
「あいつの出現条件は水場が多い。俺が初めて見た時、それからアルドールに聞いたが船にも現れたそうじゃねぇか。シャラット領以外の全てにそれは当てはまる。なら今が絶対安全だって保証は……」

彼の言うことは確かにもっともだ。あいつはギメルを装うためにわざと水場に現れる。アルドールを精神的に追い詰める作戦で、自分がハートのカードだと匂わせるためにそういう事を繰り返す。

「そうですね。ですか確率は低いですよ。カードが六枚。その内コートカードが三枚も固まっているんですから」

ジャックにペイジだけとはいえ、三枚も集まれば流石の道化師もそう簡単には手出しが出来ない。総幸福値という面においては道化師をも上回る。

だから狙うとするなら……幸福値とカードがもっと削れた後だ。

「それに道化師にとってもカーネフェルとタロックの戦争、つぶし合いは喜ばしい所だと思いますよ。４枚あるエースカードが戦争により減らされると分かっているならしばらくは傍観に勤しむことでしょう」

そう。計算上で考えるならそうなる。唯そこに感情論を入れればわからない。僕自身、あいつを誘き寄せる餌に等しい。だからこそ僕は早急に彼らの元を離れる必要があるのだ。

唯、タロック側の一手のせいでそれが出来なくなってしまった。もうしばらくは僕も此方にいなければならない。

これは僕にとっても想定外だ。いつものエルス＝ザインなら、あんな手は打たなかった。僕はアルドール達が北部を平定そして南部の都攻めを行う際にまた手を貸しに戻る予定だったというのに、今の彼はどんな手を使ってくるかがわからない。迂闊にここを離れられないのは事実。

第一ユリスディカが遅れている。僕は彼女とマリアージュにこっちを任せて帰るつもりだった。ユリスディカがあの時城にいたなら、あそこでエルス＝ザインは殺せていた。それだけで随分と戦況は変

わっていたはず。双陸に都を支配させるというのは手筈通りでも、エルス＝ザインのあるなしはかなり話が変わってくる。

（はぁ。僕も立場上。あまり国を空けるわけにはいかないんだけどな……）

シャトランジアから離れて一ヶ月。シャトランジアには僕の存在を知らない者も多い。先代の寿命もまもなく尽きる。そうなった場合僕が表舞台に出なければならない。彼の訃報を聞いたなら、一度は帰らなければ。そうなったらそうなったで問題は山積みで、今度は何時カーネフェルの支援に戻れるかもわからない。

国王派を黙らせるための駒の懐柔さ成功すればその辺は何とかなるのかもしれないけれど、今はそれも未定だ。

「……ならてめぇも休んどけ。こいつは後は俺が面倒見てやる」

「……え？」

「こんなガキまで巻き込んだお前らのことはどうかと思うが、まぁ……こいつもぽんと一人で置かれてるよか安全かもしれねぇしな」

もしかしてこの人は僕にお礼を言っているんだろうか？それはあまりにらしくない。

それに第一僕がこの少年をスカウトしたのは、彼がコートカードだったからに他ならない。

ペイジは探し出すのが難しいレアカード、僕だって対面するまではわからなかった。それに何とも特殊なカードだ。故に毎回所持者が変わる。現にこれまでエルス＝ザインは他のカードだった。この少年パルシヴァルに至っては、前回まではカードですらなかったはずだ。

（……アルドールとセレスタイン卿を友好的にさせた成果なのかな）

カードは上から下から選ばれる。だけどペイジはカードであってカードではないカード予備軍。彼らは願いをまだ持っていないカードであり、星に願いを託していない。だからペイジの出現はゲーム中いつ訪れるかわからない。もし誰もペイジの存在に気がつかず、そのままゲームが終了したとしたら……これは誰の願いも叶わない。ペイジは願いを持たないが故、殺されなくともゲームが終わる。勝たなくとも生き残れる特殊なカード。だからこそ、ペイジを殺せたときのメリットも大きい。

まぁ、僕はあの子を最大限利用するため拾っただけなので、そこを感謝されるとほんの少しばかり僕も良心の呵責を感じるよ。

「雨が降りそうなことを言わないで欲しいですね。奴が現れる可能性が増えますよ」

それでもそれを嫌味で返すのが僕という人間だ。

「まぁ……それでも一つだけ僕からもお礼を言わせていただきますよ。僕が今もここで神子でいられるのは、貴方のお陰です」

お言葉に甘えて休ませて貰いますねと微笑めば、視線を逸らして僅かに顔を赤らめる。男社会で生きてきた分女に免疫ないんだな。いや、単に褒められるのに慣れていないのか。

まぁ、どっちでも良いけど。どっちにしたって、とんでもない甘ちゃんだよなこの男は。いっそ呆れるほどに。

僕が女とわかったくらいで何？途端に反抗的な態度が弱まった。以前感じた殺意も弱まった。部下であるある子の言葉を借りるなら、正に“馬っ鹿じゃないの？”の一言だ。

同情してるわけ？哀れんでいるつもりなの？お貴族様が。まぁ僕もお綺麗な人間じゃあないからね。付け入る隙があるなら大いに利

用させて貰うに越したことはない。
精々僕を哀れむが良いよ。僕は残りのタイムリミットの少なさも、アルドールへの服従の糧に使わせて貰うだけだ。
そうだ。考えようによっては彼に僕の正体がバレたことで良い方向に転んでいるのかもしれない。彼の件に関してだけなら。
僕は唇だけで小さく笑いながら、船室を後にする。アルドールの側を離れるのは結構僕にとっても不安なことだから彼が来なくてもあの子の容態が落ち着いたら後は契約精霊の誰かに任せて戻る気ではいた。

「……馬鹿みたいな顔してる」

寝台で眠り惚けているアルドールの平和そうな寝顔。馬鹿みたいだなと思う。船酔いが完全に治ったわけでもないのに、僕の言葉一つでこの馬鹿はこんな顔になる。それは嬉しいけれど、心配なことでもあった。君は少しは自分と自分の考えという物を持つべきだよと言って聞かせるべきだろうか？

（いや……）

今は無理だ。昨日の今日だ。フローリプさんまで死んだんだ。忘れたわけではないだろう。唯、よく考えないようにしているんだ。視野を狭めて。もっと落ち着いてからしっかり悲しもうとそうやって……アージンさんの時も、ルクリースさんの時も先延ばしにした。そしてそこに新たにフローリプさん。君は後何人親しい人間を亡くしたら、ちゃんとその悲しみと向き合うんだろう？先延ばしにすればするほど、荷物は重くなっていくのを君は気付いていないのかい？
……いや、まだいいか。何時か必ずその時は来る。君は向き合う。そしてそれに打ち勝ってくれなければ僕が困る。それを越えれば……今度こそ、君はちゃんと憎んでくれるだろう。

「……大丈夫。今度こそきっと上手く行く」

僕はこの馬鹿の、この馬鹿みたいな緩みまくった表情を失いたくないと思うのだ。例え僕がそこにいなくても、それでいいんだ。

「君は殺されるべき人間じゃない。アルドール……殺すのは、君なんだ」

＊

「ふぁあ……思いの外ぐっすり眠れたな」

「もしかしたらトリシュがずっと竪琴を弾いていたからかもしれませんね」

「アルドール様にお慶びいただけたなら私も幸いです」

「ずっとって何やってんだお前……阿呆か？」

「な、何てことを！イズー！私は８割は貴方の安眠を願って歌っていたんですよ！？」

「あ、……俺２割なんだ」

多いと言うべきか、それっぽっちかと突っ込むべきか。アルドールは少し判断に迷った。

「……にしてもこんな夜中に着くなんて」

「船が沈まなかっただけでも十分幸運だと僕は思うよ。それにこの暗さなら敵の目にも付きにくい」

「ああ、なるほど。流石イグニス」

俺が目を覚ませば、もうすぐ対岸に着く頃だった。川の流れに流されて、大分東寄りの岸に停泊することになった。

出発が夕暮れだったし仕方ないのかも知れない。夜中の内に渡り

切れたのだから、敵の目にも止まらなかったはず。それなら上々と言ったところか。

「いやぁそれにしてもいい夜空ですね。こういう時は咽が渇きませんかイズー？」

「渇くかボケっ！」

北部について早々、ユーカーに絡みに行くトリシュ。二人が犬猿の仲だったという話がにわかには信じられない。ユーカーの方だけ見れば何となく信じられる気もするけど。

「それにしても……懲りない人だなぁトリシュって」

っていうかもうユーカー女装止めて着替えたのに、まだイズー呼びなんだ。変装解いただけでここまで可愛気がなくなるとはある意味才能だ。

「つかパー坊が寝てんだから静かにしろ！」

「面倒見の良いイズーも素敵だ……」

「本気で打たれたいか？」

「それが貴女の愛の鞭なら喜んでっ！！」

「つか故意に変換ミスすんの止めろ！俺は男だって言ってんだろ！」

「一発でも打たれた時点で私の愛を受け入れてくれたってことになりますのでその辺りをご了承下さい！さぁ！何時でもどうぞ！」

「そんなこと言われて誰が殴るか！」

「殴れない…？はっ……それはやはり貴女が私を愛しているからですねイズー！愛しい者に手を挙げるなんて、そうです……出来ません！私が貴女を殴れないようにっ！！」

「誰かこいつに常識ってもんを叩き込んでくれ！なんで夜中なの

に元気なんだよお前は！」
「お言葉ですがセレスタイン卿、恋狂いの人と変態は２４時間体勢で通常営業らしいですよ」
「要らん情報くれんな馬鹿神子！」

船が岸についても目覚めないパルシヴァル。彼を背負ってるユーカーは、彼に気を使ってか小声で喧嘩をしている。あれはお兄さんっていうかなんか小さな若いお父さんみたいだ。不良って婚期早いってイメージあるし。

「痛っ……！何で殴るんだよユーカー！」
「お前今なんか要らんこと考えただろ？俺そう言うの聡いんだからな弁えろ！」
「お前が弁えろ。アルドール様に手を挙げるなんて流石に無礼だぞ」

俺の頭を叩いた直後に、ランスに打たれるユーカー。これも段々パターン化してきたな。こうなるのが解ってても俺を殴るのを止められないんだろうかユーカーは。もしかして逆にランスに殴られたくて俺を殴ってるんだろうか。いや、まぁユーカーに限ってそんなことはないか。幾ら構って欲しいからってそんな面倒なことをする人じゃないよな。

「俺はこいつに仕えてねぇからいいんだよ！あとこいつ打たれるの好きって顔に書いてあった」

あ。そういう理論ですか。やっぱりユーカーはユーカーだった。

「そりゃ誰だって打つよりは打たれる方がマシだろ」
「アルドール、それはＳには通じない発想だよ。僕は打つ方が好

きだな」

流石イグニス。聖職者失格の発現いただきました。でもそんな酷い言葉を笑顔で語るイグニスはとっても輝いて見える。

「ところでセレスタイン卿。貴方の部下の方々を対岸で見ませんでしたが、彼女たちは都に居たんですか？」

「ああ。待機させていたのは橋のあった場所だからな。城の近くだ。一週間前に落ち合って引き続き都の警備に当たらせたんだが……あの騒動だろ。多分あいつらも虫に刺されちまった可能性はあるな」

ユーカーは平然とそう言うけれど、そんな日があっただろうか？彼はこの一週間の殆ど、俺の傍にいてくれた。俺の部屋の前に居てくれた。朝も夜も昼も。何も言わず、扉も叩かず。昨日までずっとそうやって何もしないで、それでも多くをやっていてくれた。

（ユーカー……？）

彼は何かを隠している。俺はそれに気がついた。

「でもまぁ、逃げてくる途中に作った拠点はこの近くにもある。とりあえずそこに向かおうぜ」

ユーカーが背中を向ける。歩き出す。それを俺は追いかける。何か言いたくて。何も言えなくて。俺の変わりにその背を呼び止めたのはランスだった。

「お前は全員で橋を渡ったのか？」

「馬鹿言うなよランス。狂王と間近でやり合ったんだぜ？生き残

ったのは少数だ」

そこまで言ってはっと彼は左目を見開いた。自分の言葉で何かを思い出した。そんな表情だった。

ユーカーは狂王……タロック王に会ったことがあったのか。前線に出ていたのだからそういうこともあるかもしれない。俺はその言葉に驚きと僅かの興味を抱いた。だけど他のみんなは俺みたいな馬鹿な考えを抱いたりはしなかった。彼らが抱いたのは、恐怖と危機感。

「……それでは北部の戦には、須臾王が来ていたんですか？」

言われてみれば、それは初耳の情報だ。そもそも先代カーネフェル王がどんな死に方をしたのかさえ俺たちは聞いていない。

カルディアで話した時のユーカーはまだ俺たちを信用してくれていなかったし、ユーカーも辛そうで多くを語らなかった。だけど今……ユーカーは否定しない。これにはイグニスも険しい表情になる。

「それならどうして……彼は今、何処に？」

「イグニス？」

イグニスが何を焦っているのか俺にはわからない。タロック王がカーネフェルに来ていたなんてイグニスは想定していなかった。それはイグニスの先読みにすらなかったことのよう……

「もしそれが真実なら、タロック王が南下して来ない理由がありません。そしてその場合エルス＝ザインが、ローザクアを離れる隙が極端に短くなる可能性すらある」

タロック王が近距離にいたなら、報告へ行く距離も時間も短縮さ

れる。

「狂王の存在それひとつで、今回の計画の根底から覆されるかもしれない。そんなこと……あってはならない！」

「イグニス……」

「……俺が見たものがまやかしだったとでも言うのかよ？」

辛い記憶を思いだしても、信じて貰えるか解らない。その戦場から帰った者がここにはユーカーの他にいないのだ。

俺はイグニスとユーカーの間で視線を彷徨わせる。二人とも嘘を吐いているようには見えない。だから出来ることなら二人とも信じたい。それでも俺には情報が少なすぎる。それはイグニスにとっても同じだった。

「それは詳しく聞いてみないことには解りません。それでも……彼の代になってから、タロック王がカーネフェルの土を踏んだことは唯の一度きり。彼の初陣の時のみです。それ以来須臾王は唯の一度もこの地を訪れてはいない」

「お言葉ですがイグニス様。それは今回のような侵略戦争ではなく略奪のための戦争です」

「……セレスタイン卿。貴方の見たタロック王は、どんな男でしたか？」

「言わせるのか？それを俺に……思い出せっていうのか！？あんな……、あんな化け物っ！！」

「言ってください。思い出してください」

泣き出す寸前、そんな悲痛なユーカーの声。詰め寄る冷たいイグニスの声。

「……」

ユーカーは無言のまま、歩みだけは止めない。何かを思い出すように、戻ってきた忌まわしき北部の土地を歩く。

（ユーカー……）

心配になって彼の隣まで走る。暗くてよく見えない。だけど、とてもじゃないけど喋れない。喋れるはずがないのだ。彼の頬を伝う透明な雫。それが微かな星に月に照らされ冷たく光る。それを見ていたら、俺も何も言えなくなる。つられて泣きそうになる。

ユーカーはこの土地から、南部へ逃げてきたんだ。ランスよりももっと……一番ここに来たくなかったのは彼なんじゃないか？

（それを……俺が、イグニスが……）

人が死ぬのは辛い。俺もその痛みを知っている。人の上に立つってことは人の命を食い潰すこと。俺が今、ここにいるみんなを死なせてしまう。ユーカーはそれと限りなく同じ思いをこの土地で味わったんだ。

「……ユーカー」

「……馬鹿だな、お前」

縋るように彼を見れば、情けない顔するなと笑われた。でもそういう彼だって似たような顔してるに決まっている。

草原を越え森の中へ少し進めば、野営地跡が見えてきた。以前も同じ場所で夜を過ごしたのだろう。慣れた様子で、焚き火の跡に再び火を灯す。その間に俺たちはテントを組み立てて、パルシヴァルを預かって寝かせることにした。それが終わる頃には、簡素な食事まで用意されている。野宿に慣れてるんだな、何だかルクリースを

思いだして……またちょっと泣きそうになった。俺はユーカーの隣の、椅子代わりの丸太に腰を下ろして、彼を習って空を仰いだ。星の光を見ているとやっぱりシャトランジアからカーネフェルまでの旅のことを思い出す。ルクリースとフローリプとこうやって星を見ていた。星の灯りがもっと温かかったなら、もっと早く涙を渇かしてくれるだろうに、星は冷たいから……まだ俺の目は潤っている。

「ユーカーも星見るんだ」

なんとなく口を吐いて出た言葉。それに彼は小さく答えてくれた。

「そりゃあ見るぜ。こんな広い大陸行き来するには星くらい読めねぇと」

「何を見てたんだ？」

「……蠍の心臓」

ユーカーは空の赤星を見つめているのだという。明るく瞬くそれに重なる色があるらしい。

それを尋ねようと思ったけど、その頃にはもうみんなが火の傍に集まっていた。ユーカーの話をイグニスは待っている。ランスはユーカーを見守る形で、トリシュは少し心配そうだ。

「あの男の赤は……あの星よりももっと赤い。血の色みてぇなどす黒い、不気味な赤だった」

ユーカーは、語り始める。蠍火に思い出すのは、憎い男の双眸だと彼は言う。

「……久々だけどな、あの時も思ったぜ。もし俺がお前だったらなって」

視線を一度だけランスの方へ向けて、ユーカーが自嘲する。重いため息と共に。

「あいつは……漆黒の黒髪、に深紅の赤眼。歳は中年ってとこか。だが妙な迫力があった。どう年を取ればあんな風になれるのか俺には皆目見当も付かねぇ。普通の人間と一線を画す、狂気に触れた人間の顔だ。なんら躊躇いがない。恐れもない。だからこそ……すげぇ、怖いんだ」

その視線を思い出したように身震いしながら、ユーカーは恐れ戦く。

「あの男はそこにいるけど何も見ちゃいねぇ。俺たちを取るに足らない、ゴミみてぇな虫螻みてぇな物みたいに眺めてやがった」

そこには怒りと憎しみ。そしてそれをも上回る恐れが介在していた。

「風が吹くんだ。ぶぁっと……そいつが剣を薙ぐ度。薫る血の臭いに吐きそうな位だ。そいつの服に身体にもうこびり付いてやがる。何人殺せば、あんな死臭纏えるんだ？相手が女だからって躊躇いもない。優しさもない。それがむしろ優しさなのか？よくわからない。わからなくなる。死んだ方がマシなんじゃないかって、あいつと眼を合わせただけでそう思う」

誰もが逃げ出したくなる。それでも逃げられないのは、足が動かないから。まるで金縛りにあったかのように、その場所に縫い止められると言う。そうなってしまえば後は、唯殺されるのを待つだけの行列。吹き荒れる死の風を見つめることしかできない。

そんな悪の風を追い返す、守る者があったと彼は言う。

「あの人は凄ぇ人なんだ」

普通の王は、守られる者であり守る者ではない、だけどあの人は守った。

悪の王は、奪う者で壊す者で殺す者。だけどあの人は違う。ユーカーはそう叫ぶ。

「どうして俺なんかって思った。俺はカーネフェリアじゃない。そんな価値、俺にないんだ！！」

目の前に迫った刃。魅入られたようにそれを見つめる。訪れた死は意外と長く、その時が来るのを待っていた。

「俺はあの人に肩を叩かれて、名前を呼ばれて我に返った。あの戦場であの狂気に臆することなく居られたのはあのおっさんだけだった。凄ぇ人だったよ……やっぱり。だから悔しかった。あのおっさん、こんな腐れた国じゃなきゃ……立派に戦って勝って、歴史に名を残せたような立派な奴だったんだ。それが都貴族共に踊らされて……っ！あんな場所まで送られて！！俺なんか……俺なんかを庇って！！」

言えなかった。ここに来るまで、誰にも話せなかった。彼が今までその胸に閉じこめてきた言葉。或いは忘れていたのだ。辛すぎて耐えきれなくて、脳が書き換えた。彼を守るために、自分を守るために。約束が先走り、脳を書き換えた。

彼の眼が見た悪夢が今ここに甦っている。彼がどうしてあんなにもランスの身を案じたのかもそこにあった。

死ぬために戦っていたのはランスだけじゃない。死にたくないと

生きていたいと彼が追い求めたのは、死んでいまいたいから。
約束に縋らなければ立っても居られなかった。いつかそんな日が来ることを彼女は知っていたんだろうか？だから最後に彼に約束を送った。愛する人に生きていて欲しいと祈りを願いに託して。

「死ぬのは俺だったんだ。俺が死ねば良かったんだ。庇われる価値なんか無い！！」
「ユーカー……」

俺が彼の名前を呼んで、他に誰も何も言えなかった。ユーカーを責めようと握りしめられた拳。ランスはそれを振り上げることが出来ず震えている。トリシュは仕えた王の真意と、ユーカーの悲しみを察することが出来ず、瞳を迷わせている。イグニスは驚かず、それでも一言も聞き漏らさぬよう……琥珀を光らせている。そして俺は彼の名を一度呟いたっきり何も言えず彼を眺め、彼の代わりに泣いた。ユーカーはもう泣かない。声を肩を震わせても。眼の青を光らせて、闇を見つめて吠える。

「落ち着いてくださいセレスタイン卿。以前僕は言いましたよね？全ては幸福値。彼は死すべきして死んだんです。貴方を庇わなくとも彼はその日に死んでいた」
「そういう問題じゃねぇんだよ！俺はあの人の騎士なのに……っ！傍にいたのに守れなかった！何も出来なかったなんて……」
「いいえ、相手が狂王なら誰でも同じです。おそらくランス様でもトリシュ様でも同じです。誰だってそうなっていました」

イグニスがユーカーを庇うようなことを言うなんて。俺は少し驚いた。だけどその言葉にランスが少し苛立つのが見えた。自分なら何とか出来た。そう思ってしまったのだろうか。それでもイグニスは貴方でも無理でしたと眼で告げる。

「毒の前に全ては無力です。剣の腕も才能も努力も全て水の泡。人が人である以上、毒には抗えません」
「毒……ですか？」

何故そこで毒の話になるのだろう。ランスがイグニスに疑いの眼差しを向けたが、すぐに思いだしたことがあったのかそれを驚愕に改める。その変化を見取ってイグニスは深く頷く。

「タロックは毒の王家です。王家の者の武器は刃物以上に毒です。動けなくて当然です。そういう毒を盛られたんですよ貴方がたは。死臭でそれに気付けない程度の毒を嗅がされたんです」
「しかし神子様、彼らが毒を内政で用いることがあってもそれを戦争で用いたなどとは……」

トリシュの疑問もイグニスは一刀両断。切り捨てる。

「今回の戦争はいつもと勝手が違います」

王はこれまでほとんど前線に出ていない。先の戦では毒を使わなかった。だからその手の内をカーネフェルは知らなかった。
戦争の是非。勝てば官軍。終わらせるための戦。彼がそこまで考えたかは解らない。狂人は狂人であるが故、平然と禁じ手、狂気を操る。そこにルールも法もない。彼らが歩く法なのだ。

「セレスタイン卿、……その場にはエルス＝ザインがいたでしょう？」
「あ、ああ」
「彼は風使い。毒を運ぶエキスパートです。以前僕らもそれをされたことがあったでしょう？タロック王族やエルス＝ザインとの戦

いで風上を取られたらまず勝てません。戦うなら屋内、これが鉄則です」

イグニスは外で戦った時点でもう負けだったのだと吐き捨てる。これまで毒など使わない割と善良なタロック勢としか戦ったことが無かった騎士達は、イグニスの言葉に絶句する。

「あなた方はエルス＝ザインの戦い方が卑怯かと思われるかも知れませんが、彼はタロック王の側からすれば風情のある殺戮を行っているんですよ。だからこそ王の傍に置かれるほど寵愛されているのでしょうね」

より残酷に、苦しめて殺すことが王の喜び。人に恐怖を与え、嬲り殺すのが美学。だからこそ、毒を用いるのがもっとも美しい殺し方と狂王は考えている。イグニスにそう言われ、俺は腹の底から怒りが湧いてくるのを感じた。それは俺だけではないはずだ。

「貴方を庇った後、先代様も体調を崩されたでしょう？」

「ああ。……っ！？」

「ええ。彼の剣には毒が仕込まれていたのだと思いますよ。カーネフェルは毒の知識に疎い。おまけに相手方のトップが開発したような毒です。その辺の医者では解毒さえ出来ずに匙を投げ出すでしょう。それなら先代様が撤退命令を出したのは懸命な判断です。まだ毒の行き届かない場所の者は逃がすことが出来たでしょうから」

イグニスの言葉にユーカーは疑問の表情。それが確かなら、自分が動けるはずがない……

「……でも、どうして俺は」

「先代様に頼まれましてね。戦の前にいくつか数式の施したもの

を渡していたんですよ」
「え……？」
「その中の一つに、教会の知識を詰め込んで現代で考え得る限りの解毒数式を施した道具がありまして。使い捨てですけど一度は殆どの毒を解毒できる代物です」
「おっさん……馬鹿だ」

一度だけ解毒が出来るなら自分に使えば良かったものを。どうして俺なんかにとユーカーは俯き頭を抱え込む。

「セレスタイン卿……最後に彼は何か言っていませんでしたか？」
「ランス……ランスを守れって」
「あの方が……俺を？」

最愛の王から自分に遺された言葉があったことを知らなかったランスは、ユーカーの言葉に眼を見開いた。

「もし自分が死んだら、新しい王はランスだって言ってた。だからランスを絶対に死なせないでくれって……だから俺……」
「……そうですか」

イグニスはそう頷いて、ランスは複雑そうな顔になる。
ランスが南部に送られたのはそういう理由からだったからだったのか。ランスの器を見込んで、もしもの時の王にするために……わざと傍に置かなかったんだ。だけどそんなことを知ってしまうと、俺も少し思ってしまう。

（……俺なんかが王になって、良かったのかな）

ランスの方が強い。ランスの方がしっかりしていて人望もある。

彼が王になった方が人もついてきたんじゃないか？ランスは俺をどう思っているんだろう。こんな男に国を任せられないと思って居るんじゃないだろうか？
何となく彼の方を見られなくて、空に視線を逃がしても……そこに答えは書いてはいない。

＊

「何だお前さっさと寝ろよ」
「俺。船で結構寝てたから」

地の利があるからと今晩の見張りを買って出たユーカー。パチパチと火の音とたまに聞こえる溜息に俺はこっそりテントを抜け出した。案の定怒られたが、別に拒まれてはいないようだ。

「ユーカーが俺を認めたくないのって解るよ」
「は？」
「俺だって俺を認められそうにないんだから」
「何言ってんだ？」
「……だって俺じゃあ前の王様に、勝てっこない」

同じ状況で、俺に出来るだろうか。わからない。たった一つ選べと言われたら。
その場所にユーカーだけならきっと俺は選べる。だけどそこに他の人がいたらわからない。
瞬時に拾い捨てるその選択が出来ない。俺は迷う。迷ってしまう。何も鴨を救いたくて全部取りこぼす。
その人はユーカーを助けた。そのことで自分自身、そして大勢の命を一瞬で見捨てた。そうしてまでユーカーを助けたのは、ユーカー自身を助けたかったから？ランスへの伝令のために？

「俺はそこまでして託された言葉を退けて王になってしまった。前の王様の気持ちを蹴って俺はここにいる。それが申し訳ない気持ちになるんだ、少し……」
「……そんな弱音を吐いてる間は絶対認めてやらねぇぞ」
「あはは、そう……そうだよな」

ユーカーならそう言うよな。

（でも少しは認めてくれたんだろうか？）

以前の彼なら、こんな事は言わなかった。俺が何を言っても言わなくても、絶対認めないって言ったはずだ。一見否定しているようなその言葉にも、少しの譲歩が見える。

「でも別に良いんだ。俺はユーカーに仕えて欲しいわけじゃないし」
「……この俺が役立たずみてぇな言い方だな」

仕える気がない癖に、仲間はずれにされると不満を言う。彼は本当に面倒な人だ。だけどそれにも慣れてきた。

「そ、そうじゃなくて！俺はこういうのが好きなんだよ！」
「は？」
「面と向かって悪態吐いてくれたり文句言ったりしてくれた方がありがたいんだ。みんな俺には良くしてくれるけど、陰で何か言われてるか、心の中で本当は何考えてるんだろうって思ったりするんだよ」

都に来ては特にそうだ。みんな俺を王としてみる。王だから寄っ

てくる。都貴族なんて典型的なその例だ。だけどユーカーは俺を王とは呼ばない。アルドールと呼んで、人間として見てくれる。そして対等な人間として俺を罵ってくれるんだ。罵りながらもこうして付いてきてくれている。それは本当にありがたいことだった。彼は正直じゃない。だけど嘘は吐かない。素直でも嘘を吐く人はいる。だから、彼みたいな存在は本当には救われている。ユーカーのそういうところは、昔のイグニスに少し重なる。今のイグニスは神子という役職と重すぎる責任からか、俺に言えないことも多いし……嘘も吐く。俺はイグニスになら騙されても良いし嘘を吐かれても構わない。それでイグニスを嫌いになることなんて絶対にあり得ないけど……だけど俺は弱いから、凹んだり傷ついたりする馬鹿だ。

イグニスはイグニスとしてじゃなくて神子として俺の傍にいてくれる。ユーカーは騎士としてじゃなく、ユーカーという人間としてここにいてくれるんだ。

役職のない人間同士、気楽に話が出来るのは……今となっては彼相手だけだ。もうルクリースもフローリプも俺の傍にはいないから。

「だから俺はユーカーに感謝してるんだ。俺に仕えていないのに、俺を守ってくれてありがとう。傍にいてくれて……って、なんでそこで蹴るかなぁ」

こっちは割と真面目にお礼を言っていたのにユーカーに足を蹴られた。彼は目も合わせてくれない。

「勘違いも甚だしいぜ。別に俺はお前のためになるようなことは一つもしてねぇ」

「そりゃランスのためかもしれないけど、俺はユーカーのしてくれたことに感謝してるんだよ」

「別にあいつのためでもねぇ！」

明らかに嘘だなぁこれは。ユーカーの嘘は分かり易いから本当助かる。

「……つかてめぇ、そんなことを言うために起きてたのか？違ぇだろ？他の奴らに聞かれたくねぇ話でもあったんじゃねぇのか？」

そして勘も鋭い。これは助かる時と助からない時があるけど、今日に限っては前者だ。

「ユーカー……あのさ。ユーカーはこの一週間ずっと俺を守っていてくれただろ？だから……ユーカーは、部下の人達に会いに行く暇……無かったんじゃないかなって」

「……お前馬鹿か？俺なんかのこと気取る暇あったら、もっとしっかり妹のこと見ててやれば良かっただろうが」

「……違うよ。だからだよ」

ユーカーに睨まれる。それは聞きたくない糾弾だ。今更の言葉だ。だけど、俺は耳を塞がない。自分で守っているつもりでも、俺は守られていた。馬鹿みたいだよ。気付かなかった。今日と昨日までの違いは、部屋の外に彼がいたかいないか。フローリプの不運は……起こるべきして起きたのだ。最低幸福値のAカードが傍にいたって何も変わらない。彼女の命を繋ぎ止めること、俺には出来なかった。

「フローリプが今日まで死なずに済んだのは、ユーカーがいてくれたからだ。俺一人の幸運値じゃ駄目だった」

「……それは俺を責めてるわけか？」

「違う。だって不可能だ。ユーカーにずっとフローリプの傍に付いていてくれなんて頼めないだろ。別の人間なんだしさ。好きなところに歩いていく権利があるよお前にもあいつにも」

フローリプはもう、幸福値が殆ど尽きていた。不幸をはね除け生命維持を行うのも困難なほどに。コートカードはその理をねじ曲げる存在なんだ。そこにいてくれるだけで、不運をはね除ける。

「俺は……お前のお陰で、今日まで彼女と一緒にいられたんだ。本当なら、もっと早くに失っていたかもしれない彼女と」

「……」

都を脱出しながら、ランスから聞いた。フローリプの亡骸は隠してきたと。ユーカーがランスに、あいつを静かなところで眠らせてくれるように頼んでくれたって聞いて……俺は安心した。二人に感謝した。教会に逃げる間中……ずっと気掛かりだったんだ。目先の問題を見つめることで嫌な想像から俺は逃げていた。もし彼女の死体をそのままにして逃げていたなら。あのまま彼女は野晒しのまま？それとも俺の縁者と知れて死して尚辱められることになったのだろうか。そんな不安から二人は俺を助けてくれた。

「ユーカー。俺は何も言わない。誰にもだ。お前がこれから喋ること何も俺は聞かない。聞かなかったことにする」

彼が辛いなら、俺が助けになりたかった。少しでも感謝の気持ちを返したかった。だけど俺は本当に弱くて何も出来ないから、こんなことしか出来ない。唯、傍にいるだけだ。

置物みたいな俺だけど、置物だって何かしたいとは思うんだ。

「だからもし……口にして楽になることがあるなら、好き勝手に言ってくれ。俺は何も知らないから」

言って楽になることってある。胸の中に貯め込まない方がいいこ

とだって。
俺はユーカーに背中を向けて空を見上げる。しばらくはパチパチと焚き火の燃える音だけが聞こえた。だけど……やがて、それに混じって微かな声が聞こえてきた。
「……橋を越えたのは俺だけだ」
カーネフェル軍全ては騎馬隊ではない。馬の数は限られている。都貴族に国庫の金を流されて、国防の経費も削られて……歩兵がその大半を占めると聞かされた。だからこそ奇襲を仕掛けるタロックをろくに迎え討てなかったのだろう。
「一般兵なんて歩兵ばっかだ。連中に速度を合わせてたら、敵に追いつかれる瀬戸際だった」
「……」
「全員渡りきるのを待ってたら敵が来ちまう。何処かで見限らねぇと……どうしようもなかった。けど俺は言い出せなかった」
「……」
「……俺の部下は優秀だった。立派な……兵士だった。そして……やっぱ馬鹿だった」
とんと、ぶつかった背中が肩が小刻みに震えていた。たぶんまた泣いてるんだろう。声にはそんな色を出さないように彼は強がっているけど。
「変なとこばっかり俺に似て平気で命令違反しやがる……」
「……命令、違反？」
ユーカーの策では橋を渡りながら、爆薬を仕掛け……渡りきった後に橋を壊していくものだった。そうすれば、追っ手も一緒に始末

できると考えた。そしてそこからは、渡り来る船を待ちかまえて討つものだった。
しかし兵が橋を渡るのを拒んだ。説得しても従わない。命令だって従わない。

「逃げるのかと思った。それならそれでも良いと思った。南部が安全だって保証もなかったしな……好きにしろって言ってやった」

都を目指す敵の進路から逸れれば、比較的安全な場所が北部には幾らでもある。これから危険になるのは南部の方だと誰もが思う。
他の場所から河を渡りだした先遣隊より先に、河を越えなければならない。時間は残されていなかった。

「もう戦いたくないという者を無理に従わせる意味はない。もう傾いた国だ。誰がどう頑張ってもたぶん何も変わらない。狂王に会った時から、もう俺たちはこの国が終わりだって悟っていた。あいつは絶望そのものだ」

そして希望と呼べる王が、死んでしまったのだから……もうこの世界に光はない。朽ち逝くのを待つだけの土地。それならばと、仕方なしに置いてきた。

「北部の居る四六時中俺はあの赤に見られている気がした。あの狂った眼に追い立てられるように逃げて逃げて逃げて来た。立ち止まればその瞬間、目の前にあいつが現れそうな気がして、立ち止まることが怖かった」

赤は嫌いだ。赤い色は。見たくもないとユーカーが吐き捨てる。
そう告げた時彼は、上手く呼吸が出来ないように咳き込んだ。

「敵の手に渡った死体は王じゃなくて影武者だ。本当の王の居場所を俺は知っていると思ったんだろうな。現に奴らは俺を追っていた。俺から離れれば……それだけで安全だった。妥当な判断だと思ったよ」

人の言葉の裏を読むような余裕がなかったのだろう。彼はそんな土壇場で嘘を吐けるような器量のある部下が居るとは思っていなかった。追い詰められれば人なんか、国より自分の命を取る。そんな奴らばかりだと頭ごなしに信じていた。

「……渡ってから、気付いた。俺は本当に間抜けだ」

一心不乱に駆け抜けて南部へと至る。そこで初めて振り向けば、兵はちゃんと付いてきていた。兵士達は橋の中腹まで至っている。そこで手を振っていたという。

「最初は馬鹿みたいに嬉しかった。早く走って来いって足を止めて待ってやった。けど、そうじゃなかった。あいつらは俺に別れを告げていた」

振られた手。振り返そうと、手招きしようと手を挙げた。

それを合図に爆音が鳴る。橋が半分から向こうから煙が上がり、崩れていく。一人で運べる量には限界があった。仕掛けることが出来たのはほんの数カ所。橋を壊すことなど出来なかった。けれど残された爆薬を使い、兵士達はそこまで罠を仕掛けてきたのだ。

追ってきた、敵兵共々自分共々……橋を壊すため。

止めろと叫んでも、付けられた火が導火線を走り出す。

「煙が消える頃には綺麗なもんだ。何事もなかったみてぇに、……河の流れる音だけ聞こえる」

全てが流されていく。飲み込まれて消えていった。敵も味方も、何も残らない。
導火線に火を付けた。

「あいつが俺を騎士失格だって言ったのは正しいんだ。自分の隊の奴らも守れねぇような奴が……どの面下げて騎士だってんだ」
「ユーカー……」
「それでも俺があいつみたいな立派な騎士ならそこで……死んだあいつらのためにもこの国を守らねぇとって思えたんだろうが、生憎俺はそんな大層なもんじゃねぇ」

人を殺すことよりも、自分の判断ミスで死なせてしまう方が怖いものだと彼は言う。
守ることも、その死を割り切ることも出来ない自分に将の資格はないと呟いた。
ユーカーが俺に仕えないのは、俺を認めていないからだけではないのだとぼんやりと……そう思った。彼は自分に守れない程、人の命を背負うのを拒んでいる。だけど一つだけを選んだなら、全神経使って守ることに集中できる。ユーカーはその相手にランスを選んでしまっている。だから俺には仕えられないと、そういうことだったんだ。

「怖くなった。馬鹿らしくなった。こんな国に命を賭けるなんて愚の骨頂だ。あいつらがそこまでする意味のある場所だとはどうしても俺には思えなかった。俺はこんな馬鹿な国のために、最高で馬鹿な連中が死んでいくのが理解できなかった」
愛すべき価値のない、守るべき意味もない。そんな国をまだ愛している人間がいる。

ユーカーはカーネフェルという国自体が好きではなかった。そこにいる一部の人間が好きだったんだ。だからその殆どを失って自分を見失った。

「俺はもう抜け殻みてぇなもんだった。いや、多分その前。狂王のあの狂った赤に眺められた時からだ……、俺は俺の頭が心が壊されるような気がした。俺が考えていたのは二つだけだ」

「二つ？」

「死にたくねぇ……死なせたくねぇ」

タロック王の狂気に触れて、感じた本能的な恐怖。それが死にたくないと泣き喚く。どうしてこんな馬鹿な国のために俺が死なきゃならないんだ。こんな国、好きなんかじゃない。好きだったのは仕えた主だ。死ぬべきはその人のためで、国のためじゃなかった。

そこで託された言葉。ユーカーにはあと一人だけいた。この国に、守りたい人間が。

「ランスが死にたくねぇ。逃げ出したいって言うんなら、俺は何やってでもあいつを外へ逃がそうと思った。だから都なんかカーネフェルなんてどうでも良かった。滅ぶなら滅んじまえって思ってた」

「でもユーカーは先遣隊を倒したんだろ？」

「たまたま出会して俺の邪魔して来やがったから殺しただけだ」

カーネフェルにまだ未練があるんだろうと尋ねても、彼は怒りしか存在しないと吐き捨てる。王を守れなかった。その悲しみと怒りから、タロック兵を切り捨てた。そこに愛国心も正義もないと彼は言う。

「だから橋のこっち側で部下を待機させてたってのは嘘だ。正確には橋の上……河の中だからな」

ユーカーが自身を嘲笑う。

「カルディアまで来たはいいが、馬連れじゃ南砦が通れない。あいつは都へ返して、俺一人で砦を越えた。そこからはお前も知ってるだろ？」

「ああ、そうだったよなそう言えば……」

ユーカーと出会ったのはカルディア付近。そこから今日までの一月に満たない短い付き合いだ。

「あの頃のユーカーは本当にランスの心配してたよな」

「俺にとっての守るべきカーネフェルは、もうあいつだけだからな……」

悔いるようにそれでもそれを誇るように彼は小さく笑っていた。

「続いて船が渡ってきたらそれでもいい。さっさと滅びろ。そうすればあいつもこの国への未練がなくなる。そんな風にさえ思った……だけど、あいつはそういう奴じゃなかった。俺があの人を守れなかった時点で、俺はあいつに死に行く道を選ばせちまった……」

死なせたくないのに、彼を死の道へ追いやったのは自分の不甲斐なさ。そう思うと彼はどうにもこうにもやるせないのだろう。

「あいつは本当に……今まで誰よりもこの国のために尽くして来た男だ。あいつは幸せになるべき人間なんだ。それだけのことをして来た。……だけどあいつは自分の幸せってもんを知らねぇ」

幸せになって欲しいと彼は言う。自分の幸せを差し出してそれで

彼がそうなれるなら彼は恐らくそうするだろう。だから彼はここにいる。幸福値を、彼の代わりに賄うために。
それを当たり前のように彼は言うけれど、相手が親戚だからってそのくらいでそこまでの言葉を紡げるだろうか？

「ユーカーは……どうしてそんなにランスが……」
「あいつは俺の理想なんだ。理想の騎士なんだ」

逆さになったってなれっこない。妬む気持ちも吹き飛ぶくらい、清々しい憧れを与えてくれる。あいつはそういう相手なんだとユーカーの青が物語る。

「あいつ程の人間が何にも報われもせずに、こんな蛆の湧いた国のために犬死にするなんて俺は認めねぇ。認めて堪るか」

「……あいつは今までずっと無理して生きてきたんだよ。誰もが憧れるような騎士。そういうものになろうと頑張って……自分の頭で自分の気持ちを考えられなくなっちまった。何時だって自分の中の騎士に支配されている」

それは彼に憧れた自分の責任でもあると、彼は言っている様だった。

「それって結構辛いことだと思うんだよな。あいつだって人間なんだから」
「……そう、そうかもしれないな」

言われて俺も考える。誰もが役職を持っていてそんな目で見られる。生きることは、自分に嘘を吐くこと。演じること。心を見失うこと。何が悲しいのかも分からない。そういう人形だった記憶が俺

にもある。

（ランスも……辛かったんだな）

俺は彼を優しくて強い立派な騎士として見ていた。彼自身のことと言えば、ちょっと天然気味の言動と無差別魚料理くらいしか思い浮かばない。

それは彼自身俺と向き合うときに騎士の顔をするから。だから俺は彼の顔を見ることも知ることも出来ない。それは俺がアルドールとしてではなくカーネフェル王として彼を従えているから。でも、それじゃあ駄目なんだ。

俺はもっと俺の言葉で、俺の素顔で彼と向き合わなければならない。俺も鎧と仮面を付けていた。彼は凄い人だから、俺もついつい身構えて……気に入られたくて、嫌われたくなくて……よそ行きのいい顔をしていたんじゃないか？ちょっとでもボロを出せば、彼は優秀な人だから俺の駄目さに馬鹿さに呆れてしまうと思ったんじゃないのか？無意識に。

そんな俺には出来ていないこと。ユーカーはそれをやろうとしているんだ。

「だから俺は人としてのあいつの願いを叶えたい。あいつ自身が言葉にしなくても。気付いていなくても。あいつが助けを求めてるなら、力になりてぇ。どんなことでも」

「……そっか」

その願いが俺と対立するかも知れない。だからユーカーは俺に仕えない。いつでも自分だけは彼の味方でありたいと言う。彼のそんな切なる願いに、俺は逆に憧れる。

俺は幸せになって欲しい人はいても、その人が口にしない願いまで読み取れないし探ろうともしない。それが嫌かと思ってと逃げる。

そうだ。俺は嫌われるのが怖い。イグニスに嫌われたくない。
都合の悪いところは触れないようにして、目を逸らして……何も聞かない。本当に彼女のことを考えるなら、俺は嫌われても彼女の真実を探らなければならない。
ユーカーは……最悪嫌われても構わない。そういう覚悟があるんだ。それで傷つかないはずないだろうに、それでもいいんだと彼は笑っていられる強さがある。俺のイグニスに対する大切と、ユーカーのランスに対する大切は、似ているようで実質俺は彼らに負けている。それを俺は痛感していた。

（俺はずっとイグニスの友達でいたい。でもそれは……本当にイグニスのためなんだろうか？）

それは俺の一方的な思いであって、本当に彼女のことを考えていると言えるのか？
彼女は言っていた。シャラット領の教会で。言えないことがある。それでもそれを見つけて欲しいと俺に……俺に、言っていたじゃないか。

（イグニス……）

俯いて言葉少なになった俺に、ユーカーがテントに戻れと目で言った。

「お前もさっさと寝ろよ。夏っつっても夜は冷えるしお前なんかに倒られたらそれこそお荷物が大荷物だ」
「なぁユーカー……」
「何だよ？」
「何て言うか、人間っていろいろ……大変だね」
「……馬鹿かお前」

俺の言い方が悪かったのか彼は怪訝そうに俺に言う。

「てめぇも人だろ」

当たり前のことだ。でも目から鱗だ。そして彼からそんな言葉が贈られるとは思ってもみなかった。

「……そっか」

それたけのこと。当たり前のこと。それでもそれが誰かに認められるのは、少し心が軽くなる。彼は俺を本当に……カーネフェル王として見ていないんだな。俺を俺として見てくれている。それが、なんだか嬉しかった。……少しだけ、救われたような気がした。変だよね。彼が救いたいのは俺なんかじゃなくて、ランスだけのはずなのに。それなら俺なんかにそんな言葉くれなくてもいいのにさ。

何でだろうな。嬉しいのに、少し悲しい気もした。

人の心って言うのは複雑な物なんだなと俺はまた学ぶ。昔はもっと嬉しいとか悲しいは別の場所にあるような気がしたのに。

6：Qualis pater talis filius.（前書き）

※変態回……なのか？

6：Qualis pater talis filius.

エルスが俺達の所から去ってから……何日後だっただろう？その情報が入ったのは。

「お頭、お頭！レーヴェのお頭！山の麓に人間が！」

「しかもありゃあ……エルスちゃんが言ってた奴らに似てるねぇ」

眠い。起きたくない。怠い。面倒。俺は惰眠を貪っている。しかしエルスのその名前は、俺を覚醒させるには十分だった。

エルスの飯は美味い。エルスの声は綺麗だ。眼も綺麗な色だし肌も白いし嫁にするには最高だ。俺の知る村での女達は、ろくな女がいなかった。そこら辺歩いてるのは年増とか婆ばっか。全然可愛くねぇの。塀の中にいた若い女は、凶暴だった。あいつ凶暴だから閉じこめられてたんだなきっと。

だけどエルスはそうじゃない。俺のお袋より綺麗だし、料理も上手い。俺はあいつより綺麗な女を知らない。そんならあいつに人生賭けて、惚れる価値は十分ある。ここで俺が男を見せれば、エルスも俺と結婚してくれるって言ってた。

エルスが嫁に来れば俺の変わりにこいつらまとめてくれるだろうし、毎日美味い飯作ってくれる。考えるだけで涎が出そうだ。

「うっし！行くぜ野郎共！」

俺は涎を拭いながら、得物を手に取った。

「このレーヴェ様の庭に踏み込むとは良い度胸だぜ！身包み剥いで、全部奪って、今日もいっちょ宴会と行こうぜ！」

＊

空は青く澄み渡り、世界は……少なくともこの景色だけなら十分こんなに美しいのに……それなのにどうして俺の周りはこんなに空気が不味いのだろう。

不味い。まずいというかむしろ気まずい。どうしてこんなに気まずい？それは多分……あの二人の所為だ。

ユーカーとランスは昨日の一件でまた距離を置いている。めんどくさい従兄弟だ。何で俺があの二人のために悩まないといけないんだ。そう思えるなら思いたい。アルドールは少しばかりそう考える。

ザビル河を越えて北部。南部とはちょっと変わった風が吹く。南部ほど乾燥していない。緑草木と海の香り。北部は北部で自然が多い。そして南部よりも懐かしさを覚える気がする。案外俺は昔、北部にいたのかもしれない。

そんな癒しの風だって、現実逃避は五秒と持たない。ランスは心が広いように見えてユーカー相手だと時々かなり偏狭になる。そこに絡んでくるのが先代カーネフェル王のことなんだろうけど。

「おい！そこのお前ら！」

「ぁあ？」

突然響き渡る声。木陰からぞろぞろと現れる人相の悪い男達。苛ついているユーカーが、喧嘩を吹っ掛けるそいつらを半眼で睨み付けた。

「人の縄張りに土足で上がり込むとは良い度胸だな」

その言葉にイグニスは吹き出している。多分「土足もなにもこっちはこの国の王なんだけど、王相手に随分おかしなことを言うんだね」とかそんなことで吹き出しているに違いない。

「うわ、凄い訛り。セネトレア訛りだねあれは」

……そう思ったが違うらしい。男達は色の薄い黒髪……外見はタロック人に見える。しかし話しているのはカーネフェル語。その訛りが酷いのだ。

「混血に、カーネフェリーの野郎がひーふーみーの……五か。一匹値段の付かなそうなのがいるがまぁ、良い金になるだろう」

賊の言葉にユーカーの肩がわなわなと震える。それは地雷だ。安い釣り針に掛からずにはいられない……貴族のプライドって言うのは悲しい性なんだな。

「良い度胸だなてめぇら。誰が不良品だって!?」

「私のイズーを侮辱するとは。万死に値する!?」

もう一匹釣れた。そんな釣り糸で釣られて良いのか?トリシュは本当に残念な方向に走って行っている。沸点温度の等しい二人の同僚を交互に見ながら、ランスは少し遠くを見やるよう……寂しげに眼を伏せた。

「……ユーカー、お前何時の間にそんなにトリシュと息が合うようになったんだ?」

「合ってねぇっ!!」「ありがとうっ!!」

全く別のことを言っているのに最初の発音が同じだと言うだけで、何か息が合っているように思うのは多分気のせいだ。

「ていうかイグニス、視覚数術してなかったのか?」

「今省エネ中。数術代償の無駄使いはしたくないんだ」

欠伸を噛み殺しながらイグニスがそう言った。その不意打ちの表情は少し子供っぽく見えて可愛い。いつも年相応より大人びている彼女だからこそ……

「セレスタイン卿の得意分野じゃないですか。山賊海賊退治の任務をよくやっていたと聞きましたよ？五分で壊滅してきてください。戻ってこなかったら置いていますんで」

「無茶言うな！」

そう怒鳴りながらも早速抜刀。敵に向かって駆けていく。ユーカーの剣は混血剣。両手でも片手でも扱える武器。そこまで長身でもない彼がそれを使いこなすのは難しいように思う。しかし……

「……凄い」

「セレスさん、素敵ですっ！格好いいです！サイン下さいっ！」

「まぁ、腐っても騎士だし彼も。あの位は出来て当然だよね」

俺とユーカーのファン一号みたいなパルシヴァルの絶賛に、イグニスは彼を見下すように肩をすくめる。

それでも俺は凄いと思う。俺じゃ真似しても真似できない。彼は一瞬の判断で持ち方を変える。そして踏み込み、斬り込み、薙ぎ払う。あんな長剣重いだろうに、彼はその質量を感じさせない。ユーカーだってそこまで馬鹿力というわけでもない。それを補うのは彼の素早さだ。振るうその勢いが、重さを軽減。まるで剣舞だ。踊るように彼は戦う。……と思ったら本当に何か曲が流れてきた。

「戦う貴女も美しい。そんなイズーのために一曲捧げます」

「阿呆っ！んなことやってる暇があったら戦えっ！」

トリシュは美声だ。決して悪い曲ではないのだが、タイミングが悪い。
先程怒りのトリシュが取り出したのは剣でも槍でもなく竪琴だった。それを奏でて愛しのイズーなんちゃらかんちゃらとか歌われたらまぁ……ユーカーもキレるだろう。しかし皮肉にも、そのおかげと言うのか……怒りで攻撃力が上がっているようにも見える。
大分ユーカー一人で片付けてしまったようだし、俺が加勢に行く必要も無さそうだ。っていうか俺が行ってもたぶん邪魔。余計足を引っ張る。

「……でもさ、イグニスはどうしてそんなにあいつに厳しいんだ？ユーカーも話してみれば結構良い奴だと思うんだけど」
「君が彼を気に入ってる分、誰かが彼を嫌わないと世界の均衡ってものが崩れるんだよ。つまりその均衡を守る僕は世界平和を守ってる。ね？神子として当然のことだよ」
「……なるほど」
「なるほどじゃねぇよっ！！」

イグニスに言いくるめられた俺に、ツッコミが飛んで来る。

「地獄耳……」
「アルドールっ！てめぇ後で一発ぶん殴るっ！！覚悟しとけ！！」

俺の方を振り返りユーカーが怒鳴る。最後の一人。それももう追い詰めた。だから振り返るだけの余裕……油断が生じる。そこに生まれた隙がある。それを見逃さず斬りかかる敵。

「ユーカーっ！後ろ！！」
「アルドール、そういう時は志村って言うんだよ」

「え？」
「ああ、ごめん。今の時代には無い単語だった。不便だねファンタジーってのも」
「……え？」
「先読みしか知らない未来の情報だよ。君にはまだ早いね」
年下相手になんか俺が子供扱いされていた。何なんだその謎の単語は。
イグニスとの謎のやり取りをしている間にもユーカーに白刃が迫る。俺の言葉に反射し、振り返ることには成功。しかしそこから避けるにはもう一動作が必要。逃げられない。それならと振り上げる剣。届くか。怪しい。そこに現れる数術の壁。それは水で作られた数式。攻撃で壊れた壁が、その水飛沫を針に変え、敵に向かって降り注ぐ。
「それならお前はその後三発殴られる覚悟をするんだな」
「……いつもあいつの肩持ちやがってっ！」
いや、今のは言葉はそうだけど行動はどう見てもユーカー助けてるって。それがわからないはずないだろうに、ユーカーは本当捻くれている。
それでも十人程いた敵をほぼ一人で倒したんだから十分凄くはある。
「大体お前は……」
「俺が？」
ランスに掴みかかろうとして……昨日の気まずさを再び思い出したらしいユーカーが口籠もる。先代のこと。口にされないだけで怨まれている。そんな被害妄想で彼は固まる。その一瞬を見逃さず、

風が吹いた。吹き抜けた。

「！」

見えない分、人より聴覚が優れている。その僅かな音に反応したユーカーは、反射的に相方を蹴り倒す。

しかしそのために、自分が屈む暇を失った。飛来するは一本の白矢。ユーカーの腕を掠めた矢が背後の木に突き刺さる。それを確認するよう現れる者がいた。

「やるじゃねぇか」

その声は、これまでのタロック人よりはっきりした響き。

「……え？」

しかしパルシヴァルは大きな瞳を瞬かせている。他の騎士二人はわからないでもないが、聞き取りづらそうと言ったところ。ユーカーに至っては蹲っている。これはタロック語だ！

「ってユーカー！大丈夫！？」

思わず俺が駆け寄ると、彼はよろと立ち上がる。

「足手纏いは下がってろ」

「そうは言うけど、顔色悪いよ」

ほっとけないと俺が言うと彼は面倒臭そうに舌打ちをする。

「今のは毒ですね」

「毒！？」

冷静なイグニスの情報分析。俺を含め全員がその言葉に驚いた。

「ああ、そうだ。そのまま放置してっとそいつ死ぬぜ？」

乱暴な言葉遣い。結わえた長い黒髪。黒の瞳はそいつがタロック人である証。双陸ほどではないがこれまでの賊より深い色合い。こいつは本当にタロック人だ。

「お前がカーネフェル王だな。俺のエルスを苛めてくれたそうじゃねぇか」

「え……？」

いきなり告げられたエルスという名前。その名はタロック王の側近、天九騎士が一人。混血でありながらその地位に収まる少年の名だ。その名を呼ぶそいつは、俺を睨み付けている。

「そいつの解毒剤が欲しければ、俺に従え」

「わかっ……」

「お断りします」

苦しむユーカーを見ていられない。俺がそれに従おうとした時……イグニスが笑ってそれを遮った。

「イグニス！」

「神子様！イズーがっ！」

「セレスさんが大変なんですよ！？」

「何を言っているんですかあなた方は？一国の王と一介の騎士の命。どっちが重いと思ってるんです？」

すたすたとイグニスはユーカーへと歩み寄り、彼を冷ややかな視線で見下す。

「それにわざわざ其方の要求を聞く必要もないんですよ」

「性格悪ぃ……」

しかし見下されたユーカーが小さく笑った。このために俺を利用したなと若干の恨み言を秘め。

「なんだかんだで触れちゃいけない逆鱗に、あなた方は触れてしまった」

遅れてイグニスも笑う。その言葉に俺は思い出す。先程一人だけ反応しなかった男がいやしなかったかと。顔を上げる。その刹那、ぶつかり合う金属音！

イグニス以上に冷たい眼をしたランスが剣を手に踊る。優雅さ上品さは相方よりも彼の方が上。そして滲み出る殺気も桁違い。

しかしその攻撃を、相手は難なく受け止めた。とてもじゃないが、信じられない。

「お、女の子がランスと渡り合ってる！？」

乱暴な男のような言葉遣い。だけど現れたのは少女だった。

身体の一部を鎧に纏った鎧。男物の鎧では隠せない、ルクリースと渡り合えそうな豊かな胸囲。そしてその顔に残る幼さは、彼女よりも年下。たぶん俺と同い年くらいか？そんな少女がカーネフェルの最高の騎士とやり合って、一歩も引いていない。そんなことがあり得るのだろうか？

「地の利だね。ここは彼らのテリトリーだ」

風の吹き方。それを上手く読んで敵は矢を飛ばす。それをかわしても、その先の地面に仕掛けられた罠がある。それを避けたって、そこをまた狙われる。

「それにランス様は今ちょっと我を忘れている。攻撃が雑になっているのは否めない。だけど……一般人に出来る事じゃないよ」

「それじゃあ、あの子も？」

「ああ。十中八九彼女もカードだ」

イグニスの解説を聞いている内にも、徐々にランスが押されていく。ランスは長剣、敵は短剣。リーチならランスが勝っている。しかし毒矢を持つ少女には迂闊に近づけない。となれば得物のリーチは彼女が勝る。不意打ちの一撃を受け止められた時点で、不利な勝負は始まっていたのだ。

「セレスさん、痛くないですか？薬草摘んできました」

森の中で暮らしていたというパルシヴァルが、ユーカーに毒に効くと思われる葉を差し出した。

「しかし煎じて飲ませるには水がありませんと。代わりと言っては何ですが、ささっ……イズーこれをどうぞ！ぐいっと一思いに」

さっとその葉を奪い、薬品片手に忍び寄るトリシュの姿。それにふらつくユーカーが無理してでも蹴り飛ばす。

「どさくさに、てめぇは……！てめぇもランス手伝って来い！」

「トリシュさん、それは飲み薬じゃなくて傷口に塗るんですよ？」

本当に僅かな隙を見つけては、私のイズー化計画を推し進めようとするなあの人。背景で命を賭けたコントをしている他の騎士達の姿を見ると、真面目に戦っているランスが少し可哀想になる。戦いに余裕が出てきたのか、少女はその背景会話にも加わって来た。

「無駄だぜ！その毒は創作毒だ！薬草一種でどうこう出来るような柔な出来じゃねぇんだよ！大体俺を倒したら、毒の隠し場所もわかんねぇ。違うか？」

今は自分が解毒剤を持っていない。それを告げる少女に、ランスも攻撃の手を止める。

「俺はカーネフェル王以外に用はねぇ」
「……俺に何をさせたいんだ？」
「腕の二、三本置いていって貰おうか？止めはエルスが刺したいだろうしな」

少女はにやりとほくそ笑み、俺を招くよう得物を向ける。

「あと俺様の部下を苛めてくれたんだ。他の奴らも相応の礼に慰謝料くらい置いていけ。身包み全部剥いでやる」
「お嬢さんがそんなことを言うものじゃない」

一瞬それが誰の声か解らなかった。俺は辺りを見回して……それが仲間内の物ではないと知る。じゃあ誰だ？そんな疑問を打ち破るよう、蹄の音がすぐ傍で鳴る。それはたぶん上方から。

「そしてどちらかと言えば私は、野郎の裸になんか興味はないのでね。そんな君のはち切れんばかりの胸の方をじっくり観察させて

貰いたいものだ」

近くの崖から飛び下りて来たのは、中年と呼ぶのは憚られる、年齢不詳の色男。甲冑に身を包んだ様は彼も騎士なのだと思わせるが、その言動はあまりに理想の騎士から遠く感じる。綺麗な金髪に、かなり深い青。彼が真純血だと信じるには十分なその外見。

ならば俺達の敵と言うことはおそらくない。無いはずなのだが……何故かその中年色男は少女に言い寄っている。

「俺の胸筋が気になるのか？すげぇだろ。俺様くらい身体鍛えればお前もこのくらいなれるかもしれねぇぜ？」

しかしこの少女、ただ者ではない。中年男のセクハラを爽やかな笑顔で回避。その言い回しだけなら少女の方が男らしくさえある。

「嗚呼！なんと嘆かわしい！！可憐な異国の乙女が自らを男と思い込んでいるとは！」

「え？」

唯言葉遣いの悪い子なんだと思っていたが、この変態親父が言うにはどうにもそれだけではないらしい。確かに彼女はあまりに無防備だ。恥じらいがない。計算高さもない。女らしさはその外見一つに留まっている。中身は完全に男だ。しかし、あの胸の膨らみを胸筋と信じて疑わないなんて、彼女の中での男女という概念がどうなっているのかと疑問に思う。

「どこからどう見ても俺様は男だろ」

「いやいやいや！大丈夫だよ君、おじさんが君に女の喜びを教えて君が女の子だってすぐに手取り足取り教えてあげるからね。さぁ、その辺の茂みなんか都合が良さそうだ。一緒に楽園の扉を開

けに行こうかお嬢さん？」
「いい加減にして下さいっ！！」
少女の肩を抱き寄せて、すたすたと森の中へ連れ込もうとする変態相手に、そう叫んだのはランスだった。何故か涙眼だ。
「ん？その顔は……おお！ランス！ランスじゃないか！北部に帰って来るなんて何年ぶりだ？母さんに似て美人になったな！いや、私に似てイケメンになったと言うべきか」
「……そうですか」
心底嫌そうに視線を逸らしてランスが答える。まさか、まさかとは思うがこの中年色男……二人並ぶと確かに顔立ちがよく似ている。
ユーカーへと視線をやれば、青い顔が更に青くなっている。地面に倒れ泡まで吹いている。あれは毒の所為なのかこの中年を見たショックなのかはわからない。
「そうだ親子の感動の再会ということでお前も加わるか？タロック女は稀少だからな。これを逃せば一生相手に出来ないかも知れないぞ？息子の息子と言う名の孫がどれだけ成長したかも観察させて貰いたい気分でもある」
「遠慮します。今はそんな状況では……」
「大体お前は騎士道を重んじる所為でろくに女性との付き合いもないのだろう？折角の私譲りの顔が勿体ない！大体そんなことでは将来結婚でもしたときに嫁に愛想尽かされるぞ？イケメンたる者、性技を極めてこそのイケメンと言うじゃないか？男は顔だけではない。技あってこその……」
「本当に、どうして貴方はそうなんですか！？大体また領地ほっぽり出して！こんな所に何しに来たんです！？」
「いや、この辺に暴れ回っている山賊がいるという噂とそのお頭

がロリ顔巨乳の少女だというじゃないか。これは行くしかないかなと。行ってイかせるしかないかと」
「明らかに後者が目的でしたよね……？」
「私がその子を攻略すれば、流血沙汰など起こさず物事の解決が出来るだろうしな。いや……この少女が新品なら無血とはいかないか。ははははは！」

朗らかに笑う中年色男。しかしその発言内容は最悪を既に越えている。

「さ、最低だ……最低だ、この人……」

ルクリースより酷い下ネタに、俺は目眩すら感じていた。ランスはそれに、これまで俺が耳にしたこともないような、深い悩みを宿した溜息を吐く。
下ネタを理解していない、パルシヴァルだけきょとんとした顔。イグニスは身の危険を感じてか、俺の背後に隠れている。トリシュは泡を吹き出したユーカーの傍で慌てふためいていた。
俺の呟きが耳に入ったのかようやく此方側にも気付いた中年色男。彼は背景の中から顔見知りを見つけ出す。

「むむ？そっちで死にかけているのはセレス君じゃあないか！いや、この間会ったばっかりだけど全然変わってないな」
「セレス言うな……」

そう言い残し、がくりと気を失ったユーカー。その肩を中年男はがくがく揺さぶる。

「待つんだセレス君！噂の女装姿を見せて貰うまで叔父さんは君を死なせないぞ！死ぬのは女装を見せてくれた後にしてくれ！女装

祭り優勝者の底力を見せてくれ！！かなり化けると噂は北部まで流れて居るんだ！ここで死んだら死に装束で女装させるけどいいかな？」

駄目だこの人。何処までも何処までも、最低だ。呆れて俺も溜息……しかしがくがく揺すられていたユーカーが……

「だからセレスって言うなっ！！」

突然怒鳴り返す。その顔色は血の気を取り戻していた。

「……あれ？」

「イズーっ！！！」

「良かった！セレスさん！！」

自分が助かったことに驚いているユーカーに、トリシュとパルシヴァルが安堵の息を漏らした。

「解毒数術か。タロックと長年戦ってる以上、その位は使えて当然かな」

イグニスはあの中年騎士が、あの一瞬で解毒を行ったのだと俺に言う。しかし数字は見えなかった。凄い早業だ。

「さて、叔父さんとしての仕事も終わったし……いや、待たせたねー君……ってしまった！逃げられたっ！！」

「そりゃ逃げるだろ。俺があいつでも逃げるわ余裕で」

復活早々ツッコミが忙しいユーカー。病み上がりなのに可哀想だな。

まぁ、それはどうでもいいとして、逃げたのは彼女だけではない。致命傷を逃れた山賊達も皆、この場から消えていた。

「何ということだ……貴重なうら若き黒髪乙女の穴が」

「だからどうしてそう言うことを平気で口にするんですか貴方はっ！もう止めて下さいっ！」

「それはそうと、アロンダイト卿。本当に何故こんな所にお出でになられたんですか？」

ランスの悲痛な声を庇うよう、意を決したイグニスが進み出る。そのイグニスを上から下まで舐め回すよう眺める中年色男。

「……この方は？」

「聖教会が神子、イグニス様です」

「……なるほど。混血の神子様か……顔は少女のようだが胸はない。残念ながらこれは男か。いやしかし混血ならやれる気が……むしろ胸がないのもまた別の味わいがあってあれだな」

ランスからの紹介に、小声で何やら物騒なことを言っている。ていうかこの人さっきから常にやることしか考えてない。この人なら脳味噌が頭部ではなく下半身にあると言われてもすぐに俺は信じるだろう。

「神子様相手にそんな不敬罪になるような事を言うのは止めて下さい！！」

「仕方ない。可愛い息子がそういうならば私も諦めよう」

「息子って言い方止めて下さい。貴方が言うと違う意味に聞こえます」

「それじゃあ何か？お前は私の可愛い娘だったりするのかい？それは大変だ！一度父さんが調べてやろう！さぁ、今すぐ服を脱ぎな

さい！せっかくだし今日は親子水入らずで風呂でも入ろう！孫の成長を見せてくれ！さぁっ！！」

突然の方向転換に俺は吹き出した。これは酷い。こんな父さん嫌だ。ランスが北部に行きたがらない理由はこの人の所為だったんだな。

「おい、叔父さん。さっきあんた野郎の裸に興味ねぇって言ってただろ。後いきなりそんなに溝埋めようとしてもトラウマになるだけだから止めてやれよ」

無理矢理服を脱がされようとしている従兄を庇うよう、ランスの前に出るユーカー。しかし中年色男は、自然の摂理を説くように不自然なことを口にする。

「確かに野郎の裸に興味はない。しかしこれは私の息子だ。私の分身、私の一部も同然。ならば十分観賞に堪えうる。そうは思わないか？」

「思わねぇっ！！あんたどんだけナルシスト入ってんだ！あとランスはランスだ！叔父さんとは全然違ぇよ！！」

「私の方が色男だと、つまりはそう言いたいんだな。まったく、息子の前でそう言うことを言うのはよしてくれ。あの偏狭馬鹿息子が怒り狂うのが目に見える」

「……一回目と耳医者に掛かった方良いと思うぜ」

「そうか。なるほど。叔父さんがランスばかりを構っていてセレス君は寂しいのか。よしよし。可愛いじゃないか。それじゃあ女装をしてくれると約束してくれたら叔父さんが君と遊んであげよう！」

遊ぶの響きが何か怖い。たぶんそれ、やっちゃいけない遊びだ。とんでもない火遊びだ。

「……嫌だ。昔より嫌悪感しか感じない」
「最近ずっとこんな感じだぜお前の親父さん。女遊びし過ぎて感覚麻痺したって言うか、穴があれば何でも同じだとか言い出したのが三年前くらいに遊びに行った時で。あれ以来顔が良ければ何でも良いって言い出して……見境無く食いまくってる」

涙目のランスの肩を優しく叩くユーカー。諦めろと首を振る。

「あんな調子だからエレインがどうなってるか心配なんだよ俺は」
（エレイン……？）

以前にも何度か聞いた名前だ。確かユーカーがランスに対して怒っていた時に口にした女性名。ランスの婚約者だとか何とかって……

（そうだ。確かアスタロットさんの妹だ！）

ユーカーの死んだ婚約者。その妹がランスの婚約者だと耳にした。彼女は今北部のアロンダイト領にいるのか。

「彼女のことは俺には関係ない」
「関係ないってお前なぁ……助けておいてそれはねぇだろ？あいつ完全お前に惚れてるし」

この様子だと北部に帰りたくない理由の一つにその婚約者のこともカウントされているようだ。

「そうだぞ。お前があまりに彼女に冷たいから、私が慰めてやっているんだからな」
「あんたが言うとどっちの意味かわからねぇよ。いくら何でも息

子の嫁に手ぇ出すなよ叔父さん」
「あははは！セレス君はおかしな事言うな。誰がそんなことを決めたんだい？」
「倫理的に考えて当然のことだろうが」
「それはあまりに無粋だ。飢えた獣の前に肉が落ちてくれば誰でも食べるだろう？それだけのことを、若さ故お前達は面倒臭く考えすぎだな」

多分、慰めたってあっちの意味だ。絶対そうだ。

「な、何を考えてるんですか！？彼女はまだ子供だ！見境がないにも程がありますっ！！」
「何を言うんだランス。男と女。二人の間に年齢なんて壁を作るのは無粋だよ。……というわけでそこの可愛らしいお坊ちゃん？おじさんがお菓子でも玩具でも買って上げるからちょっと一緒に街まで行こうか？」

パルシヴァルの肩を抱き寄せ何処かへ歩き出そうとする中年色男。すかさず男から弟分を助け出すユーカー。よくわからないでも何か嫌な悪寒はあったのか、パルシヴァルも涙目だ。

「パー坊まで毒牙にかけるな！！つか今男と女とか言ってただろ！言った傍から男口説くなっ！！」
「いやいやいやいやセレス君。男だ女だそれは些細なことだ。唯そこに愛があるか。ないか。全てはそれだけだ」
「確実にないよな愛。あんたこれまで何人の人間捨てて来たんだよ。やり逃げ記録が毎年更新されて国内記録本に載ってるって噂だぞ？これ以上何かするならもう身内だからって容赦しねぇ！おい神子、こいつ十字法でしょっぴけないか？」
「そうしたいのは山々なんですが、残念ながら北部の支援者が彼

である以上、あまり無下にも出来ません」

イグニスの言葉にユーカーは舌打ち。その怒りを宿した目で、必死にメモを取っているトリシュを睨み付ける。

「あとトリシュ」

「は、はい！」

「そこの変態に尊敬の眼差しを送るのは止めろ。調子に乗るから」

「なんだい？そこの憂鬱イケメン君。なるほど憂い顔も美しい。まるで若い頃の私のようだ。君には何か悩みがあるんだね。よし私で良ければ幾らでも聞こう。ふむふむ道ならぬ恋か。わかる。わかるぞその気持ち。よし！全面的に私は君をバックアップしよう！この恋愛達人のテクニック全てを君に伝授しよう！これで君の恋は成就したも同然だ！」

何故か意気投合したランス父とトリシュ。がしと手を合わせ、弟子と師匠と呼び合っている。

「そんなの俺が不幸になるだけだから止めてくれっ！！」

トリシュの思い人にされてしまったユーカーは毒を食らった時以上に青ざめた顔で絶叫するが、二人は聞く耳を持たない。

「なるほどそう言うことか。それなら授業料は女装公開プレイで手を打とう」

「お安いご用です！見られた方が燃え上がるとは言いますからね」

「俺をお前ら変態と一緒にすんじゃねぇっ！！あと女装に食い付きすぎだ！いい加減忘れろ！！あれ俺の黒歴史なんだから！」

「ああいう性格の子に限って褥に行くと性格が変わるものであってな……」

「勉強になります」
「もう嫌だ！ランス、やっぱ一緒に南部帰ろうぜ！俺もこっち来るんじゃなかったっ！！」
話を聞かない変態相手に、ユーカーも脱力後涙目。相方に弱音を吐いた。
その言葉に応えるよう、彼を庇うように立つランスの眼差しは刃物のような輝きを宿している。それでもそれが何故かとても綺麗だと俺には思えた。
「……ユーカーをからかうのは止めて下さい、それは俺の特権です」
「一言多いっ！！」
平然と酷いことを言うランス。そんな相方の後頭部を叩くユーカー。その流れに中年色男は吹き出した後、俺の方へと目を向けた。
「それで？お前が北部に来るほどのことだ。向こうでは余程のことがあったんだろう？それにあの少女は先程、カーネフェル王と言っていたね」
俺は周りの面々からすると、平凡的な顔立ちだし埋もれてしまったのか。好みではないのかで彼からは見ていないんだと思ったけれど、ちゃんと見えてはいたようだ。
ランスの父親、アロンダイト卿は俺の方へと近づいてくる。
「その様子だと、南部をタロックに落とされて……王を連れ命からがら逃げ出してきた。そんなところか？」
アロンダイト卿は俺をの目をじっと凝視。少しその視線が怖い。

これまでの怖さとはちょっと違う。僅かの怒りのようなものを俺はそこから感じ取った。

「なるほど……君が新たなカーネフェリアか」

そして彼は視線を俺からランスへ移し、初めて真顔で言葉を発する。

「ランス。お前はそれで良いのか？」

「俺は貴方とは違う。俺の主はアルドール様です。俺はこの方に仕えると決めたんだ。何があっても……俺はアルドール様を裏切らない」

「そうか……」

その言葉は俺のためと言うより、自分のため。そしてこの父親との確執から。そんな風に聞こえていた。

「いや、うちの馬鹿息子がすまないね。迷惑かけてはいないかい？」

「え？」

先程の視線は何処。突然朗らかな笑みで握手を求めるアロンダイト卿。

「いやしかし噂には聞いてはいたが……次の王がこんなに若くいらっしゃるとは思わなかったよ」

突然の態度の変わりように戸惑う俺の背中をイグニスが叩く。しっかりしろと言っているのか。

「は、初めましてアロンダイト卿。俺はアルドール……」

そこでうっかりトリオンフィと名乗りかけ、もうその名前を名乗ってはいけないのだと気付いた。嫌いだったはずの家名が、今となっては……名乗れないと言うことに、過去の全てを奪われたような気になって、少しだけ悲しかった。

「……アルドール＝D（ダルト）＝カーネフェリアです」

「これは数々の無礼申し訳ありません。私はヴァンウィック＝アロンダイト。そこのランスの父親です。本人は認めたくないでしょうがね」

その発言を受けたランスは肯定の沈黙を送る。この親子間も決して良好と呼べる間柄ではないらしい。

俺とトリオンフィの家もそうだったし。ギメルとイグニスの家だってシングルマザーで大変だったし、ユーカーは婚約者を殺されたことで実家と縁を切っているようなもの。それにランスも加わって……本当何処の家も大変なんだなとしみじみ思う。

このヴァンウィックという人はランスには好意的に見えなくもないが、ランスの方は彼を嫌悪している。見境のない軽さ……それは十分嫌う理由にはなるだろう。それでもこの性格だけが問題とはどうも思えない。ランスは彼と視線を合わせない。それでも其方を向くランスは本当に……冷たい目で彼を見るのだ。ランスは湖の精が母親代わりだと以前言っていたし、その辺と何か関係するのだろうか？

「近場の街までご案内しましょう。今日はそちらで休まれては？」

どうするべきか。イグニスに視線で訴えれば、とりあえず行こうとのこと。

「彼は巫山戯てはいるけど、実力は確かだよ。山賊達が帰って行ったのを見るとあの少女以外は彼を知っていたんだと思う」

ここでヴァンウィックから離れればまた山賊達は出てくるだろう。イグニスはそう言った。

「ま、変態でも虫除けくらいにはなってくれるなら使うべきだよね」

なんとも素敵な言葉を本当良い笑顔で言うイグニス。そんなところもやっぱり好きだ。イグニスはやっぱりこうじゃないと。

彼の馬に続いて俺達も馬を飛ばす。平地を抜け森を抜け……そこそこ賑やかな街に出る。

「このトリフォリウムの街は、北部でも発展している場所ですね。うちの領地より栄えているかもしれないなぁ」

アロンダイト卿ヴァンウィックは自嘲も感じさせない爽やかな笑いを浮かべるが、ランスは領地をそんな風に語る父親が許せないようだった。

「当然ですよ。領主がいつも領地にいないんですから」

「いてもろくでもねぇことしかしない阿呆もどっかにいるけどな。某南部に」

「ユーカー、ちょっといいか？今日は俺の愚痴を聞いてくれ」

「今日もの間違いじゃね？……まぁ聞くけどよ。あそこの店なんかどうだ？美味そうな料理の匂いがするし」

「そうだな、そうしよう。アルドール様、イグニス様、少しばかりお暇を頂いてもよろしいですか？」

「パー坊、ついでにトリシュ、あいつらの護衛頼めるか？」
「貴女は酷い女だ。私の気持ちを知っていてこんな試練を与えるんですか！？」
「俺は酷いが貴女でも女でもねぇよ。つかお前はお前の師匠と酒でも飲んで来ればいいだろ。色々悪巧みがあったんじゃねぇのか？」
「行ってきますね私のイズー！そうか貴女は私に罠を仕掛けられたがっていたなんて！！貴女の気持ちに気付かない私をどうか許してくださいね！」
「あっそうか。んじゃ気付いて欲しいな。お前いい加減にしろ。お前いい加減にしろ。いい加減いしないなら死ね」
「刺々しい言葉から、その真意を探れと言うことですね。イズーは本当に照れ屋だ……しかしそんなところも愛しています！」

もう相手にしていられねぇと、ユーカーも疲れ顔。ランスの腕を引いてめぼしい店へと向かいかけ……思い出したように此方を振り返る。だけど別に俺に声をかけるためじゃない。声をかけられたのはパルシヴァル。……うん、だと思った。

「パー坊、やっぱあいつと一緒だと悪影響だからお前もこっち来い。向こうは危険だ」

無邪気で無垢な少年に、アロンダイト卿ヴァンウィックは少々刺激が強すぎる。関わらせてはいけないと、ユーカーが彼を手招き。しかしそれを拒むのは本人ではなく、何故かイグニス。

「駄目ですよ。コートカードが二枚もアルドールから離れるなんて危険です」
「だからどうしてこんな子供まで危ない目に遭わせなきゃなんねぇんだよ。ほら、こっち来いパルシヴァル」
「……」

俺とユーカーを交互に見比べて……暫く考え込むパルシヴァル。決め手となったのはユーカーの背後に控えるランスだったのかもしれない。

「僕は王様の護衛やります。僕も騎士ですから」

お勤め頑張りますと微笑む様子は心が洗われる。彼は本当に癒しだ。今俺の周りはなんだか殺伐としているし……それにこの無邪気さは、昔のギメルを彷彿させる。

（ギメル……）

彼女は今どこにいるんだろう。そもそも俺の知っていた彼女とは何者なんだろう？道化師は彼女ではない。それなら道化師は誰？ギメルは何処？何処にいる？教会で眠っているとイグニスは言っていたけれど、俺はギメルにまだ一度も会っていない。彼女はどんな風に成長したのか。それさえ俺は正しく知らない。

そして俺がギメルのことで悩む時、一緒に浮かび上がるのがイグニス。

イグニスはイグニスだ。昔より俺に対する対応は柔らかくなったけど言葉のきつさや態度や雰囲気、それはずっと変わらない。だけど俺の親友は少女ではなく少年だったはずだ。いや確かめた訳じゃないけど、その位で揺らぐ間柄だとは思わないけれど。

イグニスは俺に嘘を吐いていると言った。そして本当を見つけて欲しいとも言った。

俺の中でイグニスとギメルが合わさり、答えが見えなくなる。そもそもイグニスは……別れ際あんなに俺を憎んでいたのに、どうしていきなり俺を頼るようになったのか。今のイグニスから俺に対する確かな友情を感じてはいる、それが嘘だとは思わない。

（だけど……）

立場がある癖に、俺なんかのために……命を投げ出すような素振りまで見せる。昔のイグニスはギメルのためならそうしただろうが、俺のためにそんなことはしなかったはず。そもそもイグニスが世界平和を語る神子になるなんて思いもしなかったのだ。昔は本当に狭い世界を生きていた彼が……いや、彼女なのか？こんがらがって来た。

その絡んだ思考の糸を解く一つの答えがある。

今俺の目の前にいるイグニスは女の子だ。ギメルは女の子だとイグニスが断言した。ギメルは正の数術を使える。イグニスはそれを扱えるのを隠して、零の数術ばかりを使ってきた。必死にイグニスであることを演じていた。

（……イグニスが、ギメルなのか？）

そう考えれば全てがわかる。俺のために必死になってくれるのも、多くを救おうと考えるのは……心優しい彼女ならあり得ること。

だけどそう考えると……俺の親友は。イグニスは何処かへ消えてしまう。そう思うと、怖いんだ。イグニスが俺を許してくれたことも、俺を大切な友人だと認めてくれたことも……全てがなかったことになる。本当のイグニスは俺を今も憎んでいるのだと、想像するだけでも背筋が震える。

「しかしセレス君、それはあまりに色気のない選択だ。もう少しムーディな店に叔父さんが連れて行ってあげようか？」

「いや、あんたの愚痴するのになんであんたと一緒に行動しないといけないんだよ？」

「なるほど。色気より食い気か。その不等号を覆してみたくなる

……しかしだなランス。お前もお前だ。少しは空気を読んで艶っぽい店にでも連れて行ってこその親友だろうに」
「なぁ叔父さん、なんで俺とこいつがそんな艶っぽい空気に包まれないといけないんだか全然わかんねぇんだけど」
「あはは、いやそっちの艶もいいと思うけれどね。叔父さんが言いたいのはもっとピンクな店とかむちむちお色気うっふんなお姉さんが出迎えてくれるような店に共に乗り込めという意味だったんだよ」
「行こうぜランス。これ以上構ってるとなんか変な病気移されそうだ」
「ああ。そうしよう」

セクハラ親父と化したアロンダイト卿ヴァンウィックに、従兄弟コンビはさっさと背を向け定食屋へと消えていく。確かに色気のいの字もないが、此方に漂ってくる料理の香りは堪らない。

「おや、アルドール様も腹が空かれましたか？なんなら良い店紹介しますよ」
「うわっ…！」

アロンダイト卿に、肩に腕を回されて……今度は俺が何処かへ連れて行かれそうになる。

「た、助けて！イグニスっ！」
「は？」

イグニスに手を伸ばす俺に、彼女は俺を心底見下す笑みを送り付ける。

「君何様のつもり？君はさ、自分が何処にでもいる平凡なカーネ

フェル人だって自覚ないの？ちょっとモテたからって調子乗ってない？君は唯カーネフェリーの男が少ないからちょっとカーネフェリーのお姉さん達にモテただけなんだからね？その辺勘違いしてない？何？君何様？王様？そっかー王様かぁ」

「い、イグニス？な、何か怒ってる？」

「別に。何で僕が君なんかのためにわざわざ時間裂いて怒ってあげないといけないの？理解に苦しむね」

「そ、それもそうだな。ごめん」

「まったく。アロンダイト卿が君みたいな平均顔に興味持つわけないじゃいか。身の程ってのを弁えて欲しいね」

返す言葉がない。そうだよな。イグニスは混血だからそれだけで美形設定付いてるようなもんだし実際可愛い。ランスはランスで美青年って文字が服来て歩いてるようなもんだし、ユーカーもそんなランスの親戚なんだから顔は悪くないんだ、顔は。目とか性格の所為でそういう風にはならないだけで。

他にもそうだ。トリシュは都のお姉さん達にランスと二分する人気があるんだから、顔は悪くないんだ彼も。パルシヴァルは無邪気なところが可愛い美少年だ。あれ？何時の間にこんなことなったんだ俺の周り。

ルクリースやフローリプがいた頃が懐かしい。カーネフェリーの若い男って稀少だったんじゃないのか？都周辺に密集してただけ？

「ははは、そんなに身構えなくとも君主に無礼は致しませんよ。今日はアルドール様をもてなそうかと思いまして」

「あ、そうだったんですか」

「アルドール様は飲めますか？いや、この辺に若くて良い娘のいる酒場がありまして。アルドール様もここらで一発男を磨きに行きましょう。何私の言うとおりに口説けば最後までやらせてくれますよ」

「え、えええええ！？お、俺そう言うのはちょっと……す、好きな子いますし。今喪中ですし」
「嫌なことを忘れるのも、好きな女に手を出せない憂さ晴らしをするにも酒と女は良いですよ？さ、今日は私の奢りです！それに腹が減った時はもっと腹が減るようなことをしてその限界まで行った時に美味い店に食べに行くのが最高ですよアルドール様」
「行ってらっしゃい。勝手にすれば？でもまぁ国王にもなって死因性病とか情けないこと止めてよね」
「え？ご、護衛はどうするんですか？」

イグニスが俺達に手を振ると、パルシヴァルが戸惑いの声を上げた。しかしアロンダイト卿ヴァンウィックは足を止めない。そして俺だけではなくもう片方の腕でトリシュの肩を引っつかむ。

「弟子ー！君もおいでー！秘伝の技を伝授してあげよう」

既に酔っぱらっているようなテンションだ。大丈夫なのかこの人……

「しかし師匠。私は……いえ僕はイズーという運命の人がいる以上他の人と遊ぶなんて出来ません。僕は生涯イズー一筋です」

これで相手があのユーカーじゃなければいい話なのに。何を血迷って女装ユーカーなんかに惚れたんだろうなこの人。

「馬鹿者が！技を磨かずに本命を満足させられると思うなよ！真実の愛のために、偽りの愛を重ねる！これぞ男の生き様というものだ。解るか？」
「解りません」
「ならば解るような男になれ。その頃にはあれも君にぞっこんだ

ろう」
「は、はい！頑張ります師匠っ！」
「えええええええええええええええええええええええ！？」
俺の驚愕をものともせずに、この師匠と弟子はろくでもない計画を練っている。
いい話が数秒で何か悪い男育成計画に塗り替えられた。コートカードって……戦闘運高くてもリアルラックは本当酷いんだな。幸福値を使わなければ日常さえ有利に立ち回れないのか……。ユーカーのこれからがちょっと心配になるが、俺が心配するのは余計なお世話なのかもしれない。
「ああそうだ。愛のためには何をやっても良い！なぜならそれが愛だからだ。愛とは全ての元素をも凌駕する、人が持つ唯一絶対の力。故に愛の前に全ての罪は許される。法や常識など愛の前には塵と化す！愛こそ力！愛こそ正義！愛こそ真理！」
「そうだったのか……確かに言われてみればそんな気がしてきました！」
「ちょ、ちょっと待ってトリシュ！それは不味い！駄目だって！いやあのもし仮に、うん……トリシュがユーカーっていうかセレスちゃん好きでも好きだからこそやっちゃいけないことってあるよね？ていうかあって！っていうかあるから絶対！」
「……幼い王はまだ愛を知らないのか」
「アルドール様……お可哀想に」
「何で俺哀れまれてるんですか！？」
「好みのタイプを教えていただければ、使用済みで良ければ横流ししようか？」
「あ、貴方は人を何だと思ってるんですか！？それは俺以前にその人に失礼です！」

「……ふ、ははははは！面白い！いや、君は面白いな！！まさかあの男と同じ事を言うなんて、あははははは！いや、いや！いいね君！気に入ったよ実に！」

突然俺の背中を叩いてランスの父ちゃんが笑い出す。

「え？」

「桃色なお店は止めだ！後ろの二人も一緒に来ると良い。タダ酒タダ飯ほど美味い物はないと教えてあげよう！」

俺がよく分かっていない内に彼は今日の計画を変えたらしい。付いてこい＝護衛続行との解釈で、初仕事だとパルシヴァルは舞い上がる。

「はい！護衛頑張ります！」

「そこまで言ったからには高い物食べさせてくれるんですよねアロンダイト卿？」

しゅ、守銭奴来た！イグニス……神子になってまでまだそこ直らないのか？ってやっぱりそれじゃあ彼女はイグニス？依然としてそれは不明だが、イグニスが一緒にいてくれると言うだけで心強い。このランスじゃない方のアロンダイト卿はちょっと何考えているか解らないから。

＊

連れて行かれた店は、確かにそこまでいかがわしくはない。と言うか屋敷で食べていた料理よりも豪華な物が並ぶ高級料理店。メニューの桁の多さに俺は面食らったがイグニスは躊躇せずに人の金だと思って豪遊している。タッパー持ってくれれば良かったとか数術で

非常食化出来ないものかとか考えてそうな横顔が、イグニスらしくて少し笑った。
店のジャンルが変わったことで今日は教えることはないと言われたトリシュは「まずは外堀を埋めるべし」との助言を受け、ユーカーに懐いているパルシヴァルの面倒を見ている。注文を取ってあげたり料理を切り分けたりマナーを教えてやったりと下心があるとはいえ面倒見は悪くは無さそうだ。でも外堀の方向性が違う。パルシヴァル落としてもユーカーは落とせないと思う。まずランスを何とかしないと駄目じゃないか？

「さて、それでアルドール君」

人前で様々呼んでると面倒臭いことになるからねという前置きの後、ヴァンウィックがそう言った。

「君は先代のことをどれくらい知っているのかな？」
「いえ……全然。ユーカーとランスにとって大事な人なんだなってことくらいしか」

「アルトは……彼は私の友人でね、名前はアルトリウス＝C＝カーネフェリア。気さくで良い奴だったな。時代が時代なら賢君と呼ばれたのかも知れない。生まれた時代が悪かった。だから彼は道化だった。皮肉なことだが、道化王という彼の二つ名の方が有名かも知れない」
「道化王？」
「彼は人を笑わせることが好きでね、よく城でも馬鹿なことをやっていたよ。逆を言えばタロック攻めてくるまで何もやることが無くて、何もさせて貰えない役職だった。だから暇すぎてそういう場所に落ち着いたんだろう」

内政に関わらせて貰えない。外の敵とだけ渡り合え。それはシャトランジアでのイグニスの立場に似ている。イグニスはその仕事を上手くこなして、最終的にシャトランジアを我が者として動かせるように策を練っている。シャトランジアを動かせなければ、この戦争はタロックが勝つ。カーネフェルは滅んでしまう。そうなればタロックはシャトランジアにも攻めてくる。それがわからないはずないのに、国王はイグニスと対立しているという。

しかし先代カーネフェル王はイグニスのような人ではなかった。国でのお飾りの地位に甘んじて、その空いた時間でユーカーやランスの父親代わりを務めたのだ。あの正反対の二人から好かれるような人なのだから、余程の人格者だったのだろう。それを隠しているからこその、道化王。ヴァンウィックの言葉の端々からも、彼への親しみが感じられる。初めてこの中年色男が人間らしい顔をした。

「アルトリウス王の名を知るのは彼の傍にいる者か、彼を陥れようとしている者だけだろう」

俺も名前を聞いたのは初めてだ。平和呆けのシャトランジア暮らしをしていた俺には、海の向こうの王の情報など殆ど入らなかった。今生きている人を語る歴史書など無い。畏れ多くて普段は口にもしない。だから記憶に薄い。

しかしそれはタロック王も同じはず。だが悲しいことに人にその名が広まるのは良い王ではなく悪い王。悪名高さがタロックの須臾王の名を内外に広めた。ここでカーネフェル王がタロック王を討つとか、大勝利を遂げたとかならまだ話は別だ。英雄として語り継がれる。しかし小競り合いのような戦。それもどんどん足場を失っていくような、勝ちの見えない戦ばかり。

「……貴方はそのどちらなんですか？アロンダイト卿ヴァンウィック様？」

イグニスは冷たい笑みを湛えながら、グラスの液体を転がしている。グラスの中身が店内の照明、光と影に照らされて、異なる色合いを映す。

「……どちらも、でしょうな」

イグニスの質問に中年騎士は苦笑した。

「先代様よりむしろ貴方の話の方がシャトランジア上層部では有名でしたね。彼は波風立てない男でしたが、貴方は波瀾万丈すぎる人生を送っていらっしゃるようで」

「これが神子様か。いや、怖い怖い。何処まで何を知られているのやら」

「流石に貴方がこれまで相手にした人の名前を片っ端からなんて情報には興味がないので知りませんが、調べようと思えば調べられます。その程度には僕は何でも知っていますよ。先読みですから」

「はっはっは！それは怖い」

「ランス様がああなったのは大体貴方の所為みたいなものですからね。彼には僕も同情しますよ」

「いや、私のふしだらな生活があれをあそこまで立派な騎士にさせたのならば、親としては本懐でしょう」

「……え？」

イグニスとヴァンウィックの会話に俺は入っていけない。それでもそこからなにか拾える物はないかと耳を澄ませてはいた。

父親の女性関係のことでランスが反面教師的に成長した。そういう話？大まかにはそういうことなんだと思うけど、どうにも裏がありそうだ。イグニスが含みのあるような声のトーンで話している。俺に何か気付けと訴えるよう……

じっと二人を見つめる俺に、ヴァンウィックは軽く息を吐いて苦笑した。

「アルドール君、君はアルトによく似ている。顔はそこまでではないが、雰囲気と性格がとても似ている。だからこそ一つ忠告させて頂きたい」

「忠告、ですか？」

「ああ。私は私がしたことについて反省も後悔もしていないがね、それでも大事な友の心を傷付け裏切ったという自覚はある。その点だけは今も後悔しているよ。だから君とあの子が我々と同じ道を辿ることがないように。それを願わずにはいられない」

何をしたんだこの人は。国王相手に裏切った？傷付けた？それでも友達だったんだろう？それを俺とイグニスに置き換えてみたが、よくわからない。裏切る？傷付ける？……知らず知らずにそういうことはあるかもしれない。だけど、ここまで強く認識する裏切りとは一体どんなものなのか。俺にはまだわからない。

「まぁ、大丈夫だとは思うのだが。あれは私とは違う。そうそう馬鹿な真似はしないだろう。あれは愛よりも美しい生き方があるのだと思っているからね。あいつがそう思うのならば、いっそそのままずっとそう思い通して欲しくもあり……父親としてはそれさえどうでも良くなるような相手に出会って欲しいとも思う。親父心は複雑な物だなぁ……」

その言葉の響きから、ランスへの愛情は感じる。嫌われてはいるけれど、嫌ってはいないのだ。唯この男の人は、無数の顔を持つ。父親としての顔、男としての顔。そして騎士としての顔。その生き方の中の一つを選んだ結果が今なのだろう。

「どうかあの馬鹿息子のことは決して友人だと思わぬ事だ。常に家来と家臣と……なんなら道具か何かと思ってくれて良い。それがあの馬鹿息子のためにもなる」
「……どうして、ですか？」

俺はランスを……まだ友達とは思えていない。埋めようのない距離を感じる。だけど道具だなんて思えない。いつかは友達になれたらいいなとは思っていただけに、その言葉は衝撃だった。

「それはあいつから敬いの心を奪う。王が人に見えたらお終いだ。王は王でなければならない」
「でも、ユーカーは……」
「あの二人は似てないようで似ているが、似ているようで似ていない」

そんな謎々みたいな回し文句で言われても、余計俺が悩むだけ。そのはずなのに妙に納得してしまう。

「セレス君はあれで良いんだ。うちの馬鹿息子と違って捻くれてはいるがまぁ中身は分かり易く素直な子だ。ランスの馬鹿は素直に見えて頑固でどうしようもない意地っ張りだ。それが悪い方向に出ると何時までも悪いままになる」

あの二人の騎士の外見と本質は正反対だと男は言った。唯共通点もある分似たもの同士にも見える。例えばそれはネガティブに走るのに、妙な諦めの悪さだろうか。

「王が相手ならあれは折れるが、セレス君相手だと日頃はどうでもいいくらい折れる癖に、大きな揉め事では絶対に自分からは折れ

ない。王への敬いを無くし親しみだけ残せばそれと同じ事が起きてしまう」

ランスにとってのユーカーと同じものになってはならない。俺は今、そう忠告されている。

王になれとはイグニスに何度も言われた。でも王であれ、王でいろと言われるのは初めてだ。そう言われて俺は、もう王になったのかとしみじみ思う。

一日前の出来事が、今は夢のように遠い。都を無くした俺が王だって……本当に笑い話。

「あれに親しまれる王になってくれることは大いに結構、私も君を期待している。それでも君は君が王であることを忘れずにいて欲しい。あれを従えるつもりなら、上下関係だけははっきり明確に頭の中に入れておくことだ。でなければ……ろくなことにはならない」

数術騎士のランスの父親だ。彼に数術が扱えるのならその父親ヴァンウィックも数術が使えてもおかしくはない。しかし……イグニスのような予言の力はないはずだ。それでも今の彼の言葉は……妙な確信を宿していた。

「目を見れば解る。君はとても優しい少年だ。だからこんなことを頼んでも君には辛いだけだと思う。……しかし私もあれの父親だ。例え相手が王でも出会ったばかりの少年と我が子ならどちらが可愛いかは明白だ」

だからこれはランスのためのお願いなんだと彼が笑った。

「必要以上あれに優しくしないで欲しい。甘やかさないで欲しい。あれを哀れむ日が来るのなら、氷のように冷たい瞳で突き放して貰

いたい」

とんでもないそのお願いに、俺は返す言葉も失った。

愛しの我が子のためにと紡がれた言葉が、こんな酷い言葉で良いのだろうか？この男は本当に我が子をランスを愛しているのか？それがまたわからなくなる。その目はとても優しいのに、その言葉に愛は感じない。

「あれは鞭の味しか知らない子供なんだ。飴の味を覚えれば、あっという間に駄目な人間になる。厳しさと逆境の中でしか、あいつはあんな風に生きられない男だ。平穏があれには敵。不幸せでなければ幸せを感じられない哀れな子供なんだろうな」

幸せが堕落へ繋がる。堕落は今のランスにとっては耐え難い屈辱。騎士としての幸せとランス自身の幸せの在処。それが離れていること。違う場所にあること、それを彼は認められていないのだろう。

ランスが何を望むのか、俺には解らない。カードになったその願いだって、騎士としての願い。人としての彼自身の胸の内が明かされることはない。少なくとも俺に吐露されることはない。

それは彼が俺を王と仰いで、愚痴を離せるような友人として見ていないから。それはユーカーの役目だ。俺だってイグニスにしか話さないようなことがある。だからそんな俺がランスの真意を知りたいなんて探りを入れるのはとても失礼なことだと思う。

それならそんな話が出来るくらい親しくなればいい。言うのは簡単。だけど彼に近づくには俺から？彼から？どちらから歩み寄ればいいのかと、考えたことがあった。けれど彼は俺に必要以上に近づかないし、俺が近づいても逃げられる。一定の距離を保ったまま、俺と彼との間の壁は隔たったまま。その向こうで彼が呟く言葉を俺が聞くことはない。唯彼が傷ついたような顔をするのが、見えている……見ているだけ。

口々に言う。誰もが口を揃えて。彼は立派な騎士様だ。ストイックに生きることで、戒めを心に持つことで、立派な騎士を演じている。それが自分なのだと同一化を図っている。

だけどその言葉が繰り返される度、彼の鎖は重くなる。理想像を押しつけられて、自分との乖離に気付いてもそこから逃げ出すことは許されず、それを演じ続けなければならない。

ランスも父親同様いくつかの顔を持つ。騎士として、息子として、それから従兄として。ヴァンウィックは一つを選んだ。男としての自分を選んだ。そのために父親としての自分、騎士としての自分を葬った。その際引き起こした行動が、幼いランスを傷付けることに繋がった。

ランスはだから父親のように利己的な自分を選ばずに、騎士としての自分を選んだ。そして騎士という生き物として生きている。でも騎士って言う生き物は、たぶん人じゃない。そういう生き方は彼の心を磨り減らす。その心の安らぐ場所が、アルトリウス王でありユーカーだった。その王が失われた以上、今はユーカーにもたれ掛かり。ユーカー一人でそれを支えきれるのか？支えきれずに一緒に彼も、何処かへ沈んでしまいやしないか？二人が少し、心配になる。心配したところで俺に出来ることなんて限られているんだろうけど。

「……それでも俺は、二人が心配です。何も知らないで友達だなんて烏滸がましいこと言えないけど……大切な、仲間だとは思っていますから。向こうにどう思われてようと、俺はそう思ってます。俺が勝手に」

「……そうですか」

俺の答えにアロンダイト卿ヴァンウィックは小さく笑い、椅子から腰を上げた。宿の手配をしてくると口にして、彼は支払いを済ませ店を出て行った。

緊張していたんだろうか。その糸が途切れたように、俺は深く溜息を吐く。そんな情けない様子の俺に、イグニスが助言をくれる。

「アルドール。それなら君はセレスタイン卿の強化を図る。そのために彼に重心を置いて支えてあげると良いよ」

「え……ユーカーを？」

「彼が強くなれば、その分ランス様も支えられる。君が直接ランス様にどうこうってのは余計話をややこしくする。間接的支援が一番だと僕は思うけど」

「ゆ、ユーカーを支えるかぁ……地味に難しそうな仕事だな」

「いや、それは簡単でしょ。彼に対しての対応は今まで通りがベストだよ」

「ランスってどうしてそんなに素出さないんだろう？ランスが自分を出すのってユーカーの前だけだよな？」

「信用されてないんじゃないの君」

「ええ！？」

「まぁ冗談だけど、1割くらいは」

「9割本当なんだ」

「そりゃそうだよ、君が彼をゲットしたのは前王の七光り補正みたいなもんだよ。それがなかったら君なんかゴミだよ糸くずだよ生ゴミだよ粗大ゴミだよ」

俺自身にランスがこれっぽっちも興味がないとイグニスは言う。そこまではっきりとそう言われると流石にちょっと俺も凹む。

「僕が思うに彼はそこまで自分に興味がないんだよ。父親への反発心と、王への忠誠と、それからセレスタイン卿との友情くらいしか彼の中にはない。立派な騎士をやってるのが前二つの理由から。セレスタイン卿の前では騎士ぶる理由がないことが多いからちらほ

ら素が出る。それだけのことでしょ？」
「うーん……だからってどうしてそこまでユーカーに思い入れてるんだろうランスは。ユーカーがべったりな理由はまぁ何となく解るんだけど」
「どんな感じ？」
「俺の自慢の兄ちゃん格好いいだろデレデレ。たぶんこんなの」
「君にしてはいい洞察力だね。限りなく真理だ」

イグニスが俺の答えに頷いた。否定されてもイグニスだなぁと思うけど、たまに褒められるとそれはそれで嬉しい。俺は本当イグニスなら何でも良いんだな。でも彼女の正体もはっきりしていないというのに、何でこんなに好きなんだか。自分で自分が時々わからなくなる。

「セレスタイン卿は自分へのコンプレックスが深いからねぇ。理想なんだろ、ランス様がさ。ランス様は……外見は真純血として完璧だし、一部残念な面もあるけど基本的にはパーフェクトだ」

イグニスは割りとランスのことはさらっと褒める。純血だとか貴族様だとかイグニスが嫌いそうな属性はあるのに。それを持ってしてもケチの付けようがない。それに感心、負けを認める意味で褒めているのか？

「そんな彼がどうしてセレスタイン卿なんかに肩入れしてるのか、それは僕も理解できないよ。それは君や後ろの二人の方がまだ理解してるんじゃないの？」
「ユーカーの良いところか……」

いきなり言われても、ぱっと思い浮かばない。つい彼の行動は悪いことの方がすぐに思い出せるから。よく殴られたりするよな俺。

次に思い出すのは彼の弱さだ。シャラット領では彼はボロボロだった。そう言うところに人間臭さというか親しみを感じて少し好きになったのは確かだけど。

（ああ！）

ここまで来てやっと思い出す。

「たぶん、行動だ」

「行動？」

「だってユーカーは俺を助ける義理も理由もないだろ？本人も口ではそう言ってる。だけど俺を何度も助けてくれたよ」

パルシヴァルがユーカーに憧れたのも彼に助けられたから。トリシュが彼に本格的に傾いたのは、ランスの凶刃から彼を庇った瞬間からだ。

「ユーカーって一番とか守りたい者を選んでるのに、結構すぐ他人のために命張るっていうか……見捨てられないって言うか、そんな感じで助けてくれるよな」

「単に馬鹿なんじゃないの彼」

そしていつになく辛辣なイグニス。世界の均衡警備お疲れ様です。

「でもずっと傍でそういうところ見てくれれば、嫌いになんかなれないだろうし……ランスとはちょっと違うけど、ユーカーもユーカーで立派な騎士に映るんじゃないかな」

「……つまりランス様にとってはあのセレスタイン卿なんかがよりにもよって理想の騎士ってこと？」

「じゃないかな。だから王の傍に配置された彼に怒ったり嫉妬し

たり……それってランスはユーカーみたいになりたかったって意味もあるんじゃないかって……」

「まぁ……それも勿論あるだろうけどね。ランス様は一筋縄じゃいかないよ。本人自身自分がどんな爆弾抱えてるか解らない時限爆弾みたいなもんなんだから。セレスタイン卿はその通訳係みたいなものだね」

「爆弾？ランスが？」

「普段怒らない奴がキレるとどんな風になるかわからないって言うだろ？彼はあれだよ」

感情的なユーカーと、穏やかを装うランス。その対比に俺は自分とイグニスの関係を思い出す。

そうだ最初は、抜け殻だったような俺が……イグニスの理不尽な怒りとか嫉妬とか苛立ちとか、そういう負の感情に惹かれたんだ。それがとても人間らしいなって憧れて。傍にいると自分も人間になれるような気がしたんだ。

（そっかランスは……）

ランスは昔の俺と同じだ。だからユーカーが好きなんだ。

ランスは人間じゃない。人形なんだ。

6：Qualis pater talis filius.（後書き）

山賊レーヴェと、北部の領主ランスの父ちゃん登場。もう少し進めばユリスディカ（ジャンヌ）とマリアージュ（エレイン）出せそう。女分が足りなくて枯渇しそう。

0章は女の子沢山だったので、野郎ばっかりじゃ潤いがない。ヒロインまだかー！

え？イグニス？レーヴェ？身体は女の子ですが精神が野郎みたいなものなんで華がありません。

ショタ分女装分と変態分と補充しても、やっぱり女の子もいないと小説書いてる気がしない。野郎だけの世界なんてファンタジーでもクソ食らえです。

本編は百合分が枯渇してきた。戦争メインだからか、野郎が増えてきたな。

戦う女の子も好きですがインフレしすぎると良くないからな……

7：Fides, ut anima, unde abiit, eo nu

※女装注意回再び。
ヒロインがなかなか出てこないからこんなことに……

7：Fides, ut anima, unde abiit, eo nu

昔からそうだ。父はそうだ。

美しい女と見ればすぐに口説いて、そうでない女はスルーする。嫌悪し暫く会っていない内に男まで守備範囲を広げていたとは思わなかったけれど、あいつが屑男だということには違いない。

いつも遊び歩いて女を作っては捨てて。母さんをいつも泣かせていた。妻なんて肩書きだけで、母さんは捨てられた女も同然だった。俺がいるからたまに帰って来るだけの家。

母さんは段々あの男に似ていく俺に愛憎を持つ。俺が母さんに優しくしようと精一杯良い子を演じても、あの男と似た顔が彼女の心をえぐり取る。同じ顔で別のことをする俺が解らないのだと言う。同じ顔なのに自分を口説かないお前はおかしいのだと彼女は言う。

そんなことを幼い子供が言われても解らない。唯、俺のすることやることは全て母さんを怒らせる。だから母さんが俺を、嫌いなんだと思うようになった。

だから時々帰ってくる父を真似て騎士の真似事。剣を習って、馬術を習って……そうしているときだけ母さんは遠くから俺を見てくれている。だけど褒めてはくれない。

母さんは俺の中にあるあの男の影を見ている。あるのはそれへの愛憎だけで、俺自身への関心がない。

彼女は俺が父のようになる日を待っているのだろうか？いたのだろうか？今となってはわからない。

それでも俺はあんな最低な男になりたくなかったから、その思いが俺を父から遠ざけていく。年々面影は似ていくのに、内面は別物になる。その乖離が許せなかったのか、耐えられなかったのか母さんは身を投げた。彼女を湖へと鎮めたのは、あの男への愛憎と……俺が期待に応えられなかったそのことからの失望だろう。

だけど仮にだ。俺が母さんの期待通りの男になったとして……俺がずっと母さんを愛したら、それはそれで裏切りなのだろう。
俺が父のように母さんを捨ててこそ、俺はあの男の複製品として完成する。裏切られて初めて、母さんは俺を認めるだろう。そして繰り返し。一度の逢瀬のためだけに何度も何度もあの男の模造品を作ろうとするのだろう。そんなことを考える彼女は狂っている。狂うほど、あんな男を愛しているのだ。
俺の母さんは母親じゃない。母になってもまだ娘でいる。女として生きているから、母として俺を愛せない。子が出来てからも男として生きる、身勝手な男を愛する女。
そこに俺は本当に必要だったのか。わからなくなる。俺は唯、あの男を連れ戻すための道具でしかなかったのか。

（俺は……）

本当に、誰かから……必要とされていたんだろうか？それが怪しい。とても怪しい。だから俺は彼を求めるのだ。
今朝だって昨日のことで揉めていたのに。危なっかしくてつい庇ったら、そのすぐ後に庇われた。守るつもりで守られている。俺に頼っているのはあいつに見えてあいつじゃない。もたれ掛かっているのは俺の方。
酔っても酔えない。嫌なことが忘れられない。そんな俺に付き合って、酒を頼んでくれる彼。面倒見が良いとよく俺の方が言われるが、それは実際彼の方だ。愚痴なんか聞いても楽しくなんてないだろうに……彼は俺から離れない。
俺の中にそれに足る理由なんか在るのかどうかわからないけど、彼は……俺から離れない。
誰が俺を、見捨てても。喧嘩をしてもまたここに戻ってくる。

＊

「どうしてあの男はああなんだ……」

血が繋がっていること自体が許せないと、恨み言を言うランス。相方のそういう姿は珍し部類に入るとユーカーは思った。

「今日は気が済むまで喋れよ。付き合ってやっから」

同僚の肩を叩きつつ、俺は空いたグラスに新たに注いでやる。元々飲んでいたのは、そこまでアルコールの強い酒じゃない。それでもランスが酔っているのはかなり大酒飲んだからだ。空いた酒瓶に水やら茶やらを入れて持ってきて貰えるよう店員に頼み、先程から別の物を飲ませている。それに気付かぬほど酔っている。駄目だこいつ。

「おい、ランス。もう閉店時間だってよ。場所移そうぜ？」

ふらつく足の同僚に肩を貸し、店を後にした。そこそこ美味い料理屋だったと思うが、相方の愚痴の所為でそこまで料理を楽しめなかったのが少しばかり残念だ。まぁ……だが、それも仕方ない。ランスのためだ。

「しかしあいつら何処に宿取ったんだろうな……っておい、ランス！寝るな馬鹿」

不意に肩が重くなった。自分より背の高い男を支え歩くのは結構大変だ。しかもこいつはもう自分で歩く気がない。背負うことが出来ないわけではないが明日の筋肉痛は避けられない。第一ここしばらくろくに寝ていない俺には苦行だ。

「え……？」

不意に肩が軽くなる。見上げればランスによく似た顔の叔父がいた。俺に向ける優しげな笑みなんかとてもよく似ている。

「この子は私が預かろう。何、気にしないでくれたまえ。可愛い甥っ子のためだ」

それは素直にありがたいのだが……何自然な流れでお姫様抱っこなんだ。相方が目を冷ましたら発狂してしまいそうだ。

「でもなおっさん……いや、叔父さん。流石に１８にもなる息子相手にそれは止めてやれ」

「だがなぁセレス君。背負って楽しいのは基本的に胸の感触が楽しめる女の子なんだよ。となれば野郎はこれに限る。恥ずかしがる様と嫌がる様を眺めるのが楽しいじゃないか」

「いや、そんな同意求められても困るんだけど」

「ははは、君は若いねぇ。まぁいい、宿まで案内するよ。付いて来なさい」

そう言って連れて行かれたのは、普通の宿で安心した。ほっと息を吐くと、それを残念の意味で解釈したのかセクハラ親父が絡んでくる。

「いかがわしい宿じゃなくてがっかりしたかな？ん？どうなんだい？」

「俺にまで絡むのは止めてくれ」

「いやいや、セレス君はあいつに比べれば何百倍も可愛い部類に入るよ。あいつは本当に私を糞に集る蛆を見るような目で見るから

ね」
「……」
「さ、君もあの馬鹿息子の相手をして疲れただろう？叔父さんが食後のデザートに何か甘い物でも奢ってあげよう！それとも苦い物が好みかな？」
いつの間にか両手がフリーになった下ネタ叔父が、俺の肩を掴んだ。
「ちょっ……おい！叔父さん、ランスはどうするんだよ？」
振り返ればソファーに置き去りのランス。何時の間に！？
「あ、この子部屋まで運んでおいて貰えるかい？これチップだよ取っておきたまえ。いや、悪いねぇ、頼んだよ」
そして通りすがりの従業員に金を握らせ部屋を教えて、叔父はランスを見送った。
「さ、邪魔者は消えたし叔父さんの部屋でルームサービスでも頼もう」
「じ、邪魔者……？」
最愛の息子とかなんとか言ってなかったか？なんて薄情な。あいつはその場のノリで生きているような男だと、以前父が言っていたようなことを思い出す。
「時にセレス君、うちのランスの秘密を知りたくないかい？」
「あいつの秘密？」
「ああ。君ほどあの子を知っている子はいないとは思うけどね、

あの子の本当の悩みを君はまだ知らない。あの子は例え君相手でもそれを話さないだろう。だけどそれを知らなければ君はあの子を支えられない。それでは困らないかセレス君？」

俺がランスを慕っている前提で、叔父は俺に取引を持ちかける。否定してやりたいが、否定できる程の理由を俺は持っていない。

「……一緒に酒飲むだけでいいんだな？」

「いや、何でも好きな物注文してくれて良いよ。唯、一つお願いがあるんだけどね」

＊

「あんたどんだけ食い付いてんだよ！」

お願いは一つだった。だけどその一つが最悪だった。

「ははは！ぬかったなセレスちゃん！この宿は一見普通の宿に見えて、ルームサービスにこそその神髄がある！」

「何でルームサービスに衣装なんてあるんだよ！畜生っ！！」

「ははは！北部の文化を舐めるな。南部ほど豊かではない分、無い知恵絞り出す。これが北部の生き様だからね」

「無い知恵絞ってなんでこうなるんだっ！！」

ルームサービス一覧に、料理と酒以外に妙な分類があった。あろう事かこの叔父はそれを片っ端から頼みやがった。

それであいつのことを知りたかったら、とりあえず女装しろと来た。もう嫌だこの叔父。ていうかなんで俺がランスなんかのためにこんなことしなきゃいけないんだ。いらん所で人に迷惑かけやがってあの飲んだくれ。

「しかし何だ。ブランシュ君がとち狂うのもわからんではない。なかなか可憐に化けるものだな君も。普段の印象が強すぎる分、ギャップなんちゃらって奴だろうかね」
「今度尻触ったら決闘申し込むからな」
「どうせ申し込まれるなら結婚を申し込まれたいな。言葉の響きも似ているだろう？」
「似てるから何だってんだ」
「いや、君の言いたいことは理解した。次は後ろではなく前の上か下を触って欲しいと、つまりはそういうことなんだろう？遠回しに誘って来るとは君もなかなか」
「んなことしやがったら決闘なんか言わずに俺も本格的に騎士止めてあんたを夜道で刺し殺す」
「それは困った。それでは可愛い甥……いや姪を愛でて心も潤ったところで、そろそろ本題に入るとしよう」
「姪じゃねぇよ」
「ちなみにセレスちゃん、揉むのとか舐めるのとか挿れるのは触るに入らないと叔父さんは思うんだ」
「完璧アウトだそれもっ！つか早く本題入れっ！つか穴なら何でも良いのかあんた！？そんな好きなら鼻穴ファックでも耳穴ファックでも勝手にやってろ！」

しかしここまで俺のツッコミを殺す相手も珍しい。ツッコミをろくに聞かずに隙あらばセクハラ。女泣かせの上にツッコミ泣かせとか止めてくれ本当に。
ランスがこの人嫌がるのも解る。俺だってもう嫌だ。俺も涙目なって来る。

「いや、少々おいたが過ぎたか。悪かったねセレス君」

俺のそんな顔に気付いてか、叔父は少しだけ申し訳なさそうな顔で俺の頭に触れる。

「唯私は純粋に……強気な君をちょっと泣かせて見たかっただけなんだよ。あと耳穴と鼻穴は試したことがあったが私のが大きすぎて無理だったな」

「あんた最低だな。つか試すな」

ここでそんな台詞が出るなんて、外道と変態以外の何者でもない。

「まぁ、落ち着いて。ここのデザートはなかなか美味いんだぞ？」

俺の機嫌を取るように、皿にケーキを切り分けてくれる。そんなことで俺の機嫌は……

「美味ぇ……」

「ははは、セレス君は馬鹿みたいに可愛いね」

「くそっ……」

単純だと言われているのは癪だが、美味いもんは美味い。このおっさん料理に関しての舌は確かだ。それに目も良い。ランスと違って自分で作ったりはしないけど、任務で近場を通りかかる度、味も見目も楽しめる料理を俺に食わせてくれる。

勿論タダじゃない。その度にあいつの近況を俺に尋ねる。だからあいつを心配しているっていうのは本当なんだと思う。……俺はあいつの通訳じゃないんだけどな。

でも、この叔父の方から俺に話をするっていうのは珍しい。俺が付いてきたのはそこが気になったからであり、別に料理に釣られたわけじゃない。

頭の中で文句を良いながら、上品な甘さのあるケーキに舌鼓を打

つ。悔しいがやっぱり美味い。
俺の隣から、俺と向かい合う形でテーブルの向こう側のソファーに叔父は移動して、やっと本題に入ろうかという素振り。でももしかしたら悔しげな俺の顔を見たかっただけかもしれない。だがそれでは困る。

「それで、話って？」
「……君は何故あの子が私を憎んでいるか知っているかい？」
「浮気者だから。変態セクハラ魔だから。下ネタしか言わないから。領地を空ける領主だから。父親らしいことを何もしない糞親父だから」
「うん、要約すると正にその通りなんだけどね」

叔父は爆笑していたが、すぐにまた真顔に戻って低い声で囁いた。
「だが私はその浮気の中で、とんでもないことをしてしまったことがあってね」
「……何したんだよあんた」
「これはまだあいつも知らない話だ。これを知ればあいつは今のままではいられなくなる。だから私は今日までそれを伝え倦ねて来た」

そんなものをどうして本人すっ飛ばして俺に話すのか。解らないという俺に、叔父はそれが信頼だと口にする。
「これを君に話すのは、君がこれからもずっと誰よりあの子の近くにいて、あの子を支えてくれると信じるからだ」
それはとても狡い言い方。枷を生む言葉だ。信じる、そう言いながらこの人は……俺をあいつに縛り付けようと企んだ。開き直りの

良い下衆だ。馬鹿息子の幸せのためならば、可愛い甥を犠牲にすることも厭わない。本当は父親がすべきこと、その役目まで俺に押しつける。やっぱ父親として最低だなこの男は。

「君の目から見て、それをあの子が知る方が幸せだと思える日が来たら、これをあの子に話して欲しい」

「……」

この男は自分であることを選び、そのため家庭を顧みず、ランスの心を傷付けた。それでもこの男がランスの不幸を願っているわけではないのは解る。あいつを不幸にした張本人が何をとは思う。

そんな男があいつの幸せを願うのは、懺悔だろうか？救いを求めてだろうか？解らない。だがこいつは、これ以上ランスを不幸にしたくない。そう思っているのは確か。

（俺だって……）

あいつを不幸にしたい訳じゃない。なれるものならなって欲しい。不器用な生き方しか出来ないあいつには……本当は、誰よりも幸せに。

「俺がこの話を聞くのはあんたのためじゃねぇ。ランスのためだ。それでも良いなら勝手に話してくれ」

「ああ、ありがとう。それじゃあ話すよ」

でも何て切り出せばいいかななんて叔父は苦笑を浮かべた後、すぅと息を吸い込んだ。それは何か、覚悟を決めるようだった。

「あの子の母親は……死んだ私の妻ではないんだよ」

「え……？」

「私が生涯で最も愛した女があの子の母だ」

噂なら都で聞いたことがある。この女漁りの色男は高貴な人まで毒牙にかけたに違いない。そう言って父の罪でランスを貶めようとする質の悪い騎士見習いは何人もいた。だが……

「本当……なのか？それじゃああいつは……」

どうして先代が、アルトのおっさんがあいつを次の王だと言ったのか。それは指導者としての才覚から？人望から？そうなんだろうと思った。だけど……それだけじゃない。

「あいつの母親って……王妃様（カーネフェリア）なのか！？」

叔父は何も言わず、それでも一度だけ……首を縦へと振る。その様子に俺は、強い目眩を感じていた。

＊

「わりぃ、エルス」

レーヴェは両手を合わせて調理場を盗み見る。心地良い包丁とまな板の音。それは怒っているようには聞こえない。

しかし数日ぶりに遊びに来たエルスに、こんな失態話すのは辛い。ああ。空腹なのに飯が出来上がるまで待っていなければならない今と同じくらい辛い。それが同時に来て二重に辛い。腹減った。

「いや、いいよ。そんな大物がこんな所ふらついてるなんて誰も思わないよ。コートカードも連れ歩いてるんだ。その位の幸運が向こうに味方しても仕方ない」

実力の又じゃなくて運が悪かっただけだとエルスは言う。やっぱりエルスは優しい。この詫びにあいつらの腕、今度は全部切り落としてやらねぇと。

「都探しても見つからないからもしかしてと思って来てみれば……やっぱり河を越えていたか」

エルスが料理の味を確かめながら、何かブツブツ言っている。俺はそれが少しエルスの機嫌の悪さを表しているような気がして、手下達を睨んだ。

「大体何でお前らあそこで俺を連れ戻したんだよ？」

「お頭ぁ、そいつは……」

「ああ見えてあいつは先代カーネフェル王の側近中の側近。チャラチャラしてるように見えてあの中じゃ頭幾つも抜き出てやがります」

「んだんだお頭！あの男に捕まった奴は死ぬより酷い目に遭ったって話聞いた」

「何言ってんだ。死ぬより辛いことなんかあるわけねぇだろ。死んだら飯食えなくなるんだぜ？」

俺は物事の判断基準が食の一点に占められている。その俺がそれ以外のことで怒るのは珍しい。それでも苛つくことはある。カーネフェル人。金髪族、あの悪魔らに馬鹿にされるのだけは許せねぇ。

「第一俺らの土地を土足通行したのはいただけねぇ！」

俺の声に、すぐ傍でエルスが頷いてくれた。

「そうだね。タロックがこの国を落とした以上、今悪いのは彼らの方だ」
「だよな！あいつら昔からほんと最悪だったけどな」
そうか、やっとあいつらが悪者だってことになったんだな。そりゃそうだ。人にあんな酷いことする奴ら、いつか罰が当たって当然だ。
「そう。都落としが叶った今、王は支援者たる君たちをタロックの一員として認められた。今日から君は天九騎士団第七師団長、それからタロック貴族の地位を与える」
エルスは俺の手を取って、立派な刀を俺に捧げる。
「何だ、これ？」
「王からの贈り物。これで君も立派な騎士だ」
エルスがにこりと微笑むと……砦のあちこちから歓声が上がった。
「す、すげぇ！お頭！あっちこっちに立派な馬が！」
「馬だけじゃねぇ！高そうな武器に防具で武器庫がぎっしりだ！！」
ささやかな贈り物ってレベルじゃない。一体何事かと思えば……エルスは俺をいつもと違う名前で呼んだ。
「レーヴェ……君は今日から獅鷹（しおう）の名を名乗ると良い」
「しおう？」
「獅子に鷹って書くんだ。王が直々に名付けて下さった名前だよ」
「漢字の名前って……」

「言っただろう。君は今日からタロック貴族だ」

ぽかんとしている俺を余所に、手下達は大騒ぎ。

「うぉおおおおおお！すげっ！凄ぇお頭！！」

「俺達が天九騎士の部下になれるとは！出世したもんだなぁ！」

調子の良い野郎共に、エルスは苦笑しながら、褒美はまだこれだけじゃないと俺達に言う。

「タロックに屋敷と領地を用意させる。それにこの北部でのカーネフェル人相手の略奪含め全ての行為を認めるとのこと。今までと同じだとは思うけど、君たちの方が今となっては正義だ。好きなだけ暴れてくれて良いよ。王の許しが出たからね」

「俺様がタロック貴族……」

「今君たちにはカーネフェル北部の守護の任が下っているけど、必要な物があれば僕を通じて送らせるって言ってたよ」

「いや、十分だ」

「でもお前ら馬なんか乗れるのか？俺は乗れねぇぞ？」

「ああ、それは大丈夫。ちゃんと躾の行き届いてる子達を貰ってきたから。基礎知識さえ覚えて貰えば、すぐに乗れるようになる」

略奪に出かける幅が広がったと大喜びの手下達。でも俺の関心は別の所にある。

「それはエルスが教えてくれるってことだよな？」

「まぁそうだけど？」

「その間エルスの手料理食い放題ってことだよな！？」

「そうだけど、だからってゆっくり覚えるとか止めてね？」

「ですぜーお頭！カーネフェル王殺すまで結婚お預けって話じゃねぇですか」
「そ、そうだった！よし！俺すぐに覚える！」

異国の空。異国の山。故郷とは全然違う。それでも住めば都という。今の暮らしも十分楽しい。
決して裕福な暮らしじゃなかった。毎日腹が減っていた。今は毎日たらふく食べられる。それでも胸の中に空いた穴。それが埋められないのだ。だけど美しい言葉を話すエルスを見ていると、それが埋まるような気がする。彼女は俺にとって故郷タロックその化身。彼女さえ自分の物になったなら、俺は今よりもっとこの飯を美味いと感じることが出来るだろう。

（フォース……、グライド……ロセッタ）

あいつらはもう何処にいるのか解らない。生きているかも解らない。なら新しく俺が、大切なものを作っても良いはずだ。
俺様は強いから、過去を振り向かない。うじうじしない。いつも前と未来だけを見て生きる。それが山賊レーヴェ様ってもんだろう。

「ああ、そうだ。君たちこの馬は非常食とか刺身にして流さないでよ。食用じゃないから美味しくないしそういう風には高く売れないよ」
「お前らエルスからの頂き物を、勝手に流したら殺してやるから覚悟しろよ」

山賊の性分で、売り捌くことを考えてしまっていた連中は、俺の言葉に震え上がる。本当油断ならない連中だ。

「いいか？俺達は山賊だ。売っていいのは奪ったもんだけ！貰っ

たもんを売るのはあんまりにも礼儀知らずだ。売るくらいなら貰うな！奪え！解ったか？」

一睨み聞かせれば、途端に大人しくなる。俺が目を光らせてないと、こいつらは本当に駄目だ。こいつらは元々商人やその手下。目先の欲に流されて、それで商売失敗した奴らばかりだろうに、まだその癖が抜けないのだ。

「米が炊けるまでもう少し掛かりそうだな……ねぇレーヴェ、お風呂借りて良い？カーネフェルってクソ暑いっていうのに最近水浴びばかりで嫌になるよ」

「ああ、好きに使ってくれ」

着替えにと浴衣とタオルを渡して俺は彼女を見送った。

「よし。お前らは米を見ていろ。俺は仕事に行ってくる」

「お頭！そっちは風呂場ですぜ」

「馬鹿かお前ら。男子たるもの惚れた女の風呂を覗かずに胸を張って男と言えるか！？」

「お頭が飯と昼寝以外のことに興味を持つなんて！」

「いや、お頭は女じゃ……」

「どっからどう見ても俺は男だろうが。それ以上俺を馬鹿にするならこいつで相手をしてやるよ」

貰ったばかりの刀は良い案配に手に馴染む。抜き払った刀身の輝きは美しく、振るう際の自然な流れは身体の一部のようだ。

（良い刀だ。これならあいつとも……）

あの金髪の騎士。あいつを負かすには丁度いい武器だ。中途半端

が俺は一番嫌い。さっさと白黒付けてやる。

「よし！いい汗かいたぜ！これなら俺が風呂に行っても何の問題もない！」

刀にひるんだ隙に手下達を伸したは良いが、真夏の気温も相まって汗がダラダラ。タロック生まれの俺にはカーネフェルの夏は辛すぎる。

「エルス！俺も風呂にっ……」

「うわ！レーヴェ？」

「くっそぉおおおおおおおおおおおおお！！！遅かったか！！」

もうエルスは風呂上がりだった。そうだ夏場はそんな長風呂出来るわけがない。俺は怨む、夏という季節を怨む。いや、でもエルスに着せた赤い浴衣はよく似合っている。故郷の祭りを思い出す。

「エルス……林檎飴作れるか？」

「白米には合わないと思うけど、一応作れるよ？」

だけどどうしてと聞いてくる彼女。

「いや、なんかエルスの浴衣見てたら祭りっぽい物食いたくなった」

空気を読むよう鳴る俺の腹に、エルスは大きく吹き出し笑う。

「いいね！僕も祭りは好きだよ。昔は花火とかやったなぁ……」

「あと蛍取りとかしなかったか？」

「ああ、取りはしなかったけどよく見ていたよ、懐かしい……う

ちの神社の傍によくいたなぁ」
「……そう考えると、カーネフェルの夏って暑いだけでクソつまんねぇな」
「まぁ、異文化圏だしね」
「食材が美味いのは良いんだけどなぁ」

タロックはそんなに良い思い出のある場所ではないけれど。それでも俺にとっては大切な故郷だった。帰郷を願う心はある。

「やっぱりレーヴェはタロックに帰りたい？」
「そりゃあまぁ」
「そっか。この仕事が終わったら、たぶん叶うよ」
「カーネフェル王さえいなくなればってことか」
「そう、あいつさえいなくなれば」

長い金の髪、青の瞳。俺の大嫌いな色。みんな消えてしまえばいい。あんな冷たい目の奴は。みんな俺に石を投げる。俺を悪魔と呼んだ。そんな奴らの方が、俺には悪魔に見える。そんな悪魔みたいな奴らの親玉だ。カーネフェル王とか言う男は最低最悪に違いない。
そう思うのだが、王らしき少年は影が薄かった。思い出すのは俺と対峙していた青年騎士の顔。深い青の瞳は思い出すだけで吐き気がする程だった。ああクソっ、せっかくのエルスの飯がまずくなったらどうしてくれる。

＊

「……ユーカー？」

ランスが目覚めたのは違和感が原因だ。定食屋の机にもたれ掛かっているはずが、机はこんなにも柔らかかっただろうか？

薄めを開ける。ここは何処だ。俺は確か酒を飲んでいたはずで。周りを見れば見知らぬ部屋。
ここが宿だと理解するまで数秒を要した。愚痴を聞いてくれていた従弟が何故いないのかはわからない。別の部屋にでもいるのだろうか？

「……」

宿と言うことは、ここにあの男もいるのか。

「気に入らないのは確かだけど……」

愚痴を吐いてすっきりした。だから少し余裕が生まれた。あの男がユーカーの解毒をしてくれたのは確かだ。そのことについてだけなら礼を言ってくるべきだろうか？
これは俺のためじゃない。あの男と歩み寄ろう何て気持ちはない。ユーカーのためなんだ。
そう自分に言い聞かせ、出汁にしてしまった従弟に心の中だけで詫びる。宿の従業員に尋ねて、あの男がいるという部屋まで向かう。部屋の中は妙に静かだ。扉の外から叩くのが躊躇われるくらいに静か。

「……起きてますか？」

小声で扉を叩く。返事はない。寝てしまったならそれでもいい。言うだけ言って帰るだけだ。そしてもう二度と言わないだけ。

「今日はユーカーを助けてくれてありがとうございました……
……“父さん”」

その言葉を発したら、室内で何か物音がした。皿の割れる音だ。何かあったのだろうか。
扉に手をかける。鍵は掛かっていなかった。
「な、何事ですか！？」
俺はその瞬間固まった。薄暗い証明。見知らぬ少女を抱き締めたあの男の姿。
「……こらこらランス、空気を読んでくれ。子連れと知られると女の子を口説くのが大変なんだからな」
「あ、貴方という人はっ……どうしてそう、いつもいつもそうやって！死んだ母さんに悪いと思わないんですか！？薄情者っ！人でなしっ！」
「お前が空気をぶち壊してくれるから、この子も固まってしまったじゃないか。もう少しで口説き落とせそうなところだったのにまったく……」
「貴方なんか大嫌いだ！もう二度と父さんなんて呼ぶものかっ！」
信じられなかった。息子との再会、その日くらいは体裁がある。そんなことはしないだろうと思っていたのに。俺との親子関係の修繕をするどころか、亀裂が走るようなことを平気でやる。また何処からかあんな女の子を連れてきて。自分より何歳年下相手にしてるんだあの変態っ！！
俺は怒りのまま、部屋を飛び出し元来た道を引き返す。あんな男死んでしまえばいいと思いながら、進める足は酔いも抜けていないのにかなりしっかりしていた。
＊

「……ったく、何でああいうこと言うんだよ」
「いや君がこんな姿をあの子に見られたくないかと思ってね」
「そこは普通あいつの方優先してやれ」
「いや、それは出来ないな。君を脅してこんな格好させていたなんて知られれば、あれの三倍は怒られたよ、うん」

ユーカーは床に落ちた皿の欠片を拾う。これは動揺したこの叔父が、誤って落としてしまった物だ。それにしても言い逃れのために俺を抱き寄せるなんて何馬鹿なことを。

（幾らあの話をあいつに聞かれたくなかったからって……）

あいつがこの部屋まで来たのは、あまりに大きすぎる話に俺が言葉を失った……その時だったのだ。

「あいつはそこまで俺に関心ねぇよ。唯自分以外が俺をからかうのが気に入らないってだけだ。あいつああ見えて心狭いからな」
「なるほど。そんなところばかり私に似て、駄目な子だな全く」
「……せっかくあいつがあんたに少し歩み寄ろうとしたってのに。一回ああなったらあっちからはもう絶対近づいてこないぜ？」
「まぁ、それも仕方あるまい。私はあの子にこれまでそれだけのことをして来たんだからね。簡単に許されようとは思わないし、許されたいとも思わない。私とあの子はこれでいいんだよ」
「……大人げないのもそっくりだ」
「世の中そんな物だよ。大人だから年上だから親だから折れてやるなんて決まりはないんだ。そしてそんな広い心もない。親だって人間なんだよセレス君？」
「……」
「君も南部の実家にはもう暫く随分と帰っていないようじゃないか」

「いっそうちの親父とあんたが逆だったら良かったよ。息子がランスならあのクソ親父も喜んだだろうからな」
「なるほど。君が私の息子なら、多少の浮気……１００股や１００股くらいは大目に見てくれると？」
「そこまで行くともう呆れて何も言えねぇよ。俺だったらな。俺と俺の女に手ぇ出してこない限り好きにしろよって背中押してやる」
「それは心が広い。浮気公認とは君が女だったなら理想の嫁だな」
「まぁ、でも国法触れたら任務で殺しに行くかもしれねぇけど」
「ははは！１０才以下には手を出さないように気をつけるよ」
「そのボーダーラインが既に犯罪だろうが。変なところばかりセネトレアに感化されてんなあんた」
「いや、あの国は愛の国だと私は思うよ」
「馬鹿かあんたは」

俺が小さく吹き出すと、叔父も自嘲気味に笑った。

「そうだな。君となら良い親子になれただろうな。だけど残念ながら私の息子はあの馬鹿であり、君の父親はあの偏屈男なんだな皮肉なことに」
「……あいつ早く死なねぇかな」
「君を相手にしていると、あの子が私についてどう思ってるのかなんとなく解りそうで怖いな、ははは」

俺が親父に思っていることは、ランスがこの叔父に思っていることに似ている。そうなのかもしれない。俺は俺の親父ほどこの叔父を憎くは思わない。実害が俺に及ばない限り面白い人だと思う。だけどランスにとっては酷い父親であるのは確かで、ランスを傷付けたという点では俺もこの人は嫌いだ。

「ロジアン兄さんは私と違って、真面目な男だからねぇ。その真

面目が裏目に出ると酷いことになると言う例だ。あいつは案外あの馬鹿息子と似た系統なのかもしれないな」
「はぁ？あのクソ親父とランスを比べるなよ。ランスが可哀想だ」
「君は本当にうちの馬鹿息子のファンだねぇ。いや、喜ばしいことだが」

聞き捨てならないと噛み付く俺に、叔父はにたつく。何だかんだでランスのことは自慢の息子なのだろう。褒められると自分のことのようにこの人は喜ぶ。でもこの変態に息子息子言われると、俺が褒めてるのはランスのはずなのに、このおっさんもしかして自分の下半身褒められてる気になってるんじゃないかっていう疑念に刈られる。日頃の行いって大事だな。

「そうだな。あれは道を間違えなかったからこそ、道を間違えた未来のランスの姿だろう」
「間違えなかったから、間違えた？」
「ああ。私は騎士としても父親としても失格だが、兄は父親として男としては最低だが騎士としては忠義者だ」

自らは男として生き、兄は騎士として生きたと叔父が言う。俺の親父が騎士として？アルト王のために支えるために領地のためにシャラット領を滅ぼした。アスタロットを手にかけた。俺を息子として見ない。家の道具としてしか見ない。欠陥品めと冷たい視線を注ぐ。人目に見せては家の恥。見えるはずの両目を隠されて俺は生きた。あの家で。
生き方を決めることは、他の何かを捨てること。俺は親父に捨てられて、ランスもこの叔父に捨てられたのだ。

「兄は決してあの女性に思いを告げることはなかった。想いさえ否定した。だけど私には同じ事が出来なかった」

「……そういうことかよ、なるほどな。よぉく解ったぜ」

あのクソ親父は母さんを、家のために娶ったんだ。姉貴達の母さんは、女ばかりで男は全然産めなかった。だから跡継ぎが欲しかったんだ……だから新たな妻を娶った。

軽度の女取っ替え引っ替えも家のため。跡継ぎのため。王のため。

「あいつが母さん殺せたのは……ほんと何とも思ってなかったからなんだな」

兄弟揃って救えねぇ。よりにもよって王妃なんかに惚れるか？

それでこの叔父は王妃に手を出して、ランスを傷付けた。俺の親父は手を出さなかったからこそ家庭を家族を愛せない。俺がこんな薄い色の目じゃなくても、俺を道具としてしか見られなかったことだろう。

「……はぁ」

屑具合は兄弟揃って同レベルだが、俺としてはこの叔父の方がマシなのだ。こんな目の俺でさえこの男はこうして可愛がる。少なくとも人としては見てくれている。

セレスタイン領にランスが遊びに来たときは、クソ親父も本当ランスを可愛がっていた。褒めちぎっていた。俺はそれをどんなに羨んだことだろう。

だけど親父はランスのような息子が欲しかったという気持ちだけじゃない。ランスの中の血と面影からあいつを可愛がったんだ。そりゃそうだ。惚れた女の子だと思えば、表には出せないが主の息子のようなものだ。それは可愛いだろう。道具じゃなくてもっと神聖な者としてあいつを見ていたに違いない。それに比べて俺の何と惨めなことか。

「やっぱあの親父早く死なねぇかな……」
「ははは、やっぱり駄目か」

ランスとクソ親父が似ているとこの叔父が言ったのは、俺がランスを好いているなら、あのクソ親父のことも好きになれると言いたかったのだろう。だけどそうはいかねぇ。ランスとあいつは別物だ。

「……でも、安心しろよ叔父さん。少なくとも俺とランスが同じ女に惚れることはねぇ。あんたらの二の舞にはならねぇよ。アルドールとランスがどうってのはわかんねぇけど、それもないんじゃねぇか？アルドールにも惚れた女はいるしな」

この場合その相手はあの道化師を指すのか神子を指すのかどうにもよくわからない。惚れた女に化けてるのが道化師で、でもそれと同じ顔した神子は完全にアルドールに惚れてるだろうし。アルドール自身がどうなんだかはわかんねぇが、ランスが道化師や神子に惚れるとはどうにも思えない。それなら多分そういうことは無いんじゃないかと俺は思う。

「なるほど。君は私の自慢の息子にぞっこんということか。確かにそれなら私達のような諍いは避けられる」
「なんでそうなるんだよ！俺はあんたらとは違う。死んだからってすぐに他の女に乗り換えたりしねぇ。俺の心は生涯アスタロット一人のもんだ」

あとわざとらしく自慢の息子とか言うな。絶対下と掛けてるだろこのおっさんは。
そして俺の誇りを吹き出して笑うな。これだから女と交わったことの無い男はみたいな哀れみの目を俺に送るな。

「あ、青いねぇ……叔父さんも昔はそんな風に思ってたんだよ王妃様一筋って。だけどほら、そんなにしょっちゅうやれる相手でもないだろ？たまるものはたまるし、やりたいものはやりたいだろう？そうなればまぁ、こんな風にもなるわけだよ」

「ならねぇよっ！俺はあんたみたいなふしだらな男には絶対なんねぇからな！」

「なるほど。となれば弟子の出番もそう無くない話ということか。ブランシュ君にはセレスちゃんはセフレからのC出発の恋ならお付き合いしてくれると伝えておくよ」

「なんでそうなるっ！！」

「いや、女作らないなら消去法でそっちかなと。君も若いんだからあんまり無理は身体に毒だよ。だから今日も毒に倒れたりなんかするんだ」

「その毒とは違ぇよ」

もう相手にしていられない。これ以上反論したら、それなら叔父さんが解毒をしてあげようとか言って褥に引き摺り込まれる図が瞬時に目に浮かぶ。

「そうか。ブランシェ君では嫌か。それなら叔父さんが解毒を手取り足取り腰取り尻取り顎取り口取り股取り胸取り舌取り……」

「あんたもさっさと死んじまえっ！！」

生々しい言い回しが嫌すぎる。もう一言だってこいつと会話はしたくない。

着替えを引っつかみ、俺は部屋から飛び出した。しかし俺のリアルラックの低さは尋常ではなかった。

「い、イズぅうううううううううううううううううう

うう！！何て愛らしい格好を！！」

「ぐえっ」

そこをたまたま通りかかったらしいトリシュに思いっくそ抱き締められる。もう嫌だこんな人生。なんで俺野郎とばっかりこんなんなるんだ。アルドールなんか一時期女ハーレム作ってたらしいじゃねぇか。何で俺には野郎しか寄って来ないんだ。いやまぁ、アスタロットの手前それでいいんだけど。だけど女が寄ってきてそこで惚れた女がいるんだとか断らせてくれても良いじゃねぇか。この野郎はそんな断り文句で引き下がるほど頭が良くない。あのセクハラおっさんを師匠と呼ぶほどアホだ。「大丈夫です、男なら浮気の内に入りません！さぁ！」とかその内言い出しそうだ。何がさぁ！だってんだ。

「私は……いや、僕はとても嬉しいよ」

物語の配役口調が突然消えた。感激のあまり素の言葉が出てきたのだろう。どうでもいいからさっさと放せ。俺はもう疲れたんだ。今日は飲んだくれ二人の相手をして来たんだ。いい加減どうにかならないものか。本当にこの所俺は睡眠不足なんだぞ。

「女装をあんなに嫌がっていた君が、どうしてこんな所でこんな格好をしているのか！答えは一つ！この僕のためなんだろう！？きっとそうだ！そうに違いない」

そしてどうしてある程度顔が良いと言われ、厄介な自信を得てしまった残念な野郎はこんなにポジティブな考え方が出来るのか。その無駄イケメン面を鉄板にでも押し当ててやりたいもんだ。

「んなわけ……」

あるかと否定しようとして、俺はここで気付く。もし違うと言ったなら何故こんな格好をしているのか言及される。そしてランスの耳にそれが入ったなら、あの叔父の言うとおりまたあの親子仲が悪化したら……それはランスの不幸だ。

嫌だ。嫌だ、嫌だ。物凄く嫌だ。だけどここはこう言うしか……ないのか？こいつに口を割らせないためには、そうするしかないのだろうか？俺は諦めの息を一つ吐いて心を決める。頭一つ分俺よりでかいトリシュにちょいと手招き。

（……黙ってろよ。他の奴にこんなの見られたくない）

怖気を必死に抑えながら耳元でこそっとそう伝えてやれば、馬鹿な男が感涙の涙を流している。いい年してみっともねぇやつがいたもんだ。

（ああ、イズー！！解りました！早く部屋へと行きましょう！）

よっしゃ！馬鹿で良かった！こう言えばこいつは言及などしない。おまけに俺の小声に付き合ってくれる愛想の良さ。馬鹿と鋏は使いようってこういうことか。後は力業でもカードの力使ってでも、変な展開から逃げる！部屋に戻ってからが戦いだ。

足取りの軽いトリシュを盾にして、顔見知りが見ていないかを伺いながら俺も逃げる。何とか誰にも見つからずにトリシュの部屋まで逃げることに成功。問題はここからだ。

「い、イズー……君から僕を誘ったと言うことは……つまり、そういうことだよね？」

案の定この阿呆は迫って来た。お前物憂げな美形面っていう設定

何処に置いて来やがった。こんな鼻息の荒い物憂げ美形がいて堪るか。

「あ、悪い。俺婚前交渉はしない主義なんだ。悪いな」

「ええ！？」

「単にお前にこの格好を見せたかっただけだ。それ以上の意味はない。何勝手に勘違いしてやがんだてめぇは。んで俺の女装はどうだった？ぁあ？」

「か、可愛かったです」

「はい、あんがとな。はい、この話ここで終了！」

悔しかったら法でも変えて来い。それを伝えてさっさと着替え。それを残念そうに見つめる同僚。

「それはつまり、僕がアルドール様にもっと忠義を示して信頼されなければならないということか。名実共に優れた騎士にならなければ、君は心を……いや足を開いてくれないということなんだね」

「言い直す必要あったのか今の？お前あの中年男の悪いところ真似るなよ。むしろ好感度下がるからな下げるからな。はい、マイナス。よって今日は俺とお前には何のイベントも無しだ」

俺は同僚の手を引っつかみ扉の外へと放り投げ、さっさと鍵を閉めてやる。これで俺の平和と平穏は守られた。一人部屋最高。

「アルドール様ぁあああああああああああ！こんばんは私が扉の前で見張りをさせていただきますぅううううううううう！いえいえお構いなく！これは私がやりたくてやってることですからぁあああああああああ！！」

廊下から何かそんな声が聞こえたが俺には関係ない話だ。アルド

ールやあの神子がそんな阿呆な法案通すはずがない。しばらくこの手を使えばトリシュは良いように使えそうだな。

「疲れた……」

風呂に行きたいが、トリシュが羽虫のように室内に入ってきても困る。

窓からの移動をするなんて、面倒なことはしたくない。それでも降りられない高さでもない。クソ暑いところ移動してきたんだ。シャワーを浴びたいのは本当だし……迷いながらカーテンを開く。

「……っっっっ

との出会いもこんな感じだったと思い出す。こいつなんでいっつも窓から現れるんだよ。しかも一階なら解るが複数階まで上がってくるな。

「んで？俺に何の用だってんだ」
「飲み足りないから付き合ってくれ」
「いい加減にしろよなお前」
「そう言われると思って手土産を持って来た」
「ぬ、抜かりねぇ！その抜かりなさが腹立つわー……」

そう言って差し出されるのは、夜中に食いたくなるような、こってりしていない素朴な料理だ。煮物とか漬け物とか、小さなライスボールとか。タロック料理でも妙に癖になるよなあいつらは。

「お前にしては珍しく見た目も良い料理じゃねぇか……どれ」
「ちょっとむしゃくしゃして凝る気になれなかったんだ」
「って……不味っ！！」
「ちょっとむしゃくしゃしたからわざと砂糖と塩を間違えてみたんだ」
「確信犯かよ！夜中になんて嫌がらせだ！？」

ソファーに腰を下ろし、唯一無事だった漬け物メインに咀嚼。俺は咽の甘ったるさを飲み込んだ。それを見計らったかのように、向かいに座ったこの男は変なことを口にする。

「……誰かを好きになるって、どういうことなんだろう」
「い、いきなりなんだよ。お前までトリシュみたいなこと言い出して」

思わず咽せた。漬け物の塩分と米の砂糖が胃の中で反応、暴れ回

っているようだ。

「俺にはよく分からない。人を傷付けて、不幸にしてまでそれは意味のあることなんだろうか？」

それでもランスは真剣に下らないことを悩んでいる。あの叔父の所為でこんなにも。

「俺はそんなものがなくても生きても死んでもいけると思う。俺は今の……以前の生活に満足していたし、あの人さえいれば……俺は歩いていけると思ってた」

「ランス……」

「あの人がお前を庇ったことでお前を責めないよ。あの人はお前を……俺達をそれだけ大切にしてくれていたんだ。だったら恥じる事じゃない。あの人の信頼を裏切らないよう、俺達は立派に生きて立派に死ぬべきなんだ。そのために生かされたんだ」

「……そうなのかもな」

「……カードは一枚しか生き残れない。それならたぶん俺もお前も高確率で死ぬ定めだ。そんなカードが誰かを好きになったってろくなことにはならない。短い余生を剣のために国のために生きるのは、間違ったことではないはずだ」

逃げるようにランスはそんな言葉を口にした。

「それなのにこの土地は……俺に嫌なことばかりを押しつける」

「……でもエレインはお前に惚れてる」

「あんな年の離れた女の子、異性として俺は思えない」

「まぁ、そうだろうけどよ」

でも何年か後なら。そう言いかけて俺達にはその未来がないこと

を知る。消えるカードが未来を思い描く事なんて……

「……まぁな。無理して好きになる必要もねぇかもな」

「だろう？」

「でもまぁ……お前にだって幸せになる権利はあるだろ。気になる女がいるんならちょっとくらい夢見たって……良い思いしたっていいんじゃねぇの？」

人のため国のためそうして戦い続けたところで、それはお前の幸せにもう結びつかない。命が磨り減らされていく。何の見返りも与えられないまま。そんなのは苦しいだけだ。少しくらい楽になったっていいんじゃないかと俺は思う。

「だってお前さ。今まで生きて来て何が楽しかったよ？あったかそんなもん」

「楽しかったこと……？」

「仮に死ぬときになって、そんなのが何も見つからないってなったら何のために生きてたんだってなるだろ。そういう後悔していいのかお前は？」

「そういうお前はどうなんだ？」

「俺は楽しいから良いんだよ」

「お前のこれまでの人生だって俺と大差ないじゃないか。そこまで楽しそうには俺には見えない」

「あのなぁ！人の生き方にケチつけんな！俺を哀れむな！俺は俺でこれでも楽しく生きてるつもりなんだよ！」

「でもお前は実家からも勘当されてるようなもので縁切ってるようなもので、大切な人だって何人も亡くして来たじゃないか。それで何が幸せだって言うんだ？俺には解らない」

「そ、そこまで言うか？」

正論だ。正論故に少し胸が痛い。本当こいつ、俺に対して遠慮とか配慮ってものがまるでない。無神経男が。でもそんな風に言われても、やはり傍にいるのが嫌だとは思わないから不思議なもんだ。

「俺は馬鹿みたいな奴と馬鹿なことするのが楽しいんだよ。くだらねぇと思いながら、何にもならねぇ無駄な言い争いで時間を消費するのが馬鹿みたいでたまんなく笑えるんだ」

それはとても変な感じだ。見えるし聞こえる。見られてるし聞かれてる。

あの部屋では何時も毎日、一日がとても長く感じていた。それでもこいつに連れ出されてからは毎日があっという間になった。

誰とは言わないが、ここで気付かないような馬鹿の名前を呼んでやる必要はない。

ちらと横目で従兄を見れば、深くて綺麗な青を真っ青に見開いて俺を見る。

「……何かを作ることが怖いなら無理に作る必要はねぇ。何にもならないことにも何らかの意味はある。少なくとも俺はそう思う」

何も解決しないこの言葉の交換だって、俺に一つの感情を教えてくれる立派な行為。下らないこのやりとりが楽しくて、掛け替えないほど大切で、守りたくて、無くしたくない。

音のない世界に飛び込んできたのがお前。広がる世界の中心は未だにお前のまま。根強くお前が残る。こうして話せることが何よりも幸せで。認識される。生きている、それを強く感じられるんだ。

だからお前が死ぬのなら、せめて俺の後にしてくれ。俺からこの喜びを奪わないで欲しいんだ。だから俺は俺のためにお前を守るんだ。俺が幸せだって笑って死ねるその日のために。

「だけどな……自分の心否定してもろくなことにはならねぇぜ」

俺だって逃げ出した。逃げ出して失った。だからこそお前には同じ間違いをして欲しくない。俺の失敗を見て、お前は正しい道へと進んでくれ。何時だってそう。間違うのが俺の専門。栄光へと至るのがお前の役目。それが俺達の正しい在り方だったはず。

お前は俺とは違うから。俺とは違う幸せを追いかけるべきだろう。俺は置いて行かれ忘れられる。たぶん音は消えていく。いつかそうなる日が来るんだって知っている。

お前が俺にこうしてもたれ掛かってくるのは、本来別の人に向かうはずの分の好意。その好意ごとまとめて代用品としてここにいる。誰も好きになりたくないから、現状維持で俺を可愛がる。弟として猫可愛がり。弟でもないのにさ。俺は多分こいつにとってペットみたいなものなんだ。飼い猫でも飼い犬でも他の奴に懐いたなら、それは腹立たしいことだろう？こいつの俺への好意はその程度のものなんだ。死ねば悲しいけど、幾らでも代わりは見つかるような。

「……俺も楽しいよ」

向かいの席から上がる声。現状維持という選択。

俺なんかよりもっと楽しいことが世界にはあるだろうに、馬鹿なことをこいつは言う。人間不信から人を人として好きになれない。王は神で人ではない。だから崇められるし慕いも出来る。俺は人間だけどこいつにとって人じゃない。犬か猫か鳥かなにかだから可愛がれる。人を人として好意を抱くことが出来ないこいつは可哀想だ。あの叔父がこいつをこんな風にしてしまった。

だからこそ、こいつがこのままで良いとは俺には思えない。誰でも良い。誰かこいつに人としての喜びを生き方を教えられる相手がいるんなら。俺はこの楽しみも投げ出してやれる。

（いや……）

むしろそれがなくとも俺は投げ出すべきだろうか？そうすればこいつは考える。俺の代わりを見つけに行く。

だけどそれがアルドールに向かうのだけは避けたい。そうなればこいつは余計自分の幸せを考えない道具に落ちる。それでは現状維持以下だ。

考え込む俺に、机の向こうでランスが笑う。飼い犬を撫でるよう俺の髪を弄ぶ。奴は優しく笑うけど、その目に映る俺は多分犬の姿だ。こいつは可哀想な捨て犬を拾ってやっただけのお優しい人間様だ。その人間様に懐いた俺が馬鹿だというだけで……

「……何だよ？」

「俺は騎士として生きる。騎士として死ぬ。それを……俺は決めた」

前々から思ってはいた。それでもとうとう決意した。父にあったことで意固地になって自分の道を固めてしまった。未来も可能性も全て捨てて、死を見つめる青い眼だ。

「こんなこと、お前に頼むのはおかしいと思う。だけど……」

「……言ってみろよ」

「お前なりの騎士で良い。だからお前も、どうか騎士でいてくれ。最後まで」

それはつまり、こういうこと。お前は人になるな。人として幸せにならないでくれ。一緒に傍にいてくれ。お前は俺の飼い犬だろう？最後まで同じ道を歩いてくれ。付いてきてくれ。何とも我が儘な言葉。

一人で何にもならない、道を歩くのは耐え難い。もうその道は喜

びじゃない。あの人が失われたから。アルドールじゃ代わりにならない。意味はあるけど無価値な道。あの人の亡霊を追うだけの悲しい旅路だ。その度の道連れになってくれと奴は言う。

だけど俺がこいつから我が儘を言われることなんて殆ど無い。いつもこいつが我が儘な俺を立ててくれていたから。我が儘を言われたのなんて子供の頃以来かも。

「お前は俺を騎士以外の何かにしたいのか？無職か？ニートか？仙人か？」

「そ、そういう意味じゃない！」

「俺だって生きてる以上職は要る。そりゃ死ぬまで騎士ではいてやるよ。アルドールの阿呆には仕えないけどな」

「お前はまったく……どうしていつもアルドール様で落とすんだ」

ペットの役目は飼い主の気持ちを和らげ、笑わせてやることだろう。それなら俺は一級品のお犬様に違いない。悩みがどうでも良くなるようにと道化を続ける。嗚呼、阿呆だな俺。そう思っても止められない。

こいつが下らないと笑ってくれる。それだけで埋められるものがある。代用品にしてるのは俺も同じだ。同罪だ。家族でもない癖に、俺はこいつを家族にしている。居場所にしている。情けないほど傷の舐め合いだ。

でもこれで良いとは思えないから、お前は何処かへ行ってしまえばいいのに。

俺はもうどうしようもないからこれで良いとして、お前は俺が傍にいてそれで前進できるような奴じゃない。俺を捨てるべき時期が来たんだ。少しはあの叔父を見習って、人を渡り歩く術を身につければいいのに。それがお前を前進させることなのに。

叔父への敵意と憎しみから、こいつは人を俺を捨てない。何時までも留まり続ける。もたれ掛かる。

どうしたら俺を嫌ってくれるんだろう。離れてくれるんだろう。考えても解らない。あの人がいた頃は勝手に離れてくれたのに。あの人が消えてからは俺にべったりだ。嗚呼、やっぱり俺は代用品。今じゃ王の代わりに拠り所。

どうしたもんかと悩んでも、この馬鹿は何も解っていねぇ。俺を馬鹿だと思っているから、俺がここまで考え悩んでいるなんてちっとも気付いてくれやしねぇ。

賢い俺は嫌いだろう？そう思って賢くなろうとしてもこいつは俺を優しく見下すだろう。俺は何をしてもこいつには馬鹿としか映らない。だって種族が違うから。幾ら犬猫が賢くても、人間様と同列には考えないだろう？

俺を褒めるこいつは、そういう見下したものを可愛がるそれと似ている。俺は何時になったら人間に進化出来るのやら。

俺の溜息の意味さえ、こいつはまったく解っていない。結局こいつも叔父とは別方向に最低野郎な屑男。それは俺も認めよう。

横目で睨んだら今度は俺の髪を弄って遊んでいる。勝手に変な結い方をしている。人が大人しくしていれば……

呆れてもう一度。溜息一つで悩みが解決すればどんなに良いだろう。もし来世があるのならそんな世界に生まれたいものだ。

＊

「アルドール、ブランシュ卿が五月蠅いから何とかしてくれない？……ダウト！」

「うわあぁあああああああああああ！！イグニスさん強すぎです！！」

「うん、この勝負終わってからにしようよイグニス」

「そうは言うけどさ」

「……」

「トリシュー！今勝負中だからちょっと待ってー」

「いきなりどうしたんだろうね彼」
「……」
「そうだなー。またユーカーと何かあったんじゃないのか？」
「……ていうか彼もなんだってあんな人に惚れたんだろうね。まぁ僕がそう仕組んだんだけどさ。はい、上がり！一番ふかふかのベッドは僕が貰った！うわぁ！すっごいふわふわ。ふかふか！ねぇ羨ましい？御貴族様だった癖に、王様なのにソファか床になるってどんな気分？」
「……」
「にしてももう少し賭けるモノあったんじゃないか？」
「ダウトっ！」
「うわっ！ぱ、パルシヴァル……この短時間で腕を上げたな。くそぉ……あと一枚だったのに」
「そりゃあ確率的に手札が減れば怪しいよね」
「……」
「あ、パルシヴァルもこれで上がりか。させるか！ダウトっ！」
「王様、残念でした」
「ぎゃあああああああああああああああああああ」
「君上位カードなのにリアルラックも低いよね、あはははは！でもこれでアルドール床決定っ！！あ、パー君は可哀想だから僕とベッドで寝ようね」
「それじゃ俺ソファーに」
「は？何言ってんの君？」
「え？」
「君は負けたんだから誰が何と言おうとこの部屋では床以外には寝かせない。それが嫌ならこの部屋から出て行くんだね。正統派美形にして天然鬼畜ランス様に隠れ女装属性のセレスタイン卿、それから残念美形のトリシュさんにセクハラ中年色男のアロンダイト卿。選り取りみどりの野郎が君との添い寝を待ってるよ」
「何かユーカー辺りが待ってねぇ！ってツッコミ入れそうな気が

する」
「でもランスさんのお父さんなら歓迎してくれそうですね」
「歓迎っていうか歓ゲイっていうか姦ゲイっていうかなんだろうね。全裸かバスローブ姿で布団に入ってて、布団を捲って陛下へいカモンとか言っちゃいそうなイメージはあるよね」
「片手にワイングラス持ってそうです」
「ちょっとアルドール、行って確かめてきなよ」
「ちょっ、お前らもう少し王様を労ろう？護衛なんだろ？俺の貞操を守ってくれよ」
「君は野郎なんだしどうでもいいだろそんなの。そういうの言って良いのは美形か美少年だけって相場が決まってるんだよ。君平凡顔の癖に調子に乗ってるから少し痛い目見て来なよ」
「うわっ……！」

イグニスに連続的に蹴りを食らい、部屋の外まで運ばれる。
扉はすぐに閉まって鍵まで掛けられた。イグニス酷い。でもそんな酷いところがイグニスっぽくて良い。やっぱあれイグニスだ。ギメルじゃない。

「……流石我が君。上級者ですね」
「え？」
「部屋を追い出されてそのような顔を瞬時に浮かべられるとは……私はまだまだ修行が足りないのかもしれません」

何故か扉の前で警備をしていたトリシュが口惜しげに端正な眉を中央に寄せている。

「トリシュ、俺追い出されたんだけどランスの父さん以外の部屋で空いてる部屋ってある？」
「そうですね。私の部屋はイズーに占領されてしまいましたし…

…」

「ユーカーか。ちょっと頼んでみようかな」

ランスやトリシュよりはユーカーは気楽に相手が出来る。この二人みたいなこれでもかって言うくらいの美形とかでもないし変に緊張もしないしな。

「ユーカー！俺だけどちょっといいか？」

「帰れ阿呆。どうせお前の傍に変な虫が飛んでるだろ」

「アルドール様相手に無礼だぞ。はい、今すぐ開けます」

「ば、馬鹿！」

室内からはユーカー以外にランスの声。鍵が開くより早く、俺は背後で物凄い殺気を感じた。

「いいいいいい、い、い、イズーぅぅぅ

良い男は得だなぁと思った。

「それでアルドール様、何事ですか？」

そういうランスは何時も通り落ち着いているように見える。ユーカーを愚痴に付き合わせたおかげで精神的デトックスでもできたのだろう。毒素の行き着く先であるユーカーの精神状態だけがちょっと心配だ。まだトリシュに尋問されている。

「トランプで部屋決め勝負に負けて、イグニスとパルシヴァルの部屋になっちゃって、今日の寝床に困ってるところなんだ……情けない話だけど」

「そういうことでしたか」

「俺には害はないと思うんだけど、ランスには失礼だと思うんだけど俺……アロンダイト卿と同室はちょっと無理かなって……それでここの誰かの部屋に泊めて貰いたいんだ」

「まぁ、あのおっさんは誰だって嫌だよな。俺だって御免被る。あいつバスローブ姿でヘイカモンとか言ってそうだし」

「いや、全裸かも知れませんよ。それで布団を捲って待ってそうです。バスローブの場合はグラスに赤ワインとか入れて揺らしてそうな感じがします」

みんなに同じイメージ持たれてるあの人って一体……

「というよりそれが幼少時代の俺のトラウマなんですが……」

リアルでやってたのか！？どこまで予想通りなんだあの人は……

「久々に家に帰ってきたと思ったら、父さんと一緒に寝ようとか言われてちょっと喜んでたのにその図ですよ。お前は我が子をなん

だと思っているのかと小一時間……」
「あの頃の叔父さんはあれだな。子供の可愛がり方が解らないとかぼやいてたような気がするぜ」
「解らないにも程があるだろうが！！」
「まぁ、そうだよな、うん」

ランスもランスで大変な家庭にいたんだな。ちょっと可哀想な気がしてきた。

「んじゃここで二人組に分けて、そのペアと嫌なら野宿なりあのおっさんと添い寝しに行くなりするって流れでいいか？俺はトリシュじゃなければランスでもアルドールでもどっちでも良い」
「それを意訳すると、私でなければ嫌……そう言うことですねイズー。本当に照れ屋なんですからもう」
「こいつのこういうところが嫌なんだ。よし、お前ら友人同士仲良く寝ろよ。俺はアルドールでいいからアルドール残してお前ら出てけ」
「アルドール様ぁっ！アルドール様はセレスタイン卿なんて大嫌いですよね！？同じ空気を吸いたくなんかないですよね！？虫唾が走るって顔に書いてありますよね！？それじゃあここは是非私にそのお役目をお命じにっ！！ランスっ！僕らは親友でしょう！？親友の恋路の邪魔だてなんて無粋な真似っ！君のような男がするはずない！そうですよね！？」
「お前俺を貶めてまで俺と同室なりたいのか？」
「時に嘘を吐いてでも真の愛を掴み取る。惚れ直しましたか？」
「ああ、見損なった。やっぱお前は無しだわ。まだあのおっさんと添い寝した方マシな気がして来た」
「イグニス様とパルシヴァルがいない以上……カード的にはやはりユーカーが適任か。トリシュ、俺の部屋に戻ろう？」
「嫌ですっ！！昨日も見張りの所為で殆ど一緒にいられなかった

んですよ！！おまけにパルシヴァルガードとか作って私は近づくこともままならないという苦行を味わいました！」

「ったく、仕方ねぇな」

このままこじれては何時までも俺の寝床が決まらない。俺の困った様子にユーカーは、心底嫌そうな顔で溜息を吐いた後、トリシュの腕を掴んだ。

「ランスとお前出てけ。これ以上騒がれたら迷惑だ。こいつは俺が引き取ってやる。たまには主従同士親交でも深めやがれ」

「い、イズーぅううううう！！やはり貴女はなんて優しい人なんだ！！」

よくわからないまま俺とランスはトリシュに外に追い出され、俺は本日二度目の廊下入り。

隣のランスから感じる殺気が凄い。穏やかな笑みを湛えているがどす黒いオーラが出ている。

それが少し昔のイグニスに似ている。そんな風に思ったら、怖さも半減。可愛いところもあるものだなんて好意的に解釈してしまう。ランスにとってのユーカーは、イグニスにとってのギメルなんだろうな。俺の視線に気付いたのか、ランスもようやく我に返った。

「失礼しましたアルドール様。すぐにご案内いたします」

だけどその口調はやっぱり固い。気を使わなくて良いのにな。そう思うけど……ランスの父さんに忠告されたことを思い出す。俺がランスを友人だと思うことがあってはならない。彼はそう言った。

でもそれはこんな風にずっと気を使われ続けるってことで……俺は今の空気がどうにも肌に馴染まない。ランスやトリシュとも、ユーカーのように言いたいこと言えるような間柄になりたい。そう思

うのはいけないことなんだろうか？

「ランスはさ……」

「はい」

その部屋はそう遠くない。鍵を開けて中へ招かれ……彼が灯りを付けた時、俺はそう切り出した。

「くだらないと思わない？俺みたいなガキに仕えて」

「アルドール様？」

「ランスはそれでいいの？本当は俺なんかじゃなくて、他のものを守りたいんじゃないの？今だってそうだ。ランスは笑ってるけど、本当はまだユーカーと話したいことがあったんだろ？」

あの殺気。あれの正体。それがこの人の素顔。

俺にはそれを向けはしない。感情を殺して唯微笑む。でもそれで本当に良いの？俺にそんな価値はないのに。

「俺はランスより何も出来ない。強くもないし頭も良くないし馬も剣も満足に操れない。そんな子供に仕えて、ランスは本当にそれでいいの？」

俺の言葉に彼が青い瞳を見開いた。だけど俺はここで言わなければ、何時までも言えないような気がした。だから言葉を続けて行く。

「ランスは俺が好きで俺に仕えてくれているわけじゃないんだろう？だから俺はランスに認められるような王になりたいと思う。だけど……そうなれるまで、ランスには嫌な思いばかりさせてしまうと思うんだ」

だって俺はこの人に何一つ勝てないんだよ。彼だって何一つ負けていないと自負しているだろう。そんな格下の相手を崇める理由が何処にある？何処にもない。あるとしたらそれは先代アルトリウスさんの栄光だ。俺の力じゃない。

「だから俺はランスに遠慮をしないで欲しい。助言をして欲しい。俺の駄目なところは駄目。嫌なところは嫌だって言って欲しい。俺が立派な王になるには、唯言うことを聞いて貰えるだけじゃ駄目なんだ」

情けない言葉だと思う。それでも俺は至らないところばかりで……自分一人の力で立派な追うに慣れるとは思えない。周りに俺より何でも出来る人達が置かれているのは、彼らから学んで吸収しろというイグニスの心遣いなんだと思う。

「俺は……ランスにもう少し、思ったことをそのまま言って欲しい。それが俺のためになると思うから。……それに困ったことがあるなら俺も聞きたい。一緒に考えたい。それが国を救うための第一歩なんだと思う」

国なんて膨大なものどうやって救えばいいのか解らない。だから俺はまず俺の周りの人を、周りのことを変えていきたい。ランスとランスの父さんのことも解決したい。そんな簡単な事じゃないのは解ってる。だけどそれさえ出来なくて、どうして俺に国が世界が救えるんだ？一人を救えないものは全てなんか救えない。全てはその積み重ね。俺は一人を救い続ける。諦めたらそこで終わりだ。きっと何も掴めない。どこにも辿り着けずに落ちていく。

「ランスはどうしたいんだ？親父さんとのこと、ユーカーとのこと……もしそれでランスが悩んでるなら俺も一緒に考えさせてくれ」

「アルドール様……」

俺の言葉にランスは笑う。綺麗な笑顔だけど、それはやっぱり拒絶なんだ。ランスがこういう風に笑うときは騎士の顔をしている。理想の騎士だ。俺の言葉ではその仮面を剥がせない。

「お気持ちはありがたいですが、俺は何も悩んでいませんよ。悩みがあるとすればあの山賊のこと、それからカーネフェルのこれからです。ここからどのような策を取ればいいのか……」

立派な騎士らしい立派な言葉。国を憂いるその言葉。そこにランスはいない。いるのは騎士だけ。国のため人のため唯それだけを考える。

だけど本当のランスはそこまで立派じゃないんだろう？そう思わせているだけなんだろう？些細なことで怒ったり、仲の良い友達を取られて妬んだり、ちょっとしたことで悲しんだりもするんだろう？

だけど俺が幾ら彼を見つめても、見上げても……彼はあの顔で笑うだけ。ランスだけどランスじゃない。ユーカーが傍にいなければ通訳もして貰えない。本性も引きずり出せない。

「……うん、そうだね。それはまた明日、イグニスを交えて話し合うしかないだろうな」

諦めたように笑う俺に、一瞬彼の仮面が揺らぐ。だけど彼はそのまま何も言えずに、また仮面を付け直す。

「ええ。明日も忙しいでしょうから、今日はもう休んで下さい」

そう言って俺に寝台を渡して自分はソファーへと向かう。何を言っても多分聞いてくれない。命令だって言っても駄目なんだろう。

俺はまだ、ちゃんと彼の主には認められていないのだから。

＊

俺は間違わない。俺はあの男とは違うんだ。

そう強く自分を戒める。それでも真っ直ぐな言葉が胸に突き刺さるのをランスは感じていた。

（アルドール様……）

下らない。あんなこと。あんな最低な男のことで騎士の俺が揺らぐわけにはいかない。何時でも同じように戦えなければならない。何時も強くあれ。常に勝ち続けろ。

地の利だカードだ、言い訳だ。

俺はユーカーのことでさえ、揺らいではならない。何時も冷静に判断を下さなければならない。あいつを見殺しにしてでも俺は騎士でいなければならない。

だから俺はあいつにも騎士として生きて欲しい。あいつが人として俺を見ているなら、それは間違いだ。俺がお前を見殺しにするように、お前も俺を見殺しにすればいい。感情で生きるな。心を縛れ。身体を全て剣に変えろ。それでこの身が折れるまで戦えばいい。

そうだ。俺が見るべきはあいつでもあの男でもない。俺の主はアルドール様だ。この人のために俺は生きて死ぬんだ。

弱くて心優しいあの少年。俺なんかの個人的な下らない悩みなんかに付き合わせてはならない。共有すべき悩みは国のように大きいもの。あの人は間違っている。俺を救えても世界は国は救えない。

身近な者を見捨てても犠牲にしても、前に進むことが大事だ。ひび割れた世界をその手で受け止めるためには。犠牲を最小限に、そのためになりふり構わず進めるか。それが王のすべきことだ。

この点はアルト様も間違っていた。その間違いが取り返しの付かないことをした。だけどその取り返しの付かないことがユーカーを守ってくれた。

俺は考える。もし死んだのがユーカーで帰ってきたのがアルト様だったなら。

……それでもやっぱり俺の心は半分死んだ。俺は完全に騎士になり、自分の心を無くしてしまう。その場合俺はユーカーにそうしたようにアルト様を殴れないから、他の者を殴るようになっただろう。アスタロットを失った頃のユーカーみたいに、人を斬ることでしか生きられないものへと落ちる。

アルト様はユーカーを生かすことで俺の心を生かした。完全な騎士になるなと俺に最後の忠告を送るように。その忠告を俺は受け入れる。あの人が最後に俺にくれたものなんだから。だから俺はあいつの前だけでは騎士にはならない。

でもアルドール様相手なら別。アルドール様をアルト様のようにはしない。

アルドール様にはあの方に出来なかったことをして貰わなければならない。あの人の愛したこの国を守って貰わなければならない。俺に向けられる視線が悲しみを帯びていても、俺は……あの人に近づいてはならない。

俺はあの男とは違う。王との距離を見誤らない。無礼を裏切りを働かない。俺は忠実な僕で在り続ける。それこそが、騎士の鏡というものだ。

俺は騎士なんだ。騎士になると言うことは国に魂を売ることだ。それなら俺はもう死んでいる人間だ。死んだ人間は何も感じない。怨んだりしない、憎んだりしない、悲しんだりなんかしない。命令通り誰が相手であっても剣を振るうだけ。それが騎士だ。

何も考えられなくなる位、忙しさで塗り潰して欲しい。そんな命令が、命令が……命令が欲しい。

8：Amantium irae, amoris integratio est

6章サブヒロイン、エレイン登場。
だというのに何故か野郎共の絡みの方が強いので注意回。
女装有り、変態有り、なんでもあり。
ランスの父ちゃんのせいで本編までおかしな事になってきた。メインヒロイン登場までの辛抱。

8：Amantium irae, amoris integratio est

「昨日の彼女は、―Ｚｉｒｋｕｓｚｅｌｔ（サーカス小屋）と言う名の山賊、そのお頭にしてうら若き乙女だ」

翌日の話し合いでアロンダイト卿ヴァンウィックはそんなことを言い出した。今のは後半部分は必要ないじゃないかとアルドールは少し思った。

「彼女はタロック語しか理解できないようでな、あることないこと他の連中に吹き込まれているようなんだ」

「……レーヴェが現れたのはいつ頃なんですか？」

「元々この辺りに山賊は居たんだよ。セレスちゃん……いや、セレス君が北部に討伐に来ることは多々あっただろう？」

言い間違えにユーカーが叔父をぎりっと睨む。その目が寝不足そうに見えるのは、たぶん俺達の知らないところでトリシュとの攻防があったからだろう。ていうかここにトリシュの姿がないのは何故だろう。

「ユーカー、そう言えばトリシュは？」

「あの馬鹿なら問答無用殺戮血染め枕投げで沈めてやった」

「何やってんだよユーカーは……」

「だってあいつ五月蠅ぇし、スキンシップの一環だって言って気絶するまで枕投げてやったんだよ。あいつはイズーを傷付けることなど出来ませんだのなんだのってやり返してこねぇし。気絶した隙に縛って適当に転がしといた」

「なのにお前は眠そうだな」

「あいつ何気に避けるの上手ぇんだよ。沈めるまで時間食った。

あいつ沈める前に俺の体力尽きて気絶するかと思ったぜ」
「ああ、そっか……」
「つまりあれだな。私の弟子は最終的に息遣いの乱れるセレス君に辛抱堪らんとデレデレになり卒倒したのか」
「ああ、血染めって鼻血だったんですか」
「あいつこの数日でほんと人生と周りの信頼の坂降りまくりだよな」

「でもユーカーなんだかんだで付き合い良いよな」
「俺はあいつは嫌いだが、あいつをいたぶるのは好きなんだよ」
「そうですね、セレスタイン卿はこう見えてSっ気ありますからね」
「こう見えてってどう見てたんだてめぇは」

ああ、言われてみれば。登場当初はそんな感じだったな。でもルクリースに負かされて吊されたりしてたから、すっかり忘れていた。

「セレスタイン卿、トリシュさんを連れてきてください。彼にも話聞いて貰わないと困ります。同室引率者としての責務を果たしてください」
「はぁ？寝惚けたあいつが何してくるかわかんねぇだろ」
「それもそうか。それじゃあ可愛い甥っ子のためだ。叔父さんも付いて……いや、突いていってあげよう」
「無理に誤変換に言い直すな。朝っぱらからセクハラ止めろよ。パー坊、お前も来てくれ。どうせこんな話聞いてもちんぷんかんぷんだろ？」

俺にいいよなと視線を送ってくるユーカー。確かにパルシヴァルはよく分かっていない上に眠そうだ。俺は頷き許可を出す。イグニスも文句を言ってこないから問題はないはずだ。

「パー坊じゃないです」
「はいはい、んじゃパルシヴァル」
「はい！ご一緒しますセレスさん！」

アロンダイト卿ヴァンウィックは、叔父さんも連れて行ってみたいなことを叫いていたが、ユーカーに足蹴にされて扉を閉められたところで、急に真面目な声色に戻った。

「さて、癒し系の二人が消えたところで殺伐した話に戻ろうか？」
「い、癒し系？」

パルシヴァルは解るがユーカーはどうなんだ？あれは卑しい系の食意地系じゃないのか？いやでもランスとかこの人がユーカーからかって癒されてるのは確かみたいだからアロンダイト家専用癒し係ではあるのかもしれない。

「おじさんとしてはいやらし系の方がもっと好きなんだけどね。この中での一番のいやらし系は実は神子様なんかじゃないかと思うんだ。その露出度の低いストイックな修道服の中にはどんなエロスが隠れ潜んでいるかと思うと興奮するね」
「ははは、アロンダイト卿は冗談がお上手ですね。本気ならこの国が落ち着いた後に僕の手下に暗殺させますよ？」
「ははは、神子様もなかなか冗談がお上手だ。不殺の聖十字を使ってなかなかいい皮肉をおっしゃる」
「神子様への無礼はほどほどにして下さい。第一誰も貴方の好みなんか聞いていません。さっさと本題に戻ってくれませんか？」

父親に向かうランスの視線も言葉も冷たく刺々しい。それにヴァンウィックは乾いた笑いを漏らして小さく溜息。

「やれやれ。まぁ、つまりだな。この辺りの賊はセレス君がストレス解消相手ってことでそりゃあぎったぎたんにして来たんだ」
「でもタロックの欲しがる物資は南部に集中しているって話だったよな、だよなイグニス？」
「都があるのも南部だしね。南部の守護は結構厚い方だったんだよ。セレスタイン卿……ああ、これはユーカーのお父上の方ね。彼が失脚さえしなければもう少し渡り合えたと思うんだ。彼は酷い父親かも知れないけど、忠臣であるのは事実だからね」

シャラット侵攻により都貴族から非難を受けて軍事力と支配権を削られた。その結果が今回の敗北に繋がるのだとイグニスは言う。

「その浮いた金で都貴族達は遊んでるんだからほんと腹立たしいよね。死ねばいいのに」
「ははは、今度の神子様は過激でいらっしゃる。夜の方も過激だと面白いんですがな」
「……下らないことを言う暇があればさっさと話して下さい。ユーカーが帰ってくる前に終わらせられるものは終わらせておきたいです」

下世話な話に入る度、ランスが苛立ちを顕わにする。俺の視線に気付いては、何時も通りを演じようとするけれど、苛立ちが大きすぎてそれが隠しきれていない。仮面の下からどす黒い感情が滲んできている。

「はぁ……多少の冗談を嗜まないと女性も寄って来ないぞランス」
「国の大事に女性と遊ぶ暇などありません」
「どうしてこんな堅物になってしまったんだか。いいか息子よ。男で固くて喜ばれるのは性格でも意思でもなく三本目の足くらいだ

ぞ？」
「二足歩行になりたいのでしたらこのアロンダイトで切り落として差し上げましょうか？」
「ははは、それは遠慮したいな。生憎私はそういう趣味はないんだよ」
笑顔で得物に手を掛けたランスにヴァンウィックは目を逸らした。こうして見ると本当、似てるのは顔だけなんだなと感慨深い。
「さて、何の話だったかな」
「南部と北部の警備の話ですよ」
イグニスの助言を受け、ヴァンウィックはああと頷いた。
「神子様の言うように、南部はカーネフェルにとって要所だ。だからそれなりに警備も置いている。だから略奪者の数で言えば、被害は北部の方が多いんだ」
地図に印を付けて、沿岸に丸。山脈にも丸。そして数値を書き込んでいくヴァンウィック。北部と南部のその差は歴然。
「南北を繋ぐ橋の周りには、北部に積み荷が運ばれるのを待ち受ける者がいる。あの山賊達の居城は丁度いい場所なんだ。レーヴェが現れたのは、ここ1、2年のことだ。それまでこの一帯は山賊同士勢力争いをしている狩り場で……それをまとめ上げたのがあの可憐な少女というわけだ」
「しかし噂は聞いてもお頭自身山から下りてくることは少ない。だから昨日のはとても珍しいことだ」
「それなのにどうして噂が？」

「レーヴェは気紛れだがとんでもなく強い。それは実際戦ったお前が一番よく知っているだろう。その手は暫く使い物にならんはずだ」
「……見くびって貰っては困ります。俺だって数術使いだ。あの程度の痺れ、もう消えました」
「え！？ランス怪我してたのか！？大丈夫？！」
「心配ありませんアルドール様。もう完治しました」

にこりと笑って手を見せるランス。確かに怪我は見られない。

「彼女は女とは……人間とは思えない怪力でした。この剣だから刃こぼれしませんでしたが……迂闊にやりあえばアロンダイトも折られていたかもしれない。鬼と噂されるのも理解しました」

彼女は短剣。それでもそこまで力を込めてきていたのだと言う。俺はランスが劣勢だったのは地の利と怒りの所為だと思っていた。しかし、それだけではなかったのだ。

「ランス様より下位カードということはアルドールはまず無理。やり合うなら僕かセレスタイン卿かパルシヴァル君ってことになりそうだ」
「……そう、ですね」

イグニスの言葉に少しランスが悔しそうに呻いた。

「でもまだ見習い騎士も同然のパルシヴァル君が現役山賊とやり合えるかは難しい。となれば僕と彼でやるしかなくなる」
「あのさイグニス」
「何？」
「でもさ、ユーカーは北部に何回も討伐に来てたんだろ？レーヴ

ェとやりあったことってないのか？」

昨日の様子だと顔見知りという感じは全くしなかった。それでも手下達とぶつかったことくらいはありそうなものだ。

「アルドール様。討伐任務をしていた頃のあいつはとても荒れていたんです。山賊さえ震え上がるよう、手加減無しで片っ端から殺していたんですよ」

「ゆ、ユーカーが？」

ちょっと信じられない。ユーカーはなんだかんだで甘いから、半殺し程度で済ませてそうな印象があった。

「そんな事が続けば山賊側からは目撃者無し。それでも住人達の噂を聞き、セレスタインの名くらいは知ったんだろうね」

互いに名と評判は聞きながら、遭遇したことがないユーカーとレーヴェ。そんな二人が真っ向勝負をしたならば、どんな結果になるのだろうか。

（でもランスが押されてた相手だ。ユーカーに何とか出来るとは思わないんだけどなぁ……）

ランスが戦ったところを見たのは昨日が初めてだけど、剣の扱い方からしても騎士としてはユーカーよりランスの方が上だと思う。

そんな俺の表情に気付いたのか、ヴァンウィックは苦笑する。

「ここだけの話、セレス君は夜は凄く強い。普段の三倍くらいはやり手になる」

「え？」

「何故だか知らないが、彼は夜襲をことごとく返り討ちに出来る技量がある。だからセレスタインの名を聞いて夜に襲ってくる馬鹿はいない。任務でこの付近を通る時、彼は夜間の内に通るようにしていたんだろう」

そうか。ユーカーは片目を隠しているが、別に視力を失っている訳じゃない。片目を夜目に慣らしているのだ。他にも何かあるのかもしれないが、よくはわからない。よくわからないがユーカーは暗いところの方が強いらしい。

だから一昨日は見張りを買って出てくれたのだろうか？見張りの交代を彼が他の騎士に頼んだのは早朝になってからだったと思う。

「その噂が一人歩きして、あの辺ではセレスタインと唱えれば山賊が寄って来ないとまで言われています」

「でも昨日山賊達の前でイグニス、セレスタインって口にしてなかった……？」

「毒に倒れてへばってるようなの本物だと思うわけないじゃないか。向こうのイメージでのセレスタイン卿はあんなちびでもないし屈強な猛者みたいな先入観があるんだよきっと」

「なるほど……」

「昨日のはアロンダイト卿の噂の方を恐れての撤退だったようですね」

「ははは、私などあの甥っ子に比べれば大したことはありませんよ。捕らえた山賊は私ルートに入って朝チュン迎えるだとか１８禁通り越して１８０禁くらいのことをされるだとかもう昨日までのようには生きられないとか色々言われていますがね」

それは確かに怖いと思う。実際この人昨日も片っ端から口説いていたしユーカーよりも現実味に溢れている。

「だから北部は嫌いなんだ……」

ランスが遠い目をしている。北部でアロンダイトを名乗るとそういう目で見られると。南部じゃ騎士様騎士様ってあんなに人気なのに……お父さんがこんなのだってだけでランスも可哀想なことになっているらしい。

「でも……それっておかしくありませんか？討伐ではなく、ユーカーにも避けさせるなんて」

「あいての技量が解らない以上下手に軍勢も向けられません。かといってあいつ一人でどこまでやり合えるかもわからない。被害を最小限に留めるには最善かと」

先王の判断に異論を唱える俺に、ランスがその説明をしてくれた。

「僕もランス様の意見には同意ですね。アルドール、今はあそこを無事に切り抜けられただけでも良かったと思ってよ。今は山賊退治より先にやるべき事がある」

「やるべき事？」

イグニスはそう言うが、俺にはわからない。北部に来たものの、ここからどうすればいいのかまるで見えない。

「僕らは都を取り戻すために、まずは北部の結束を固め化ければならない。そのためにはアロンダイト卿のお力添えは必要不可欠。協力していただけますよね？」

「都には私も忘れ物がありましてな。そうですね喜んで」

アロンダイト卿のその言葉から、しばらくはアロンダイト領に身を預け、そこから北部をまとめていくという方向に決まった。

「あの山賊のことが気になりますか？」

まだ前の話題を引き摺っている俺に、ヴァンウィックが尋ねて来る。

「レーヴェが居ることで、賊は一種の節度を守っている方ですよ。彼女はまだ子だ。だからそこまであくどいことを思いつかないんだろう。一時期より被害は収まったものだ。彼女があそこにいることで北部への海賊被害が減ったことは確かです」

「だから王は彼女には手を出すなと？」

「ええ。そういうことです」

頷いた後、ヴァンウィックは小さく微笑を浮かべる。あくどい笑みだ。

「それに昨日はあっちこっちで北部にセレス君が来たことを言いふらして来ましたからね」

「ランスっ！匿ってくれ！」

「ユーカー！？」

ヴァンウィックが言い終わるか否かのところで室内に飛び込んでくるユーカー。その後ろからは歓声めいた声が聞こえる。

「なんなんだあれ！何なんだよあれ！！おっさんてめぇ何しやがった！！」

「こう見えてセレス君は北部では人気があるんだよ。君が滞在する場所は賊に襲われないからね。あと女装祭りでの君の武勇伝を尾鰭を付けて話してあげたところ、妙なファンも付いてな」

「尾鰭付けんなっ！！！歓声の半分が野太い声ってどういうこと

だ！！」
「いやいや、君は良い客寄せパンダ……げほん、兵寄せパンダだな。男の少ないと言われているこのカーネフェルからあれだけの支持者を集めるとは。家で死ぬのを待とうとしていた老人も、布団を被って震えていた中年層も君に一目会いたくてこれだけ書類を集めてくれたんだぞ？」
「こ、これって……」
「私も唯北部を遊び歩いていただけではありません。女を時に男を口説く傍ら、兵の志願を募っていたんですよアルドール様」
分厚い書類の山を俺とイグニスの前に叩き出すアロンダイト卿ヴァンウィック。そこには老若男女の名前が書き連ねられていた。
そのどや顔は格好良く見えるが、ユーカー苛めもここまで来たか。親子揃ってまぁ鬼畜。

「ランスの持っていた幻のセレスちゃんの一枚を、最後の帰郷の際に奪っておいて、それを複製して配ったんだがこれがかなり反応良くてね。カーネフェルの女から失われた清楚さがそこにはあると人気者だよセレス君」
「野郎にモテても嬉しくねぇっ！！つーかランス！あの時のか！あれは捨てろって！捨てたって言ったじゃねぇか！！」
「初出場で優勝まで輝いた女装祭りでのお前の雄姿じゃないか。そんな捨てるなんて勿体ない。ゴミ箱に捨てたのをアルト様が拾ってきて下さったんだ！言うなればあれはお前だけではなくあの方との思い出でもある俺の宝物だ！」
「っていうかアルトのおっさんまで……！！どうしてはそんなにランスに甘いんだっ！！俺をからかうのが楽しかったのか！？酷ぇっ！！」
「ちゃんとアルバムに入れて保管して持ち歩いていたのに……いつの間にか最盛期の一冊が消えたと思ったら！！貴方が盗んでいた

んですね！？返して下さい！！」
「返して欲しくば“お父様愛しています大好き”の後にほっぺにちゅーを所望する」
「よし、頼んだユーカー」
「なんで俺が代役なんだよ！？」
「元はと言えばお前の写真じゃないか」

ぽんと肩を叩かれて、ほら行けよと視線で促されるユーカー。ほんとランスはユーカー相手だと素で鬼畜入るなぁ。

「うぅ、嫌だ。死ぬほど嫌だぁ……」
「そうだなぁ。そのままでは君も恥ずかしいだろう。それでは女装してきてくれても構わないぞ？」
「もっと嫌だ！！」

半泣きになってヴァンウィックに噛み付くユーカー。そんな彼に跪き、レースのハンカチを差し出し、にこりと優しく微笑むのはトリシュ。

「わかりました、愛しのイズーのためです。私がやりましょう」
「と、トリシュ！？」
「見ていて下さい愛しのイズー。このトリシュ＝ブランシュの生き様を！！」

おお。初めてユーカーがトリシュを見直したみたいな目で見ている。今のは好感度が1位は上がったんじゃないのか？

「というわけで師匠。僭越ながらやらせていただきますが、私にもその幻の一枚、いえアルバムごと譲って下さい」
「やっぱてめぇも俺の敵だっ！！信じた俺が馬鹿だった！！」

＊

窓の外の群衆は本当に凄い数だ。宿の外では更に志願者と書類が増えていく。

「い、いやでも凄いよユーカー」

「褒めたって何も出ねぇからな」

ユーカーはすっかりふて腐れている。そりゃそうだ。客寄せパンダよろしく、また女装させられたのだ。向こうからはこっちの声が聞こえない。だから恥ずかしそうにしてる所やふて腐れている様も女装姿だと儚げとか物憂げに映るから不思議だ。これはユーカーなのに。

「でも別に女装の力だけでもないんだろ？ユーカーが北部で頑張ってたから、みんなお前を信じて頼って来てくれたんじゃないか」

「……んなの重いだけだ、俺は最悪この国捨てるつもりだったってのに」

どうして俺なんかにしがみついてくるんだよと、ユーカーは本当に嫌そうに溜息を吐く。それすら窓の外からは違った風に映るらしく、国の行く末を憂う切なげな眼差しとかそういう解釈がなされているようだ。

「俺にはもう……あいつ以外守るものなんか……」

「ユーカー……」

俯くユーカーに俺が言葉を無くしたその時。扉を開けて室内に入ってくるイグニス。

「セレスタイン卿、貴方にお客様ですよ」
「次は何させようってんだよ……」
嫌々後ろを振り向くユーカー。その動きがそこで止まった。
「お帰りなさいませ！セレス様！」
「よくぞご無事で！！」
「お、お前ら……」
室内に流れてきたのは、二人の女性兵士。ユーカーの前に跪き、報告をと口を開いた。
「……数は減りました。それでもセレス様の留守を預かろうと今日まで戦って参りました」
「お噂を聞き、ここまで参った次第です」
橋を壊した時に、ユーカーは全員死んだと言っていた。しかし、そうではなかったのだ。涙を浮かべるユーカーに彼女たちは不敵に笑う。
「勝手に殺さないで下さいよ。そんな簡単に死にませんよ。セレス様の部下ですから」
「逃げることとしぶとさには自信があります」
「おや、そう言えば言い忘れていたな。すまないすまない」
女兵士達の後ろから現れたヴァンウィックがわざとらしい笑みを浮かべる。
「彼女たちは北部でザビル河沿いの警備に当たってくれている。

タロックはこの北部に二分し滞在しているからね」

これから南部に渡ろうと河の前で立ち往生している者。それから北部に居座り北部の支配を固めようとしている者。

言われてみればここまで、北部のタロック軍については何も聞いていなかった。南部へ向かうため北部は通り過ぎるだけの者が多かったとは聞いていたが……都が落とされた今、無理に河を越える必要はない。北部の足場を固めるため、また北上して来る者も出てくる。ヴァンウィックはそう言った。

「敵が今居る場所は解りますか？」

「ええ。アロンダイト領より北。今捨て置かれた古城を奴らは陣取っています」

「それじゃあ河を渡るのを諦めて……南と北から攻められたら」

「今度こそ背水の陣だね」

イグニスの言葉に俺もユーカーも息を呑む。だけどイグニスは違う。そこで不敵な笑みを浮かべた。

「でも、だからこその双陸だよ」

地図の上で都を指さして、イグニスはにたりと笑う。

「教会から入った情報だ。双陸は都の法整備の他、橋の建設計画を打ち出した。北部の支配を行うためにも、物資を送るためにも橋は必要だからね」

双陸は人格者だ。彼に支配させること、それがカーネフェルにとって良い方向へと変わってくれる。彼が北部の人々を兵をそのままには出来ないと、見越してのイグニスの策。彼のその正しさが、背

水の陣を打ち破る。
都を落とすのが彼の役目。落とした以上、それ以上の被害を望まない。新たな命がタロック王から下らない限り、彼は敵だが敵じゃない。

「だからザビル河流域に駐屯している奴らは北上しない。南と北から建設作業を行い、短期間で橋の修繕を考えるはずだ。僕らは橋が完成するまで待って、その間に北部の支配を進めよう。兵達の訓練もその間でどこまでやれるか解らないけどやるしかない」

「唯、セレスタイン卿が会ったタロック王。彼がこの北部にいるかの所為もまた否定できない。その古城には彼がいる可能性もある。油断は禁物だよ」

まず討つべきはエルス＝ザインだと、イグニスが口にする。
狂王と双陸の間の情報の運び手。そこを断ち切らなければ駄目なんだとは、彼が再三言ってきたこと。

「……んじゃアロンダイト領で、その古城とやり合う。そっからまず北の敵をやっつける。そこで一緒にエルス＝ザインの野郎をとっちめる。そう言うこったな」
「言うのは簡単ですがね……」
「カードとしては狂王もAなんだろ？幸福値の差なら……俺なら余裕で殺せはする。そういうことだよな？」
「理論上はそうです。ですが、王の所まで簡単に辿り着けるとは思いません。いずれにせよ、簡単な仕事ではありませんね」
やる気を取り戻したユーカーの言葉を、遮るイグニスは何かの不安を感じているようだった。

「でもとりあえずはアロンダイト領に向かう。それで間違いはないんだよな？」
「……まぁね」
俺がそう言うと、イグニスはとりあえずは頷いてくれた。
「セレスタイン卿のお陰で、北部の人はアルドールにもそこまで反感はないみたいだよ。あのセレスタイン卿が仕える人だって」
「別に仕えてはいねぇけどな。仕方ねぇから表向きはそう言うことにしてやるよ。カーネフェルとランスのためだ」
部下の無事を知ってか、ユーカーもほんの少しこの国に未練を取り戻してくれたらしい。だからいつもより俺への風当たりも冷たくない。
次第に日も暮れ……外の人垣も収まってきた。この街だけでも志願兵もかなりの数が集まった。後は明日……アロンダイト領に向けて旅立つだけ。
狂王とやり合うかも知れない。そう思うと脅える気持ちは、不安は俺にもあるけれど。イグニスが不安がっている、こんな時くらい俺がしっかりしなきゃ。俺がイグニスを安心させてやれるような……そんな、立派な王に。
緊張を和らげるため深呼吸を俺が始めた時……廊下を駆ける慌ただしい足音。そして室内に飛び込んできたのはこれまで見たことが無いような危機迫る顔したランス。
「ユーカーぁあああああああああ！」
「う、うあ！な、何だよランス！？」
「匿ってくれ！頼む！」
匿う？そう言いながらランスがしたことは、何故か女装ユーカー、

セレスちゃんに思いきり抱き付くことだった。
いきなり尊敬する従兄に抱き付かれて目を白黒させているユーカーは、しどろもどろになりながら、今の状況を分析している。
「は？お前まで何か……？確かにお前は人気あっけど叔父さんがはっちゃけ過ぎてるせーで、北部じゃそこまで……」
「そうじゃないんだ！」
「ラ・ン・ス様ぁあああああああああああああああああああああああああ」

その声は、甲高い。幼い女の子の物だ。そしてその台詞全体的にハートマークというか好意が思いきり乗せられている。
「き、来た！彼女が来たんだよ！！うちの領地からっ！！」
「あ、あの声まさか……」

その声に脅える騎士二人。目を見合わせて、ほぼ同時に頷いた。
「解ってくれたか。頼んだぞ、俺に合わせてくれ」
「くそっ……」

舌打ちし、ユーカーは眼帯を右から左に付け替える。それが済むと同時に、ランスが鍵を掛けたた扉が開けられた。
「嫌ですわぁランス様ったらぁ！お帰りになられたのなら恥ずかしがらずに私の所へ来て下されば良いのに」
「や、やぁ……久しぶりだねエレイン」

金の髪に青い瞳。その青はユーカーのそれよりもずっと濃いがランスよりは大分明るい。それでも美しい金髪だ。彼女も恐らく真純

血。巻き毛の髪をリボンで結い、可憐なドレスに身を包む……明るい笑顔の素敵なお嬢様。フローリプと同じくらいの年だろうか？
俺がフローリプを恋愛対象に思えなかったように、ランスも彼女をそんな風には見られないようで、熱い視線を送られても全く嬉しそうではない。

「あら？セレスお兄様は？お二人がご一緒ではないなんて珍しいこともあるものですのね。……というか噂ではこの街にセレスお兄様もいらしたとお聞きしたのですけど？」

この子がエレイン＝シャラット？彼女は確かユーカーの婚約者アスタロットさんの妹。だから彼を義兄と呼ぶのか。もしこの二組の男女の婚約が上手く行っていたならランスとユーカーの関係がまたややこしいことになっていたのか。

「まぁ、どうでもいいですわ。お兄様がいないのなら私とランス様が二人っきりということですものね？」

うわ、この子凄い。俺とイグニスとランスの父さんスルーした。存在そのものをデリートしに来た。

「ら、ランス様！何をなさってるんですか！？」

そしてセレスちゃんも今まで眼中に入っていなかったのか。言われてみれば彼女はさっきからずっとランスの顔だけロックオン。未だに顔ばかりを見ている気がする。

「婚約者の私というものがありながら……この泥棒猫っ！売女！私のランス様から離れなさい！！」

そしてその過激な暴言。お嬢様の割りに気性が荒いなこの子。シャラット領で見たアスタロットさんとは全く違う。
ユーカーの背中をぼかすか殴るその少女の攻撃からユーカーもといセレスちゃんを庇うよう抱きかかえるランス。

「な、何故そのような雌豚を庇うんですかランス様！！」

「言うなぁ……あの子」

「……」

乾いた笑いを漏らす俺の横で、イグニスはなんだか微妙な顔をしている。

「あれ？どうかした？イグニス？」

「いや、何でもないよ」

毒舌家のイグニスがこんなに吃驚？するなんて。自分と似たタイプの人間が苦手ってことなんだろうか？

「すまないエレイン。俺は君とは結婚できない」
「どうしてですの！？ランス様がお帰り下さらなかったこの三年間！エレインは女を磨いてきましたのよ！？小柄身体！華奢な肢体！マニアには堪らないこの胸囲！ランス様に相応しい女になりましてよ！？」
「それまだまだ子供って事じゃないのかな……？俺はマニアでもないし、君のような年下の女の子と結婚だなんて出来ないよ」
「エレインは、もう年だって二桁になりましたもの！何時でも結婚出来ますわ！そんな女と遊ばなくとも私が満足させて差し上げます！」
「そうじゃない……そうじゃないんだ」

子供だからそういう風に思えないっていう断り文句じゃ通じない。それを予測してのランスの行動。

「俺が君と結婚できないのは……この子を愛してしまったからなんだ！」

「っ！？」

セレスちゃんが口をぱくぱくさせながら身体を震わせている。話を合わせるとは言ったがここまでドストレートな手法で来るとは思っていなかったわけでもないだろうに動揺している。顔が真っ赤だ。

「信用できません」

しかしエレインはランスの言葉を真っ向から否定。

「その様子じゃそっちの女の方はランス様に惚れているようですけど、ランス様がその子を愛しているようには見えませんわ。所詮口だけです。私にそのような嘘が通じるとでも思ってらっしゃるの？」

惚れてねぇよというユーカーの心の叫びが俺の元まで届いてくる。頑張れユーカー。見てる分には楽しいよ！親指を立てて頑張れよーと心の中で声援を送ったら涙目で睨まれた。女装中だからあんまり怖くない。むしろ怖さが減るからいっつも女装してくれてればいいのに。

イグニスはイグニスでユーカーが面倒事に巻き込まれているのが面白いのか、いつもの余裕を取り戻し、失笑しながら彼を見下している。

ランスの父さんアロンダイト卿ヴァンウィックは最初こそ神妙な

顔をしていたけれど、今はイグニスと同様、若い三人を見つめてにたにたしている。

「そうだぞ馬鹿息子。愛は言葉より行為。そんな言葉誰でも言える」

そして悪ノリし出した。これはランスへの嫌がらせなのかユーカーへの嫌がらせなのかはたまた二人への愛なのかはよく分からない。

「いえいえアロンダイト卿。言葉は言霊。愛の一歩も百里の道も言葉から。エロスは行為、愛は言葉に宿るものかと」

「イグニス！？」

イグニスまでイグニスらしかぬ変なことを言い出した。

（まさかこれって……）

二人を実際飲み会のノリで何かをさせて苛めたいヴァンウィックと、言葉攻めの羞恥プレイをさせたいイグニス。二人とも酷いけど、酷い同士で対立している。

「エレイン、君はこの馬鹿息子がこのお嬢さんにあんなことやらこんなことまでいかないにしてもキスくらいは見せてくれないと納得出来ないんじゃないかい？」

「いえいえ、婚約者の方を蹴るくらいなんですから、求婚の言葉辺りを言えるかどうかが鍵ではないですか？」

いや、違う。この二人、共闘している！極論二つを押しつけて選択肢二つのどちらかから無理矢理選ばせようとしている。どちらに転んでもそれなりに楽しめるランス父に、ユーカーの嫌がる所が見

られるイグニス。

「……わかりました。それで俺のことは諦めてくれるんだね？」

解るな馬鹿！とか思ってそうだなユーカー。ランスは本当何とも思って無さそうだ。野良犬に舐められるというか野良犬を舐めるって言うか飼い犬って言うか。何とも思って無さそうだからこそユーカーの独り相撲が可哀想だ。動揺したり緊張したり嫌がったり嫌がったりして相手が傷つかないだろうなとか考えてるの彼だけだ。ランスは精霊に育てられたから、色々と浮世離れしてるのかもしれない。しかしユーカーはそうもいかない。アスタロットさんとの一件もある。

（嫌だ！何もそこまでしてやる必要ねぇだろ？）
（しかし今後の面倒事を避けるためには。北部にいる間中ずっと彼女に突進される俺に身にもなってくれ）
（ふ、ファーストがお前とかになりそうな俺の身にもなってくれ！）
（挨拶みたいなものじゃないか）
（場所がちげーよ！！っていうかお前はあんのかよこんなん……）
（俺は母さんにされたことある。精霊の世界では挨拶なんだって話だった）
（あ、あの精霊……何処まで俗世に染まってんだ）

俺、数術使いじゃないのに大体二人が小声で言い争っていることが伝わってくる。そこまでエレインと言う子は解らないようだが、二人が揉めているのは解ったらしい。

「……そのご様子だと、やはりランス様はその方のことを何とも思っていらっしゃらな……」

皮肉を口にした少女が固まる。それを見た俺が視線を其方へ向ければ、俺も固まる。そしてその先でセレスちゃんは石化していた。
俺の隣で咳き込むほど笑っているイグニス。そして景気よくシャッターを押すヴァンウィック。

「イズーちゃん！もっと色っぽく！目付きは悩ましげに！そう！いいよ！その調子だ！馬鹿息子！そこで舌をだな！顎に添えた手で下唇を撫でて！片手は腰へ！そうだ！お前もやれば出来るじゃないか！」

もう一回石化で意識が飛んで、自棄になっているセレスちゃんはノリノリだ。どうにでもなれという捨て身のテンションだ。

「いや、いい絵が撮れた。これならカーネフェルの腐ったお姉さん達を軍に引き摺り込むのも手堅い」
「やりましたねアロンダイト卿」

イグニスとヴァンウィックはがしと固い握手を交わしている。……これ、募兵のためだったんだ。国のため何て言われればそりゃあランスだってやる気出すよね。あの人カーネフェル大好きだから。
でもあれの最中って息できるのかな。鼻で息するのかな。俺腹式呼吸苦手なんだよ。みたいな感じ半狂乱なユーカーも怪しい。その内酸欠起こしそうだ。
俺がそんなことをぼんやりと考えていると、引き千切られたドアノブに疑問を浮かべるトリシュが現れた。

「神子様、書類は向こうの部屋に移しておきました。そして今日はお疲れ様でしたイズー……」

無論、絶句。その手が両肩がわなわなと震えている。

「ぼ、僕を裏切ったなランスっっっっっっっ！！僕のイズーに手を出すなんてっっ！！！決闘だ！決闘を申し込む！！」
「セレスさーん！夕飯の前に一緒にお風呂に……」
得物を手に泣き喚くトリシュ。その背後からひょこっと顔を出したのはパルシヴァル。
「……セレス？……まさか、貴女、ユーカーお兄様！？」
目の前の光景の真実に、石化が解けるエレイン。
「ふ、不道徳！不潔ですわお兄様！ランス様！と、殿方同士がそんな……そんなっ！」
「エレイン、法的には問題ないよ、従兄弟は結婚出来るじゃないか」
「野郎は出来ねぇよ」
妙なボケを発するランスにユーカーがツッコミを入れる。ツッコミすることで平常心を取り戻しているようだ。でもうっすら涙目だ。
「どれどれ、可哀想なお嬢さんは未来のお父さんが慰めてあげよう。ほら、あの馬鹿息子そっくりの顔だよー」
「私はそこまで安い女ではございませんわ！」
抱き付こうとしたヴァンウィックを近くに立てかけてあったモップで撃退する少女。しっかり汚れの付いている箒部分で顔を狙うという見事な技だ。
「どういうことですのお兄様！お姉様がお亡くなりになったから

って、今度は殿方に走るつもりですの！？」
「ご、誤解だエレイン！」
「元々お二人は妙に仲良しだと思っていましたらそういうことでしたの！？」
「ああ、実はそうだったんだ。だから諦めてくれ」
「お前なぁ！この期に及んでまだ言うか！？」

あくまでしらばっくれる気でいるランスは父親とは違う意味で質が悪い。しかしそれに釣られる奴が一人だけ居た。

「決闘だランス！もはや君は僕の友ではないっ！！僕の最愛の人の純潔を汚すとは！！」

ユーカーには似合わなそうな形容詞の羅列にとうとうイグニスが発作寸前まで笑い転げている。

「セレスさん、早くお風呂行かないと夕飯の時間なっちゃいますよ」
「もう嫌だこいつら。ううっ……行こうぜパルシヴァル」
「はい！」
「お前は本当可愛いな。あいつらみてぇな変な騎士にはなるなよ」
「イズー！わ、私も……いえ僕もご一緒にッ……」
「てめーは決闘なんだろ。頑張れよ」

てめぇは付いてくるなとユーカーが決闘を盾に持つ。それでも嘘でも頑張れと言われれば頑張るしかないのが彼の悲しい性だ。

「……で？どうするんだトリシュ？」
「け、決闘だ！！」
「よし。それじゃあ外でやろうか。室内じゃ宿に迷惑だ」

「ら、ランス様！そうやってうやむやにしてまた逃げるおつもりですのね！！お待ちになって！！」

ランスとトリシュ、それからエレインが消え、室内は随分と静かになった。残されたのは俺とイグニス、それからヴァンウィックの三人だけ。

イグニスは特殊な身の上だから男湯にも女湯にも入れない。後から夜中に借りることになるんだろう。俺は俺であんまり人前で肌を晒したくない。イグニスとユーカーにはシャラット領での治療の時に見られたから仕方がないとして、他の人達に傷を見られるのは抵抗がある。となると夕飯まで暇だ。

「それでは私も食事の前に風呂に行ってきます。失礼」

鼻歌を歌いながら出て行く中年騎士。ユーカーが居るから大丈夫だとは思うが、あれはパルシヴァル狙いだろうか。やっぱり止めるべきだろうか。

「どうする、イグニス？」

「そうだね……確かに中途半端な時間だね」

「それじゃ、街でも見に行こう！よく考えたら昨日着いたのは遅かったし、昼間は忙しかったしあんまりこの街回れてないよな」

ここはどんな街なんだろう。昨日夕飯を食べた店くらいしか俺は知らない。見聞を広めるには良い機会だ。

「……確かにね。それじゃあそうしようか」

「やった！んじゃ行こうぜ！」

つい昔のように気軽にイグニスの手を引いて、宿を出て、街の中

を歩いて……呼び止められるまで俺は気付かなかった。

「そこのお二人さん」

占い師だろうか。道に座った老婆に声を掛けられる。

「微笑ましいねぇ。デートかい？」

「え？」

イグニスは外見だけならどっちにでも見える。口調で男だと気付くが、喋らなければ話は別だ。修道服も見ようによってはスカートだ。スカート補正で知らない人から見れば女の子に見えるのかも知れない。っていうか女の子だし。

「14，5にもなって男友達が仲良く手なんか繋ぐわけないだろ、馬鹿」

イグニスに睨まれる。

イグニスの外見だけではなく俺の軽率な行動がその勘違いを引き起こしたのだと彼女は言う。見れば少しイグニスの頬が赤い。嫌だったのか。そうだよな。こんなの恥ずかしいよな。俺は何て馬鹿なことを。イグニスと二人で出かけられると思って嬉しくて……つい、はしゃいでしまった。

「ご、ごめんイグニス！」

俺は急いで手を離す。イグニスの手は相変わらず冷たいけど、俺の手が熱かったのか、それで彼女の手も温まり、俺に返ってくる温もりは暖かだった。

「あらあら。照れ屋さんだねぇ彼女は」

下手に否定をするとややこしくなるだけだとイグニスは無言。でも俺と視線を合わせてくれない。

「それじゃあ二人が仲直りできるように私が何か占ってあげようかねぇ。いや、お代は結構だよ。私の所為で二人が喧嘩してしまったんだものね」

手相を。そう言われ俺は、利き手にカードの紋章が刻まれていることに気付く。右手は出せない。左手を出す俺に、老婆は不思議そうな顔をする。

「俺、両利きなんです」

でも本当は左利きだと言って手を見て貰った。だから色々見当違いのことを言われてちょっと笑えた。

「あら、生命線長いわねぇ。貴方長生きするわよ」

「ははは、そうですか」

出来るわけ無いよ。俺はカードだし。頭の中に浮かんでくる。幾つもの死の場面。姉さん……ルクリース、フローリプ。みんな、死んでしまった。今俺の傍にいる人達だってカードばかり。いつか死んでしまう。殺される。そんなの嫌だ。守りたい。死なせない。死なせたくない。だけど最弱の俺に一体何が出来る？

俯いた俺を伺うイグニス。俺を心配してくれているようだ。

「すみませんが僕は占いを信じませんので」

イグニスは右も左も老婆に見せず、俺の手を掴んでその場を後にする。立ち去る間際老婆に笑いかけたイグニス。その顔を見て、老婆が蒼白の面持ちになったのが少し不気味だった。まるで、死相が出ているわと言わんばかりのその顔が……

「アルドール」
「な、何？」
「僕アイス食べたい。買ってきて。五秒以内に」
「五秒は無理っ！」
「それじゃあ一分待ってあげる。シャーベットとクリーム系のダブルね。勿論君の奢りで」

ベンチに腰を下ろし、近くの屋台を指さすイグニス。その命令に何故か逆らえなくて俺は走り出す。

「か、買って来ました」
「うん、ご苦労」

俺の手からご所望の品を奪い、イグニスはぱくついた。そして俺に小銭を渡す。

「物欲しそうに僕の見られても困るし、買ってきなよ君の分」

何だかんだ言ってやっぱりイグニスは優しい。俺は笑って頷きもう一度屋台に走る。

「あ！すみませんお姉さん！俺このクッキー&クリームにそれから洋梨のシャーベット！」
「申し訳ありませんがお客様、其方の代金ですとシングルになります」

ベンチでイグニスがくすくす笑っている。や、やられたぁっ！イグニスが、あの守銭奴イグニスがダブル料金など俺にくれるはずもなかった！

俺は苦笑し自分の財布から追加料金を支払う。しかしベンチに戻った俺を、イグニスは冷たい視線を溜息で迎える。

「……君って気が利かないよね。どうして僕と同じのにするかな」

「いや、イグニスが美味そうに食べるからその味当たりだったのかなって」

「意地汚いなぁ元貴族の癖に。君が同じのにしたら僕が他の種類を味見出来ないじゃないか」

「えええ！？俺の奪うの前提！？」

「文句ある？」

「ありません」

ああ、やっぱりイグニスはイグニスだなぁ。こういう所を見ると本当にそう思う。

苦笑しながら隣に腰を下ろす。そんな俺に目を瞬かせ、疑問符浮かべたイグニス。

「……何？」

「俺、イグニスと友達になれて良かったよ」

イグニスが何であっても、俺の親友はこのイグニスだ。それは揺るがない。俺はこうしてイグニスと話をするのが好きなんだ。もう二度とこんな事出来ないかもと恐れていた二年。それに比べれば今は、夢のよう。

だけどイグニスが居るのに、悲しい気持ちが浮かんでくるのは……俺も変わってしまったから。きっとそうだ。イグニスとギメルだ

けが大切だった俺ではなくなった。

「なにさ、突然……」

「なんていうかさ。ありがとう、傍にいてくれて」

ルクリースが死んでから、イグニスは俺から距離を置いた。俺がイグニスにこれ以上依存するのを恐れてだろう。だけどフローリプを亡くしてから……イグニスは俺から離れずに、傍にいてくれる。俺がここまで歩いてこられたのは、平気な振りが出来たのは……イグニスがここにいてくれたからだろう。

「本当はイグニス、シャトランジアに帰って国をまとめなきゃならなかったんだろ？それをこんな所まで付き合わせて……悪いと思う」

何時も俺がイグニスに頼ってばかりで情けない。イグニスがシャトランジアが安心して頼って来られるような俺に、カーネフェルにしたいと思う。

「君が頼りないからだよ」

「うっ……」

「でも……頑張ってるのは解ってる。君はちゃんと周りの人を見てあげてるね。セレスタイン卿のこと、ランス様のこと。そうやって少しずつ背負うものを増やして……大事な物を増やしていく。それが王に一番必要なことだよアルドール」

「君はこの国が好きかい？」

「まだよく分からないよ。だけど……」

俺を守るために死んだ人がいる。俺はだからここから逃げたりはしない。俺はカーネフェル王。殺されるその日まで、そこから逃げない。それだけは俺を守ってくれた三人の俺の家族のためにもしてはならないことだ。

（それに……）

ユーカーが悲しんでいて、ランスが苦しんでいる。俺は二人にとって先代のアルト王のようにはなれないけれど、それに代わる場所を探して行きたい。

都を捨てるなんて無謀な策に乗っかってここまで来てくれたのだ。それに報いてやりたいと思う。

「ランスが、ユーカーが……必死になって守ろうとした場所なんだ。取り戻してやりたいと思う。あいつらの……カーネフェルを」

「……気に入ったんだ。彼らのこと」

イグニスは珍しく穏やかな笑みで俺を見る。

「そりゃあユーカーには世話になったし、ランスも俺の力になってくれてるし。俺も何か出来たらって思うんだ」

「まぁ王様って言っても多少はそういう謙虚な思いは大事だね」

イグニスがうんうんと頷く。

「まぁ、セレスタイン卿が気になるのは解るよ。君は人が弱ったところを見せると気にしてしまう所がある」

シャラット領でのユーカーを見たことで、親身に感じてしまっているのだとイグニスは言う。確かにそうかもしれない。ユーカーの

弱さを見て、そこに好感を覚えたのは確かだ。

「ユーカーはさ、俺とは違って必死に生きてるって感じがして、気がつくと見ちゃってる」

「それじゃあランス様は？」

ランスは……。そう言われて昨日のことを思い出す。意地でも俺に頼らない。寄り掛からない強情な人。俺は唯の人間なのに、そこまで崇めなくて良いのに。俺との距離を彼は欲しがる。俺はもっと彼に近づきたいのに。

「ランスはさ……俺より何でも上手に出来るのに、昔の俺みたいに見えて……ちょっと心配なんだ」

人形は、人の心が解らない。だから人を傷付けてしまったり、人に傷付けられたりする。その内、嬉しいことも悲しいことも解らなくなって……本当の人形になる。

「俺は……ランスには……俺にとってのイグニスになりたい」

「……何それ？」

「イグニスは俺の前で怒ったり泣いたりしてくれた」

ギメルが俺にくれたのは優しく温かい感情で、イグニスが俺にくれたのはいつだって激しい感情だった。

「ユーカーは、ちょっと違うけどランスにとってのギメルなんだよ。だからランスも少しは解ってるんだ、人の心が」

ユーカーがランスの癒しなのは、ユーカーがランスを傷付けるようなことは言わないからだ。だから居心地が良い。だからランスも

ユーカーを気に入っている。

「だけどユーカーは逃げるだろ？ランスに嫌われたくないから決定打になるようなことは言わない。ああ見えてイグニスみたいな遠慮なさがないんだ」

「失礼な物言いだけど言いたいことは解るよ。続けて？」

「だからランスは解ってないことも多いんだ。ユーカーがそれをぶつければ、ランスも悩んで考えて……もっと多くを理解していくんだと思うんだ。だけどそれをユーカーがしないなら……誰かがそれをしなくちゃ駄目だ」

それを言うことで嫌われても、嫌がられても俺は言う！俺がイグニスを好むように、それでランスが俺を好きになってくれるとは思わない。それでもいい。俺はランスのイグニスになる！何でもずけずけと口にする。そうして彼に考えて貰うんだ。

「俺はランス相手になるべく臆さない！頑張る！思った通りのことを言う！そうやってランスにランスの心を引きずり出させる！」

拳を固めて決意を語る。俺が顔を上げれば……

「あれ？」

イグニスがいない。俺の話に嫌気が差したのか、また先程の露天でアイスのお代わりを頼んでいる。

「イグニスー……」

俺ってそんなに暑苦しい？話聞いてて嫌になる？

「嫌になるって言うならそういう被害妄想だね。まぁ調子に乗られるよりはそっちの方が良いけどさ」
「え？何これ？」
「君にしてはよく考えた方だと思ったから」

ご褒美。そう言って差し出されたのはカップに入ったアイスが一つ。ああ……イグニスは元々、ここで俺にくれる予定だったのだ。それを俺が勝手に自分でダブルを頼んで……馬鹿みたいだ俺。
イグニスの手には別の種類のカップが一つ。流石イグニス。俺のを一口貰う気でいるな。っていうか既にスプーンで一口頂かれていた。俺が手を付けたのからは貰いたくなかったんだな。うん、そうだよな。

「……あ、美味い」

ほんのりと香る紅茶。これはミルクティーのアイスだ。

「……君たち貴族はそういうの、好きだろ？最近旅ばかりで紅茶なんてあんまり飲めてないかと思って」
「イグニス……」

違かった。これはイグニスが毒味したんだ。先に食べて俺の口に合うかどうか見極めて。その上で自信を持って俺に差し出した。
言葉にしないけれど、言葉では嘘を吐くけれど……俺はイグニスのこういうところがとても好きだ。言わなくても解る。だから俺が彼女を嫌いになることはない。何を言われてもそこから真意を探り取れる。取れなくても諦めない。見つかるまで探し続ける。
こういう気持ちを他の人にも持ち続けられるかどうか。諦めない。信じてるから、真意を探す。そう言う姿勢が大事なんだろう。
ランスのことも、俺が諦めなければ……いつか良い方向に転ぶ。

それをまず俺が信じる。信じて突き進む。
だけど見つけたからってわざわざ口に出す必要はない。俺が解っていて、こうして笑えばきっと俺が解ってるって相手も解る。その上で嘘の言葉に俺も乗っかる。そんな言葉遊びも楽しいと思える。それがイグニスなら。

「イグニスのも一口貰っても良いか？」
「いいよ」

差し出されたカップ。その真っ赤なシャーベットは何かの果実だろうか？一口すくって口の中に放り投げた途端……つーんと喉と鼻の奥を突き刺す痛み。

「イグニスー……」
「百倍唐辛子ペッパー。面白そうだから頼んだら、失敗だった。勿体ないから食べるけど。君も手伝ってよ」
「何で甘い物と辛い物混ぜるんだよ……」
「北部の知恵らしいよ」

北部の特産品の一つがこの辛子なのだという。

「カーネフェルの夏は暑いからね。夏バテに効くんだってさ」

アイスを食べるイグニスは少し疲れ気味。怠そうにも見える。……そこで俺は思い出す。一昨日、イグニスはエルス＝ザインの虫に刺された。そしてその治療もまだ受けていない。

「……イグニス、身体の具合はどうなんだ？」
「北部まで虫は来てないし、僕は数術で体温変えられるし、熱は抑えられてる」

「でも数術使うの疲れるんだろ？」
「簡単な数術だからそんなでもないよ。常時展開ってセットすれば良いだけだし」
高熱で死に至る病なら、熱を抑えれば死ぬことはない。簡単なことだとイグニスは言うが……
「ごめん……イグニス大変な時に。俺……」
「いいんだよ。君が僕のことを忘れるくらい忙しいっていうのは良いことだ」
ユーカーやランスのことで気を取られていた自分を恥じる。だけどイグニスはそれでいいと首を振る。
「それに心配されたところでどうしようもないこと悩まれるより、まだ何とかなりそうなこと考えて貰った方が僕としてもありがたい」
「でも！……俺は……」
「それじゃ、ちょっと肩貸して」
甘い物食べたら眠たくなったと俺にもたれ掛かるイグニス。頼って欲しいとは言ったけど、それは精神的な意味だったんだけどな。いや……同じ事か。イグニスがこんな風に寄り掛かるなんて……おいそれと出来る事じゃない。もたれ掛かってくる身体と一緒に心の一部を俺に預けてくれている。そんな気がする。
「イグニス……アイス溶けるけど……？」
「勿体ないから残りは君が食べて良いよ。残したら怒るから」
「う、うわぁ……」
唐辛子アイスは辛かった。でも後味はふわりと甘い不思議な味わ

いだ。鼻が喉がつーんとするけれど、少しイグニスに似ているなぁなんて思いながら、俺は重くなる手を動かした。

＊

「はぁ……一番風呂って良いな。昨日はゆっくり風呂は入れなかったからなぁ」

「はい！貸し切りって良いですね」

邪気のない子供を相手にしていると心が洗われる。風呂から出てやっと男の格好に戻ることが出来た。ユーカーは一息吐いて、ロビーでパルシヴァルと寛いでいた。

「ほら、何か買って来いよ」

「あ、ありがとうございます！」

「俺にも牛乳頼む」

「はい！」

売店でじっと飲み物のを見つめていた姿に折れ、小銭を与えると、明るい笑顔で走り出す。

「ん？お前も普通のにしたのか」

「はい！僕はセレスさんみたいになりたいんです」

だから同じのにしましたと笑うパルシヴァルは可愛い。

「お前はほんと良い奴だな……」

「？」

濡れた髪を撫でれば、きょとんとした顔で大きな瞳を瞬かせる。

「でも俺より身長伸びたら殺す」
「セレスさん、大人げないですよ」
くすくすと笑われた。
「しかしなぁ。こんな所までお前巻き込んで連れて来ちまって悪かった。こんな形で帰郷なんて嫌だろ？」
こいつは立派な騎士になるまで故郷には帰らないと願を掛けていた。それが都へ行くための母親との約束だったらしい。こんな幼い子供だ。母恋しさはあるだろうに。そこまでして騎士なんてなって楽しいものでもないだろうに。
「セレスさん、僕はまだ立派じゃないですけど騎士です」
こいつの故郷も北部にある。俺が出会ったのは北部の森でだ。
「母様にはまだ会えないけど、寂しいけど……寂しくないです！セレスさんに、王様に……いろんな人がいますから。僕は頑張って、セレスさんみたいな優しい騎士様になって母様を見返すんです！」
「……お前も馬鹿だな」
こいつは騎士になりたいという気持ちを否定され……そこで母親に俺を馬鹿にされたのを怒り、家を飛び出して都まで来てしまったのだ。子供に見えても才能はあるのか、独学での槍術はなかなかの物だ。棒を片手に都までの一人旅を遂げてしまったのだから。
「でもまぁ……強くなって損はねぇか」

こいつもカード。いざってときは自分の身は自分で守れるようにはなって欲しい。

「んじゃ、アロンダイト領に着いたら暫く俺がお前に剣を教えてやるよ。騎士は剣も使えないと駄目だからな」
「あ、ありがとうございますセレスさん！」
「ふむ、無邪気な子らが戯れる様は心が洗われるものだねぇ」

俺は口に含んだ牛乳を思いきり吹き出してしまった。

「おやおや。言った傍から卑猥な子だ。白い液体を口から垂らしてぶちまけるとは」
「そういう言い方止めろ！牛に謝れ！俺に謝れ！世界に謝れ！万物に謝罪しろ！」

咳き込みながらそれでも俺は、この叔父を睨み付ける。だってこいつ絶対おかしい。

「なんで平然と女湯から出て来んだよ変態っ！！」
「いや、先に入っていたお姉さん方は最初こそ驚かれたがね、すぐにみんな私の虜さ。みんな今は余韻に浸っているみたいだから先に上がってきたんだ」
「変態！犯罪者っ！強姦魔っ！あんたはどうしてそうなんだ！！」
「ははは、失敬な。合意の上だよ途中からは」
「アウト過ぎんだろうが！！最初からアウトじゃねぇか！！そういうのは終わりよければってのはねぇんだよ！」

しかし女湯に入って女を食って出てくるとは。この変態、ランスには悪いが本当一回殺しておくべきなんじゃないかと割と真剣に思えてくる。

「若い村娘も悪くないが、ほどよく筋肉の付いた女兵士も悪くないな。筋肉と脂肪の絶妙なバランスがまた。鍛えているとあそこの締まりも良くなるんだろうかな」

「ま、まさか俺の部下まで食ったのか！？何てことをっ！！」

「セレス君。あんな明らかに君に好意がある女の子を野放しにして欲求不満がらせてる君が悪いんだ。下手な操立ては時に相手を不幸にすると覚えておきなさい」

怒りと動揺で震える俺の肩を叩いて、この変態叔父は俺に囁く。

「何も一番じゃなくても、そういう好きでなくとも好意に甘えたい。その好意をキープしたいのなら手を出すのも一つの手だ。野放しにしておくと……こうやって悪い男に食べられてしまうんだから」

「あんた、最低だっ！！」

「ははは！良く言われるよ。むしろ私のような男には褒め言葉というものさ」

爽やかな笑顔を残し変態男は走り去る。

「くそっ……嫌なこと思い出した」

せっかくパルシヴァルに癒されて忘れていたのに。現状維持？好意をキープ？それって……俺があいつにされてることとそっくりじゃないか。親子揃って……やっぱあいつら最低だ。

「セレスさん……」

俯く俺を心配そうに見上げてくるパルシヴァル。

「これ、どうぞ」

差し出されたのはまだ半分以上残っている牛乳瓶だ。

どうやらこいつは俺が吹き出して殆どをぶちまけてしまい、飲む物がなくなったことでこんなに落ち込んでいると思ったらしい。

そうだよな。訳の分からない話を聞いて、右から左。目から見た情報だけならそう解釈してもおかしくはない。

「気持ちだけもらっとくぜ」

それでも嬉しかったからお礼は言っておく。

「お前はまだまだ伸び盛りなんだから、しっかり飲んでしっかり食え。年下から飲み物食い物奪い取るのは騎士としてやっちゃ駄目なことだ。だからお前が飲め」

「でも……」

「俺は新たに酒を買う！飲まねぇとやってらんねぇ！」

「お酒って美味しいんですか？」

「……んー、その日によるぜ」

「そうなんですか」

こいつは酒と言うより酒を飲むという行為自体に興味を持っているようだ。

「お前と酒飲むのはお前が立派な騎士になってからな」

「はい！」

俺の言葉に頷くパー坊。その無邪気な笑みが、少しだけ……昔のあいつに似てるなぁとか思って。俺はもう一度口にする。

「お前は絶対ランスみてぇにならないでくれよ」
「？」
何故そんなことを言われるのか解らず疑問符を浮かべ、それでもこいつはこいつなりの解釈で俺に笑いかけるのだ。
「はい！僕はセレスさんみたいになります！」
いや、それもどうなんだろうな。自分を否定するわけじゃないが、あまりお勧めできないように思うのは。

＊

トリシュは考えていた。
「ランス様ぁ」
「これから決闘だから離れてくれ」
「私見届け人役やりますね」
「そうかありがとう。それじゃあここからそうだな、１０００メートルくらい離れたところから見届けていて。俺は数術使いだしその位距離を取ってもらわないと危ないよ」
「きゃっ、やっぱり私が大切なんですねランス様は」
ランスはこの少女を心底嫌がっている。この婚約者を遠ざけるためわざと手近な相手である私のイズー……ユーカーを使ったのだ。そのくらいは僕も解る。解るのだが……腹立たしいのは同じだ。
僕が迫ると逃げるし拒むのに、この男相手に彼はあまりに従順だ。嫌がっても最終的には流される。これ以上何かがあっては僕が困る。
僕としてはランスがこの婚約者さんと上手く行ってくれる方がありがたい。

「そんなお似合いの彼女が居て、それでもまだ僕のイズーに手を出すなんてね。君は男の風上にも置けない」
「やはり見る目がある方から見れば、私達はラブラブなんですねランス様！」
「……正気かトリシュ？」

少女は俺の言葉にうっとり。ランスは本当に嫌そうな顔。取り柄の顔がもう少しで崩れそうなところまで来ている。

「それは君が嫌っている父様、僕のお師匠様そっくりじゃないか！」
「……」

ランスが笑う。冷ややかな笑みだ。私のイズーの前じゃ見せないような冷酷なその表情。背筋が震える程の殺気。そんな顔で彼は俺の方へ手袋を叩き落とす。

「……あまり乗り気じゃなかったんだけど、ありがとう。やる気出てきたよトリシュ？」

やる気が絶対これ殺すってかいて殺る気って読む方のあれだ。しかし僕もここで負けるわけにはいかない。例えイズーが僕を応援してくれていなくても。

「君には……貴方にだけは負けません！アロンダイト卿ランス！貴方の愛は間違っている！」
「……それはお前の方じゃないのか？」
「道としては逆送している自覚はあります。それでも僕はまっすぐあの子を愛してる！」

彼をまだイズーと呼ぶのは、名前で呼ぶのが恥ずかしいからだ。もしそんな風に呼んで彼に嫌そうな顔をされたら立ち直れない。僕が彼の女装に喜ぶのは、背徳感が薄れるからだ。

冗談めかして接しなければ絡むことさえ僕には出来ない。本の中の騎士になりきることで、演じることで僕はなんとか彼に話しかけることが出来るのだ。

だけど自らの危険を顧みず、大嫌いな僕なんかを庇ってくれたあの子。理屈じゃない。理屈じゃないんだ。気付いたらもう、仕方がない。正体を知ってもまだ好きなんだ。

「僕は彼が好きです。だけど貴方のそれはそうじゃない！彼を人として貴方は見ていない！その目が彼をどんなに苦しめているか！それさえ気付かないような貴方になんて負けるものかっ！！」

こんなこと言いたくなかった。僕は友人としてはこの男を気に入っている。

今だって忘れない。彼は僕を否定しなかった。

大切な僕の宝物。母さんの形見の本だ。

父は領地に帰ってこない。本のようなそんな恋物語に憧れて、恋をして捨てられた……そんな哀れな女が残した本だ。

哀れな女は酷い男を責めることも怨むこともなく死んでいった。一時でも燃え上がるような恋を教えてくれたのは確か。彼の火は消えても、彼女の火は燃え続けた。その身を焼き焦がす程、彼女を燃え上がらせた。その気持ちを教えてもらえただけでも私は幸せだと馬鹿な女は言っていた。

例え幸せになれなくても、心から愛せる人に出会いなさいと、その思いはお前を強くしてくれるから。母さんは僕にそう言ってこの本を遺してくれた。

燃える火の海。屋敷の中で思い出と共に消えたあの人。僕には解

らなかった。そんなもののために命を投げ出すその意味が。
でも理解したかった。大切な母さんが見ていたもの。見た景色を僕は知りたかった。そして今……それを僕は見ようとしている。

「これ、君の本だろ？」
「……え？」

昔の記憶だ。僕がまだ幼い頃の。
泣いていた僕の前に現れた、優しく穏やかに笑う少年は……あんな冷酷な顔で笑う男ではなかった。

「だっていっつもこの本を抱えているじゃないか」
「み、……見てたの？」
「いつも大事そうにしているから、きっと宝物なんだろうなって」

見習い騎士の時の僕は、周りに馴染めなくていつもこの本だけが友達だった。空いた時間で頑張って剣と槍を磨いても、強くなればなるほど人は僕から離れていった。怨み、妬み、僻み。そういった物が渦巻いている。努力もせず、だらけている。それなのに人を羨み憎む。僕は唯、頑張れば……誰かに、みんなに認められると思っただけだ。だけどそんな相手誰もいない。いないと思っていた。

「最近凄く頑張ってるよねトリシュ君。次の手合わせの時が楽しみだよ」

目をキラキラと輝かせて、その子は笑った。見ていてくれた僕のことを。僕の努力を彼は見ていた。

「あ……ありがとう」
「でもさ、彼らも酷いよね。人の物を盗んで隠すなんて騎士失格

だよ」
「何で僕……こんな目に遭うんだろう」
「うーん……城にはあんまり同世代の女の子っていないからじゃないかって母さんが……いや、何でもない」
妙なことを言いかけ、彼は慌てて否定する。噂ではアロンダイト卿も似たような目に遭っていた気がする。ちょっと代わった言動と、何処かを見ている目と、時々現れる一人言。精霊の養母がいるとか言う不思議な子だ。剣は騎士見習いの中でもトップクラスの実力だし、礼儀も正しい、……僕にも優しい。だけどやっかみを僕以上に買っているはずだ。それでもこんな風に笑える彼は強いと思った。
「君は髪も長いし可愛いし、女の子に見えるからじゃない？人間の男の子は幼少時に好きな子を苛めるものらしいじゃないか」
「……」
悪意からの嫌がらせじゃなくて、好意からの嫌がらせだと彼は言う。君は嫌われている訳じゃない。そう僕を彼は持ち上げた。
女顔か。そう言われればそうなのかもしれない。だけどだからってそこまで僕の顔は母さんには似ていない。たぶん父親に似ているのだろう。顔も知らない何処かの男に。
「こんな顔……嫌いだよ。母さんに……全然似てない。似てたら……また、何時でも会えるのに」
「……そうだね。俺もそう思う。俺も母さんに似たかったな」
「え？」
「俺も母さんに似てないんだ。それにもう会えない」
彼も母親を亡くしている。それを聞いて互いに親近感を感じた。だからだろう。彼はもう一度俺の本を尋ねてくる。

「……それ、宝物なんだよね。どんな本なの？」
「ええと……騎士とお姫様のお話。二人は両思いなんだけど、一緒にはいられないんだ」
「そうか。悲しい話だね……」
「うん。でも……僕はこのお姫様が大好きなんだ」

この話のヒロインは、母さんにちょっと似ている。だから……読むと母さんに会える気がする。悲しいけれど、それでも年々朧気になっていく人の輪郭を取り戻せそうな気になるのだ。

「僕はこの本のお姫様に会いたいと思うんだ。……おかしいと思う？」
「思わないよ」

僕を嗤うことなく彼は真面目な顔でそう言った。

「誰かを好きになれるって才能だと思う。君は凄いんだね」

言い方一つで馬鹿にされている。そう感じるかもしれない言葉。だけど彼は本当に羨ましそうに僕に言った。あの時から僕はランスが、とても好きになったんだ。僕を馬鹿にしない。僕を笑わない、最高の友人だって思った。
だけどこの男は未だに、僕を羨んでいるのだ。まだ何も好きになれないこの哀れな男は。僕の方こそ君をどんなに羨んでいたことだろう。
ランス、……君の傍にはいつもセレスタイン卿がいた。僕らの境遇は似ていたけど、僕にはそんな相手はいなかった。君が困ればいつだって、何処からともなく現れて。君の悪口をいう奴がいれば、君の代わりに走り出し、そいつらを懲らしめに行く。

君がそんなに綺麗でいられるのは、彼が悪いことを被ってくれるからだ。悪いことをされても人を怨まずに居られるのは、彼が代わりにそいつらに三倍返しをお見舞いするから。やり過ぎだよと彼を窘める。そんな君は心が広く優しい人だと思われる。

だけど僕には彼がいない。彼は僕を守ってはくれない。あの頃からもう、あの子は……君の物だった。

ランスと親しくする僕を彼は気にくわないと思っていただろうし、僕も大切な友人との時間を邪魔する彼を疎ましく思っていた。だけどそれは本当は羨んでいた。僕にも彼のような相手が欲しかった。

だからだ。彼に初めて守られた時、僕は涙が出るほど嬉しかった。僕が好きだったのは、ランスじゃなくて。ランスは勿論好きだけど、それ以上に僕は彼に憧れていたのだ。あの時、それに気付いた。

（だけど……僕も騎士だ。僕も男だ）

女顔だと馬鹿にされても、僕だって騎士なんだ。大切な人はこの手で守れる男になりたいんだ。今度は僕が彼を守りたい。

「イズーは……セレスタイン卿は君の玩具でも愛玩動物でも所有物でもない！一人の人間なんです！それを貴方はちゃんと正しく認識、理解出来ているんですか！？」

「それはトリシュ……君だって…」

「僕は違う！」

大切な宝物。それを僕は放り投げた。そしてそれを手にした剣で切り刻む。風に吹かれて飛ばされていく頁達を僕は見向きもしない。

（母さん……）

僕は見つけました。だからもう貴女も、本も要らないんです。例

え幸せにはなれなくても、僕は思いに生き、想いに殉じる。それを悔やんだしはしません。その位好きになれる相手を見つけました。

「と、トリシュ……？」

僕の行動はランスにも衝撃を与えた。僕がどんなにこの本を大切にしてきたか彼が一番知っているから。だからこそこの意味も分かるはずだ。僕は、本気だ。

「そんな中途半端な好意で彼に近づかないで下さい。彼の心を傷付けるのなら、僕は例え君でも許さない！」

＊

もう夕飯の時間だというのに帰ってこない三人。少しに気になったから、先にパルシヴァルを食堂へ向かわせ……俺はロビーで待っていた。それから十数分、やっとあいつが現れる。

「珍しいな、お前が負けるなんて」

「そういう日もあるよ」

帰ってきたランスは少し落ち込んでいる風だ。そこでカードの所為だと言い訳しないのは男らしいと思う。でもそんなボロボロの姿で男らしさもクソもないとユーカーは苦笑した。

「ランス様！今手当の道具を取ってきますね！」

慌ただしく廊下を走るエレイン。そして自分の借りた部屋に飛び込むと、がさがさと物を漁るような音を立て出した。

「イズー！！」
「うおっ」
そう言えば後一人居るのを忘れていた。背後から現れて、抱き付いてくる同僚。長い金髪が身体を撫でてくすぐったいから止めて欲しい。
「貴女のために勝ちました！この勝利は貴女の物です」
これで相手が俺じゃなかったら絵になるんだろう。跪いて手の甲に口付けられる。気味悪い。
「そっかサンキュー。しかし手が汚れちまったしまた風呂入らねぇと」
ごしごしと服の裾で手を拭いながら溜息を吐く俺に、トリシュは生暖かい目を送る。意味が分からない。
いつもならここでそれじゃあ一緒に入りましょうとか言ってきてもおかしくないのに。なんだ？調子狂う。そして何故か俺を見るランスの目が酷く冷たい。
「ユーカー」
「何だよ？」
「言って良いことと悪いことがある」
今のはその悪い方だと突然俺を非難するランス。
「は、はぁ！？」
「お前は人に好意を向けられて、それでよく相手をそこまで傷付けられるな」

お前にだけは言われたくない。そんな言葉が脳裏に浮かんだが、とうとう口には出せず……俺は感じの悪いランスを見送った。

「ま、負けたからって俺にあたることねぇだろうが」

ランスの背中が見えなくなってから、ようやくそんな一言を絞り出すのが精一杯。

「……ん？そういやお前いつもの本はどうしたんだ？」

横を見ればトリシュがいつも抱えている古本がない。それに気付いたことに、何故か嬉しそうに奴は笑う。宝物をなくしていかれてしまったのだろうか？

「なくしたのか？ったく……何処に置き忘れたんだよ」

心当たりはないのかと、本探しを手伝ってやろうとした俺に、奴は静かに首を振る。

「あれはもう良いんです」

「は？いいって……あれ、大切な物なんだろ？いつも肌身離さず持ってたじゃねぇか」

いつだか俺が読ませろと言ったが貸してくれなかった。ランスには読ませる癖に。かと思えば女装した俺には預けるという不条理。女装してない俺には探し作業でも触れられたくないのか？やっぱ俺のこと嫌いなんじゃねぇかこの野郎。

「あの……本探しはいいですから」

そう言って恐る恐る、本の代わりを求めるように、トリシュは俺に片手を差し出した。顔が真っ赤だ。その手が震えている。

「しょ、食堂までで良いんです！て、手を……あの……その、つ、繋がせて！下さいっ！！」

その姿があまりに一生懸命で、俺はついつい吹き出した。そんな俺の反応に、トリシュは涙目になっている。嫌がられていると思ったんだろう。馬鹿だなこいつ。

いつもの変なテンションは、本の騎士になりきろうとする所為でおかしなことになっている。本がなくなった今は、これがこいつの素なんだろう。変に偉ぶらないと意外と可愛いところがあるもんだ。ランスの阿呆に比べればこいつの方がずっと純真なのかもしれない。なんとなくパルシヴァル系の一生懸命さを感じて、俺は仕方ねぇなと思い始める。

「ほら」

俺も手を出してやった。でも掴まない。掴みたいならそっちからやれ。

「あの馬鹿に勝つなんてやるじゃねぇか」

その点だけは褒めてやろう。あいつには俺もちょと苛ついてたんだ。少しだけ胸がすくような気持ちになった。そう俺が笑ってやれば、余計泣きそうな顔になるトリシュ。

元々どちらかと言えば女顔のこいつだが、そういう顔をされると、ますますそうだ。俺がこいつを苛めているみたいでなんか居心地が悪い。くそっ、これだから顔のいい男は嫌いなんだ。

これ以上待ってやる必要はないなと背を向け俺は食堂に歩き出す。そこから数歩遅れて走ってくるあいつが手を掴む。たかだかそれくらいで馬鹿みたいだ。横目で同僚を見れば、阿呆みたいに幸せそうな顔している。

（……変な奴だな、こいつ）

今更だがこの男がどうしてここまで俺を気に入るのか、俺にはさっぱりわからなかった。

8：Amantium irae, amoris integratio est

ランスに恋人代わりのふりをしろだの、誤魔化すためにあれしろだの。トリシュに心底惚れられるだの、受難ですねユーカー。

メインヒロインが出て来るまでもうちょっとの辛抱。頑張れセレスちゃん。

客寄せに女装させられるわ、アルドールとイグニスがのほほんとデートしてる傍ら中年騎士に部下食われるわ……不運だなぁコートカードは。

6章序盤はセレス編なんだろう、きっと。中盤からジャンヌ編が始まるんだと思います。え？エレイン編？終盤だと思います。

9：Ridentem dicere verum, quid vetat?

聞いた話に寄れば、アロンダイト領はここからそんなに遠くない。馬車や馬を使えば一日足らずで迎える距離だ。かく言うエレインという少女も馬車を用いてここまで来たらしい。

アルドール達がトリフォリウムを出たのは翌日の朝早く。その甲斐あって日暮れ頃にはアロンダイト領が見えてきた。

「ここがランスの実家かぁ……」

緑に囲まれたなかなか良い景観の土地。ランスの言うよう領主がしょっちゅう土地を開けている所為でそこまで賑やかな様子はないが、だからこそ保たれる……人の手が入らぬ静けさその美を湛えた土地だ。

俺としては結構好感を持ったが、ランスとしては余り良い思い出がないのかその顔は暗い。

とりあえず客室に通されたが、それが気になって俺は何も手に着かない。というか今日はやることがない。人の家なのだからあまり好き勝手に動けないし、そうしたところで俺に何が出来るというのか。帝王学を受けてきたわけでもない、王としての仕事も解らない。そして今は俺に出来る仕事もないのだろう。忙しいのはイグニスとアロンダイト卿親子くらいだ。

そしてそんなお荷物兼暇人の俺の相手を務めるのが……

「アルドール様！この本などは如何ですか？」

「うわ、面白そうだなー！」

暇つぶしはやっぱり本に限る。本の虫の俺はそう言う結論に至った。同じく読書家のトリシュと屋敷内の書庫を漁っている。

パルシヴァルは明日からユーカーに稽古を付けて貰うとかなんとかで、早めに就寝してしまった。

「……にしても、何だかんだで北部も暑いな」

「この辺りには水辺がありますからまだマシな方だとは思うのですが……」

そう言いながらトリシュは窓へ視線をやった。その時……

「遅くまでお疲れ様です！アルドール様！トリシュ様！」

「あ、ありがとうエレインさん」

書庫に響く明るい声。振り向けば茶を運んできた少女の姿。彼女が淹れてくれたお茶は、しっかり冷やされたそれは夏の暑さを僅かに払拭させる。良い葉を使っているのか味も香りもなかなかだ。

「でも俺達なんか構ってていいの？」

「はい、だって私のランス様の仕える方と、大切なお友達ではありませんか」

夫の主は私の主。夫の友は私の友も同然ですわと彼女は言う。その言葉はとても立派な物だ。しかし……

「それに将を射んとせばまず馬を射よと言うじゃないですか」

「ああ、うん、そうだね」

一瞬お茶を吹き出しそうになった。その馬に当たる本人を前にして言うだろうか。裏表のない子なんだなと、ある意味好印象。

「エレインさん、ちょっと窓を開けていただいても良いですか？」

「あ、はい！今すぐに」

トリシュの言葉にエレインは鍵の束を取り出して窓辺に駆け寄る。窓の一つ一つにも施錠が為されており、それは専用の鍵がなければ開かない。　不便だが、仮にもここは領主の屋敷。内外に簡単に機密が漏れるようなことがあってはならない。仕方のないことなのかもしれない。そして屋敷の鍵の一部の管理を任されているのが彼女。

家の鍵を任されるのが妻の務め。この子はランスの婚約者として彼の留守を守っているのだ。彼女の鍵が増えることは着実に外堀を埋めに来ている証拠でもあり、ランスにとっては見たくない現実なのだろう。

（そりゃあランスの気持ちも解るけどさ……）

恋愛対象に思えないものは思えない。俺だってフローリプを妹として見てきた。それが彼女を傷付けているとも知らず。それでもここまで想われて彼は何も感じないのだろうか？この子は暴走しているが、ランスへの好意に嘘はなさそうだ。

「どうかしましたかエレインさん？」

窓に手を掛け固まった。そんな少女を心配して近づくトリシュ。彼も外を見固まった。そんな二人を疑問に思い、俺も恐る恐る其方へ向かう。幸いというか残念ながらというか俺は固まらずに済んだ。

「あれって、ランスとユーカー？」

こんな時間に何処へ行くのだろう。二人は森の方へと入っていく。それも人目を忍ぶようにこそこそと。

「ら、ランス……っ！君という人はっ！！ぱっと見彼を諦めたように装いながらまだ全然懲りていないじゃないか！」
「こ、こんな時間に二人で何処に出かけるっていうんですの！？ランス様っ！お兄様っ！！そんなことエレインは許しませんよ！」

嫉妬に身を焦がす騎士と、屋敷中の鍵は閉めて回ったのにどうしてと慌てる少女。書庫の静寂は途端に破られた。

「これ以上僕のイズーを汚されて堪るかっ！」
「ランス様！私がお兄様のベッドと枕に画鋲を仕込んだからって、お外で何て不潔ですっ！」

そんなことしてたのかこの子は。可愛い顔して陰湿だなぁ。
俺がそう思っている内にも二人は窓から飛び出していく。ここ、二階なんだけど。悩む魔もなく飛び下りるか。恋する人は恐ろしいなぁ。俺も恐る恐る後を追う。あの暴走した二人を野放しにすることで、ランスとユーカーがどうなるかがちょっと心配だったのだ。
どうせあの二人のことだ。紛らわしいだけでたいした理由も意味もないだろう。久々の領地、大嫌いな家。そんな場所から息抜きにどこか散歩に行ったとか、そんなのが正解に違いない。違いないのだが、あの盲目の二人にそんな声は届かない。たぶん自分の目で見るまで何も信じない。溜息ながら俺は二人を追う二人を追いかけた。

＊

こいつは本当に訳が分からない。今日一日ろくに口も聞いてこなかったと思えば、こんな時間に俺の所へやって来る。それで何を言い出すかと思いきや……

「ユーカー、頼みがある」

「な、何だよ」

真剣な目。どんな頼みなのだろう。こいつがこんな顔をするなんて。期待と恐怖で内心びくついている俺にこいつは微笑み……

「鍵、開けてくれ」

「はぁ！？」

「お前に基礎を教えられた程度の俺には破れなかった。エレインとこの家……また鍵の技術を上げている」

「俺は便利アイテムじゃねぇぞ」

酷ぇ。こいつ俺を飼い犬所か、イベントアイテムか何かと同列にしてやがる。売れないし捨てられないし一回使うと大体用無しってあれな。でもたまにまた使う奴とか出てくるから預けるに預けられず手元に置くってあれ。酷いにも程がある。

「引き受けてくれるんだな、ありがとう！流石はユーカーだ」

俺の不満も引き摺って、ランスは俺に鍵を破らせる。多少面倒臭くなっているが俺に破れないものではなかった。さてはこいつ途中で面倒臭くなって俺に投げに来たな。

「んで？何処行くんだよ」

「母さんの所。顔出せって言われたし……それに頼んでいたこともある」

おおよその見当は付いた。だから詮索は無用ってのも。だから俺は代わりに違うことを言う。

「なんつーか……ここ来んのも久々だな」

「？お前は北部に来ていただろ？」
「あの女の所に一人で顔出しても文句言われるだけだっての。ランスはどうしたのって」

俺にとっても本当に久々だ。アロンダイトの領の中には綺麗な湖がある。そしていわく付きの場所。こいつの言う母さんは、どっちの意味の母さんなんだろうな。皮肉なもんだ。墓参りと、養母への挨拶、両方がそこなんだから。
こいつは水辺からあの精霊を呼び出すことが出来るが、本当にこいつの養母が棲んでいるのはこの湖だ。
夜の湖は物静かで不気味さを漂わせる。昔の俺は夜にここに来るのが嫌だったが、この間死人祭りみたいなものを見せられてきた今となってはそこまで怖くもない。

「只今、母さん。お久しぶりです」
《きぃやあああああああああああああ！！お帰りランスぅうううううううううううううううううううう！！！あんたこの間より更にいい男になったんじゃないの？母さん鼻が高いわぁ！ってことで再会の挨拶を》
「いい加減にしろよこのクソ精霊」

とりあえずその声の発生源、ランスの顔のすぐそばに軽く回し蹴り。無事にヒットしたらしく、うめき声が聞こえる。

《空気読みなさいよユーカー！なんで母子の再会に水差すの！？》
「普通の親子は口にしねぇしディープまでしねぇんだよ。全世界の親子と俺に謝れ詫びろ謝罪しろ」
「謝るのは貴方でしてよお兄様っ！」

突然俺達の会話に飛び込む女の声。近くの茂みから飛び出してき

た少女が一人。恋する乙女は恐ろしい。それを体現した奴だ。
「そ、その声……え、エレインんん！？こんな時間にどうしたんだよ！？」

いいところのお嬢がこんな夜中にドレスに葉っぱや蜘蛛の巣泥やら何やらで汚してまで……ってどんな風にしたらあんなに汚れるんだ。こいつ、匍匐前進か何かで追って来たのか？
しかし俺の疑問に答えずに、エレインは俺に詰め寄りぎりと瞳を釣り上げる。

「それは私の台詞ですわ！女装しランス様を誘惑してあんなことをしたにも飽きたらず、今度は何処までお出かけですの！？Ｂですか！？Ｃですか！？Ｚですの！？」
「むしろ俺が被害者だ！っつーか、Ｚって何だよ」
《ユーカー！あんた私のランスになんてことしてくれてんのよ！確かに私のランスは格好いいし可愛いし優しいしいい男だしあんたみたいな屑が惹かれても仕方ないと思うけど、身の程を弁えなさい！》
「だから俺が被害者だって言ってんだろうが！」
「母さん、あんまりユーカーを苛めないでください」
「ランス……」
「それは俺の特権です」
「結局そこでお前は落とすのか！？俺オチ止めろ！！」

俺がツッコミを入れ終える。そこで俺は当たりが静まりかえっていることを知る。それにちょっと思い出すことがあって、恐る恐る後ろを振り向けばエレインが両肩を振るわせている。

「ランス様……お兄様……お二人は、またそんな明後日の方向を見て会話などなさって。お二人の前世は猫ですか！？まだ幻覚が見

えてるんですの！？」
「あ、いや……」
「いけませんわランス様！お疲れなんですわ！エレインが添い寝をしてお疲れをとって差し上げますわ！そうすればすぐに幻覚なんか見えなくなりますわ！」

そうだ。こいつには精霊が見えない。見えないどころか聞こえもしない。
湖の精と会話している俺達が、異常に見えるのだろう。幾らランスが数術使いとはいえ、知らないことを知らない人間が正しく理解するのは難しい。

「ランス様のお母様は亡くなったんですのよ？そんな亡霊に惑わされてはなりません！水妖は水辺に人を招いて引き摺り込むと言うじゃないですか！お兄様はどうでも良いですけどランス様に何かあってはエレインは……エレインはっ」
「ランス……こ、こいつも悪気があって言ってるわけじゃなくて、お前を心配してるってのは解るよな？」

大切な養母を否定され、仏頂面になるランス。俺が必死にエレインとの仲裁を図るが、無意味に終わる。ランスがエレインを快く思っていないのは、たぶんこういうところ。でもこればっかりはどうしようもないじゃないか。

「エレイン、俺はやっぱり君とは結婚できない。母さんが見えない、声が聞こえない。それは許せても……彼女を否定する君を、俺は好きにはなれない。君と結婚するくらいならセレスでも娶った方が何倍もマシだ」
「だからそこで俺を引き合いに出すんじゃねぇって！」
「お兄様の馬鹿ぁっ！」

「ぐっ……」

やっぱりここで打たれるのは俺なのかよ。だから顔のいい男は嫌いなんだ。そういうのに惚れた女は本人じゃなくて近くにいる俺を殴るから。

走り去るエレイン。俺は追うに追えなくて、ランスに視線をやるが、この男と来たら追う気ゼロ。ぷいとそっぽ向いている。こいつは本当母親絡みの話になると大人げない。エレインより何歳年上だと思ってるんだか。

「……仕方ねぇだろ。あいつは何も解らないんだから」

「解らないからって人を傷付けて良いという理由にはならない。俺は彼女のそういう思慮の浅さが大嫌いだ」

「今日のお前が言うな大賞はお前な。ここんとこ連日受賞しまくってんぞお前」

「え？」

「えじゃねぇよ。ったく」

またいつもの天然面に戻った従兄に俺は重すぎる溜息。あれとこれ、どっちも素だから質が悪いんだよなこいつは。

「んで、そこに隠れてる奴出て来いよ。5秒以内に出て来ねぇとどうしてやろうか……」

俺のカウントダウンに、茂みから飛び出す金髪三つ編み。即位式のポニテからまた庶民ルックスに戻りやがったアルドール。

「ったく、どうしてエレインなんか連れて来たんだよ」

「いや俺は、止めに来たんだって。あの子ほっといたら何しでかすかわからないし、二人が心配で……」

《誰？その子》
「アルドール様ですよ母さん。俺の仕える方です」
「あ、初めまして。ランスのお母さんですか？いつも彼には助けられています」

湖の精ヴィヴィアンのいる方をちゃんを見ながらお辞儀をするアルドール。その様子はエレインのそれとはまるで異なる。

「お、そっか。お前みたいな阿呆でも一応数術使いだったな。んじゃ、見えるか」
「一応って何だよ」
「最弱が一応じゃなくて何なんだ？」
「うっ……」

俺の指摘に言葉を詰まらせる情けない奴。相変わらずのへたれ野郎だ。

《ああ！あのアルドール饅頭のアルドール様ね！》
「ま、饅頭！？」

精霊にまで都のお祭り騒ぎを知られていたのかと絶句、赤面するアルドール。ほんと都の奴らって馬鹿ばっかだよな。こいつも大概だが。

（まぁ、それでも……）

ランスが俺を気に入った、最たる物はたぶん……俺がヴィヴィアンの声を聞くことが出来たからだ。それがあったから俺達は出会えたし友人になった。それじゃあこの精霊を見ることが出来るアルドールとなら、俺よりも親しくなれるのかもしれない。

入れ込みすぎて依存になると以前と同じ事の繰り返しだが、友人として話せるようになったなら、少しはこいつの王への神聖視は和らぐだろう。
こんな阿呆に俺の自慢の友人を貸し与えるのは癪だが、それが今はランスのためなのだ。仕方ない。

「ランス、てめぇはこの馬鹿に話しておくことがあっただろ？俺は攻撃も喰らったしもうてめぇに付き合いきれねぇ。んじゃあな」

そう言い残して足早に森を抜ける。後ろから俺を呼び止める両者の声があったが聞こえない振りをする。俺はお前らの通訳じゃねぇんだ。便利アイテムでもねぇんだよ。お前らも人間なら直接会話をしやがれ。

＊

（ど、どうしよう）

アルドールは悩んでいた。困惑していた。動揺もしていた。ついでに言うなら逃げ出したかった。
しかしイグニスに言った言葉を思い出し、なんとかその場に踏みとどまった。
エレインは帰ったし、トリシュもそれを追って消えたし、頼みの綱のユーカーももういない。ここは俺が何とかするしかないのだ。

「話って……俺に？」

ユーカーが残してくれた話題の種を拾って、俺は何とか顔を上げた。その先でランスは視線を母親に逃がしている。
流れるような水の色。そんな綺麗な髪をした小さな妖精のような

それ。それが噂に聞いていたランスの母親らしい。その節はカルディアではお世話になりました、魚料理三昧で。

「……」

どう言えばいいのか解らない。そんな様子のランスを助けるよう、口を開いたのは彼女だ。

《饅頭……ごほん、ええとアルドール様だっけ？改めまして初めまして。私はヴィヴィアン、この湖の精でランスの養母。実はこの間私はこの子から預かり物をしたのよ》

何で俺より先に饅頭の方が記憶に残って居るんだろう。ここにイグニス居なくて良かった。居たら明日から俺は彼女に饅頭呼ばわりされているところだった。そんな馬鹿なことを考えている俺に、彼女は真面目な顔つきで言う。

《貴方の妹の亡骸。とある水辺に埋葬させて貰ったわ。ぼちぼち落ち着いたら引き取りに来て貰おうと思ったんだけど……ちょっと参ったことになったのよ》

「フローリプが……？」

「どういうことですか母さん？」

《真っ当な精霊って血の穢れを嫌うものなのよ。悪い数字に当てられるとこっちも調子狂ったりするから》

詰め寄る俺達に、ちょっと黙って話を聞きなさいと彼女は言う。小さな精霊に似合わない溢れる怒気に睨まれた俺達は口を閉ざした。

《要するに、だから預かり物を匿ってくれる宛って言うのがなかなか見つからなかったのね》

その口調ではここにフローリプが居るわけではないらしい。あの状況で満足に葬ってもやれなかった。敵の手に奪われないようしてくれたランスには感謝しているが……俺はフローリプの墓にまだ手を合わせることも出来ないのか。

《でも時々そういうのが得意な精霊もいる。環境汚染に感化されて慣れちゃったっていうかまぁそういうの。ちょっと好戦的っていう所を除けば私達とそこまで大差し、能力自体は秀でてる。でも人間嫌いは私達以上。故に契約するのは難しい。そういう精霊が居るのよ》

「それでその方に預けたんですか？」

《ええ。綺麗な場所であるのは確かだし、景観だけなら良い所よ。不吉な気が漂ってるのが残念だけど》

問題はその不吉な気のことではないのだと、そう前置きをした上で彼女水を凍らせ氷のオブジェと地図を作る。

《最近そいつ引っ越したらしくて、私も預けた後に知ったのよ。返して貰おうにも他に預かってくる相手もいない。ここに移したら数値異常の容量オーバーこの湖がどうにかなっちゃうわ。大体向こうにも数術使いがいるんでしょ？あんまり騒ぎになるようなことは出来ないわ》

フローリプの運び入れはエルス＝ザインが南部にいた頃だから出来たことだと言う精霊。今エルス＝ザインが何処にいるのか俺には解らないけれど、あの子は俺を怨んでいる。追って来ないはずがない。

ヴィヴィアンの溜息が今居る湖のオブジェを水に戻し、湖面に返す。そして湖の精は、ここから北に位置する古城を静かに指さした。

《でその場所って言うのがこの近く。あの古城の浮かぶ湖よ》
「古城っ！？それはタロック軍が居座っているというあの！？」
その言葉にランスも驚きを顕わにする。俺に至っては驚きのあまり何も言えなかった。
《だから私もどうかなと思ったのよ。まぁ、湖引っ繰り返して小さな箱探しなんてしないとは思うんだけど》
「最近その精霊が場所を移したというのは……そこで血生臭いことが起きているから。そういう風にも受け取れますが」
《ええ。たぶんそう言うことだと思うわ》
タロック軍が居るという場所。そこにフローリプの亡骸が安置されている。行かなければならない所。それでも、そこにもう一つ理由が増えた。負けられないと思う理由も。
「……ありがとうございますヴィヴィアンさん。ランスも俺の妹を、ありがとう」
「アルドール様？」
「俺もやる気出てきた。あの場所だけじゃない。フローリプを取り返す。そういう風に思ったら……もう負けられない」
そこにタロック王が居るのだとしても、俺は震えていられない。
（フローリプ……）
最期まで笑っていた。泣いていた彼女。そんな血生臭い場所……彼女は好みそうではあるが、兄としてはもう少し穏やかな場所で眠らせてやりたい。違う場所に眠るルクリースだって寂しがっている。

フローリプだって……きっと寂しい。あんな別れ方をしたんだ。ルクリースにちゃんと会わせてやりたい。
俺には死ぬのがどういうことかまだわからないけど、それでも二人とも俺の家族だ。

「家族が離れ離れなんて、悲しいことだよ。フローリプは……トリオンフィのみんなとも離れ離れなんだ。せめて……フローリプが大好きだったルクリースの傍にいさせてやりたい」
「……アルドール様」

ランスが俺の方へと近づいて、初めて会った日のように……俺に跪く。

「俺も尽力させていただきます。フローリプ様を、ゆっくり眠らせて差し上げましょうアルドール様」
「うん、ありがとう……ありがとう、ランス」

俺も膝をつき彼と視線を合わせてその手を取った。俺の行動に彼は驚いていたが、これ以上謙る体勢を思いつけなかったらしくそのまま固まる。
彼の風変わりな物言いと、正論に人は押されてしまう。だから彼は自分が押されることに慣れていないのだ。そう思って俺が笑えば彼はわけがわからず戸惑った風な顔になる。そういう反応をされると相手が年上だと言うことをちょっと忘れてしまいそう。
俺は小さく笑って立ち上がり、当たりを見回す。夜の湖はなかなか良いところだ。幻想的だとでも言うのだろうか。こんなところで暮らせるランスの母さんが羨ましい。

「良いところだな、ランスの実家って」
「そうでしょうか」

さっきまでの可愛さは何処へ、実家の話題になって露骨に嫌そうな声色になるランス。

「ああ。良いところだよ。緑と青に溢れている。シャトランジア……俺の実家の近くじゃこんなに綺麗な湖はなかった。こんな綺麗な場所だから、精霊も棲み着くんだろうな。ランスの母さんは見る目があるよ」

《あら？褒めても何も出ないわよ王様君？》

照れている小さな精霊は可愛らしい。ランスの母だとは言うが、大人女性という感じはしない。精霊ならではの無邪気さというのだろうか。そういうものに溢れている。

「……そうですね。景観は俺も嫌いじゃありません」

俺の言葉に少しだけ機嫌を直してくれたのか、ランスも湖を見つめながら小さく微笑する。だけど湖面を覗き込む彼のその面影は少し悲しげ。

「でもこれだけ綺麗だと泳ぎたくなるよな」

「アルドール様、冗談でも止めてくださいよ。母さんの家はこう見えてかなり深……」

「うわっ！」

「アルドール様！？」

水際を歩いていた俺は、自分の足に躓いて体勢を崩す。流石最低幸福値ホルダーだ俺。そのまま湖に頭からダイブ。夏服とはいえ水を吸った服は重い。これまで本の虫の箱入り息子同然に育てられてきた俺は……服を着て泳いだことなどない。自宅の風呂で適当に泳

いだことがあるくらいだ。勿論適当なのでちゃんとした泳ぎ方など知らない。

身体が重い。息が苦しい。段々沈んでいく。

沈む間際、ランスも飛び込んでくるのが見えた。だけど彼だってそんなに幸福値の高いカードではない。俺の不運に彼まで巻き込まれてしまったら……ユーカーやエレイン、トリシュにヴァンウィック、いろんな人が悲しむ。ランスはいろんな人に好かれているんだ。俺とは違う。

（ランス、来ちゃ駄目だ！）

拒むように伸ばされた手を振り払う。ここで掴んだら彼まで溺れてしまう、そんな気がした。

＊

夢の中を漂うような酷くぼんやりした……こんな感覚、何処かで前に。それはつい最近。シャラット領で……ユーカーに叩き起こされる前に。

目を開けるが、目の中に水は入ってこない。痛くない。水のそこから見上げた景色。それはこの世の物とは思えないほど美しい。キラキラと差し込む光のカーテン。魚たちの群れ。ゆらゆらと揺れる水草。一面の水の世界。

俺がその景色に見惚れていると、突然バシャンと上空から大きな音。見れば誰かが振ってくる。長い綺麗な金髪の美しい女性だ。その人の両足は紐に縛られ、その紐の先には大きな石が括り付けられている。足を固く縛られたその人は、人魚のように見える。だけど青い眼の人魚に赤い色は似合わない。彼女は苦しげに胸を押さえ、そこから赤い色を滲ませる。はっと気付いた。これは自殺ではない。

彼女は殺された、殺されるのだ。
我に返った俺はその人に近づくけれど、俺の手はその人をすり抜け、その縛めさえ解けない。その美しい人が苦しみから恐ろしい形相に変わるのを、俺は見届けなければならなかった。彼女が息絶える刹那まで。
目を背けたくて、背けようとしても口から漏れる空気の音が、苦しそうなその音が聞こえる。それに耐えられず俺はまた、その人を見てしまう。

人間って呆気ないんだな。それが俺の感想だ。俺にとっては物凄い長い時間だったけど、実質そんなに時間は経っていなかったんだと思う。
彼女が死んだそのしばらく後に、血の穢れに気付いた湖の精が現れて、どうしたものかと考え込むような仕草。彼女が湖面を見上がればそこで涙を流す小さな子供の姿。それが母さん、母さんと泣いている。その青すぎる程青い瞳の少年は、俺の知る人によく似ていた。
その子供の泣き声に、精霊は困り顔。俺も本で読んだ事があるが、この程度の重りなら腐敗の程度によってこの死体は浮かんであの少年の目に晒されてしまう。
変わり果てた無惨な姿。それは子供に見せるには忍びない。精霊は女の遺体を数術で何処かに飛ばす。
それは単に血の穢れで自分の家を汚されたくなかっただけとも取れるが、それだけではないのかも知れない。帰ってはまた現れて母さんを呼び続ける少年に、精霊は母性が目覚めたのか、心配そうに彼を見上げていた。そんな日が続いた、ある日少年が身を投げた。母さんに会いたくて、水の底を目指して。
精霊は人間をあまり好まない。だから関与しない。あの女の人が死んだ時、気付いていたとしても精霊は彼女を助けなかったに違いない。この精霊を突き動かしたのは、変えたのは……あの少年。傍

観を止め、精霊は水の底から浮かび上がり、沈む彼を陸へと戻し、息を吹き返さない彼に口付けをする。

「母さん……」

そう朧気な意識で呟いた少年の、その小さな手を取って彼女は只今と言うのだった。

＊

「っ……！」

そこで俺は目が覚めた。

「ら、らららららららランスっ！？」

「……お帰りなさい、アルドール様」

出オチに出イケメン。水も滴る何とやら。何しててもこの男は様になるし絵になるなぁとちょっと現実逃避。だって顔近いし。顎捕まれてるし。今正に人口呼吸というかもう終わったんじゃねこれ？的な。ユーカー、他人事だって笑っててごめん。そっか、別に嫌いじゃないけどショックはあるなこれ。俺のファースト……女の子に囲まれてた時にはそんな展開なかったのに、ここで来るか？別にランスは嫌いじゃないけど、初めてが男かと思うとちょっと泣ける。

いやでも命の恩人相手に何言ってるの俺？失礼だろ、最低だろ。本当ごめん。

でも俺もイメージではギメルとか妄想したことくらいはあったんだ。淡い夢だった……今のギメル（？）は俺に跪いて靴を舐めろとか靴キスを強いてくるようなドSだ。多分俺のイメージと重なることはない。そう思ったら無性に泣けてくる。

「ああ、ご心配なく。未遂です」
「み、未遂ですか」

涙目になる俺に、ランスが優しく笑みかける。その笑顔に安心してほっとしてまた俺は泣きそうだ。だけど何故に俺敬語？いや、ちょっと緊張して。

それきり黙り込んだ俺に、飛び込む前に脱いだらしい上着を羽織らせて、……ヴィヴィアンの方を向くランス。そんな薄着でそっち見たらあの精霊は流血物じゃなかろうか。主に鼻血で。見れば彼女はドキドキしている。しかしその顔は赤くなく、どちらかと言えば蒼白だ。どうやら彼女も見たらしい。そしてそれは彼女だけに留まらず……

「母さん……俺の母さんは、ここにはいないんですか？」

ランスのその発言に、彼もあれを見たのだと知った。

《そ、それは……》

口籠もるヴィヴィアン。俺は咄嗟に彼女を庇う。

「ランス、ヴィヴィアンさんは悪くない。彼女はランスに見せたくなかったんだ、真実を」
「退いてください、アルドール様。これは俺と彼女の問題です」
「違う！」
「アルドール様……？」
「お前は俺の騎士だろう！？だったらランスの悩みは俺の悩みだ！ランスの問題が俺の問題だ！違うか！？」

ぎりと彼を睨め付ければ、ランスが押されて押し黙る。ここは一気に攻めるしかない。

「知らない方が良いこともある。思い出を思い出のまま愛せる方が幸せなことだって……」

俺だって知りたくなかったことはある。道化師に騙られたギメル。彼女は被害者だ。何も悪くない。それなのに俺は、昔のように彼女を愛せないのだ。彼女は何もしていないのに、彼女の笑顔を信じられない。いつか本当の彼女に再会したとしても、道化師の顔が笑い声がちらついて……彼女の顔をまともに見られなくなる。たぶん、昔のように好きなままではいられない。もう、彼女を愛せないのだ。俺の恋は壊された。彼女の所為ではなく、赤の他人の悪意によって。だけどまだ彼女が好きだから、俺の心は痛み続ける。泣いて居るんだ。知らなければ良かったと。思い出を汚い手で汚さないでくれ。踏みにじらないでくれ。綺麗なまま、飾らせてくれと。

「例え血は繋がってなくてもヴィヴィアンさんはランスの立派な母さんだ！一生懸命お前の心を守ろうとしてくれたんじゃないか！」

「……すみませんでした。母さん、アルドール様」

俯いたまま小さくそう残し、ランスが走り去る。俺はランスとヴィヴィアンさんを交互に見てどうしたものかと狼狽えた。そうする内にランスは森の中へと溶け込んで、今追っても俺じゃ迷うだけ。仕方ないと俺はヴィヴィアンさんの方へと目を向けた。

《……さっきはありがとうね、アルドール様》

「え、いや……先に助けてくれたのはランスですし」

俺が首を振ると、精霊は苦笑し……小さく溜息。ランスの消えた

方を心配そうに見つめている。

《あの子はあの色男なお父様と不仲な分、母親への思い入れが強いのよ。自分を愛してくれる父親じゃなくて、自分を愛してくれなかった母親の方が好きなんだから……よっぽどね》

母親に愛されなかったのは、あの父親の所為だとして……今も生きている父を憎く思っている。もう何処にもいない、手にはいることがない母からの愛。それをまだ心の何処かで諦められていないのだと彼女が俺に教えてくれた。

《人間って不便な生き物ね。なくした物は何でもかんでも美しく見えて仕方がないの。それで今傍にある物、手にしている物をそんな風に思えないんだから》

それをなくすまでそれがどんなに光り輝いていたか、それに気付けない曇った目。彼を愛してくれている人は幾らでもいるのに、彼はそれに気付けず、認められず、受け入れられない。そんなランスを精霊は深く哀れむ。

「……ランスは、犯人を捜そうとするんでしょうか？」

《しない理由がないわ》

ヴィヴィアンは空を仰ぎ、その暗さを瞳に宿す。

《あの子が取り乱すのは何時だって、家族に関係することだけよ》

「あの……彼女は何処に送ったんですか」

《北……。当時はあの湖は無人……何の精霊も居なかった。だからそこに送ったの……》

無人の湖。穢れの流れ着く場所。精霊達のゴミ捨て場。フローリプが居る場所に、ランスの母親の遺体もある。だからこの精霊は、あんなに言い辛そうだったのか。

＊

「さて、これでちょっとは仲良くなれるかな……って思ったのに何なんだろうねこれ」

数術で身を隠し、イグニスが木陰から様子を窺うと……予想とはちょっと違う展開。これまでの情報と人物関係の齟齬が生じたからこうなってしまったのかもしれない。やはり何でもかんでも計算通りとは行かないか。そう溜息を吐けば、背後からそんな狂った計算結果を讃える者がいた。

「……流石ですのね、神子様は」
「マリアージュ、仕事中だよ」
「それを言うなら同罪だわ」
「ああ、そうだねエレインさん」

こうして二人で話すのは実に数日ぶり。見事に彼女を演じてくれてはいるが、過度の接触は周りに違和感を覚えさせてしまう。あくまで僕らは他人として演じなければならない。僕は結界を彼女に広げ、外部への情報をシャットアウト。

「僕は先読みってだけでもないからね。後読みを見せることくらいは余裕だよ。まぁ、アルドールは馬鹿だから自分の数術の力がなんか知らないけど暴走してシンクロを引き起こしたとかそんな風に解釈してくれるんじゃない？」

僕が彼らに見せたのは、この湖の記憶だ。僕は先読みだから未来を見ることが出来るけど、今は後読みの力もある。後読みは過去を見る力。数術使いの大半は、そこに残された数値からある程度の過去は読み取れる。その情報量を深く正確に読み取ることが出来る者が、後読みを名乗れる。長い時間が経てば、残る情報量も少ない。0でないとはいえ限りなく0に等しいそこから正しく真実を暴き出せる使い手は、世界に数人いるかいないか。僕にとっての幸いは先読み後読みが数術ではなく、特技という点か。数術を使わなくとも、情報伝達を行える。代償を必要としない。それはそれでメリットだ。使える分には使っていきたい。

ここは水辺だから簡単に情報伝達を行えた。僕はハートのカード。水の人間だから、彼らが水に触れることは僕に触れることに等しい。水を媒体に彼らの頭に過去を映した。

「数術使いってなまじ人にに見えないものが見えるから、ちょっと不思議なことは大体肯定してしまう。数術に出来ないことはあまりない。だからそう思ってしまう。騙す力を持つ者が、最も騙されやすいっていうのは皮肉だね」

だからこそ一番厄介なのは見えない相手なのだ。

「トリシュさんは数札。数術の才に目覚める事もあり得る。パルシヴァル君は精霊への適正がある。あの二人はその内視覚開花もなるだろう」

「となれば……厄介なのはお兄様、そういうことですの？」

「そういうことだよ。彼は味方なら本当に心強い相手だ。でも出来ることならランス様への依存を少しずつアルドールに移していくのがベストだね」

「そうでしょうか？」

「だって最悪の場合、覚醒した彼をランス様に持って行かれたら、

このゲーム僕らの負けだ。そうならないように、まずは決して裏切ることがないように、ランス様の手綱をアルドールに握らせないと駄目なんだけど」

セレスタイン卿がアルドールを裏切るとすればそれは十中八九ランス様絡みだ。ランス様とアルドールに不和が生じなければその展開は避けられる。さらにその対策として、セレスタイン卿をアルドールに入れ込ませる。その二重策が最善の手だと言う僕に、マリアージュは異論唱える。

「昨日と今日とあの二人を間近で観察いたしましたけど、お兄様は正常ですわ」

「と、言うと？」

「彼には狂人の才能がありませんのよ。それがお兄様の才能です。お兄様は何があっても、誰が狂っても、正常で居続けられる才能があります。だからこそ人一倍、傷つきやすいんだと思いますわ」

確かに過去を振り返ってみても、彼は自棄になることはあっても狂うことはなかった。あれで彼は正常なのだ。

「普段まともな奴ほど狂う才能があるってのもなんだかなぁ……ああいう社会不適合騎士が一番まともってどういうことなんだろう」

「だから彼はあのままで良いと思います」

僕の悩みを振り払うよう、マリアージュは力強い響きでそう言い切った。

「度を外すほど、ランス様が狂ったならば……彼は間違いなくアルドール様側に付きます」

「どうしてそう思う？」

「だってお兄様は本当にランス様が大好きですもの」

演技から外れた彼女はそこに嫉妬など映さない。それもそうだ。別に彼女はランス様が好きなわけではないのだ。彼を好きだった少女をそれは見事に演じているだけ。そんな彼を何とも思っていない彼女がいう言葉、それはとても客観的なものだった。

「だからそんな人がおかしくなっていく姿に耐えられるはずがないんです、あんな正常過ぎる兄様が。……ですからその場合、兄様は止めようとします」

「確かにね。……彼がトリシュさんを庇う理由がないとは思った。そう言うことだったのか……」

憧れる余り、その憧れから道を踏み外していくその人を見ていられない。尊敬するからこそ、誰よりもその崩壊に耐えられないのだ。もし自分に神の如く崇める人がいて、その人がある日突然悪魔に変わったなら、何とか元に戻ってくれと懇願するだろう。それが叶わないのなら、これ以上思い出を過去を汚さないでくれと……戦うしかなくなる。それが自分とその人との思い出を守る方法だ。アルドールが道化師に挑む力を手にしたのもたぶんそんなものだろう。追い詰められて追い込まれて、そこで精神崩壊から自分を守るための防衛策。一種の逆ギレ。好きな相手だからこそ、許せないことがある。マリアージュはそれを狙えと言っているのだ。そのために彼らはあのまま放置がいいだろうと。

「でも君もなかなかえぐいことを言うね」

「神子様は変なところで甘いんです。優しいんです。これには世界がかかっているんですのよ？誰が相手だろうと徹底的にやるべきですわ」

愛らしい笑顔で、彼女はそんなことを言う。

「まぁ、セレスタイン卿だしいいか。追い込めば追い込むほど、アルドールは彼を気に入るだろうし、気に入られればその人を悪く思えなくなるのがセレスタイン卿だ。そうなれば余計アルドールを裏切れなくなるはず」

（残る問題は……ユリスディカ。彼女のことくらいか）

彼女が現れるまでに、アルドールの周りの女性陣が全滅というのは初めてだ。だからこれがどう転ぶか解らない。心配なのはそこだった。

＊

「帰ってなかったのか？」

森を進む俺の後ろから、ガサと現れる人の気配。振り向かなくても解る。足音一つで気配の色で。ランスは静かに息を吸い、背中の向こうに声を投げた。

「お前ら二人なんてちゃんと会話が成り立つか心配だろうが」

「ならどうしてあそこで助けに来てくれなかったんだ？」

「馬鹿か？あいつはお前の主だろ。俺には関係ないね」

ユーカーが面倒臭そうに、俺の傍までやって来て、上着を投げる。

「向こうで火焚いてやってるからこっち来いよ」

「お前はどこまでお見通しなんだ？」

「暇だっただけだっての。お前ら置いてったら屋敷に入るのに二

度手間だろ」

どうせお前は俺に鍵を開けさせるのだろうと奴はいう。それもそうだ。確かに、待っていてくれた方がありがたい。俺達は窓から帰ればいいが、アルドール様はそうもいかない。

「お前……何やっていたんだ？」

「お前の所の領地だろ？畑からちょっと拝借して来た」

火の周りはこいつが一人で暇つぶしをしていたというのはあまりに……楽しそうだ。干し肉焼いたり、畑からかっぱらって来たという野菜や果物を焼いていたり。一人でバーベキュー気分じゃないか。何豪勢な夜食を用意して居るんだ人の気も知らないで。

（これだけ用意していると言うことは……全部見てたわけじゃないんだな）

どこまで俺を過信して居るんだこいつは。俺なら大丈夫とか、そんな風に思っているのかお前まで。それは信頼なんだと思う。わかってる。それでも俺だって……

「ユー……もがっ」

「黙れ」

「……うぇ？」

「いいから食え。良い感じに焼けてるぜ」

話しかけようとした俺の口を物理的に塞いできた従弟。口に突っ込まれた野菜と肉の串。でも俺は肉より魚派……そこまで思い、先程の不思議なあの映像を思い出す。あれは俺の記憶ではない。だって俺の視点ではなかった。そんなものが何故俺に見えたのか。

母さん。死んだ母さん。それが餌に変わったことを知った魚が……魚が集まって。母さんを食べようとした。その前に、養母さんが母さんを逃がしてくれた。だけど俺には衝撃的過ぎたのだ、あの映像は。もし養母さんああしなければ俺は知らずに、母さんを食べた魚を俺が食べていたのかも知れない。そう思うと……しばらく魚は見たくない。食べたくもない。

ユーカーに寄越された串を噛み締める。確かにそれは美味かった。荒っぽい料理だがこいつも基本何でも出来るから。唯、しないだけで。

「……美味いな。特にこの味付けが」

「秘伝のタレだ」

「……お前は何屋だ？」

騎士の癖に何故そんなものを持っているのかと尋ねれば、自作の物だと白状する。何処が秘伝なのかはわからないが、砂糖のほどよい甘さとピリリと微かな辛さが堪らない。味付けは良かった。それをかけるだけで香りまでもっと良くなる気がする。

「いや、だってよ。よく俺飛ばされてたし。干し肉とかばっかだと味飽きんだろ」

こいつはなかなか味にうるさいグルメ肌。単に飽きっぽいとも言う。ユーカーが自慢げに取り出した数々の小瓶。それぞれがオリジナルの調味料と香辛料らしい。

「光栄に思えよ。この俺様の切り札の一つを食らわせてやったんだからな」

「切り札？」

「美味い料理を食わせてその隙に逃げ出すっていう策の大事な切

り札に決まってんだろうが」
「そうかなるほど。お前は賢いな。だが馬鹿だ」
「そこで何でがっちり俺を押さえ込むんだよ！ここでお前相手に逃げるか馬鹿！」
「それもそうだな」
「うわっ……いきなり何しやがんだてめぇっ！！」
「悪い、手が滑った」

火消しのための水桶の一つ。それをうっかりユーカーの頭からぶちまけてしまった俺に当然烈火の如く怒りを顕わにする従弟。目を逸らしつつ謝ってはおいた。

「うっかりやれることじゃねぇだろ！」
「俺だけ水浸しなのがなんだか不公平だと思っただけだ。気にしないでくれ」
「気にするに決まってんだろうが！」
「いいじゃないか。お揃いで」
「そんな不幸までお揃いたくねぇぜ。せっかく髪セットしたってのに」
「お前はセットしてそんなわざわざボサボサにしているのか？」
「お前っ、人の髪型そんな風に言うんじゃねぇよ！人の気も知らねぇで……」

その言葉は先程、俺がユーカーに対して思ったことだ。

（俺は……）

なんて自分勝手な。こいつのことを解ろうともしないで、それで俺のことは何でも解ってくれだなんて。肝心なことは何も話さないのに、それでもちゃんと理解して肯定してくれだなんて。そう思っ

た途端、自分が嫌になる。せっかくこいつが用意してくれた食事が咽を通らない。

「……悪かった。ごめん」

「？何だよ急に。気味悪ぃ」

気にした風でもなくユーカーが目を瞬かせる。こいつはもう、俺を許してくれたのか。どうしてそこまで……俺を。

「髪は……降ろしてるとお前と比べられて嫌なんだよ。それに髪伸びて来るとセレス呼ばわりされっし」

確かに言われてみれば……髪切る暇があまりないのだ。こいつは何時も山賊、海賊退治でセレスタイン領以外に西へ東に北に南へ派遣ばかりされていたから。体裁を気にする都周辺では評判が悪いが、それ以外の土地なら案外俺なんかより……こいつの支援者はいるのかもしれない。そんなこいつが俺を引き合いに出し俺の自慢ばかりするから、俺の名声が広がった。この素直じゃない男が認める程の男だ。どれだけ凄い奴なのだろうと。多分それだけのような気もする。

「お前は……俺がそんなに凄い奴だとでも思っているのか？」

「何だよ突然」

「教えてくれ」

「思ってねぇよ」

「嘘だ」

「冷静になれよランス。お前俺に何したと思ってんだ？ここ数日のことだけだけでもお前が最低だって証明できる証拠は幾らでもあるんだぜ？」

正論過ぎて否定できない。

「良いか、お前は最低だ。俺に関してはその一言だ。だがそんな最低な野郎がどうしたわけか俺の自慢の従兄だ。この国一番の騎士様だ。俺はお前が最低なのを知ってるが、それを補って余り得る位良い奴だってのも知ってる。だからここにいてやるんだろうが」

そんなことも解らないのかと呆れられた。

「そういう馬鹿にこの食い頃の串はやらん！ってあああああ！」

「甘い」

「て、てめぇ！意外に素早いなこんちくしょう！！素早さは俺の方が早いのに！！」

「お前の振りには無駄な動きが多い。それを読めばこんな風に先回ることも出来る」

良い感じに焼けた串を強奪した俺を睨み付けてくるユーカー。だがそれはそこまで悔しそうではない。むしろ嬉しそうだ。本当にこいつは俺に負かされるのが好きなんだな。俺に勝って俺に怨まれるより、負けて……俺が凄いというのを近くで見ているのが好きらしい。或いは勝ってひっそりと喜んでいる俺を見抜いて、それを見つけるのが楽しいのかもしれない。

「そっちの串も焼け頃だな。取ってくれないか？」

「仕方ねぇな……ってぎゃああ！」

「ユーカー？」

視線を逸らして火を見つめていた俺も、ユーカーの悲鳴を聞いて、其方に向き直る。すると何処から湧いて出たのか、俺の父親がそこにいた。ユーカーの隣に腰を降ろして串を指ごと咥えている。

「ぎぃやあああああああああああああああああ！！放せ妖怪っ！」
「ふむ、これはなかなかの味付けだねセレス君」
「何でその状態で普通に喋れんだよあんたはっ！腹話術か！？怖ぇえっての！！ぎゃあああああ！指舐めんな！吸い付くな！しゃぶるな！噛むなこの変態っ！」
「俺の従弟で遊ばないでください」

父と呼びたくもない男の頭を踏みつけて、焚き火の炎の間近数？の所まで追いやった。しかし男は悪びれない。やっと解放されたユーカーは半泣きで桶に手を突っ込んでいる。

「まったく私の偏狭馬鹿息子はこれだから。お前はセレス君に依存しすぎだぞ？少しはお父さんに分けなさい。そうだな、例として上半身はお前に、下半身は私が貰うみたいな」
「気色悪い例え方すんなっ！俺は俺のもんに決まってんだろ！！」
「もっと踏まれたいですか？そうですか。じゃ全体重乗せますね、えい」
「はっはっは、まだまだランスは軽いな」

両足で踏みつけるがそれでもその体勢を保っているこの男は腐っても騎士。鍛えてはいるらしい。それが腹立たしかった。こんな男に負けているような気になって。

「おや、もうじゃれつくのは終わりかい？」
「貴方なんか構うより、ユーカーを構ってた方が楽しいし俺的には癒されます」
「っていうかこんな時間にあんたまでなんで外に居るんだよ」
「久々の領地だろう？年頃に育った食べ頃の娘がいるかと思って

領内を見回りにな。いやぁ、たまには帰郷もするものだ」
「アホか！！あんたここ数日ずっとそればっかだろうが！！自重しろ！っていうか枯れろ！今更跡継ぎ争いとかなったらランスが可哀想だろ！この年で今更弟妹出来てみろ！」

俺の気持ちの殆どをユーカーが代弁してくれる。本当出来た従弟だ。

「なるほど。ランスの弟代わりの君は、その愛着が余所に移ると心配なのか、可愛いところがあるじゃないかセレス君。それじゃあ叔父さん頑張って種蒔きでもしてくるよ！そうすればランスに捨てられた君が叔父さんの所にやって来るだろうからね」
「誰が行くかっ！！あんたもう今度こんなことしてみろ！三本目の足ぶった切ってやるっ！」
「いいのかいそんなことを言って。困るのは君だろうに」
「余裕で困らねぇよ！！」

ユーカーが焚き火の中に入れていた焼き石を手袋越しに掴んで、あの男に向かって投げ出した。流石にこの過激な歓迎には耐えかねたのか全力疾走で逃げていく中年。

「やっと消えたかあの性犯罪者」

ユーカーは、ふぅと安堵の息を吐く。その手袋は焼き焦げている。

「ユーカー……」
「な、なんだよ」

俺に手を捕まれて驚いたような顔。手袋を外させるとやはり火傷になっている。

「無茶するな」
「だってああでもしねぇとあのおっさん何時までも居座るぜ」
「それとこれとは話が別だ」

俺は回復数術を紡ぐ。その代償を知ってか逃げようとするその手を思いきり掴んで放さない。治療の際に何度か舌打ちをされたが放す理由にはならなかった。
ユーカーの手。手袋に隠されていたその手は、俺とは違う文字が刻まれている。俺は?、こいつはJ……こいつのそれはコートカードを意味する数字。俺なんかより余程生き残れそうなその数字。
だけどもっとも強かったルクリースさんが死んだ。こいつだって例外ではない。幸福値……それがなくなれば、こいつも俺も。それは解ってる。解っているのだが、これは癖なんだ。こいつの怪我を治すのが。
それにカードになる以前から俺は回復数術を使ってきた。その間は何を犠牲にして俺はこれを紡いでいたのだろう?それも幸福値?それならそこまで回復数術は幸福値を削らないのではないだろうか?大きな傷なら兎も角、小さな傷ならそんなには……

「……お前、それどうしたんだ?」

俺の首から提げられた水入り水晶に、ユーカーが気がついた。いつもは上着に隠れていて見えなかったのだろう。俺も言われて思い出す。

「これは母さんがこの間……これがどうかしたのか?」
「いや、いまちょっと光ってたから。数術に反応すんのかと思っただけだ」

その言葉に俺も考える。いつもは数術を使えば、少しは疲れる。それが今はない。計算を手伝ってくれているのだろうか？目を瞑り自分の数値を確かめる。幸福値が減ったような形跡もない。

（これは……触媒か？）

俺の幸福値が減らぬように、母さんが俺を守るために……これを贈ってくれたのだ。弱い俺が少しでも長く生き延びられるようにと。

「……ごめん、ユーカー。俺……母さんに謝りに行ってくる！何本かは残しておいてくれよ」

「その必要はないみてーだぜ？」

立ち上がり、湖へ戻ろうとした俺にも……聞こえる話し声。

「それじゃあトリシュ、エレインさんのこと見失っちゃったんだ？」

「ええ、面目ありません。これでは鍵をどうすれば良いのやら」

「先に屋敷に帰っちゃったのかな……」

《アルドール様も私のこと無視しないでぇー！》

「あ、ごめんヴィヴィアンさん」

がさがさと鳴る草むら。木陰から現れたのは母さんとアルドール様、それからトリシュ。

「あ……」

「ら、ランス！？」

まずアルドール様と目があった。気まずさを互いに思い出す。それを打ち破ったのが母さん。ユーカーめがけて突進していく。それ

を紙一重で避け続ける従弟。

《ちょっとユーカー！何楽しそうなことやってんのよ！私のランスを独り占めしてっ！！》

「別に俺は悪くねぇよ！ランス！虫除けスプレーか蠅取りリボン持ってこい！」

「領主があんなこの領地にそんな画期的な物があるとでも？」

「くそっ！里帰りしねぇと補充できねぇのかよっ！！」

セレスタイン領は南部でもそれなりに南に位置する。防虫技術はそれなりにある。逆を言えば虫が多い。だからそれに慣れているユーカーは虫が得意というかと言えばそうでもなく、むしろ苦手に近い。城での一戦ではたぶんこいつが一番震え上がっていただろう。アルドール様達の手前格好付けてはいたんだろうけど。まぁあれは虫じゃなくて母さんだしそれとこれとは関係ないか。

「イズーぅううう！？ど、どうしたんですかその格好！頭から水でも掛けられたような、びしょ濡れじゃないですか！」

水を浴びた所為で髪が下ろされているユーカー。ああ、半ばセレス化しているようなものか。トリシュが大喜びだ。しかしそんな姿に直視出来ず目も合わせられないとは、どこまでこいつに本気なんだろう彼は。目を逸らしつつ上着を渡す。今日は上着リレーが頻繁だな。アルドール様も自分の上着は雑巾のように絞って片手に。結局ここにいる誰もが自分の上着を着ていない。唯それだけのことなんだけれど、何故かそれが俺のツボに来て俺は吹き出してしまった。

それにみんなが驚いた顔をしたあとに、釣られたように笑い出す。ユーカーも呆れたように、だけど優しく笑って……俺達に串を刺しだした。

「めんどくせーからお前ら全員残りの食材処理手伝え。あとついでに片付けも」
「えー俺も片付け？ここ散らかしたのユーカーだろ？」
「黙れ宿無し野宿王。一口でも食った以上お前も共犯だ。あと文句言うなら鍵開けてやらねえ」
「解った。何でもするよ。ていうかこれ美味しいね。お代わりある？」
「変わり身早ええよ」
「イズーの手料理……手料理、イズーの……」
「お前はさっさと食え。冷えたら勿体ねぇだろうが」

ツッコミの傍ら背中や頭を軽く叩かれている。トリシュは幸せそうだから別に良いとして、流石にアルドール様にまで手をあげるのはどうなんだ？

「あ痛っ！」
「だからお前はアルドール様に対して無礼だ」

脳内会議すぐに終了。やっぱり却下。俺もユーカーの頭を軽く叩いておいた。

「くぅっ……」

俺を数秒睨んだ後に、言い返せないらしいユーカーがアルドール様に向き直る。

「もう、アルドールお前帰れ！お前居るとランスがランスじゃねぇ！」
「えええ！？それ俺の所為！？」
「ランスの所為だがランスの所為はお前の所為だ！こいつお前の

騎士だろが！」

そのやりとりが再び俺のツボに来た。腹を抱えて笑う俺に……二人は目を瞬かせる。そして二人で顔を見合わせたと思ったら、二人して吹き出した。

「ざまぁランス、凄ぇ阿呆面！せっかくの唯一の取り柄の顔が残念になってんぜ！」

「ユーカー！まだ全然許容範囲だろこのくらい！これで残念なら平均顔の俺なんかどうなるんだよ！！」

「お前は顔面生ゴミって名乗ったら良いんじゃね？」

「酷っ！！ちょっと最近ユーカーイグニスに似てきたろ！？そんなに俺に好かれたいのか！？」

「似てねぇよ！そして俺に近寄るなっ！！むしろてめぇが神子に似て来た！！そんなに俺の嫌がる顔が見てぇのか！？」

そこでユーカー以外の全員が頷いて、とうとう彼も本気で怒る。これは不味い。

「てめぇら全員ぶっ殺す！コートカード様の力見せてやんぜ！」

「まぁ、落ち着け」

咄嗟に俺はもう一つの水桶を彼に思いきりぶちまけた。

「落ち着いたか？」

「いい加減にしろ阿呆っっ！！」

怒りを通り越し、呆れに至りユーカーが笑う。今日一番のいい顔だ。俺と馬鹿なことをするのがこいつはやっぱり好きなんだな。胸ぐらを掴みかかって来た従弟は、俺を殺したいほど怒っているよう

には見えなかった。

「アルドールっ！それからトリシュっ！そっちの桶に水汲んで来いっ！そんでもってこの野郎の澄ました面にぶちまけてやれ！」

鍵開け係がこういうのだ。誰も逆らえない。

走り去る足音。暫く後にまた戻ってきて……それは予告も無しに俺とユーカーを狙ってきた。

「冷てぇっ！何しやがんだっ！！」

「だってユーカー離れないし、邪魔だったから俺ごとやれ的なあれかなって」

「合図くれれば俺も逃げるわ阿呆っ！」

アルドール様を怒鳴るユーカー。その声を留めたのは、次の水攻撃だった。

「聞いてたのに何でてめぇまでやるっ！！」

「水も滴るいいセレス……素敵です……」

「阿呆っ！お前戻ってこい！ちょっと！目がおかしくなってんぞ！？大丈夫か！？おいトリシュ！！」

水桶を投げた後、力尽きたかのように崩れ落ちるトリシュ。駆け寄るユーカーに見取られながら卒倒。何が原因だったのか俺にもよくわからない。

「って次は誰だよ！？」

俺から離れたユーカーを狙い、再びぶちまけられる水。その方向からはくすくすという笑い声。

「この僕を誘わないなんて良い度胸してるじゃないか。こんな美味しそうなタダ飯会を開催しておいて！」
「あ、イグニス！」
「い、イグニス様……？」

何時の間に現れたのだろう。神子様が火の側に座り、焼けた串をもぐもぐ食していらっしゃる。秘伝のタレは無断で使用されていた。今のは彼の数術だろうか。

「アルドール。君のそっちの焼きたての串僕にくれないと、絶交ね」
「好きなだけ食えよイグニス！」
「てめぇ何処まで神子の犬なんだ！この乞食神子！飼い犬王！勝手に俺の秘伝のタレ使うな！それ作るの結構面倒臭いんだからな！」

その騒々しさに嫌気が差したのかユーカーから離れた母さんが、俺の方へと飛んでくる。しかしその顔は嫌がってはいなさそう。

《賑やかね、ランス》
「母さん……さっきはごめん」
《……いいのよ。あんな形でじゃないけど、いつかは教えなきゃいけないことだとは思ってたから》

母さんが俺の謝罪に首を振る。

《あんたがこれからどうするかはあんたが決めなさい。私が指図できる事じゃないしてもいいことじゃない。それでも心配だけはさせて。それが親の務めだもの》

それ、大事にしてねと首飾りを指さされた。

「ええ。母さんだと思って大事にします」

《きゃああ！もう！嫌ねぇ！あんたが言うと何でも腹立つ位格好いいわ》

母さんが照れたように俺の周りと飛び回る。確かに若干、蠅っぽい。

《でもちょっと安心したわ》

「え？」

《あんた、しばらく見ない内に……良い友達増えたじゃない。何時までもユーカーだけかと思って心配してたのよ》

「そ、そりゃあ……俺だって。ユーカーは大切ですけど……俺も人間ですから、他に繋がりのある相手だっていますよ」

人間社会は縦横の繋がりで構成されている。誰とも関わらず生きてはいけない。精霊に育てられても、俺は人間だから。

（でも……友達か）

そう呼んで良いのか若干困る相手も数名いるが、俺を支えてくれる人であることには違いない。イグニス様もアルドール様も、俺に身分を感じさせない、自分自身の言葉で……俺を励ましてくれた。トリシュもそうだ。まっすぐ俺にぶつかって来てくれた。俺に過ちを教えてくれた。

《でしょうけど、それでも……良かったわね》

「はい、母さん」

＊

「酷いですセレスさん！どうして僕を起こしてくれなかったんですか！？」

「あー、うんと、その、悪い」

翌日ユーカーに泣きついていたパルシヴァルを見て、昨夜全く彼のことを思い出さなかったことを心で詫びた。でも彼と俺はまだ友人とかそう言うレベルまで親しくないように思う。親友の弟分って……まぁ、殆ど赤の他人だな。

「わーった。今度何でもお前だけに特別にこっそり作ってやっから、な？機嫌直せって」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

むしろ敵かもしれない。俺の従弟に抱き付いたその子供に、大人げないが割と本気でそう思う。

10：Qui omnes insidias timet in nulla

名前って何だろう。よくわからない。母さんが僕をパルシヴァルと呼んでいたけど、僕はそれがいつからなのかわからない。誰が僕にくれた名前なのかもわからない。

物心ついたときには、僕はその森の中にいた。別に寂しくはない。母様も一緒だった。

だから別に僕はおかしいとも思わなかった。それは世の中はそう言うものなのだと思ったから。

母様は僕に、この森の中から出てはいけないと言った。どうしてとか僕は聞かなかった。母様がそう言うのならそういうものなんだろうと思った。今覚えばとっても変だ。そんなことを言う母様も、それを疑問に思わない僕も。だけどその時の僕にとって、この世界とはそう言う物だったんだ。だからそれも仕方のないことのように思う。

そんな森の中にあるとき人が現れた。僕とも母様とも違う第三者。それは僕がはじめて目にした他人だ。

僕を危険な目に遭わせたって母様はとても怒っていた。本当は違うのに。僕はそこではじめて母様に疑念を抱いた。だってあの人は、セレスさんは何にも悪くないんだ。僕を助けてくれて、母様から僕を庇って自分の責任だなんて言ったんだ。

そのまま森から出て行こうとしたあの人を引き留めて、一晩の宿を母様に願い出た。僕のはじめての我が儘だった。

その時僕は、セレスさんは疲れているだろうに一晩中質問攻めにしてしまった。世間知らずの僕にあの人はいろんな事を教えてくれた。セレスさんは男で騎士で貴族でカーネフェル人。僕の中には僕と母様という概念しかなかったから、あの人の言うことすること何でも新鮮で輝いて見えていた。

僕にとってあの人が憧れなのは、彼に助けて貰っただけではないのだろう。この森という狭い僕の世界。その外を教えてくれたのがあの人だ。森の外に広がるであろう青。木々の合間から覗くあの空のような人。あの人への憧れは外への憧れ。僕にとっての外の代名詞があの人だった。あの人の何もかもが綺麗で正しく見えた。母様のすべてが歪んで濁って間違っているように思えた。

だから僕は許せなかった。それが大好きだったはずの母様の言葉でも許せなかった。僕の大好きなセレスさんに酷いことを言う母様が許せなかった。

セレスさんの綺麗な目を馬鹿にして、罵って……

「汚らわしいっ！そんな薄い色でよくも騎士になれたものだ！お前も所詮は城を都を腐らせた都貴族！！落ちぶれて騎士などになったその飼い犬なのだろう！？汚れた血がっ！！私とこの子の前に立つなっ！！」

違うよ母様。セレスさんは真純血です。それに綺麗な青です。それにセレスさんはセレスさんです。僕を助けてくれた、恩人で……僕のヒーローです。世界で一番格好いい騎士様です。少なくとも僕にとってはそうです。僕の憧れる騎士を、貴族の駒とか犬とか言わないで下さい。

どうして何も言い返さないんですかセレスさん？貴方は何も悪くないのに。どうして何も言わないんですか？

「……あ」

僕は目を開ける。なんだ、夢か。そうだよ、夢だ。

「……母様」

僕は薄暗いその場所を飛び出した。暗いところにいると気持ちまで沈んできてしまうみたいで怖いから。だからあんな嫌な夢を見てしまったんだ。

いや、嫌な夢でもないか。久々に母様に会えた。思うところはあるけれど、やっぱり僕は母様を完全には嫌いになれていないんだ。それに……であった頃のセレスさんにまた会えた。懐かしくて、嬉しいはずなのに少し悲しい気持ちになるのはどうしてなんだろう？

「……お帰りなさい、セレスさん」

いつの間に帰って来たんだろうこの人は。せっかく驚かそうと思って隠れていたのに、セレスさんは疲れていたのかな。着替えもせずに眠ってしまったらしい。

そこから出てみれば、室内は少し明るい。もう早朝になっていたらしい。でも僕も眠った気がしない。それもそのはず。クローゼットで体育座りなんかしてうたた寝。ちょっと無理な体勢だったのか身体が痛い。

この人にもう一度会いたくて、この人みたいになりたくて……この人を追いかけて僕は森を飛び出して、はるばる都まで来たけれど……最近のセレスさんは、とうか外で会うセレスさんは前ほど僕を構ってくれない。それはセレスさんが関わる人が僕以外にもいっぱいいるからで、それは仕方のないことなんだけど僕は少し寂しい。

だけど夢の中で、母様に言い返さず唇を噛み締めていたあの人は、言い返さなかったんじゃなくて言い返せなかったんだと思った。あの時はそんな風には見えなかったけど、今はそんな風に僕は思った。ずっと強くて凄い人だと思っていたけど、この人は弱い人でもあったんだ。外で見るセレスさんは、あの頃より強くない。他にもっと強い人がいて、セレスさんを狼狽えさせる。でもそれでもそれはセレスさんだ。

（僕も強くなりたいな……）

この人が弱いなら、僕が助けてあげたいんだ。あの日この人が僕を助けてくれたように。僕はセレスさんみたいになりたい。セレスさんにとって、僕にとってのセレスさんみたいな騎士になりたい。恩返しをしたいとかそんな格好付けるつもりはないし、僕に憧れて欲しいとかそんなつもりは毛頭無い。

僕が森の外へと来てみれば、僕に世界の広さを教えてくれたこの人が……世界の全てを知っているように見えたこの人が、とても小さな存在で、何も知らなくて……狭い世界を生きていることを知ったから。僕はこの人に教えてあげたい。空はあんなに青いんだよって。片目で世界を見て、わざと貴方は狭めていませんか？本当はもっと……そう思うのに。

ランスさんは僕の母様みたいだ。セレスさんにとってのそれだ。僕は母様の言うことを信じた。母様が空は赤いというのなら、僕はそうなんだろうって思った。

セレスさんはランスさんが正しいっていつも言うけれど、僕にはどうしてもそうは思えなくて……ランスさんとセレスさんなら、僕は即答できる。正しいのはセレスさんの方なのにって。

＊

「……」

これはどうしたことだろう。俺は、ユーカー＝セレスタインは考え込んだ。

確か昨日は窓から扉から鍵は掛かっていたはずだ。ていうか掛けた。それなのに何故自分の部屋にこいつがいるのか。いつも結ってる髪は解いてあって女みてぇだ。本当気持ちよさそうにすやすや眠ってやがる。神子と違って外見だけじゃない。こいつは内も外も天

の使いに見えないことはない。可愛いのは素直に認めてやろう。だが何でこいつが俺のベッドに潜り込んでなんかいるんだ。正直俺にそんな趣味はねぇ。絶対ない。たぶんないはずだ。ないんじゃないかと思う。ないんじゃないかな。いや、弱気になってどうする俺！そんなんじゃアスタロットに申し訳が立たねぇよ。

「おいこらパー坊」

自分の部屋くらい与えられただろうに何故俺の横で寝てるんだこのガキは。ランスの失敗に懲りて俺はこいつには鍵開けを教えてねぇはずだ。自分でやってのけたのならなんつーガキだ。恐れ入る。だが恐れ入ってる場合じゃねぇ。肩を揺すって起きろと怒鳴る。

「……う、……あ、おはようございますせれすさんー」

起こしてみたがまだ半分寝ているらしい。ろれつが全然だ。っていうか腕が動かなくて金縛りか何かかと思って飛び起きたが、実の所俺もまだ結構眠い。昨日は夜中まで連中と馬鹿騒ぎやってた所為だな。大体の所ランスの所為だが、責任者として神子かアルドールが悪い。神子は女だしここは騎士道精神でアルドールが悪いと言うことにしてやろう。よってこんちくしょうアルドール。俺の睡眠時間を邪魔しやがって。だが、眠すぎて怒る気力もねぇ。

「ふぁあ……眠ぃ」

俺ももう一度ごろんと横になる。

「一つ教えろよ、お前いつ来たんだ？」

「せれすさんおどろかそうとおもって……くろーぜっとにはいどいんですたんばいしてましたー」

俺も身に覚えがある。昔親父を驚かそうとして、俺がいなくなったらびっくりするんじゃないとか思って……でもその日誰も部屋に来なくてそのまま泣いた気がする。何やってたんだ俺、馬鹿じゃないのか？まぁ、兎に角だ。気持ちはなんとなくわかるが意味としてはわからない。何で驚かせ用なんて思うんだか思ったんだか。発想がガキだ。

しかしなるほど。確かにランスの阿呆に連れ出された時に部屋の戸締まりはしてなかったかもしれない。その隙にやって来ていたのか。

妙に納得していると、パルシヴァルがまたこっちに密着して来る。俺は枕じゃねぇ。

「おいこら、暑いから離れろ」

文句を言ったが相手は完全に爆睡している。寝付きの早さが羨ましい。こんな暑い日によくここまでやれるもんだ。でも暑いのは事実なので、無理矢理引っぺがそうとした俺に、パルシヴァルが寝言を呟いた。

「かあさま……」

恐るべしマジックワード。俺も実家とは上手くいっていないからそういうことを言われると弱い。

「……仕方ねぇな」

耐えるしかない、この寝苦しさにも。

俺がこいつに甘いって自覚はあるが、これぱっかりは仕方ない。こいつが家を飛び出したのは大体俺の所為と言っても違いないんだ

から。

（……立派な騎士になるまでは、か）

それまで故郷に帰れない。母親に会えない。寂しいだろうな。こいつはまだ子供なんだから。でもそこまでしてどうして騎士になんかなりたいのか。俺やランスなんかは他の職業選択の自由が無かったに等しい。だからこうしてる。でもこいつは違う。他のことだって出来ただろうに。

おまけに神子にそそのかされてアルドールの護衛になんかさせられちまった。こいつに何かあったらただじゃおかねぇ。最悪こいつの憧れである騎士って職業がどんなに最低最悪な物かを教えてでも、諦めさせて家に帰すのが一番なのかもしれない。そのためには……まずはこいつが嫌気の差すくらいビシバシ厳しく指導すべきだろうか。それとも仕える王であるアルドールに幻滅させるのが最善か。そうだ、そうなもんじゃねぇ。

「騎士なんて……」

名誉に覆われただけの人殺しだ。英雄という名の殺人鬼だ。金が名誉が欲しいわけでもないだろうに、そんなものにわざわざなりたがるなんてパルシヴァルは一体何を考えているのだろう。うっすら涙を零すその寝顔からは、伺い知れる物はない。唯母恋しさを感じさせるだけだった。

＊

読書の出来ない時間は殺されたり生き埋めにされていることに似ている。まさにその通りだとアルドールは考える。言うなればこの一月、俺は生き埋めにされてきたようなものだ。

読書はいい。一時現から浮遊する。まさに現実逃避。けれどそこで全く何も得られない訳じゃない。本の知識がすべて真実と言うことはあり得ないが、それでもそこから得られるものは多い。他人という物、自分という物。それを考えるに読書は最適。

例えその本が創作の物語なのだとしても、そこにはその本を記した著者がいる。それは何時の時代の人かは違っても、彼や彼女が生身の人間だったことは間違いない。心のある人間が何を思い何を考えそれを記したのか。そこからそれを読み取るのが読書の神髄だ。時を隔てた一方通行の会話と言ってもいい。理解の難しい彼や彼女を暴いていくのが読書の醍醐味。そして何より読書が優れているのは、此方が相手を知ることが出来ても相手が此方を知ることは絶対にあり得ない。相手の心が思考が赤裸々に明かされているのに対し、俺のプライバシーは完全に守られている。だから安心してその一方的な対話に身を任せられる。

「……」

この本だって内容自体は面白い。興味深くある。以前も読んだことがある本だけれど、懐かしくて手に取ってしまった。本はその時とはまた違う味わいを俺に与えてくれている。

それなのに何よりも大好きなはずの俺の趣味。その趣味に没頭できない理由が俺にはあるらしい。

久々の読書なのに、そう思うのはとても残念だ。しかし、つまらないのだ。この一月俺は俺の現実を生きていたのだから。その差違に俺は戸惑っている。俺がして来た対話とは、こんな一方的な物じゃない。俺が著者になったかのように、俺の心の内を暴かせる。相手に伝えたいと思う。そうしなければ相手に何も伝わらないから。

例えばイグニスとユーカー……あの二人は捻くれているけど繊細で真っ直ぐだから。俺が嘘を吐いてはならない。自分は嘘を吐くけど相手には真実を望むのがあの二人の共通点だ。人間不信が入って

いるけど純粋なところだと評価すべき箇所だろう。
俺はアージン姉さんに嘘を吐いた。だけどそれが姉さんを傷つけた。だからおれはフローリプに対し真摯で在ろうとした。姉さんに出来なかった分、その代わりとして彼女に俺は嘘を吐かなかった。しかしそれが彼女を傷つけた。
ルクリースはいつも嘘ばかりを吐いていた。息をするように冗談を口にしていた。それでも俺の中で彼女の評価は揺るがない。肝心なときにはいつも傍にいてくれて、いつも俺を守ってくれていた。そう言うときは絶対に嘘を吐かない人だった。
嘘と本当。相手によってこのさじ加減は難しい。自分に偽りなくいれば、それですべての人と上手くやっていけるわけじゃないんだと俺は学んだ。

今読んでいる本の中には、当面の問題を解決してくれるような答えはどうやらないらしい。俺はこれが現実逃避なのだと認めざるを得なかった。

（難しいなぁ……）

だって相手はあのランスだ。
最初こそ完全無欠の完璧超人美形騎士か何かと思っていたが、彼はそんな簡単な人ではなかった。表面上、彼は完璧だ。由緒正しい貴族の家柄と血筋、穏やかで品のある容姿と親切なその性格と、騎士の鏡と言うべき精神。剣の強さも一級品。その評判は国を超え、多くの人の憧れだ。
……かと思いきや、料理の見た目が最悪だったり、何かにつけて魚介類をぶっ込もうとしたり、父親が性犯罪者すれすれだったりする。後、素で相方のユーカーには天然で鬼畜入ってる。弟代わりの従弟が可愛いのは解るが、彼の可愛がり方はちょっと間違っている。何だかんだで二人がそれで楽しそうだから俺がとやかく言うことじ

ゃないとは思うから、その点はスルーしよう。それでもだ。
あの二人の関係性はちょっと異常だ。親友兼親戚なんだから、他人兼身内っていうちょっと微妙な繋がりなのは解る。だから本人達もその距離を測りかねている節がある。
俺だって親友のイグニスが他の人に取られたらちょっと嫌な気持ちにはなる。寂しいと思う。当人達同士がいがみ合っているのは知っていても、イグニスとユーカーが毒舌合戦をしているのを見るとちょっと自分が取り残されたような気持ちになる。俺としてはイグニスは大好きだし、ユーカーのことも気に入っているのにこういう気持ちになるのはとても嫌だ。二人がじゃなくて、そんな風に思ってしまう自分のことをとても嫌な奴だと思うのだ。
詰まるところ、大事な相手というのはそれが例え友人であっても執着が生まれるのは間違いない。それは何故かと考えた時に、相手が他人だからという結論に俺は至った。他人は他人。自分の考えで、どうこう出来る相手じゃない。だからこそその軋轢、葛藤の末の執着なのだと考える。
仮に相手が身内なら、そんなことはあり得ない。身内は完全にとは言わないが、ある程度干渉できる相手だ。年長者ならば年下の相手をある程度従えることも可能。言いなりに出来るってことは、執着を産まない。従えることが出来ないからこそ、そういう執着が生まれると仮定しているから。だから身内相手にそんな感情を抱くなら、それは身内に違う感情を抱いている。そう考えることも出来なくはない。
だからそう言う意味ではランスは……彼を身内として見ていて、それでも他人として見ている。だから言いなりになるようでならない、ならないようでなる彼への思い入れがちょっと大きい。
みんなに優しいっていう彼が、優しかったり優しくなかったりする唯一の相手だ。ある意味特別だということだ。ランスの仮面を引きはがせるのはユーカーだけだと俺が思うのはそういうところからだと思う。現に、窓の外からの殺気が凄い。半端ない。

「ちょっと腕がおかしいな。いいか、一回手本見せてやっから。……っとこうだ。解るか？」
「ああ、なるほど……はい！解りましたセレスさん！」
「もう解ったのかよ！？」
「え？変ですか？」
「お前一ヶ月かそこらで俺より強くなったら呪うからな」
「そ、そんな一月で何か無理ですよ！それにセレスさんの教え方が上手いってだけで僕は全然……」
「つ、……続けるぞ！む、無駄口叩いてる暇はねぇ！」
「はいっ！解りましたセレスさん！」

外では弟分のパルシヴァルに稽古を付けてやってる、意外と面倒見の良いユーカー。そんな二人を見守る体でにこにこと、それでも冷房数術が不要となるような殺気を発しているランス。とてもじゃないが彼の第一印象とはまるで重なるところがない。
北の湖城とやり合う意味で、戦力強化は確かに必要。ユーカーのしていてくれることは正直誰にとっても有り難い。それはランスも理解しているだろうに、内心複雑なのだろう。
可愛い自分の弟分兼玩具を他人に取られているのだ。ユーカーはランスの精神安定剤でも担っているのか。ユーカーに接する時間が減れば彼の表面上の余裕が削れていくような気がする。
しかしそんな不機嫌顔まで絵になるような美形だからどうしよう。たぶんどうしようもない。大抵の女の人はあれだけのイケメン相手なら何されても許してしまうんじゃないだろうか。理不尽だ。だけど男の俺でも納得してしまいそうになるから怖い。血の何分の一かは同じはずの従弟のユーカーがあれなのに。ランスのお母さんってよっぽど美人だったんだろうな。あ、いやユーカーのご両親を知らない俺がこんなこと言っちゃ失礼か。ユーカーもなぁ。黙っていればそこそこなのに。黙ってないから。彼の印象を美形から遠ざける

のがその内面なのだとしたら、いやでもそれじゃあそもそもの話が成り立たない。内面ならたぶんランスの方が酷いんじゃないのか？見る限りそうだ。それが許されてしまうクラスのイケメンだから恐ろしいと言っているんだ。男に五月蠅いあのルクリースが鼻血を出すような美形だ。その恐ろしさは察するに余り得る。

それでもだ。流石にあれは大人げないんじゃないだろうか？っていうかランスも他にやるべきこととか仕事とか山ほどあるんじゃないのか？王としての俺の補佐もあるし、遊び歩いている父兼領主の尻ぬぐいもあるだろう。こんなことを何も手伝えない俺が言うのも何だけど、ランスも暇ではないだろうに。仕事も手に付かないほどあの二人が気になるのだろうか。

さっきまでちょっと離れたところから声援を送っていたトリシュはユーカーに領内の仕事でも手伝って来いと怒られていい笑顔で颯爽と消えていった。ええと、トリシュが幸せそうで何より。

ランスの殺気にはユーカーも脅えているのか、単に気付いていないのか。ランス相手に同じようなことは言わなかった。言っても無駄だと思っているのか、はたまた「こいつもパー坊の稽古つけてやるつもりなんだな」と盲目的に好意的に解釈して勝手に好感度を上げているのかも知れない。ユーカーはランスに憧れているところがあるから、それも充分あり得ることだ。

しかしそんな二人に挟まれているパルシヴァル……あの子が哀れだ。あんな年からそんな苦労人の役を押しつけられてはあまりに酷い。何とかしてやりたいと思う。パルシヴァルは裏表なく素直で無邪気な少年だけれど、ユーカーには可愛がられているのに対し、あの誰にでも人当たりの良いランスにはあまりよく思われていない。とか思えば、これまたある意味純粋なトリシュとランスが友達だったりする。人間関係って複雑だ。

「なぁ、イグニス」

「何？つまらない用件なら自重してよね」

ベッドに寝そべりごろごろとしているイグニス。目で俺に扇子でも持ってきて扇げと言わんばかりのくつろぎっぷりだ。ランスの次に仕事があるだろうに、彼女もこれまた働かない。病人相手にあまり酷いことは言えないし、充分これまでイグニスはよく働いてくれた。だから彼女が休んだりだらけるのは俺も異論はない。異論はないのだけれど、むしろ俺がここにいて良いのか解らなくなる。むしろ邪魔じゃね？でもここ俺に割り振られた部屋なんだよ。ここ追い出されたら俺何処行けばいいの？俺の部屋が一番いい風が吹き、俺のベッドが一番広くてふかふかだとかそんな理由で乗っ取られたんだけどどうしよう。

ってそんなことじゃなくて俺がイグニスに相談したかったのはランスのことだ。でもイグニス今機嫌悪そう。暑いのかな。そんな暑くて苛々してるときに夏生まれの俺なんかに話しかけられただけでも暑くなるかもしれないな。っていうか君の存在自体暑苦しいんだよ視界から消えて。っていうか毟ってやろうかそのロン毛とか言われたら一日くらい立ち直れない。

「そっか、ごめん自重する」

「そこまで言いかけて止めるとかこの上なく煩わしいんだけど、君の様子から察するにどうせまたセレスタイン卿かランス様辺りのことかい？」

「流石イグニス、その通りなんだけどさ」

彼女を認めながら、語尾を濁す俺。そんな俺の態度にイグニスは一度小さく嘆息をした後、こんな言葉を投げかけた。

「……ねぇアルドール、同族嫌悪って知ってる？」

「言葉としては」

「意味は僕も余裕で知ってるから脳内ペディアとか脳辞苑で読み

上げないで良いからね」

俺の得意分野が潰された。ちょっとイグニスの前でたまには良い格好を付けたかったのに駄目でした。調子に乗るな屑ってことですよねわかります。

「君は根暗だし自分大好きの自己愛者でもないし、君は君にそっくりな人間に会ったことがないんだろうね」

もし俺が自分にそっくりな奴に出会ったら、心底苛つくはずだと彼女は言った。それが起こりえないのは、俺のような考え方をする奴がそんなにいないからだろうとも。

「じゃあ仮にこうしよう。これは君に限らずだ。昔の自分が目の前にいたら、それはとても苛立つだろう？」

「それは、まぁ」

頷く俺に、イグニスは……そういうものさと目を伏せる。

「ウィリアム症候群とでも名付けようか？今の自分がその昔に勝っていても劣っていても、人はそう思ってしまうものなんだ」

「ウィルソン症候群でもいいかもな」

俺が手にした本を見て、イグニスが小さく笑う。それに俺も笑って返した。流石はイグニス。世界最高峰の数術使いは、読書なんかしなくとも本の情報までカバーしている。本は一方的な世界だけれど、こうして時に誰かとの共通の話題になるっていうのが嬉しいところだ。

「イグニスもこの人の話知ってたんだ。何が好き？俺はあの宝探

しの……」
「僕は振り子の話が好きだな。あとワイン蔵の復讐話。ぞくぞくするよね」
「流っ石、イグニス！通だなぁ！」

ブレずに今日も俺の親友はドSで鬼畜でいらっしゃる。でも不殺を説く教会の神子がそんなこと言っちゃ問題発言だよ？いやしかし、だからこそ神子になっても相変わらずイグニスなイグニスが俺は大好きなんだけれども。
それはさておき割と本気の冗談はこのくらいにしてと、イグニスは窓の外へと視線を投げる。

「仮に今と昔が全く同じであっても人は彼や彼女に嫌悪するだろう。彼と彼の場合はそのどれに当てはまるのかは、君の想像にお任せするけどね」
「それじゃあ、あれはどうしようもないってこと？」
「それでも今の状況ならまぁ、どうにもならないよ。このドッペルゲンガーはどちらもカードだからね。ランス様にはパルシヴァル君を殺せない。だから小説通りとはいかないさ」「……ランス“は”って」

嫌な言い方するな、流石イグニス。先を見据える彼女の瞳はとても遠くを見つめている。

「パルシヴァルだってそんなことはしないよ」
「今はね。だけどさアルドール。幾ら彼が無邪気な子供とはいえ、無邪気さは時に諸刃の剣だよ。僕はある一点において子供ほど残酷な生き物を他に知らない」
「ある一点？」
「愛情だよ」

「愛情……？」
「ああ。子供って言うのは人からの好意を、無償の愛を欲しがるものだ。特に彼は親元から離れているわけだろう？寂しくないはずがないんだ」
その愛情欲しさに世の兄弟は蹴落とし合い、貶め合う。フローリプを、姉さんを……俺は思い出していた。確かに、そういうことはある。確かに、……ある。
「セレスタイン卿は兄貴分として彼にそれを注いでる。だから彼はあんなに彼に懐いているんだよ」
パルシヴァルにとってユーカーは唯のヒーローでも恩人でもない。やっぱり他人と身内のような思い入れが内在しているのだと彼女は言う。まぁ、兄代わりだけじゃなくてここ最近は女装で姉代わりまでやってくれてるんだから母恋しさのある子にとっては有り難いだろうなぁ。
「……ランスがユーカーに執着してるのも、それと同じってことなのか？」
「そういうことだよ。ランス様は弟代わりのセレスタイン卿に、セレスタイン卿はパルシヴァル君に無条件で慕ってくれる……自分を愛してくれる気持ちを貰っているんだ。彼らは自分が大嫌いだからそういう相手が貴重なんだよ」
そこでイグニスは……君だって、とは言わなかった。俺がルクリースとうち解けた理由がまさにそれだった。俺の大嫌いな俺を、彼女は好きだと言ってくれた。そんな彼女の言葉に支えられ、俺は大嫌いな自分を好きになれるよう、頑張っていこうと思った。
俺だってルクリースがフローリプとうち解けてからは、ちょっと

疎外感を感じていた。どっちも大切だったのに。今と同じ馬鹿な気持ちをあの頃だって持っていた。俺はまるで成長出来ていないのか。

「でも……」

幾らイグニスの言葉とはいえ、俺はそれを頭ごなしに受け入れられない。それが俺のことならランスのことならともかく、これはパルシヴァルの話だ。

だってパルシヴァルはそんな子じゃない。まだ付き合いの浅い俺でも彼の純真さは知っている。彼は在りし日のギメルを彷彿させる程。彼が女の子だったら俺はうっかりときめいていたかもしれない。

「彼が本当に良い子なのは認めるよ。だからこそ僕も彼を引き入れた」

それは認めると起き上がったイグニスが俺に言う。だけど彼女はそこで言葉を止めたりしない。

「でも考えてご覧よ」

イグニスは、俺に思考を促した。

「彼がこのままランス様の悪意に当てられてごらん？白い色ほど良く染まる。彼は今のままでいられるだろうか？」

「それなら、尚のことどうにかしないと」

「具体的には？」

「解らないけど、ランスとパルシヴァルに何かあったら困るよ」

「どうして？」

「どうしてって、そんなの当たり前だろ？二人ともこんな俺に仕えてくれているんだ。だったら俺が二人を守らないと」

本を置き椅子から腰を浮かせ、今にも飛び出さん勢いの俺を見て、イグニスが待てと視線で止める。そしてゆっくり俺に近づいて、俺より低い背丈から、俺の頭をそっと撫でる。

「い、イグニス？」

「馬鹿の君にしては合格だ。少しは王らしくなって来たじゃないか」

あのイグニスに褒められている。嬉しくて涙と鼻水が出そうだ。っていうか今のイグニス本当優しい顔で笑ってる。飴と鞭とは言うけど普段の鞭が厳しい分、この飴は格別だ。この笑顔のためなら多分何されても俺は許せる、耐えられる。

「アルドール。王の資格はね、人を憐れみ思いやり、愛する心だよ。王は奪う者であってはならない。守る者であり愛する者であることだ。例え愛されなくとも、君は国を人をちゃんと愛してあげて欲しい」

出来るかい？と彼女の目が言う。ここで出来ると答えられないのが俺という人間だ。自信はないけどそんな風になれるように頑張りたい。そう返すのが今の俺の精一杯。いつかもう出来ているし、ずっとそう出来るように頑張るよと答えられたらとは思う。

俺らしい情けない返答に、イグニスは苦笑して俺から手を放す。そしてさっさと行けと背を蹴った。

「その上で考えて動けば、最悪は避けられるよ。絶対に」

確信を帯びた強い口調でイグニスは、俺に伝えて扉を閉める。よく見れば俺の得物であるトリオンフィまで一緒に廊下に追いやられ

ていた。
窓から突き落とされなかっただけ充分これは優しい対応だ。でもそうされた方が楽に外に出られたんじゃないかなとか思う俺はちょっとどうかしているかもしれない。まぁ、今更か。廊下を走り外に出て、俺はユーカー達のところへ行く。

「何だよ。てめぇも面倒見ろって言うのか？」

そんなに露骨に嫌そうな顔しなくても。ユーカーって俺のこと嫌いなんだろうか？いやでも嫌われるのって嫌なはずなのにそこまで嫌な感じがしない。おそらくそれは彼がそこまで俺を嫌がっていないからだと仮定しよう。本当に嫌ならユーカーは斬りかかってでも俺のことここから追い出すだろうし口も聞いてくれないだろうし。
逆にここで満面の笑みとか浮かべられたら気持ち悪いよな。それはあまりにユーカーらしくないし、俺もドン引きしてしまう。なるほど、それならこれは俺と彼にとってのいつも通りに違いない。

「おいそこの暇人。振り返るなボケ。お前以外に誰がいるってんだ」
「あれ？俺が暇人だったのか。ちょっと気付かなかったよ」
「人の稽古邪魔する勢いでこっち睨んでくるような輩が多忙とはどうにも思えねぇんだがな」
「言われてみれば確かに」

あ、ユーカー気付いてはいたんだ。言われるまでランスは解らなかったのか。本当この二人はボケとツッコミとしては良いコンビなんだな。釣り合いは取れてる。

「アルドールはお前の上司だろ。お前が面倒見てやれよ。その馬鹿は馬鹿でも頭で考える馬鹿だから身体に教え込んでも意味ねぇだ

ろうし、理論的に潰さねぇと多分無理だ。俺そういう面倒臭ぇの大嫌いだし」

「まったくお前はどうしてそう……」

そう言いながらも頼られたのが嬉しいのか、ランスは少し機嫌が良くなった。ユーカーはこうやってランスを立てるのが上手い。面倒臭いと口にして、自分という存在の駄目さをアピール。自分をまず貶める。それは謙譲語のような働きだ。ランスのことは一切褒めていないのに、ランスを結果として持ち上げる。こういうのをさらっと嫌味なく出来るのがユーカーの対ランス用スキルだろう。

これが他の人間にも適応されるなら、彼はもう少し楽に世渡りできるだろうに、ランス限定だから勿体ない。でもその限定仕様がかかっているからこそ、このスキルを使われた側の気分は非常に悪くない。っていうか最高。確かに気分は良いだろう。俺だけ、自分だけ。そういう限定。捻くれ者のユーカーに唯一認められてるってことなんだから。

俺もちょっと勉強させて貰いたいけど、真似したところでそれをイグニスに使っても馬鹿にされるのがオチだ。あんまり俺が面倒臭いネガティブに入るとイグニスはうざったいって嫌がるし。俺をからかえるレベルのそういうのは大歓迎だろうけど。

「それではアルドール様、僭越ながらお相手させていただきます」

「あ、うん！よろしく！」

俺のところまで来たランスはいつも通りのさわやかスマイル。それに上機嫌分がプラスされてとてつもない破壊力を持っている。俺が女だったら完全にここで攻略されていただろう。イケメン恐るべし。あまりのさわやかさに目が直視できない。

カルディアの砦でだったか、ランスと目を合わせた女はそれだけで孕むとか冗談でユーカーが言っていたが、この瞬間ありえないは

ずの信憑性を感じさせられた。ランス、恐るべし。

「……おい、ランス」

「何か？」

「見た感じ、アルドールとパー坊の力量の差は今のところあんまねぇ。身体能力的にはアルドールの方が年の分勝ってるが、こいつの飲み込みの速度は異常だ。良い勝負になると思わねぇか？」

「あまり感心できないな。仮にもアルドール様をそんな風に……」

「馬ぁ鹿。素振りは確かに基本だが、そんだけで強くなれたら世話ねぇよ。何事も大事なのは実戦なんだよ。植え付けた理論を身体に行き渡らせる意味でもな」

本だけ読んでも強くはなれない。強くなったような気がするだけだ。だから参考書だけ読んでも計算が出来るようにはならない。応用問題が必要なんだと言わんばかりのごもっとも。

「つーわけであれだ！俺はこれから徹底的にこいつに教え込む！お前はそいつにそうしろ！その上でだ、夕方にでも一回こいつら手合わせでもさせようぜ？」

「僕が、王様とですか？」

「遠慮は要らねぇ。ここで手を抜くことが無礼だと思えパルシヴァル！それが騎士道精神って奴だ」

「はい！セレスさん！」

戸惑い一瞬、やる気十分。秘密の特訓でもするのか場所を変えるぜと二人は去っていく。でもとりあえず一言言わせてくれ。

「え……？騎士道ってそういうのだっけ？」

俺の言葉に、隣でランスが小さく吹き出していた。ユーカーのや

ることなすこと彼の笑いのツボらしい。

「し、失礼しました。アルドール様の前でとんだ無礼を」

「いや、いいよ。本当ユーカーは面白いな」

あ、こんな言い方したらお前と一緒は全然面白くねーよ的ニュアンスを醸し出したりしないだろうか？どうしよう俺うっかり酷いことを。いや、面白くない訳じゃないんだよランス。唯ちょっとランスと二人きりだと俺も緊張するって言うかなんというか。ユーカーとセットの時のランスは穏やかだしボケ度全開なんだけど、ランス一人だとボケもあんまり発生しないっていうかツッコミ入れて良いのかどうか判断に悩むっていうか、そもそもキレのあるツッコミが出来ないとこの人の応対が出来ない。俺にはそういうキレがないからちょっと難易度が高い。

そんな割とどうでもいいけど本人としては深刻な葛藤をする俺に、あっさりランスは頷いた。

「はい、見ていて飽きません」

だからってガン見は自重しろよとは俺にはちょっと言えなかった。所詮チキンです。すいません。

「それじゃあユーカーみたいな喜怒哀楽の激しい女の子がタイプ？」

「な、何故突然そのような話を？」

ちょっと狼狽えたランスが可愛い。こういう余裕のある相手が戸惑ったりすると生じるギャップってのがあるんだな。

「いや、ランスは当然モテるだろうから。好きな子いなくても好

きなタイプくらいはあるんじゃないかなって」
「それはあるかもしれませんが、そのようなことを聞いてアルドール様が得られる物などあるのですか？」
「後学のために」
「……アルドール様はおモテになられたいのですか？」

あんまりそういう風には見えないけれど、そうなのならば答えなければと使命感に駆られるようなランス。
なっても煩わしいだけですよと言わんばかりの空気をしれっと出せるのが羨ましい。一回くらい言ってみたいわそんな台詞。ていうか俺の人生における一度目のモテ期ってもう終わったんだろ確か０章で。残り二度が何時来るんだかわからないし、明日の我が身も知れないこの人生……モテ期カウントで寿命を測れると思うとちょっと手放しで喜べない。後今ユーカーは男にモテてるけど、あれもモテ期にカウントしていいんだろうか？一回目がアスタロットさん、二回目が今回っていうとユーカーあと一回モテ期来たら危ないよな。ちょっと心配。ランスとトリシュは日常茶飯事でモテてるみたいだからこの方法では測れない。いや、困ったね。良いんだか悪いんだか。

「あいつはあいつですから、あまりそういう事と結びつけたことはありません。確かにああいう妻でもいれば、結婚などしても毎日楽しく過ごせるんだろうなとは思いますが……」

流石、婚約者のエレインさんと結婚するくらいなら女装ユーカーなセレスちゃん娶るとか言っちゃうだけはある。イグニスと父親にはめられてあんなことまで出来ちゃうわけだ。
ランスは一緒にいて楽しい相手と一緒にいたいんだな。精霊に育てられたからなのか、俺より年上なのにこの人色恋沙汰に疎い。疎すぎる。だって幾ら好きだって言っても相手は親友で男で……とて

もじゃないけどあんなこと……仮に俺とイグニスで置き換えて……余裕で出来そうで、困った。イグニスを男だと思ってた時点でも余裕で出来そうでちょっと悩んだ。まぁいっか。仕方ないよイグニスだし。ギメルと瓜二つだからとかそう言うことでもなくて。俺のイグニスへの好きも、ちょっと行きすぎてる感はある。俺にとってイグニスとギメルは神聖なものなんだろうな。例えば敬虔な聖職者が神様にでも出会ってキスなんかされたらむしろ光栄ですっ！！とか思うだろう。それと似ている。そこに友人としてのフレンドリーな親しみが混ざっているんで、よくわからない物になってしまっているんだろう。

ちょっとしたことで、彼女が女の子だと思うと多少は意識はするが、それ以前にイグニスはイグニスって言う概念が強すぎて、女の子らしくないとかそういうわけではないんだけれど、あまりそういう対象には思えない。それでもずっと一緒にいられるなら俺は嬉しいし、そのための手段だって言うんなら、ランスの言いたいことも凄くよくわかる。むしろ結婚したいよ俺もイグニスと。毎日楽しそうだし。

だけどイグニスそのものが俺の好みのタイプってわけじゃない。それならイグニスのような性格の他の女の子がいたら？ときめくか？結婚したいか？って言われると答えはノーだ。俺が好きなのはあくまでイグニスであってその子じゃないからだ。

（この人は、誰かをそういう好きになったことがないんだな）

返答に悩み思い悩んでいる風なランスに俺はしみじみそう思う。好きの区別が付けられないのは、そもそもそういう好きを知らないからだ。

子供って残酷だってイグニスは言った。この人は子供なんだ。そういう意味で。だからとても残酷なんだ。そういう好きでもないのに悪い大人に騙されて「え？これって挨拶だろ」とか言ってしまう。

魔除けの儀式とか古来より伝わる神々に捧げる戦の勝利のための奉納なんちゃらとか言われたら鵜呑みにして最後までやりかねないなこの人なら。

ていうか俺より長く生きていてそういう文献にぶつからないこの人が不思議だ。お父さんがあれなら屋敷を探せば官能小説の百冊でも二千冊でも出てきそうなものなのに。なんとなくそれがランスの目に入る前に燃やしたり隠したりぶん投げてるユーカーの図が脳裏に浮かんだ。それと同時にそれを拾ってきて物を粗末にしちゃいけないとか説教した挙げ句、これ何の本なの？とか尋ねて来るランスの図まで想像して、俺は少しユーカーが不憫で愛おしくなってきた。イグニスがユーカーをよくいびるのはこういう心境からなんだろうか？でも……あれはちょっと違うかも知れない、なんとなく。

それは兎も角だ。今はランスのことを考えていたんだった。ランス……ねぇ。時々俺はこの人が純粋なんだかよくわからない。そんなこと言って常識と良識のある相方の心を抉り、新たなトラウマを植え付ける天然鬼畜というわけだ。

「……ランスはさ、アスタロットさんってどう思ってた？」

「はい？」

「会ったことあったの？」

「……そうですね、何度かは。大人しいですが、五月蠅いあいつとは釣り合いが取れていたのではないかと」

来た。仮面だ。ランスが当たり障りのないことを言って、本心を隠している。

俺が思うにこの問題は、ユーカーじゃない。ランス側にある。ランスが一回でも誰かをそういう好きにならないと、パルシヴァルがとばっちりを受ける。それを何とかさせるためには一度ランスに自覚をさせるしかないんだと思う。

「そうかな」
「え？」
「俺は……どんな似合いの相手を連れて来られても落ち込むよ。それがイグニスだったら」
ランスはイグニスが女だとは知らない。だからこう言う。二人は親友だ。俺にとってのイグニスが、ランスにとってのユーカーだから。だから貴方は違うのかと問いかける。そのための言葉だ。
「一緒にいられる時間が減る。凄く寂しいって、そう思う」
俺の言葉にランスが押し黙る。どうやら自覚してくれたようだ。自分の中に巣くった悪意に。
「私は……いえ、俺は……」
言い直すのは騎士としてではなく、ランスとして俺の問いに答えようとしてくれているからなのだろうか？
「そうですね、俺もそうです。彼女が現れてからあいつと過ごす時間が減った」
愛情と友情は少し似ている。相手が大切だって事に違いはなければきっとそう。独占したいという気持ちが生まれる。だから勘違いする者も世の中にはいる。正直俺も怪しい部類にカウントされるだろう。
でもランスもユーカーも俺と違って頭は良いからその辺を勘違いはしてはいない。けど、知った上で代用しようとしているから質が悪い。友情が代替品として機能しているから、ランスは他者に興味を示さない。限定された興味が周りにとばっちりが及ぶ執着になっ

てしまっているのだ。

「共に切磋琢磨、立派な騎士になろうと誓ったことも忘れて、恋愛ごとにうつつを抜かすあいつを腑抜けと笑ったこともありました。失望したのも事実です」

そうですね、俺も多分寂しかったんだと思いますとランスが俺の言葉を肯定する。

「だからこそ……今更俺だけそんな風に幸せになったら、あいつはどう思うでしょうか？俺はあの日に俺が感じた以上の苦しみをあいつに植え付ける事になってしまいます」

その思いを知るからこそ、同じ思いを味わわせたくないというランスの優しさ。なんだかんだ言っても互いに思い合ってるところはあるから、結びつきは無駄に強い。生半可な覚悟じゃ二人の間に割っていることは出来ない。

仮に俺が女でも正直ごめんだ。関わり合いたくない。正直お前ら結婚しろと思わないでもないが、危害が周りに及ぶのが目に見えている以上、その辺何とかしないといけない。そんなことにでもなればユーカーがエレインさんに刺されるだろうし、パルシヴァルやトリシュがランスに何をされる事やら。一番平和的解決法はランスとエレインさんがうち解けて良い感じになることだ。何とかならないものだろうか？

「俺は逆だと思うな」

「と、申しますと？」

ユーカーは生きていた彼女への気持ちに嘘を吐いたから、今でも悩んでいるし忘れられない。だからユーカーは今後誰かを、少なく

とも女の人を好きになることはあり得ない。そう言った意味ではまだトリシュにはチャンスがあるのかもしれない。

「ユーカーはそこまでランスとお揃いでいたい風には見えないよ。自分に出来ないこと、出来なかったこと。それをランスに託したがっているように俺には見える」

婚約者への冷たさ。それが昔の自分と重なるのだろう。同族嫌悪とは少し違うけど。

アスタロットさんにはもう何もしてあげられないから、その妹の幸せを願い、そして自分の分身と彼女の分身としてランスとエレインさんを見る。その二人が幸せになれば自分たちも少しは救われるような気がする。

「託されましても……」

「ユーカーは万が一でも自分と同じ後悔をランスにして欲しくないんだよ」

もしエレインさんに何かあったとして、それでランスは何も思わないのだろうか。思わないのならそれはそれで人として騎士としてどうなのだろう。それはランスの言う立派な騎士像とは離れてしまうのではないか？

「それでも俺は」

そんなこと望んでいないと言うランス。確かにそうだろう。それはユーカーの押しつけだ。でも、それが一番簡単に、ランスを幸せにする方法だと思っているのだ。

「俺は……あいつなら兎も角、仮に彼女に何かあったとしても…

…それで痛める心は私にはありません」
「……本当にそう？」
「ええ」

ランスは頷く。嘘を吐いているようには見えない。そこから見るに、彼にとって女性は守る対象であって、優しくするべき存在であって……それは騎士道精神から来るもので、そこに使命以上の感情はない。騎士だから条件反射で守るだけ。使える王の名に恥じない騎士らしい騎士であること。それが彼にとっての正義だからだ。守るべきはそれであり、彼女たちではない。

（本当にこの人は……）

誰かに恋をしたことがないんだな。だから、そういう痛みを知らない。愛する人が死んでしまう悲しみとか、変わってしまう想いの悲しさとかやるせなさとか。

（……可哀相だなこの人は）

もしかしたらこの人は世界で一番幸せなのかもしれないけれど、同じくらい可哀相かもしれない人だ。
この人の外見と外面と名声に人は集まり、彼に好意を捧げるけれど、彼女たちは彼を知らないし見ていない。つまりは愛してはいない。けれど彼自身、誰も愛せない。
愛されないから愛さないのか、愛さないから愛せないのか。俺にはよく分からないけど、ランスが変わるか、ランスにとって新世界……言うなれば未知。これまでにないような相手が現れなければ彼は一生このままだ。カードなのだから彼の一生は決して長くはない。
ユーカーが必死になっているのは、最後の一枚になる気がまるでないランスの幸せを思ってだ。生き残らないのならせめて死までの

道程が幸せなものであるようにと、彼は一生懸命彼のことを考えている。
ユーカーが何でコートカードか、ちょっと解った。彼はその幸福を自分のためには使わないんだ。ルクリースとユーカーの共通点が、コートカードということ。ルクリースも……幸せのはずのコートカードになったのに、彼女がその幸福を使い果たしたのは一月にも満たない。その幸福の幾らを自分のために使っただろう？俺を守るため、フローリプを、イグニスを救うため……その幸福を、命をすり減らした。
ユーカーもそうするつもりなんだ。それが彼の生き方なら俺が止めちゃいけないんだとは解る。それでも俺は……あんな風に誰かが死ぬのはもう嫌だ。ユーカーがそれで良いと言っても俺が嫌だ。
ユーカーは自分の幸福、命と引き替えに……ランスの幸せを願っている。その祈りでも彼を守ることが出来なければ、その時はアスタロットさんを生き返らせることを望むのだろうけど……ランスが生きている限り、ユーカーはそれを望まない。
二人とも目的が違うから、その優しさとかが無意味になって、思いが空回りしている。だから見ていて歯痒いんだ。

「……そうだね。俺は……俺も、ユーカーに……いや、ユーカーにも、死んで欲しくない」

そこでランスがはっと顔を上げたのが解る。驚いたように俺を見る。

「より難しい、困難な願いは幸福値を大量に消費する。確立をねじ曲げて結果を変えるのがカードの力だ」
「……」
「ランスがふらふらしてるとユーカーの願いも定まらない。幸福値が無駄に垂れ流されるんだとしたら、そういうのは良くないよ」

「俺があいつを犬死にさせると……殺すことになると、そう仰りたいのですか？」
「違うよ。俺はランスが俺のためにユーカーをそう使うことを嫌だって言ってるんだ」

ユーカーは俺にじゃなくて、ランスのためにカードの力を使いたいんだ。そのランスが俺のためにユーカーを消費するのはちょっと違う。だってランスが本心からそれを望んでいるわけじゃないんだから。それじゃユーカーも煮え切らない部分があるだろう。

「だってユーカーは俺に仕えているんじゃない。だからさランス……ランスはもう少し自分のやりたいこととかはっきりしてあげるべきだと思うな」
「……そう、ですね」

それが解れば苦労しません。重い溜息からは、そんな言葉が聞こえた気がした。ランスはなぁ……俺並に自分を知らない人なのかも知れない。

でも周りから見ればそれなりに彼の個はあるきがするのに……例えば、そう思って俺は手にした得物に気がついた。そう言えばユーカーが何か言っていたな。夕方に試合だとか何とか。

ランスも騎士だし、剣技の中には個という物があるはずだ。案外こういうタイプは理詰めより、行動というかそういうのでぶつかる方がいいのかも。ぱっと見はユーカーの方がそういう感じするのに、ユーカーは行動より言葉とかの方が伝わるし、ランスはその逆なのか。本当見た目で測れない面倒なコンビだ。

「まぁ、それは置いといて。そろそろ始めないと俺の負け確定色が濃厚になっちゃうと思うんで、剣の方見てもらえたりする？」

俺がトリオンフィを掲げれば、ランスもそれは得意分野だからかとてもいい表情で、喜んでと頷いてくれる。

「解りました、それではアルドール様。一度屋敷に戻りましょう」

「え？」

素振りとか、形とかそういうところから入るんじゃないの？驚く俺にランスは小さく首を振る。

「アルドール様は槍の心得は？」

「いや、全然」

「騎士という物は剣だけではありません。剣と槍と馬術、この三つを兼ね揃える必要があります」

騎士のイメージ、象徴としてまず掲げられるのが剣。そう思っていたけれど……ランスはそうじゃないと口にする。

どうしてここで槍の話になるんだろうとは疑問に思ったが、俺はランスに連れられるがまま屋敷に戻り書庫へと入る。そして槍についての本をいくつか持って来た彼に促され、席に着く。

「言われてみれば確かに本の中の騎士様って槍の名人とかもいるよな。試合とかっていうと槍試合の話とかの方が多いか」

「騎馬戦ですと剣より槍の方が活躍出来ますからね。剣を使うのは主に白兵戦になってからです」

「へぇ」

「そしてパルシヴァルは剣こそまだ囓ったばかりですが、槍の方はあの年ではかなり卓越した部類に入ります」

「ええっ！？」

「これまで騎士見習いだったので剣と馬を持っていなかったので仕方ないと言えば仕方ないのですが……」

「ぶっちゃけ……槍についてまったく心得ない俺とあの子だったら」
「槍試合ならまず間違いなくパルシヴァルに軍配が上がるでしょう。ことに槍において彼には天性の才があります」

別に俺としては勝ち負けはどうでもいいけど、俺も強くはなりたいからやる前から負ける気で勝負に望むのは良くない。それじゃあちっとも身に付かないと思う。だけどランスは完全に俺を勝たせる策を考えるポーズに入っている。それが主としての俺を立たせることであるし、俺の名誉に泥を付けたくないのだろう。後、単にランスの負けず嫌いが発動しているのか。

勝つ方法を模索する。そのための鍛錬を怠らない。確かにこの人は立派な騎士様だ。だからこそ……俺は出会った頃のランスがとても窮地に立たされていたのだと知る。

この負けず嫌いの男が、命を投げ出すための負け戦……仇討ちのために的に突撃しようと考えていたなんて信じられない。アルト王を失った彼はそれほど脆い存在だった。その彼がここまでいろいろ考えてくれるようになったってことは、少しは立ち直ってきてくれているってこと？状況は未だ最悪だけど……俺を信じていなくても、王っていう俺がいることで、少しは彼を支えられてはいるんだろうか？こんなお荷物みたいな俺でも、彼の役に立てているのか？それなら俺は……今彼の傍にいられてとても嬉しいと、そう思う。だから自然と彼の講義にすんなり集中できた。

「アルドール様。一概に剣と言っても、その種類や技や目的には様々な用途があります。まずは切る、突く、刺す、殴る。彼は殴る切るの技はありませんが、突く技ならば槍の鍛錬で既に習得しているでしょう」
「あのー……刺す、については？」
「刺すというのはそうですね。鎧の継ぎ目、隙間などを狙う技で

す。突くに似てはいますが実戦経験がない以上それについても彼は知らないはずです」
「……実践か」
「はい。アルドール様は都までの旅をされる途中に何度か実戦もあったとのことです。その点はアルドール様に分があります」
人を傷つけること。その躊躇い。覚悟を持って得物を手に取ること。それをあの子はまだ知らないのだと彼は言う。
「先ほども言いましたが、槍は剣よりリーチが長い。幼い彼が身体能力の差をカバーするには最適な武器であるとも言えます。今回はそのリーチが失われている分、確かに良い勝負に……いえ、若干アルドール様が有利です。しかし相手はあのユーカーです。どんな技を教え込んでくることか」
「ああ、そっか」
だから俺に槍についての知識を植え付ける必要があったのだ。ユーカーはゼロから剣技を教えない。これまでパルシヴァルが一人で培ってきた槍技を活かしたやり方を探してくるに違いない。ランスはそれを読んだんだ。
「確かに俺……切るとか振り下ろすとかはやったけど、受け止めるとか剣で防御するとかはじくとか解らないな」
振り下ろされるならなんとか読める。でも突かれたらどう防御すればいいのか全く解らない。多分逃げに入る。避けることを考える。今までは傍にイグニスがルクリースがいたからそれで良かった。逃げなくても庇ってくれる。守ってくれる人がいた。だけど何時までもそれじゃ駄目だ。俺も自分の身くらいは自分で守れるくらいに強くならないと。

「では一通りの技の流れと、その対応を説明後、実際実技に入りましょう」
「ああ、よろしくランス！」
「ランス様ぁあああああああああああああああ」
「え、えええええええええええエレインんん！？」

突然書庫に飛び込んできたカーネフェリーの少女。手の盆には二人分の茶を持っている。どうして俺たちがここにいるのかわかったのかわからないが、気が利くというのは間違いない。しかしその美徳が美徳として感じられないのはどうしてなのだろう？
にじり寄る彼女にランスはじりじりと後退。本棚の周りをそんな調子で何周かしている二人に俺は助け船を出すことにした。

「エレインさん、ありがとう。ちょうど喉が渇いてたんだよ」

ランスの主である俺がそう言う以上、彼女はここで俺を立てなければならなくなる。一応俺も王だし。それに彼女も気付いて机の方へと駆け寄ってくる。

「いえいえ、お気になさらず！私としたことが、アルドール様へのご挨拶が遅れて申し訳ありません」

俺という客人の手前、あまりぶっ飛んだことも出来ないようで、エレインさんはにこにこと笑顔を湛える。ランスも今は安全圏かと彼女から遠く離れた席へと腰掛ける。

「わざわざすまない。助かったよエレイン」

俺が感謝している以上、ランスも一応彼女に礼は言わなければな

らないみたいで、そんな言葉を口にした。それに彼女はきゃっと喜びの黄色い声を発するが、ランスの端正な顔には冷や汗が浮かんでいた。

「それで、用事はそれだけ？」

なら出てけ。さっさと出てけ。そんな言葉を含む黒い笑顔でランスが笑う。しかしそんな彼に夢中の少女は真実を見据えることが出来ない様子。

「ランス様ったらぁ！アルドール様の前で私にそんなことを言わせたいんですの？そりゃあエレインは“ランス様にお会いししたくて”ここに来たに決まっているじゃありませんか」

なんてメンタルの強い子なんだ。帰れスマイルから強制的にバカップルの会話まで昇華させて来た。

「いや、そうじゃなくて……今私とアルドール様は大切な話をしていて」

「あ、そうでした！お義兄様からご伝言です！」

「ユーカーから？」

そこで初めて会話の流れに興味を持ったようなランスにむっとするエレイン。可哀相にユーカー。またこうやってとばっちりでエレインに恨まれるんだな。

「唯勝負するのもつまらないから、負けたチームは勝ったチームの言うこと何でも一つ聞くってのはどうだ？ですって。セレスお兄様ったらまたご自分の首を絞めるようなことを言うんですから困った物ですわね。それともそういうご趣味なのかしら」

ちょっと返答に困る言葉が続いたが、ユーカーもいったい何のつもりなんだ？俺やランスにさせたいことなんてないだろうし、あったとしても料理のリクエストをするくらいのかわいらしいお願いだろう。だが、相手はランスだ。俺が勝った場合……俺の指導者であるランスも必然的に勝ちになる。その場合ランスが何を言い出すか。ユーカー相手にはそんな酷いことは言わないとは思う。思うけど、相手はパルシヴァルだ。どんな大人げないことを言い出すことかと思うと恐ろしい。そして俺が手を抜くようなことがあったらそれはそれで俺とランスとの距離、温度差がまた酷いことになる。ええと俺はどうすれば……？

「何でも言うことを聞く……ですか」

善人面が完全に悪人面になってるよランス。それでも美形度が揺るがないのは流石ランスだ。ランスに火が付いた。今までの比じゃない程にやる気を出している。この人一体何をさせたいんだよ。っていうかさせたいことあるんだ、そんなに。

（ユーカー、まさかこれを狙って？）

本気で来いって言っているのか？それが俺とパルシヴァルの成長に繋がるって信じて？……いや、よく考えたら何も無い試合じゃつまらないってだけかも。よくわからないけどユーカーがある程度ランスの操り方を心得ているのは事実らしい。

「頑張りましょうねアルドール様！」

「え、あ……う、はい」

何を考えているんだかよくわからないランスの満面の笑みに、俺

は少し押され気味に頷いた。……もとい、頷くしかなかったのだ。

＊

「つーわけで、だ」

ちょっと悪巧みをする時のセレスさんはとても楽しそうだ。僕はそんなセレスさんを見ているのが楽しい。

パルシヴァルがにこにこと笑みを返すと、少し居心地悪そうにその人は顔を背けた。結構照れ屋な人だから、人の視線に慣れていないのか時々こういう事をする。綺麗な目なのに勿体ない。

「ランスの阿呆はアルドールの馬鹿にきっと槍の知識を植え付けるところから始まるだろう。基本的な型とその切り返しは記憶させてくるに違いねぇ。アルドールは記憶力だけは良いらしいからな」

「そうなんですか」

王様は、アルドール様はやっぱり凄いんだなぁ。何かそういう凄いものがないと王様になんてなれないのかもしれないな。そんなことを僕は考えた。

僕とセレスさんがやって来たのは領地の外れ、緑の多い森の中。ちょっと僕の住んでいたところと雰囲気が似ている。

「そこで、だ。俺はお前に型を今日は教えないことにした」

「どうしてですか？」

「パルシヴァル、記憶力ならお前もなかなか良い線行ってるぜ。っていうかお前の場合飲み込みが異常に早い。教科書通りの技なら多分教えれば今日中に習得できるはずだ。試しに一回俺に打って来てみろ」

「は、はいっ！えいっ！」

「さっきまで教えてた素振り通り、良い太刀筋だ。だが正確過ぎて簡単にガードされちまう。わかるな？」
「はい」
「特に相手は知識吸収型だ。お前が本の中の技を使ったり、俺やランスの技を使うようならその辺看破される可能性がある。だからお前は夕暮れまでにお前自身の技を一つ編み出す必要があるってことだ」
「僕の技……」

その響きにはちょっと憧れる。でも出来るんだろうか夕方までに。いや、セレスさんが僕を信じてくれているんだ。絶対にやってみせる。僕はその期待を信頼を絶対に裏切ったりしない。

「んー……だな、お前が磨くべきは反射神経だと思うぜ。頭で考えてからじゃ遅いってこともある。常に気を読めるようになってまず損はねぇ。これさえ覚えておけば勝てない勝負でも負けることはまずあり得ない。死ぬ気でかじりつけば誰相手でもドローに持ち込めはするだろう」
「……勝てないんですか？」

不安になる僕に、セレスさんは言う。早まるなと。

「これだけ会得してても勝ちはない。だからちゃんと型とか型破りでも剣技はマスターしとけって話だ。勿論技はいくつか教えてやる。そっからお前なりに考えていけってことだ」
「はい！解りました！」
「んじゃまず最初に俺の技を見せる。お前がそれを覚えたら俺に打って来い。そこでそのガードを教えてやる。その後は三時までひたすら実戦だ。三時なったら息抜きに茶飲みタイム。その後もう一回手合わせだ。そこまでにお前の技を俺に見せること。いいな？」

「はい！頑張ります！」
「ああ、それからだ。さっきエレインにも言ったが……」
「勝った時の話ですか？」
「……そうだな。お前が勝ったなら俺もお前の言うこと一つ聞いてやるよ」

さらっとそんな事を言うセレスさん。だけど突然そんなこと言われても、そんなすぐに何かを思いつかない。僕はこうしてセレスさんに、指導してもらえるだけでも嬉しいのに。
だけどそんな思いに水を差したのは、そのセレスさんだった。

「だが、お前が負けた時は……お前はもう一回考え直せ」
「セレスさん？それってどういうことですか……？」
「お前はうやむやの内に騎士になっちまった。だからまだ実感もないだろうし、騎士になってやりたいことってのもよくわからねぇと思うんだ。だがこれは憧れだけでやっていけるような職でもねぇ」

僕の夢であるその人が、僕に現実を語る。騎士とはそんなに良いものかと僕に問いかける。お前だって俺の悪い噂くらいは聞いたことはあるんだろうと、僕の憧れる自身を貶めていくセレスさん。

「……だってのに、残念ながらお前は才能がある。このまま行けばいつか絶対強い騎士になるだろう。だからこそ俺はお前に聞きたいことがある」
「……聞きたいこと、ですか？」
「いいか？騎士は戦う道具だ。国の駒だ。命は自分の物じゃねぇ。命がけで、お前は何のために戦う？俺のためじゃねぇだろ？でもアルドールのためでも、カーネフェルのためでもねぇ。それなのにお前はアルドールに仕えている。お前はそれでいいのか？もしそんな風に自分が死んで、それでもお前は本当に良いのか？」

死ぬ。それはどういうことだろう。
痛いこと？苦しいこと？死んだことがない僕にはわからない。ただ、動かなくなること。喋れなくなること。目を開けられなくなること。大切な人の傍にいられなくなること。それが死ぬって言うこと。裏を返せばそれが殺すって言うこと。それが騎士なんだってこと。
僕は何のために剣を取る？これからこの手を汚すんだろう？考えたこともなかった。唯この人みたいになりたくて、走って走って……僕はここまで来てしまったんだ。

「それをちゃんと見い出せねぇと、いつか辛い思いをするのはお前だ。強くなる意味と、強くあるための意味をちゃんと心に構えとけ。それが騎士の心得だ」
「……セレスさん、一ついいですか？」
「何だ？」
「セレスさんは、どうして騎士になったんですか？」

それしかなれなかったなんて嘘だ。セレスさんの性格なら、本当に嫌なことは絶対にやらない。騎士になりたくないのなら、別のものになれたというのは彼だって。それでも敢えて騎士になったこの人には何か思うところがあったはずだ。

「お前と同じだ」
「え？」
「認めさせたい奴がいた。それで俺は騎士になった。でもな……未だにそいつは俺を認めちゃくれてねぇ。だから俺は騎士として中途半端に終わってる」

その言い方から、それが僕と同じ……母様へではないことに気が

ついた。だってセレスさんの母様はもうお亡くなりだったはず。

（セレスさんは確か……）

南部の出身だ。でも滅多に地元に帰らない。実家とは縁を切ったとか勘当されたとかそんな話を耳にしたことはある。セレスさんはセレスさんの父様と仲が悪いんだ。

（だけど……父様か）

それは一体どんなものなのだろう？僕の家には母様しかいなかったから、よくわからない。セレスさんはとても寂しそうに、そして憎らしげに……怒りと悲しみを共に抱えた暗い目をする。そんな風な目をさせるような相手が、この人にとっての父様というものなら……僕も僕の父様について知る日が来れば、こういう思いに捕らわれるのだろうか？

「だからお前が俺なんか目指しても、きっとろくな事にはならねぇ。だからお前はしっかりそういうことを考えろ」

セレスさんの傍には母様も父様もいない。本当は僕以上の寂しいを、この人は知っているんじゃないのかな。

「はいっ！」

それなら僕は頑張ろう。寂しいなんて弱音を吐いていられない。僕はセレスさんみたいに強い騎士になるんだ。セレスさんは何の弱点もない、本当に完全無欠の強さを誇るわけじゃない。それでも僕の前では絶対弱音を吐かないセレスさんはやっぱり僕にとってはヒーローだ。その人が言うんだ。母様に認めさせるだけじゃ駄目だと。

貴方に認めて欲しいってだけでも駄目だって。何故僕が騎士を貴方を目指すのかを、しっかり考えなさいって。

11：Ubi maior, minor cessat.

「お茶は如何ですか神子様」
「ああ、ありがとうエレインさん」

ノック後に、イグニスが鍵を開ければぺこと一礼、部屋に入ってくる金髪の少女。相変わらず見事な役者っぷりだ。その顔にはにこにこと愛想の良い笑み。だけどそれは「ここで点数稼いでおけば巡り巡って外堀埋まって私とランス様の後押ししてくれますよね」的思惑が滲み出ている。彼女の何が凄いって、本人は別に彼のことが好きでも何ともないのにこんな顔を、こんな雰囲気を表せるところにあるだろう。

「しかしパルシヴァル君とアルドールの試合か。なかなか面白いことになって来たね」

確かに戦力強化は有り難い。弱さをカードの幸運でカバーするなんてことになったらせっかくのコートカードの高幸福値が無駄になる。幸福値を温存して戦って貰うためには本人自身が強くなってもらわないと。
北の湖城との一戦のためにも。というかその一戦で終わりじゃない。それこそが、はじまりの戦だ。

「ランス様のご指導ですもの、もう勝ちは決まったようなものですけどね」

うきうきと冷えた茶をカップに注ぐ少女。あくまで僕が数術で盗聴防止諸々の結界を張るまで演じる気でいるようだ。僕は完璧すぎる部下に感嘆の溜息。その後にさっと結界を張ってやる。

「それでアロンダイト卿、いや……あのお父上、ランス様じゃなくてヴァンウィック様の方だからね。彼に君の話は付けておいたよ。彼は彼女のことを知っているしね」
「あら、そうでしたの。それではさぞかし驚かれたことでしょうね」
「驚いたって言うより何だろうね。少しは罪を感じてくれたんじゃないかい？」
「それで神子様はあの親子に決定的なまでの仲違いを起こさせたいんですか？」
「別にそういうわけじゃないんだけどね」

茶を口に運びながら、僕は目を伏せた。

「唯、後悔は限りなく大きく味わって欲しいだけだよ。じゃないと人は何度でも同じ過ちを繰り返す」
「それはどちらのアロンダイト卿へのお言葉のおつもりで？」
「え？両方」

僕の言葉にエレインが苦笑すべきか吹き出すべきか固まっていた。

「まぁ、その件はまだ当面先延ばしになるだろうけど、他の問題ならセレスタイン卿の機転で少しは前進するんじゃないかな」

これで少しはランス様とパルシヴァル君の関係が改善すればいいんだけど。やっぱり根本的な解決策としてはランス様が他の誰かを好きにならなければ駄目だと思う。騎士としてはアルドールという王がいないと生きていけないし、ランスという人間としてはセレスタイン卿にもたれ掛かっている。このバランスと比率が結構難しい。

「好かれ過ぎても嫌われ過ぎても彼はアルドールを憎み、恨むようになるだろう。何事も程々にとは言うけど難しいよね」
「かといってどうでも良ければそれはそれで困るんですよね？」
「そういうこと。せめてアルドールが彼より年上だったらなぁ。あんなことにはならないんだろうけど……年下を父親代わりに慕うっていうのはちょっと難しいか。彼にもプライドとか見栄って物があるだろうから」

あの問題を本当に難しくしているのはそのプライドと見栄というものだ。アルドールがランス様に敵う物なんて何一つ無いのに、それでも手にしてしまうアルドールに彼は釈然としない物を感じてしまう。いつもそうだ。それで彼は欲しがるだろう。手に入らない物ほど魅力的に見えてしまう。その前にこの際誰相手でも良い。彼にはきちんと自分の正しい好意という物を見つけておいて貰わなければ。

でもルクリースさんもフローリプさんもいないっていうのは本当痛い。セレスタイン卿が女とフラグを立てると同時にランス様も他の女とフラグを立てれば、どっちも上手く行く可能性が強い。だけどその肝心のフラグ立てる相手が皆無。だからこんな手まで使って彼女にエレインを演じて貰っているのだ。

最悪この際僕が彼とフラグ立てても良いんだけどっていうか一回そういう風に試した世界もあったんだけど、それだとアルドールの方から険悪化するからなぁランス様と。

「でもそれならイグニス様。アルドール様の伴侶はランス様の趣味とは真逆の方を添えればよろしいのでは？」
「あんまりにも心身共に最低人間だとアルドール自身が病むよ。あくまで王妃はアルドールにとってプラスになる人間、味方であって欲しいんだ」

王妃にはアルドールを支えて貰わないと困る。

「それにランス様はその生い立ちから王妃っていう立場になった女性には興味を持ってしまうんだ、必然的に。これはどこの世界でもそうなってしまう。これまで気にしていなかった相手でも王妃っていう属性を手に入れた途端、気になってしまうものなんだよ」

これは確か王妃がアージンさんでも、ルクリースさんでもそうなった気がする。ギメルが王妃になった世界もあったけどあの時もそうだった。他人の手にした女ほど、魅力的に見えるものなんだろうなぁ。それも仕方のないこととは言えなんとも業深い。

「だからその前に本当の恋って物でも知ってもらうか、失う痛みを覚えて貰えばそういう危険を冒すこともなくなるんじゃないかっていうのが僕の考えだ。ぶっちゃけた話、これを今の内に何とかしておかないと後々本当に厄介なことを引き起こす。もう一つ策を敷いたとはいえ、あっちもどうなるかはわからない」

「ユリスディカのことですか？」

「ああ。彼女はおそらく誰ともそういう風にはならない。正義の化身だからね」

彼女が恋をする日が来るとしたら、それは本当に世界平和が成った日だろう。そしてそんな日は……来ない。だからそんな事はあり得ない。

「彼女はアルドールにもランス様にもそういう気持ちを抱くことはないだろう。ルクリースさんやアージンさんみたいにブラコンだったりアルドールアルドールしてない分まだ彼に恨み妬みっていうのは発生しないんじゃないかと思う」

「……なるほど、そうかもしれませんね」

「ここだけの話、最悪彼女がランス様に振り向いてくれても別に良いんだよ。今のアルドールは女の人に興味を持つような精神的余裕がないからね」

あんな顔してるけどまだまだフローリプさんやルクリースさん、アージンさんのことは尾を引いている。今のアルドールはそれを裏切りだと思うだろう。今回ばかりはセレスタイン卿と気が合うわけだ。一回自分に好意を寄せてくれた相手を亡くした人間同士なんだから。次の恋に脅える、それを裏切りだと思う。一途って言えば聞こえは良いけど、馬鹿って言えばそれまでだ。世の中には多種多様の馬鹿がいる。もっとも……そういう馬鹿に限っては、僕も嫌いじゃないけどね。

まぁ、ついでに言うならば、道化師に負わせられた心の傷も深い。道化師の策で生じたギメルへの不信から恋愛感情って物が行方不明になっている所為もある。

（全く余計なことをしてくれたものだよ）

ギメルは本当に何も悪くないんだ。ギメルは本当に君のことが大好きだったんだ。僕はそれをよく知っている。痛いほどよく知っている。だからその弁解出来ない制約が恨めしく、呪わしい。

僕の知る情報開示はゲームの公平性を保つため、ゲーム進行を見る二神の許可がなければ降りない。ゲーム盤が複雑化した今回から新たに作られたルールだ。それはそうだ。だってこれまでこんなことはあり得なかったんだ。前回の僕っていうかこの僕は実にナイスな提案をし過ぎた。だからこそこんな制約背負わされた。神様ってんだから唯願いだけ叶えてくれればいいのにさ、同時に呪いまで掛けてくるとは話が違うんじゃないの？全く詐欺みたいなものだよあいつらは。

そんなわけで大体はその情報が道化師の口から表に出た後からし

か僕には言えないことになっている。口にしようとしても言葉として発せられない。喉を思い切り絞められるような痛みが襲ってくるだけだ。文字にして伝えようとしても同じだ。肝心なことを書こうとすると指がしびれるわ、紙が燃えるわ。あんな神様さっさと廃れればいいのに。ていうか滅べ。

「でもイグニス様。私が迫れば迫るほど、ランス様はお兄様とフラグが立ってしまっていませんか？」

「ぶっちゃけた話、それで後の問題が発生しなくなるなら一回そうさせてみるのもありなんじゃないかとさえ思うよ。でもなんだかんだであの二人は頭が固いし常識人だから難しいだろうけどね」

じゃれつく要領で周りがドン引きするような仲の良さを発揮するが、あくまであれは遊びの域だ。それに比べてセネトレアで部下に見張らせている某王子主従周辺なんか酷いものだ。定期的に入る連絡の度に部下が戸惑っているのがよくわかる。那由多王子はもう人としていろんな意味で壊れてるし、期を見て始末することになるんだろうな今回も。今回はどうなるんだろうなあの周辺は。今回は駒の配置に気を使ったし上手く機能してくれないと困る。そのために僕はもう、部下を何人失ったことか。

ラハイア……あの子の事は残念だけど、彼の犠牲があったからこそ……僕は二枚の切り札を得た。あの日、彼と出会ったのはこういうつもりじゃなかったんだけどね。そういうこともあるかなって……嫌な性分だ。粗方の先の展開、分岐パターンの解るからこそ、僕はやりたくもない根回しをしなければならない。それがこうなる布石なんだと思うと何の因果かと思うよ。それとも僕はあの日の僕の抜かり無さを褒めてやるべきなんだろうか？

「話が変わるようで変わった気がしないけど……マリアージュ、君も向こうで彼らは見たかい？」

「ランス様程じゃありませんけどなかなかレベルが高かったんじゃないです？」
「本音だと？」
「リフル様は本当にお綺麗ですね、いっそ不気味なほど。思想こそご立派ですけど、正直あれは危ないと思います」
「正論だね。僕も彼はタロック王の後釜にはなれないしさせるつもりもないよ。彼の力は国を守る物ではなく滅ぼすための力だ」
「アスカ殿下は……国王派の奴らに見せてやりたいくらいいい男になられて。リフル様に現を抜かす彼の姿を見れば国王派の保守派爺共が首を吊る勢いですね」
「彼ね……あの両親からなんであんなんになっちゃったんだか。いや那由多王子の魅了邪眼って怖いね」

でも一番怖いのは彼の狂気の方向性こそ違えど彼は何処の世界でも大抵おかしな事になる。殿下はもう那由多王子に惚れた時点で人生詰んでるね。彼を人身御供にでも差し出さない限り、シャトランジア王になって僕の手駒にはなってくれないんだろう。今回の展開上それはちょっと無理。となると僕があの国王派共を説得、一掃しなきゃいけないわけで……現状で殿下の力は頼れない。やはり一度僕は何が何でもシャトランジアに帰らなければならないわけだ。それもなるべく早い時期に。ユリスディカと合流したら後はマリアージュと彼女に任せて僕は一度退くべきなのだろう。
だけど窺うからに、アスカニオス殿下の病みっぷりに対してのへたれっぷりから一線越えることは今回の世界は無さそうだなぁ。よ、魔法使い。とまでは行かなくても魔法使いの弟子くらいは名乗って良いんじゃないかな彼、来年辺りから。残念なことは彼に来年って言う概念がないから僕は殿下を言葉攻めで陥落、手駒化することが出来ないって事だ。
でも、ああいうタイプは反動が怖いんだよね。僕はその反動をより強めて、彼が道化師に一矢報いる矢にでもなってくれればいいな

ぁとは思うけど。そのためにも僕は何としても那由多王子がより最悪で見るも悲惨な死に方をするように祈らないといけないな。殿下は那由多様が死んでから本領発揮するようなもんだし。あれで数兵っていうんだから詐欺だよ全く。いや、数兵だって捨て身になればあれだけやれるって証明ではあるんだろうな。

「でもまぁ……君は魅了されなかったみたいで安心したよ」

「あら？だってそんなこと台本には書いてありませんでしたもの。それに神子様、世の中には混ざるより見ているだけの方が面白い物もありましてよ？」

「はぁ、あの国はどれだけ僕の忠実な部下を腐られば気が済むのかな」

「それでは神子様、私のハートは文字通り神子様に魅了されておりますので。そういうことで如何？」

ひらひらと手の平、手の甲を惜しげもなく晒す彼女。そこに先程までは何もなかった。本当に彼女は演じるのが上手い。嘘と本当の使い分けが見事で、僕でさえ時々どっちだったっけと思うくらいだ。だけどそこに刻まれた数に、僕はそれが嘘であることを知る。模様は同じでも、カードのナンバーが彼女のそれとは異なった。本当に見事だよ。それは視覚数術ですらない。僕でさえ使えない数術の一つだ。そんなことが出来るなら、僕の身体もこんな厄介なことにはなってはいないし、彼女の力が他人に及ぶなら僕はさっさと男に戻ることが出来たんだけど世の中そう思い通りにいかないわけだ。敵に神様がいる以上、凄いと言っても僕も人間だし反抗できる範囲っていうものがある。だから、それも悔しいがそういうことなのだ。

「ライルとラディウスの事は……残念でした。私も」

「そうだね。それは僕も同じ気持ちだ」

僕は両手を握りしめる。その手の甲がヒリヒリと痛むような気がするのは、そのカードを一時彼に貸し与えていたからだろうか？

足掻きという名の策をもってしてもあそこで二人とも生かすのは無理だったか。キングの力が二枚合わされば或いは……そう思ったんだけど、儚い夢だった。あの二人は息ぴったりだけど、向いている方向も同じなのに歩く場所がまるで異なる。そりゃあ簡単にその思想は交わらないか。

運命の輪？１２が吊された以上、セネトレアとタロック、それから道化師攻略には那由多王子とアスカニオス殿下の力が必要だ。アルドールとやり合えるくらいまで、あいつの幸福値を削って貰わないと困るんだよね僕としても。

いっそソフィアの代わりにユリスディカでも那由多王子の所に送り込んだらそれはそれで面白いことになったんだろうけど、彼女はラハイアとにているけれどカーネフェルが大好き分が強すぎて、那由多王子とは気が合わないかもしれない。彼女は凛々しくもまだ幼い。無意味に人生経験の厚いあの王子と比べては酷だ。今の彼女では混血や他の国を救うことまではまだ考える余裕が無さそうだから、アルドールと引き合わせるのが一番だろう。

「マリアージュ……いいやエレイン、彼らのことを哀れむのも悲しむのもそれは今じゃない。彼らの無念を晴らすためにも僕らにはやるべきことがある。違うかな？」

「……そ、そんなことイグニス様に言われなくても解っていますわ！」

僕の合図にさっと配役に戻る彼女。でもまぁ、これで少しは彼女の胸のつかえも取れただろう。同僚達の死を語らう暇もないのでは、彼女の仕事にも支障が出るだろうから。部下の心のケアっていうのも大事なことだ。人を動かすのって本当に大変だ。些細なことで大きな失敗が生まれることもある。僕はどうでもいいような選択肢も

間違えてはならない。それで何度も痛い目見て来たからそう思う。僕は立派な神子を演じる。少なくともそれは僕の心とは違うけど、僕が世界平和のために動いていることは限りなく真実だ。これは間違いない。それがヒントだ。言えないからこそ、大きなヒントだ。僕はばらまく。運命の輪が、そしてアルドールがいつか僕の本当に手が届くように。死人に口なしって言うから、今の内にやれるだけのことはやるしかないんだ。

予言として未来の可能性を示唆することは出来るけど、それだって道化師が今知っていることまでしか僕は言えない。じゃないと矛盾するからね。僕に忠実でいてくれる可愛い部下達にだって僕が話せる情報は限られて来る。もっともアルドール達相手よりは情報、秘密の共有が進むのは確か。あの頃彼や彼女が知っていたこと。それを語り教えることは矛盾に当たらないってルールだから。言葉遊びって言うのが好きなんだね神様って奴は。ああ面倒臭い。さっさと廃れろ、そして消えてしまえ。

「そうですわ、ふと思ったのですけど。殿下達のようにお兄様達がとぉっても仲良しになって下されば、この件は丸く収まるのではありませんでして？」

僕はソフィアの心底嫌そうな声での報告と、数多のゲーム盤での殿下達のぶっ飛んだ仲良しっぷりを思い出していた。あれは那由多様だから絵になるってだけで、セレスタイン卿じゃギャグだよね。幾らランス様が相手でもカバーしきれないよ絶対。セレスタイン卿は中盤までは僕にとってはいてもいなくても良いしどうでもいいし存在自体ギャグみたいな物だから仕方ないね。

「まぁ、見るに堪えないしあそこまでとは言わないけれど……。そうだな、ランス様じゃなくていっそのことセレスタイン卿がブランシュ卿辺りと本当にこれでもかってくらい良い感じになってでも

くれれば或いは」
「むしろアルドール様がお兄様とあれやこれやとあんな感じになってしまえばよろしいのでは？もうこの際お兄様を女装させて王妃ってことにして」
「なんか更にカオスな状況になるような気しかしないよ。それでランス様の王妃萌え属性が加わったらどんな泥沼になることか……」
「……王宮がそんなカオスな空間ではちょっと、士気に関わりますね」

想像して泣きそうになった。うん……僕はもうあの世界の記憶だけは見たくないよ。流石の僕もあの時ばかりはセレスタイン卿を哀れんだくらいだ。そんな僕の反応を見て、エレインが微妙な顔で苦笑した。

「やったことあったんですねもう既に」

冗談で言ったつもりだったのにと、僕の言葉に冷や汗を浮かべるエレイン。でもちょっとそわそわくわくちょっと詳しく話を聞かせろ状態のように見えるのは、この間までセネトレアに送り込んでいたために生じた弊害だろう。おのれセネトレア。僕の部下を何人腐らせれば気が済むんだ。

「世紀末ってこういうことを言うんだなーってちょっと意識が遠くなったよあの時は。滅びの前夜祭っていうか何というか。もうこの世界滅ぶのも仕方ないなーってなるような狂いっぷりだった。あの時ばかりは道化師もドン引きして、しばらく出没しなくなった程だよ」
「そ、そうですか。それはさぞかし壱の神様も零の神様も驚かれたことでしょう」
「これだから人間は面白いって壱の神は爆笑。零の神はやっぱ滅

ぼすべきだって言ってた」
「……零の神様って意外と常識人なんですね」
「壱の神が良くも悪くも悪くも悪くもおおらかなんだよ」

こういう神の愚痴はアルドール達の前では出来ないから困る。下手に神の存在を植え付けるわけにも行かない。いることはいるんだけど、あくまで彼らには神なんか信じて貰っちゃ困るんだ。神に対する最大の攻撃は無関心。過度の恐れも怒りも信仰になり得る。そういった意味では僕程神を信じている人間も他にはいない。そりゃあ僕が神子になるわけだ。

「それにしてもコートカードってものは男運も女運も……っていうか対人運がとりわけ悪いって特徴でもあるのかな」
「総合的にリアルラックが低いのがコートカードに選出される条件かつ特徴のようなものですから、必然的にそうなってしまうんじゃないですか？」
「なるほど、返す言葉がないよ」

＊

「逃げ出さずにやって来たことだけは褒めてやるぜ」

約束の時間、約束の場所。裏庭まで出向いた俺達を迎えるのは不敵な笑みを湛えたユーカーと無邪気な笑みを浮かべたパルシヴァル。本当対照的な笑みだ。
アルドールはそんな二人が不思議に思う。どうしてこの二人が仲が良いのかわからない。そのうちパルシヴァルがユーカーみたいな笑い方をするようになったら嫌だな。別にユーカーが嫌いとかそういうのとは違うけど。
俺がそんなことを思っていた最中、悪役っぽい台詞を口にした従

弟に対しランスは少し目を見開いて……

「ユーカー、それは俗に言うフラグというものでは？」

言われてみれば某タロックの決闘物の話でも、わざと時間に遅れて苛立たせるって話があった。

「馬鹿野郎が。自ら死亡フラグを立て、それをへし折るのが最高に格好いいんじゃねぇか？なぁパー坊？」

「セレスさん格好いいです！」

パルシヴァルは本当にユーカーが好きなんだなー。でもああいうところまで真似するようにならないで欲しいな切実に。

でも死亡フラグか。死亡フラグってでもあんな台詞だったか？あれは敗北フラグだよなどっちかって言うと。弱い犬ほど良く吠えるっていうあれだよな。それじゃあ、死亡フラグっていうと……俺は書物で目にした言葉を思い出す。

「ええと、有名どころだと“俺、この戦いが終わったら結婚するんだ”とか？」

「くくくっ！かかったなアルドールっ！お前は本の虫という話だった！こう言えば必ずお前が死亡フラグと立てるのは目に見えていたぜ！お前みてーな知識野郎は自分の知識をひけらかしたくてたまんねぇんだからな！」

「くっ……惑わされてはいけませんアルドール様！しっかりと気を強くお持ちください！！」

「え？どうしたんだよ二人して。そんな現実問題そんな言葉一つで勝敗が左右されるなんてことないだろ？負けたんなら俺の力不足だったってだけだろ？」

有名すぎる死亡フラグを口にした俺に、もう勝利は決まったと言わんばかりのユーカーと、真顔で俺を励ますランス。意味がわからない。言霊っていうのはギメルやイグニスみたいな数術使いならある程度操れるっていうのは知っているけど、あの言葉だけではプラスともマイナスとも知れない言葉だ。故に言霊としての性能は未知数。そして俺は言霊数術を使える数術使いでもない。だからこれにあんまり意味はない。

それでも数々の死線を越えて来た二人の騎士には違うらしい。

「甘ちゃんが」

「アルドール様は実戦経験がまだ少ないだけだ。そうやってあまりこの方を愚弄するのは止せ」

「ふん、その言葉を口にして死んだ奴を何人見てきた？俺は両手の指でも足りないほどだ」

「その程度か。俺は両目の睫毛の数はくだらない」

「ああ、悪い。俺は左右の眉毛の数並だったかな」

「あの……二人とも、それって多いの少ないの？」

数が微妙すぎる。髪の毛よりは遙かに少ないと解るけど、具体的な数はよくわからない。実際抜いて確かめて数えてみたいと思うけど、痛そう。あとそんなわけのわからないことで張り合わないで欲しい。この二人は変な会話が好き過ぎる。見てみなよ、ほらパルシヴァルだって話について行けずにうつむいて……いや違う。ランスの睫毛とユーカーの眉毛を凝視している。いや、純粋すぎるからっ！どうせ二人の見栄だから！！本気で数えなくていいんだよ！？だけどここで水を差すのはどうなのだろう。数えたことはないけれど俺も人体における睫毛と眉毛の平均本数とか瞬時に答えられるようなそのためのサンプルとしてその数を教えてもらえたら今後何かの役に立つわけ無いんだろうけど実生活で役に立たない無駄な知識ほど胸が焦がれるのは何故なんだ？

「と、兎に角ですアルドール様っ！戦場では常に何が起こるか解りません。僅かでも自身に疑念を抱くような言葉をかけてはなりません。一時でもそこにない幸せを見るということはこの現実から目を背けるに等しいのです。その油断が大きな隙を生むことにもなり得ます」

「死亡フラグを舐めんじゃねぇーぞ」

なんか釈然としない物があるんだけど。この二人口裏合わせて俺をからかってたりしない？いやでもランスはそういう人の悪さはない。違う意味で人が悪いけど。そっち方面で悪いのは完全にユーカーだ。

「っていうか普通に俺、結婚とか相手いないし……」

これって死亡フラグとして機能するのか？

「そうも言っていられませんよアルドール様。都を取り返しタロックを撃退すればすぐにそう言う話もやって来ます」

「あはは、なんだか遠い話だなぁ」

「お前がもっとしっかりしてりゃ近い話なんだけどな」

「ご、ごめん……でもまぁ、そう言うのはあんまり気が進まないけど、頑張ろう。カーネフェルを取り戻さないといけないのは本当だし」

女の子にモテたいから戦うわけじゃない。俺は王だから、この国を取り返さなきゃいけないんだ。俺を守ってくれたルクリースのためにも、……フローリプのためにも。俺はここから逃げちゃいけない。フローリプをちゃんと眠らせてやるためにも、北との戦いは絶対に勝たないと。これはもう、負けて良い、逃げて良い戦いじゃな

いんだ。ここからは……勝たなきゃいけない戦いになる。そのためにも……

「相手、お願いするよパルシヴァル。本気で来てくれ。俺も……強くなりたいんだ」

「はい、王様！セレスさんの言う礼節持って、全力でお相手させていただきます！」

俺の視線を受けたパルシヴァルはにこと微笑み得物を手に取る。彼が手にしたのはちょっと変わった長剣だ。普通の長剣とは違う。あれって確かユーカーの混血剣、セレスタイトにちょっと似ている。……重くないのかな。いやよく見ればあれは片手半剣。ユーカーは片手持ちと両手持ちで技を切り替えたりしてるけど、パルシヴァルは両手で持っている。両手でやっと扱えるということなんだろう。でも……イグニスも気が利くんだな。パルシヴァルがユーカーに憧れているのを知ってて、ユーカーのに似た武器を彼に与えるなんて。

まぁ、それはさておき。俺の扱うトリオンフィは、基本的に片手剣。おまけに元々装飾品としての剣だ。素材が良いから触媒としては優れているけど剣としてはお飾りも良いところ。全力でやり合ったら勝負的には際どいところだ。今回は剣の勝負だから数術は使ったら駄目だろうし。

それを見かねてランスが俺に得物を貸してくれる。ランスの家に伝わるアロンダイトというその剣は装飾も見事な事ながら、かなりの強度を誇る。どのくらいの間受け継がれてきたかはわからないが、刃こぼれ一つ無い立派な剣だ。

「でも、俺なんかが使っていいの？」

それに今日一日俺が使ってきたのはトリオンフィだ。握りしめた感じの違和感、手に来る重みの違いに俺は戸惑う。今になって不安

になってきた。俺は何時だってトリオンフィを手にしてきたんだ。
「大丈夫ですよアルドール様。アルドール様はしっかり学習なさいました。それは得物が変わっても失われる物ではありません」
戦場では得物を弾かれ、相手の得物を奪って斬る、拾って斬る。そんなのも日常茶飯事だという話もある。王には手にした剣を瞬時に自分の物として使いこなせるような力量が、必要なのだと言われた気がした。
「……わかった。頑張ってみる」
「その意気ですよアルドール様」
顔を上げて頷く俺に、ランスが小さく微笑んだ。不意打ちで驚いた。彼はなんだかとても優しい顔をしていた。それがちょっと俺は嬉しかった。
「……んで、どうすんだランス？一本？三本？それとも降参引き出した方が勝ちか？」
「アルドール様、如何なさいますか？」
「そうだな……より本番に近いのは？」
「最後の、です」
「それじゃあそれで行こう！いいね？パルシヴァル？」
「はい！解りました！」
「おい、馬鹿ランス、そいつはちょっと不味いんじゃ……」
「アルドール様のご命令だ」
「いや、そうじゃねぇだろ？あいつらまだガキだぜ？」
「それではアルドール様、パルシヴァル、構えてください。それでは行きます、はいっ、始めっ！」
「あ、こらっ！」

ユーカーの制止を待たず、試合は始まった。俺はまず様子見ということで相手からの一撃を待つ。と思ったが彼は動かない。彼も俺の様子を観察している。
これは不味い。この硬直状態が続けば、先に集中力が途切れた方が危なくなる。開始の合図と共に走り切り込む位の方が良かったのかも知れない。

「……」

いや、彼は唯動かないのではない。距離こそ詰めては来ないが、円を描くよう俺の周りを回り出す。何時こっちに踏み込んでくるか。それを恐れてついつい視線が彼を追う。身体の向きが変わっていく。その瞬間、彼が反対側へと回り込む。俺の身体は今までの動作を続けようとこれまでの方向に回ろうとする。だけどそれじゃあ駄目だ。反対側を向かなければ！勢いよく身体を捻ろうとした所為で、首と背中に激痛が走る。何やってるんだ俺！
そんなことをしている内にもパルシヴァルの一撃が迫ってきている。今からじゃ避けられない。ならっ、迎え撃つ！
片手と両手の違いは……両手の方が力が入る。攻撃力が増す。振り下ろす動作ならば両手の方が重さで早い。しかし、振り幅は片手の方が範囲が広い。身体の捻りなどを上手く使えば両手でもそれなりには戦えるが、剣を噛って一日でそこまで出来るはずがない。
そして今の攻撃は、突きでも振り下ろしでもない。これは薙ぎだ。横から胴体切りにかかってきている。

（薙ぎ払いなら、片手の俺の方が早く払える）

多少手は痺れるかも知れない。それでも俺はこれを防げる。彼の攻撃を弾くため、俺は攻撃を迎え撃つ姿勢に入る。しかし、だ。パ

ルシヴァルは攻撃のリーチ範囲に入るその寸前……片手を離したのだ。

「……っ！？」

途端に速度の上がる彼の剣。これまでの捻りの動作。それが生み出すスピードを持って剣の重さを軽減したのか。そしてそこに片手特有の振り幅を加える。唯待つだけの俺の剣では打ち負ける。咄嗟に俺も彼の剣を目指して一撃をぶつけに行く。

キィインと耳に残る鈍い音。手の震え、痺れ。手が重い。だけど俺はしっかりその手に得物を握っていた。

「え？パルシヴァル？」

見ればパルシヴァルは剣を手放し、俺の足を押さえていた。

「あー……危なかった」

「あのなぁ……」

ほっとしたよう息を吐くパルシヴァルが何をしたのか理解したらしいユーカーが呆れた顔で近寄ってくる。

「馬鹿かお前は！だからてめーは騎士に向いてねぇって言ってんだろうが！」

「でもセレスさん、セレスさんはそういう騎士様じゃないですか」

軽くユーカーに頭を小突かれて、それでもそれに関しての文句は出ないパルシヴァル。

「セレスさんは強い騎士様です！セレスさんなら熊くらい殺せた

はずです。でもセレスさんは殺さなかったです！」

見れば俺の足下には、小さな虫がいる。蟻の群れだ。

この子、どんな動体視力を、視野の広さをしているんだ。俺はそこに驚いた。戦いの中で、他のことに気を取られるなんて、そんな危ないこと……実戦ならこの子死んでたかもしれないのに。

「僕は殺すための騎士じゃなくて、あの日のセレスさんみたいな守る騎士になりたいんです！僕はセレスさんのそういう優しいところに憧れたんです！」

「それはお前が俺を知らないだけだ。あの時はそうだったってだけで……お前の知らないところで俺がどんだけ人を殺したか、お前は知ってんのか！？」

「それでも僕にとってはそれが本当です！それにセレスさんは何の理由もなくそんなことはしません！」

「するかもしれねーだろうが！」

「そんなことないです！理由もなく人を殺すような人は、理由もなく人を助けたりなんかしない！理由がなければ人を助けたり、守ったりしません！必ず損得利益を考えます！でもセレスさんは頭じゃない、身体で動く人です！貴方は反射的に、本能で人助けが出来る優しい人です！」

「反射的に苛ついて殺したかもしれねーだろ」

「セレスさんが本能的に苛つくような相手です！余程酷いことをしてきたんですねその人は！」

「あ、あのなぁ……お前は俺を買い被りすぎで……」

「そんなことありません！」

ユーカーに食って掛かるパルシヴァル。彼が俺に背中を向けた隙に、俺は気がついた。無事じゃなかった。俺の靴の裏に張り付いたその死骸。俺は既に数匹、気付かずに殺してしまっていた。たかが

虫だ。人じゃない。これは人殺しじゃない。それでも……確かに命だ。言い訳をしようとする自分自身に怖気立つ。俺はいつか、人をこの虫のように見て語る日が来るんじゃないのか？

あの子は、こんなちっぽけな虫のことまで気に病むのに。俺は“こんなちっぽけな”なんて形容をしてしまうほどに最低だ。そう思う、感じること自体、俺の心が醜く歪み、汚れている証拠なのだと気付かされる。

パルシヴァル。あの子は確かに騎士には向いていない。それでも……あの子は俺より王に向いているのではないのか？

王の資格とは何だろう？イグニスは愛することだと言った。愛するって何を？人を？でも人って何？何処から何処までが人？

人って、カーネフェル王にとっての人って……カーネフェル人だけ？それともカーネフェルの味方だけ？それじゃあ俺がこれから戦うタロック人は何？人じゃないの？虫？この蟻と同じ？踏みつぶして、殺しても……何とも思わなくなるのが正解？そういう物なの？

そもそも虫と人の違いって何？姿形が違うこと？意思の疎通が図れないこと？隔たった環境で暮らすこと？

実戦経験は俺の方がこの子より上。それなのに、どうして俺は今更こんな事に脅えているんだ？俺はエルス＝ザインを斬った。あの子の腕を燃やして斬った。イグニスは当然のように次はあの子を殺すことを考えている。そして双陸。俺に親切にしてくれたタロック人。彼は敵の将だ。都ローザクアを占領した相手だ。倒すべき敵だ。俺が踏みつぶすべきはこの虫じゃなくて、彼らの方だ。

彼らをまだ人と思えるこの躊躇いは、王に必要なのだろうか？それとも要らない物なのだろうか？だけど何とも思えなくなったらそれこそ俺は……狂王と同じじゃないか。

タロック人を人と思えず殺せる奴が、どうしてカーネフェル人を人と思って殺さない？だって両者の違いはたかだか目の色髪の色だけなんだ。

だって例えは赤い蚊と青い蚊がいたとして、どっちも血を吸うな

らどっちも殺すんじゃないのか？例えば黒いゴキブリと、虹色のゴキブリがいたとして……そのどっちもが家の中をガサガサと走り回り飛び回り増殖していたら、それは何色だって嫌な人は嫌だよね？人だって同じだ。どっちも勘に障れば……そういう風に見えてしまうものなんじゃないのか？

（俺は……）

俺は人が人に見えていることを、喜ぶべき。喜ぶべきなのに、手が震えて仕方ない。これ以上、パルシヴァルと戦えそうにない。勝つためにという思いによって……一瞬でも彼の顔が人に見えなくなったらと思うと怖いんだ。でも彼が人に見えていたら、人だから彼の背景を考えてしまう。家族構成から彼の立ち位置、その目標。もし手が滑ってここで彼を殺してしまうなんて事があったらそれはどうなるんだ？

真剣で戦うのがこんなに怖いことだったなんて、俺は……知らなかった。いつも数術に頼って来ていた。剣だけで戦うなんてこれが初めてだった。

「アルドール様……？」

俺の肩が震えているのに、いち早く気付いたランス。俺は彼を見上げて笑って見せた。そうしなければ俺は今にも泣き出してしまいそうな程に、心が追い詰められていた。

「……ごめん、ランス。俺の負けだよパルシヴァル。君は立派な騎士だ。その優しい心をずっと忘れずに、これからも俺に仕え、支えて欲しい。そしてその優しさでこの国のいろんな人を助けてあげてくれ」

「王様……？」

背中を向けたままの俺に疑問を感じたらしいパルシヴァル。俺は一呼吸置いて、笑顔を作る。振り返る。

「君を助けたユーカーみたいに、優しい騎士になってくれるね？」

「は、はいっ！」

そうだ。この子は俺に、必要だ。この子のような子が傍にいてくれないと、俺は……いつか見誤る時が来る。イグニスはそれを見越してこの子をスカウトしたんだろう。ギメルと出会った頃の、そうだ初心を忘れるなと……イグニスは俺に訴えたかったんだ。一体いつから俺はこんなに捻くれてしまったのだろう？

「アルドール様……」

「いや、ごめんランス。向こうで数術やってもらえる？ちょっと首ぐきっていっちゃってさ。パルシヴァルとユーカーは、俺達にさせたいことでも考えててくれよ」

こう言えばランスも俺に逆らえない。俺はランスの腕を掴んでぐいと引っ張り歩き出す。空き部屋に入って治療をして貰いながら、……俺は無言に耐えかねもう一度ランスに謝罪をする。

「ごめん……せっかく教えてくれたのに。剣まで貸してもらったのに」

「アルドール様。悔しいと思うことは向上心の表れですよ？それは立派なことです」

「そうじゃないんだ」

静かに俺が首を振ると、ランスは青い瞳を瞬いた。

「俺が殺した蟻にもさ、家族がいて兄弟がいて、友達がいて……もしかしたら好きな子とか恋人とかいて、死にたくないなとか思うとかそんなことがあったんじゃないかなって思うと馬鹿みたいに悲しくて。勿論蟻の習性とかから人と違う、あり得ないことってのもあるんだとは解ってる。あれは女王蟻じゃなくて働き蟻だから家族とか恋人とかって枠組みはないだろうし……」

「アルドール様？お優しいのは結構ですが……」

「そうだよな。目に見えてないだけでもっと俺は小さな虫とか微生物とか殺しまくってるんだろ？解ってる。解ってるんだ。これが本当に馬鹿げたことだって。くだらない事なんだ。馬鹿みたいな事なんだ……でも俺、あの子見てたら……虫と人の違いが解らなくなって来たんだ。あの子が本当に優しくて良い子なのはわかるんだよ。それなのにそれを見ていて俺はそんなことを考えてしまって……」

「……」

「何も感じないか、可哀相のどっちか。両極端なんだ」

「両極端……ですか？」

「家族を殺されるのは、辛いし苦しい……悲しい。これから俺が戦うタロックの人たちも家族がいるんだよな。でもカーネフェル人を殺させたら、その人の家族が悲しむわけで……だから守らなきゃいけなくて、でもそのために殺すってことは俺はタロックの人から恨まれて憎まれるってことなんだよな」

それが王としての役割。仕方のないことだ。憎まれることだ。味方を得るってことは多くの敵を得るってことなんだから。それは解っているつもりなのに、手の震えが収まらない。

姉さんが死んだ。ルクリースが死んだ。フローリプが死んだ。それと同じ思いをする。俺が人を殺すのは、誰かに俺と同じ悲しみを押しつけるって事だったのか。そんなすぐに解りそうなこと、どうして俺は今まで気にも留めずにいたんだろう？

「俺はカーネフェルの王なんだから、敵をあの蟻と同じみたいに思えるようにならなきゃいけないんじゃないかって……そう思うんだ。相手を人だと思ってて……そんな甘さでここから巻き返せるとは思えない」

「アルドール様……」

「でもそうなった時……俺はちゃんとカーネフェルの人達を人だって思えるのかな。見境無くみんな蟻に見えてくるんじゃないのか？」

俺はどうして今、彼の前で泣いているんだろう。どうして彼に頼っているんだろう。寄りかかっているんだろう。違う。本当は俺が彼を支えたいと思ったのに。立派な王になりたいって……彼に信じて貰えるような、安心して心を打ち明けて貰えるような、預けて貰えるような人間になりあいって思ったんだ。思ったのに……どうして俺はこんなに情けなくて頼りないんだろう。

「なぁ、ランス……。俺はどっちになるべきなんだろう？」

先王をよく知る彼に、正解を欲しがっている。答えをくれとせがんでいる。本当は俺が自分で見つけてそれを彼に知らしめるべきなのに。俺はどうしてここで彼に頼ってしまったんだろう。

それとも俺は聞きたかったのか？誰よりも優れた騎士と呼ばれるこの人に。人を斬ったことがあるこの人に。お前はどう思い人を殺すのか。殺した相手をなんだと思うのか。そんな本人が誰かに教えたくもないであることを、根掘り葉掘り穿り返すのか俺は。

「大丈夫です、アルドール様。貴方は王であって貴方は騎士ではありません」

幼い俺に剣、人殺しを教えること自体が間違っていた。ランスは

そんな響きを持つ口調でそう言った。

「人を斬るのも殺すのも、すべては騎士の役目です。貴方は唯……国の希望であってくれればそれでいいんです。……俺が軽率でした」

俺の手からアロンダイトを引き取ったランスは、俺には二度と真剣を持たせない。静かにそう告げた。

これにトリオンフィは含まれないのか。トリオンフィは剣っていうか装飾剣の触媒だから、魔法使いの杖のような物。数術を使うための道具だからそれを俺から奪ったりはしない。必要最低限の身の守りはそれで出来ると考えてのことだろう。

「俺が貴方を傍で守ります。だから貴方が戦う必要はありません。誰が相手でも……貴方には傷一つ付けさせない。命に代えても守ります」

「ランス……」

「だからアルドール様は、アルドール様のお心のままに。人が人に見えるというのは才能であり美徳です。無理に人を虫にしようと思われる必要はありません。アルドール様は……道化師以外のカードを殺す必要もないんです。それ以外の人間だって同様です」

「……ありがとう、ランス」

なんとなく、解った。俺はやっぱりこの人の前で格好付けようとか立派な王になろうとかそういうところを見て貰おうと思うこと自体が烏滸がましかった。俺は自分がどんなに駄目な王で至らないか。それを自覚し彼に弱さを見せていく。それが俺とランスにとっての正解だったんだ。だってランスはいつもより自分の言葉で話してくれるし、優しい顔で俺を見る。俺が弱くて何も出来ないから、彼を頼る。頼られることで彼は、そこに何かを見い出す。そういうこと、

なんだよな？
　こんな風にしか自分を認めてもらえないなんて本当に情けないけど、少し……ランスとの距離が縮まって行くのは嬉しい。俺が先王とは違う人間だと、理解してくれようとしているのだ、彼が。

（でも……）

　アルト王なら俺の質問になんて答えてくれたのだろう？人は何か？敵とは何か？……俺の答えは多分間違っている。人にランスに人殺しの役目を押しつけるなんて。俺は直接その罪から逃げているだけだ。王として彼らの罪を間接的に背負う立場にあるからって、彼らに人殺しを命じて自分は安全なところに守られているだけなんて。そんなの……多分正解じゃない。

（でもそれなら……）

　本当に正しい王の答えって、一体何なんだ？

＊

「で、頼み事は決まったのか？」

　裏庭に戻った俺とランスに、待ちかねたぜと欠伸をするユーカー。そんな彼にランスが問いかける。

「ああ。俺の分は後で言う。その前にパルシヴァルの奴を聞いてやれ」

　ユーカーが眠たそうに目を擦り、傍らの少年を手招き。俺の方へと歩かせる。彼は俺の傍までやって来ると、じっと綺麗な青で俺を

見上げた。

「……王様、アルドール……様。僕ともう一回戦ってくれませんか？」

「……え？」

「考えてみたらおかしいです。僕はまだ何もしていない。技も出していません。アルドール様だって、あの隙に僕に剣を向ければ降参してたのは僕の方です」

決着はまだ付いていない。今日一日お互い頑張ったのに、あんな幕切れはないだろう。確かに誰もがそう思う。俺の手の震えを知らない二人は尚のこと。

出来ることならその勝負を受けたい。望むところだと言ってやりたい。それでも……まだ駄目だ。手が震える。もし万が一でも。このトリオンフィでも……うっかり数術が暴走したら？相手はペイジのコートカードなんだから俺が怪我をさせるとか殺してしまうなんて事はあり得ないんだ。わかってる。何度やったって勝のは多分パルシヴァルだ。ランスだってトリシュとの二度目の決闘に負けてしまったらしいじゃないか。基本的に上位カードは下位カードと真正面からやり合って勝てる幸運がない。さっきのだって彼の幸福値が生み出した、俺の心の隙を突いた勝利なのかも知れない。無理したところで俺の幸福値がすり減るだけ。そしてここで挑めば、また俺はくだらないような悩みに囚われて、精神に異常を来しかねない。これはパルシヴァルが悪いわけではないけれど。

「アルドール様はお疲れだ」

返答に困った俺に代わって、冷たくそう答えたのはランス。得物のアロンダイトを片手に、鞘から抜き払って……パルシヴァルに目を向ける。

「もう一戦というのなら、私がアルドール様に代わってお相手しよう」
「え！？ランスさんですか！？」
「大人げねーぞランス。鬼！悪魔！」

驚きを顕わにするパルシヴァルと、ソロでブーイングのユーカー。

「……もっとも虫に気を取られて勝負を投げ出すような君が、俺に勝てると本気で思うのなら、掛かって来ると良い」
「だから、てめぇはどうしてそういうこと言うんだよ。んなこと南部で言ってみろ。お前の評判駄々下がりで、人気騎士ランクがトリシュに抜かれんぜ」

俺のためとはいえ、あまりに容赦のない言葉。それにユーカーも呆れている。そんなユーカーだがパルシヴァルにも一応聞いてはみる様子。

「んで、どーするパルシー？」
「ぱ、パルシー？！」
「いや、こいつが勝ったらパー坊呼ばわり止めろって言われてたんだよ。んで適当に今考えた。呼びやすいしこいつからの評判も上々だ」
「へ、へぇ」
「シヴァルでも良かったんだが、連続で呼んでたら誰かにうっかり縛られそうで何か嫌だろ」
「へ、へぇー……」

そんな発想出るのはユーカーくらいだと思うよ。でも実際ルクリースに出会い頭に縛られたりしてたし経験者はこういう発想になる

んだろうか？
　そんなことはどうでもいいんだけどさ、俺はおそるおそるランスの方を見上げてみる。笑っているが目が氷のように冷たい。いつの間にか従弟がその弟分に渾名を作って親しげに呼んでいたことが、そんなにショックですかランスさん。ていうか貴方はもう名前が短過ぎて愛称も略称も作りようがないですって。頑張って作ってもランさんとかラっさんとかンっさん程度？どうしろって言うんだ。

「まぁ、お前が嫌だってんなら……俺が代わりに出てもいい。その位はそっちも許可してくれんだろ？ていうか許せ。頼む。ていうか許すもんだろそのくらい。だから許せ。ていうか許せ」
「ああ」

ユーカーの押しに真っ正面から向き合うのが面倒だったのか、或いはその言い方がツボに来たのかは俺はランスじゃないから解らないが、推測するに半々……いや、後者が七割ってところだろうか？

「それじゃ、パルシヴァル。こいつが今日の最終授業だ」

　俺とランスがやり合うところを見たのはないよなと、ユーカーがパルシヴァルに尋ねる。それは俺も見たことがない。戦うのが嫌と言った矢先に不謹慎だとは思うけれど、ちょっと胸が高鳴った。だって、二人とも本物の騎士で……その二人が試合をするなんて。これでわくわくしない男はいないだろう。

「俺とランスをよく見てろ。あれが王道で立派で世間一般的ではもてはやされる騎士って奴で、こっちが騎士の風上にも置けないような邪道騎士って奴だ」

　そこから得られる物すべてを持って行け。そういう風にユーカー

は俺達に伝えたような気がした。

「おい、アルドール」

「様を付けろユーカー」

「いいんだよ俺は」

「あ、うん。気にしないでランス、いいんだよユーカーはそれで。で……何？ユーカー？」

「お前が審判やれ。試合条件はさっきと同じで良いんだよな？」

「え、降参するまで……って奴？」

もうすぐ日が暮れるっていうのに、降参が終了条件なら、どうなるんだこの試合。だってランスもユーカーも頑固っていうか負けず嫌いの節がある。おまけにランスは俺の思いを背負っているし、ユーカーも弟分兼愛弟子の手前、いつもみたいに折れたり拗ねたり出来ない。俺の頬を撫でる風。その風は夏の風にしては……妙に涼しげを帯びていた。虫の声も種類が変わってきている。夜が近づいてきている。

（夜……？）

確かヴァンウィックが言っていなかったか？ユーカーは……夜には凄く強くなるって。それを思い出した途端、俺はどくんと鼓動が鳴るのを聞く。

（見てみたい……）

思えば俺がユーカーの戦う所なんて、シャラット領でと盗賊戦で少し。ランスはあの盗賊戦……そのくらいだ。

普段ならランスの方が強いだろうとなんとなく思う。それでも夜なら？北部で崇められるセレスタイン卿ユーカー。彼の本当の力は、

最高の騎士と謳われるランスとどこまで渡り合える？同等？それとも……それ以上？

「ああ、それでいい。どうせ結果は見えている」

「どうだかな。あとお前のそれ負けフラグっぽくね？」

弱い犬ほどなんとやら。そんなことを思っただろうが口にはしなかったランス。でも彼の目には一瞬ユーカーへの侮蔑が浮かんだ。しかしそれは本当に一瞬。その直後、その青は驚愕に見開かれたのだ。

「……ユーカー？」

「何だよ？」

ユーカーがランスを見る、両目で。彩度の明度の異なる二つの瞳で彼を見る。俺はシャラット領での一件で彼の目を知っている。パルシヴァルもユーカーとセレスを知っているからその目のことを知っている。それでも、だ。ユーカーが変装のためでもなくやむを得ずでもなく、こんな風に両目を開けるのを、俺たちもランスも知らなかった。

いや、ランスだけは知っていたのかもしれない。だからこそこの驚愕だ。それを彼はある種の裏切りと捉えているのだろう。

ユーカーは自分の目を嫌っているけど、両目を開けたユーカーは……いつもともセレス時とも何か違う。彼の左目は浅瀬の青。彼の右目は薄氷を思わせる美しい空色だ。突き刺すような冷たさが、その右目に宿って……彼の周りに不思議な空気を纏わせる。いつも騒がしい彼が、とても落ち着いて見える。もしかしたら彼は……彼の心はいつもこんな風な温度をしているんじゃないのかな。開けた視界は彼にそれを取り戻させる。

「本気でやらねぇのは相手にとって最大の侮辱だ。こいつの手前そう言っちまった以上、俺も本気出すのが礼儀だ」
「……やはり普段は手を抜いていたか」
「だってお前嫌いだろ。負けるのも、お前に勝つ俺も」
「……ああそうだな」
「その癖、手を抜く俺も嫌いだ」
「否定出来ないのが悲しいな」
「そこだぜ。俺とお前の最大の違いってのは。つかアルドール、いい加減合図出せ」
「あ、ごめん」

出して良かったんだ。なんだか二人の会話を遮ってはいけないような気がして出来なかったんだけど……これ以上躊躇ったら俺の所為にされそうだ。

「そ、それじゃあ二人とも用意、構え。……開始っ！」

戸惑いがちに発した俺の合図に、二人は同時に飛び出した。俺やパルシヴァルとは違う。一手に悩むんじゃない。一手のスピードに二人は焦点を置いた。

「そんな、セレスさんがスピード負けをするなんて……」
「違う、……あれは数術だ！！」

飛び出してしばらくはユーカーの独壇場。しかし、先にリーチ圏内に届いたのはランスの剣だ。見ればランスの靴底から噴射される水。そこには光り輝く水が見える。俺の言葉の意味が解るのか解らないのか微妙なパルシヴァルも、それがとても卑怯なことだとは理解して……

「セレスさんは数術を使えない！それにこれは剣の試合です！そんなの卑怯ですよランスさん！！」
「いや、いいんだよパルシヴァル。これが立派な騎士って奴だ」
「セレスさん！？どうしてランスさんを庇うんですか！？」

攻撃の押収を繰り返しながら、それでも冷静に言葉を紡ぐユーカー。喋りながらもランスの剣を払える余裕が感じられる。ユーカーが受けた攻撃は、最初のあの一撃だけだ。それも軽傷で済むよう彼はかわしたようだった。凄い。ユーカーはほとんどランスの攻撃を見ていない。見ずにこれだけかわしているのだ。両目が見えているはずなのに、両目で見ない。気配を感じ取っている。全神経を集中させている。それなのになんて……涼しげな顔。

次第に視界が闇に包まれていく。一撃一撃を繰り出すランスの方は常に必死だ。それに対しユーカーはランスの攻撃の切れ目を見計らい的確な攻撃を繰り出す。そんなユーカーの冷静さが心底腹立たしいだろう。その相手が自分を褒めちぎるのだから、どんなにそれが憎く聞こえるだろうか。

「庇ってねぇ。それでもこいつはあいつの騎士だ。あいつの代わりにあいつの名誉を背負ってる」
「名誉……ですか？」
「あいつが負けるってことはアルドールの、カーネフェル王の名誉に傷を付けるってことだ。そのためには自分の、騎士としての名誉を汚してでもあいつは勝利をもぎ取りに来てる。それが本当に立派な騎士って奴だ」
「俺を褒めて手元を狂わせるつもりか？」
「事実だろ？つかそんなちゃちな技お前に通じるなら連戦連勝は俺だろ常識的に考えて」

名誉を持つこと。誇りを持つこと。それが立派な騎士。その名誉

を誇りを預かり、絶対に負けないこと。それがランスという騎士の強さで魅力なのだとユーカーは言うけれど……パルシヴァルはそれで納得などしない。

「セレスさんが王様に仕えていないからって、セレスさんが間違った騎士だとか、名誉がないとか、そんなの嘘です！貴方の剣を、目を見れば解ります！貴方に何も無いのなら、僕の目に……貴方はあんなにも大きく映ったりしませんでした！」

「……ランスはこの国で一番大勢の奴らに信頼っつぅ名誉を預けられてる。だからランスは負けるのが誰より悔しいし、負けられない。だが俺にはそんな名誉はない。だから俺は別に負けても良いし、逃げても良い」

最初はそのはずだったんだ。そう零して、ユーカーがランスに切り込んだ。

辺りは薄暗い。普段なら見えている剣の軌道。それに気付いても避けられない距離。ユーカーが両手で振るった渾身の一撃。それを受け止めるランスの手にしびれが走る。その隙を見逃さず、ユーカーがランスに足払いを仕掛ける。体勢が揺らいだその刹那、彼を踏みつけ地面に落とす。

「俺は逃げるためにこの北部へ来た。その結果、解るかパルシヴァル。そんな俺にも勝手に信頼なんて言葉が生まれてやがる。俺はそんなもんいつか捨てるしそこから逃げるかもしれねぇ。そんな奴を信じる馬鹿が湧きやがる」

そう言いながら、ユーカーはランスの首筋に刃を当て、降参を迫る。

「解るかパルシヴァル。騎士ってのはそういうもんだ。一度なれ

ば、何処にも逃げ場はない。守れば守るだけ、身動きが取れなくなる。その内本当に守りたかった物も解らなくなる。奪われる。なくしてしまう。だってのに信頼っていう重荷だけが残される。……んで、降参はすんのか？」

「言うまでもない」

「だよな、お前ならそう言うよなやっぱり」

さっと剣を引くユーカー。本当なら、本番ならここで幕引き。降参されなくても剣を振り下ろす。そういうものなのだと俺もパルシヴァルも悟って、戦いの怖さを垣間見る。名誉が誇りが……そういう物に縛られて、命乞いすらままならない。負けたとしても命乞いなどしない。それが本当の騎士という物だ。自分の命恋しさに、主を売るような者は本当の騎士とは言えない。ランスが最高の騎士と呼ばれるのは、戦場で命乞いなどしない。そもそもするような状況にすらならない。

「んじゃ、続けるぜ」

「……ああ」

試合の続行に、ユーカーが微笑。それにつられたようにランスが苦笑。そのかわされた笑みに、場の空気が僅かに和らいだ。

「二人とも……楽しそうだ」

真剣で渡り合っているんだから、二人とも怪我をする。手元が狂えばどっちかが死ぬことだってあり得るのに。

ユーカーが剣を退くことで、ユーカーはランスに教えた。これは本番じゃない。あくまで試合だと。誇りってそんなに大事かと彼はあの時問いかけた。ユーカーは……こうして尊敬する相手と手合わせできることが楽しい、それだけでいい。勝敗などどうでもいいと

ランスにその刃をもって伝えたのだ。
俺に誇りはない。今に限っては守る者もない。だから負かせてみろと、勝負を続けた。その姿は、いつかパルシヴァルが見た騎士とは違って見えたのだろう。救うために逃げる騎士が、戦いをこんな風に好むなんて思わなかった。そしてあんなことを言われれば……取り乱すのも無理はない。だって二人はもう俺たちの声が聞こえないくらい、この試合にのめり込んでいる。

「僕は……セレスさんにとって、重荷……だったんですか？それなら最初から…っ、僕なんか助けなければ、見捨てていてくれれば良かったんですっ！どうして今になって……そんな事を言うんですか！？」
「違うと思うよ」
「え……」
「ユーカーは、……俺みたいになるってのはそういう大変なことなんだって言ってるんじゃないかな？」

誰かに仕えるって事はランスみたいになるってことで、二人から見れば……形だけ仕えてもそこまで出来ない奴は騎士じゃないってことで……。ユーカーみたいに主に礼儀なく仕える、或いは主を持たない姿勢は、誰から見ても立派な騎士とは言い難い。
それでも縛られない彼は、主を持つことで信頼を持つことで身動きが取れないランスに救えない者を救うことが出来る。そうやって救い続けた結果、自由だったはずのユーカーも身動きが取れなくなりつつある。人々の信頼を裏切って、これまで通り自由に生きるのか……それとも信頼に折れて自分のやり方を捨ててしまうのか。その結果、守りたかったものを守れなくなってしまったとして、誰かではなく大勢を選んだことを本当に誇れるのかと彼はパルシヴァルに聞いているんだ。

「ユーカーは言うこととやることが全然噛み合って無くて、あれで君に何かあれば絶対助けてくれるだろ？俺にもそうだよ。俺に仕えてなんかいないけど、それでも守ってくれるんだ」

ランスとユーカーの違いは、見捨てられるかられないか。命令以外のことが出来ないランスと、自由に動けるユーカーは……それぞれ違う辛さを抱えている。

絶対に負けられないっていうのも辛いし、やりたくないことをさせられるのも辛い。だけど、負けても逃げても良いのに……逃げられないって言うのも辛いんだろうな。だからユーカーは……ああなんだ。

殺すために剣を振るうことが好きなんじゃなくて、最初はこうやって……遊ぶように競い合うのが好きだったんだろう。それが人殺しの道具として使われるようになったのがこの二人だ。そこから歩く道が隔たっていったのがこの二人……

「命令されるのって便利だよね。その善悪の判断をするのは命令される側じゃない。だけど命令されないってことは全部自分で考えなきゃ駄目ってことで……特定の主を決めないって事は、そういうことなんだよ」

手の届く限り、救える限りを救い続ける。際限なく……いつまでどこまでってのもわからずに、それでも助けたい相手を助け続ける。放っておけない限り、何人でも何人でも。それはきっと、そういうこと。

「どういうこと……ですか？」

「ユーカーはランスも助けたいんだ。だからそのために……全力で相手をしている。その上で、自分が負かされるまでこの勝負を続けるつもりなんだ」

名誉が地に落ちても、それで何も手に入らなくても、失うものばかりでも。そうすることで助けられる相手がいるのなら……彼はそんなことは絶対に言わないだろうけど、見ていればなんとなく解るんだ。

「ユーカーは、自分みたいになっても良いことは何もないって言っているんだ。名誉も地位も得られない。感謝だってされないことも多い。敵も多いし恨みを買ったり。それでも君は彼みたいになりたいのかな？」

「僕は……」

「みんながみんな、君みたいに彼を理解して慕ってくれるわけじゃない。だからこそ彼も捻くれている」

「……」

「ユーカーが君に優しいのも厳しいのも……君の気持ちが嬉しいからなんだと思うな。ユーカーは本当にどうでもいい相手にはそんなこともしないと思うよ」

「セレスさんが……？」

「ああ。ユーカーは君を気に入っている。間違いない。君はその自信を持って良いよ、俺が保証する。なんならカーネフェル王の証明書を発行してもいい」

職権乱用かもしれないけど、それで彼の悩みが解決するなら安いものだ。

「……ユーカーはさ、決断を急がせてるのは悪いよな。そんなこと急に言われても解らないと思うよ俺だって」

「はい……」

「だから、そういうことをゆっくり考えながら彼の傍にいればいいんじゃないかな？形式上俺は君の主って事になるけどさ、君が他

に仕えたい人を見つけたっていうのならそれでもいい。騎士の称号を剥奪するってことはないから安心していいよ」
「アルドール様……」
「……それにしても、やっぱり凄いなぁ。あの剣捌き！本職はやっぱり違うな。君もユーカーがこういう風に戦うのを見るのは初めて？」
「は、はい」
「ああいうユーカーをどう思う？」
踊るように戦い続ける二人を、じっと見つめるパルシヴァル。しばらく彼はそうしていた後、そこから目を離せないまま……小さく言葉を零す。
「……僕も、戦ってみたいです。あの人と」
「どうしてそう思う？」
「僕も、あの人をあんな風に笑わせられるような勝負が出来る騎士になれたら素敵だなって思うんです。殺すとか殺さないじゃなくて……そういう次元を越えて、あの二人は笑っている。あのくらい強くなれたら、ランスさんみたいになれたら……僕ともあんな顔をしてくれるんでしょうか」
「そうだな。あの二人は今、磨いた剣の腕をぶつけるのがこの上なく楽しいって顔だ」
「……やっぱりあの人は、殺すために傷つけるためにあんな風に強くなったんじゃないと思います。たぶん最初は……あんな風に」
家のためでもなく国のためでもなく……好敵手とのじゃれ合いだったのだ。皮肉なことに二人ともじゃれ合いと呼べる以上の才があり、じゃれ合いで済ませられる身分ではなく……そのまま騎士になってしまった。誰かのためにという理由を見い出したのは、先王との出会いがあったから。だからそれが失われた今、二人はまだ不安

定。理由がふらふらとしたまま、強さと弱さと危うさだけが残された。
だからユーカーは俺たちみたいになるなと彼に言う。ランスみたいに一人だけにしがみついても、自分のように何にも執着せずふらふらと気の向くままに守っても。どちらもろくなことにはならないからと。

「僕も同じです。セレスさんに色々教えて貰って、それが嬉しくて楽しくて……褒めて貰えるのが何より好きで……セレスさんが驚いてくれるのが好きで……だから僕は、頑張って……」

そのセレス……ユーカーが初めて褒めてくれなくなった。褒めることがパルシヴァルのためにならないと感じ始めたからだろう。今のパルシヴァルは幼く、純粋過ぎる。人はきっかり白か黒ではない。それを認められないくらいに彼は幼い。

「どうして騎士になったか、じゃなくて。騎士になって何をやったか。それじゃあ駄目なんでしょうか？」

パルシヴァルの問いかけは、言葉を変えて俺の胸へと響く。
俺はどうして王になったか。王になって何をやったか。そのどちらで評価されたい？どちらで責められたら苦しい？
どうして王になったか。俺は決して褒められた理由で王になっていない。Aカードだから、イグニスに言われたから。イグニス達と同じ混血を守りたかった。力が欲しかった。それがはじまり。そこから俺は何をした？まだ何もしていない。国のためになるようなことは何も……即位してまもなく都を奪われ落ち延びた、哀れな王だ。今の俺はどちらも評価できるところがない。だからパルシヴァルの言葉は有り難い。それはこれからを評価してくれる可能性。ユーカーも同じだ。

パルシヴァルはユーカーが何故騎士になったかじゃなくて、騎士になったユーカーが自分を助けてくれたことを評価している。だからどうして自分が騎士になるのではなく、これから自分がすることで、自分を認めて欲しいと考える。唯の憧れでは終わらせない。ここから考えて自分なりにこの道を歩いて行くからと、戦う二人をじっと見つめている。

それにつられて俺も二人の試合へ視線を戻す。ランスの数術と剣技に翻弄されることなく、剣技のみでそれと渡り合うユーカー。彼は数術こそ見えないが、数術への反応は過敏。本気で集中すればここまでランスとやり合えるのか。

数術使いと一般人の力量の差は歴然。数術使いの弱点である接近戦すら克服しているランスは最強。そのはずだ。そのランスとここまでやれるユーカーも見事だ。だって彼は唯の人間なんだ。

不意に俺は彼の中に何か探している答えが見つかりそうな気がして、目を凝らして彼を見つめた。道化師と俺が戦う上での重要なヒントがそこにあるのではないか。そんな気がして……

（……でもこうやって見てみると、二人は本当に良くお互いを理解しているんだな）

だからこそ、本当ならかわせないはずの一撃をかわせる、防げる。そこからの攻防。一手先……違う、もっと先までを読んで二人は今を戦っている。剣とは単純で単調な攻撃ではない。まるで、チェスだ。俺は目先のその一撃をどうするか考えるだけで精一杯なのに。

平常心を取り戻してからのランスは、乱れていた攻撃も防御もいつものように堅実で無駄のないものに。ユーカーのそれはいつも以上に自由気ままで、動きを読ませない。俺なんかじゃたぶん今のユーカー相手じゃ一撃だって防げない。それに食らいついていけるのは相手がランスだからこそ。辺りはすっかり日が落ちて薄暗い。その空気こそ、ユーカーの本領発揮というものなのか。彼の動きはい

つも以上にキレがある。常に片目を隠し、昼間は昼寝ばかり……それは彼のこの夜目と関係していた。夜起きているから眠いのか、それが元々夜目だから、昼間が眠いのか。

（ちょっと待てよ……？）

鶏卵の関係は置いておくとして、昼間ユーカーが眠いというのはほぼ間違いないとしよう。それなら表現がおかしい。夜が強い、じゃなくて……本来の強さはこっちが本物ってこと？

俺たちは今まで昼間にフクロウを捕まえて喜んでいたようなものだ。夜の彼を捕まえられるはずもないのに昼間の彼こそ彼なのだと決めつけて。

（昼と夜……？）

何処かで聞いた表現。この胸騒ぎは……嫌なことだ。俺は脳内を漁って、一つの文献を思い出す。その文献と共に思い出された記憶は、あの名も無き村での出来事だ。フローリプとルクリースがトランプで遊んでいた時にジョーカーについて何か言っていなかったか？ジョーカーが二枚ある理由。一枚しか使わない理由。二枚のジョーカー……その二枚の名前を、俺は以前本から拾った記憶がある。

「真昼と真夜中……」

トランプには様々ないわれがある。

例えば……トランプは４スート１３枚。４×１３＝５２枚。それにジョーカーを足して５４枚。その数を足すと１＋２＋３＋４＋５＋６＋７＋８＋９＋１０＋１１＋１２＋１３＝９１×４＝３６４。これにジョーカー２枚を足すと３６６。つまりは一年を表すという説がある。他にも……ジョーカーの一枚が昼をもう一枚が夜を表す

という話もある。

（昼夜、道化師……チェス……“よく、知っている”……）

それは言葉の連想だ。俺は昼と夜から道化師を、道化師から以前あいつが“この神の審判はチェスに似ている”と言っていたことを思い出す。そして道化師は……俺に恨みを持つ以上、“俺をよく知ってる人物だ”とルクリースが言っていた。

ユーカーがランスの攻撃をこうやってかわせるのは、ユーカーがランスを知っているから。ランスがまだ戸惑っていて押されがちなのは、夜のユーカーをランスがまだよくわかっていないから。

俺と道化師の関係もたぶん同じだ。道化師はユーカーと同じで対戦相手を深く理解している。対する俺とランスはそれを知らない。だからユーカーより強いはずのランスが劣勢になったりもする。

俺が道化師に勝つためのヒント……それはランスの中にあるんだ。カードとしてはランスの方が不利。それでもランスはここでユーカーに勝たなければならない。俺の代わりに戦う彼は、俺が許すとか許さないではなく、それでも負けることは許されないのだ。本人がそれを許せない以上、絶対に。これは遊びだろとユーカーが語りかけても、それでもランスはそれでも仕事だと言い張るだろう。互いに相容れない理由がある。だから戦う。

それでもユーカーは負かされるのを待っている。どうしてユーカーはそんなことをするんだ？ランスが好きだから？ランスを勝たせたいから？違う、そうじゃない。

ユーカーはランスとトリシュの決闘に割り込んだ。下手したら死んでいた。ユーカーは出会った頃は死にたくないって言っていたのに、ランスに殺されることについては何も言わない。それどころかそうなりそうな事を何度かしている。

（ユーカーは、ランスを殺したくない。だから……？）

殺すくらいなら殺されたい。他の人を殺させるくらいなら殺されてやる。そう考えたなら彼の行動の意味も多少は理解が出来る。

ユーカーが守りたいのは誉れ高いランスの騎士としての名誉と、ランス自身だ。だからランスを庇うし、ランス自身がその名誉を汚すような振る舞いを仕掛けた時は必死になって止めるのだ。

相手を負かすと言うことは、自らが相手のタブーになること。思考の駒を動かすことが出来ない程に、追い詰めること。殺されないと言うことは、相手に殺されないだけの理由を手に入れる必要がある。俺が道化師相手にそれを教えることはたぶん無理だ。だから俺は相手からそれを教えられることがあってはならない。そうだ……それさえなければ俺が負けることはない。負けではないのだ、まだ。ルクリースが死んでも、フローリプが死んでも……悔しいし悲しいけれど、まだ負けではない。俺も道化師も互いに生きている以上これは引き分け。

ルール上俺と道化師は互いに互いを殺せるカード。それでもジョーカーとエースの幸福値の差は歴然。俺が道化師と引き分けにするには他のカードを犠牲にしなければならない。そうやって俺は爪を研ぎ、牙を研ぎ……道化師が幸福値をすり減らして、ここまで落ちてくるのを待つしかない。

ランスも言った。人を人として思ってはいいと。俺が蟻と思うべき相手はあの……道化師唯一人。あれが誰であっても俺は、彼か彼女をこの手で殺さなければならない。

そのための王だ。そのために、ランス達騎士に手を汚させる罪の温床。道化師を殺さなければ、この審判は道化師の一人勝ちだ。他のすべてのカードの願いも思いも無に帰る。そこに至るまで失われた命すべてが無意味。そんなこと、あってはならない。

（でもそのために……）

俺は後何人の死を見なければならないのだろう。道化師を殺すまで、俺は……俺の傍から後何人奪われるのだろう？失われるのだろう？ユーカーもランスも、トリシュもパルシヴァルも……イグニスも。みんないなくなってしまう？

せめて俺が強ければ。そう思って剣を教えて貰ったのに……。ランスとユーカーの試合は心が躍るのに、そっとトリオンフィに手を伸ばせばその手が震える。それは、そんな自分に小さく嘆息した時だ。

「夕飯ですわよランス様、それとお兄様」

突然響いた明るい声。その直後にばしゃんと言う音。二人の騎士の動きが止まる。

「え、エレインさん？」

見れば屋敷の上の階の窓から少女が顔を覗かせている。その手には空になった水桶が。

勝負に文字通り水を差されたランスとユーカーの表情は、それでもまだ戦闘意欲が冷めないようで、夕飯抜きでもとことん目の前の相手とやり合いたいと言っている。それがますます気に入らないと少女は眉をつり上げる。

「ご飯ですっ！！」

「っ！？」

エレインは思い切り水桶を眼下……もといユーカーの頭を目掛けて叩き落とす。ランスに気を取られていたユーカーはその攻撃をもろに食らった。

「ゆ、ユーカー！？」

ふらつき倒れるユーカーに、ランスが駆け寄りそれに遅れて俺とパルシヴァル。見ればユーカーは完全に伸びている。まさかあの勝負がこんな風に終わらせられるだなんて。

「ユーカーってコートカードなのに……」

どうしてこんなに運が悪いんだろう？カードの力を頼らない力に長けているんだろうか？

12：Est autem fides credere quod nond

「痛ぅ……」

頭がガンガン、クラクラする。どうしてそんなことになったのか。ユーカーは重い頭でそれを思い出しながら、義妹である少女を恨めしく思う。

（エレインめ……）

桶ってあんなに重かったか？中に石でも積めて落とされたような痛さだったぞあれは。彼女を呪い、痛む頭を押さえながらゆっくり身を起こせば……寝台に寝かせられていることに気がついた。辺りを見回せば視界に飛び込むものがある。

「何してんだお前ら……？」

傍には今朝のようにくっついているパルシヴァル。ちょっと離れたところの椅子に座って本を読んでいるのがアルドール。夏だってのに何この人口密度。暑い。暑苦しい。

「あ、起きたんだユーカー」

「つかなんでここにいるんだよ。こいつはともかく」

「ユーカーってほんとパルシヴァルに優しいな」

「そりゃあまぁ……こいつはまだガキだし、普通はランスみてーに大人げねぇこと出来ねぇだろうが」

「ちなみにここだけの話、俺も年下なんだけど」

そうぼやいたアルドール。言われてみれば確かにそうだ。それで

も何をパルシヴァルと同列の扱いを要求しているんだこいつは。馬鹿か？阿呆か？変態か？大体どうしてそんな義理何処にもないはず。

「馬鹿かお前？なんで俺がてめぇなんかにそんな薄気味悪いことしねぇといけねぇんだっての。つぅか普通にここだけの話でも何でもねぇだろ、余裕でんなこと知ってる」

「しかし狡いぞセレス君。君は確かにこの子ばかりを可愛がりすぎている。少しは叔父さんにも優しくしてみてしかるべきだろう？ん？」

「ぎぃゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

突然耳元で聞こえた薄ら寒く生理的嫌悪感を醸し出す言葉の羅列に、俺は寝台から転がり落ちた。今日は全然見かけないと思ったら何処で何をしていたんだあの男は！

おそるおそる目を開ければ……もうこいつ妖怪じゃね？人間止めてね？ランスもこれと血が繋がってると思うと嫌だよな。俺でも嫌だよ。そんな思いを禁じ得ない物体がいた。

マットレスに身体を隠し、勝手に切り抜き首の穴を開ける。そこから顔を出し、羽根枕の羽根を半分取り出して、枕カバーを頭に被る。気絶していたとはいえ、こんな者に気付かずずっと添い寝をされていたかと思うと首を吊りたくなる。ていうかアルドールもパルシヴァルも気付いとけこんなもんっ！！ていうかもう嫌だ、何この人生。俺コートカードじゃねぇの？何でリアルラックこんなに最悪なんだ。毎日毎日ろくなことがねぇ。

「何やってんだ普通に働け馬鹿領主っ！この大変な時にあんたって奴はっ！！」

「落ち込んでいる暇はないぞセレス君！今すぐに叔父さんの欲求もとい要求を受け入れてくれないと君の可愛い弟分に何をしてくれ

ようか」
「そいつ汚したら本気でぶっ殺すぞ？」
「っていうかそんなところで何してたんですか……？」
「おお、これはこれはアルドール様。いえ、何息子があまりに冷たいのでね、セレス君でも苛め……可愛がって癒されようかと」
「勝手に癒されんな！！こっちの不快指数はパねぇってのにっ！！」
「う、うわぁ……そ、そうなんですか」

本気で気付いていなかったらしいアルドール。流石のあいつも若干軽く引いている。それもそうか。妖怪マットレスはいつの間にか妖怪シーツに進化だか退化だかしていて、寝台に寝転がっていたパルシヴァルをその白い布で絡め取って抱き寄せている。あれは誰がどこからどう見ても犯罪者だ。当然俺もそう思う。即刻今すぐすぐさま死刑か宮刑か島流しにすべきじゃね？割と本気でそう思う。
寝起きの身体に鞭打って、俺は愛剣セレスタイトを構えると、俺の殺気に飛び起きたらしいパルシヴァル。流石は俺の弟子。危機管理能力はあるようだ。

「あ、セレスさん！！」

あ、無いようだ。あったらそんな笑顔ここで浮かべるはずがない。しかし奴はそう言いながらするっとヴァンウィックの拘束を解除。

（え？……）

あいつは腐ってもランスの父親。この国でも有数の名騎士だぞ？お遊びとはいえその拘束をものの数秒で解除するってどういう事？
よくよく見ればシーツのあちこちに線が引いてある。俺がそれに気付いた後に、はらはらと細切れになったそれが宙に舞い、床へと

落ちる。油断していたとはいえ、今の攻撃はかなりの速度だ。気を取られた所為もあるが、全く見えなかった。気がつかなかった。
俺に駆け寄ってくるパルシヴァルが剣を鞘に収めるところを目撃し、今のがこいつの剣技だったんだなと確信したまで。一日足らずで本当に自分の技を編み出すとは、本当にこいつは天井知らず。っていうか俺に見せた技と全然別物じゃねぇか。一日で一体いくつ生み出したんだってんだ。

「無事で良かったですセレスさん、どこも痛くないですか？」
「お、おう……」

あくまでパルシヴァルは俺の身を案じてくれている。その目に宿る光は何処までも純粋な色。それでもだ。ここまで教え子が天井知らずに優秀だと、劣等感が酷い。俺の教え方が上手いからとかパルシヴァルは言ってくれたが、そんなレベルじゃないだろう。俺が涙目になっていると、廊下からノック音。ランス……じゃねぇな。叩き方があいつと違う。ていうかただ事じゃない。この激しいノック音は。

「アルドール様！此方ですか！？」
「トリシュ？」

室内に飛び込んで来たのは、今日一日領内の仕事を押しつけられていたトリシュその人。俺の視線に気付くと一瞬何か言いたげに俺を見たが、すぐに仕事を思い出しアルドールへの報告を急ぐ。

「北に動きがありました！」
「何だって！？」

トリシュの言葉にアルドールは青ざめる。そして周りを見回して、

神子とランス……その二人がどちらもここに居ないことを思い出し何故か俺に縋るような視線を送る。

「……湖城から抜け出す一派がありまして、彼らは此方に向かってくるわけでもなく、更に北上、いえ……北西の方角へ向かっていきました」

「つまり湖城の警備が手薄になったってことか……攻めるなら今がチャンスってことだよな」

「いいえアルドール様、一概にそうとは言えません。最悪これが此方を誘き寄せるための罠ということもあります」

要するに、こっちもこの領地の守りをゼロにするってわけにはいかねぇってことだな。それは結局有利なんだか有利じゃないんだか。せっかく敵に斬り込むチャンスだってのに、全力で攻められねぇってのはこっちとしても不完全燃焼って感じだ。

「とりあえずこのままうだうだ話してるのは時間の無駄だ。さっさとランスと神子を連れて来い」

「わ、解った！イグニスはたぶん部屋にいると思うから……」

ばたばたと慌ただしく部屋から出て行くアルドール。それに続く者はない。

「……？どしたよ？さっさとランスの馬鹿連れて来いよトリシュ」

「それが……ここに来る前に彼に会いまして、先にこのことを伝えると……自分が神子様を呼びに行くと言っていたのですが」

まだここに彼らがいないのはおかしい。そんな顔つきになる。

「まさか、あいつら……」
「トリシュっ！ユーカー！」

俺の不安を煽るよう、出かけた時以上に慌ただしく戻ってくるアルドール。

「イグニスがいないんだ！どうしよう……もしかして道化師に攫われたとか」
「あー……それはねぇよ」

確かに神子は女だが、そんなヒロイン属性は持ち合わせちゃいない。あんな腹黒暗黒ドス黒神子にそんな属性俺が認めねぇ。しかし本気で心配してるらしい、この馬鹿王の目にはあいつがどう映ってんだか俺にはよくわからない。

「ったく……あの馬鹿」

にしても王が王なら部下も部下だ。

「何で俺を殴るんだよ」
「お前の馬鹿があいつに移ったからに決まってんだろ」

溜息ながら自然と手が出た俺に向かって、アルドールが不満そうに此方を見上げる。自慢の従兄に馬鹿菌を移された俺からすれば何が不満なんだと言いたいが、まぁ満足そうに見上げられるよりは幾らかマシだ。

「……ランスの馬鹿のことだ。多分一人で北に向かったと思う」
「ひ、一人で！？」

「恐らくそれに気付いた神子がそれを追ったって所だろう。幾らあいつが強くても、今のあいつはカードだ。カードの相性とか弱さはあいつの強さでカバー出来ねぇもんがある……幸い神子はコートカードだ。戦力バランスを考えたんだろう」

戦力バランス。神子があっちに行った以上、それを考えるならここを守るのは俺の役目だ。北の城を手に入れたところで、このアロンダイト領を奪われりゃ意味がねぇ。籠城戦を強いられるのがあいつらじゃなくて俺達ってことになる。

でもそれを考えたのはあいつじゃなくて神子の方。俺が本当に殴りたいのは叔父の方だ。ランスの馬鹿は、父親の汚名により汚された自分の名誉のために暴走している。そのために正しさとか正義とか、そういうもんに縛り付けられている。

自分の強さを過信しているとか、そんな風には言わない。事実、あいつは強い。それでもだからって無茶をするのは違うだろう。人に頼ることにあいつは慣れていないんだ。無駄に強いから、プライドがそれを許さない。

第一、今日は久々に俺に負けたりしたわけだ。プライドが参ってやがる。俺が負けていれば、あいつより弱い俺を頼ることが出来ただろうが、あいつに一回でも勝った俺をあいつは頼れない。あいつはそういう面倒臭い人間だ。パルシヴァルのためとはいえ、俺は本気を出すべきじゃなかった。ましてや夜に戦う必要はなかった。

（そうだ……夜）

あいつは俺ほど卑怯な戦いに慣れていない。騎士道を重んじ基本は正々堂々戦い勝利してきた奴だ。だから夜の戦いはあいつに向いていない。

「ユーカー……？」

不意に俺の顔を覗き込むアルドール。この馬鹿は馬鹿だが妙なところで聡い。ボロを出す前に始末する必要がある。

「うるせぇうるせーうるせぇ五月蠅ぇっ！！こっちは寝起きだぞ怪我人だぞやってられるか！俺は疲れた！俺は眠ぃっ！よって俺はこの件では絶対働かねぇっ！ランスの馬鹿のフォローなんかやってられるか」

いいからお前ら出てけ俺は二度寝するっ！そう怒鳴り散らして全員廊下へを追い出し鍵を閉め……ついでに棚を扉の前まで移動させる。

ここまでやれば、バレないだろう。しばらくは。……要は俺が居ると思わせられれば良い。北部での俺の名はそれだけで守りだ。俺がここにいると知れば直接俺を知らない敵はここを攻めたりしないだろう。

カードではないとはいえ、あの変態叔父だって騎士だ。パルシヴァルの件は油断しただけだろう、能力的には現在の俺やランスなんかよりまだまだむかつくことにあの叔父は強い。ここを守るのはそもそもあの男の役目であり義務だ。それをほっぽり出したとしたらそれはあいつの責任だ。

「……悪ぃな」

俺はあいつみたいに立派な騎士じゃない。ここに残るのがベストだ。解っていても、それが出来ない。領地のためになんか、俺は戦えねぇ。

俺が戦う理由は今となってはもう一つ。仕える俺の王も、守るべき婦人も居ない。俺が戦うのは俺の友人、ランスのためだけだ。

「来いっ！リンガーレット！」

俺が愛馬の名を呼ぶと、蹄の音が近づいて……窓の下に俺の馬が現れる。俺の格好を見てこの馬は俺を小馬鹿にしたように笑う。仕方ないだろこればっかりは。変装でもしないとここを抜け出す意味がない。

基本こいつは暴れ馬だから、あんまり束縛するとストレスで凶暴化する。都にいる時はそれで大分俺への当てつけが酷かったが、ここへ来てから放し飼いにしてるのが効を成した。いつもより機嫌が良さそうだし、第一繋いでたらこいつがいなけりゃ俺の不在がもろバレだった。

「思い切り飛ばしてくれ！ランスの馬鹿に追い着くくれぇに！」

＊

「ユーカー……」

寝起きで機嫌が悪かったのか、それともやっぱりエレインに攻撃された痛みがまだ酷かったのか、或いはあの叔父の行動に何もかもが嫌になって無気力になってしまったのか。

アルドールは原因を考えてみたが、正解なんて解りそうにないので考えるのを適当なところで止めた。問題はそこじゃない。ユーカーの協力を得られないところだ。

（困ったな……）

イグニスがいない。そうなった時に一番距離を感じず頼ることが出来る相手はユーカーだ。

他のみんなとはまだ出会って日が浅い。人見知りというわけでは

ないが、物凄く心が落ち着くわけでもない。例えそれが見ていて和むパルシヴァルであっても、気を使ってしまう。知らないことが多いから、うっかり触れてはならないことに触れてしまわないかが怖いのだ。ユーカーにはそれがない。

シャラット領での一件で、彼の心を垣間見た。彼の弱さも見せられた。それで彼のことを深く知ったつもりになっている。だから俺としては個人的に親しみを感じてしまっているのだ。彼がどうかは知らないけれど。

（どうすればいいんだろう……）

イグニスがいないと何をすればいいのか解らない。北の湖城に向かったというのならそれを追うべき。ランスとイグニスだけでは心配だ。それでもこの場所の守りをどうするべきか。それも考えなければならない。

俺が挙動不審に陥ると、横でトリシュが心配そうに俺を見る。パルシヴァルは夜中と言うこともあって少し眠そうだ。

「どうかなさったんですか？」

「エレインさん！」

廊下に屯する俺達に、ランスの婚約者の少女が駆け寄ってくる。屋敷の見回りをしていたのだろう。片手に鍵の束を持っていた。

「いや、それが……」

ランスがいなくなったなんて言ったらこの少女はどんなに驚くだろう。そう思い言い淀む俺に彼女は意外なことを言う。

「ランス様ならお出かけになられましたけれど、ランス様にご用

でした？」
「し、知ってたんですか！？」
「知るも何も、ランス様の愛馬が消えていましたもの」
けろりとしたその返答に、驚いたのは俺の方。
「ランス様が何も言わずにここから消えてしまうのは何もこれが初めてではありませんわ。私はその留守を任されているのですから、鍵の管理にも身が入るというものです。それが、妻の役目ですから」
そう語り、俺達に一礼。窓や扉の鍵をひとつひとつ彼女は確認していく。
「あら？お義兄様の部屋も鍵が……？まだ寝てらっしゃるんですの？」
「え、ええと」
よくもまぁ寝ると形容できたものだ。昏倒させたのはこの子自身だろうに。
「……ええ。気分が優れない様子で、しばらくそっとしていて欲しいそうです」
俺の代わりに答えてくれたのはトリシュ。何か言おうとしたパルシヴァルの口をさっと両手で覆ったのはヴァンウィック。どうしてか、普段の言動の所為で犯罪者じみて見える。
「あの……彼が何か？」
「これは失礼」

俺が何事かとランスの父親を見上げれば、彼はエレインが階下に降りていくのを確認し、そしてパルシヴァルから手を放す。余程怖い思いをしたのだろう。パルシヴァルは涙目で俺の背中に隠れてくる。

「あの小さなレディには余り余計なことを言わない方が良い。彼女は暴走気味な所がある。彼女がセレス君に何かしようものなら弟と息子に私も少々顔向け出来なくなるのでね」

「さて、たまには私も領主らしいことをしようか。留守番は任せられましたよアルドール様」

「え？」

「あの馬鹿息子だけで北の城が落とせるとは思えない。今のあれも、暴走しているだけです」

そういう意味ではお似合いの二人なのだがとヴァンウィックは肩をすくめて苦笑した。そんな彼を見て、ランスのいない所では、やけに優しい目をして彼のことを語るんだな。そんなことを思う俺を、ヴァンウィックは品定めをするようじっと見つめる。そこに先程までの優しさはない。

「俺に似ず、それでいて俺に似て馬鹿な息子です。アルドール様、どうかあの馬鹿を諌めてやってください。あれは騎士であり騎士ではない。あれは剣とは何かを理解していない」

「あの……それってどういう……」

「貴方があれの主でありたいと願うのなら、どうか貴方はもっと尊大であって下さいアルドール様」

「……え？」

「命令を待たず、感情で走るような者は騎士とは呼べません。今日のあれは実にあれらしくない」

いつも王のために生きてきた、ランスが王である俺を置いて行動した。俺の意見も聞かずにだ。それは本来彼らしくないことなのだとその父親から告げられている。

（それは……確かに）

上位カードが一人で行動すること。それがどんなに危険なことか解らない彼ではあるまい。ましてや向こうは敵陣真っ直中。死にに行くようなものだ。幸いイグニスが傍にいるなら何かしらの目的があってのことだとは思うけれど、イグニスが本当に彼と一緒だという保証もない。

（大体イグニスだって……）

イグニスはコートカードだけど、女の子だ。数術使いで神子とはいえ…。

俺が思い出すのはシャラット領で傷ついた彼女の姿だ。俺より彼女が強いのは知っている。心配するなんて烏滸がましい。だけど……今のイグニスはエルス＝ザインの使役虫に刺されているし、本調子ではないはずだ。彼女に何かあったら、そう思うと不安に駆られる。

これは長らくイグニスとギメルが世界の中心だった俺の本能のようなものだ。いつも何時だって心配で仕方ない。

それでも脳裏に浮かぶのは彼女だけじゃない。今日一日見た、ランスのいろいろな顔。俺が貰った言葉。それが俺の脳裏を駆けめぐる。

ランスがこんな行動を取ったのは、俺が頼りないから？俺を危険に遭わせないため？俺が戦えないから？だから、全部自分が解決しようとしてしまったのか？

「ランスが……変わったって言いたいんですか？」
「ええ。それは貴方のおかげであり、貴方の所為だとも言えるでしょう」

それは良くもあり、悪くもあることだと俺は今咎められている。しかし、俺の所為かと思ったところにお前の所為だと言われた俺は、他人の目にも解る程に衝撃を受けた。それを見て言葉が過ぎたと、ヴァンウィックは苦笑し俺へと軽く謝罪する。

「……おっと、これは無礼を失礼します」
「いえ……別に俺は、そういうのは……」

気にしていないし責めるつもりはない。そう口にする俺に、彼は残念そうに息を吐く。その目はとても俺を王とは認めてくれてはいなかった。

「駄目ですよアルドール様。ここで私を無礼者と罵る位でなければ貴方に王は務まらない」
「……俺は、そういう風な王になりたいわけじゃない」
「でなければ家臣に民に貴方は軽んじられます。先王様がその典型的な例です」

ランスがユーカーが慕った王。その人にこの男も仕えたはずなのに、どうしてそんなことを言うのだろう？俺にはよくわからない。ランス以上にこの父親はが何を考えているのかわからない。

「例え善で正義であろうとも、王はそれで良い国を作れない。威厳のない王に国は守れませんよアルドール様。それでは誰も貴方については来ない」

「っ……」

それなのに、その言葉は俺を抉る。その言葉は嫌なくらい正論だ。俺は視線を彷徨わせる。いない。イグニスが隣にいない。ランスもいない。ユーカーも部屋から出て来ない。ルクリースが、もういない。フローリプももういない。姉さんだって死んでしまった。こんな俺が果たして王と呼べるのか？

「師匠、流石にそれは無礼です」

「トリシュ……」

俯いた俺を庇うように、ヴァンウィックの視線から遮るように立ったのはトリシュ。長い綺麗な金髪が、俺の視界に広がった。

「無礼を承知で言わせて貰えば、アルドール様。貴方には王族としての威厳がない」

「うっ……」

「そして特別美しいわけでもない。余りに貴方は平均止まり」

「ぐ……っ」

「端的に言うとカリスマの欠片もない。」

「……」

「それでも貴方に付いてくる者がいる。それは何故だとお思いで？」

「え……？」

グサグサと胸に刺さる正論の刃に打ちのめされていたが、最後の一文はこれまでと違うものだった。

「貴方は自分に何も無いと思っているようだが、実はそうでもないんだろう」

「そんなんじゃ、ありません」

それは俺がエースだから。俺が最上位カードに選ばれた人間だからこその幸福だ。俺が優れた人材に出会えるのはイグニスの采配と、俺のその運によるもの。もっとも俺の幸運は、他の所で働いた試しがない。他は全てが空回り。今となっては最低幸福値カードなのだから仕方ないと言えば仕方がないのか。

この運だって、俺を突き落とすための幸運だ。だって嫌な奴に出会って別れるよりも、良い奴に出会ってその人を失う、死なせてしまう方が俺にとっては何倍も苦しいことだろう。

俺の幸運は、そのための幸運なんだ。イグニスとギメルと出会ったのも、一度二人を失ったのも。そういうことなんだろう、きっと。この騎士はそういうことまで知らないから、そんな見方が出来るだけ。俺を正しく理解なんかしていない。

「貴方は多くを持たず、愚かで幼い。それが貴方の利点でしょう」

「すみません、全く褒められてる気がしません」

「一応褒めさせていただいたつもりなのですがね」

中年騎士が苦笑する。

「……確かにある意味貴方に王の才はある。貴方は人の庇護を引き出すのが上手い。貴方は弱く、何も出来ず、何も持たないからこそ……人は貴方の力になりたいと思うでしょう。近しい人間ならば貴方の良さを理解も出来る、だからこそ」

俺には近しい人の協力を仰ぐことは出来る。それでも、民を従えるまでには至らない。そこまでのカリスマが俺にはない。そう言われている。

だから俺にはみんなが必要で、その力を持つイグニスの、ランス

の加護が無ければ何も出来ず何にも至れない。何時も人に守られ、人を頼ってばかりの情けない俺。俺には何も出来ない。
ランスの言葉を思い出す。俺はもう剣を握らなくて良い。人を斬らなくて良いと言ってくれた。倒すべきは道化師。それ以外の戦いは俺には必要ない。守ってくれると言ってくれた。言わせてしまった。

「アルドール様。貴方の青はあの海のように青く澄んでいらっしゃる。その輝きは貴方が幼いからに他ならない。貴方のその幼い理想に惹かれる者も居るでしょう。無くした夢を希望を託す者も居るでしょう」

彼の言葉が指しているのが、なんとなくイグニスで、ランスなんだとぼんやり思う。

「しかしアルドール様。腐った大人としての意見を言わせていただけば、世の中には貴方のその目が勘に障るような種類の人間もいるんですよ。貴方の青は、青過ぎる」

いつか人は誰でも大人になる。変わってしまう。夢も理想も移ろい消える。希望も姿を変えるだろう。その時になって取り残されるのは貴方だけなのだと、この騎士は予言するよう言葉を紡ぐ。
その時俺の傍には本当の意味で誰もいなくなる。正しさで優しさで哀れみで守れるものはない。はったり……虚勢のプライド。それでもいい。嘘を吐いて誰より王らしい王を振る舞え。それが守るということだ。一度王を失った騎士が俺に言う。

「俺には貴方の言っていることがわかりません。どうして俺がわざわざランスに嫌われるようなことをしないといけないんですか？」
「……カーネフェリアというのはどうしてこう、お人好しばかり

なのだか」
「はい……？」
俺の言葉にヴァンウィックは少し眼を細めて笑う。まるで遠くを見るように、彼は俺を見ていた。
「いつぞやに、私の主も今のアルドール様と同じことを口にしたんだったかでしてね」
「……アルト王が？」
「ここだけの話、アルドール様。私は過去に一度私の主を裏切ったことがありましてね」
「貴方が……王を？」
それは以前も少しは耳にした。あの時はそれが本気かどうか解らなかったけれど……
「むしろ一度だけとういうのは少ないと驚きですか？これは手厳しい……というのは冗談で」
その冗談というのが裏切ったという言葉ではないのは明らかだ。
「私はその行為と結果を後悔したことはありませんが、その裏切りを悔やまない日はなかった。私の主はまったく腹立たしいまでに、憎むべき所がなく、憎めないことを私はとても憎んでいた。いっそ彼がもっと悪い人間だったら、私は私を正当化することも出来たでしょうにと」
「……そうですか」
この男が言いたいことが解った。この人は本当にだらしない男だけれど、確かにランスの父親なんだ。

俺がそういう風になれば同じようにランスが苦しむ日は来ない。いつまでも正しいままで居られる、彼が。だけど俺までそういうものを目指すなら、正しくいられなくなるのは彼の方なのかも知れない。

「でも、俺なんか欠点だらけだと思うんですけど」

「謙遜ではなく本気でそう思えるような貴方とでは、あれも貴方も苦労するでしょうな。アルドール様、貴方はもう少しセレス君辺りの不貞不貞しさを見習うべきだ。あれはあれで可愛いものだろう？うちの馬鹿息子とも打ち解けやすくなりますぞ？」

「あれはユーカーだからですよ、俺が真似てもそれは別の話です」

否定する俺の姿に、中年騎士は小さく笑う。その目は一瞬ユーカーの部屋の方を見て、もう一度笑った。

「あの……何か？」

「いや、何。それでどうするおつもりですかアルドール様？」

「俺は……俺も北の城へ向かいます。ランスとイグニスを放って置けない」

俺の言葉に、ユーカーの部屋と俺を交互に見てパルシヴァルが口を開いた。

「王様、僕も行きます」

「ユーカーの傍にいなくていいの？」

この子ならセレスさんの傍に残りますとか言いそうなのに。ちょっと驚いた。

「君も行きなさい。引き籠もりの怠け姫様は、働き者の男が好み

のようだから」
「そ、そうですか？でも……」
ヴァンウィックにけしかけられるトリシュ。彼はユーカーとそれからこの領地が心配のようで踏ん切りが付かない。そんな様子の彼に、中年騎士は小さく溜息。
「パルシヴァル君とやら、言ってあげなさい」
「良いんですか？」
「何かあったんですか？」
突然通じ合ったようなことを言う中年少年コンビに、俺とトリシュは首を傾げる。
「セレスさん、もうあの部屋にいませんよ」
平然と、それでも確かな確信をもった、パルシヴァルの言葉が響く。

＊

北の湖城。その湖の中に……母さんの死体が眠っている。
トリシュから北の動きを聞いた後、俺は気がつけば馬を走らせていた。
ランスが我に返ったのはその城が視覚出来るほど近くに来てからだ。湖から少し離れた森の中、月下に佇むその城は……冷たい夜の空気を纏うように、物静か。寂れ捨てられた城は、物悲しい雰囲気を漂わせる。その空気が記憶の中の母に重なるようで、ふらふらと……歩き出しそうになった背中に落とされる声がある。

「こんな夜更けにどちらまでお出かけですか？ランス様」
「……っ！？イグニス様！？」

誰にも言わずに出てきたというのに、振り返った先には息一つ乱れのない涼しげな神子の姿がある。木々の影から僅かに覗く、月明かりに照らされる彼の琥珀の瞳は……、普段とは違った印象を此方に与える。神子は穏やかに笑んでいるのに、何処か突き放すような冷たい光をそこに宿している……そんな風に感じるからか。

「まさかお一人であの城を攻略できるとでも？」
「……ええ」

自惚れではない。冷静に考えて、それが一番効率的だと思った。そう言い返そうとする俺を、神子様は冷たく見つめる。それは俺を哀れむようにさえ見えた。その哀れみの理由がわからない俺をも彼は哀れむようで、無礼だからそんなことをは口には出せないが……俺は今彼に馬鹿にされている気もしていた。

「そうですね。この神の審判が始まる前ならそれも叶ったかも知れません。ですが今はこれまで貴方が暮らしてきた世界ではない。確立や勝率、そんな数字が弄られた今は、貴方の強さも歪みます」

いや、責められているようですらあった。何故“彼”を頼らないのかと。

「認めたくない気持ちは解りますよ。僕だって彼を認めたいわけじゃない」

それでもユーカーはコートカードだ。神子様はそれを言う。

「僕のように残り少ないカードと違う。彼はまだ、生命力に溢れています」

まだ。その言い方が気に入らなかった。この人はあいつの死を計算の内に入れている。もう決められたことだと言うような、その予言めいた響きが嫌だった。

俺があいつを頼れない理由は二つ。一つは単純に俺の心が。二つめは神子様の言うそれだ。

「俺は極力あいつに頼りたくないんです。あいつの命を磨り減らす、食い潰すような真似は……なるべくならしたくない」

「それで大人しくしていてくれるなら良いんですけどね。彼は彼の馬と同じですよ。誰にも飼い慣らせません」

だから上手く使ってやらなければならないのだと、彼は言うけれど……俺はそんな風に、あいつを道具には思えない。矛盾しているのは解る。誰よりあいつをある意味で道具扱いしているのは俺なのに。

「僕としては放し飼いの方が、彼への負担が増すと思います。そして彼は貴方の思惑から外れて動いてしまうでしょう」

躾が出来ないならしっかり縛り付けてでも言うことを聞かせろ。その言葉にはそんな暴力的な響きがあった。

「でないとこんなことになります」

「……はい？」

神子様が示した方向から、近づいてくる蹄の音。暴れ馬の跳躍、それが俺達の頭上を越えて立ち塞がるよう向き直る。

「ゆ、……」

振り落とされないよう馬を操るのに苦心したのだろう。心底疲れたように苛ついているユーカーというかセレスがそこにいた。

「……ったく、面倒かけやがって」

「来て、くれたのか……？」

お前を危険に晒したくない。そんな聞こえの良い建前。内心は半分以上はお前への対抗心からお前を頼れない。そんな俺のところまで、どうしてお前は駆けつける？

「数術も使えない癖に、ぴたりと此方の居場所を割り出す辺り、気持ちが悪いですよねセレスタイン卿は」

「ちょ、おま……人の勘の良さをそういう風に言うな！お前の発想の方が気持ち悪いわクソ神子っ！」

もはや息をするようにユーカーをからかう神子様。仲が良いのやら悪いのやら。本人達は悪いと思っているようだけど、端から見れば逆に息が合っているように見える辺りどうなのだろう？それは俺も本人達も望むところではないだろうが。

「しかし何故またそんな格好をしているんだ？癖になったのか？」

「断じて違うっ！！変装しないと俺が抜け出して来たのバレんだろうが！」

暴れ馬に乗って道を急ぐ婦人なんかが居たら余計目立つと思う。幸い今が夜だからそんなこともなかっただろうが。

「……ったく、スカートで馬に乗るの結構大変なんだからな。おまけに飛ばしたせいですげぇ気持ち悪いし身体痛ぇ」

馬鹿だこの子。馬鹿可愛い。努力と頑張りの方向性がよくわからない辺りが俺のツボだ。思わず吹き出す俺を、真正面から睨み付けてくる従弟。それでもすぐに目を逸らす。その意味が分からない俺に、ユーカーが小さく呟いた。

「……怒らないのか？余計なことって」

「どういう意味だ？」

「お前の領地離れて……」

「ああ……」

カードのことを考えれば、国のことを考えれば確かにそうだ。けれど今神子様に言われたことと俺自身の引け目があった。だから責められない。むしろ、責められた時の俺の方が俺は俺が異常だったように思う。

言うことを聞かせる。俺が本当にそれを願えば多分こいつは聞いてくれるんだろう。それでもそうすることを俺が嫌がるから、だからこいつは勝手にここまで来てしまった。結局は全て俺の所為なんだと結論づけられる。それでこいつを俺が責めて詰るというのなら、俺は何処まで最低なのだろう？

「俺が怒るとすれば、お前にそんな風に思われている俺自身だな」

「……そっか」

少しほっとしたように笑うユーカー。俺は確かにこいつを追い詰めていたのかもしれない。

「俺とイグニス様の幸福値を心配して来てくれたんだろう？なら

俺にお前を責める理由はないよ、ありがとう」
「別に神子のためではないからな」
「ええ。でしょうから僕は感謝はしませんよ」
「なるほど、俺のためか。ありがとう」
「それはそうなんだけどな、わざわざ取り出して言われるとなんか腹立つ」
「お前は時々理不尽だな」
「お前ほどでもねぇよ」
「それもそうだな」
「自覚あったのかよ」
「いや、言ってみただけだ」
「質悪過ぎる」
「じゃれてらっしゃる所失礼ですが、そろそろ頃合いです。行きましょう」
「失礼しました、つい癖で」
「っていうか別にじゃれてねぇっ！……って、え？おい？神子、そっちじゃねぇだろ？」

歩き出した神子様に、疑問符を投げかけるユーカー。確かに彼が向かおうとしているのは湖城のそれとは違っている。

「城の攻略はアルドール達に任せます。僕らには他の仕事があるんですよ」

そのためにも行かなければならない場所があると彼は言う。

「ですがイグニス様、それではあの城は放置……そういうことですか？」
「いいえ、あの城は落とします。そのためにアルドールには囮になって貰います」

「はぁ！？」
「コートカード二枚の守護が外れた彼は良い餌です。必ず食い付いてくる奴が居る。ペイジとはいえコートカードのパルシヴァル君もいます。まぁ最悪の事態は避けられるでしょう」
「お前……それでもあいつの親友か？」
あっさり友人を囮に使うような神子様に、憤る風なユーカー。お前には関係のないことだろうに、結局この男は何も見捨てられないのだ。本当は俺などより余程騎士らしいのはこの男だ。
「違いますよ」
それに答える神子様の冷たい声。それが何処か自分に似ているトーン。ある種の薄情さを感じる。
「確かに僕はアルドールの友人ではありますが、それ以前に彼はこのカーネフェルの王であり僕はシャトランジアの神子です。僕は彼に仕え彼を支え助言し彼の力になる代わりに、彼にこの地と平和を守る義務を植え付けました。僕らの関係はそういう協力者であり、そこに私情を挟む余地はありません」
年下に言い負かされる。もっともらしい言葉に服従を強いられる。それでも負かされても、心まで納得は出来ない。神子様を睨み付けるユーカーの目は怒りに燃えている。
「あの馬鹿は、いなくなったお前のことを本当に心配してたんだぜ？」
「僕がそれを強いたわけではありませんし、そんなことで僕が責められるいわれはありません」

人間らしいユーカーの言葉に返るは、機械的な神子様の返答。先程まで仲がよいのではと疑わせた雰囲気も一変、今の二人はまるで噛み合わない。本当に、錯覚だったのだ、あれは。
ユーカーが無意識的にアルドール様を庇うのは、多分本質的なところで気が合うからだ。神子様はどちらかというと……俺側の人間なのだろう。俺がユーカーと親しくするように、神子様とアルドール様は親しくいらっしゃる。それでも俺とアルドール様が、こいつと神子様がうち解けられるかはまた別問題。なぜなら全く考え方が違うから。

「セレスタイン卿、感情で国を治めることは出来ません。その結果がこの国だと貴方が誰より知っているはずですが？」
「っ……」

先代……アルト王はその感情のために亡くなった。ユーカーを庇って、死んでしまわれた。俺の主は……。
その結果国はこれまで以上に荒れ、侵略もここまで進んでしまった。もうこれ以上は負けられない、そこまで俺達は追い詰められている。
そう思った途端に俺は、俺を心配してきてくれたこの友人を殴り飛ばしたくなる。国のことを考えるなら、お前はここへ来るべきではない。何故ここへ来たなんて。先程あんな言葉を口にしたのも忘れそうになるくらい。そんな俺の身勝手さが嫌になる。

（すまない、ユーカー……）

俺はお前をまだ心の何処かで憎んでいる。あの方を失ってしまった、その一因がお前にあると、あの方の心を知った今でもそう思ってしまっているのだ。
お前が死なせたんじゃない。あの人が自らそれを選んだ。選ばれ

なかった俺はそれを羨み憎んでいる。遺された言葉は身に余る光栄。それでも俺は言葉より、あの方の行為という好意を求めていたのだ。だから俺はお前が羨ましい。

あの人はそれが俺でも同じことをしてくれたのだろうか？そうなったんだとは思う。思う……それでもわからない。だから俺はお前が羨ましくて堪らない。憎らしくて堪らない。

「それでイグニス様、どちらに向かうおつもりですか？」

お前を庇うことなく、本題に戻そうとする俺の言葉。俺の表情が、俺の目の色が冷たくなったのに気付いたのだろう。それにお前が傷つくのが解るのに、どうして俺はちゃんと笑ってあげられないのだろう。俺が兄代わりだったのに……こんな大人げない俺は兄貴分失格だ。

「ちょっと海まで。沿岸の方にそろそろ援軍が着く頃なんです。それと合流し、あの城を叩きます。アルドール達にはそれまで敵の目を惹き付けていて貰います」

中と外から。確かにそれはあの湖城を攻め落とすには理想的な配置かもしれない。でもその中に入った者達が、人質にでもなったなら、この話は成立しないのだ。いや、それ以前に……俺はトリシュの話を思い出す。

「……ちょっと待ってください。まさか、城から出て行った一派というのは……！？」

「ええ、その援軍を叩きに行った。そう考えるのが妥当です。ですから僕らはその一派を背後から叩く」

「叩く……っつってもよ。んなこと出来るのか？」

神子様の話に、冷静な口調で切り込むユーカー。俺の大人げない対応により、沈んだ所為で頭が冷えたのか。

「そりゃあお前とランスは数術使いかもしれねぇ。だけどそんな一軍相手に現実的に人間三人で何処まで出来る？数術だってただじゃないんだ。そう無理は出来ないはずだ。援軍と合流するまでどう動く？」

「問題ありません。僕の部下は優秀ですから」

ユーカーの問いかけに、神子様が意味深にそう笑った。

詳しくは黙して語らず。秘密主義の節がある神子様に続き、俺も馬を進ませる。湖城が、母さんが遠くなる。それでもこれが策なのだと言われれば、俺は神子様には逆らえない。幼いアルドール様を支える参謀がこの神子様なのだ。誰よりも先を読むことが出来る彼が言う言葉は真実だろう。その目を信じる他にない。彼が敵ではなく味方であることを俺は喜ぶべきなのだ。その立場から多くを語れないのだとしても、感謝だけは忘れてはならない。そうあるべきだ。

しかし、そんな神子様をやはりユーカーは快くは思っていないようで、また少し不機嫌になる。俺の後ろを走るユーカーからは強い殺気を感じる。

だけどそれは神子様に向かうものではない。そこまでユーカーは悪になれない奴で、結局のところお人好しなのだ。

まだ病み上がりだろうに、気を張り巡らせて殿を務めている。そんな彼は夕暮れに手を合わせた時のような妙な雰囲気。馬を走らせるのを止めさせて、あの勝負の続きを今すぐ挑みに行きたくなる。そんな思いが浮かぶようだ。

（いや、今は……）

余計なことは考えるな。任務に集中しろ。剣になれ。忠実に命令をこなすだけの駒になれ。そう自分に言い聞かせるため目を閉じる。俺も騎士だ。馬は手足の一部で自分の分身だ。目を瞑ってでも操れる。この子は何時でも俺の意思を思いを汲み、地を駆けてくれる。だから危ないことは何もない。

目を閉じて、感じるのはこれまで気付かなかった風の音。心地良い風が吹く。香る海風。久々の北の大地、これが故郷の風の匂い。その懐かしさに帰って来たと思うのに、歓迎されている気がしない。吹き付けるは向かい風。

俺が何をしたわけでもないけれど、その風は全てを知っているようだ。俺の生まれ持つ罪を糾弾するよう夏だというのに夜風は冷たく俺の頬を撫でる。

何故裏切った？何故裏切った？あんなに良くしてくれた人を。あんなに崇めた人を。答えは俺の中にない。俺はあの人を裏切っては居ない。裏切ったのはあの男だ。俺はあの男じゃない。だからその気持ちが解らない。

「止まってください！」

神子様の言葉にはっと目を開ける。俺の愛馬はその合図に足を止めていた。

見渡せば周りの景色が変わっている。西へと進み、森の出口まで来た。海岸が遠くに見える。そこには数隻の船がある。

海岸の傍にはその船を迎えるような一団。おそらくあれがタロック軍の連中だ。

「……あの様子じゃ上陸出来てねぇってことか？」

「いや、それなら場所を移せば良いだけだろう。何も海岸はここだけではない」

「何かあったという……ことでしょうね」

神子様が神妙な顔つきになる。

「湖城からあの者達が出て行った以上、此方からは何らかのアクションがあったはずです。その伝達を受け彼らが駆けつけた。つまり、もう既に何かはあったということです」

「……つぅと、例えば何だよ？」

「そうですね……あくまでこれは例えばですが、あの城への支援物資を運ぶ船を、僕の部下がうっかり撃ち落としてしまったとか、です」

「うっかり？随分と具体的な例えだな。大体聖十字は武力行使が出来ないはずじゃなかったのか？」

「世の中何があるか解りませんからねぇ。それに聖十字もまったく無力というわけではありませんよ。武力行使の条件が厳しいと言うだけで」

「あなた方もご存知でしょうが、聖十字は正義のための軍隊ですが、それ以前に基本シャトランジアの守護のためにあります。ですからシャトランジアの領海領土を守るため、他国がその禁を侵せばそれなりの措置はとります」

それでもここはカーネフェル。今回はそれには該当しない。

「そして聖教会の掲げる十字法は、殺さないことを前提にした法です。それは兵士もその範疇であり、敵から彼らを殺させないこと。死なせないこと。これも踏まえた上で自衛の権利を認めています」

「それって矛盾してねぇか？」

「明らかな悪を前に無抵抗で死ぬのは正義でしょうか？そうすることでその悪が因り多くの人を傷付け殺すのならば、命懸けでその悪を討て。罪を犯しても正義と貫け。それが真の十字法です。元々

十字法に死刑がないのは、そう言った正義の罪人を目には目をと殺してしまうのは酷い話だというのがそもそもの原点だったと記憶してします。現代では随分と解釈がねじ曲げられてしまいましたが」

当然神子様が生まれても居ないような時代のことを、さらさらと彼は語り出す。齢１４の少年とは思えない、不思議な重みを持った言葉だ。

「ですから土壇場ではですが、僕の解釈では十字法は殺人を認めているんですよ。正当防衛と言いますし」

「おい、聖職者が何を言って」

「矛盾した法であるのは確かです。ですが兵士を数ではなく、物でもなく、人としてカウントするのが十字法。故に仕方のない矛盾です。最も重きが“人を殺すな”ではなく、“正義を守れ”にある。そこを誤認している者が最近では多くて困りものですよ」

ユーカーの言葉に神子様は肩をすくめて息を吐く。貴方もその一人ですかと言うように。

「失礼ですがイグニス様、十字法には教会の定義が記されてはいませんでしたか？」

「ええ、そうですよランス様。今回の件はそれに触れたものだと思います」

十字法は正義のための法律だ。それが行使出来るのは限られた場所。まずはシャトランジア国内。教会の敷地、所有地内。そしてこの教会というのに聖十字兵が含まれる。彼らが居る場所……この場合教会のある国限定。つまり今日ではタロック以外の三国、シャトランジア、カーネフェル、セネトレア……この三国で、この法は発動する。大体は国法と拮抗してしまうため効果が弱まるが、聖十字

兵本人が教会と同じということは……現行犯逮捕では十字法が優先されると言うことになる。
中立国という立場のため戦争には荷担できないシャトランジアが、正義の番人という観点から介入することが許されるのは悪をその目で捉えた時だ。

「ここしばらく僕も国境警備とカーネフェルの領海警備は目を光らせました。そろそろ僕も理由が必要ですので」
「理由？」
「腑抜けの国王派共を黙らせて、シャトランジアが全面的にカーネフェルの支援をするための理由ですよ」

そのために特に正義感の強い兵士、それからカーネフェルに縁のある兵士をそこに配置した。そこで接触があれば、一戦やらかさずにはいられないとそれを見越して。

「もう言い逃れが出来ない位、シャトランジアがカーネフェルを庇っていることが知られれば、保守派の爺共も重たい腰を上げるしか無くなります。平和呆けで他人事と傍観しているわけにも行きません。今は事が事です」

（この方は……）

本当に俺の年下なのだろうか？頭が切れる。そう言えば聞こえは良いが、少し不気味だ。年令的にはまだまだ子供のはずなのに、常に正しい先を読む。冷静すぎるその思考はどこか冷酷ですらある。俺はそんな神子様に、尊敬と共に畏怖の念を覚える。
国を守るために、人を平気で駒にする。法は兵士を人とカウントすると言ったその口で、人を守るためだから？人を物のように扱うような事を言う。そしてそのことに対する迷いなど微塵も表に出さ

ないなんて。……そんな子供が何処にいる？

（……）

ありがたいのは確かだ。そうなればこの戦争も、負け戦から勝率が変わってくる。教会兵器が味方に付くのなら、セネトレアともタロックとも互角以上に渡り合えるようになる。そんな策を練る、この方は本当に頼りになる。だからこそ、少し怖い。俺が俺達が、カーネフェルが。この方に本当に利用されていないかなんて否定できない。無論、そんなことはないとは思う。それでも可能性としては胸の隅に留めておくべき。現にアルドール様は彼の言いなりだ。それは一抹の不安に違いない。

そもそも神子様は一体何が望みなのだろう。世界平和？それはどういう風にして作られる物なのか。

「さて、話を元に戻しましょうか」

そう言って笑う表情は年相応、幼く可憐なものだというのに。

「まずは、彼らがあそこで立ち往生している理由でも探りに来ましょう」

くるりと首を回し、ユーカーへと視線を向ける神子様は、今度は可憐……ではなく、悪巧みをするような、それでいて爽やかな笑みを湛える。ユーカーはその視線に青ざめて、自身の姿を省みていた。

「おい、ランス……」

助けてくれ。そんな縋るような視線に、俺は今日一日のことを振り返る。そう言えば俺、久々に此奴に負けたりしたんだったな。

（……）

逡巡、答えは決まった。

「頑張ろうな」

俺も神子様のように笑みかけてみれば、くそぉと悔しそうにユーカーが顔をしかめた。

＊

（くそっ！）

ユーカーは思う。あの神子と出会ってから、ほぼ毎日は舌打ちをさせられているような気がすると。

（何が大丈夫です問題ありませんだってんだ。問題しかねぇだろうが！）

ランスのため。ランスのため。ランスのためだっ！呪文のようにその言葉を繰り返し、何とか浮かんだ涙を乾かせる。

敗因は変装のためとはいえ女装して来た自分に日がある。そう言われてしまえばそれまでだが……「そういえばここ最近おまえはずっと女装してたけど今日はまだ有効活用していないだろ？」とか相方に言われた日にはどうすればいい？むしろそのつもりでこのためにそうして来たんだろみたいな顔されても俺は困る。

普通に神子が女なんだからお前がやれよとか言えない自分が嫌になる。なんで俺、あいつの秘密守ってやってんだろ。いっそのことランスにバラしてやろうとか思うのに。確かに女のあいつにこんな

真似させるのはちょっと気が引ける。悲しいことだが俺の心の一部は完全に騎士なのだ。気に入らない奴とはいえ、女に囮なんかさせられない。……しかし、だ。あの適当すぎる嫌がらせのような計画には溜息しか出て来ない。思い出してもそれは同じだ。

「タロック人は基本カーネフェリー女は尻軽ビッチの軽薄女とでも思っている節があります。おまけに相手はここしばらく戦続きで鬱憤堪っているでしょうし、元々タロックでは女が少ないですし物陰でもつれ込んだら間違いなくゲロりますね」

「俺カーネフェリーだけど女じゃねぇし」

「ええ。ですから何かあっても問題ありませんね良かったですね」

「問題だらけだっ！」

「頑張れよセレス、俺は向こうで応援している」

「いっそお前が女装しろっ！お前は無駄美形なんだから絶対似合うだろっ！！」

「流石にそろそろ俺の身長じゃ怪しまれるよ」

「俺をチビみたいな扱い止めろっ！俺だって神子やアルドールよりはあるんだからな！これからまだ俺は伸びる！」

「しかしお前は魚を嫌うからカルシウムが不足して……正直それは怪しいな」

「半分以上お前の所為だっ！」

なんか泣けてきた。思い出しても泣けてきた。俺なんであいつの後なんか追いかけちゃったんだろう。あいつのためとか心配してとか、そんな思いだったのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう。

（俺は貴族だぞ？それがなんであんな神子に顎で使われねぇといけねぇんだ）

立場は一国の主に等しい神子とは言えど、生まれは卑しい下賤の民が。ランスからも頼まれたとはいえ、そこにイグニスの思惑が絡んでいるかと思うとやるせない。

神子が俺の武器を奪って代わりに渡してきたのは、タオルに洗髪料に風呂桶に石けんにという謎の銭湯行き一式セットだった。

「なんだこれは」と聞いた俺に、あの女はにこりと微笑み……「もし相手方に見つかったら水を浴びに来たみたいな顔をして下さい」とか含み笑った。なんだその無謀な策は。精々正体ばれない程度に着エロ色仕掛けでもなさってくださいじゃねぇよ。俺は騎士だってのに何でそんなことしねぇといけねぇんだよ。ていうかなんでそんな物を用意している。ここまで読んでいたのか数術で取り出したのかは解らない。

（っていうかそんな馬鹿な言い訳通るのか？）

あの神子はそれが本当に策なのか、俺への嫌がらせなのかよくわからないことをする。

（でも、……まぁ）

一番夜目に慣れているのは俺だ。多少の無茶は利く。上位カードのランスに無茶させるよりは余程良い。俺は高幸福値のコートカード様なんだから、そうそう酷い目にも遭わないだろう……と思いたい。

そろそろと息を潜ませ

ていうか視覚数術くらいかけてくれれば良いものを、神子はいい笑顔で「すみません省エネ中です」とか言い放った。やっぱこれ嫌がらせだ。それでもそんな嫌がらせにも負けず、敵陣との距離を目と鼻の先まで詰めた俺は凄いと思う。森より間隔の薄い海沿いの木々。その陰を縫ってここまで俺は近づいた。その距離、僅か１０メ

ートル。僅かもう相手方のひそひそ話まで俺の耳に届いてくる。

「第一師団長は……どちらに」

戦場でやり合うにも相手の言葉を知らなければ降伏の意思も引き出せないし伝わらない。方言や訛りまではわからないが、標準的なタロック語なら俺もとりあえずはマスターしている。だから大体の意味なら解る。

（第一師団だと？）

聞こえた言葉に俺は飛び上がらん程驚いた。

んな馬鹿な話があるか。基本天九騎士団は、一から九までの騎士と師団があり、数値が上がれば上がるほど狂王の側近だ。その側近中の側近が、どうしてこんなところに居る？

それはつまり……そう思うとぞくと肌が鳥毛立つ。

（狂王が……タロック王が、この傍にっ……あの城にいるってことか！？）

深すぎる赤。睨まれた、あのどす黒い血色の目。身体が震えて動けない。あの人がいなかったら、あそこで死んでいたのは俺の方。

（くそっ……）

取り乱すなと自分に言い聞かせ、俺は目を閉じ息を吸う。思い出す。あの人の青。最期まで優しかったその色を。その青色が、あの馬鹿王のそれに似ていて少し苛ついた。それでもその苛立ちが、俺に俺を取り戻させる。

「レクス様はまだお戻りではないのか？」

俺の耳に届いた言葉。その言葉に目を開く。俺は底に妙な引っかかりを感じた。

（レクス？聞いたことねぇ名だな）

第一タロック人らしくない名だ。平民ならそんな名の者も居るだろうが、師団長ともなる騎士は元々貴族出身、大抵漢字の名を持つ。エルス＝ザインは元が平民だから仕方がないのだろうが、それでも当て字の漢字名は持っている。だから妙だ。

そんな者が様付けで呼ばれている。こいつらが第一師団の中の一派なら、様付けで呼ばれるのはそれを従える者だろう。だが、タロック人は何だかんだで血に五月蠅い。あのガキと同じよう身分が低い騎士が居たとしても……それが第一位の騎士になれるはずがない。

（部下には真名を教えてねぇ……通り名ってことなのか？）

そうだ。俺は天九騎士の全てを知っているわけじゃない。実際俺や同僚がやり合ったという者の名を知る程度。これまでやり合った個人的な感想だと、上位騎士程実力も上がる気がする。そして上位騎士がカーネフェルまで赴くことは殆ど無い。

（本腰入れて侵略に、カーネフェルを落としに来やがった……そういうことか）

エルスが第六位、双陸が第四位。四位の騎士が数術全開殺す気本気のランスと同等レベルってことは、俺じゃ勝てるか正直怪しい。

通常の俺はエルスとやり合うのですらギリギリライン。不意打ち奇襲で夜に仕掛けるなら殺せはするだろうってところだ。

今日俺がランスに勝てたのは、ランスが俺を殺す気がないからだ。殺すつもりでやり合ったなら、負けるのは俺だと解る。俺は唯の人間で、あいつはそうじゃない。才能に恵まれた騎士で剣士で数術使い。俺の本気なんて、たかが知れている。

だからここに第一位のタロックの騎士がいるならば、俺の勝算はほぼゼロだ。今すぐ引き返し、この情報をランスと神子に伝えるべきだとそう思う。それなのに……何故か片手が熱い。俺のカードが燃えているみたい。そこに心臓があるんじゃないかって誤認するようにドクドクと血が巡る。カードは戦いを求めるように、置いてきた剣を欲している。

（タロックの、最高の騎士……それがこの近くにいる）

俺の勝算は、この手のカード。その幸運だけ。何故だろう。以前の俺は命の危険を感じたならばすぐに逃げ出していたのに、どうしてこんなに心が胸が躍るんだ？死ぬかも知れないのに。あの日のように死ぬのが怖くない。あの赤い色が傍にあるかも知れないのに。肌が震えるのは、あの日と違う感覚だ。背筋がぞくぞくするのは恐怖ではなく、期待だ。

今日ランスとやりあって、あんな中途半端な結果に終わった。まだ戦い足りない。飢えている。もっとこれでもかてくらい、徹底的にやり合いたい。

そうだ。本当の本気を出せないのは俺も同じだ。味方相手に本気は出せない。殺すわけにはいかない。それでもそいつは敵だろう？殺してもいい。むしろ殺すことが仕事だろう俺の。本気でやっても俺は何も悪くない。咎められることはない。あいつ相手の本気の試合で、北部で暴れ回っていた頃の戦闘欲が目を覚ましたのか。そりゃあ弱い奴斬り殺すよりは、強い奴と剣ぶつけ合った方が楽しいよな。楽しい。楽しい。愉しみたい。

そんな思いに支配され、その場から撤退が出来なくなる。もう少

し情報が欲しい。そいつを知りたい。守る者が傍にいないだけで、ここまで気持ちが楽になるのか。パルシヴァルには見せられない。こんな戦いだけを求める俺なんか。

「誰だっ！」

「なるほど……聖十字の少女とはお前のことか」

不意に我に返った。それは何者かの気配をすぐ傍に感じて。

見上げた先には一人の騎士。馬に跨るその男は、黒い瞳に長い黒髪……夜に溶け込むようなその一色の闇に俺は目を見開いた。

その目のなんと無感動なことか。先程までの俺の期待を裏切るような面白味のない目をした男。それでもその男にはまるで隙がない。強者だというのは一目瞭然。

「……と思ったが、少々妙だな」

「それはどうも」

俺の気配からこの男は何かを感じ取ったらしいが、俺が手にした風呂道具セットを見て呆気にとられているようだ。それを感じて俺は声のトーンに気をつける。先程の第一声は、緊急事態だから仕方ない。そう言うときは普段と違う声が出るものだ、と向こうには思っていて貰おう。

馬から飛び下り近づく男は、俺より大分背が高い。ぱっと見俺より年上だ。この男はタロックで成人するかしないかその辺りの年だろう。俺が丸腰なのを悟り、腑に落ちないといった表情。

「失礼。別人か」

その言い方が引っかかる。つまりこの男は誰かを捜していたのか？

（聖十字の少女とか言ってたな……）

それはあの神子の部下のことだろうか？俺達はそいつらと合流しなければならないんだから、ここで情報を引き出すのは悪い手ではない。俺は素知らぬ顔で男を睨む。

「しかし先程のあれは水浴びに来た少女が纏うような殺気にも思えん」

「誰だって自分が使ってる風呂場にあんなに屯されちゃ堪らない」

「それなら使ってくれても構わんが」

「あのな常識的に考えて、人目のあるところで脱げるか？ったく……この暑さだ、ひとっ風呂浴びようって来たのにあれでは誰だって怒る。普通の女なら誰だってあの位殺気纏う。これだから女慣れしてない黒髪族は困るぜ」

「女慣れしていない……か」

その言葉に俺は一瞬寒気を感じた。言葉の違和感。これまでタロック語を話していた男が突然カーネフェル語に切り換えたのだ。

「しかしお前は唯の村娘というわけでもなさそうだ。唯の村娘がタロック語を話せるはずがない」

「っ！」

しまった！それもそうだ！！俺はあそこで言葉が通じない振りをするべきだった。俺の受け答えはカーネフェル語ではあったが、その意味は相手の言葉を、タロック語を理解してでの言葉。この男がカーネフェル語で返して来たのは、冷静に俺の過ちを指摘していた。

「それに見れば衣服の質も良い。眼差しは気高く、その言葉の響きにも高貴さがある。どこぞの有力者の娘と言ったところか」

捕らえておいて損はない。その言葉からは物騒な響きがした。

（何をとち狂ったことを）

この俺を人質にするだって？んな馬鹿な話があるか。近寄る男に俺は蹴りを撃ち出した。しかしそれは容易く掴まれる。

「凶暴でも育ちが良いらしいな、青目の娘」

「っ……」

そりゃあ恥ずかしい。今の格好では本気で蹴りは入れられない。蹴りを入れるにはスカートが広がる。中身見られては困る。下着見られるのも嫌だ。ていうか万が一正体バレたらもっと嫌だ。何されるか解ったもんじゃない。

不意にあのメイド女のルクリースが当てつけで言いふらしていた、タロック人の嘘だか本当だかわからない噂が脳裏を過ぎる。むしろこいつら女が殆ど生まれない男社会で暮らして来た奴らだし、普通に女より男とかの方好きだったりしないよな。俺が女装だとかバレたらむしろ嬉しいとかむしろご褒美とか、あの人数で宴会でも開かれて全員の相手させられたりしないよな。そんなの嫌だ！嫌すぎるっ！誰かっ、この際トリシュでも良いから俺を助けろ！助けてくれっ！ていうか働けコートカードっ！俺には幸運があるんじゃねぇのかよ！？

「そう言えば先程、俺が女慣れしていないとか何やら口にしてはいなかったか？」

「いいいいいいいいいい言ってないっ！」

「とのことだが、お前達はどう思う？」

「っ！？」

お前達？それはなんのこと？恐る恐る男が向いた方向に視線をやれば……海岸に屯していた兵士達が此方の方を向いていた。

（しまった……）

俺の「誰だっ！」というあの声。あれは少し大きすぎた。俺とこの黒髪騎士の茶番は一部始終こいつらにも見られていたのだ。

「師団長！よくぞお戻りに」

「レクス様！それが噂の女ですか！？」

師団長？こいつが、この男が第一師団を治める騎士なのか？こんな生気の感じられない目をしたつまらない男が？

いや、違う。生気が感じられないんじゃない。こいつは表面に何も出さないだけ。その奥底では何かが渦巻いている。その得体の知れなさがこいつを不気味に見せている。何を考えているのか解らない。とても冷たい目をしている。俺を突き放す時の、俺の嫌いなランスに似ている。

「ああ、隣町まで探したが聖十字の少女は見つからない。彼女を見た者はいないか？これは彼女とは違うのか？」

「いえ……我々も金髪青目の女と聞いただけで、あと髪は長かったとか」

「……髪は短いな。しかし切りそろえられているわけではない。これなら適当に切ったようにも見える」

俺が面倒臭がって、剣で髪切ってた所為だがそんなところで他人に勘違いされるとかねぇよ。何このデジャヴ。アルドールに会う前も俺、あいつに間違えられて酷い目に遭ったってのに。

周りには大勢の兵士。そしてタロック最高の騎士。丸腰の俺がどこまで戦えるのか。この騎士自体に興味は失せたが、この状況には少しだけ胸が躍る。そんな俺の様子を悟り、騎士の目に少し変化が変化が現れた。

「得物が欲しいか？青目の少女」

「突然なんだよ」

「質問に答えたならば貸してやろう。このままならお前はどうせろくな事にはならないそれは解るだろう？」

「……何が聞きたいってんだよ。俺はお前の探してる奴のことは全然知らないぜ」

「ああ、そうだろうな。お前は何も信じない目をしている。神になど仕えていないだろう」

お前は俺の何を知ってるっていうんだ。怪訝そうな目でそいつを見ると、俺の変わる表情をそいつは懐かしそうに見つめるのだ。

「だがお前が彼女ではないという保証にもならん。お前の青には強い意志がある。それがこの国に向いていないとも言い切れん」

知らないものをどう吐けとういうのか。呆れる俺の顔すら演技だと思っているのだろうか、男はじっと俺を見つめる。

「そうだな。それでは……俺が聞きたいのはお前の名だ」

「名前？」

それは何か俺から情報を引き出そうと言うこと？俺の正体を怪しんでいる？ここで本名は名乗れねぇ。……となると。

「俺はセレス。苗字は自分で考えろ」

どこぞの有力者の娘だと思うなら自分で調べろ。そう逃げた。しかし男が食い付いてきたのはそこではなかった。

「一人称まで同じか。……なるほどな」

男は薄く笑って自分の剣を一振り俺へと投げてきた。

「セレス！俺はお前が気に入った。この俺レクスに勝ったならこの場を見逃してやろう！」

「随分と気前がいいじゃねぇか」

タロック人の癖にと少し褒めて笑ってやると、男は一瞬嫌らしい笑みを浮かべる。第一印象からはかけ離れた、へらへらした兄ちゃんって感じの笑みだ。

先程まで無感動だった騎士の瞳に表れた感情は、更に得体の知れないものだ。まるで道化。どこまで本気なのかまったく解らない、底知れなさがある。

それは部下達にとっても新鮮なものだったようで、そこらの連中みんな呆気にとられている。そんな笑みで……奴は言う。

「可憐な外見に似合わぬその男勝りな所がツボに来た！負けたら俺の嫁に来い！」

まさかの予想だにしない敵将の言葉に思わず吹いた。なんでこんなんばっかなんだ最近。コートカードになってからこんなことばっかだぞ俺。

「正気ですか師団長！？」

「相手は金髪族の女ですよ！？」

女じゃねぇよ。そう突っ込みたくなったが、言えるはずもない。いろんな意味で。

「……解った、やってやる。勝負方法は？」

よっぽどのことがあったら神子は兎も角ランスは助太刀に来てくれるだろう。もうこの際自棄だ。それに……雰囲気が変わったこの騎士は、なかなか骨がありそうだ。戦う気は俺も出てきた。

「相手が降参するまで」

「……うっかり手が滑って殺してしまった場合はどうなるんだ？」

「その場合はまぁ、それも仕方ない。残った者が勝者で良いだろう」

「そっか。それなら仕方ねぇな」

渡された剣を拾う。タロックの剣は変わっている。これは刀と言うんだったか。片刃しか付いていないため、諸刃に慣れている俺にはちょっと扱いづらいが仕方ない。

「それなら本気で行かせて貰うぜ！」

得物を抜き払う。隻眼では俺の正体がバレる。そう思って両目で屋敷を飛び出して来た。だからすぐに本気でやれるっ！

片刃剣は俺のセレスタイトよりもかなり軽い。俺の一撃のスピードに、黒髪の騎士も驚いている風だ。

ルールを聞いて迷わずその首を狙った俺の判断に、男は唇を釣り上げる。いきなりあんな事を言われても、普通の娘ならそんな決断瞬時に下せない。だが生憎俺は普通でも娘でもない。

「……ますますただ者ではないな」

男は笑う。俺の迷いのなさにこいつにも火が付いたようだった。

「くそっ」

得物の形状は同じようなものなのに、男の攻撃は一撃一撃が重い。俺だってそれなりにはやれるはず……そう思うがこの剣は軽すぎる。長さも重さも足りない。いつもなら届く攻撃、やれる技が上手く出せない。

（こいつ……）

両目の俺に負けてない所か俺が負けている。こいつの夜目が特別優れているわけでもないだろうに。俺は俺よりこの闇を見えていない奴に押されているのだ。

完全に遊ばれている。俺は一撃一撃をこいつを殺すつもりで放つのに、この男は子供をあやすように、遊んでいるのだ。だってこいつは俺の急所を一度も狙わない。狙っているのは……

（待てよ……？）

何度か刀をぶつける内に、俺はそれに気がついた。男は俺の手を狙っている。それは得物を叩き落とし、降伏を迫るという意味か。

（いや、……それだけじゃねぇ）

俺もこいつも感じてる。無意識に、互いがカードだと。

俺が押し負けているのが単に騎士としての力量、体格の差なのか。それともカードとしてのそれなのか。それを見抜く上でも俺は、…

…その情報を知らなければならない。
そしてこの騎士もそれを知りたがっている。俺のナンバーを確認したいのだこの男は。それを俺に気取らせないため、あんな妙なことを言って気を動転させたに違いねぇ。

（もしこいつが俺より強いカードなら……あいつらを逃がさねぇと駄目だ）

神子は弱っている。ランスはカードとしてはかなり弱い。だから俺がやるしかない。

（俺は神なんか信じねぇ！崇めねぇっ……認めるもんか！）

そんなものがいたのなら、どうしてあの人を救ってくれなかった。どうして彼女をあんな目に。それを運命なんて言葉で片付けさせない。神なんていない、あれは全部人の悪意が生み出した。
あの人が死んだのはタロックの所為、そして俺の弱さの所為。彼女が死んだのは、親父とそして俺の所為。ほら見ろ。神なんかが介入する隙間はねぇ。だから神はいない。いるはずがない。

（それでも……）

手が熱い。焼き焦げるみたいに。俺を使えとカードが俺を呼んでいる。願いを求めるのなら、祈れと俺を責め立てる。

（それがあいつを守る力になるなら）

この一時だけは信じてやる。否定し続けた神って奴を信じてやる。だから俺に力を貸せ！
俺の祈りに吹いた海風。砂を含んだ風に、騎士は一瞬目を瞑る。

しかし生憎俺は見えない方が得意分野だ。思い切り突き刺す一撃。手応えはあった。
それを褒めるよう、俺の肩に触れる手がある。
「レクス様っ！」
「良い、気にするな」
「しかし……」
「見事だ。この俺に一撃加えるとは」
駆け寄る兵士を片手で止めて、男は小さく笑う。脇腹を突いただけだが血は流させた。急所は外したが無傷というわけでもない。だって腹に穴空いてるんだぜ？
……だと言うのに俺の肩を掴む手は、微塵に揺るがない。弱々しさなど感じさせない。今のでどれだけダメージを与えられたかまるで読めない。
（硬ぇっ！幸福値を使って、これかよ）
刀を抜くために両手に力を入れるがピクリとも動かない。筋力で押し留めているのか。痛いだろうに全くそんな素振りを見せないから傷のない俺の方が痛くなってきた。
得物はもうどうにもならない。それを悟ってそこから俺が手を放そうとする寸前。奴が俺の両手を掴んだ。
「だが敵に不用意に近づくのはあまり褒められたことではない」
「う……っ！放せっ！」
「降参するなら考えてやる」
「……」
「降参する気は無いようだな」
「おうよ、腕封じたくらいで調子に乗るなよ騎士の兄さん。俺の

両足は常に金的狙っているものだと思え」
「なるほど、それは怖い」
そう言いながら愉快そうに笑う男の意図が分からない。
俺は拳を握りしめる。その手を放せばすぐに殴ってやるとういう意思表示。それから意味はもう一つ。だからこいつは手袋を脱がせられない。それを切り裂いたって、読めるのは模様だけ。数値までは解らない。

「そう言えば……先程俺が女に慣れていないとか言っていたな」
「根に持ちすぎだっ！俺はそういう執念深い奴は嫌いだっ！」
「我が国には据え膳という言葉があってだな、お前が降参しないというのならそれはそれで美味しい話だ」
「や、止めろっ！」

服に手を掛けられたくなかったら、手袋の下を見せろとその目は語る。その数字によってここで殺すべきか生かすべきかを考えている。
思い切り蹴りを繰り出すが、駄目だ。女の服だとうまく戦えない。それも相手に見抜かれていて、俺は簡単に投げられる。そこを押さえつけられれば、為す術もない。いっそ降参するか正体バラしたくなる。

「そこまでです！」
俺を助けるように、凛と響いたその声に、俺はその人の姿を思い描いた。
「……ラっ、……」

咄嗟に奴の名前を呼びそうになって、それはいけないと踏みとどまった。敵に与える情報は少ないに限る。

（え？）

しかし、何かがおかしい。現れた人影はあいつではなかった。それは金髪の、見覚えのない少年の姿。

「情報通りだな、些細な悪も見過ごせないか」

「民間人に手を出すとは、軍人失格です！恥を知りなさい！」

此方に突きつけらたのは、まっすぐに伸びた綺麗な長剣。それは十字架を模っているようで。月明かりに照らされ鈍く輝く刀身は、聖十字を名乗るに相応しい輝きだ。

「なるほど、これは見つからないはずだ。少女というのは誤りだったか聖十字」

船の者達は女の群れに男が混ざっているとも知らず油断したかと忍び笑う黒の騎士。

「いますぐその子から手を放せ！用があるのは私にでしょう！？」

力強いその言葉。そいつの目は静かに澄んで、だけど熱く燃えている。青い炎を宿しているような、不思議な輝きを放っていた。

触れれば焼き焦げるだろう。それでも温かいのか冷たいのか、触れてしまいたくなるような、そんな不思議と何かを人を惹き付ける。現れた救いの主を、俺は惚けたように見上げていた。

12：Est autem fides credere quod nond

ようやく6章ヒロイン登場。長かった……

13：Fama crescit eundo.（前書き）

もうどうにでもなれ注意報。女装野郎が二人も出てきてやがります。
こいつら真面目に戦争する気あるんだろうか？
今更過ぎて何を警告すればいいのか最近解らない。人間関係があれすぎる所為だ。ヒロインが軌道修正してくれることを切に願って。
もうどうにでもなれ。

13：Fama crescit eundo.

一緒に騎士になろうよ。そして、全てを見返させよう？認めさせるんだ。この剣ひとつで全てを取り戻そうと俺は笑った。そしてあいつも頷いた。

それは幼い日の約束だ。その約束が今は遠い。俺もあいつも今はもう、そのために戦ってなどいないのだ。

「……ランスはさ、アスタロットさんってどう思ってた？」

あの少年は、俺の主は……何も知らないのに、時々明確に俺の心を言い当てる。まっすぐで濁りのない綺麗な青。あの人に似ている深い海の色。

あの色で見られると、俺は時々言いたくないことまで言葉にしてしまう。隠し通そうとする醜い心を照らし曝かれる。

あの人はそんな俺も許し認め、受け留めてくれる。だけど……彼に、アルドール様に同じ事が出来るとは思わないし、俺もそんなことをしてもらうつもりはない。

アスタロット。エレインの実姉。ユーカーの婚約者。もう何処にも居ない人。そしてあいつが未だに忘れられない人だ。

俺が彼女と会ったのは数えるほど。婚約者選びのためあの男に無理矢理シャラット領に連れて行かれたことがある。ユーカーが一緒じゃなかったら馬に乗ってでも走ってでも泳いでも逃げていた。

俺が気になったのはあいつと結びつけられた少女がどんな娘なのか気になったからに他ならない。あいつにちゃんと釣り合うか。あんまりにも酷い子だったら俺も黙っていられない。

「ランス兄様……、ですよね？」

彼女は俺を義兄と呼んでいた。俺が姉と妹のどちらと婚約するか解らなかったからだろう。割合的には彼女には姉の方が多かったから、確率的な意味でも、年令的にも年上の俺をそう呼んだのだ。もっとも俺が彼女の妹とそんな関係にさせられたのはもっと後のことだから、当時の俺はそれに異を唱えることもなかった。唯、一目見て俺を俺だと知れたのが、不思議だなと思った。

「初めまして、ランス兄様」

ぺこりと頭を下げる、瞬間広がるその髪は……カーネフェルの金よりも、タロックの黒に近い暗い茶色。それでも青い眼はカーネフェルのそれだと知れる。

厄介者払いで両家のために結びつけられたのだとそこで俺も理解する。彼女もあいつも真純血。かけ合わせれば、次代には見目麗しい真純血が生まれる……その可能性に賭けてだ。

俺はその話に憤った。家の道具のように、そんな風にあいつが使われることが許せなかった。だから俺は彼女を哀れみながらも、あいつのために彼女を憎く思った。

それを彼女は感じ取り、妙なことを言うのだ。それは確かあいつが席を外したその時に。

「やっぱり優しいんですねランス兄様は。セレス様の言う通り」

「……俺が、優しい？」

俺の憎しみに当てられて、それで何故そのようなことが言えるのか。俺は驚く。この暗い髪の少女は、数あるこの家の娘の中で一番優れた娘。あいつに相応しくないなんて、どうして俺に言えるだろう？その澄んだ水のような精神は、非の打ち所もなく美しい。こうして言葉を交わすだけで、俺の心が濁っているのを思い知らされる。

「だって兄様は、そんなに深い目をしてらっしゃるのにセレス様をちゃんと思ってらっしゃいます」

それは彼の両親にも出来なかったこと。それを当然のようにやってのける貴方は凄いのだと言われたが、それこそ俺は馬鹿にされているように感じた。

「……人を色で区別するなんて馬鹿げたことだよ」

「ええ、そうですね」

貴方は確かにそれを本心として口にしている、彼女はそう指摘する。

「ですがそれを嫌味としてセレス様が受け取らないで居られるのは、ランス兄様が本当にお優しい方だからなんでしょうね」

あの卑屈なユーカーが、俺の言葉には楯突かない。口では何か言ったとしても、心の中では受け入れる。そんな俺が優しいだって？

（違う……）

それは優しさじゃない。我が儘だ。優しいのはあいつ方だ。そんな俺を許してくれている。

俺と笑顔で褒めてくれるアスタロット。彼女の言葉を嫌味と受け取ってしまうような俺が、どうして優しいんだ？

「セレス様は、いつもランス兄様のお話をしてくれるんです。とても楽しそうなお顔で。私はそんなセレス様を眺めているのが楽しいんです」

だから俺にお礼を言いたかったのだと彼女は言う。セレス様をあんな顔にしてくれてありがとうと。そんな感謝の言葉にさえ、これの心は影が差す。

だってそれは、自分の物であるユーカーに代わって、彼女が俺にお礼を口にしているように聞こえたから。

俺に一礼し、戻ってきたユーカーの元へと駆ける彼女。談笑する二人を見て、何故か裏切られたような気がした。俺と話すときとは違う、顔で笑うあいつは俺の知らない別人だった。兄弟のようにずっと傍にいた。何もかも知っていると自負していた。だけど、そんなことはなかったのだ。そう思うとどうしてだろう。これまで信じた何もかも、ガラガラと音を立てて崩れ落ちていく……そんな感覚。

あの頃の俺には、王とあいつしかなかったから。あいつが彼女に奪われたと知った日に、俺には王だけしかいなくなった。俺が騎士として、剣の道に以前に増してのめり込んだのはその所為だ。一緒に素晴らしい騎士になろうって約束したのに。あいつは鍛錬をサボって彼女に会いに行く。俺に負けることも多くなった。

許せなかった。以前のあいつは俺の努力なんか飄々と越えていった。本人が認めることは絶対にないが俺が認める。あいつには俺以上の剣の才がある。それなのにあいつは以前以上に何もしなくなった。これが恋という物か。それはここまで人を腐らせるのか？

あいつが腐っていく。腐敗していく。その照れ隠しの仏頂面から立ち上る、姿無き腐敗臭。ユーカーも、俺の父と同じ……そんな生き物になってしまうのか？空の色が、変わっていく。目には見えない、それでも解る。綺麗な青が、俺がこの世にあって綺麗だと……信じた色の一つが、こんなに簡単に汚されてしまうなんて。

あいつが堕落していくなら、俺は誰よりも立派な騎士になる。俺はあんな風にはならない。俺には王しかいないんだ。俺は王についていく。誰よりも忠実で立派な騎士になる。あいつが本気でやらないなら、それしか俺を負かしたあいつに勝つ方法がないんだと思っていた。

あいつは長く立ち止まった。彼女を失ってからは見当違いの方向へと走り出した。傷ついたあいつは心を閉ざした。もう傷つくことがないように。

その中に入ることが出来るのは、あの方と俺だけ。あいつの世界が閉じていく。それはあいつがまた俺と同じ剣の道に戻って来てくれたようで嬉しかった。だけど違うのだと気がついた。あいつは以前に増して無気力で、剣を振るうことに喜びもない。苛立ちをぶつけるように戦うだけ。そんなあいつを見ているのは苦しかった。

それは俺の知るユーカーじゃない。始めて剣を取った日のお前はそんな風じゃなかったはずだ。夢があり、目標があり……剣で全てを認めさせると抗おうとがむしゃらで。その目を馬鹿にした全てを、そして父親を見返してやると言っていたのに。

目的も忘れて、狂ったように戦うお前は、俺が望んだお前じゃない。それを伝えたところで、俺の言葉は届かない。

（俺は……）

俺は嬉しい。俺は悔しい。

アルドール様との出会いがあいつを変えてくれた。元のあいつを取り戻させてくれた。それは俺には出来なかったことで、感謝は言葉で言い表せない。感謝してもし足りない。だが同時に俺は心底悔しい。どうしてそれが俺ではなかったのだと。何も持たない彼にそれが出来て、どうして俺に出来なかったのかと。

彼はあんなにも脆く、弱く……普通の少年。いや、普通すら逸脱している。それは一度奴隷商達に脳を過去を弄られたからなのだろうか？アルドール様の普通さは普通ではない。

何処にでもいそうで、その実、何処にも居ない。そんな違和感が彼の中にはある

それでも彼の弱さは俺の存在意義に変わってくれる。だから俺にはアルドール様が必要だ。俺が騎士であるために、掲げる主は必要

だ。彼が俺が戦う意味に生きる意味に、死ぬための意味になってくれた。俺はあの人の剣だ。それは揺るぎない。

それでも……そんな人を相手に、どうして俺は悔しいと思うのか。

剣では俺の方が強い。けれど戦わずして俺はあの人に負けている。それがどうにも腑に落ちない。俺はあの日と似た感覚を感じている。

アルドール様と出会ってから、ユーカーはまた他人を受け入れ始めた。ルクリースさんを、トリシュを、……パルシヴァルに関しては以前からだけれど、あそこまで余裕を持って時間を割いて相手をしてはいなかった。あいつの世界が開かれる。それは良いことのはずなのに、どうして俺の心はささくれ立つのだろう。

最初はからかっていただけだ。あいつが嫌がるのが楽しくて。怒ってむくれて照れた顔を見るのが好きだった。それでも最後は俺だけに……しぶしぶ折れる、そんなところも好きだった。優越感に浸っていたんだろう。誰の言うことも聞かないあいつを、従えた気になっていたんだろう。そうだ、俺は……得意げに。

だけど、あいつは自分の意思であんな格好をするようになった。それは俺から逃げるため。それは俺を助けるため。プライドの高いあの子が、そんなことをするなんて。その変化に俺は狼狽える。

俺を心配して来てくれたはずのユーカー。それは本当に俺のため？だってあいつを変えたのは俺ではないだろう？あいつ自身気付いていないかも知れない。でもそれだけじゃないような気がしてならない。俺にアルドール様が必要だからそうするのか、アルドール様に俺が必要だからそうするのか。その理由が反転して行きそうで怖いのだ。結局優しいのは俺ではなく、あいつの方だから……大切な物がまた増えていっても、捨てるとしたらあいつがじゃない。多分俺がだ。いつか俺から離れるあいつを俺が見限る時が来る。あいつはそんなことをしないから、俺がそうするしかなくなる。耐えられなくなって、いつか……

「ランス様？」

神子様の声ではっと我に返る。

「いえ、何でもありません」

そうは言うが、遠離るあいつの背中から目を離せずにいる。

暗闇なら両目の差違にも気付かれないと、最初からあいつは両目で来た。それはあいつにとって何よりのトップシークレット。彼女亡き後それを知るのは俺だけで、アルト様だってそれは知らなかったのに。その秘密がこんなにも簡単にぶちまけられる物だなんて。投げ出される物だなんて。

「それでは今の内に僕たちは行きましょうランス様」

俺の言葉を信じたわけではないだろう。それでも時間の無駄は避けたいと、彼は俺達の役目を口にする。

「しかし、イグニス様……」

様子見のために送り込んだ相方。それを思うと俺は気が気でない。しかし神子は相も変わらず冷静だ。或いはそこまで彼のことがどうでも良いのか。。俺はユーカーが心配で彼の方を振り返る。

そうだ。今、あいつは囮になってくれている。その隙に神子様の部下達と合流し、タロック軍の隙を突くのが彼の策。

今はそれに集中しなければ、そう思うのにどうして後ろを振り返りそうになる。だって今のあいつは丸腰だ。本当に、大丈夫？

「心配有りません。彼はコートカードです。そう簡単にどうにかなるとは思えません」

その言葉には俺にはない、ある種の信頼のような物が感じられて、彼を侮辱しているのはむしろ俺の方ではないのかと思い始める。俺はあいつをちゃんと頼れてあげていない。あいつの方が強いカードでも、俺が心配したいし頼られたい。あいつを弱くしているのが俺のエゴ。俺がそれを望んでいるから、あいつは弱いままでいようとしてくれる。

わざとこの方があいつを突き放すのは、それではいけないと俺に伝えるためなのだろうか？

「彼に敵の目を惹き付けている間に、僕らは合流を図らなければなりません」

ああ、そうか。この人は……

俺に出来ないことをやってのける。冷酷に見えるのは、多分その所為だ。俺が甘くなるのは、信頼していないからだ。ユーカーも、アルドール様も。

神子様がアルドール様を、危険な場所に彼を送り込むことを企んだのは、彼ならばそこを切り抜けられると信じたからだ。俺はユーカーを信頼するなら、振り向かずに今やるべき事に専念しなければならない。

「イグニス様、貴方は余程アルドール様のことを信頼していらっしゃるんですね」

「……彼はまだあの二人の騎士とは打ち解けていないところがありますからね。あの二人も同じです。苦難を共にしてこそですよ」

俺の言葉に一瞬面食らったように琥珀色の目を見開く神子様だったが、すぐに目を伏せそんなことを言い出した。もっともらしい言葉ではあった。

「苦難を……共に……」
「セレスタイン卿なら大丈夫ですよ、三つ子の魂百までと言いますし彼はもう手遅れです」
「はい……？」
俺の目をじっと見て、神子様は悪戯好きな子供のように微笑んだ。
「さぁ、先を急ぎましょう？これも巡り巡ってアルドールの、カーネフェルのためですよ」
「……はい」
「それに間もなく彼への助っ人も現れる頃でしょう。ですから問題有りません」

＊

（問題有りません、か……）

そうは言ってみた物の、ちょっと今回ばかりは危ないかも知れない。イグニスはさっそく胸の内で発言を撤回した。
嫌な気配がする。それが彼女のカードの気配なら、おおいに越したことはないけれど……この辺りから僕を除いてコートカードの気配が三枚もある。
一枚がセレスタイン卿。もう一枚には心当たりがある。それならもう一枚は？
カードは上から下から決まる。それでも例外は稀にある。例えば上に変動が有れば、下のカードの配役が、変わることだってあり得るのだ。
部下からの情報によって、スペードのコートカード三枚は把握した。ダイヤはジャックとキングは把握、だがクィーンがまだ行方知

れず。だがセネトレアにあるのは間違いない。
ハートは僕のシャトランジアに関わる以上、三枚とも僕は知っている。既に一枚失われたのは正直痛手だが。残りはクラブ。ジャックはセレスタイン卿、クィーンはルクリースさん……だがキングはまだわからない。
カードは国だけではなく生まれや職で揺らぐこともある。だからカーネフェルに関わる人間か、それとも農民出身かははっきりしない所がある。
クラブのクィーンとジャックがカーネフェル……アルドールの下に来た以上、キングは恐らく僕らの所には来ない。神はコートカードが同じ陣営に固まるのをあまりよく思わない。そんな結果の見えるゲームに彼らは興味がないのだ。だからバラけさせる。
第一僕を含め、コートカードはその過去から大抵人格に問題がある。一点に集約されるような者ではない。個人の意思と理想があり、そう簡単に誰かに下るようなものでもない。僕がアルドールの傍に何枚か集められたのだって、その点を利用したからだ。

（セレスタイン卿に釣り上げて貰って……そこで力を使わせる）

確信が欲しい。この付近に潜伏しているカードの正体。一瞬でもカードの力を使わせれば、僕はその情報を辿ることが出来る。神経は張り巡らせている。見過ごすことはないはずだ。
カーネフェルは火の元素が多すぎて、他のスートのカードの気配を薄めさせる。クラブのカードは力がここでは増幅される分、見つけやすい。アルドールが道化師やエルス＝ザインに見つかるのもその所為だ。だから戦うのは他国の中が良い。その方が有利。だからカーネフェルは今危うい。さっさと彼らを追い出して、僕らが攻めなきゃ勝ち目がない。

「……イグニス様」

ランス様の声に顔を上げれば、そろそろと海辺からタロック兵が引いていく。彼らは林の方へと向かっているようだ。セレスタイン卿が惹き付けてくれたのだろう。

「上手く行きましたね」

その隙に僕らはその場を抜けて、数術で船へと上がる。しかし船はしんと静まりかえっていた。

「イグニス様……これは」

「妙ですね、人の気配がありません……いや」

僕が現れたことに気付いたのか、数術を解く気配。姿を現したのは、明るい調子のカーネフェル人の少女。兵士である以上そこそこ筋力は付いているが、それなりに可愛らしい外見ではある。だがそれは彼女の本当の姿ではない。マリアージュほどではないが、この子も変装スキルには定評がある。

「神子様っ！」

彼女は僕を見るなり駆けて来て、思い切り僕に抱き付いた。彼女の方が身長高いから何というかもろに。うん、もろに。でも僕には素直に喜べない理由が三つほどある。まずは一つ、それは彼女が厄介な者を飼っているから。そして二つ、それは偽りの肉の塊だからだ。そもそもそれは肉でも脂肪でもない。俗に言う以下察してください。最後の三つ目は……まぁ、今となっては問題になるのかならないのかよくわからない。

それは兎も角このまま抱き付かれていると、僕といえども面倒臭いことになる。なので僕はその厄介なモノに今に離れる、そう告げ

る。

「よく来てくれたね、シャルルス」

よしよしと彼女の頭を撫でてから、本題を思い出してくれと訴えれば我に返ったように跪く。先程までの明るい表情が嘘だったかのように沈んだ顔で。

「今日はまだ連絡がないから心配していたんだけど……何があったんだい？」

「海上でタロックの船から奇襲を受けました。辺りには数術妨害の数式も紡がれていて……私程度の術者では破れない物でした」

それは仕方ない。この子は純血にしては優秀で数術は使えるし戦えるが、通常時では相手が混血なら劣る。中途半端なナンバーなのは否めない。それにその性質上、力にムラがある。あくまで今回は補助に徹しろと命令したから、仕方ないことだろう。

「……タロックのカードが本格的に数術を会得し始めたってことかな。いや……エルス＝ザインの可能性もある。相手はどんな技を？」

「嵐です。殺意しか感じられない大嵐……」

嵐か。エルスも風使いではあるが、そこまで大きな精霊は憑けていない。信仰を無くした哀れな精霊……通称悪魔、タロック風に言うと妖怪共の寄せ集め。一匹一匹は大したことはなくとも、それが合わさることで強大な化け物になった。そう言った怨みの化身をいくつかあれは憑けている。彼の憎しみ怨みの波長が彼らと異常なまでに共鳴したから、彼は彼程の数術を手に入れた。それでも嵐を起こすほどの力は彼にはない。僕が見た限り、エルス自身は壱の数術

使いだ。攻撃数術は全て精霊頼りと言って良い。
　このカーネフェルの地で風の元素を気ままに操るってことは……タロックのかなり上位カードの仕業、その可能性が高い。それならエルスの線は薄いか。

（どうやら、タロック王がカーネフェルに来ているというのは今度ばかりは本当かも知れない）

　どこで盤面が歯車が狂った？これはこれまでの僕が知らない展開だ。だとしたら、不味い。エルス＝ザインはタロックまで飛ばない。短期間で帰還する。流石に国をまたいで飛ぶような転移数術は使えないだろう。如何に彼が混血だってそれは無理というものだ。契約数術だからって、代償がないわけでもないし、第一脳内計算に耐えきれなかったらそれでアウト。混血だって身に余る力を求めれば、脳死は訪れる。混血の数術使いは自分の力量と潜在能力を正しく理解する。その上で力を行使する。それが数術学の基本中の基本。

「状況から察するに、この船は君が一人で動かしてきたってことだね？」
「はい」
「それで残りの兵士は？」
「退避させそれぞれ別のルートから上陸を。嵐に最短ルートで来る船に、カードがいると思わせなければなりませんでしたので私がそれを……」
「……そうか、ありがとう。最善の行動だよ」
「あ、ありがとうございます」

　照れたように彼女は視線を逸らしたが、僕は膨れあがるような殺意に当てられる。これは彼女の責任ではないとはいえ、本当にとばっちりだ。

「タロック軍の船は此方に向かって来たと言うより、この辺りを警戒していました。もう既に一度上陸した者達の一部かと」

此方の船がやって来たのを見て出陣させたのか。北部のこの辺りは既にタロックに掌握されつつあるらしい。

思えば都攻めを遂げたのは南部から侵攻して来た双陸、エルス。それまでは南北からの挟撃を狙っていたタロックも、無理にザビル河を渡る必要が無くなった。だから河を渡れなかった連中は、引き返し北部の支配に専念し出した？もっともある程度は各地に兵を残していたのだろう。唯通り過ぎるだけと言うわけにもいかないだろうから。

河を渡れず北上する者と、北から降りてくる者。どちらにしろ僕らは挟み撃ちにかけられている。今度こそ逃げられない。

「ユリスディカは？」

「彼女の船は近場の海岸に」

「なるほど。それを聞いてあの湖城からタロック軍が飛び出した……ということか。所で一ついいかいシャルルス」

「神子様？」

「君は何時から僕を神子と呼ぶようになったのかな？」

僕は服の下から取り出した、十字銃を彼女へ向けた。それに驚いたのは話を聞くことに専念していたランス様。

「い、イグニス様！？彼女は貴方の部下ではないのですか！？」

だけど構っている暇はない。ちょっかいをかけてくるなら僕の方だと確信していた。僕がアルドールと離れたのは主にそのためだ。

「この辺りの気配を歪めていたのはお前だね。ねぇ、ジョーカー？」

＊

その言葉に、ランスは言葉を無くしてしまう。

自身も数術使い。ある程度の術なら見破れる。

それでも道化師と呼ばれる相手をまだ見たことがない。だから何が本当なのか、わからなくなってしまう。限りなく気配の薄い、数術を解いたその者は……神子様と瓜二つ。

教会の礼服に身を包む可憐な混血の少女。愛らしさと残忍さを感じさせる、奇妙な笑みを浮かべていた。

「……さっすが“お兄ちゃん”！でも良かったの？部下との秘密を一つこんな序盤で私に教えてしまうなんて」

お兄ちゃん？道化師が神子様の縁者？いや、それに化けている？わからない。俺は皆から離れていたからシャラット領には行かず、道化師に会わなかった。アルドール様達の状況から、とても聞けるような状況にもなかった。それにあまりに忙しすぎた。

動揺する俺とは違い、神子様は冷静そのもの。それでもその瞳に宿る強い感情がある。美しい色の瞳を隠しきれない殺意で彼は光らせている。

「何処まで本当か解らないけど、そっちもタロックの情報をわざわざ僕にくれたじゃないか」

「そりゃあそうだよ。“愛しの妹”のためだもの、ねぇ……“ギメル”？会いたかったよ」

途端に声のトーンが変わる。先程までのテンションとは打って変

わった、淡々としたやや低めの声。愛くるしい少女のそれだったはずの表情まで、冷淡な少年のそれへと変わる。その素顔、その声は神子様の声に酷く似ている。だが違和感。それは先程の抱擁を思い出すような、うっとりとしたその口調。聞き流そうものならそこに囚われがちだが、注目すべきはそこにない。耳に残った単語は、妹、それからそれらしい人の名だ。

「神子様が……女性……？」

「ああ、初めまして高名な騎士様。出し惜しみされ過ぎて仲間はずれの可哀相なランス様」

何故それを！適確に此方の神経を逆撫でるその言葉。数秒前に言われたことを忘れてしまいそうになる程苛立つ。しかしその話題に引き戻したのはその、不愉快極まりない道化師だった。

「彼に教えてあげなかったの？」

くすくすと、その少女だか少年だかよくわからない者が笑う。

「何の話かわからないな。下らない話をしに来たわけ？」

「下らないだって？この間のことで理解したと思ったんだけど。君じゃ僕には勝てない」

「……」

「いや、別に僕は愛しの妹の衣を剥いでそこの騎士様に証拠を見せるような変態趣向はないから安心してよ。そんなことをしなくても疑念を植え付けることは出来るからね」

証拠があるわけではない。それでも魔法のように、道化師の言葉が俺の中へ滑り込む。途端に神子様が、少女にしか見えなくなる。数術が解けていくのか。それとも此方がまやかしか。顔立ちが解っ

たわけではないのに。先程まで見目麗しい少年だと思っていた子が可憐な少女にしか見えない。俺は今まで何を見てきたのか。それがぐらぐら揺らぎ出す。

どうして俺は知らない？知らないのは俺だけ？やはり俺は信用されていない？あんな男の子供だからか？俺もいつか裏切ると……

「違います」

「イグニス様……？」

負の感情に囚われそうになった俺を、そこから掬い上げるは凛とした声。

「アルドールとセレスタイン卿に知られたのは事故です。本当は誰にも教えるつもりはありませんでした」

その言葉にはいつものような含みが感じられない。それどころか……

「い、イグニス様っ！？」

彼女は慣れた手つきでボタンを外し、胸元をくつろげる。俺は咄嗟に目を背けたが、それでも視界の端に少しだけ、小振りではあるが男のそれとは違う胸元が見えた。

「女は聖教会の神子にはなれない。万が一広く僕の正体が知られれば、僕はこいつに今の地位を奪われる。そんなことがあってはならない」

道化師が、神子様と入れ替わる。誰よりアルドール様の味方のような顔をして、最大の敵を傍に置くことになる。

女の身のイグニス様がどうして神子になれたのか。その経緯はわからないが、俺は今国家機密以上に触れている。
あくまで嘘を突き通すことも出来ただろう。そえでも敢えてそうしてイグニス様は、俺を信じてみようと思ってくれたから。そうなんだと思う。
カーネフェルをここから立て直すためにはこの方の力が必要だ。シャトランジアに必要なのはこの人だ。道化師ではない。

（それに……）

アルドール様にとって、一番必要なのはこの人だ。俺の仕える人が信じる人の言葉を疑うことはアルドール様への裏切りだ。この人が何者であっても、俺がすべきことは一つだけ……

「ギメル、そんなストリップはあんまりだろ？恥じらうようなサービスはないの？」
「別に見られるくらい今更だ。大体恥じらってもこんな場面じゃ何も特にはならないよ。僕は得にならないことはあんまりしない主義だ」
「それもそうか。でもちょっとは良いこともあったんじゃない？だって騎士って生き物は守るべきご婦人方がいる方がやる気が出るって言うじゃないか」

道化師が、俺を見てにたりと口元を釣り上げる。そこには得物を手にした俺の姿が映っているはず。

「イグニス様。貴方の秘密は私が守り通します」

俺は左手で母さんに貰った水入り水晶を握りしめる。どうか力を貸して欲しいと……

俺の祈りに呼応して、水の精霊が集まってくる。ここは海、水の元素なら幾らでもある。これなら少しはやり合える。そう思ったのだが周りの反応は芳しくない。

「無茶です、ランス様！幾ら貴方が強くても、相手はジョーカーなんですよ！？」

「冷静に見えてやっぱりクラブのカードなんだねアロンダイト卿は。“感情に走るのは身の破滅。いずれそれが貴方の命取りになるだろう”」

珍しく狼狽える神子様と、予言めいた言葉を紡ぐ道化師。その言葉には俺の身体にまとわりつくような嫌な響きがあった。否定の言葉も口から出ない。絶対的かつ問答無用の正当性が灯った言葉。見れば、言葉だけではない。その口から飛び出す言葉は禍々しい数値を生み出す。

（これは数術！……でもこんな数術見たことがない！）

どうすればその数式を相殺できるのか。水の数術を簡単にそれはすり抜ける。攻撃も防御も効かない。得体の知れない数式が迫る！

もう後は物理攻撃しかない。剣を構えるしかない俺の前に神子様は進み出て、その言葉に挑むように言葉を謳う。

「誉れある騎士よ、貴方はこれから旅をする。幸福を幸福と知るために、貴方は深い悲しみに落とされる。“悲しみなくして喜びを知ることはない。苦難は貴方の救いのために現れる”」

「イグニス様……？」

「聖杯は既に貴方の中にある。後は貴方がそれを見つけるだけ……“ランス様、貴方の幸せを願っています”」

抽象的なその言葉が何を意味するのか解らない。唯道化師の言うようにこれから俺に何かが待っているのは確かなようだ。神子様はその悪意の言葉を僅かにねじ曲げて、救いの糸口を作り出してくれたのか？

その澄んだ声は、大気に広がって……道化師の紡いだ言葉の空気を僅かに退ける。謳う彼女の笑顔は、慈しみに満ちている。天の使いその者だ。

「……ギメル、君はあくまで僕の邪魔をするつもりなんだね？どういう心変わり？これは君の願いでもあったはずだろう？」

「可哀相な、“お兄ちゃん”。貴方は何も知らないからそんなことが言えるんだ」

暫く二人は鏡のように睨み合っていた。その視線に触れてしまったら俺の存在など消し飛んでしまうのではないか。そんな強過ぎる眼差しの交錯だ。息をするのも忘れて俺はそれを見ているだけ。

「……まぁ、そんなに本気にならないでよ。僕はあの馬鹿に邪魔にされずに君と二人で話がしたかっただけなんだ。今日の所は君を殺すつもりはまだないよ。僕としても可愛い“妹”はメインディッシュに取って置きたいからね」

「……あっそ」

そんな幕切れ、二人が視線を逸らす。その直後に俺はようやく身体の自由を取り戻す。

「イグニス様っ！」

「大丈夫です。僕は……」

そうは言うが、ふらついている。そうだ、元々彼女は本調子では

なかった。タロックの数術使いの虫にやられていたことを、俺は今更ながらに思い出す。危なっかしいその身体を支えると、すまなそうに彼女が俺を見ていた。

「しかし、君もあんな男の何処が良いんだろうね。そこの騎士様の方が全パラメーター遙かに上だろう？アルドールなんか身分以外に取り柄のない馬鹿じゃないか」

「ああ、そうだね。否定はしない。その身分さえ失いかけている阿呆だと付け加えてあげても良いよ」

幾ら親友相手と言えど、流石にそれは酷すぎる。親しき仲にも礼儀ありとは言うけれど、この神子様は親しい相手ほど礼儀を失う人らしい。

「……だけど彼を馬鹿にして良いのはこの世に一人、僕だけだ。王の名を汚すことは許さない」

「イグニス様……」

それでもその言葉は、この海よりも深い信頼が結びつきが二人にあってこそ。本当に相手を大切に思っていないなら、こんな表情は出来ない。俺だってあいつのためにここまでの顔が出来るか怪しい。

静かな怒りをそこに湛えて、神子様が再び道化師を睨む。そんな彼女の気迫に俺は息を呑む。数術があるとはいえ、懐に入られれば赤子も同じ。接近戦では俺の足元にも及ばない。そんな数術使いが一瞬でも俺を震えさせた。本当に……この方は何者なのだろう？答えがまるで見えない。

「それに彼には彼の良さがある。それに気付けないお前は本当に可哀相だと思う」

「冗談が上手くなったね。あんな男に良いところがあるって？あ

いつと比べればそこらで湧いている蛆の方がまだ見所があるよ。ちなみにその長所って？」
「それは勿論、彼が馬鹿だと言うことだよ」
「ははははは！それは欠点以外の何物でもないだろう？……って、僕は戦いに来たんじゃないって言っただろ？」

剣を収めない俺を嫌そうに、道化師が横目で見る。

「それ以上、我が君への侮辱は謹んで貰いたい」
「まったく、何が最高の騎士だって？呆れたものだね。それとも毛並みの良い犬も、飼い主に毒されるとろくでもない野犬になるのかな。ああ、怒った？でもそれって本当にアルドールのため？本当は自分のためだったりするんじゃないの？貴族育ちはみんな馬鹿みたいにプライドが高いから」
「ランス様、耳を貸してはいけません」

道化師の言葉を遮る神子様に、奴はやっと話をする気になったのとにやりとほくそ笑む。

「ふふふ……僕は悩んでいるんだよ、ギメル。君をアルドールの目の前で殺すか、アルドールを君の目の前で殺すか。どちらの方があいつにとって苦痛かわからなくてね、正直まだ選び切れていないんだ」
「そう。それじゃあ第三の選択肢を上げよう。お前から死ね」
「その顔で言われても、僕の不興は買えないよ？」

嫌味と敵意、あちら側からは歪んだ好意のようなモノまでそこに混ざってその応酬を濁らせ脱線させる。しかし道化師がアルドール様を心底憎んでいると言うのは紛れもない事実だと、第三者の俺でも解る。

「何故そこまであの方のことを……」

彼は取るに足らない少年だ。だからこそ弱く脆く頼りない。それでも希望の火を背負う。この国が俺が失ってはならないものだ。

彼は至らない。何にもならない未熟者。だからこそ、人から憎まれるところまでも行かないはずだ。少なくとも殺してやると相手に殺意を抱かせるほど、彼の中に悪はない。

俺が彼を少しばかり妬むのは、俺が人として未熟なためであり、何も彼の所為ではない。

「サー・アロンダイト。今の貴方には解らないことだよ。貴方は本当の意味で人を愛したことも亡くしたこともないんだから」

「な、何をっ……」

それくらい、それくらい……記憶を巡るが検索に引っかからない。愛は愛でもこの者が言うそれに該当する愛はない。別にそんなものがなくても俺はここまで生きて来られた。どうせ老い先短い生だ。無理矢理必死にそれを求める意味が何処にあるというのだろう？俺はこれ以上の未練は欲しくないのだ。

大体それの何が偉いのだろう？それを知らない人間は人間として欠陥品だと言わんばかりの嘲笑を、道化師は浮かべている。その目は俺がユーカーよりも劣っていると暗に語りかけて来る。

「僕はこれまで貴方に殺された相手が哀れで仕方ないよ。貴方のような空っぽのがらくたに、未来を絶たれるなんて」

「溢れた水は落ちるだけ。空の杯はより多くの水を受け止められる。雨さえ降れば彼は誰より深い愛を知る。お前の言葉は侮辱として意味を成さない」

理不尽に俺を責め立てる道化師の言葉に対するは神子。こんなにもそっくりなのに、道化師は噛み合わないその思想に苛立っているようだった。

「物は言い様だね。それともギメル、君は聖職者だからそうなのかな？お前は誰も愛せないし愛することも許されない。だからこそ愛を知る人間が妬ましい。愛を知らない人間が好ましい」

「そんなこと、僕には関係ない。それは僕にとっても、取るに足らないことだ」

彼女の言葉は苦しげで、それでも強い決意を底に秘めている。その目は自分にそんな資格はないと口にしているようで……やっぱり目の前の少年よりも、俺に彼女は似ている気がした。

「僕はアルドールが好きだ。だけどそれは友人として。それを下世話な方向に持っていく奴が僕は一番嫌いだ。それが僕と彼に対する最高の侮辱だ。僕が何であろうとも、それは揺るぎない物だ。“僕はイグニス！お前とは違う！僕は彼の親友だっ！”僕はギメルじゃない。その名で僕を呼ぶなっ！」

「……なるほど、半信半疑だったけどこれで確信が持てた。……やっぱり僕の願いは全てを葬り去らないと、叶いそうにないんだね」

片手を夜空の月に伸ばし、それがあまりに遠いと泣くように……道化師が少し寂しげに、小さく呟いた。けれどそれはほんの一瞬。刹那の中の出来事だ。彼はまたすぐに唇を釣り上げて、神子様とは違う笑みを浮かべた。

「それなら僕は何も苦しまず、悩まず、君を殺して良いわけだ。ありがとう“ギメル”、少しは楽になったよ僕も」

その歪な礼など歯牙にも掛けず、神子様は冷たい目で肩をすくめる。

「そんなことより、僕の部下は何処へやったんだ？今日一日彼らと連絡が付かないはどうせお前の所為なんだろ？」

「むしろお礼を言ってくれても良いよ？この船以外はタロックの嵐に航路を変えた。この船の乗組員達はその敵船の中へと飛ばしてあげた。それを倒せたなら無事に上陸している頃だろう」

「また余計なことを……」

あわよくば相打ちさせようという道化師に、神子様は深い溜息を吐く。

「そう、ユリスディカだっけ？あの子は君の部下のシャルルスって子が数術弾を使って逃したよ。彼女自身は船に残ったと思うよ。そろそろ妨害数術を解いてあげるから、これで通信も来るはずだ」

道化師が妨害数術を無効化。部下からの情報が届き始めたのか、神子様は舌打ちながら彼を睨んだ。

「まぁ、しばらくは僕も大人しくして置いてあげるよ。タロックが楽に勝ってしまったら、後々僕としても厄介だ。精々カード同士潰し合ってよ。正直な話、僕としてもAを4枚も相手にしてられないからね。アルドールの馬鹿は兎も角、他のAは強固な守りがある」

どこまで信用して良いのか解らない。重みの感じられない言葉で、道化師が数歩歩み寄る。今日は戦うつもりがないと言いながら、油断も隙もない。俺は再び剣を構える。しかし目に飛び込んできた光景に、俺は再び動けない。

彼は彼女に自然な動作でこつんと額をくっつけたと思った。二人

並ぶと二人の身長が違っていることに俺は気付いた。神子様の方が一回りほど小さい。アルドール様よりは道化師は低いだろう。それでも彼女には勝っている。こんなにそっくりなのに、左右対称ではない二人の姿に何故か不意に胸が締め付けられるような感覚が襲った。それは神子様も？だから彼女もそれを拒めなかった。そうして居ることで、互いに異なる願いを同じ物へと戻し解り合えることが出来るなら、彼らはそんな祈りの像のよう。

しかし事件はその一瞬の隙に訪れた。

絵にはなる。二人とも混血だから見目麗しい。だから絵にはなる。なるにはなる。それでもこの二人の関係が解らない。信じて良いのか解らないが、彼らの言葉を鵜呑みにするなら二人は実の兄妹らしい。その意外な行動は、先読みの神子様ですら読めなかったのか完全にされるがままだ。彼女が予見できないことを、どうして俺が動揺しないでいられるだろう？

完全に時が止まった。この場所は道化師が完全に掌握していた。それでもやがて我に返った神子様が……片手を振り上げる。神子様に思い切りビンタを食らって、ようやく彼女の唇から離れる道化師。

「痛いよギメル」

「痛くしたから当然だよね」

照れか羞恥かそれとも怒りか、顔を上気させる神子様に、頬を打たれた道化師は……心なしか満足気。

「それにしても、本当にこっちの耐性ないんだね彼は。何処の箱入り騎士？ていうか騎士連中ってよく手の甲にやったりするじゃない」

「するのは平気でもされるのとか、見せられるのはまた別の話だよ。第一場所と意味が違う」

こんなの挨拶じゃないかと、俺の反応をせせら笑う道化師と、……反吐を吐くように、心底嫌そうな顔で唾を吐く神子様。最後の最後まで俺を小馬鹿にした道化師は、置き土産と言わんばかりに神子様にも嫌味を置いていく。

「今日は楽しかったよ、ギメル。暫く見ない内に綺麗になった」

元素を無理矢理従えるような膨大な光……数字の渦。それに包まれ道化師の姿が揺らぐ。

計算式自体が彼を守る結界なのか、容易に近づけない……それどころか此方が立っていることさえ危うい。バランスを崩し倒れ込む神子様を抱き留めて、俺も膝をつく。

「……と言いたいけれど、君はあの日と変わらず可愛いよ」

あの日と変わらない？それは何時との比較？俺には何も解らない。それでもその一言が、神子様の胸を深く抉った。暗い影が琥珀の瞳に降りて行く。その影は、道化師……その人の影が消えた後も、彼女の目の中に深く残されていた。

＊

「聖十字……？」

ユーカーは、その場の流れについて行けずにぽかんと口を開けていた。

「その顔を見るに、本当に何も知らなかったようだな」

惚けていると、黒の騎士が少し驚いたように呟いた。神子の部下

がこの辺にいるとは聞いてはいたが、それが純血だとは思わなかった。
いや、本来ならそれが当然だ。でもイグニスはその部下を信頼しているようだった。だから神子が混血だから、その部下も混血なのではないかという先入観が俺の中にあった。
ついでに言うと聖十字のカーネフェル人は大抵女だ。人口比率的にそうなる。後は亡命して来たタロック人の男がそれに次ぐ。聖十字軍の中にはタロック女はまずいない。カーネフェルの若い男も割合ではほぼいないに等しい。居たとしても中年とか爺が大半だ。
それもそのはず。カーネフェルの若い男は、その出生率の低さから貴重。適当な場所、適当な身分に生まれても、アルドールの阿呆のように養子として貴族の家に貰われたりする。法を破り奴隷商に売られる者もいる。売られなかったとしても攫われ金に換えられることもよくあることだ。
俺はこんな目の所為で真純血でも価値は殆どない。それでも昔、ランスの馬鹿はよく攫われそうになったもんだ。小さい成りで剣は強いわ精霊の加護のある数術使いのあいつをどうこう出来る連中はいなかったが。要はそれくらいカーネフェリーの男は貴重だって事だ。
だから自分の息子を聖十字なんて危険と隣り合わせの職に就かせる馬鹿な親は居ない。いるとしたらそれは自分の意思で軍隊入りした正義漢か愛国者。
（……神子から与えられた任務を投げ出して、カーネフェルに上陸ってことは）
この少年はそのどちらか、或いは両方である可能性が高い。でなければ赤の他人の俺の危機にこうして自らのみを危険に晒すはずがない。

「タロックの騎士よ！その子を放しなさい！」
「それならば、まず先にすべきことがあるだろう」
得物を捨てろ。そう告げられた少年は、迷うことなく手にした剣を投げ捨てる。思い切り。
「解りました」
しかし投げる方向がよりにもよって騎士狙い。俺としては助かった。黒の騎士がその攻撃を防ぐため、俺を掴んだ手を放し突き飛ばす。そして自分の得物を奴も構える。……不意打ちとはいえあんな攻撃でこの騎士をどうこう出来るとは思えない。それなら……その攻撃が騎士に届く前に俺は飛んでくる剣を掴む。ずしりと重い諸刃剣。長さも申し分ない。やっと俺も本調子になれそうだ。
「もう一勝負と行くか？生憎俺はまだ降参してねぇぞ」
受け取った得物を構えた俺に、騎士は黒い目を軽く見開いた。俺が逃げるものだと思いこみ、俺はここで挑みに来るとは思わなかったのだろう。
「……そんなに俺に嫁ぎたいのか？」
「したかねぇよ！つぅかもう我慢ならねぇっ！これ以上俺を侮辱するってんなら……」
「駄目ですよ」
「は？」
騎士の言葉に噛み付いた、俺に近づく聖十字。さっと、俺の手から剣を奪い返して微笑んだ。

「これは貴女のような方が持つべきものではありません」

持つべき物じゃないって、むしろ四六時中三百六十五日俺は剣と一緒だぜ？騎士だし。それが普通だし。ていうかいい加減誰か気付けっ！せめて一人くらい気付っ！お前ら眼球腐ってんのか？俺は男だ！

「大丈夫ですか？」

「え、ああ……」

「怪我はないようで良かった。でもこんな時間に女の子が一人で出歩くなど不用意にも程があります」

にこりと優しげに微笑まれても、それは悲しいだけだった。何度も言うようだが俺は男だ！その証明のため本名暴露し変装服を脱ぎ捨てたくなったが、それはそれで俺のプライドが許さない。これ以上北部で変な尾鰭の付いた噂を抱え込みたくない。

「いや、あの……あのな俺は」

弁解しようとしたが、思うように言葉が出ない。籠手の下から覗くのは、俺よりほっそりとした長い指。それでも一瞬触れた指は硬い。そこには幾つもの剣蛸がある。懸命にがむしゃらに剣を振るって来た手だ。そこには俺の中にはない気迫のような、危機迫る何かが感じられた。その何かが俺に訴える。剣を持つべきではないのはこの子の方なのではないかと。

「それで私に何用ですか？」

「何用とは解っているだろう？其方も俺達を捜していたはずだ」

「……要求は何ですか？」

「お前の仲間は全て捕らえた。捕虜としての扱いを望むのなら、

我が軍門に下れ」

騎士と少年兵の会話に俺は一人置き去りのまま。

（……おいおい、正気かよ？）

俺とそう背丈の変わらない……いや、ちょっと俺より高いかも知れない。だが顔はまだ少し幼いというか……いや、整っているというか。こんな少年兵をタロックの奴らが捜していたとは。

しかもルクリースの風評被害攻撃が真実味を帯びてきた。自然と下半身に力が入る、強張った。おいおいおいおいおいちょっと待て、俺はそんなの御免だぞ。

「くそっ……」

この少年兵がそうしなければ神子の部下、つまりはカーネフェルに縁のあるシャトランジアの女が捕虜以下の扱いを受ける。処理の道具に使われる？奴隷として売られる？

この少年が下っても、それは犠牲の数が変わるだけ。自身を贄に最小限の犠牲を望むか、より多くの不幸か。それを男は問うている。

「……」

「答えは決まったか、聖十字？」

少年のまっすぐな青。潔く、一点の曇りもないその青は……確かに惹き付けられる何かがあるようだ。

「解りま……」

「解られて堪るかよ」

だから嫌なんだ。俺は胸の中で息を吐く。
何も見えなきゃ、こうして何も守らなくて良いはずなのに。何処かへ行けば何かと出会う。こうして勝手に背負わされていく。

「こいつが何かは知らねぇが、この俺を差し置いて交渉とは頂けねぇ。いいかお前ら、ここはカーネフェルだ。そしてお前はタローク。そっちのお前はシャトランジー。ここはカーネフェリーの俺に話を通すのが筋ってもんだ」

勝手に人ん家の庭で好き勝手やりやがって。この辺はまだアロンダイト領だぞ？ランスの家は俺の家。要するにここは俺が守る対象内。そういうことだ。
仕方ない。こいつらはカードのことを知っている。それを見せればこいつらの興味は俺へと移るはず。
手袋を地面に叩き付け、ついでにうざったいドレスを脱ぎ捨てて、変装を解く。下に普通の着ていたから別に問題はない。しかし戦いにくいのなんのって。ドレスの下から見えないように下服の丈が普段より短いのが違和感だし、動きづらい。蹴りのスピードも開脚も、ダッシュも何もかもが煩わしかった。
俺は手の甲……クラブのスートを見せる。そしてその手を裏返し、Ｊの文字を見せてやる。それには少年兵をも含め、その場の人間全てが息を呑む。

「北部でセレスの名を聞いて、目の色変えねぇとはお前ら新参者だな。俺はユーカー＝セレスタイン。アルトリウス王の騎士だ！」

「セレス……？まさか、こいつは！？」
「師団長！この女はっ、カーネフェル王の腹心！ロードナイトっ！！」
「ほぅ、あの熊殺しの名高い騎士か。隻眼というのは嘘だったの

か。なるほど、一杯食わされた」
「それだけじゃありませんレクス様っ！この北部で、セレスタインの守護は絶大！夜に戦いその騎士に勝った者はいないとか……ここからどんな手を使ってくるか解りません！」
「それだけじゃありません！殺した熊を料理して、フルコースにし骨一つ残さず食べたとか！」
「いや俺が聞いたのは生でそのまま美味しく頂いたとか……」
「俺どんだけ腹減ってるイメージなんだよてめぇらっ！貴族馬鹿にするのも大概にしろっ！」

どんな尾鰭ついてるんだよ俺の活躍は。

「なるほど。料理上手と来たか。これはますます俺のストライクだ。どんな物でも食材に出来るその才能……是非我が軍に欲しい。ついでに俺の嫁にもどうだ？」
「敵に好感度上げられても嬉しくねぇよ」
「まぁ、そう吠えるな吠えるな。折角の顔が台無しだ。……しかし男殺しとも聞いていたがまさか女だったとは」
「馬鹿か？俺は男だ！」

俺の噂って主に熊と男関連しかないのか？もっとあるだろ他にっ！腹を立てて俺は騎士を睨み付ける。まじまじと奴は俺を見る。そいつは無表情……だがその部下のがっかりしたような顔に俺は少し安堵する……が、よくよく見ればごくりと息を飲む阿呆も幾らかいる。むしろ待ってましたみたいな顔止めろ。やっぱ幾らかはいるのかよ。カーネフェリーの男はレアだよな、とりあえず記念に一回食っとくかみたいな顔の奴は殴りたい。いや、蹴り飛ばしたい。主に股間を狙って。
にしても今日は何という厄日だ。いやむしろ今年は何という厄年だ。もう嫌だ。犬も歩けばとは言うが、棒ってその棒じゃねぇだろうが。

何で俺はここ最近野郎としかフラグが立たないんだ！確かに他の女とそんなことになったらアスタロットに申し訳が立たないとはいえ、これはあんまりにもあんまりだ！悪意の集中砲火過ぎる。俺だって一応生きてるんだぞ？人並みの幸せとは言わねぇが、多少なりとは平穏とか望んでも良いじゃねぇか。それが何これ。何なんだこれ。どうなってんだこれ。どうすんだこれ。

「確かに言われてみれば胸がない。俺は貧乳が好みでな、むしろ喜んでいたところなのだが……まさか無乳だとは」

「無乳で悪かったな」

「いや、だがしかし一体世の何人がその両者の違いを明確に述べることが出来ようか？」

「俺に聞くな。でも多分性別の違いじゃね？」

「いつぞや我が君は言った。巨乳こそ世の宝だと。後くたばれ絶えろ貧乳と。俺はあの方を尊敬しているがその一点だけはどうにもいただけない。でかければいいというものでもないだろう。何時かあの方が巨乳以外の女は死刑と言い出さないか俺は心配でならない。ここだけの話、量より質。この信念の前では無と貧……それは微々たる問題。そうだろう？」

「真面目な顔で馬鹿なことを言うの、いい加減止めてくれねぇか？お前の部下連中ドン引きしてるぜ？お前の第一印象ガタ落ちだわ。何でお前みたいなのがタロック一の騎士なんだよ」

「王は退屈なさっていてな。俺はいっそのこと死ぬつもりで最後の言葉を問われた時に、彼に猥談を持ちかけた。その度胸のでかさを気に入られたとかそんな記憶がある」

「止めろ、俺の中のタロック王のイメージを崩壊させるな。そんなのにあの人が俺が負けたと思うと死にたくなる」

「なるほど、だが敢えて今一度お前に問おう。ちょっとタロックの俺の屋敷まで味噌汁を作りに来ないか？毎朝」

「……条件にもよるな。俺の主はもういねぇし、就職先を探

してないこともない。有給七日と昼寝時間は付いてるんだろうな？」
「あ、貴方達っ……な、なな何てことを言っているのですか！？私は聖十字！教会の定める十字法は同性愛は禁止ですっ！」

顔を真っ赤に染めた少年兵は、俺達を見て狼狽える。俺はもう神子やあのメイド女に色々言われた所為で、慣れてしまった節がある。
ていうかだ。そうは言うけど神子を見ている限りなんかその辺どうなんだろう？割とその辺緩そうな感じではある。聖職者は恋愛禁止結婚禁止とか法では定められているらしいが、あの神子常にアルドールの阿呆といちゃついてはいないか？どこからどう見ても。可哀相に、この兵士はまさか教会のトップがあんなんだとは思わないだろう。

（つーか……馬鹿かこいつは）

せっかく俺が囮になったのに、どうして逃げない？何も俺も好き好んでこんな猥談に参加してたわけじゃねぇのに。いや、ランスの阿呆とはこういう話できないからちょっと新鮮だったとかそんなことは全然無い。まったくない。これっぽっちもありゃしねぇ。
上手いことこいつらの所に潜り込み、せっかくお仲間とやらを解放してやろうと思ったってのに。

「大体貴方はなんなのですか！？カーネフェルに生まれていながらそんなに簡単に国を主を鞍替えしようだなんて！騎士の風上にも置けませんっ！」

不味い。これは俺が苦手なタイプの男だ。いや、男は……男じゃなくても苦手なタイプ多いけど。苦手な女も多いけど。それは今はどうでもいい。兎に角これは不味いのだ。
こいつには俺のような小細工が通じない。空気を読んで話を合わ

せてくれるなんてそんな事が出来るだろうか？……無理そうだ。仲間を囚われて、すっかり使命感に駆られている。

「これだから教会の奴らは辛気臭くていけ好かねぇ」

「何ですって！？」

ツカツカと俺に歩み寄り、俺を睨み付ける青の色。教会を侮辱する言葉が許せないと、俺に手を振り上げて……そこで何かを思い出したように、そいつはその手を止めていた。

よくわからねぇ。だが好機！

俺は油断しているそいつの手を引っ掴み、思い切り上空へと放り投げ、叫ぶ！

「リンガーレット！」

近場に潜ませていた俺の馬。それが少年兵が地に着く前に現れ、背に乗せる。あいつは暴れ馬。振り落とされたら唯じゃ済まねぇ。それを悟ったのか兵士は必死に馬にしがみつく。

俺の判断に、レクスという騎士はにやりと笑う。その笑みに俺は思う。こんなのが狂王の腹心だって？なんともやりにくい相手だ。だってこいつは俺にまるで敵意がない。

「何時、気付いた？」

「手を見てだ。何人俺が部下に剣教えてきたと思ってんだ」

剣を振るう女の手と男の手。その違いが解るようになる程度には、俺も面倒臭い役をさせられて来た。

「なるほど、腐っても騎士と言うことか」

「……ったり前だろ。この俺の前で、女に剣を握らせられるか」

俺の言葉に敵ながらあっぱれと言わんばかりに男は頷いて、俺にどうするつもりだと問う。

簡単には俺を殺せない。それは相手も理解した。そして考えるはず引き抜けるなら引き抜きたいと。こいつらが数術を何処まで理解しているかわからないが、神子が言う元素の相性。それを考えるに、タロックの連中ほどクラブのカードが欲しい奴らは居ないのだ。

「……そんじゃさっきの勝負の続きと行こうぜ？簡単に俺の主になれると思うなよ？少なくとも俺は俺より弱い奴には従わねぇからな！」

俺は聖十字兵が残した、十字の剣を手に取り笑ってやった。こいつに恨みはそんなに無いが、だからってそれは戦わない理由にはならないだろう。こいつはカード。削れるだけ削っておくのが俺の仕事だ。それがランスの野郎の望みなら。

13：Fama crescit eundo.（後書き）

６章ヒロインの本格的な出番は多分次辺りから。

14：Ave, imperator, morituri te salut

「いたか！？」
「いや、こっちにはいない！あの方の愛馬が走っていくのを見たって奴もいる……もう領内にいないのでは？」
「そんな！しばらくはこっちに留まるって聞いたのに！」
「うちの畑で取れた野菜を届けに行こうと思った矢先にこれだ……」

誰も何も言っていないのに、外には騒ぐ人に嘆く人。アルドールはその騒ぎに目を丸くする。

（俺はユーカーの不在に気付けなかったのに）

ユーカーは北部の守りの代名詞。彼がいなくなったことで不安に駆られているのだろうか？そう思ったけど、え……野菜？

「……どういうこと、でしょうか……？これ」
「いやはや、北部……とりわけうちの領地でのセレス君人気は凄くてね」

ユーカーの不在を何処から聞きつけてきたのか、アロンダイト領内は夜中だというのに騒がしい。やはりバレてしまったかと、ヴァンウィックは肩をすくめた。

「ユーカーに何か用でもあったんですか？」
「いや、そうではないんだよ。彼らはセレス君に恩があってね。収穫した物を是非食べて欲しいと競い合っていて……喧嘩ばかりするのでローテーションで割り振りして納得して貰ったばかりだった

んだ」

そう言えば昨日、ユーカーが畑から勝手に色々取って来たらしいけど、何の文句も言われなかった。てっきりここがランスの家だからだと思ってたけど違かったのか。それどころかむしろそれはこの人達にとっては光栄なことだったのか。

「何処だぁあああああ！！」

「探せぇえええええ！！逃がすかぁあああ！」

「ええ！？」

今度は男達の野太い声。さっきは女性ばかりだったからその落差に驚く。それどころか彼らは暗闇でも解る、暗い色の髪。

「た、タロック人！？もうここに攻めて来たのか！？」

「もうセレスの留守に気付くとは……アルドール様、どうか私にご命令を」

「僕も、頑張ります！」

慌てふためく俺。応戦の命を求めるトリシュとパルシヴァル。しかしその背後で肩をすくめるヴァンウィック。

「いやいやアルドール様、あれは私の所の領民です」

「ええ！？タロック人が領民なんですか！？」

俺は愕然としたが、聞こえてくる声をよくよく聞いてみるとそれは物騒な物ではない。

「何処に行っちまったんだセレス様ぁあああああ！！」

「んだ。あの方のために、芋の煮っ転がしさ肉入れて拵えてたっ

てのに」
「こらこら君たち、文句を言いたいのは解るがそう騒ぎ立てないでもらおう。折角のセレス君の思いを無下にする気か？」
「領主様！折角あの方お帰りだって聞いて俺達領地外れから来たばかりなんだ」
「あんまおおっぴらに出歩いたら迷惑かと思って日暮れになってから出てきたんだぞ！」
「やれやれ。どうしたものかな」

領民とはいえ領主の言葉が届かない。一体ユーカーは彼らに何をしたんだろう。

「……ほら、セレス君は山賊だけでなく海賊退治もしていたと言っただろう？その最中救われた者も多いんだよ。それだけでもないがね」
「あ……そうだったんですか」
「彼に頼まれここでの生活を保障したのは私なんだが、いや……私などより彼らはセレス君にぞっこんなんだよ悲しいことに。そうそう、セレス君の隊に入ったお姉さん方も奴隷上がりの子が多いんだ。彼に恩返しがしたいとね」
「やっぱりセレスさんはヒーローなんですね！」

ヴァンウィックの言葉に、格好良いですとここにはいない人に惚れ惚れしているパルシヴァル。それから……

「ああ、イズー。私のイズー。貴方はなんて優しい人なんだ！」

違う意味でメロメロな人がいる。ユーカーも大変だなぁ。自分がいない場所でさえ、勝手に好感度を上げられてしまうなんて。これユーカーの方はどうか知らないけど、トリシュ側では完全にユーカ

ールート入ってるよね。ていうか一本道だよね。俺には関係ないけどさ。

（でも……）

ユーカーは凄いなぁ。目の色で人に軽んじられても、それを行動でカバーして……こんなに沢山の人に慕われているじゃないか。俺なんかとは違う。それが重荷なのだと彼は言ったけど……それはどうしてなのだろう？

「多少扱いにくいところはあるがね……まぁ、助かっているのも事実だよ。男手の少ないこの土地で……信頼できる守り手が増えるのは。私が安心して領地から離れられるのもセレス君と彼らのお陰だ。セレス君は嫌がるだろうが、セレス君に何かあれば農具の代わりに武器を取って戦ってくれる気概のある領民達だからね」

「……どうしてユーカーは、進んで彼らを自分の配下にしなかったんでしょうか？」

話を聞く限り、部下になったお姉さん達というのは自ら志願してやっとという印象を受けた。

「都近辺でセレスタインが幅を利かせるのは都貴族達が避けたい。第一タロック人をカーネフェルの軍に加えたがらない。そしてセレス君はああ見えて騎士様だ。女性は戦わせるものではなく守るものだと思っている節がある。……それから父親と同じ事はしたくなかったんじゃないかねぇ」

「父親……？ユーカーのですか？」

「ああ。私の兄も、そうやって恩を押しつけ兵力を拡大させた男だからねぇ……彼はあいつを嫌っているからそういうことは嫌なんだろう。そんな意図がなくとも、家のためになってしまう働きは…

…あの子にとって自分が道具だと認めるようなことだから」

ユーカーの父親。話には何度か聞いた。先王アルトさんの忠臣。王の権威を守るため、シャラット領を滅ぼした。その際ユーカーの婚約者……アスタロットさんを殺害した人。それ以来ユーカーが帰らない土地の人。だけど本当は……誰よりも認めて貰いたかった相手。

（ユーカー……）

ユーカーやこの人の血縁者と思うと、そこまで悪い印象を持てないのだが……実際どんな人なのだろう？……もっともヴァンウィックだって気さくな美中年だが、ランスや女の人の立場からよくよく考えれば考えるまでもなく酷いことをしている。それなら忠臣とはいえいい人とは安易に呼べないのかも。

なんとなく彼を思って沈んだ俺に、先程より大きな領民達のざわめきが飛び込んだ。

「あれは、あの方の馬！」

「リンガーレットが何か乗せているぞ！セレス様か！？」

「お帰りなさいませー！セレス坊ちゃん！！」

「いや、あれは違うぞ！あれは聖十字の鎧じゃないか！」

「なんだって聖十字が！？」

聖十字。それを聞いて俺は思わず走り出す。階段を駆け下り大声でエレインさんを呼び、扉の鍵を開けてもらった。

向かった先ではぐったりと気を失いながらも手綱を放さない一人の聖十字兵。年の瀬は俺と同じくらい？少し上？わからないが、彼は疲労で衰弱しているようだ。

（……応急処置だけど）

咄嗟に俺は回復数術を展開。

俺の数術じゃ回復は出来ない。それでも一時的な回復は、気付けくらいにはなるだろう。この場からこの人を運ぶのにそれは必要だ。

「……ここは」

震える瞼。ランスのそれよりずっと明るい、だけど綺麗な青目をしている。

「良かった、気がついた？」

「あ、貴方……どうしてここに？ここは、カーネフェルなのではないのですか？」

「え？ああ、確かにここはカーネフェル。北部のアロンダイト領だよ。とりあえず俺に掴まって。話はそれからだ」

「え、あ……すみません」

「うわっ！」

肩を貸したもののあまりの重さに俺はバランスを崩して倒れ込む。この人俺より背が高い。それに……鎧が物凄く重いんだ。

「あ、ご……ごめん！」

気恥ずかしさから顔を背ける。そうだ何調子に乗ってたんだ俺は。イグニスの部下の人だと思って彼女のことを何か聞けると思ってそれで俺は。イグニスの部下の前で良いところを見せたかったんだろうな無意識で。

だけど俺はこの間まで剣も持ったことがない半引き籠もりの缶詰生活を送っていた養子貴族様だった。

尻餅をついて驚いている俺に、聖十字の人が助け起こしてくれた。本当俺って情けない。

「……すみませんでした。私は大丈夫ですので」

「あ、ああ！俺の方こそごめんなさい。それじゃあ案内します」

しかも俺ついつい敬語を忘れていた。初対面の人相手に失礼だった。ユーカーにランスにイグニスに……最近みんなに敬語使うなって言われていたから調子の載っていた。本当恥ずかしいよ。

「エレインさん、この人のために着替えと食事とお風呂……あと、手当の道具、それからもう一室部屋の用意をお願いします」

「はい、アルドール様！」

パタパタと駆けていく少女の言葉に、短い金髪の聖十字兵は黙り込む。

「あの、何か？」

「アルドール……とは、貴方の名前ですか？」

「え、ああ、そうです……けど。それが何か？」

「いえ、失礼しました。何でもありません」

「とりあえず彼女の仕度が出来るまで、俺の部屋ででもゆっくりしてて下さい」

鍵を手渡そうとする俺に彼は首を振る。

「いいえ、その前にお礼共々ご報告したいことがあります。領主様はどちらに？」

「セレス君の馬を連れてきてくれたのは君かね？いや、ご苦労ご苦労」

両手を広げて階段を下ってくるヴァンウィック。

「ひとまず帰らせたとはいえ領民達も不安がっているし、聞きたいことは山ほど有る。しかしそんなことよりだ」

階段を飛び下りた中年色男は一瞬にして彼の手を取り踊るようにくるりと回る。

「麗しき聖十字君、おじ様に君のスリーサイズを教えてくれたまえ」

「ちょっと！いきなりなんてことを言うんですか！？」

恥ずかしい。ランスじゃないけど恥ずかしい。一応俺に仕えてくれている人がこんなことをイグニスの部下に言うなんて。それって連帯責任で俺の責任。イグニスの部下に幻滅されるのはイグニスに幻滅されること。そんなの嫌だ。嫌過ぎる。咄嗟に彼に手を放させ、聖十字兵を俺は庇った。

「第一男のスリーサイズって何なんですかもうっ！」

「ふむ、なるほどなるほど。アルドール様は照れた顔はなかなか可愛らしいですな。ようやく食指が動きました」

「はいぃ！？」

「そういうことならこの際アルドール様でも構いませんぞ？私のこの手でスリーサイズを測って差し上げましょう」

「ちょっ！人前でそういうことは止めて下さい！この地の信用に関わりますよ！？」

わきわきと両手の指を高速で動かすヴァンウィック。嫌だこの人なんか怖い。

「でしたら物陰へと参りましょうか我が君」
「助けてイグニスぅうう！！ユーカーぁああ！！！ランスぅうう！！！ってっここに誰もいなかった！助けてトリシュっ！パルシヴァルっ！」
肩を掴まれた俺はもう涙目だ。柱にしがみついて助けを呼ぶが、力負けして手の力が緩んでいく。
「領主様、まず先に謝ります。これから無礼を失礼致します」
ごん。鈍い音がした。恐る恐る顔を上げると絨毯の上に倒れている美中年。彼を撲殺……いや、昏倒させたのは聖十字兵。剣を鞘に収めたままその後頭部をぶん殴ったらしい。
「身分ある方とはいえ法を犯して良い道理はありません」
怖い。この人も怖い。凄い冷たい目で倒れたヴァンウィックを睨んでいる。
（あ、でも一応俺を助けてくれたんだよな？）
俺は恐る恐る彼へと頭を下げた。
「あ、ありがとうございます。後でイグニスにも貴方のことを伝えておきますね」
「ご無事ですかアルドール様！」
「王様！大丈夫ですか！？」
彼から返答が来る前に、階段を駆け下りてくる騎士二人。その言

葉に突然聖十字兵が跪く。

「え、あの……」

「貴方がカーネフェリア様ですね？」

「あ、……ええと、はい」

隠す理由もないだろう。彼と話をする上で、それは必要なことだ。それならばと俺は彼へと向き直る。跪いた彼へと手を伸ばし、そういうのは必要ないと笑ってみせる。

「俺はアルドール＝D＝カーネフェリア。……王とは言っても最近即位したばかりだし、今は都落ちしている情けない奴なんだ。だからそんなに畏まらないで下さいお兄さん」

「お、お兄……そ、そうですよね。ええ、解っています。むしろ私はそれは上手く機能していると喜ぶべきであって」

「あの、何か俺……」

「いえ！何でもありませんので！」

「はいはいお二方、廊下で立ち話もなんだろう。居間でも使ってくれたまえ」

起き上がったヴァンウィックが俺と彼の肩を掴んでズルズルと廊下を進む。かなり凄い音がしたけど平然としている。この人は不死身か。殴った側の彼も驚いている。

そんなこんなで居間へと落ち着いた俺達。どう切り出すか迷う俺に気付いたのか、彼の方から言葉を発してくれた。

「ひとまずお礼を言わせて下さいカーネフェリア様。セレスタイン卿と言うのは貴方の騎士ですね？」

「うーん……ユーカーは俺の騎士っていうか友達……って言ったら嫌がられるかな。まぁ、他への好意でちょっと力を貸して貰っ

てるっていうかそんな感じで」
「……え？」
「あ、いやいや、一応俺の騎士ってことになってるのかな？よくわからないや、あはははは。あと俺はアルドールでいいですよ。そっちの方が慣れてるので」
まだカーネフェリア呼びはしっくり来ない。呼ばれ慣れていないから。
「それでは、アルドール様。助けていただいたことを感謝します」
「俺は何もしてないので……それより向こうで何があったのか話していただけますか？」
「はい」
俺の言葉に聖十字兵は頷いた。明るい場所で見ると彼の目は更に明るい。それでもユーカーの空色よりも濃いその色は凛とした彼の真剣な面持ち、それによく似合っている。強い意志を宿したその目の光はとても綺麗だった。
「私はシャトランジアから派遣され、シャトランジアカーネフェル間の海上警備を行っていました。それでわけあってこのカーネフェルに上陸しました」
「ああ、そう言えばイグニ……いや、神子もそんなことを言っていました」
「私達の船は奇襲を受け、目的の場所とは違う……この北部へと流れ着きました。そこをタロック軍に襲われて……多くの仲間が捕らえられました。それを逃れた仲間はこの隣……ブランシュ卿の領地に身を潜めています」
「あれ……ブランシュって、トリシュの実家だよな？」

俺はてっきり湖城の話が来ると思っていたから驚いた。ていうかアロンダイト領の近くだったのか。

「領地とは言っても……父はアロンダイト卿以上に領地を蔑ろにしています。領内の管理はシール叔父さん……いえ、別の人間に任せきりで」

「ふむ。チェスター卿か」

トリシュの持ち出した名前に、ヴァンウィックが渋い顔つきになる。

「私も久しく会っていないが……我が弟子トリシュ君。これは数多の恋をした私だから言えることなのだがね、何か嫌な予感がする。やはり君は湖城に向かう前に彼に会いに行きなさい」

彼はトリシュに忠告をした後、俺の方にも促した。

「アルドール様、貴方もそうなさると良い。あの湖城の古城は元々彼の持ち物でね。あれを攻める意味でもそこに詳しい人間の話を聞いておいて損はない。或いは……」

「その、チェスター卿に……なぜあの城がタロックの手に渡ったのか、聞く必要があると言うことですね？」

「ああ。そう言うことになる」

ヴァンウィックは一度小さく頷いて、席を立つ。居間の流れで大体の話は理解したと言わんばかりに。

「本当は私も会って話をつけてやりたくはあるのだが、流石にこの状況で領地を放り出したら馬鹿息子とセレス君に怒られる。おじさんはここでお留守番をしているよ」

ひらひらと手を振りながら彼は居間を後にした。残された俺達は、少し気まずい沈黙に包まれる。何の問題も解決していないのに問題ばかり増えている気がした。

「……聖十字の方、それでセレスタイン卿はどうなったのですか？」

本当に心配そうに絞り出されたトリシュの声。いつも半分冗談みたいな感覚で見守っていたけど、その声に俺ははっとさせられた。それは俺だけじゃない、パルシヴァルも気付いたようだ。

「トリシュ……」

「トリシュさん……」

「……彼は、無事なのでしょうか？」

切々と紡ぎ出される彼の言葉は、聖十字の胸にも届いたようで彼も気まずそうな顔になる。

「彼は、投降しかけた私を庇い……タロックの第一師団長と刃を交えました。その隙に私を馬へと乗せてここへ……彼との勝負がどうなったのかは解りませんが、私が彼らに出会う前のやりとりからして、おそらく彼に分はありません」

「ユーカー……」

「相手の様子から、命までは取らないとは思いますが……」

「あの、他に誰か見ませんでしたか？格好良いカーネフェル人の騎士とか女の子みたいな可愛い混血の男の子とか」

「いえ？私が見たのは少女と見紛うような女装をしていた騎士様だけです。敵は勿論私も彼に言われるまで気付きませんでしたが、

確かに女性にしては少々口汚い方でした」
「あ……そうですか」
それ確かにユーカーだ。セレスちゃんだ。こっそり飛び出すために女装も厭わなくなってきたのか彼は。
（本当ランス絡みのことになるとユーカー、手段選ばないよなぁ……）
それだけ心配だってことなのか。そう言えば俺が始めて彼と出会った時も散々だった。ランスが心配過ぎて暴走してたなぁユーカー。あの時の俺、女装してたにもかかわらずぞんざいな扱い受けてたらしいし。
（あれ？）
何か妙だ。ユーカーって確かにお人好しだけどランスが心配で視野が狭いときに、こんな人助けなんて出来るだろうか？ということはランスは無事。イグニスも無事。それを確認しているって前提？その上でイグニスに扱き使われた。そう考えるのが妥当か。そう思い俺はほっと息を吐く。それを見計らったでもないだろうが聖十字兵はそこで俺の心労が増すようなことを言う。
「心配なのは、正体が判明した後も敵将の方に口説かれていたことです」
「なっ……なんですって！？それは本当なんですか！？」
取り乱すトリシュ。悲しみに揺れるような青い瞳が、今日ばかりは怒り狂って青い炎のように燃えさかる。

「ユーカー……」

本当に不運だ、彼。敵にまで口説かれるなんて。また他の男とフラグが。犬も歩けばって言うけどその棒じゃないだろうに。

「と、とりあえず落ち着こうトリシュ？向こうにはランスとイグニスがいる。何か本当に大変なことになったら助けてくれるよ」

多分。イグニスは怪しいけどランスなら、……多分。

「それにユーカーも騎士だ。それにコートカードだ。そんなあいつをどうこう出来る相手はそうそういないだろ？」

「しかし、アルドール様……」

これでも駄目か。それなら……

「お前が信じてやらないでどうするんだ」

この言葉の前に色々脳内補完できそうな含みを持たせて俺は言う。それに彼ははっと我に返ったようだ。

「……仰る通りですアルドール様。私は少々我を忘れていました」

そうやって憂いる顔は美形なんだけどなこの人。自分に自信がないのだろうか？だからユーカーを信じられない部分があるんだろうか。そこを肯定してあげないとこの人は、精神的に弱ってしまうのかもしれない。

「それじゃあ向こうのことは二人に任せる。何かあったら此方に連絡が入るはず。そこをアロンダイト卿の采配で何とかして貰おう。

俺達は湖城を行く前にチェスター卿を伺う。隙あらば聖十字の人達を取り戻す算段を練る。これがベストだと俺は思うけど……みんなはどう思う？」

「はい、異存はありません」

「王様がそう言うのなら僕はそれに従います」

「それじゃあ明日も早い。二人は身体を休めてくれ」

俺の言葉に従って退室をする騎士二人。残された俺と聖十字の人。また、沈黙だ。

「……すぐに貴方の仲間を助けると言えなくてごめんなさい」

「……いえ、仕方のないことです。私もそのためにここへ来たのではありませんから」

「え？」

妙な言葉。ここへ来た？ここってこのアロンダイト領？でもそれはユーカーの差し金。それならここというのはここではない？

「私達は、命令違反をしたんです。だからもう……シャトランジアへは帰れません。それを覚悟でここへ来ました」

続く言葉にやっと気付いた。ここというのはカーネフェル。このお兄さんはこの国の生まれだったのか。

「私達はこの国を守るために、カーネフェルへ帰ってきたんです。シャトランジアには恩はありますが、聖十字の掲げる正義と祖国への正義とでは、……どちらが重いかなど分かり切ったことです」

「……お兄さんは、凄いなぁ」

「はい……？」

「稀少なカーネフェルの男なのに。騎士でもないのに……戦うこ

とを選べるなんて、そんな簡単に出来る事じゃない。俺なんか……本当、情けなくて」

夕方のことを思い出す。剣を取った、手が震えた。こんな情けない俺が王だなんて、この国は可哀相だ。

「何で俺なんかが……エースなんだろう。お兄さんみたいな強い心の人が……王様だったらきっと、もっと……」

「カーネフェル王、無礼を失礼いたします」

椅子から腰を浮かせて、身を乗り出した彼は俺へと手を伸ばす。そして……

「え？」

それは思い切り。耳に響いた強い音。その痛みに思い出す。ああ、以前もこんな事があったなと。あれはシャトランジアの第一聖教会で。これから任務に行くという聖十字のお姉さんに俺は打たれた。

「……あれ、……お姉さん？」

「……っ！？」

不意に目の前の人とその人が重なった。髪型は違う。それでも顔がその目がそっくりだ。

「いや、お姉さん……違う、お兄さんもしかして妹とかお姉さんとかいたりしますか？双子とか」

「……私を打ちますかカーネフェル王？貴方には二回、その権利があります」

俺の言葉にはぁと溜息を吐いた聖十字のお兄さん。
髪飾りかと思っていた三つ編み。髪を解くと……ばさと彼の髪が降ろされる。思ったよりそれは長い。それは見覚えがある……長い金髪の……金髪の……女の子！？

「お、お姉さん！！聖十字の！！なんでこんなところに！！」
「それは此方の台詞です！貴方がカーネフェル王だったなんて！！」

お姉さんに大分遅れて俺も椅子から立ち上がる。

「な、なんで男の振りなんか……」
「女ばかりの軍だと思われると舐められるんです。だから比率で違和感がない程度……何人かは男装して警備を務めるんですよ聖十字では」

もしかして、アージン姉さんもやたらとシャトランジアではモテていたのを思い出す。同僚の女の子達からラブレターもらったり二月なんか大量のチョコレートを貰っていて頭を抱えていた。それでも貴族だしそれ相応の品をホワイトデーにはきっちり返したりするからそれ目当ての子まで増えてという悪循環が生まれていた。
あれって姉さんが男勝りだからだと思っていたけど、男装警備の仕事の所為もあったのか？確かに姉さんがきっちり男装したら格好良いかもしれない。なんて言ったら……姉さんに涙目で殴られるんだろうな。そう思うと、俺の涙腺が緩んだ。

「あ、あの……ちょっと、……そ、そんなに痛かったですか？」
「あ、気にしないで下さい。あ、欠伸です」

あれから肌身は出さず持ち歩いたトリオンフィ。それを胸に抱え

て蹲る。
　このお姉さん、苦手だな。アージン姉さんと年とか背格好が似ている。今更のように罪悪感が湧き上がる。フローリプやルクリース……あの二人のことだって忘れない。忘れていない。だけど……二人とは一緒にいたから、未だに……俺の脳が間違っている。死んだって思えない。目を瞑ればこの同じ空間に二人が息づいている。

（それでも、姉さんは違う）

　俺は姉さんの死を実際見ていない。そう言って逃げて来た。そのツケが回ってきたような感覚。聖十字……同じ肩書き。俺の罪悪感を刺激するように、この人が現れた。
　彼女を直視できなくて……罪悪感から目を逸らす俺に、彼女が不思議がる。そこに天からの助け船。

「アルドール様ぁ！準備できましたよー！」

　ありがとうエレインさん。今ならランスとの手助けをしてあげたいくらいの心境だ。

「あ、それじゃ！ええと後は彼女に良いようにして貰えるようにしておくからゆっくりして下さい！」
「あのっ！」
「は、はいぃいっ！」

　何故か突然脅えだした俺に戸惑う素振りのお姉さん。いや、俺は打たれたから脅えてるんじゃありませんよって言いたいけど何故か声が震えてしまう。

「明日の件ですが……私もご一緒させていただけませんか？仲間

との合流まで、貴方の護衛をさせて下さい。私はそのためにここへ来たんです」
「いや、でも……お姉さんはここにいた方がいいですよ。今の戦争は普通じゃない。いくら強くても普通の人が相手じゃ……」
「生憎、私は普通の人間ではありません」

お姉さんが凛と顔を上げ、俺へと近づく。近づかれて急にドキドキする。感覚的にはランスに近づかれた時のそれに近い。凛々しいその顔つきはランス並にイケメンだ。いや、この人お兄さんじゃなくてお姉さんだからっ！そう言い聞かせるも、イケメンだ。姉さんにときめく同僚の方々に気持ちがちょっと解った気になった。
慌てふためく俺を正気に返らせたのは、彼女が俺に見せたもの。

「先程貴方はエースと仰いましたね」
「あっ！」

あの日俺は疑った。神の声が聞こえた。それはこの人がカードだからなのでは？そう思った。だけどすぐに否定した。だってそれはこの悪魔のゲームが始まる前のことだったから。
それでも……彼女の手の甲には刻まれた紋章。俺が初めて見る模様。

「スペード……」

カーネフェル人の彼女に何故、タロックに縁のあるスートが出たのか。戸惑う俺に彼女は掌を見せる。そこに刻まれていたのは……見覚えのある、Qの文字。

「く、クィーン！？そ、そんな……」

今度はルクリース。彼女を思い出すその数値。あまりの衝撃に俺はその場にへたり込む。

もう無理。もう駄目だ。両目からボロボロ涙が溢れ出す。

（ルクリースっ……ルクリースっ！！）

彼女との思い出が俺の脳裏を駆けめぐる。それは今まで省みることもなかった屋敷での生活からはじまり……フローリプから俺を守ってくれた彼女の背中。一緒に旅をしたこと。俺をいつも彼女は守ってくれた。その当たり前が何時までも続くことを願ってやまなかった。いつかはそれが失われるのだと言われても、そんなことあり得ないと心の何処かで思っていた。それが……こんなに早く奪われるものだとは思わなかったんだ俺は。

焼けこげるシャンデリア、血だらけ……硝子の破片が突き刺さった彼女の身体。おいつかない回復数術。二度と開かなくなった彼女の目。俺の名前を呼ばなくなった彼女の口。

「あ、あの……」

呼ばれてる。何でもないよと言わないと。だけど、駄目だ。何も考えられない。呼吸が乱れる。そして全てが遠くなる。

＊

「そんなに気になさることないですよ。アルドール様は今不安定な時期というだけなのですから」

「で、ですが……」

トリシュはそう微笑むが、相手は簡単には納得してくれない。狼狽えた様子のその人に、何と言えばいいのだろう。そこまで多くを

自分は知らないというのに。
突然倒れたというアルドール様を運んで来た聖十字兵。見た限り、高熱などの症状も見られない。これは精神的なものだろう。
「私もそう詳しくは知らないのですが、アルドール様は都へ来るまでに大切な方を無くされたそうです。今はもうご家族の一人もいらっしゃらないのだと」
「王家はこの方お一人だけに……ということですか？」
「……ええ、それは確かなのですがアルドール様は先代様の遠縁らしいのですが、わけあってシャトランジアに養子に出されていたようです。そこを神子様に見出され、カーネフェルへと戻られた」
「シャトランジア……」
そこで聖十字兵は考え込む様子になった。何か思い当たる節があったのか。少し気になったが私は先を続けることにした。
「養子先の家ではあまり折り合いが良くなかったようですが、其方のご息女やメイドとは親しくいらっしゃったようです。旅の途中でお姉様と護衛のメイドを亡くされ、……都から逃れる際に伏せっておいでの妹君も亡くされた」
「……そうだったんですか」
「気丈に振る舞っておられますが、あの方もまだ幼い……私共より親しい神子様やセレスタイン卿が傍にいないことで参ってしまわれたのかもしれません」
だから貴方の所為ではありませんよと伝えて、今日は休んで下さいと退室を迫ったが……彼は頑として腰を上げない。
「私なら大丈夫です。これは私の所為です。ですから私が看病を……」

「これこれお嬢さーん、夜更かしは美容の大敵だよ」
「ど、どこから現れるんですか貴方は！」
思わず吹いた。私としたことが。
でもお師匠様。それはないでしょう。なんでクローゼットから現れるんですか。いつからそこにいたんですか貴方は！
咳き込む私の隣で、聖十字の方も呆然としていました。
「……って今なんと仰いましたか！？」
「我が弟子よ。その目は飾りか？セレス君に夢中過ぎて他がお留守になっている！その子は紛れもなくレディ。それもその雰囲気間違いない！彼女は初物だ！」
「淑女に向かっていきなりそれはセクハラです師匠っ！」
「いや、最近男装少女と縁があるのかね私は。この間の黒髪少女は食べられなかったので、ここらで男装金髪少女は食べておこうかと」
「領主様、それ以上そのようなことを仰るのなら、十字法で現行犯逮捕致しますが？」
「仕事熱心なのも関心だがねお嬢さん、オンオフは大事、人生切り換えが大事だよ。そして生き抜きもだ。あまり肩と眉間に力が入っていると折角の可愛い顔が台無しだ」
「別に私は可愛くなど有りませんから。そういうことは他のご婦人にでもどうぞ」
凄いこの子。この変態相手に一歩も引かない、神子様やランス並に手厳しい。
「弟子よ。これ以上私の邪魔をするのなら、此方にも考えがある。今日都から届いたこの手紙……これを複製してセレス君の実家に送って遊ぼうと思ったのだが」

「そっ……それは！」

私が彼を連れて都を逃れた時の盗撮写真。神子様、本当にアロンダイト領に配っていたのか。通りでこの領内の人々が私に冷たかったわけだ。今日一日大分扱かれたのはそのためか。

「さぁ、どうする？どうする？欲しいだろう？既成事実が！欲しいだろう？外堀工作が！」

「ええっ！？貴方がセレスタイン卿の身を案じていたのは美しい友情だと思ったのに、違うのですか！？」

「運命とは斯くも非情なものなのです、聖十字のお嬢さん。ですが師匠……」

確かに既成事実は欲しい。外堀だって埋めたい。それでも私も騎士だ。譲れないものがある。……そうだ。肝心のあの人が頷いてくれなければそんなの無意味。

「その必要はありません！いずれ私がイズーを連れて直々にセレスタイン領に挨拶へと向かいます」

顔を上げた私の言葉に、師匠の目が柔らかくなる。

「……ふっ、この数日で男を上げたなトリシュ。お前の男気に免じて今日は私も引き下がろう」

何故か満足げに笑み、夜中だというのに高笑いをしながらヴァンウィックは出て行った。なんという近所迷惑。アルドール様が目を覚ましそうなものだが、そんなことはなかった。

「……何なんですか、あのアロンダイト卿と言う人は」

「生憎、私にもよく分かりません。しかし何やらどっと疲れが出ましたね」
「はい……」
「……あの方が本当に諦めたかも怪しいですし、ここは貴女にお任せします」

年頃の男女が同室というのは問題だと思うが、アルドール様は寝込んでいるし、そんな精神状態でどうなることもないだろう。
聖十字の少女に部屋は任せて私は廊下へと出る。扉に背を持たれながら……そこで仮眠と見張りを行うことにした。

14：Ave, imperator, morituri te salut

ようやく6章ヒロインと主人公が再会。
いや変態と逸脱者が多いと、ノーマルは初々しくていいね。
でもまだ名前も聞いてないって言う……ね。ジャンヌとの出会いでアルドールのへたれと鬱度が増してきたぜ！……普通に恋愛させてやれよ自分とツッコミ入れてみる。だが断る。

15：Scio me nihil scire.

エルスという人間は、優れた数術使いではある。

それでもそんな僕だって万能ではない。あ、やっぱ今の訂正。人間じゃなくてそこ妖怪にしておいて。僕はあんな虫蝼みたい人種とは違うんだから。当然僕は凄いんだけど、他人のためにそこまで頑張ってやる義理なんかないんだし？そんなに疲れることはしたくないってこと。うん、そうだよ。そうそう。

「全くどうしてタロック然りこの国然り、無駄に広いかな」

おのれ、にっくきカーネフェル。王から国から僕の敵。嫌がらせなのかい？この熱気。

元々僕の数術では、大陸の端から端まで移動することは困難だ。出来なくはないけど代償が半端無いし、第一そんな無茶な術使ったら僕が壊れるかもしれない。数術は代償と自分の限界をよく知った上で行うべきだ。

それにしても嫌になる。この照り付けるような真夏の暑さ。これはタロック生まれタロック育ちの僕には辛い。国宝級レベルの価値の僕の白い美肌が日焼けなんかしたらどうしてくれるんだって話だよ。

そう思うと僕を城からこんな所へ連れ出した人間が恨めしい。その一端である奴はと言えば、こんな涼しげな城で避暑とは何様だよ。……王様か。

ていうか情報漏らしたくないからってあんまり情報残さない移動とか止めて欲しいんだけど。僕に無駄な労力かけるとか嫌がらせだよね確実に。そういう効率性を理解してるのかなこの男は。理解していないな。この僕が必死になって自分の居場所を探してやって来るっていうシチュエーションに燃えてるんだろ？嗚呼もう嫌だこの

馬鹿王は。

「今戻ったよ、須臾」

「……帰ったか、那由多」

僕が近寄ると男は目も開けず口元だけで薄く笑った。その漆黒の髪はタロックの人間誰より暗く深い色。

「もう、また惚けてる。これだから中年男は。ボクはエルス！エルス＝ザインの名を名付けたのは誰だったんだい？そんなことまで忘れちゃったわけ？」

「無論戯れ言だ」

目を瞑っているのを良いことにこっそり一撃加えようとしたけれど、片手で止められてしまう。カード的には明らかに僕の方が強いのに、それを覆す強さがこいつにはある。簡単には殺せない。だから僕はこいつの傍でその期を伺い続けていたんだけれど……

僕の殺意はこの男にとっては丁度いいじぁれあい。むしろ嬉しいみたいだから困る。僕は貴方のペットじゃないんだけど。

「これだからこの男は……」

僕の仕える王様は多少なりともいかれている。それは僕が彼と出会ったその日から変わりはしない。それでも……そのいかれ具合がここ暫くで拍車が掛かっているのは確か。以前の須臾ならそう、僕をこういう戦場に送り込むことなんか無かったし、自身が国外に出ることも無かった。

（そこまで今のタロックが、切羽詰まってるって風には見えないんだけどな）

そもそもこの男が国内を荒らしている一因なんだから。その時点でカーネフェルを攻める理由なんてあってないようなもの。だってこの男は国のために戦っているわけではないんだ。

「よく帰ったなエルス」

「……別に貴方のために来た訳じゃありませんし」

「まぁそう照れるな」

「照れてないっ！！」

やっぱり本当にここで殺してやろうか？苛ついて来た。睨み付ければ、狂王はその殺意に目覚めるように薄目を開ける。その赤のなんと見事なことか。

血よりも深く鮮やかで、その目に見つめられると血だまりの中にいるみたいでぞくぞくする。彼が犯した罪の全てがその目に刻まれているように、その目は果てしなく赤い。狂気に染まったその目が他の感情に揺れることはない。全てを悟ってしまったような、何もかも諦めたような冷たい目。

世界でもっとも強く残酷なタロック王。それが時折僕を見る時だけ、悲しげに見えるのがこの男の持つ唯一の弱さなのだ。薄桃色を深く暗く染め上げれば、それは紫へと変わる。この男は僕の淡い紅色、桜色の瞳に……亡くした我が子を重ね見て、罪の意識に泣いている。度重なる裏切りを犯し犯され失った、それでもそこにだけ失われた愛があると信じているんだ。何処の世界に殺されて……それでもその犯人を愛する馬鹿がいるだろうか？もしその子が生きていたなら、自分を支えてくれただろうか？そんなありもしない幻想に取り憑かれて僕を見る。

馬鹿な男だよ。なら何故殺したんだって話。まぁ、僕には関係ないことだしどうでもいいけどさ。

「そう言えば須臾、最近こっちに来たって話の第一師団長って奴なんなわけ？噂聞く限りじゃ真純血でもないて話なのにいきなり第一騎士なんて言われても吃驚なんだけど。そもそも何時の間に代替わり？」

「あれか。あれは拾った」

「拾ったって……本当拾い物好きだね須臾は」

どこで拾って来たか知らないけど、僕もその口だからあんまり責められない。でも……時期的に本当にこの男が拾ってきたかは怪しいところ。

（またあの男の差し金かな……）

僕はある男のことを思い出す。須臾がこんならしくないことをしているのはどうせ奴が関わっているんだろう。本当、人間は年を取ると駄目駄目だね。丸くなるって言うの？昔のこの男はもっとギラギラしてたのに。

「大体さ、臣下に“王（レクス）”なんて名乗らせてていいわけ？」

「仕方なかろう。奴は確かに王なのだから」

「……コートカードってこと？」

「無論」

「スペード？ダイヤ？」

タロック人は大抵スペード。血が薄ければダイヤ。それが僕の見解だった。だからカーネフェリー達はクラブが多く、血が薄ければハート。これはこれまで僕が出会ったカードを照らし合わせても大体が符合する。それでも須臾はにやと笑って否定した。

「奴はクラブだ」

「タロック人なのに！？」
「驚くことはない。金髪族の聖十字にスペードが出たと聞いている」
「カーネフェリーがスペード……まさか、そんなこと」
でもそれが本当なら、確かに拾ったのは正解かもしれない。この男が滅ぼそうとしているのは何もカーネフェルだけではないのだから、その時のために他のカードも手中に収めることは決して悪くはない。悪くはないのだが……
「でもさ須臾……よりにもよって一番の天敵を第一騎士にするなんて、馬鹿？」
「其方は主君に向かって愚かと申すか？」
「ウィ、それは勿論言うよ。それがボクの仕事じゃないか」
僕が拾われたのは、この生意気さと殺意をこの男に気に入られたから。僕がその牙を無くせばこの男は僕に飽きるだろう。僕をこういう風にさせているのは半分以上この男の所為。だからここは四捨五入で責任はそっち持ち。僕はまるっと無罪。僕は悪くない。
「そのような口ばかり利くから其方は奴らの中で浮くのだろうな」
それを責めるでも咎めるでもなく僅かに哀れむように王は僕を見る。そうは言うけど僕らが周りと打ち解けてたらそれはそれで嫌なんでしょう？本当は僕にべったり甘えられたいんだろう？那由多王子は死んだ。刹那姫もセネトレアに嫁いだ。だからこの男は飢えている。だから、そういう代用品が欲しいのだろう。
「ボクは人間なんかと馴れ合うつもりはないからどうでもいいよ」
「……子鬼仲間が出来て余程嬉しいと見える」

ほらね。すぐこれだ。僕は確かに貴方に拾われたかも知れないけどさ、だからって貴方の物になったってわけじゃないんだ。これだから人間って大嫌い。王なんてその人間の頂点。つまりは地上で最も傲慢な生き物。

（王なんて）

大嫌いだ。須臾も、アルドールも。僕の大嫌いな人間の長だ。僕らの敵だ。殺さなければ殺される。僕がここにいるのは可愛がられるためじゃない。隙を見せたらその時に、この男を殺すため。僕が甘んじているのはこの男に隙が全くないから仕方なくなんだ。これまで幾度となく僕は返り討ちに遭って来た。その度にろくな目に遭わないけれど、僕は諦めた訳じゃない。

「ああ、レーヴェ？レーヴェと言えばそうだ。あの届け物運ぶの結構大変だったんだからね。須臾は僕のこと便利屋か何かと勘違いしてない？結構大変なんだよ大荷物運ぶの。前払いで支払った生け贄もそろそろ足りなくなるし、そろそろまた大暴れしないと」

「その舞台ならまだこれから与えてやる」

「ははは、流石は狂王様。って……何？」

「しかし其方が代償を得ないなど珍しいこともあるものだな。都入りの際に幾らでも殺せたはずだろうに」

「そ、それは……」

「双陸が上手くやったか」

「ま、まぁね。人間にしてはよくやった方なんじゃないの？」

そうだ。よく考えればそうだ。無血開城とカーネフェル王の逃亡。民の信頼を失わせるにはいい策だ。でもそんなまどろっこしいことしないで全軍突入、皆殺し作戦でも良かったんだよね。まとまられ

ると厄介だけど、カード一枚一枚なら僕の敵じゃない。各個撃破さえ出来れば、それに持ち込めれば……そこでカーネフェル王を討つ事も出来たはず。楽にこの国を治めたいっていうのは他の奴の思いであって僕の望みじゃない。それなのにどうして僕はそれに乗った？むしろ進んで協力した？

（双陸……）

そうだ。お礼だ。借りを返すために協力したに過ぎない。あいつは略奪者を煽動して遊んでいた僕を忌み嫌い、置いて行ってしまうような男だ。目の前でそんな風に都攻めをしたなら……

（あいつが、そういうの嫌かなって思って……）

いや、待てよ。どうして僕があいつの好き嫌いを考慮してやらなければならないんだ？

怪我の所為できっと疲れてた。本調子じゃなかった。だから何時通りに考えられなかったんだ。そうに違いない。

そう結論づけたけど、須臾の目はまだ僕を見ている。

「其方が怪我をするとは珍しい」

「……っ」

めざとい。流石狂王。目敏い男だ。ていうかそんなに僕のことまじまじと見てたわけ？うわ、変態。

「我を愚弄するでない」

「ぎゃあああ！！まだ何も言ってないっ！！」

「其方など新品の高給筆で墨を付けずに足の裏にいろは歌を記す刑に処す」

「ぎぃやぁあああああああああ！！ひゃあああああああ！いやぁあああ！！止めろっ！！馬鹿っ！！」

くすぐりって大したこと無さそうに見えて実は地味に辛い刑だ。今度誰かいたぶる時に僕も使ってみようと現実逃避。そんなもので死ぬわけ無いけど割と本気で死ぬかと思った。僕が涙目になって荒い息を繰り返していると満足そうなこの男。本当にいつか殺してやる。

「それだけ叫ければ大したことは無さそうだな」

「し、心配するなら普通に心配してくれません？」

照れ隠しで人をいたぶるの止めて欲しい。そんなんだから惚れた女に裏切られたりするんだよこの男は。

「愚か者が。被虐趣味者に王が務まるか」

「そーですねー」

征服されて喜ぶような阿呆に王は務まらない。隙あらば攻め込む、征服側に回るのが真の王の在り方だ。攻撃は最大の防御って言うだろう？そういうことだ。だから王は加虐趣味者の方が務まるだろうね。確かにそれには同意だよ。だからこそ僕はあの男が気に入らないのかもしれない。

（カーネフェル王……アルドール）

あいつは僕を哀れんだ。敵である僕をだ。許せない。許せる事じゃない。

（王の癖に、王の癖にっ！）

心身共に脆いあの少年王。都は奪ったとはいえまだ生きている。僕らはまだ王手には至らない。王が生きていれば奪回はある。生きている限り愚民共は希望を持つ。その火を早々に吹き消してやらないと。

＊

「しかし愚かな」
「うっせーよ」

黒の視線を受けながら、ユーカーは不覚溜息を吐いた。
手を抜いたつもりはない。自分の得物じゃないと我が儘な言い訳を言うつもりもない。どんな得物でも手にしたら瞬時に自分の物とする。使いこなし、乗り捨てて行くのも戦場ではよくあることだ。
だから自分が負けたのは、単純に力量の差。悔しいがこの男が剣士として格上だと言うことは認めざるを得ない。

「お前程の剣士なら一度目で力量の差は理解していたはずだ。それでも挑みに来るとは、そこまであの女を逃がしたかったか？」
「別に。好きに解釈しろ」
「好きにしろとはカーネフェリーは大胆だな」
「そうは言ってねぇ。俺に触んな」

戯れに伸ばされた手を、べしと払いのける。何企んでやがるんだこの男は。

「やれやれ、身持ちが堅すぎるのも問題だぞ」
「しれっとそういうこと言うなっ！あんた顔と性格あってなさ過ぎんぞ！」

「なるほど、カーネフェルは男が少ないからお上品にお高くとまっているわけだ。しかしタロックは違う。我が国では少ないのは女の方だからな。男など無意味に不用意に集まれば基本話が猥談になる。むしろセネトレア方面では日常会話だとも聞いている」
「俺は良いが、俺の同僚達の前でそういうこと言うなよ。あいつらは俺と違って真面目に騎士ってのをやってんだから」
「それで隙が生じるのなら試してみる価値はあるが」
「まさか。さっきの姉ちゃんみたいに逆上されて、攻撃力＋されるのがオチだ」

戯れ言はこの辺にしておくか。俺はもう一度溜息。
ここはタロックの奴らが乗って来たという船の一室。その近の陸地には、こいつの陣営が置かれている。先程あの聖十字にこの男が話していたことから察するに、恐らくこの船に……神子の部下が捕らえられている。ついでに俺も捕らえられているわけだが、この男どうにもやる気がない。得物は勿論奪われたが、縛るくらいしないのか。これでは普通に軟禁されているだけ。

「つーか男物の服くらい貸してくれたって良いだろ。何着替え要求したら当然のような顔でタロック物の女の服用意してんだよてめぇはっ！」
「男の服か……我が軍に加わるなら考えよう」
「くっ……」

何て精神攻撃だ。一瞬頷きそうになった。

「或いは嫁でも構わんぞ」
「お前はどんだけ嫁が欲しいんだよ」

睨みつつちらと奴の方を見れば、タロックの騎士は俺の片手をま

じまじと見ている。俺のカードが気になるのか。

「ジャックがそんなに珍しいか？」

「少なくとも我が陣営では見ない数値だ。そして１１番目のカードには覚醒の可能性がある」

「それ……」

俺は驚き顔を上げた。何故だろう。何事でもない風に呟かれたその言葉は、シャラット領で道化師が俺に言った言葉。それを俺に思い出させる。

“私はね、収穫に来たんじゃないの。種を蒔きに来たの。大きな花を咲かせるために”

ジャックなんて、クィーンにもキングにも負けるカード。無論ジョーカーにもだ。それなのに何故？どいつもこいつも俺に拘る？

俺に知らされていない情報。そこに何か俺が目的を遂げるための決定的な……或いは致命的な何かが隠されているような気がしてならない。

「お前は……俺のカードが何なのか、知ってるのか？」

神子は知っていても多くを語らない節がある。そして俺を嫌っている。

敵の言葉を鵜呑みにするわけにはいかないが、俺はアルドールの阿呆ではない。神子のことは頭から信用は出来ない。あいつがアルドールを思っているのは確かだが、それがこのカーネフェル、ひいてはランスに向いているかは怪しいのだから。

俺は俺の目的のために、情報が必要だ。あの馬鹿に仕えるランスに頼まれたから、ではなく。あいつを死なせないためにも。

「俺は……ジャックには、何か知らされていない特性があるのか？」
「知らないのか？其方の陣営には数術の理解者がいると思ったのだが」
「生憎俺の味方とは言えないんだよそいつ」
「なるほど。王に仕えていないとは本当なのかもしれないな。ならば別に教えても構わないが」
「じゃあ話せ」
「しかしただで教えるほど俺は優しくはない。そうだな……タロック軍に加わるか、うちの田舎に荷物をまとめて嫁ぎに来ると良い」
「まだそのネタ引き摺るのかよ」

そんなのどちらも頷けない話。それでも情報を聞き出すには、どっちかに折れる振りをしなければならない。

「つーか、あんた田舎育ちなのか？貴族なのに？」
「何故俺が貴族だと思う？」
「じゃねぇとタロック王が傍に置くとは思えない。……でもあんたの名前の響き、タロック貴族らしくねぇよな」
「ふ……、面白いことを言うな。なかなか目の付け所が悪くない。そうだ、レクスというのは俺の名ではない。唯の役職名のようなものだ」
「役職……」
「他人のために命と同等のものをさらけ出したお前に敬意を称して」

レクスという第一騎士は片手の装備を外す。見せられた掌。現れた数に俺は絶句した。

「初めて見たか？……いや、そんなにキングが珍しいか？」

先程の俺の言葉をなぞるように、男が微笑。勝てねぇわけだ。実力の差以前の問題だ。確率的にどうなんだよ。カードは例外を除いて１３。基本的に俺より強いのは２枚だけ。俺が勝てないカードに出会す確立より、俺が勝てるカードに出会す方が圧倒的に……。なのにどうして。

最初はクィーンのルクリース。ペイジのエルス＝ザインにジョーカーの道化師に。そして今度はキングだと？ろくでもねー奴とばかり出会ってる。

運命とか神なんてもの俺は信じたくないが、もしそう言う奴があると認めるなら、そいつらが俺を全力で潰しに掛かってる期がしてならない。今カーネフェルでコートカードは俺だけみたいなもんだ。協力関係にあるとはいえ、神子はあくまでシャトランジアの人間だ。パルシヴァルはちょっと例外のカード。つまり俺を消費しきってしまえばカーネフェルは危うい。俺の肩には背負いきれないほど重いものがのし掛かっている。

勝てない相手にも負けてはいけない。それでも死んでもいけない。ここから先は慎重に行動しなければ。幸運は彼方にある。あいつが本気で俺をどうこうしようと思えば、きっと出来する。そうなっていないのはこの男にその気がないからだ。こいつが本気で俺をタロックに引き摺り込みたいなら、多分俺の意に反して世界はそう動いていく。

そのはずなのにこの男が、俺を口説いているのは……その前提を覆す力が俺のジャックに秘められているから？

「察しの通り、俺は貴族出じゃない。真純血でもない。そんな俺が今の役職にあるのは偏にこのカードのお陰だ。王は強力なカードを求めている。取り巻きの貴族連中は大抵上位カードしか発現しなかったからな」

「それで俺を口説いてたってわけか」
「半分はそう言うわけだ」
半分。また妙な言い草を。やたら含みがある言葉。その残り半分にこそ、俺が曝きたい情報が隠されているはず。
「でも、ジャックのことをあんたに話したのは、タロック王じゃねぇんだろ？」
「無論。須臾王は数術が何たるかもよくは理解しておらん」
「そいつって……」
「それは先程の答えを貰えるまでは言えないな」
「……っち」
この男、俺に好意的とはいえ何でもかんでもペラペラ喋ってはくれない。それなら質問を変えてみるか。
「あんたが追いかけてたって事は、あの女もカード……それもコートカード。……クィーン当たりか？」
「……」
沈黙は肯定と受け取る。その上で俺は話を進めた。
「それより格下の俺があいつを逃がすのを止めなかったってことは、俺のカードには女王を上回る秘密があるってことだよな？あんたはそれを知っている。そういうことだろ？」
「まぁ、そういうことだ。彼女を逃がすことでお前が逃げる術は失われた。それは俺にとっても好都合」
「食えねぇ奴……」
「生憎俺が食べ得る側なのでな」
「そういう意味じゃねぇよ！」

こうやってすぐ場を茶化すのは、本題から逸らさせるためなのだろう。段々こいつのやり口が解って来た。もう簡単に踊らされたりしねぇからな。

「エルス＝ザインは俺を気にも留めていなかった。つまりあいつはこの件に関して全く知らない。タロックには他に数術について理解している勢力があるって考えていいわけだな？」

「あの子鬼は須臾王のお気に入りだが、所詮は異形の独学。教会数術の知識は皆無」

「……そういやタロックはシャトランジアと国交ある時期があったな」

その時に数術の知識を取り込んだ一団が居た。それに連なる人間がタロック軍の中にいる？

（だが、そいつらが王に数術のことを教えないのは妙だ。隠している？それに何の意味がある？）

考え込む俺に、男は口を開いた。

「生憎だが俺の仕えるタロック王は彼ではない。俺にジャックの話をしたのは俺が仕えるタロック王だ」

「……え？そ、それって……」

さっきまで言わないと言ったことをさらっと口にする。その変わり身の早さに呆気にとられる暇もない。押して駄目なら引いてみろ。引いて駄目なら押してみろ。その方向転換に俺は振り回されている。戸惑いで訳が分からなくなっている間に更に訳の分からない情報を寄越され、俺の混乱は深まる。

「毒の王家の血はまだ途絶えていない」
「嘘だ……残ってるのは王女だけだろ？王子は二人とも処刑されたはず。その王女が嫁いだ先のセネトレアの王も死んだ」
「……やけに詳しいな」
「……まぁな」

タロック王族が近親婚を繰り返すのにはわけがある。毒の王家と称されるように、毒に冒されたその身体は外の者には猛毒だ。
毒の王家の女に子を産ませられるのは並大抵の男では無理。同じ毒の王家の男でなければ不可能とまで言われている。しかし王子は二人とも死んでいる。

（毒の王家の……刹那姫）

長い黒髪、艶やかに笑むは妖艶な美女。
あの男、狂王の娘。同じだ。漆黒の髪に深紅の瞳に真純血タロックの姫。あの男ほどではないが彼女を見たとき、俺は唯ならぬ恐怖を感じた。背筋が奮える程の美しさ。それでも、それでも……とてもじゃねぇ。俺はあれを女として見られない。あれは化け物だ。あまりの恐ろしさにガタガタ奥歯が奮えた。半年前を思い出す。

＊

それは突然。任務の報告のため城へ戻った俺の前……一枚の封書を手に俺が仕えた人は現れた。綺麗な金髪をふわりと舞ってにこりとかの人は笑う。
「お帰りセレス！」
「ぎゃあああ！おっさんどっから現れたっ！」

でも現れるにしたってもっとやり方ってもんがあるだろう。その人はいきなり床下から現れた。俺が通りかかる一瞬を見計らい床の石板を持ち上げて。

「驚いた？」

「驚くわボケっ！」

「いやだって最近お前は私に冷たいじゃないか。私を避けようとするし、寂しいんだよ。反抗期かい？お前もそんな年になったか。いや感慨深いものだね」

「違うっ！あんたが慎みがないからだ！俺みたいなのにくっつくな！抱き付くな！そうやって俺ばっか構うな！遊ぶな！あんたのお気に入りみたいに勘違いされると俺への風当たりが辛くなるんだよ！」

いろんな奴からそれはそうだが、それは俺は気にしていない。風当たりが冷たくなって俺が凹む相手は一人。……敢えて誰とは言わないが。

「事実、お気に入りだから仕方ないじゃないか」

「そんなら他のお気に入りにもそうしてやれ」

「そうしたいんだけど、みんな避けるの上手くなって来て私も困っているんだ。その点ユーカーは抜けてるところがあるからこうやって脅かせば一発だ」

「あんた脅かすのが目的なのか？俺に抱き付いて遊ぶのが目的なのか？」

「二兎を追う者は一兎をも得ずとは言うらしいけど実は私の目的はその両方だ」

「もっと違うことを追えよあんたは。その気になれば他にやること幾らでもあんだろ」

「ははは、やっぱりお前は何時までも無邪気で可愛いね。その顔が見たかったんだよ、うんうん。懐かしい。半年ぶりくらいだろ？もう少しこまめに顔を出しなさい。おじさんは寂しいです」

よくもまぁ。こんな俺を見て無邪気と言えたものだ。あの人脳味噌半分腐ってんじゃね？無邪気なのはあんたの方だよ。

ふて腐れる俺の髪をわしゃわしゃ撫でながらあの人は愉快気。俺の通る道を予測し床穴掘ってまで身を潜めて待つなんて何てこの人は阿呆なんだろう。幾ら暇だからって……

「ったく。こんなことのためにこんなことして。こんな阿呆なことバレたらまた連中に文句言われるぜ？」

「お前が久々に帰ってくると聞いてね。これはやるしかないかなと」

「馬鹿かあんたは！」

「いやいや道化王もねぇ、時々こうやって馬鹿なことをしてあげないと反旗を翻す算段でもしているのかと邪推されるんだよ。こうやって本当に馬鹿なことしか考えてませんってアピールしてあげないと」

「俺以外を出汁にしてもいいだろうに」

「お前が一番良い反応をするんだよ。ランスやトリシュは頭が固いからなぁ……本気で固まられた時、滑ったんじゃないかと思うと私もどきっとするんだ」

「ランスの阿呆のツボは変わってるからな……」

それなりに理解したつもりで居る俺でもたまに、何でここで笑うの？って思うことがあるあいつに関しては。

「あ、そうそう。そんなことよりさ！息抜きにちょっと遊びに行かないか？仕事熱心なお前を労い私が旅行に連れて行ってあげよう

！」
「はぁ！？おっさん何言って……っていうかセレス呼び止めろって言ってんだろ！大体あんたがそう簡単に外に出られるわけ……また連れ出せって言うのか？無理無理！ランスの阿呆に俺がとっちめられる」
「ははは、あのだねユーカー。そういう訳ではないんだよ今回は」
ひらひらと見せびらかすように振られた手紙。それを彼は俺へと手渡した。
「招待状？結婚式？」
「セネトレア王が婚礼の儀を挙げるそうだね。それで私の所までこんな物が届いたらしい」
「セネトレアっつったら……」
「ランスは連れて行けない。解ってくれるかな？」
「それは解る。けどよ」
あいつが強いって言っても、あいつは世間知らず。ある意味俺以上に。
それにあいつは稀少なカーネフェルの男。おまけに真純血。俺みたいな欠陥品じゃない。魔物の巣窟みたいな場所に放り込めない。
「俺は問題なくてもおっさんだって、危ないんじゃねぇの？」
「私はもう若くないから大丈夫だよ。その証拠に妻さえ私を寝所に入れてくれなくなって早何年。いや、嫌われたものだね」
「三十路程度でそんな春の枯れた耄碌爺みてぇな事言われても……あとそういう夫婦間の不和を自慢げに語るなよな。自虐ネタ好きだなあんた……」
「それに私に何かあったらお前が守ってくれるんだろう？」

馬鹿なこと言ってたと思って油断した。そうやって一瞬にして俺の内側に入り込む。何もかもあんたに持って行かれてしまう。悔しいがおっさんのが俺より上手だ。

惚れた弱みって言葉があるが、敬愛でも主従間でもそれはある。このおっさんは俺をお気に入りと言ってくれて少なくとも俺を嫌ってはいないというかこんなこと恥ずかしいから言いたくないが好いていてくれる……が、それ以上に俺がこの道化王に魅入られてるってことなんだろう。どうせ俺もランスの阿呆と同じだ。この人が大好きなんだよ俺も。それが解っててこうやってるこの人、ほんと道化だよ。

アルトのおっさんは本当に、俺の使い方が上手いんだ。そんな風に微笑まれたら、俺が断れないのを知っていて。

「ったく、ついていけば良いんだろ。わかったよ。それで……いつ出発なんだ？」

「今日」

「早ぇえよ！俺まともにランスと話も出来ねぇじゃねぇか！それでこれって俺また怨まれるっ！」

「大丈夫だよ。どうせ話す時間があってもお前達喧嘩ばかりじゃないか最近は。これ以上ギスギスしたくないのなら互いの頭が冷えるまで距離を置くのも大事だぞ。そう、私と妻のように」

「あんたが言うと説得力あるようでまるでねぇ……」

そうやってあんたは俺ばっかり連れ回すから、あいつと俺はまた溝が深まる。たまには逆にしてくれよと言いたいが、今回ばかりは俺が行くしかねぇ。

何故だろう。その時ばかりは珍しく都貴族共も王の外出の邪魔をしなかった。王の不在にまた国庫から金楠ね取るかろくでもない法でも作るんじゃねぇの？心配でランスに目を光らせておくようには言って置いたけど、王と一緒に出かける俺をあいつは羨ましそうに

恨めしそうに見ていたな。あれはあの人がお前を信頼してないからでも、信用してないからでもないんだ。お前を心配して、信頼しているからこそ。それをちゃんとあいつは理解してないんだろうな。

「……にしても何だよこの国は」

初めて国の外へ出た。仕事だって解ってても年甲斐もなくはしゃぐ心があったのは確か。

船旅は久々だったし、世界貿易の中心地だけあって、そりゃあ凄い。カーネフェルみたいな片田舎とは全然違う。あっちは都だって木々や水辺が目に入るが、こっちは城へと繋がる表通りと言う大通り……そこから五本の通り。さらにそこから分岐する細い通りが幾つもあって。そのあちこちに建物と店……見たこともない商品が立ち並ぶ。頭がくらくらする。

「セレスセレスー！向こうのあれも食べに行こう！やっぱりセネトレアに来たからには行列の出来ると噂のラーメンと餃子と炒飯とダックを食べに行かないと駄目だと思うんだ。デザートは胡麻団子と杏仁豆腐」

「あんたどんだけ買い食いするつもりだ！そんなに俺に金使わせて楽しいか！？」

「ははは、ごめんごめん。後で返すよ。そうだな後はそれからそこの露天でかき氷と林檎飴とたこ焼きと焼きトウモロコシとお好み焼きと……金魚すくい？これは食材ゲットイベントなのかい？」

「俺のトラウマ穿り返すな！金魚は食うな！主に飼え！死んだらちゃんと埋めてやれ！」

溢れかえる人混み。ていうかもはや人塵。はぐれないようにと俺の手を放さないおっさんもどうかと思うが、事実これ一度はぐれたら見つけ出すのは不可能に近い。釈然としない物があるが渋々それ

を許容する。

「しかし……噂には聞いてはいたが、私も来るのは久々だな」

「久々？ていうか食いながら喋るな」

「以前はここまででもなかったんだけどなぁ……」

前に来たのは今代のセネトレア王の即位の時だという。もう２０年近く前のことらしいからこのおっさんが今の俺と同じかそれよりもっと幼いかの時分だろう。もしかしたらパルシヴァルくらいの時かもな。その頃この人が見たセネトレアはもっと違う物だったという。

「あの頃はここまで奴隷貿易が表立っていなかったし……私の目に映るのはこの国のきらびやかな所ばかりだった」

「おっさん……」

「こらこらセレス、今はお父さんと呼びなさい。変装中だよ？ちなみにお父様でも可」

「だが断る。俺までこんな格好させやがって」

「私はもう年だけどお前はまだまだ若いからね。もし可愛いお前が誘拐でもされたら私がランスに怨まれる」

護衛とは名ばかり。あんまり表立って大勢で出かけると目立つし観光が出来ないと、王は護衛を俺だけにしてしまった。その俺も欠陥品とはいえ若いカーネフェルの男。奴隷商の目についてはいけないと無理矢理女装させられた。ランスが居なくて助かった。この年でこんな姿見られたら恥ずかしくて死にたくなる。

俺を連れて来たのってまさかあれか。欠陥品だからじゃなくてあんたの取り巻きの同僚達の中で俺が一番幼かったからか！そうなのか！？

（くそ、……そりゃあこんな危ねぇ所にパー坊なんか連れて来られねぇけどよ）

怖くて聞けない。聞いて頷かれたら俺ちょっと人間不信になる。なりそう。

（……しかし楽しそうだなおっさん）

なんだかんだで久々の自由を満喫している？俺と親子ごっこをするのが楽しいのか？わかんねぇ。

ほんと、邪気のねぇおっさん。いつまで経っても子供みてぇな人だ。そんなんだから王妃様に愛想尽かされるんだよ。このおっさんが王妃様相手にムーディな大人の雰囲気色気醸し出す図が俺には容易に想像出来ない。たぶんやってやれないこと無いんだろうがやる気がないんだろうこの人。そんだんだからまだ世継ぎの一つにも恵まれてねぇんだ。寝所シャットアウトはこのおっさんのいつもの道化っぷりがいけないんだ。びしっと決めれば格好良いのにそういう見せ場をわざと作らず阿呆なことばっかり前面に出す道化っぷりを発揮してるから……やれやれだ。

こんな浮かれたおっさんを見ていると、やっぱ子供とか欲しいんだろうなと思うんだが、その肝心の子供作る気が無いのがどうしようもない。手に負えない。俺やランスみたいな部下を子供代わりにして遊んで満足してるからいけないんだよこの人は。そりゃあ俺だって……別にこういうの、嫌じゃないけどさ。むしろ嬉しいけど、それじゃあ駄目じゃないか。俺がこの人を嬉しがらせないといけないのに、俺がそうされてどうするよ？この浮かれ具合が全部俺のための演技とか、そういうこともあり得るわけだ。俺は手放しで喜べない。喜んでちゃ駄目だ。もっとこの人のために……

「……あの頃よりももっとこの国は豊かになった」

「おっさん？」

小さく呟かれた言葉。それに俺は顔を上げた。

「しかし何故だろうね。あの頃よりこの国の人々は心が貧しくなったように私には思えてならないんだ」

「……」

「こんなこと私が言ってはならないんだろうけどね、私は別に私の国が豊かにならなくても良いと思っているんだよ」

人の心が荒むくらいなら、多少国が遅れていても構わない。それを他国に馬鹿にされても構わない。自然豊かなその国土。温暖な気候と豊かな実り、美味い食い物、広い土地……そこに暮らす人々が笑顔で居られるのなら、それ以外に一体何が必要か。俺の王は疑問を抱いていた。

「けれど、そんな気持ちが侵略の隙を与えてしまうのなら……辛いことだなぁ。私は私の民に貧しさを教えなければならないのか。心貧しい者になれと言わなければいけないのか」

タロックは豊かな資源を食料を求めて攻めてくる。気の良いこの王は、多少の食料なら支援してやったことだろう。それで戦争が侵略が無くなるのならと。

だけど相手はそれを裏切る。貰うもの貰っといて、まだ貰い足りない。カーネフェルという土地が諦めきれない。恩を仇で返すようなこの世界。良い奴ばかりが損をする。

それに今日のカーネフェルの腐敗はタロックだけの侵略でもない。攻めてくるタロックとやり合うためには此方もそれ相応の軍事力が必要で、そのためにはセネトレアから武器に防具に船にといろいろな物を買わなければならなくて。

カーネフェルで作っても良いんだがのほほんと畑耕して暮らしてきたカーネフェルにそんな知識はない。技術もない。材料だけ合っても意味がない。だからそれを売って商品を買う。だけど足下見られて底値で買われる。戦えば戦うほど貧しくなるという矛盾。それでも買わなければ唯奪われるのを指をくわえてみてることしかできなくなる。シャトランジアは中立を頑なに守りそんな友好国を援助してもくれない。

「私には金勘定の才能がなくてね……戦うことしかして来なかった」

王が生まれ育った頃は戦争の真っ直中。幼少からそればかりを教えられてきた人だ。休戦がなった今は本当にお飾りの王。それでも優しい人だから、戦わずに守る方法が有ればそれに越したことはないと身を引いている。その信頼を都貴族共は裏切った。親父のしたことを絶対に肯定はしねぇけど、この人を大事に思う瞬間だけは、あの男と気持ちが重なってしまうような感覚を俺は知っている。

どうすることも出来ない。それでもどうしようもない現状に激しい憤りを感じている。俺もこの人と同じで戦うことしかできないから、だから小難しいことはランスに頼りっきり。戦う以外でこの人を支えられる才もない。傷付けることでしか何かを守れない自分の能無しっぷりが時々嫌になる。

「私はこんな繁栄は望まないが……民はそれを望んでいたのだろうか。時々わからなくなるよ。民の声が私には聞こえない。ここ十数年で彼らの声は随分と変わってしまった。今では若いカーネフェルの女の子は、人がお金にしか見えないらしい……悲しいことだね」

あの人がそんなことを言い出した時……俺達は城の前の大きな通りに差し掛かっていた。そこは通称奴隷通り。

俺の手を掴むあの人の手、震えている。見上げればあの人が泣いていた。とても、悔しそうに歯を食いしばり。そんな辛そうな王の横顔に、つられて浮かんだ涙を俺は必死に飲み込んだ。

「新商品入ったよ！よ、奥さんお目が高い！こいつはなかなかの上物ですぜ？」

「囲って良し！養子にするも良し！正午からオークションがはじまるよ！掘り出し物盛りだくさんの奴隷オークション開催だ！」

「混血奴隷は勿論、今回はレアなカーネフェリーの少年奴隷も仕入れてきたよ！おまけに更に価値ある青目と来た！これは買いだぜご主人様方！」

「こっちはタイムセールだ！タローク男、カーネフェリー女1ダース1万シェルのところ、今回は2ダース！タイムセール開催中！肉体労働、工場奴隷何にでも！休息給料食事も要らねぇ！使い捨てにもってこい！さぁ！買った買った！」

略奪で？戦争で？それとも密貿易で？入手経路はわからない。それでも目の前で連れられているのは確かにこの人の民で、守れなきゃいけない相手で……出来ることならこの場で剣を振り上げて、何もかも殺し尽くして救いたいのに。法が世界が許さない。そんなことをすれば、カーネフェルが攻められる理由になる。もっと多くの民が泣く。

明らかに悪いのは彼らをこんな場所に連れてきた奴ら。それなのに、ここはセネトレア。常識が通じない。彼らを救うには金！金が必要だ！

「いいか、おっさん。これは氷山の一角だ。あんたが金を出して救った金で奴らは船を動かしまたあんたの民をかっ攫いに来る。奴らの金の流れを止めない限り、これはずっと続く。それは解ってんな？」

「……」
「あんたがすべきことはここで奴らを救う事じゃねぇ。国を世界をその腐敗を変えること。そうだろう？第一あんたには立場がある。目立つ言動は控えろ。他国に舐められたら弱みを握られたらお終いだ。それ以前にあんたは今財布持って来てねーだろ、危ないからって隣町で待機してる財布係が持たせなかった」
「……ははは、あんまりにもお前の言葉が正論で……泣けてくるよ」

王とは斯くも無力な物なのか、あの人はそう言って涙した。
その様子に俺は溜息。

「おいこら、そこのおっさん」

何も変わらないとは知っている。それでもだ。俺は……どうせそこまで金に興味ねぇ。人殺しでもらった給料、そんな汚い金で救える奴がいるなら溝に捨てるよりはマシだろう。

「そこの奴隷、買ってやる」

俺の手持ちの金じゃ、残念ながらカーネフェルの野郎奴隷を買うだけの金はない。
元々多売で儲けてるんじゃなく、このダース売りの奴隷はその運送費用で儲けてる。運ぶ送料は別途にかかる。買えば買うほどまぁ、その分高く付く。それでもだ。何億、場合によっちゃ何十億って掛かる混血奴隷やカーネフェリーの野郎奴隷に比べれば、その足元にも及ばない。つまりだ結論、俺でも買える。

「そこのタイムセール、全部俺が買い占めた」
「へい！まいどありー可愛いお嬢ちゃん！いやこんなにタローク

の男買ってどうするんだい？取っ替え引っ替えで火遊びかい？若いのにお盛んだねぇ」
「阿呆か」
「ああ、そっちか！ひひひ、こんなに同族の女買ってどうするんだい今夜はお楽しみですねとは言わないでおこうかい？」
「馬鹿か。俺はそいつら全部寄越せっつったんだよ。運送費用はこれくらいあれば十分だろ」

ったく、半年分の給料がパーだぜ。俺が落とした金を見て、奴隷商は途端に畏まる。

「え、ええと可憐なお嬢さん、配送先のご住所は？」
「カーネフェル北部アロンダイト領まで」
「カーネフェルのアロンダイト！？そ、そいつはまた……どうぞ今後もご贔屓に！」

配送手続きを終えた俺に、おっさんはぽかんと開けた口をようやく閉じた。感謝の言葉でも出るのかと思ったらおっさんちょっと笑い堪えてる。失礼な。

「何故にランスの実家に」
「仕方ねぇだろ。うちの領地なんか送ってもあの馬鹿親父に悪用されんだろ。向こうで畑でも耕す手伝いさせる」
「それならヴァンの奴も違う意味で心配だな」
「だから男奴隷も買ったんだ」
「……だけど、ユーカー……」
「あんたがやるのは唯の自己満足でエゴだ。だけど俺がやるのは自分勝手だ。唯の気紛れだ」

実際唯の気紛れだ。このおっさんがあんな顔しなけりゃ俺はこの

まま通り過ぎていた。
それでもこれはこの人への尻叩きくらいにはなっただろう。こんなことがもう無いようにと、国境警備を強めることを考え何とかどうこうしようと足掻いてくれるはずだから。
ちらと仰ぎ見れば、あの人が涙を拭って少し……悲しそうに、それでも少しは嬉しそうに笑う。
俺の行動それで世界の何が変わったわけでもないし、この人を取り巻く現状が変わったわけでもないのに……救えていない相手も多いのに。でもまぁ、この人が泣きやんでくれるなら給料半年分放り投げる意味があったとそう思う。

「んなことより、さっさと城行くぞ」

俺はおっさんの手を引いて城へと急ぐ。あんまり長居して目立つのも困る。
城門から城までは今日は一般開放されているのか結構人で賑わっていたが、城の警備は厳重で手紙を見せてようやく中へと招かれる。
そのきらびやかな宮廷。カーネフェルの城より無駄に豪華。大理石の回廊。進んだ先に待っていたのは……

＊

「おーい、少年以上青年未満の女装騎士君」
「はっ……」

俺はレクスにぺちぺちと頬を叩かれ我に返った。
セネトレア女王のことを思い出そうと思ったのに、おっさんとの思い出に耽っていた。あの人キャラ濃いんだよ。だからその所為だ。未だにあの人の言動一つ一つが俺の中に残って消えず、色あせないのは。

いっそ忘れられたら楽なのに。そうすれば誰ともあの人を比べずにいられる。アルドールに苛立つこともないのに。

「あ、ああ。セネトレア女王の話だったな」

あいつは恐ろしい女だ。だけど、あの人と一緒だったから。それを思い出すと……タロック王と対峙し、あの人に助けられたことを強く思い出す。罪悪感に胸が痛むが、あの人の優しさに触れ……温かい気持ちもあふれ出る。だから先程までの恐怖は和らいだ。

それでも二度と会いたい相手ではない。タロック王女、刹那というあの女。年は俺より上。ランスよりも少し上だろう。

婚礼開場では取り繕ったような微笑を湛えていたが、染みついた血の臭いは隠せない。普通の人間ならわからないだろうが、戦場を知る俺にはあの女から立ち上るそれと剥き出しの殺意に心底脅えさせられた。

人を殺すことを何とも思っていないような目。違う、人が人に見えない。違う、そもそも人という概念があの女の中にはない。そんな異常な世界の在り方を映した赤い瞳に打ちのめされた。

セネトレア王の正妻。それならまだ良い。恐るるに足りない。あの人もそう言った。彼女を娶ったセネトレア王だって据え膳だ。どんな極上の美女でも一度でも手を出せば精神を病み、それでも抱き続ければいつか死ぬ。それだけの猛毒を飼っているのだ。だから交わったところで世継ぎは生まれない。絶対に。

あの人が危惧したのはタロック側の思惑だ。その政略結婚に何の意味があったのか。

セネトレアとタロック間の連携を強める？それともタロックのセネトレア侵略？現にセネトレア王は先月死んだという話。破落戸に暗殺されたということだが、深層は定かではない。だってそれで得した人間はあの女。

無理難題のような婚姻条件に乗っ取り女の身でありながら、セネ

トレア王位をぶん盗った。自分との間に世継ぎが生まれる前に王が死んだ場合、王亡き後は玉座を譲れというその言葉から、彼女は王妃から女王になった。シャトランジアの神子が俺達カーネフェルに協力する用になった背景にはそれが関係しているのだろうなとは思った。世界の均衡が揺らいだ。だからこそ、神子はそうしたんだ。

「王女の実兄と異母弟だったか？王子は二人とも死んだ。セネトレア王は死んでその間に子供はいない。タロックの姫に子を産ませられる男はもう何処にも……いや、精々タロック王くらいなもんだろ？」

いくらタロックとはいえ……兄弟間の近親婚は幾らでも聞いたことがあるが親子間の近親婚は聞いたことがねぇ。第一仮に孕ませられたとしても、次代は怪しい。タロック人の女が生まれる確立は低い。低すぎる。男しか生まれないっていう可能性は十分にあり、その場合そこで毒の王家は断絶する。

「だが、まだ終わらん。実際彼が殺されたところをお前が見たわけではあるまい」

その口調。やけに自信の宿るその言葉に、俺は一瞬怖じ気づく。何かとんでもないことを教えられているような、そんな気になった。

「わかるか少年、カーネフェルは完全に少年王一人しか残されていない。しかしタロックはそうではない。須臾王がこんな前線に出てきた意味を考えろ。背水の陣のお前達側とは意味が少々違うのだ」

カーネフェルはアルドール一人。今あいつには妻がいねぇし、娶ったところで……世継ぎを生ませられるか怪しいところ。時間が足りない。そう、実質カーネフェルのはもう……アルドールしか居な

いのだ。あいつが殺されたら……カーネフェルはお終い。ランスの希望も潰えてしまう。

「狂王亡き後は新たな王が現れる。つまりカーネフェルの騎士……お前達が血眼になってタロック王を殺そうとしたところで無意味と言うことだ。……彼は良き王であり、民も須臾王ではなく彼を選ぶことだろう」

「そ、そんなの……何で言い切れるんだよ！？カーネフェルだってまだ終わりじゃない！」

「カーネフェルは滅ぶ。沈む国と運命を共にするだけ価値が、お前にはあるのか？」

断言された。その言葉が重たく俺へとのし掛かる。信じたくないのに、それが肌から俺の中へと入り込んで俺の思考を支配していくみたいで怖い。有無を言わせぬ迫力が、男の言葉にはあった。絶対の確信。それをこいつは持っている。そしてそれは俺が知らない何か、重大な……何かなのだ。

「そ……それは」

「勿論しがらみはあるだろう。お前は優しい目をしているからな」

「っ……な、何勝手なことを！勝手に決めつけるな！俺は凄い冷酷非道な」

「そう吠えるな。しかし偽悪を演じてまでお前が守りたい者とは何か、少々気になるところではある」

その言葉に俺は黙り込む。喋れるはずがない。自分の弱みを敵に知られるわけにはいかない。

（つーかこいつ……）

どうしてそんなに俺のことが解るんだ？解ったような口を利くんだ？

訝しげに見上げる俺から目を逸らし、そいつは妙なことを言う。

「俺には一人妹がいてな」

「……は？」

「かなり可愛がっていたのだが、狂王に殺されてしまった」

その言葉の節から、こいつが狂王を憎んでいることが伝わって来た。タロックにいるのは須臾王を殺すため……レクスはそう言っているようだった。

「お前はその妹に似ていてな」

懐かしむように手を伸ばされる。

「目も髪の色も違うのだが、不思議とそう思った」

頬に触れられたが、振り払えなかったのはそんなことを言われたからだ。そんな俺を笑いつつ、男は俺から手を放す。

「殺さなかったのは、そういうことかよ！い、戦に私情を持ち込むような奴に俺が負けるなんて……」

「私情無くして人間などやっていられるか。人が人たる証拠だろう？むしろ俺は機械的な人間こそ信用出来ん。うちにも何人かそう言うのがいてな、ああいう堅物とは一緒に酒も飲みたくない」

「お、俺は嫌だね。そんなわけわかんねぇ見ず知らずの相手に仕えられるか！それならお前がこっちに……」

そうだ。ここでキングを手に入れればこの戦い、心強い。ランス

への負担も減る。タロックがこの男が俺を欲しがるように、カーネフェルだって俺だって……こいつが欲しい。

「生憎俺にはもう王が居る」

だがお前はまだ王に仕えてはいないのだろうと言われ……これも否定は出来なかった。

「今のカーネフェルは烏合の衆。幼き王にこの大国が収められるとは思わん。舐められるのがオチだ。いずれ荒れるぞこの国は」

「カーネフェルが……？」

「俺が思うに決定打は我が国ではない。カーネフェルはカーネフェル人によって滅ぼされる」

「……っ」

否定できなかった。都の腐敗を見るに、その言葉は真実だ。

誰も自分のために生きていて、国を愛する心なんか無い。俺だってそう。誰のために俺はカーネフェルにいる？そのエゴは、俺の大嫌いな都貴族達と変わらない。

「だからお前はそこにいるべきではない。その力はお前を破滅に導く。いずれ利用され、使い捨てられる」

「全員が全員そんなわけ……」

「いや、断言しよう。全て者がお前を道具にしか見なくなる。お前が守ろうとしている者さえも」

そんなの、信じられない。信じたくない。だって俺は今……そんな風に見られていない。神子とランスはそういう所があるかもだけど、少なくともアルドールとかトリシュとかパルシヴァルは俺をそんな風には見ていない。

あいつらまでそんな風に俺を見るようになるなんて……にわかには信じられない話だ。

（でも……）

絶対にないって言い切れるのか？あのランスでさえそうなったのに。昔はあんな風に俺を見なかった。昔のあいつなら俺が死んだら泣いてくれたんだろうが、今のあいつにそんなことは多分あり得ない。

万物は流転する。変わらないものはない。俺だって多少は変わっているはず。それでも掲げた大前提が変わらないから……取り残されていく。

「だが我が王はそのようなことはしない。カード全てを殺す気もない。あの方はカードを消費せずに願いを叶えるおつもりだ」

「……う、嘘だ」

「嘘ではない。あの方を見ればきっとお前も理解する。王の器、使えるべき主というのを見せてやる。俺と共に来い、お前は死なせるには惜しい男だ」

死なせるには惜しい？そんなこと、言われたのは初めてだ。幾ら身内に似ているからって買いかぶりじゃないのか？

「お前に本当の王というのを見せてやる。……そのためにも早くこの国を平定しなければな。それまでお前は捕虜だ。身の振り方をゆっくり考えてみると良い」

「俺は……」

耳元で囁かれた、言葉に俺は絶句した。その一言は俺の思考を吹き飛ばし、停止させるには十分過ぎた。

「お前は道化師の種だ。お前が開花するまで俺がお前を守ってやろう」

その時お前がどこの国を選ぶのかわからんが、その時はその時。そうなれば俺を殺せるかもしれんぞと、男は不敵に笑っていた。

15：Scio me nihil scire.（後書き）

タロック王とそのお気に入りと、前カーネフェル王とそのお気に入りの話。どっちのおっさんもテンション低いんだか高いんだかよくわからない。

他の部下相手だと違うテンションなんだろうけど、お気に入りの前でははっちゃけてますね。片や死んだ（殺した）子供、片や（奥さんと部下の浮気に身を引き）授からなかった子供。どっちも自分の子供重ねてるんだろうけど。

１６：Ｑｕｏ　ｖａｄｉｓ，　Ｄｏｍｉｎｅ？

遠くで誰かが呼んでいる。
ぼんやりと霞掛かった意識の中、僕を呼ぶ声がある。
だけど咽につっかえた小骨のように、感じる違和感。それは何故だろう？
ああそうだ。それは名前だ。
彼女が僕を呼ぶそれは、僕の名前ではないのだ。

そこまで思い、俺は目を見開いた。辺りを見回す。ここを俺は知っている。
一面の白景色。カラカラと回る音。
起き上がった俺のすぐ傍で、糸を紡ぐ美しい女性。その姿に思い出す。これは夢だ。以前も見た、夢に似ている。
以前はこれが夢だと気付けなかったから、彼女の顔まではよくは覚えていなかった。記憶力しか取り柄がない俺が、意識すらしなかった。後から思い出せたのは、彼女の赤い唇だけ。後は服も髪も目の色も俺は思い出せなかった。
それでももう一度見てそれがその人だとは解った。外見ではなく、それは雰囲気的なものだろう。だって彼女は以前より……若返っている気がするのだ。以前の彼女は２０代半ばくらいだった用に思う。それが前半くらいの印象。女性というか少し少女らしさが感じられるのだ。他に変わったことはと言えば、彼女傍には紡がれ終わった生糸の束。それが幾つも積み重なっている。それは以前より数が多くなっていた。

“……貴方は不思議な子。生きたままここを何度も訪れる人間を私は他に知らない”

そんな言葉一つにも感じることがある。以前俺に、優しい声で残酷なことを言った彼女。優しい声色、それは一見好意的に思える。だけど何故だろう、その残虐性が少し増したような気がするのは。

“貴方は零の人間でしょう？”

零？零の数術使いという意味だろうか？それなら確かにそうだけど。

“それでも貴方からは懐かしい壱を感じる……貴方は一体何なのかしら？”

彼女は少し考え込む素振りを見せて、まぁいいやと言うのだろうか？どうでも良くなったように小さく笑った。

“あれから少しは色を、意味を……名前の手がかりを貴方は見出しましたか？”

まだ実体は掴めない。だけど輪郭には触れている気がする。

俺は頷く。だけど何故か彼女は俺を鼻で笑うのだ。

“貴方は青。まだ貴方は青。貴方は何も知らない”

“どういうことですか？”

“人の子よ。貴方は人を愛したことがありますか？”

彼女が指差すは、穴の空いた繭。

“わぁ！”

繭から生まれることが出来たのか。数匹の蚕……その成虫がそこ

にはいた。

“可愛いなぁ……”

初めて見るその虫に、俺は好奇心を擽られた。本で見たことはあっても実物を見たのは初めてだ。

人に近寄る性質があるとは聞いたことがある。人なつっこいその虫に、俺は浮かれて観察をする。そんな俺を彼女は観察しているようだった。

しばらくすると俺の指を上っていた虫たちは、何かに呼ばれるように俺の指から離れていく。

“あれ？”

“何も彼らは貴方と遊ぶために生まれてきたのではありませんよ”

驚く俺に彼女は小さく溜息を吐いたよう。

“彼らは愛し愛されるために生まれたのです”

彼女が再び示す先、気恥ずかしくて目を背けた。だけど彼女は見ろと言う。それは意味あること。それは美しいこと。彼らの生まれて死ぬ意味なのだと。

だからといって虫の交尾の様子をまじまじと観察なんて出来ない。何だか邪魔しているみたいで気まずいから。そっとしておきたいという俺に、彼女は目を逸らすなと言う。

“少年よ、貴方も同じです”

“え？”

“少年王よ、お前も同じです”

突然の言葉に戸惑うと、彼女は言葉を改めた。

“彼らの一生はあまりに短い。生まれて恋をするまでの時間のなんと短いことか。……或いはそれは恋などとは呼ばないのかもしれません”

それは恋ではなく愛というものに違いないと彼女は言う。

“お前も同じです。お前の一生も長くはありません。お前は失った恋を新たな恋で癒す時間すら与えられない。それでもお前は愛さなければなりません。それが人であり、王の役目なのです”

“……俺は”

そうかもしれない。俺には時間がないのかも知れない。それは決して間違ってはいないけど……

“俺はそんな中途半端な気持ちで誰かをそういう好きになったりしたくない。それに……いきなりそんなこと、考えられないよ”

“考えられないのではなく、お前は考えたくない。考えようとしていないだけではないのですか？そこの虫も同じです。羽の意味も忘れてしまった。空の色も覚えていない”

それでもお前は男か、この欠陥品めと詰られているような気がした。

“だってそんなのおかしいよ！そんな風に誰かを手に入れたって必ず誰かが不幸になる！”

本能だとか欲望のまま、他人に言われるがままにとか。そんなの変だ。

イグニスやギメルはそういう欲に冒された人間の所為で生まれた。イグニスはそんな自分の出生を呪っていた。ユーカーは家の道具になることを嫌った。それで家を飛び出し、アスタロットさんを失った。

愛の始まりは恋であるべきだ。それも正しい手筈を踏んでの恋だ。でなければきっと誰も幸せになんかなれない。

“俺は王だ！カーネフェルの王だ！俺の仕事は人を不幸にする事じゃない！その反対になりたいって俺は思ってる！”

“子も残さず死ぬ王が王と名乗るか、滑稽な”

“それでもそんなのおかしいよ”

嗤う彼女に、静かに俺は目を伏せる。

“俺は何も出来なくて、俺は誇るものなんか何ももってなくて……大人の言うことだって解らない”

金と地位に固執する都の貴族の言い分や……ユーカーを深く傷付けたセレスタイン卿の考えや、ランスの心を抉るアロンダイト卿の行動も。今の俺にはとてもじゃないけど納得できないことばかり。

そういう人達が大人だというのなら、俺はまだまだ子供。そして……そんなものが大人だというのなら、俺は大人になんかなりたくないと思う。そんな男が親に何てなれるものか。俺はどういうものが親というものなのか、正しく理解もしていないのに。

“あのさ、貴女は間違っているよ。人は恋をするためにでも愛し愛するために生まれて来たんじゃない”

俺の言葉に美しい人は笑みを消した。じっと俺を観察する目がギロリと光る。

“人は幸せになるために生まれるんだ。恋も愛もそのためのものであって、それ自体が目的じゃない。そんなことをしなくても幸せを感じられる人はいる。幸せの手に入れ方を無理矢理統一化してそれが唯一のことだなんて……そうやって誰かを見下すなんて、貴女は最低だと思う。そして人を正しく理解していない。知ったような顔で貴女は物を言うけれど、貴女は何も解っていない”

空の色も運命の色もわからない。自分の意味も名前もわからない俺でもそれはわかるよ。そう告げれば始めて彼女は怒りのようなものをその美しい顔に浮かべた。

“いつか俺が親になるのなら、俺はその子に軽蔑されないような自分になれた時が良い。誰に何を言われても……その子を絶対に幸せに出来るって自信と覚悟が持てるまで、そういうことはしちゃいけないんだよ。じゃないと誰も幸せになんてなれないんだ”

俺の言葉を拒絶するよう、辺り一帯強い風が吹く。白い景色は雪だったのか。それが吹き飛ばされて、掘り起こされて見えてきたものがある。

雪の下から現れたのは、凍り付いた無数の墓。数え切れない。数えることを放棄したくなるような、限りなく無限に等しい数。その墓を背に、女性が泣き叫ぶ。

“お前に何が解るというの！？誰かを愛したことも！親になったことも！腹を痛めたこともない……人の子が！”

“それなら、お姉さん。貴女は覚えているの？子供の頃に見た空の色。始めて誰かを想った心の温かさ。他には何も要らないと……心の底から思えるくらい、狭くて愚かな世界のことを！”

あの日の俺は本当に狭い世界に生きていた。それは間違っていたのかも知れない。それでも俺はその間違いを否定しない。その間違いだって今でもまだ、愛おしくて堪らない思い出なのだ。

大人になることがそんな世界を捨てることならば、俺はそれこそ間違っていると思う。何かを拾って何かを捨てるような生き方はおかしい。重くて重くて歩けなくなるまで背負い続けるのが人の道なんじゃないのか？忘れていい事なんて、きっと何一つ無い。辛いことも苦しいことも、全部引っくるめて今の自分が作られる。自分の中の記憶は……どれだって否定してはならないものなのだ。

俺の服の下の無数の傷も、必要なことだったんだ。いつかそう言える日が来ると俺は信じる。養母さんは大嫌いだ。それでも、王になれば敵に捕まれば……いつか拷問される日だって来るかもしれない。その時大事なことを話してしまわないように、痛みに強くなった俺はそれに耐えられる。そう思えば無駄な事なんてない。

“貴女は人を無意味と言った。死ぬまでに積み重ねたことでようやく意味になると言った。だけど違う！人はそんなピリオドなんかなくたって、もう意味になっている！”

“っ……”

亡くしてしまった人。傍にいてくれる人。みんなが俺を呼んでくれた名前。俺はその名前が大好きだ。他の答えなんか要らない。俺はもう、答えを知っている。

“あの日の答えをくれてやるっ！俺の名前はアルドール！それが俺の真実だ！”

俺の叫びに、何故だろう。最後に……何も見えない吹雪の中、あの女性が笑った。赤い唇を釣り上げて。それがどうしてかわかるのだ。彼女はその笑みに、きっとこんな言葉を残した。

“それならばやってご覧なさい。お前が王だというのなら、すべての生きとし生けるもの……その全てに幸福を。神さえ成せぬ奇跡を起こしてみるが良い！”

＊

「起きて下さいアルドール様」

「なんだよルクリース……俺の部屋勝手に開けるなって……」

おかしいな。扉を鍵開けされないように衣装棚を移動させて……そんなことを思って我に返った。

目を開けるとそこは屋敷じゃない。そもそももう屋敷はない。ルクリースだって……もう死んだ。それじゃあ誰？俺を呼んで揺すって起こそうとしているのは。

それは青。それは蒼色。ルクリースのそれより明るい色だ。

「お、おおおおおおおおおお姉さんんんん！？ど、どうしてここに！？」

「わけあってご一緒させていただきました。本日はブランシュ領へと出向くのでしたよね？無礼とは思いましたが、これ以上出立が遅れるのは如何かと思い起こさせていただきました」

そんなしれっと返されても。それにお姉さん、今朝は髪を下ろしている。教会で会った時のまま、長い金髪だ。おまけに服装も昨日と変わっている。いつ着替えたんだろう。普通に女物の服だ。

「失礼します」

「え」

寝台から身体を起こしたところで急にお姉さんが膝をついて近づくから、俺はさっと目を逸らした。額に触れる彼女の手に、なんとなく緊張した。

「熱はありませんね……なんともないようで安心しました」

「あ、ありがとうございます」

ふぅと息を吐いて彼女は笑う。真面目なその態度と危機迫る雰囲気から、あまり想像できなかったのだが……間近で見ると思ったより優しい笑顔だ。ちょっと脅えていた自分がこの人に対して申し訳ないことをしていたんだなって実感し……ここまで来て俺はようやく昨日のことを思い出す。

（そうだ、俺……倒れて……）

ここまでこの人が運んでくれたんだろうか？想像して自分の情けなさにちょっと泣きそうになる。

「それでは食事の方を運んできますので」

「え？俺普通に大丈夫です！」

急いで寝台から飛び下りて、さくっと身だしなみを整える。わざわざ運んで貰うまでもない。ちゃんと食堂まで歩いていける。それを伝えたのだが、彼女には怪訝な顔をされた。

「本当に、大丈夫ですか？」

俺は何処まで貧弱だと思われているのだろう。大丈夫ですと返し微笑むと、彼女もそれ以上の追求はしてこなかった。

だがそれも、食事が始まるまでの短い間だけだった。

「アルドール様、無礼を承知で言わせていただきますが、貴方はその年頃の男性としては軽すぎます。もっとしっかり食べてください。王あっての国です。いざという時に倒れられては困ります」
「お姉さん……無理、俺もう食えない……」

俺の空いた皿を見るやすぐにお代わりを装ってくれる甲斐甲斐しさ。その厚意が重い。胃に重い。やっぱり俺この人苦手かも。

「ははは、甲斐甲斐しいねぇお嬢さん。どれ、おじさんにも装ってくれないか？」
「はい、何をお取りいたしましょう？」
「う～むそうだな、それでは麗しのお嬢さんと生クリームともぎたてフルーツの女体盛りで」

俺はグラスのジュースを吹き出した。朝からこの人は何を言っているんだ。
咽せて咳き込む俺に、聖十字のお姉さんが背中をさすってくれた。もう片手では、布巾手早くシミにならないようにと俺の口元と衣服を拭ってくれる。

「大丈夫ですか？」
「あ、……ありがとうございます」
「なんという華麗なスルー。これは今までにいなかったタイプだな」

俺達の向こうでヴァンウィックが何やらしきりに頷いている。

「なんで僕の耳塞ぐんですかトリシュさーん！」
「いや、あの……イズーのためです」

横目で騎士達を見ると、自分がいない内に純真な少年が悪い大人から悪影響を受けてはユーカーに怒られると、トリシュはパルシヴァルの保護をしていた。

「……そう言えばトリシュ、俺は北部のことは全然解らないんだけど……この辺りの地理にはやっぱりくわしいのか？」

「ええ、まぁそれなりには……私も近年は領地には帰省していませんでしたし勝手が変わってしまったところはあるでしょうが」

「ああ、そうだよな。都での仕事が中心なんだもんな王宮騎士は」

ついついユーカーのことが頭にあって、みんなあっちこっちに派遣されているものだと思ってしまったが、それは本来の仕事ではないはず。王宮騎士は都の治安維持……突き詰めれば城の警備が専門のはず。常備軍的側面もあるからユーカーの仕事も間違いではないのだろうけど。しかし王宮という割りに城に住めない現状は本当おかしなものがある。いや……今はその城さえ奪われてしまったのだけど。

「それについてはセレス君がイレギュラーと言うべきだな。彼は南部では肩身の狭い思いをしているし、渡り歩く任務を好んでいたから」

俺の考えの粗方を理解したのかヴァンウィックがユーカーの事を口にした。

「そ、そうなんですか。それじゃあトリシュやパルシヴァルは都でどういう仕事を？」

「僕はお使い専門です！お城の人のお買い物や頼まれ事をして届けるのとお城のお掃除と……そんな感じです！お仕事している内に

仕立て屋さんのポイントカードが凄いことなりました！」
「私は竪琴を。よく都貴族の方々に引っ張られて行き仕事どころではありませんでした……というより他にろくな仕事回ってきませんでしたし」
「夏と冬には王都一斉ゴミ拾い清掃奉仕活動とかありましたね、セレスさんさぼってましたけど」
「いえ、しかし四度に一度の割合でランスに捕まっていましたが……というかパルシヴァル。君も去年の冬は見かけませんでしたよ？」
「セレスさんに、“いいかパー坊、ランスの阿呆なら例え遊びでも何でも全力で挑めとか阿呆な事抜かすかもしれねぇが、余裕無く常に全力で行くのは騎士としてみっともないし情けない。適度に力を抜いて息を抜け。そんなわけで今回は休みだ！ひゃっはー”って言われてカルディアまで遠乗りに連れて行って貰いました」
「イズー……貴方という人は」
「ユーカー……」

それ単に面倒だったからじゃ……。それで万が一ランスに捕まっても自分1人に説教が向かないように共犯者仕立て上げるなんて、なんて汚い。乾いた笑いを漏らす俺の向こうでトリシュと言えば……

「なんて素敵なんだ！！」

感激していた。もうユーカーなら何でも良いのか。駄目だこの人。やっぱりもう取り返しの付かないところまで来ている。痘痕も靨的な溺愛領域入ってる。

「噂には聞いていましたが……都はそこまで腐敗していたのですね」

聖十字のお姉さんが、少し悲しそうに俯いた。トリシュがこうなったのはその反動に違いないとか好意的な解釈してそうなのがちょっとあれだけど。その辺の誤解は解いた方が良いのかそっとしておいて見なかったことにするべきなのかちょっと瞬時に判断は下させない。

（でも……騎士や騎士見習いが使用人や小間使い、楽師みたいな仕事させられるなんてなぁ……）

それも王の命令じゃなくて、都の貴族に顎で使われるという有様。言われてみれば確かに酷い……。あまりにも酷い。それ騎士の仕事じゃない。絶対騎士の仕事じゃない。

ユーカーから話には聞いていた。騎士なんてろくでもねーと。肩書きだけの名誉職。働けば働くほど王の名声が地に落ちる。自分を人殺しの道具みたいに言うユーカーの仕事がマシに思えてくるからどうしよう。

「ふむ、ローザクア近辺は都貴族がのさばっているからねぇ」

ヴァンウィックも肩をすくめている。

「あの、アロンダイト卿？湖の城が手放された理由というのはどういったものだったんですか？」

「ああ。あの城は元々チェスター卿の物だとは話しましたねアルドール様」

「はい」

「要はですね、あの城は北部の守りのために作られた要塞ですよ。長年この土地を守った要なのですが、老朽化を理由に風情のない都貴族共は経費削減としてあの城を捨てさせた。ついでのどさくさで跡継ぎのいなかった彼の領地まで没収。それで若くして色々あった

トリシュ君の叔父であり後見人と言うこともあり、ブランシュ領を任せられた……だったかな？」
「いいえ師匠。正確には元々父が消え私の母が死んだ時から、シール叔父さんはうちの領地の管理をしてくれていたんです。本当に物心着いた時分でしたし幼い私には何が何やら……」
「へぇ……そうだったのか」

二人の話を聞く限りではチェスター卿はいい人っぽい。これなら割ととんとん拍子で今回の話はうまくいくかもしれない。

「それでトリシュが騎士になった後も、そのまま領主としての仕事をしてくれているってことなのか」
「はい、概ねそれで正しいですよ。ですが……」

俺の言葉にトリシュは頷くが……

「叔父さんは長年治めた土地をそのままにはしておけず、時折以前の領地に出かけて……領民を気に掛けたりあの湖城の手入れなどをしていたようです」
「領地を奪われたのに……？どんなことして大丈夫だったんですか？」
「仕方有りません。カーネフェルはあの土地に何もしてはくれなかった。それで何とかする権利すら奪ったんです。ブランシュ領だって叔父さんがいなければ……とっくに国に奪われていた土地です」
「え……？」
「私が南部へ降り、騎士になったのは……王にそのことを嘆願する意味もあったんです。……もっともアルト様にはそんな権限がもう残っていなかった。悲しいことです」

もしかして。トリシュが都貴族と穏和な関係にあったのは……も

といいいように使われていたのは……自分と身内の故郷のため？それなら……ユーカーとのことがなければ……トリシュは俺に付いてくれなかったかもしれないんだ。ごくりと唾を飲み込んだ俺に、ヴァンウィックがそう落ち込むでないよと生暖かい視線を送ってくる。

「土地を奪ったとはいえ、都貴族共は我々地方貴族の権力を殺ぎたいだけだからね。その後の目的なんてあってないようなものさ。跡継ぎが居ないと言うだけで見せしめに嫌がらせを受けたようなものか。それもトリシュ君を養子に引き取るか引き取らないかのタイミングでの決行だ。どうして治世の才が無い者は、人を出し抜き蹴落とし権力にしがみつく術に特化しているのだか」

これだから無能をのさばらせているのは問題なんだと言わんばかりの中年騎士。この場合の無能は前王ではなく都貴族のことだろう。

「しかしだな我が弟子よ。君もうちの馬鹿息子のように、領地には帰りたくないのではないのかい？無論帰って貰わないとカーネフェルとしては大変なのだが」

「……別に私は叔父さんを嫌ってはいませんよ」

「トリシュ？」

「……彼方がどうかはまた別の話です。それに」

一度目を伏せたトリシュだが、一呼吸置き目を開く。そして自分に強く言い聞かせるよう呟いた。

「それでこの国を怨むのは筋違いです。このカーネフェルという国の危機にそのようなことは言ってはいられない。それは彼も同じ気持ちのはず」

力強く言い放つトリシュの言葉。それに俺の横の聖十字のお姉さ

んが肩をぶるぶる震わせる。

「お、お姉さん？」

「ブランシュ卿！私は貴方を誤解していました！貴方は素晴らしい騎士様です！」

お姉さんは勢いよく席から立ち上がり、トリシュに握手を求める。迸る感涙。その溢れる涙を拭おうともしない豪快な男泣きだ。男装が似合っているだけあって、性格までなかなか男前だなこのお姉さん。普通の格好していると普通のお姉さんに見えるのに……どうしてなかなか普通のお姉さんじゃないらしい。

「あの……私のことはトリシュで構いません」

「トリシュ様っ！貴方は素晴らしい人です！このご時世にちゃんと愛国の心を持った騎士様がいるなんて」

「あ、ははは。ありがとうございます聖十字のお嬢さん」

トリシュがさっと目を逸らした。ここまで純粋に褒められると辛いよね。トリシュこの間まで「国などどうなっても構わん！私のイズー！！イズーがいればそれで良し！」みたいな恋愛至上主義突っ走ってたよね。やっと運命の人に出会えたと思ったんだから多少の暴走や心ない言葉は仕方ないとして、その記憶が新しく本人にしっかり残っているため罪悪感はとんでもなく大きいだろう。このお姉さんを直視なんて出来ないくらいには。

「そんな余所余所しい！共にこのカーネフェルを憂うる者同士……私は、アーク。ジャンヌ＝アーク。私のことはどうかジャンヌとお呼び下さい！組する場所が違えども、私は我々は貴方の同士です！」

キラキラ輝くお姉さんの綺麗な目。こと国に関しての愛情は、パルシヴァル並の純粋さを持ち合わせているみたいだ。

「ジャンヌ……さん？」

言われてみればまだお姉さんの名前も聞いていなかった。それとも俺は故意にそれを避けていた？名前を呼ぶこと。それは愛着を持つ。持とうとする行為。始まりの一歩。それを恐れた。知れば失うことを恐れる。俺としては……カードの名前を、特に……女の人の名前を聞きたくなかったのだ。だから俺は、その名を知った時に喜びは感じなかった。むしろ……夏だというのに一瞬血の気が引いた気さえした。それと同時に、俺の知る……無くしたカードの誰ともその名が重ならないこと。それに安堵し絶望していた。

「はい、申し遅れました。色々あって挨拶が遅れてしまい申し訳ありませんアルドール様」

俺の言葉に振り返り、にこと微笑むお姉さん。

「ああ、男装の仕事の時は男性名らしくジャンと名乗っています」

「ジャンヌ様、それは些か偽名としては単純すぎるのでは？ヌージャンとかンヌージャとかどうですか？」

トリシュ自身は神妙な顔つき。至って真面目な言葉だったのだろうが、その言葉はその場の人間達の時を止めるだけの衝撃があった。ジャンヌさんも目が点だ。

「……トリシュさん、問答無用偽名必須仮面舞踏会の時に偽名が分かり易過ぎてもろばれだったってセレスさんが笑っていましたよ」

「ああ、その噂なら北部まで届いていたな。タントリーシュだっ

たかな？」

カーネフェル……そんな祭りまでやっていたのか。というかトリシュ……ネーミングセンスが酷い。もし仮にセレスちゃんが本当に女の子で運良くその心をこの人が射止めて外堀も埋めて結婚とか出来ても……このネーミングなら家出されるかもしれないな。

＊

「へっくし！」

やっぱ海風は冷える。かといって窓を閉めていると蒸し暑い。昨夜は暑いと駄々を捏ねてレクスの野郎に窓を開けさせたまでは良かった。ユーカーは昨晩のことを思い出して頷いた。

（タロックの服って慣れねぇと動き辛ぇ……）

窓からの脱走を試みるが立ち上がってすぐ帯を踏んで転ぶ。裾を踏んで転ぶ。俺はそんなドジっ子属性なんか身につけた覚えはねぇぞ！恐るべしコートカードキング。こいつが傍にいるだけで、俺は逃亡すらままならないというのか。

しかし見当違いも良いところ。そんなに外の空気が吸いたいのならばと甲板まで連れてきてくれたこいつは確かに優しいさ。そう言うところは我が儘な捕虜の言いなりなんだから。

「冷えたか？ならば中へ戻るか」

何処へ向かって進んでいるのか解らない。そんな船に俺はいる。嗚呼、空は海はあんなに青いのに、どうして俺はこんな所にいるのだろう。情けなくて泣けてくる。

思えば最初からおかしい。あの時見た船は一艘だったはずそれがなんだ。俺が連れて行かれた場所はあれではなくて、そこから離れた場所にある別の船だった。数術の力で隠されていたとしか思えない。神子がスルーするってのは、わざとなのかその存在に気付けなかったのか。正直俺には解らない。今神子は弱っているし後者の可能性も十分あり得る……が、普段が普段なので前者のようにしか思えない。これは俺は悪くないよな。

寒がる俺を案じたのかレクスに甲板から降りようと促されるが、その間もジャラジャラと耳障りな音が聞こえてくる。

「つーか何なんだよこれぇ……」

「セネトレアから仕入れた拘束具だな。なんでも数式が刻まれているとかで数術でも使わない限り取れないらしい。どうせろくでもないか虚偽の商品説明だろうと思っていたが、試しにお前に付けてみたら……どうやら本物だったようだということで、俺も使ってみることにした」

そいつは鍵穴のない手錠。付けられた時点でお終い。俺には数術の才能がない。コートカードの俺には幸運はあっても元素の加護がない。それを見越してのこれだ。

嫌別に俺だって何処かの柱と俺とか、か自分の両腕に拘束とかならここまで騒がない。問題は俺の手と鎖が繋ぐ、それの向こうの相手に文句があるだけだ。

これを付けてる間はタロックの服じゃ着替えが出来ないと瞬時に悟ったらしいこの変態騎士は、寝ている俺を昨晩の俺のカーネフェル風の女装服に着せ替えしてたというのだから驚きだ。そこまでして俺で遊びたいかこんちくしょう。お前も侵略者なら真面目に侵略をしろってんだよ！

「こんな誰得俺損生活俺は嫌だ！こういうのは普通あれだろ！？

思わず守ってやりたくなるような華奢な婦人とか！むちむちのお色気漂うセクシー婦人とかだろ！もう少し騎士心擽るようなチョイスは無かったのかよ！」

「残念ながらタロックでは女が不足していてな。そんな美味しい展開はない。だがそう問題もないだろう。現に俺得ではある。流石はキングの幸福は素晴らしいな。毎日２４時間がウハウハだ」

「お前が得でも俺は不幸だっつってんだろうが！」

ていうかどうなのこれ。俺は俺のことを神子とランスが監視してるもんだと思ってて、それで何かあったら助けてくれると思ってたんだけど……そんなことは全然全く無かったぜ！……自分で言って悲しい。

（そりゃあ……相手はキングだし？あいつら逃げてくれた方が良いっちゃいいけどよ……）

それならそれでちゃんと逃げましたよ的な合図が欲しい。俺はどう動けば良いんだよ。それにあんなこと言われて……何を信じればいいのかもわからなくなりつつある。こんな時くらい、びしっと傍にいてくれよ。

（俺がジョーカーになるかもって知ったら……あいつ喜ぶのかな？）

俺が味方すれば絶対に負けはない。勝ち残れる。最後に俺が死ねば問題ない。

でも……俺がお前より強いカードになったことに苛立っているお前のことだ。ますます俺を嫌いになるかもしれない。そもそも俺がジョーカーになったって、あいつが自分の勝利を望むかも怪しい。その力でアルドール様とカーネフェルを頼むぞ！とか良い笑顔で討ち死にしたりしそう。そんな展開嫌すぎる。

元々俺は自分が勝ち残れないもんだと思っていたから、諦められたんだ。お前を殺してまで……俺にはアスタロットは望めない。だけどここで道化師だ。それを聞いたら少しは揺らぐ。こうしてじっとしていて……レクスに守られて。そうしているだけで俺はジョーカーになれる。俺に殺せないカードはない。一つだけならどんな願いだって叶う。

だけどもしもだぜ？俺の知らないところでランスもパルシヴァルもトリシュも殺されて。アルドールの阿呆も死んで。そこで漁夫の利よっしゃあ！！！と喜べる強さが俺にあるのだろうか？過去の何も引き摺らないと言えるのか？

そもそもだ。願いの力で1人を生き返らせたって、どうせ死ぬ。人なんかすぐ死ぬ。大したこと無い理由で殺される。頑張ったって百年足らずの命だ。

それならそこに五十数人の命を費やす意味ってあるのか？そいつら全員の百年を奪ってまで誰かを生き返らせる意味はあるのか？その日の内に、その次の日に……その幸せが崩れないって保証もないんだ。

生き返らせた相手と一緒に寿命が来るまで仲良く幸せに暮らす……なんて願いはあり得ない。願いは一つだけだ。文章長くなっても区切らなきゃ一つってのは無理な話。端的に一つ。願いは一つだけなのだ。

俺は臆病だから、ちゃんと絶対だよって保証されないと何も出来ない。あんなに大切にしていたアスタロットとの約束も揺らいできている。

彼女は俺に生きてくださいと言ったけれど、俺はもう……俺の生には興味が持てなくなっている。変な話だ。つい先月までは、どんなことしてでも生き延びてやる。死んで堪るか。そう思ってたはずなのに。

生きる意味が死ぬ意味に変わってしまった。俺の生に希望なんて一つもありゃしない。死ねばそこで始めて意味が生まれる。誰かの

ためになれて、アスタロットとも再会できる。
　ランスの阿呆はアルドールっていう希望を手に入れたけど、俺には何もないんだよ。仕える王なんか、アルトのおっさん以外いやしねぇ！アルドールなんか……あんな奴、王でも何でもねぇよ。あいつは唯のガキだ。戦争も玉座も似合わねぇ……唯の普通のガキなのに。そんな普通のガキのために、ジョーカーになってもまだ、あいつのために働けってお前は言うのか？

「……」

　俺がジョーカーになったら。勝ち残りたい奴が俺の力を欲しがるようになる。今だって、まだジャックの俺をその確保のために欲しがる奴がいる。俺は家の道具が嫌で逃げて来たのに、また道具になっている。逃げても逃げても俺は何処へ行っても人間にはなれない。

（ランス……）

　道具でも、お前の力が必要だって。そう言って貰えたなら、まだ踏ん切りが付く。だけどあいつのことだから、そんな風には言わないんだろうな。もう俺が人には見えていないのに、まだ幻影を夢見てる。俺の顔が人間に見えていると自分を騙すように笑ったりして。
　だって俺は知ってるんだぜ。お前が俺のカードを知った時……どうしてお前がって顔したの。格下の俺が強いカードってのが気にくわなかったんだよな？そこで俺がもっと強いカードになんかなったりしたら……ますますお前の気分を害するだろう。
　嫌だな。ランスのこと。アルドールのこと。思い出すだけで気が沈む。暗い気分を振り払おうとして……思い出すのは何故だろう。その相手はトリシュとパルシヴァルだ。あいつらと一緒に行動する日が来るとはなぁ。感慨深いものがあるぜ。
　だけどあいつらもカードで。危険が迫る対象で。いつ死ぬかも解

らない。あいつら俺と違っていつも明るくて、そんなシリアスなんか似合わねぇだろ。そう思ってるような相手だって死ぬ。あのメイド女みたいにさくっと格好付けて死ぬかもしれねぇ。油断も隙も無い。この世界はそれだけ悪意に満ちている。

ああ、どうしてだろう。どうしていつも俺ばかり、不安に苛まされている？俺が弱いからなのか？ジョーカーになれば強くなれる……わけがねぇ。ジャックでこの様なのに。これでジョーカーなんかなったらもっと手に負えなくなるだけじゃねぇかよ。

「なぁ……あんた、強いよな」

「否定はしない」

部屋に戻って暫く考え込んでいた俺が、突然投げかけた言葉。それにも騎士はすぐに相手をしてくれる。お前本当にこんなことしてる暇有るなら仕事しろよと言いたいが、戦うことが仕事なら、移動中の今は暇なのかもしれないな。

だけどこいつのその余裕すら、強さの欠片に見える俺はどうかしているんだろうか？

「あんたは何で強いんだ？」

「それなら少年、お前は何故俺に負けたと考える？」

カードの力、騎士としての力量、体格差。言い訳は色々ある。それでも決定的な何か。こいつにあって俺にないもの。それは確かに存在する。二度の戦いで俺はそれには触れている。気付いているが、掴めない。

「何度やっても同じ事。今のお前では俺には勝てない」

ヒントは与えたと言わんばかりのレクスの言葉。

「俺を王に引き合わせるって、言ってたよな？」
「ああ」

あっさり奴は肯定。目を逸らして背中を向けて俯いていた俺が悪いのだが、あまりにも簡単に答えが返ってくるので話を真面目に聞いていないのでは。そう思って振り返る。

すると奴は床に寝そべり何やら雑誌を片手に寛いでいる。こそと近寄りタイトルを盗み見ると、『月刊貧乳つるぺたマガジン』とかろくでもないタイトルが書いてある。当然こんなろくでもない資源の無駄遣いの発行元はセネトレアの書店だった。タロックとは違う意味で確かに一回滅べばいいと思う。割と本気で。……にしてもタロックの第一騎士がこんなのってどうなんだ。こんな姿、本気で部下が泣くと思うから止めて欲しい。

何とも言えない表情になって俺はまた奴からギリギリの所まで離れて背を向ける。それを見計らったように奴は言葉の続きを口にする。

「セレスタイン、お前には……お前の中には王が不在だ。そのような空の心では何も守れはしない」
「……王じゃねぇけど、大事な奴はいる」
「それは1人ではないだろう？」

頭から冷や水を浴びせられたような感覚。血の気が一気に引いていく。こんな変態エロ本読んでる馬鹿に、俺の心が筒抜けなんて。何だかとても恐ろしかった。

「王とは複数いてはならないものだ。王は唯一無二でなければならない。お前がそれを完全に選べない限り、お前はそれ以上強くはなれんだろうな」

「王って……なんだよ」

レクスが身体を起こし、引っ張られた俺も無理矢理それに倣った。

「王とは奪い尽くす者。お前はその1なる者に全てを奪われて尚、一変の曇りも無く彼を許し愛し肯定し、心からの忠義を持って仕えることが出来るのか？」

外はあんなに明るいのに……この部屋は暗い。レクスの黒い目が、闇の向こうから俺を見据えるようにそこにある。

「俺の妹を殺したのは狂王だ。しかし狂王を動かしたのはあの人だ。……俺は最愛の妹をあの人に奪われた。……それでも俺はあの人の騎士だ。王に仕えるって言うのはそう言うことなんだと理解しろ。セレス……お前はそこまで、このカーネフェルという国を許せるのか？」

俺を何も知らない癖に、この男は……俺がこの国を愛していないことを知っている。俺が好きなのはあくまで人であって国じゃない。俺を縛り付けるのはしがらみであって土地じゃない。この国が俺にしたことを、俺は今だって覚えている。

この国の風習が俺の人生を狂わせた。この国のシステムが俺の王を貶めた。この国の存在が俺の理想を苦しめる。

滅んでしまえ、こんな国。どうにでもなればいいんだ。そう思ったことが一度としてないなんて、俺には言えない。何度とだって思って来たし呟いた言葉だ。

許せるのか俺に。もしもランスがあいつらを。他の誰かを殺しても……それでもあいつは俺の、俺の理想で在り続けるのか？崇められるのか？

「放せ……」
「セレス……？」
「俺は……俺は道化師なんかなりたくないっ！そんなにジョーカーが欲しいならっ……他のジャックを捕まえろ！」

そうだ。このままで良い。俺はジャックで良い！これ以上何かが変わるところなんか、見たくない。嫌だ。そんなの俺に見せるな。見せないでくれ。

今のままなら、これ以上はなくとも今以下は無い。誰もこれ以上俺に失望しない。期待しない。それでいいじゃないか。それの何が駄目なんだよ。

「生憎それを決めるのは俺でもお前でもない。……俺の仕えるタロック王だ」
「っ……」
「だが、それとは別として……俺はお前が気に入った。お前のその弱さ、どう変わって行くかに興味がある」

好意的ではあっても、敵は敵。感情に訴えても逃がしてはくれない。この男、公私混同はしない。そこに微塵の迷いもない。それが強さの証なのだろうか。迷いに迷ってブレまくりの俺は、だから駄目なのか。

そんなこと言ったって。何か一つを何て。選んだつもりでも、どいつもこいつもどいつもこいつも……関わった以上は見捨てられねぇだろうが！そんないきなり切り捨てられるもんじゃねぇよ。もう何もない。これ以上何かを手に入れることもない。だから暴走できた。それがどうして……今更俺にのし掛かってくるものが、重みが増すんだよ？俺なんか最低の屑だ。みんな何処かへ行っちまえ。俺の記憶の中からもいなくなってくれよ頼むから。

そう思っても、そう願っても……呼ばれる声が甦る。忌まわしい

名前。呪文のように縛めのようにどいつもこいつも俺を呼ぶ。痛くて頭が割れてしまいそう。

＊

「ボクはエルス＝ザイン。第六師団を受け持ってる狂王様の手下だよ」

「ああ、話だけは聞いたかな。狂王のお気に入りって子な」

「はじめまして？へぇ……貴方が第一師団長様ね」

「ああ、俺はレクスって名乗らせて貰ってる。ま、程ほどによろしくな」

我が儘な王様からの伝令のため、飛ばされたのは海の上。探し当てるの一苦労。それでもそれをさも簡単に。颯爽と。こんなこと朝飯前だという顔をしておくのが妖怪というものだ。人間は恐れさせてなんぼのものだ。畏怖もまた負の信仰。僕らの力を強めるためには必要なこと。

だと言うのに何だこの男は。エルスは少し苛立った。

ここの部下達は僕の登場に驚いたり腰を抜かしたり混血である僕の可愛さに参って違う意味で腰を抜かしたりしたっていうのになんなんだよこの男は。

黒髪黒目のタロック人。真純血には見えない平民色。それが第一騎士とはねぇ。おまけに何だろう。船の中畳みに改造してゴロゴロしてる。おまけに何か手にはでかいアクセサリーがあると来た。その盲片方の手にはいかがわしい本を持っている。

幾らプライベートルームとはいえここまで酷いプライベートが未だかつてあっただろうか？一応今、戦争中なのに何これ。緊張感の欠片もない。明らかにおかしいのに狂気の香りすら見受けられない。さも日常のようにこのおかしな感じを肯定しているこの男、やはり何処かがおかしい。歪んでいる。

「にしてもこれはこれは、随分と可愛いお嬢ちゃんが来たもんだ。もっともこいつには劣るが」
「冗談が上手いんだね貴方は」

ふて腐れてそいつからギリギリ離れたところで膝を抱えている女の気配には、どうも見覚えがある。

「で？セレスタイン卿ユーカー……貴方までいつの間にそういう性癖に目覚めたの？」
「目覚めてねぇっ！カーネフェル事情解ってんだろ！？女装してた方が色々移動するのに便利なんだよ！！」

流石の僕も驚いた。これまで何度か戦った騎士が、まさかこんなところでこんな事になっていようとは。でも予想以上に似合ってたからちょっと腹立たしい。まさかこの男にそんな才能があろうとは。これで僕らの目をかいくぐっていたのか。そう思うと尚更だ。しかし当の本人は、まさか僕にまで知られるとは思っていなかったのか、半分泣いている。精神的に参っているらしい。こういう顔を見ると駄目だな……うん。なんていうかさぁ、この間の仕返しもあるし？思い切りいたぶってやりたくなる。

「うわぁ、恥ずかしい！それでもボクより年上？女装が許されるのは何歳までだったかなぁ？！御貴族様が？真純血が？女装ですか！？あはははは！！」
「ぐぅっ……くっそぉ！！人が言い返せないのを良いことにっ！」
「さぁて、どうやって辱めてあげようかなぁ？キミの恥ずかしい写真でも撮って国中にばらまく？それともそうだなぁ……そのまま、強行軍で色々飢えてる獣の軍に女装で放り投げてあげようか？仲良

しの騎士さん達宛に？それともアルドールに？リアルタイムでキミが襲われるのを実況してあげようか？良い息抜きになったりして向こうにとってもさぁ！だって色々重んじる連中多くてキミらって経験無い奴多いんでしょ？貴族様って大変なんだねぇ！あはははは！その分たまってるじゃないの？」

「エルスちゃん、あんまりこいつを苛めないでくれ。これは俺の妹二世或いは二号機だ」

「違ぇえええよっ！！」

「だが今の恥ずかしがる顔は良かった。お兄さんがポケットマネーを渡すから今度セネトレアの船から撮影装置を買って来てくれないか？噂だと人間の屑方面との交友関係広いそうじゃないか」

「そんなの欲しいの？似たようなものなら軍にありませんでした？セネトレアから横流しで来た……」

「ああ、だがしかしあれはモノクロセピアだった。高画質のフルカラーでなければ意味がない……しかしエルスお嬢ちゃん。お前もなかなか良い貧乳して……」

「お前は見境無しなのかっ！」

ようやく立ち直ったのかツッコミという仕事を思い出したらしいセレスタイン卿。第一騎士を鉄拳制裁。それでもあまり効いていないらしく、逆に近づいてしまったことで髪触られたり胸元凝視されたりとなんだかんだと被害を受けている。

（こんな男が第一騎士だなんて……あの男何考えてるんだ）

頭が痛い。だけどこの男がキングなら、利用価値はあるだろう。須臾にも思うところがあるようだし、星が降ってから行方をくらました……僕の力でも居場所の知れないあの男を引っ張り出すためのチャンスだ。

「とりあえず須臾からの言葉を伝えます。“兵と合流したなら此方へ来い。作戦に加われ”だってさ」
「やれやれ。到着早々扱き使われるわけだ。しかし良いのか？海へ出た船……あれを逃して。我々はカーネフェルに余所の船を近づけるな、そして逃がすなと命じられたのだが」
「そっちは問題有りません。ここまで船を出して貰ったんだ。ここからならボクが飛び移れます。だから交代ってことです」

そう、僕はこの距離なら跳べる。空間転移を発動し、船へと一気に跳躍。カーネフェルを出てシャトランジアへと向かった聖十字の船がある。あれを逃すなとは須臾の命。シャトランジアとカーネフェルは組ませるわけにはいかない。数式に包まれれば、すぐに見える景色が変わる。
突然現れた僕に驚いたような金髪美形騎士と、舌打ちし眉を寄せる混血神子。

「やぁ、久しぶり。そして貴方には初めまして」

エルスがぐるりと辺りを見回せば、その他にもそれなりの数の、船を操る聖十字らしき乗組員も居る。どうやら陸に逃れた奴らだけでもないようで、船に乗り込まれた時のため、隠れ潜んでいた兵士もいたのだろう。それに気付かないとはあの第一騎士、数術の才能が皆無なんだな。ならば、付け入る隙はありそうだ。その事実にエルスは気分良く、自然と顔にも笑みが浮かんだ。

「海っていいよね。良い風が吹く」
「神子様！風向きがっ！」

船を動かす風が変わったことに戸惑う乗組員達。それを見エルスはほくそ笑む。この神子も風の精霊は操れるようだけど、そこまで

好かれてはいないのだ。
僕は全属性使えるけど、一番懐かれてるのは風なんだ。見たところ彼らは土水に好かれた水使いに、水に好かれる火使い。其方の騎士は火の人間のようだけど、水の気を纏っている……だから情熱の炎という感じでもないし、風との相性はあまり良くは無さそうだ。
神子は仮にも聖教会の神子を冠するのだから、自分同様全属性は操れると見て間違いない。それでも得手不得手はあるのだろう。どんな腹黒でも性悪でも神子は神子、分類されるなら聖。残酷をも司る風とは相性が悪いのだ。

「全く……何処に逃げたかと思ったら、そんな子に入れ込んでたのかシルフィード」
「ああ、顔見知りだった？」

その少年は、僕の傍に控えた風の精霊。それを神子は睨み付けている。風の精霊シルフィード。前にカーネフェルに遊びに来た時に拾った精霊だ。何も言葉を発さないのが奇妙な奴だけれど、僕には従順だし精霊としての力も強い。神子の様子から見て、元は教会の所有する精霊だったらしい。

「このままシャトランジアに行くつもりだったんだろう？だけどそんなことはさせない」

風の精霊に大暴れをさせ、船を揺らす。浮いている僕は大丈夫だけれど、咄嗟に受け身を取れなかった小柄な神子は転がる。騎士はそれを助けて抱き起こす。それでも他の乗組員達は女ばかり。あちこちに横転し、身体を強かにぶつけて呻く。船の動きが止まる。
うん、良い感じだ。エルスはにこりと微笑んで、紡いでいた召喚数式を完成させる。

「このまま海に沈んで貰うよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6697s/

悪魔の絵本６　恋人【逆】（カーネフェル編?）

2011年11月10日08時06分発行